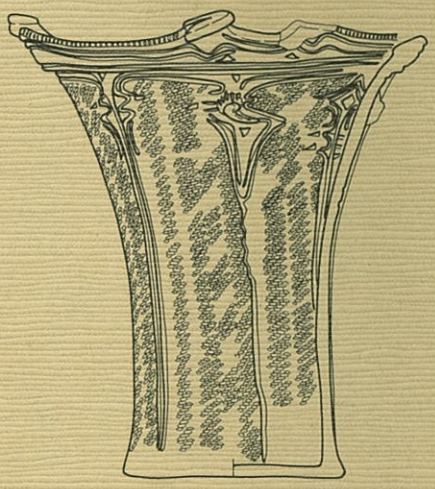
福島県文化財調査報告書第243集

東北横断自動車道遺跡調査報告11

法正尻遺跡

上巻



1991年3月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化センター
日本道路公団

遺跡調査部

東北横断自動車道遺跡調査報告11

法正尻遺跡

上巻

法正尻遺跡と磐梯山

法正尻遺跡　サ～ト　10～20グリッド遺構群

1 ・ 2…54号住居跡
3…… 1 号住居跡
4……53号住居跡

法正尻遺跡出土土器

序　　文

東北横断自動車道いわき～新潟線は，太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ，総延長210㎞に及ぶもので，そのうち152㎞は福島県の路線であります。

この道路は，いわき市西部に広がる台地，郡山盆地，猪苗代湖岸の丘陵地，会津盆地及びそれらの周辺地区をほぼ東西に横断する計画であり，その路線のなかには多くの埋蔵文化財包含地が存在しております。そこで福島県教育委員会では昭和53年と昭和57年に整備計画路線となった郡山～猪苗代間，猪苗代～会津坂下間につきまして路線予定地内の表面調査による遺跡分布調査を実施しました。その結果，両区間の横断自動車道路線内に20か所の遺跡を確認しております。

これらの遺跡のうち昭和63年度に着工されました猪苗代～会津坂下間の15遺跡につきましては，発掘調査を行い記録保存することになり，平成元年度は調査2年次として12遺跡の発掘調査を，財団法人福島県文化センターに委託して実施してまいりました。

今回報告いたします磐梯町・猪苗代町にまたがる法正尻遺跡は，縄文時代前期終末から中期終末の遺跡であり，遺構の密度，出土遺物の豊富さから猪苗代湖北岸の拠点的な大集落と考えられます。当遺跡で居住域と貯蔵穴域の区別が明らかになり，縄文時代中期を中心とする時期の集落を考える上で今後の基礎資料となることと思います。

これらの貴重な資料をまとめました本報告書が，広く県民の方々に文化財についての認識を深めるため役立てていただくとともに，研究資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

最後に，この遺跡の調査から報告書の作成にあたり，ご協力いただいた関係機関，関係者各位に対し感謝の意を表すものであります。

平成3年3月

福島県教育委員会

教育長　大　内　忠　昭

あ い さ つ

東北横断自動車道いわき新潟線は，平成7年度の全線開通を目指して，建設工事が着実に進められており，すでに平成2年10月には郡山・磐梯熱海間の供用が開始され，本県の交通網は着々と整備されつつあります。

この東北横断自動車道用地内には，数多くの遺跡が確認されております。これら，用地内に所在する埋蔵文化財については，関係機関の協議に基づいて，当センターが記録保存のための発掘調査を進めているところであります。郡山市から河沼郡会津坂下町にかけての調査は，昭和60年度に開始し，平成2年度に終了いたしました。

本報告書は，昭和63年度・平成元年度の2カ年にわたり発掘調査を実施した，耶麻郡磐梯町から猪苗代町にかけて所在する法正尻遺跡の成果をまとめたものであります。法正尻遺跡は，縄文時代前期終末から中期終末まで連綿として集落が営まれた，大規模な遺跡であり，当時の人々の生活を知る貴重な資料が数多く発見されました。本報告書が歴史を解明するための基礎資料として，また郷土を理解するための資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に本調査にあたり御協力をいただいた日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所・福島県関係各課・関係市町村及び教育委員会・工事関係者・地元の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成3年3月

財団法人福島県文化センター
館長　佐藤昌志

例　　言

1　本報告書は，東北横断自動車道いわき・新潟線のうち，猪苗代～会津坂下間（第9次区間）建設にかかる遺跡の発掘調査の報告であり，昭和63年度・平成元年度に発掘調査を実施し，平成2年度に整理作業を行った，法正尻遺跡の調査成果を収録した。

2　法正尻遺跡の所在地は，耶麻郡磐梯町大字更科字法正尻と同郡猪苗代町大字磐根字遠出である。

3　本報告書は，上・中・下の3巻で構成した。上巻には，竪穴住居跡とその出土遺物を収録した。中巻には土坑・埋甕・焼土遺構とその出土遺物，下巻には遺物包含層とその出土遺物を収録した。

4　当遺跡調査事業は，福島県教育委員会が日本道路公団の委託をうけて行ったものである。

5　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。

6　財団法人福島県文化センターでは，事業第2部遺跡調査課の次の職員を配し，調査ならびに整理作業を行った。

昭和63年度	文化財副主査	松本　茂	文化財主事	磯上　義明
	文化財主事	山岸　英夫	文化財主事	丹治　秀樹
	嘱　　託	福山　和人		
平成元年度	文化財主査	光家　孝一	文化財主査	松崎　　真
	文化財副主査	松本　　茂	文化財主事	香内　　修
	文化財主事	山岸　英夫	文化財主事	丹治　秀樹
	嘱　　託	福山　和人		
平成2年度	文化財副主査	松本　　茂		

なお，臨時的に専門文化財主査　高木 政光，文化財主事　本間 宏，嘱託　安中 浩・大槻 巖の協力を得た。

7　本報告書の執筆は，各調査員が分担執筆し，松本が編集作業を行った。執筆者名は文末に示した。

8　法正尻遺跡出土土器の胎土分析は，奈良教育大学教育学部三辻利一氏に，漆状の付着物の分析については，国立歴史民俗博物館永島正春氏に依頼した。

9　本書に使用した二万五千分の一の地形図は，建設省国土地理院長の承認を得て，複製使用したものである。　（承認番号：平2東複，第99号）

10　本文中の氏名については，敬称を略させていただいた。

11　本報告書に収録した遺跡の発掘記録および出土品は，担当調査員と臨時職員とで整理し，福島県文化センターにおいて保管の予定である。

12　発掘調査及び報告書作成にあたり，次の関係機関の助言と協力を得た。

磐梯町教育委員会　　猪苗代町教育委員会　　磐梯山慧日寺資料館　　福島県立博物館

凡　　例

1　本書の遺構・遺物図の用例は，次の通りである。

(1)　方　位　　図中の方位は真北を示す。

(2)　縮尺率　　図の縮尺率については，掲載する遺構・遺物の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率についてはスケールの右に示してある。

(3)　ケ　バ　　遺構内の傾斜部は┬┬のケバで表現した。▽▽の記号で表現した部分は緩傾斜部を表している。

(4)　焼　土　　焼土の範囲は，アミ点で表現した。

(5)　住居跡内小穴の番号（P_1・P_2 …）下段の数値は，床面からの小穴の深さ（㎝）を表す。床面が撹乱，その他で欠失している場合でも，近くの床面から推定できるものには，その深さを記載した。

(6)　住居跡や土坑内の小穴で，その住居跡・土坑等と時期を異にするものについては上端線だけで示した。撹乱穴も同様である。また，遺構が重複し，複雑な場合も，他の遺構については上端線だけで示した。

(7)　遺構図中の水糸レベルは，海抜高度を表す。

(8)　遺物には，個別番号と出土位置(カッコ書)を示し，さらに土器については，分類の群・類名を付した。群・類名は，Ⅲ群２類土器を「Ⅲ－２」のように略記した。

2　本文中で使用した略号は次の通りである。

磐梯町……ＢＤ　　法正尻遺跡……ＨＳ　　グリッド……Ｇ

遺構外の自然堆積土層……Ｌ＋ローマ数字　　遺構内の堆積土層……ℓ＋アラビア数字

住居跡……ＳＩ　　土坑……ＳＫ　　小穴……Ｐ　　埋甕……ＳＭ

焼土遺構……ＳＧ　　性格不明遺構……ＳＸ

3　遺物の法量は，原則として図中に記載した。口径については，波状口縁の土器は波頂部から波頂部，突起の付けられた土器は，突起部を除いた口端部から口端部を計測した。

4　写真図版中の個々の遺物に付した番号は，挿図番号と一致する。

総　目　次

上　巻

第1章　調査経過と環境

第1節　調査に至るまでの経過
第2節　自然環境
第3節　歴史的環境
第4節　調査経過
第5節　調査の方法

第2章　遺構と遺物

第1節　基本土層
第2節　竪穴住居跡

中　巻

第2章　遺構と遺物

第3節　土坑
第4節　埋甕
第5節　焼土遺構
第6節　その他の遺構

下　巻

第2章　遺構と遺物

第7節　遺物包含層

第3章　考察

第1節　縄文時代の遺物について
第2節　縄文時代の遺構について
第3節　縄文時代の集落について
第4節　平安時代の遺構と遺物について

付　編

上 巻 目 次

第1章 調査経過と環境 …… 1

第1節 調査に至るまでの経過 …… 1
第2節 自然環境 …… 3
第3節 歴史的環境 …… 7
第4節 調査経過 …… 10
第5節 調査の方法 …… 12

第2章 遺構と遺物 …… 15

第1節 基本土層 …… 16
第2節 竪穴住居跡 …… 19

1号住居跡(20) 2号住居跡(33) 3号住居跡(36) 4号住居跡(38)
5号住居跡(40) 6号住居跡(42) 7号住居跡(44) 8号住居跡(45)
9号住居跡(47) 10号住居跡(52) 11号住居跡(55) 12号住居跡(57)
13号住居跡(58) 14号住居跡(62) 16号住居跡(63) 17号住居跡(64)
18号住居跡(65) 19号住居跡(68) 20号住居跡(70) 21号住居跡(75)
22号住居跡(81) 23号住居跡(82) 24号住居跡(85) 25号住居跡(88)
26号住居跡(93) 28号住居跡(96) 29号住居跡(98) 30号住居跡(102)
31号住居跡(108) 32号住居跡(109) 33号住居跡(113) 34号住居跡(119)
35号住居跡(121) 36号住居跡(121) 37号住居跡(124) 38号住居跡(127)
39号住居跡(129) 41号住居跡(130) 42号住居跡(131) 43号住居跡(135)
44号住居跡(138) 45号住居跡(140) 46号住居跡(142) 47号住居跡(143)
48号住居跡(146) 49号住居跡(149) 50号住居跡(152) 51号住居跡(154)
52号住居跡(158) 53号住居跡(159) 54号住居跡(164) 55号住居跡(169)
56号住居跡(174) 58号住居跡(175) 59号住居跡(184) 60号住居跡(191)
61号住居跡(195) 62号住居跡(199) 63号住居跡(205) 64号住居跡(207)
65号住居跡(212) 66号住居跡(215) 67号住居跡(221) 68号住居跡(225)
69号住居跡(228) 70号住居跡(232) 71号住居跡(237) 72号住居跡(241)
73号住居跡(244) 74号住居跡(246) 75号住居跡(250) 76号住居跡(253)
77号住居跡(257) 78号住居跡(261) 79号住居跡(268) 80号住居跡(274)
81号住居跡(278) 82号住居跡(282) 83号住居跡(284) 84号住居跡(286)
85号住居跡(290) 86号住居跡(292) 87号住居跡(295) 90号住居跡(301)
91号住居跡(306) 93号住居跡(308) 94号住居跡(312) 95号住居跡(315)
96号住居跡(321) 97号住居跡(323) 98号住居跡(328) 99号住居跡(331)
100号住居跡(333) 101号住居跡(340) 102号住居跡(340) 103号住居跡(343)
104号住居跡(344) 105号住居跡(344) 106号住居跡(350) 107号住居跡(352)
108号住居跡(353) 109号住居跡(356) 110号住居跡(358) 111号住居跡(364)
112号住居跡(367) 113号住居跡(369) 114号住居跡(369) 115号住居跡(375)
116号住居跡(377) 117号住居跡(377) 118号住居跡(380) 119号住居跡(382)

120 号住居跡(383)　121 号住居跡(383)　122 号住居跡(385)　123 号住居跡(387)
124 号住居跡(390)　125 号住居跡(393)　126 号住居跡(394)
127～132 号住居跡(395)　134 号住居跡(401)　135 号住居跡(403)
136 号住居跡(407)

挿図・表・写真目次

[挿　図]

図 1　東北横断道位置図 …… 1
図 2　遺跡周辺地形区分図 …… 5
図 3　地形・地質断面略図 …… 6
図 4　周辺遺跡分布図 …… 9
図 5　法正尻遺跡周辺地形図 …… 13
図 6～8　基本土層(1)～(3) …… 17～19
図 9　1 号住居跡 …… 21
図10～20　1 号住居跡出土遺物(1)～(11) …… 22～32
図21　2 号住居跡と出土遺物(1) …… 34
図22　2 号住居跡出土遺物(2) …… 35
図23　3 号住居跡と出土遺物 …… 37
図24　4 号住居跡と出土遺物 …… 39
図25　5 号住居跡と出土遺物 …… 41
図26　6 号住居跡と出土遺物 …… 43
図27　7 号住居跡 …… 45
図28　8 号住居跡 …… 46
図29　9 号住居跡 …… 49
図30・31　9 号住居跡出土遺物(1)・(2) …… 50・51
図32　10・12 号住居跡 …… 53
図33　10 号住居跡出土遺物(1) …… 54
図34　10 号住居跡出土遺物(2)と 12 号住居跡出土遺物 …… 55
図35　11 号住居跡と出土遺物 …… 56
図36　13 号住居跡と出土遺物(1) …… 59
図37　13 号住居跡出土遺物(2) …… 60
図38　14 号住居跡と出土遺物 …… 62
図39　16 号住居跡 …… 63
図40　17 号住居跡 …… 65
図41　18 号住居跡と出土遺物(1) …… 66
図42　18 号住居跡出土遺物(2) …… 67
図43　19 号住居跡と出土遺物 …… 69
図44　20 号住居跡 …… 71
図45～47　20 号住居跡出土遺物(1)～(3) …… 72～74
図48　21 号住居跡 …… 77
図49～51　21 号住居跡出土遺物(1)～(3) …… 78～80
図52　22 号住居跡と出土遺物 …… 81
図53　23 号住居跡と出土遺物(1) …… 83
図54　23 号住居跡出土遺物(2) …… 84
図55　24 号住居跡と出土遺物(1) …… 86
図56　24 号住居跡出土遺物(2) …… 87
図57　25 号住居跡と出土遺物(1) …… 89
図58～60　25 号住居跡出土遺物(2)～(4) …… 90～92
図61　26 号住居跡と出土遺物(1) …… 94
図62　26 号住居跡出土遺物(2) …… 95
図63　28 号住居跡と出土遺物 …… 97
図64　29 号住居跡と出土遺物(1) …… 99
図65・66　29 号住居跡出土遺物(2)・(3) …… 100・101
図67　30 号住居跡と出土遺物(1) …… 103
図68～70　30 号住居跡出土遺物(2)～(4) …… 104～106
図71　31 号住居跡 …… 108
図72　32 号住居跡と出土遺物(1) …… 110
図73・74　32 号住居跡出土遺物(2)・(3) …… 111・112
図75　33 号住居跡 …… 114
図76～78　33 号住居跡出土遺物(1)～(3) …… 115～117
図79　34 号住居跡と出土遺物 …… 120
図80　35 号住居跡と出土遺物 …… 122
図81　36 号住居跡と出土遺物 …… 123
図82　37 号住居跡 …… 125

図 83　37 号住居跡出土遺物 …… 126
図 84　38 号住居跡と出土遺物 …… 128
図 85　39 号住居跡と出土遺物 …… 129
図 86　41 号住居跡 …… 131
図 87　42 号住居跡 …… 132
図 88　42 号住居跡出土遺物 …… 133
図 89　43 号住居跡 …… 136
図 90　43 号住居跡出土遺物 …… 137
図 91　44 号住居跡と出土遺物(1) …… 139
図 92　44 号住居跡出土遺物(2) …… 140
図 93　45 号住居跡と出土遺物 …… 141
図 94　46 号住居跡と出土遺物 …… 143
図 95　47 号住居跡と出土遺物(1) …… 144
図 96　47 号住居跡出土遺物(2) …… 145
図 97　48 号住居跡と出土遺物(1) …… 147
図 98　48 号住居跡出土遺物(2) …… 148
図 99　49 号住居跡と出土遺物(1) …… 150
図100　49 号住居跡出土遺物(2) …… 151
図101　50 号住居跡と出土遺物 …… 153
図102　51 号住居跡 …… 155
図103・104　51号住居跡出土遺物(1)・(2) …… 156・157
図105　52 号住居跡と出土遺物 …… 158
図106　53 号住居跡と出土遺物(1) …… 160
図107・108　53 号住居跡出土遺物(2)・(3) …… 161・162
図109　54 号住居跡と出土遺物(1) …… 165
図110・111　54 号住居跡出土遺物(2)・(3) …… 166・167
図112　55・56 号住居跡 …… 170
図113～115　55 号住居跡出土遺物(1)～(3) …… 171～173
図116　58 号住居跡 …… 176
図117　58 号住居跡複式炉 …… 177
図118～122　58 号住居跡出土遺物(1)～(5) …… 178～182
図123　59 号住居跡 …… 186
図124　59 号住居跡複式炉と出土遺物(1) …… 187
図125～127　59 号住居跡出土遺物(2)～(4) …… 188～190
図128　60 号住居跡と複式炉 …… 192
図129・130　60 号住居跡出土遺物(1)・(2) …… 193・194
図131　61 号住居跡 …… 196
図132　61 号住居跡複式炉と出土遺物(1) …… 197
図133　61 号住居跡出土遺物(2) …… 198
図134　62 号住居跡と出土遺物(1) …… 201
図135　62 号住居跡複式炉と出土遺物(2) …… 202
図136・137　62 号住居跡と出土遺物(3)・(4) …… 203・204
図138　63 号住居跡と出土遺物 …… 206
図139　64 号住居跡と複式炉・石組 …… 208
図140～142　64 号住居跡出土遺物(1)～(3) …… 209～211
図143　65 号住居跡と出土遺物(1) …… 213
図144　65 号住居跡出土遺物(2) …… 214
図145　66 号住居跡 …… 217
図146　66 号住居跡複式炉と出土遺物(1) …… 218
図147・148　66 号住居跡出土遺物(2)・(3) …… 219・220
図149　67 号住居跡と複式炉 …… 222
図150　67 号住居跡出土遺物 …… 223
図151　68 号住居跡と複式炉・出土遺物(1) …… 226
図152・153　68 号住居跡出土遺物(2)・(3) …… 227・228
図154　69 号住居跡と複式炉 …… 229
図155・156　69 号住居跡出土遺物(1)・(2) …… 230・231
図157　70 号住居跡 …… 233
図158　70 号住居跡複式炉と出土遺物(1) …… 234
図159　70 号住居跡出土遺物(2) …… 235
図160　71 号住居跡と出土遺物(1) …… 238
図161　71 号住居跡複式炉と出土遺物(2) …… 239
図162　71 号住居跡出土遺物(3) …… 240
図163　72 号住居跡と出土遺物(1) …… 242
図164　72 号住居跡出土遺物(2) …… 243
図165　73 号住居跡と複式炉・出土遺物 …… 245
図166　74 号住居跡と複式炉 …… 247
図167・168　74 号住居跡出土遺物(1)・(2) …… 248・249
図169　75 号住居跡と複式炉・出土遺物(1) …… 251

図170　75号住居跡出土遺物(2)……252
図171　76号住居跡と複式炉……254
図172　76号住居跡出土遺物……255
図173　77号住居跡と出土遺物(1)……258
図174・175　77号住居跡出土遺物(2)・(3)……259・260
図176　78号住居跡と複式炉……262
図177～181　78号住居跡出土遺物(1)～(5)
……263～267
図182　79号住居跡……269
図183　79号住居跡複式炉と出土遺物(1)……270
図184～186　79号住居跡出土遺物(2)～(4)
……271～273
図187　80号住居跡と複式炉……275
図188　80号住居跡出土遺物……276
図189　81号住居跡……279
図190・191　81号住居跡出土遺物(1)・(2)……280・281
図192　82号住居跡と出土遺物……283
図193　83号住居跡と複式炉・出土遺物……285
図194　84号住居跡……287
図195・196　84号住居跡出土遺物(1)・(2)……288・289
図197　85号住居跡と立石・出土遺物……291
図198　86号住居跡と複式炉……293
図199　86号住居跡出土遺物……294
図200　87号住居跡と複式炉……296
図201～203　87号住居跡出土遺物(1)～(3)
……297～299
図204　90号住居跡……302
図205　90号住居跡1炉と出土遺物(1)……303
図206　90号住居跡出土遺物(2)……304
図207　91号住居跡と複式炉……307
図208　91号住居跡出土遺物……308
図209　93号住居跡と複式炉・埋甕……310
図210　93号住居跡出土遺物……311
図211　94号住居跡と出土遺物(1)……313
図212　94号住居跡出土遺物(2)……314
図213　95号住居跡と出土遺物(1)……316
図214～217　95号住居跡出土遺物(2)～(5)
……317～320
図218　96号住居跡と出土遺物(1)……322
図219　96号住居跡出土遺物(2)……323
図220　97号住居跡……325
図221　97号住居跡1炉・2炉・3炉と埋甕・
出土遺物(1)……326
図222・223　97号住居跡出土遺物(2)・(3)……327・328
図224　98号住居跡と出土遺物(1)……330
図225　98号住居跡出土遺物(2)……331
図226　99号住居跡と出土遺物(1)……332
図227　99号住居跡出土遺物(2)……333
図228　100号住居跡と出土遺物(1)……335
図229～232　100号住居跡出土遺物(2)～(5)
……336～339
図233　101号住居跡……341
図234　102号住居跡と複式炉……342
図235　103・104号住居跡と複式炉……345
図236　103・104号住居跡出土遺物……346
図237　105号住居跡……348
図238　105号住居跡複式炉と出土遺物……349
図239　106号住居跡と複式炉・出土遺物……351
図240　107号住居跡と出土遺物……352
図241　108号住居跡と複式炉……354
図242　108号住居跡出土遺物……355
図243　109号住居跡と複式炉・出土遺物……357
図244　110号住居跡……359
図245　110住居跡複式炉と出土遺物(1)……360
図246～248　110号住居跡出土遺物(2)～(4)
……361～363
図249　111号住居跡と炉・出土遺物(1)……365
図250　111号住居跡出土遺物(2)……366
図251　112号住居跡と出土遺物……368
図252　113号住居跡と出土遺物(1)……370
図253　113号住居跡出土遺物(2)……371
図254　114号住居跡と複式炉・出土遺物(1)……372
図255・256　114号住居跡出土遺物(2)・(3)……373・374
図257　115号住居跡と出土遺物……376
図258　116号住居跡……378
図259　117号住居跡と出土遺物……379
図260　118号住居跡と出土遺物……381
図261　119号住居跡と出土遺物……382
図262　120号住居跡と出土遺物……384
図263　121号住居跡と出土遺物……385

図264　122 号住居跡 …… 386
図265　123 号住居跡と複式炉 …… 388
図266　123 号住居跡出土遺物 …… 389
図267　124 号住居跡と出土遺物(1) …… 391
図268　124 号住居跡出土遺物(2) …… 392
図269　125 号住居跡と出土遺物 …… 393
図270　126 号住居跡と出土遺物 …… 395
図271　127～132 号住居跡 …… 398
図272　127～132 号住居跡概念図 …… 399
図273　127～132 号住居跡出土遺物 …… 400
図274　134 号住居跡と出土遺物 …… 402
図275　135 号住居跡と複式炉 …… 404
図276・277　135号住居跡出土遺物(1)・(2) …… 405・406
図278　136 号住居跡 …… 408
図279　136 号住居跡出土遺物 …… 409

[表]

表 1　東北横断自動車道第 9 次区間
発掘調査報告一覧表 …… 2
表 2　周辺遺跡地名表 …… 10

[写　真]

1　遺跡遠景
2　遺跡遠景
3　調査区遠景
4　サ～テ 0～20 グリッド付近
5　ツ～ニ 33～38 グリッド付近
6　セ～タ 55～60 グリッド付近
7　基本土層
8　1 号住居跡
9　1 号住居跡遺物出土状況
10　2 号住居跡
11　3 号住居跡
12　4 号住居跡
13　5 号住居跡
14　6 号住居跡
15　7 号住居跡
16　8 号住居跡
17　9 号住居跡
18　10・12 号住居跡
19　11 号住居跡
20　13・26・31 号住居跡
21　14 号住居跡
22　16 号住居跡
23　19 号住居跡
24　20 号住居跡
25　20 号住居跡カマド
26　21 号住居跡
27　22 号住居跡
28　28 号住居跡
29　25 号住居跡
30　30 号住居跡
31　29 号住居跡
32　32 号住居跡
33　33・37 号住居跡
34　34 号住居跡
35　35 号住居跡
36　36 号住居跡
37　38 号住居跡
38　39 号住居跡
39　41 号住居跡
40　42 号住居跡
41　43 号住居跡
42　46 号住居跡
43　47 号住居跡
44　32・44・45 号住居跡
45　49 号住居跡
46　50 号住居跡

47 51 号住居跡
48 53 号住居跡
49 53 号住居跡土層
50 54 号住居跡
51 54 号住居跡遺物出土状況
52 55・56 号住居跡
53 58 号住居跡
54 58 号住居跡複式炉
55 59 号住居跡
56 60 号住居跡
57 61 号住居跡
58 62 号住居跡
59 62 号住居跡複式炉
60 63 号住居跡
61 64 号住居跡
62 65 号住居跡
63 66 号住居跡
64 67 号住居跡
65 68 号住居跡
66 69 号住居跡
67 70 号住居跡
68 70 号住居跡複式炉
69 71 号住居跡
70 71 号住居跡細部
71 72 号住居跡
72 73 号住居跡
73 73 号住居跡複式炉
74 74 号住居跡
75 75 号住居跡
76 76 号住居跡
77 78 号住居跡
78 79 号住居跡
79 79 号住居跡複式炉
80 80 号住居跡
81 80 号住居跡土層
82 81 号住居跡
83 82 号住居跡
84 83 号住居跡
85 84 号住居跡
86 85 号住居跡
87 86 号住居跡
88 87 号住居跡
89 93 号住居跡
90 90 号住居跡
91 91 号住居跡
92 94 号住居跡
93 95 号住居跡
94 97 号住居跡
95 96・111 号住居跡
96 98 号住居跡
97 99 号住居跡
98 100 号住居跡
99 101 号住居跡
100 102～104 号住居跡
101 80・105 号住居跡
102 106 号住居跡
103 107 号住居跡
104 108 号住居跡
105 109 号住居跡
106 110 号住居跡
107 110 号住居跡複式炉
108 112 号住居跡
109 113 号住居跡
110 114 号住居跡
111 114 号住居跡複式炉
112 115 号住居跡複式炉断面
113 116 号住居跡
114 117 号住居跡
115 119 号住居跡
116 120 号住居跡
117 121 号住居跡
118 122 号住居跡
119 123 号住居跡
120 124 号住居跡
121 125 号住居跡
122 126 号住居跡
123 127～132 号住居跡
124 135 号住居跡
125 136 号住居跡

第１章　調査経過と環境

第１節　調査に至るまでの経過

東北横断自動車道いわき新潟線は，福島県いわき市を起点として郡山市・会津若松市を経て新潟県新潟市に至る212kmに及ぶ高速自動車国道で，平成７年の全線供用を目指して建設が進められている。この自動車道の建設の経緯は，昭和48年に郡山～会津坂下間，昭和53年にいわき～郡山間及び会津坂下～新潟県津川間の基本計画が設定されたことに始まる。昭和53年に郡山～猪苗代間（この区間を第８次区間と呼ぶ）の整備計画が決定し施行命令が出され，昭和57年には実施計画が出された。猪苗代～会津坂下間（この区間を第９次区間と呼ぶ）は，昭和59年に整備計画が決定して施行命令が出され，昭和60年に実施計画が出された。いわき～郡山間・会津坂下～津川間（この区間を第10次区間と呼ぶ）は，昭和61年に実施計画が出された。これによって東北横断自動車道いわき新潟線は，県内の全線が実現する運びとなった。昭和60年度から郡山～猪苗代間の工事が開始され，昭和63年度には猪苗代～会津坂下間も着工した。平成２年には，いわき～郡山間も工事に入り，郡山～磐梯熱海間は平成２年10月に供用を開始した。供用開始に際して「磐越自動車道」と名称が決定した。

福島県教育委員会は，路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため，昭和56・57年に路線周辺の表面調査を実施した。調査は財団法人福島県文化センターに委託し，関係市町村の協力を得て行われた。表面調査により確認された遺跡のうち，第９次区間の路線内には13遺跡が存在することが確認された。昭和60年度に日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所と県教育委員会との間で，路線内に所在する埋蔵文化財について保存協議を行い，保存困難な遺跡は記録保存のための発掘調査を実施することとなった。県教育委員会は，発掘調査を㈶福島県文化センターに委託した。

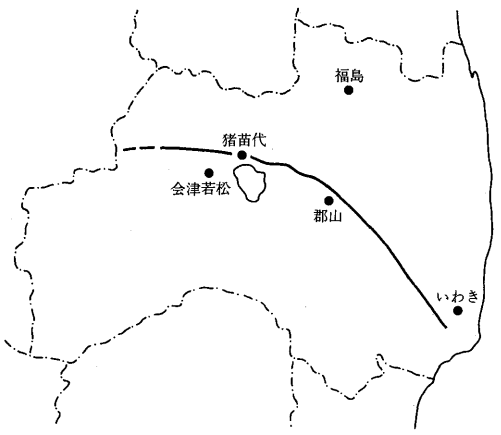


図１　東北横断道位置図

発掘調査は，日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所・福島県企画調整部総合交通課・同県教育委員会が協議し，調査計画をたてて実施することとし，第９次区間の建設工事は，昭和63年度から始められることになり，発掘調査も昭和63年度に法正尻遺跡・

駒板新田横穴墓群・大作堰上遺跡の3遺跡を対象に調査に着手した。年度途中に，一の沢工事用道路の路線内に所在する天光遺跡の調査が追加となった。昭和63年度には法正尻遺跡を除いた3遺跡の調査が終了し，法正尻遺跡については，平成元年度も継続調査となった。

平成元年度の第9次区間の発掘調査は，法正尻遺跡・角間遺跡・高森平A遺跡・船ケ森西遺跡・上吉田遺跡・能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・屋敷遺跡・横沼西遺跡・和泉遺跡・大村古墳群の12遺跡を発掘調査の対象として実施した。調査は表面調査で確認した範囲を対象として行うため，角間遺跡・船ケ森西遺跡・上吉田遺跡では，調査の進捗とともに遺跡の範囲が広がることが確認され，調査対象面積が拡大した。工事上緊急度の高い遺跡では，工事計画に合わせ地区割りを行い調査し，逐次引き渡した。予定された遺跡のうち，昭和63年度から継続調査されていた法正尻遺跡を始め，角間遺跡・高森平A遺跡・船ケ森西遺跡・上吉田遺跡・能登遺跡・南原B遺跡・村西遺跡・大村古墳群の9遺跡の調査は終了したが，屋敷遺跡・横沼西遺跡・和泉遺跡の3遺跡は平成2年度も継続調査することになった。

平成2年度の第9次区間の発掘調査は，屋敷遺跡・横沼西遺跡・和泉遺跡を対象として実施された。また，法正尻遺跡の整理作業についても同年度に実施している。調査対象遺跡は計画当初13遺跡であったが，工事用道路建設等に伴って追加された，天光遺跡・大村古墳群・羽黒館の3遺跡を含めて総数16遺跡である。

（高木・松崎）

表1　東北横断自動車道第9次区間発掘調査報告一覧表

遺跡名	所在地	調査面積	調査年度	報告書名
天光遺跡	磐梯町大字更科字天光	2,000㎡	1988	東北横断自動車道遺跡調査報告5
駒板新田横穴墓群	河東町大字金田字大作堰上	5,300	1988	東北横断自動車道遺跡調査報告6
大作堰上遺跡	河東町大字金田字大作堰上	1,780	1988	東北横断自動車道遺跡調査報告6
角間遺跡	磐梯町大字更科字角間	6,100	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告8
高森平A遺跡	磐梯町大字更科字高森平	5,300	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告8
船ケ森西遺跡	会津若松市一箕町鶴賀字船ケ森西	8,750	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告9
上吉田遺跡	会津若松市柳川字吉田	6,100	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告9
能登遺跡	会津坂下町大字勝大字能登	5,500	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
南原B遺跡	会津坂下町大字牛川字南原	500	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
村西遺跡	会津坂下町大字勝大字村西	1,150	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
大村古墳群	会津坂下町大字勝大字大村	400	1989	東北横断自動車道遺跡調査報告10
法正尻遺跡	磐梯町大字更科字法正尻	21,000	1988•1989	東北横断自動車道遺跡調査報告11

第2節　自　然　環　境

法正尻遺跡は，翁島丘陵地の東部，標高600m前後の場所に位置する。この翁島丘陵地は，猪苗代盆地西側から会津盆地東端部にかけて，東西に発達している。遺跡の北側7～8kmに磐梯山（標高1,819m）及び猫魔山（標高1,404m），南方約3kmに猪苗代湖（面積104㎢・湖水面の標高514m）が広がっている。丘陵地の南西方を，猪苗代湖からの唯一の排出河川である日橋川が開析しながら西流している。

地形・地質

遺跡周辺の地形は，図2に示したように，山地・山麓緩斜面・丘陵地・段丘・低地の5つの単元に大別される[1]。それらの特徴はつぎのとおりである。

山　地　遺跡の北方の磐梯・猫魔両火山の本体をつくる急斜面である。これは火山活動により噴出した安山岩質の溶岩等により構成されている。また，翁島北方の名倉山付近にも第三紀層からなる山地が小規模ながら分布している。

山麓緩斜面　磐梯・猫魔両火山の南側に広がる緩斜面である。頭無（ずなし）岩屑流堆積物及び山体を構成していた岩石が，2次的に堆積して形成された面である。

丘陵地　この丘陵は地形的には従来“流れ山”等と呼ばれており[2]，火山性の岩屑流堆積物から構成されている。分布は，猪苗代町翁島を東端とし，南端は猪苗代湖，西端は会津盆地東端部の河東町広田付近である。この丘陵は大きさが直径200～400m程度，比高10～50m程度の緩やかな斜面の小丘が連続し，波曲状の地形を示している。その小丘の標高は，東部で約600m，西部では300m前後と，東から西へと徐々に低下している。この小丘間は凹地・小盆地となっている。それらは，湿原や沼沢地となっているところも多く，泥炭層が発達している場合も多い。全般的に丘陵の西側地域においては，小丘の規模が小さいが，それらの間を埋める谷の幅は広い。一方，東側地域は小丘の規模が大きく，小丘間の小谷も20～30mの幅であり（法正尻湿原は例外的に大きいものであろう），西側とは対照的である。

この丘陵地を構成する岩屑流堆積物[3]は，本質物質を伴わない淘汰の悪い安山岩質の巨礫と，同質の火山性物質で埋めるドライアバランシェタイプのものであり，1888年の磐梯山噴火により発生した岩屑流と同様な発生機構と考えられている。さらにこの岩屑流堆積物は2層になっており，一つは約8～9万年前と考えられている翁島岩屑流堆積物，他は5～6万年前と考えられている頭無岩屑流堆積物である。翁島岩屑流堆積物は，表層部が著しく風化している。分布は猪苗代湖西側の翁島から会津盆地東部にまで広く分布する。全体の厚さは100m以上とされる。

頭無岩屑流堆積物は，本質物質を伴わない淘汰の悪い未～弱風化の安山岩質岩塊よりなる。翁島岩屑流堆積物を不整合に覆って堆積し，一般に翁島岩屑流堆積物よりも礫の粒径が大きい。また地表に巨礫が取り残されてみられる場合もある。本層は，磐梯山南西麓から，翁島丘陵に分布し磐梯町大寺付近が西限とされる。層厚は80 m前後とされる。野口記念館の坑井コア中の深度60.5mから73 mの堆積物が頭無岩屑流と考えられている。今回の法正尻遺跡調査区内においては，後述するように，両方の岩屑流堆積物が分布していると考えている。しかも両層の分布に極端な標高差はない。これらのことから，翁島岩屑流堆積物の凹所を埋るようにして堆積した頭無岩屑流堆積物は，この調査区付近においては20～40 m程度の層厚をもつものと考えている。

段　丘　磐梯山の南麓に東西方向に分布する標高530 mの段丘で，猪苗代湖の大高湖水面時期に対応して形成された。段丘堆積物は砂礫層を主とし，上部には泥・泥炭・姶良丹沢火山灰層をはさむ。山麓緩斜面と翁島丘陵地の間の低地の一部は，この段丘の一部とほぼ同時期に形成された部分もある。

低　地　猪苗代湖の北岸に発達するほか，銚子の口・高橋川・大谷川沿い丘陵地の凹所に分布している。かつては湿地となっていたが，現在では水田として利用されているところが多い。

法正尻遺跡の立地

本遺跡は前述した翁島丘陵地の北東部に位置している。図3には，遺跡周辺の地形・地質の断面略図を示した。aは調査区の約50 m南における東西断面，bは調査区中央の東西断面，cは調査中央の南北断面である。図3－b・cの断面に示すように，全体として，丘陵上の小丘に相当する台地状をなす凸地に立地している（一部は凹地状をなす）。調査区内での標高は553 ～562 mである。

遺跡の南東～南及び南～南西にかけては，小丘が連続して，稜線をなしている。その内側の底面に相当する場所は，幅が約200 mで，非常に緩やかな傾斜を持ち，東西方向に凹地状の断面を示す（図3 －a）。この綾線との比高差は1 ～6 m，最大では20 mである。東側は，前記の稜線のさらに東側に広がる湿地（標高555 m）から流出する小河川が位置している。台地状の凸部の部分の西側は，西向きの緩傾斜となっている。北側は，やや急な斜面をへて，法正尻湿原（標高544 m）となる。したがって法正尻遺跡は南側を小丘にかこまれてはいるが，調査区内の地域およびその北側部分は，全体として，上面がほぼ平坦で緩やかな南斜面をなす台地に立地しているといえよう。なお調査区内の東端部付近には直径が70 m，比高10 mの小凸地がある。

この丘陵は，前記の翁島・頭無両岩屑流堆積物を直接の基盤としている。調査区内の主に西側においては，翁島岩屑流堆積物が分布していると考えられる。これは，礫と基質が区別しにくく，全体に雑多な赤色を示し，シャベルで容易に掘り込めるほどに風化したものである。しかし，あ

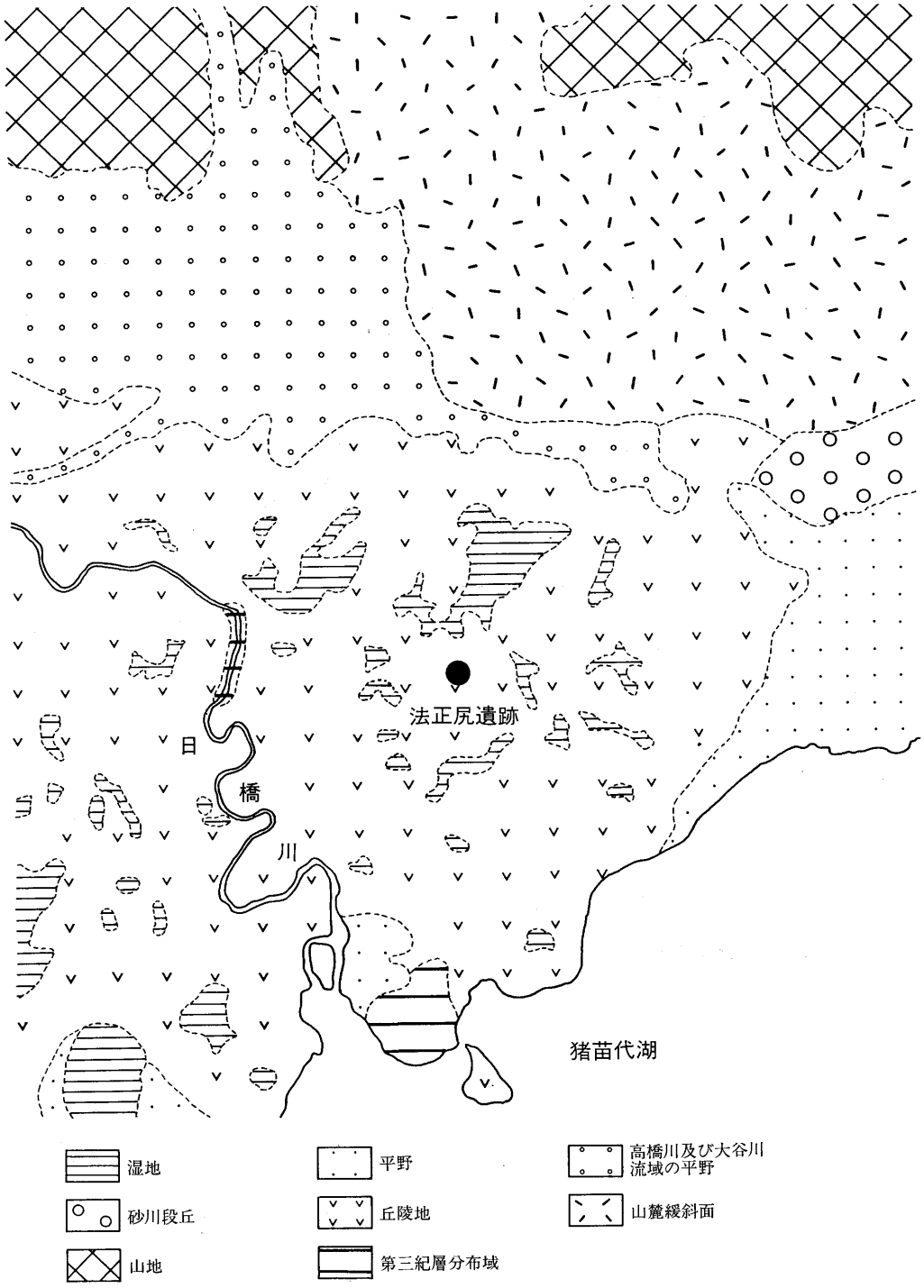


図2　遺跡周辺地形区分図

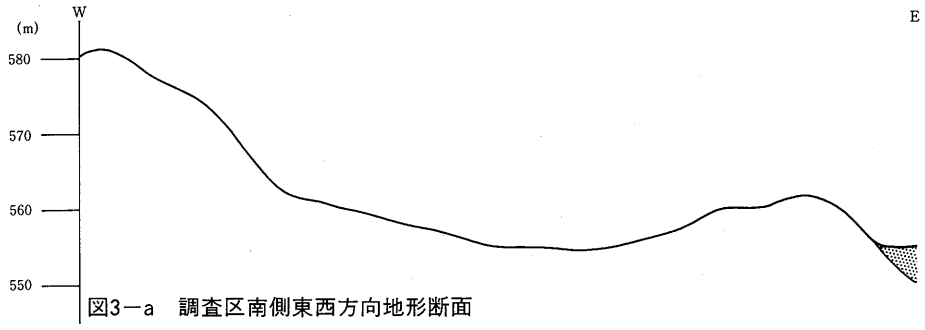


図3－a　調査区南側東西方向地形断面

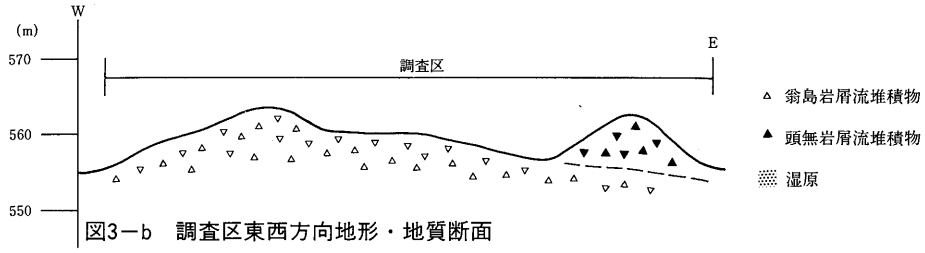


図3－b　調査区東西方向地形・地質断面

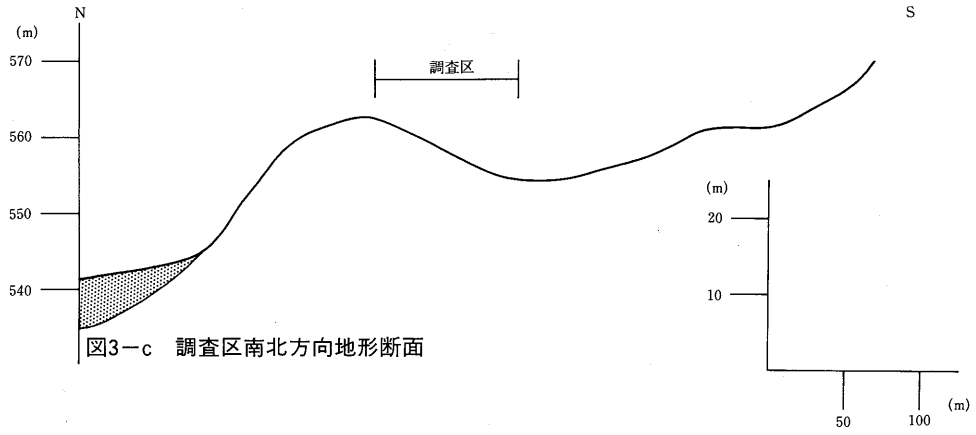


図3－c　調査区南北方向地形断面

図３　地形・地質断面略図

る程度の粘性はあり，崩壊しやすいわけではない。調査区内では2～3m程度は，この風化殻が発達していることが観察されいる。しかし，下部においてはそれほど著しく風化は進行していない。一方，調査区内東端部の小丘付近には，末～弱風化の安山岩質の角礫からなる頭無岩屑流堆積物が分布していると考えている。両層ともに，透水性は良好である。図3－bのような分布をしているものと考えられるが，両層の接する付近では，境界は明瞭ではなく，詳細については不明である。

これらの基盤岩上には，1.0～0.3m程度，最大でも1.5mの土壌が発達している。この凹地内における最低標高を示す場所に近い調査区内南東部でも，水中で堆積した泥や泥炭は，まったく見いだせなかった。凹地状を呈する場所においては，約5,000年前に噴出した沼沢降下軽石層が[4)・5)]，ほぼ一時的な堆積状態を保っている。

法正尻遺跡は丘陵上の凸所に立地し，地形的，ならびに地質的条件のため，水害等の影響のほとんどない水はけのよい，乾燥した土地であったと言うことができる。また北側の斜面下には湧水(図3－c)がある。縄文時代中期とされる時期以前から存在していたと推定される。したがって，日当たりのよい乾燥した条件と，良好な飲料水を得るという相反する条件をかねそなえていたものと考えられる。

法正尻付近の丘陵の現在植生はコナラの二次林であり[6)]，法正尻湿原は水田として大部分が利用されている。自然植生はコナラ林であるとされ，法正尻湿原は低層湿原の様相を示していたものとされている。

猪苗代湖周辺の山地の植生を概観すると，標高800mまでがコナラを主とする中間温帯林が占める。尾根すじには，アカマツ林，渓畔にはトチノキ・サワグルミ林，その上部にケヤキ林やイタヤカエデ林など種々の地形的森林もみられ，800m以上がブナ林地帯とされている。

一方，縄文時代中期～後期の植生資料としては，法正尻湿原のボーリングコアの花粉分析のデータがある。これによれば完新世の植生を示すHP－1のうち，沼沢降下軽石層の存在などからHP－1c～HP－1b帯に相当するものと考えられる。すなわち，中間温帯林としてのコナラ林が成立していたものとされている。　　（香　内）

第3節　歴史的環境

法正尻遺跡が所在する猪苗代湖北岸～磐梯山の南西山麓地域の歴史は，旧石器時代にまで遡ることができる。笹山原A遺跡からはナイフ形石器・彫刻刀形石器・掻器・石刃・石核などが出土し，法正尻遺跡からはナイフ形石器，大神遺跡（大神東遺跡）から神子柴型ポイント（槍）が出土している。

この地域の縄文時代の遺跡で最も古く位置付けられものは大神東遺跡で，縄文時代早期初頭に位置付けられる無文土器の出土が報告されている。これに続くのは角間遺跡で，ここからは関東地方に分布の中心を持つ，縄文時代早期の撚糸文土器が出土している。縄文時代早期前葉～中葉の時期になると遺跡数は漸移的に増加する。天光・観音谷地・道徳森・角間遺跡からは，押型文土器・貝殻文土器・沈線文土器等が出土している。縄文時代早期の遺跡は，丘陵の頂部を中心とする狭い範囲に形成されたものが一般的で，遺跡の規模は小さく，遺物の出土量も少ない。

縄文時代前期の遺跡としては，角間・大神東・桜川・法正尻・天光・観音谷地・道徳森・東新田場遺跡があげられる。角間遺跡からは花積下層式土器，桜川遺跡からは大木2式・諸磯a式土器，大神東・天光遺跡からは大木4式・5式土器が出土している。法正尻遺跡からは大木6式土器が出土し，この時期の土坑も発見されている。この時代も縄文時代早期と同様，遺跡の漸移的な増加傾向は認められるが，遺跡自体の規模は小さい。

縄文時代中期になると，遺跡数の増加とともに，大規模な集落が営まれる。遺跡から出土する遺物も早期・前期に比べて格段に多くなる。主な遺跡としては，法正尻・天光・寺西・西部開拓遺跡が知られている。このうち遺物の出土量や検出遺構から推測して，天光遺跡は大木9・10式期，法正尻遺跡は大木7a～10式期，寺西遺跡は大木8b・9式期，西部開拓遺跡は大木8a式期の，猪苗代湖北岸地域における拠点的な集落と考えられる。

縄文時代後期・晩期になると遺跡数は若干減少するようである。金屋遺跡からは堀之内1式土器が，東新田場・角間遺跡からは加曽利B式土器が出土している。特に，角間遺跡では加曽利B式期の竪穴住居跡が25軒発見され，この地域の加曽利B式期における拠点的な集落であった事が考えられる。しかし，遺跡の規模や遺構のバラエティ，遺物の出土量は前時代と比べると内容に乏しい。

縄文時代晩期の遺跡は，大洞BC式以降の土器が出土している寺西遺跡を挙げることができ，角間遺跡からもこの時期の竪穴住居跡が検出されている。弥生時代の遺跡としては，弥生時代前期末葉と考えられる土器片が出土した寺西遺跡があるが，他に休場遺跡・蟹沢浜湖底遺跡が知られる程度で，極めて稀薄である。

古墳時代に入ると，会津地方には盆地の平坦部や周縁部に大型古墳が造営される。会津地方は東北有数の古式古墳の密集地であり，4世紀後半に比定されている会津大塚山古墳はその代表である。しかし，盆地外では，今のところ古墳は確認されておらず，広く猪苗代・磐梯地域を概観しても古墳時代は，資料的に空白となっている。

平安時代になると，猪苗代湖北岸の丘陵地帯にも少規模な表杉ノ入式期の集落が営まれている。住居跡は法正尻遺跡と角間遺跡から確認され，角間遺跡のように湿地に隣接する丘陵の縁辺部には，小集落が散在的に営まれる傾向がみられる。さらに，平安時代以降のこの地域の歴史を考え

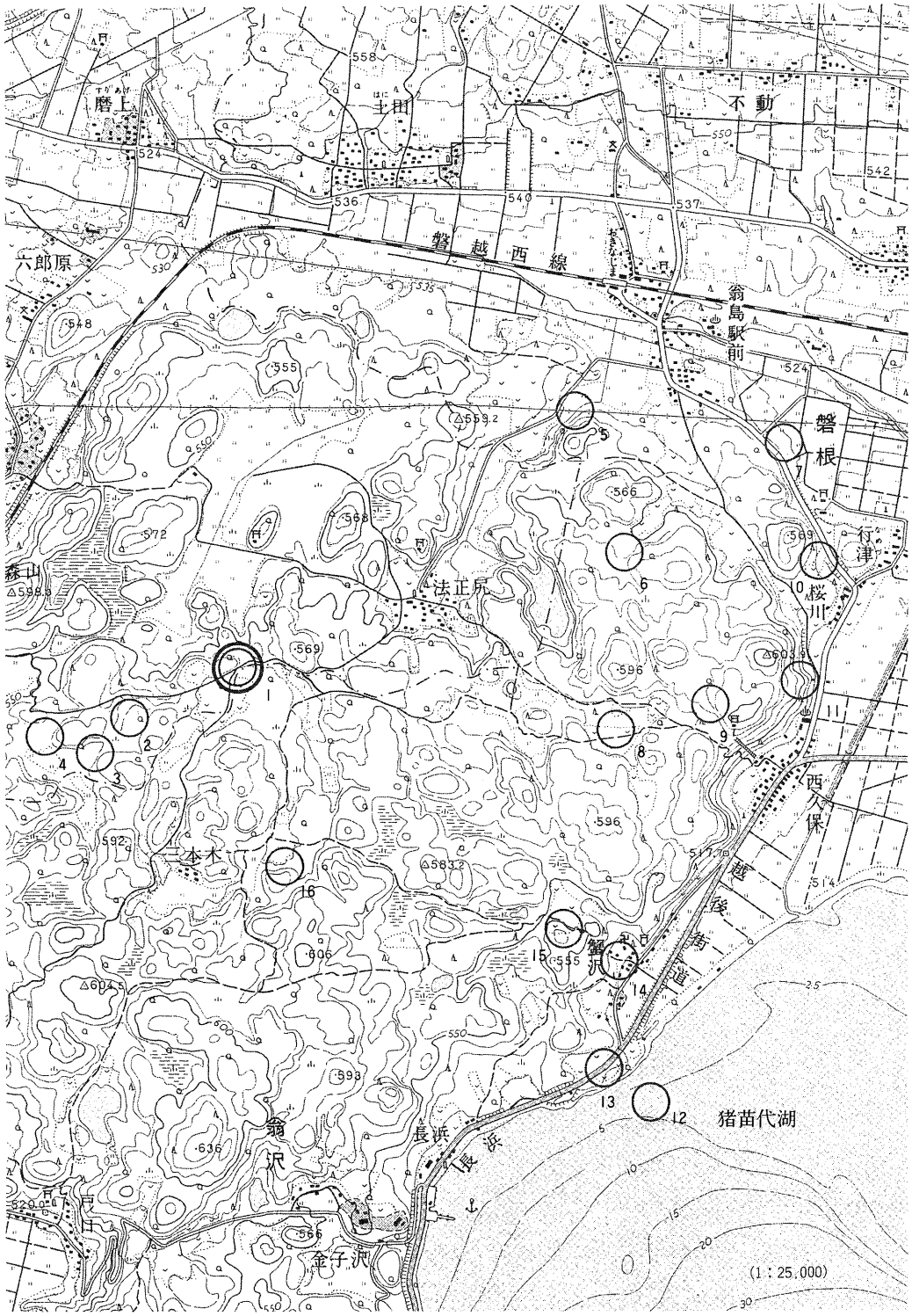

磨上
土田
不動
六郎原
磐越西線
翁島駅前
磐根
行津
桜川
西久保
越後街道
法正尻
森山
一本木
翁沢
金子沢
長浜
猪苗代湖
(1：25,000)

図４　周辺遺跡分布図

表2　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡の種類・時期	番号	遺跡名	遺跡の種類・時期
1	法正尻遺跡	散布地（縄文）	9	法正尻道上塚	塚
2	高森平A遺跡	散布地（縄文）	10	桜川遺跡	散布地（縄文・古墳）
3	角間遺跡	散布地（縄文）	11	桜川南遺跡	散布地（縄文）
4	高森平B遺跡	散布地（縄文・奈良・平安）	12	蟹沢浜湖底遺跡	散布地（縄文・弥生）
5	西谷地遺跡	散布地（縄文）	13	休場遺跡	散布地（縄文・弥生・古墳）
6	後手遺跡	散布地（古墳・平安）	14	麻畑遺跡	散布地（縄文）
7	大神東遺跡	散布地（旧石器）	15	中道遺跡	散布地（縄文・古墳）
8	笹森遺跡	散布地（縄文）	16	三本木遺跡	散布地（縄文）

る上で重要なのは，徳一による慧日寺の創建と同寺の発展であろう。

慧日寺は大同2（807）年の創建と言われ，その全盛は平安時代後期から鎌倉時代初期の頃と考えられている。慧日寺は耶麻・河沼両郡に18万石に及ぶ寺領と子院・僧房3,800，僧兵3,000余を有していたと伝えられ，律令体制が変質していく中で，寺領支配にとどまらず，会津一円に対する総領主権をも行使したと言われている。この地域の金滓澤新田村（現在の猪苗代町金子沢）の地名由来について，『新編会津風土記』では慧日寺創建時の鉄作りの場であったものと記載されている。いずれにせよ，当地域の平安時代以降の遺跡を考える上でも，慧日寺については常に注意を払う必要がある。

このような権力と財力を持ったと伝えられる慧日寺も，南北朝の動乱期を過ぎ，会津地方を中心に領国支配体制を固めていく芦名氏と，これに対抗する猪苗代氏の狭間に常に立たされ，徐々にその勢力の後退を迫られていった。天正18年1月，伊達氏と芦名氏による磨上原の合戦で，芦名氏は滅亡し，慧日寺もその大半を焼かれ，ここに当地域の古代・中世も終焉を迎えるのである。

（松崎・松本）

第4節　調　査　経　過

昭和63年福島県教育委員会と日本道路公団仙台建設局とは，東北横断自動車道いわき新潟線建設予定地内に所在する文化財の保護をはかるため協議を行つた。ここで，法正尻遺跡については東北横断自動車道の路線にかかる9,200㎡を対象に，記録保存の目的で発掘調査を実施することが決定した。実際の発掘調査は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターに委託して実施した。

法正尻遺跡の発掘調査は，昭和63年5月11日に着手した。調査の進展に伴い，当初遺跡範囲

から除外されていた周辺の山林部にまで遺跡範囲が広がることが確認され，発掘調査が必要な面積は21,000㎡となった。このため福島県教育委員会と日本道路公団仙台建設局は再度協議を行い，この21,000㎡すべてについて発掘調査を実施することとし，昭和63年度には条件整備の整った畑地部分を中心に9,000㎡を対象として発掘調査を実施することが決定した。残る12,000㎡については，平成元年度に発掘調査を実施することとなった。さらに，検出遺構・出土遺物が極めて多いために，整理作業については平成2年度に行うこととなった。以下法正尻遺跡の調査経過の概略を，各年度ごとに述べることとする。

昭和63年度

昭和63年度の発掘調査は，調査員4名体制で実施した。5月11日財団法人福島県文化センター職員4名と福島県教育委員会職員1名が現地に赴き，日本道路公団会津若松工事事務所の立ち会いのもと，発掘調査範囲の確認を行う。5月16日器材搬入，グリッドの設定，条件整備の整った畑地部分3,600㎡を対象とし，重機による表土剝ぎを開始する。同日午後より作業員を導入，遺物包含層の掘り込みを行う。5月18日，標高杭557.4ｍを設定する。5月20日重機よる表土剝ぎを終了する。同日以降この地点の遺物包含層の掘り込みと検出遺構の精査を行う。

6月7日以降作業員を送迎するため，バスを運行する。7月6日発掘調査の完了した畑地部分3,600㎡について地形測量を行う。7月10日山林部の立ち木の伐採が一部終了したため，この部分9,400㎡を対象として重機による表土剝ぎを開始し，8月10日に終了する。7月から12月まで，遺物包含層の掘り込みと検出遺構の精査に専念する。その間9月17日には発掘調査の成果を公表するため，福島県教育委員会が現地説明会を開催した。12月2日9,000㎡の範囲について検出遺構すべての精査を終え，昭和63年度の発掘調査を終了した。

昭和63年度の検出遺構は，竪穴住居跡43軒・土坑237基・埋甕18基・焼土遺構56基・集石土坑1基と遺物包含層である。発掘調査には延べ135日，調査員延べ637人，作業員延べ4,029人を要した。

平成元年度

平成元年度の調査は，前年度の未調査部分12,000㎡を対象として実施した。平成元年度は隣接する角間遺跡・高森平A遺跡を含めて，調査員7名体制で発掘調査を実施した。4月7日財団法人福島県文化センター職員3名と福島県教育委員会職員1名が現地に赴き，日本道路公団会津若松工事事務所立ち会いのもと，発掘調査区域の確認を行う。4月17日器材を搬入し発掘調査を開始した。5月12日より重機を導入し，町道部分1,500㎡と前年度に表土剝ぎを終了していた4,000㎡を除いた範囲を対象に表土剝ぎを開始，5月17日表土剝ぎを終了する。5月13日からグリッドを設定，作業員を導入，調査区東端の遺物包含層の掘り込み，検出遺構の精査を開始する。7月上旬より調査区西側の南東向き緩斜面部の調査に本格的に着手する。この部分は遺構

の密度が極めて高く，遺構の検出・重複関係の把握に手間取る。

9月13・14日，町道部分1,500㎡を対象として重機による表土剥ぎを行い，調査区すべての表土剥ぎを終了する。7月から11月16日まで，遺物包含層の掘り込みと検出遺構の精査に専念する。8月31日に角間遺跡の発掘調査が終了し，9月1日より調査員3名が法正尻遺跡の発掘調査に合流する。その間10月14日には発掘調査の成果を公表するため，福島県教育委員会が現地説明会を開催した。11月17日には12,000㎡の範囲内の精査を完了し，法正尻遺跡の発掘調査を終了した。

平成元年度の検出遺構は，竪穴住居跡86軒・土坑522基・埋甕8基・焼土遺構52基と遺物包含層である。発掘調査には延べ145日，調査員延べ712人，作業員延べ4,704人を要した。

平成2年度

平成2年度については報告書作成のため，調査員1名を専従させ整理作業を行った。整理対象とした遺構・遺物は，竪穴住居跡129軒・土坑759基・埋甕26基・焼土遺構108基・集石土坑1基と性格不明遺構1基，遺物包含層と，各遺構から出土した遺物とである。整理作業は平成3年3月31日，法正尻遺跡発掘調査報告書の刊行をもって終了した。報告書に収録したものは，検出遺構のすべてと縄文土器実測図904点，平安時代土器実測図32点，縄文土器拓影5,650点，石器・石製品1,303点，土製品145点，他2点である。　（松　本）

第5節　調査の方法

本遺跡の発掘調査の基本方針について記述する。まず，調査区内堆積土の確認と，出土遺物の取り上げのために，発掘調査区全域に一辺4mの方眼を設定し，これをグリッドと呼んだ。グリッド設定に際しては，東北横断自動車道路いわき・新潟線，下り車線の中心杭333+60杭を起点とし，法定座標軸に一致させている。この杭の法定座標上の位置は，X：+1704445422，Y：+182195271である。

グリッドの呼称は，西から東に0・1・2…，北から南にア・イ・ウ…とし，これを組み合わせて，ア1・ウ30グリッドとした。しかし0グリッド以西にも若干遺跡の範囲が伸びたため，この部分については0グリッドから西に向かって0・99・98…と表した。第2章以降の記載では，個別のグリッドを現す時はグリッドをGと表記する。

遺構の記述に際しては，4mのグリッドを1mの方眼に細分割した測点を用いて図化した。測点は調査区内に任意に設定した原点（EW0・NS0）を中心に，方向を表す略号E・W・S・Nと，原点からの距離を表すアラビア数字を組み合わせて表記した。N10・E10の点は原点から北へ10m，東へ10mの地点を表す。原点は，タ39グリッド北西杭とした。なおグリッド設定の

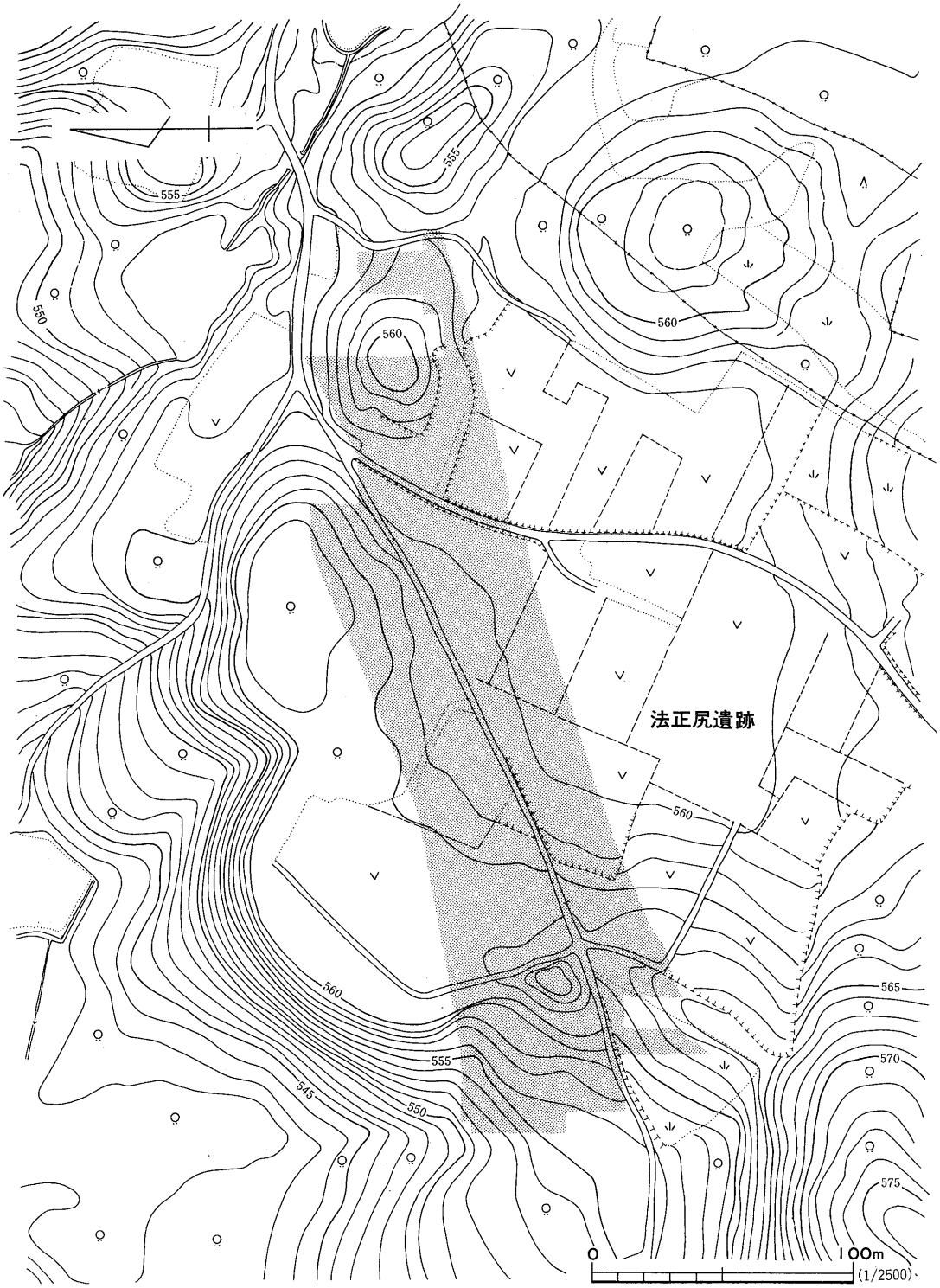


図5　法正尻遺跡周辺地形図

起点とした333＋60杭は，ハ9グリッド北西杭，S40・W120の地点に相当する。

遺跡の掘り込みは，耕作や木の根による撹乱が顕著な現地表から20㎝下までを，重機を用いて取り除いた。それ以下の堆積層については，各グリッドごとに人手によって掘り込んだ。遺構確認作業は原則として，各堆積層除去後に実施した。しかし同質の土が厚く堆積している部分については，約10㎝掘り込むごとに遺構確認作業を行い，表土直下に基盤となるⅬⅣやⅬⅤが堆積する部分については，基盤層の上面においてのみ同作業を実施している。出土遺物は，各グリッド・各堆積層ごとに取り上げ，一括土器については個別に番号を付け，出土地点・出土層位・標高をレベルノートを用いて記録した。雨の日は屋外作業が困難なため，プレハブ内で出土遺物の水洗いを行い，調査期間中にすべての出土遺物の水洗いを終了した。

記録は地形図を1／200，基本土層を1／20の縮尺で図化し，遺構はその大きさにより1／10・1／20の縮尺で図化した。写真は35㎜フイルムのモノクロームとリバーサルで撮影し，とくに重要と考えられるものについては，ブロニー版のモノクロフイルムでも撮影している。　（松　本）

参考文献

1）鈴木敬治・吉田義・真鍋健一　1977年　「5万分の1表層地質図磐梯山・同説明書」『地質分類基本調査』　福島県

2）中村嘉男　1982年　「翁島泥流丘陵における谷底面高度並びに斜面形について」『福島大学特定研究報告猪苗代湖の自然3』

3）鈴木敬治　1988年　「猪苗代湖盆の形成史」『地質学雑誌97(4)号』

4）只見川第四紀研究グループ　1966年「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の^{14}C年代－日本の第四系の^{14}C年代ⅩⅩⅥ－」『地球科学82号』

5）只見川第四紀研究グループ　1966年「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年－特に沼沢浮石層の層位学的諸問題について－」『第四紀8号』

6）鈴木敬治・相馬寛吉・樫村利道・真鍋健一　1982年　「法正尻湿原周辺の植生及び法正尻層とその植物化石群」『福島大学特定研究報告猪苗代湖の自然3』

第2章　遺構と遺物

法正尻遺跡の発掘調査では竪穴住居跡129軒，土坑759基，埋甕26基，焼土遺構108基，集石土坑1基，特殊遺構1基の遺構と遺物包含層とが検出された。これらの遺構からは，土器片が260,000点，土製品・石製品168点，石器3,350点，鉄器1点・鉄滓1点の遺物が出土した。報告書作成に当たっては，これらの遺構・遺物を可能な限り報文中に収録するように努めた。しかし，出土土器の主体を占める遺物包含層出土の縄文時代中期の土器については，復原できた土器や大型破片を主として掲載した。石器の中には磨石が713点含まれているが，これらをすべて図示することが出来ないため，主に使用痕跡をもとに分類し，表13に出土点数を記載した。

出土土器については，便宜上下記のように大まかな時期分類を行い，これにそって記述を進めることとする。

Ⅰ群土器　縄文時代早期中葉～前期後葉の土器である。出土点数は極めて少ない。さらに3類に分類した。

1類　縄文時代早期の沈線文系土器　　2類　花積下層式～大木2式併行期の土器

3類　大木4・5式併行期の土器

Ⅱ群土器　縄文時代前期終末～中期前葉の土器。法正尻遺跡では出土遺物の主体を占める土器群である。さらに7類に分類した。

1類　大木6式土器　　2類　大木7a式土器　　3類　大木7b式土器

4類　大木7b～8a式土器　　5類　阿玉台式土器　　6類　新崎式・円筒式系土器

7類　その他

Ⅲ群土器　縄文時代中期中葉～終末の土器である。法正尻遺跡では主体を占める土器である。さらに5類に分類した。

1類　大木8a式土器　　2類　大木8b式土器　　3類　大木9式土器

4類　大木10式土器　　5類　その他

Ⅳ群土器　縄文時代後期の土器である。法正尻遺跡からの出土量は極めて少ない。

1類　加曽利B1式

Ⅴ群土器　平安時代の土器である。20号住居跡からまとまって出土している。

第1節　基　本　土　層

法正尻遺跡の調査にあたっては，調査区内にある程度の広がりを持って堆積している土を基本土層とし，下記のように5区分して調査を実施した。これらの土の中でＬⅢとした土については，地点ごとに土質に違いが認められることから，さらにＬⅢａ～ＬⅢｃに3区分した。次に各土層について，土質や堆積範囲，遺構・遺物と各土層との関係について概観しておく。

ＬⅠ…表土，層厚30㎝。耕作や木根による撹乱が著しい。

ＬⅡ…黒褐色土，層厚30～40㎝。多量の遺物を包含している。その堆積範囲はシ～ナ41～45G，ソ～テ49～54G，ト～フ20～31Gに見られる浅い窪地の部分である。本層からは各時代の土器が出土しているが，その中で最も新しいものは平安時代の土器である。遺構との関係を見ると，平安時代の住居跡であるＳＩ20では本層が床面を直接覆って堆積し，縄文時代中期の住居跡であるＳＩ30•43では，住居跡内堆積土の最上層にレンズ状に本層の堆積が認められた。

ＬⅢ…土質からさらに3区分している。ＬⅢｃ以外には沼沢降下軽石層(NP)からの直径1㎝程度のパミスが土層中に散在，あるいは成層した状態で含まれている。

ＬⅢａ…黒褐色土，層厚15㎝。パミスを多量に含む。その堆積範囲は39～52Gに見られる緩い窪地部分の標高556～557ｍ付近で，ＬⅡ直下に堆積している。本層からは縄文時代中期の土器が出土しているが，その主体は大木7b・8a式土器である。遺構との関係は，ＬⅢａの堆積する範囲に作られた遺構が少ないため不明である。

ＬⅢｂ…暗褐色土，層厚10～40㎝。パミスを多量に含む。遺物の出土量が最も多い。その堆積範囲は，ほぼ調査区の全域に及んでいるが，エ～ス53～70Ｇ，ヌ～ノ95～0Ｇに見られる丘陵尾根部にはその堆積が見られない。ＬⅡの堆積する緩い窪地部や調査区北西端部のタ～テ87～90Ｇでは，ＬⅢｂの下層部には沼沢パミス(NP)の一次堆積と考えられる，層厚10㎝程のパミスがほぼ純粋に堆積していた。しかし，撹乱などのため必ずしも，平面的に連続した状態を示すものばかりではない。

なお，サ～ト1～22Gに堆積するＬⅢｂは，褐色土をベースとする土で，他の地点でＬⅢｂと認識した土と異なっている。この地区からは縄文時代中期後葉から末葉の竪穴住居跡が多数検出されており，この土は基本的にこれらの遺構の堆積土であったものと考えている。

ＬⅢｂ層からは，大木6～大木8a式土器が出土している。サ～ト1～22Gに堆積するＬⅢｂには，大木10式土器までが包含されている。遺構との関係を見ると，平安時代のＳＩ20は本層上面から掘り込まれ，大木9式期のＳＩ42の床面はＬⅢｂの中に作られている。さらに大木8a式期のＳＭ2は本層下部を掘り込んで土器が埋設されていた。大木7b式期の竪穴住居跡である

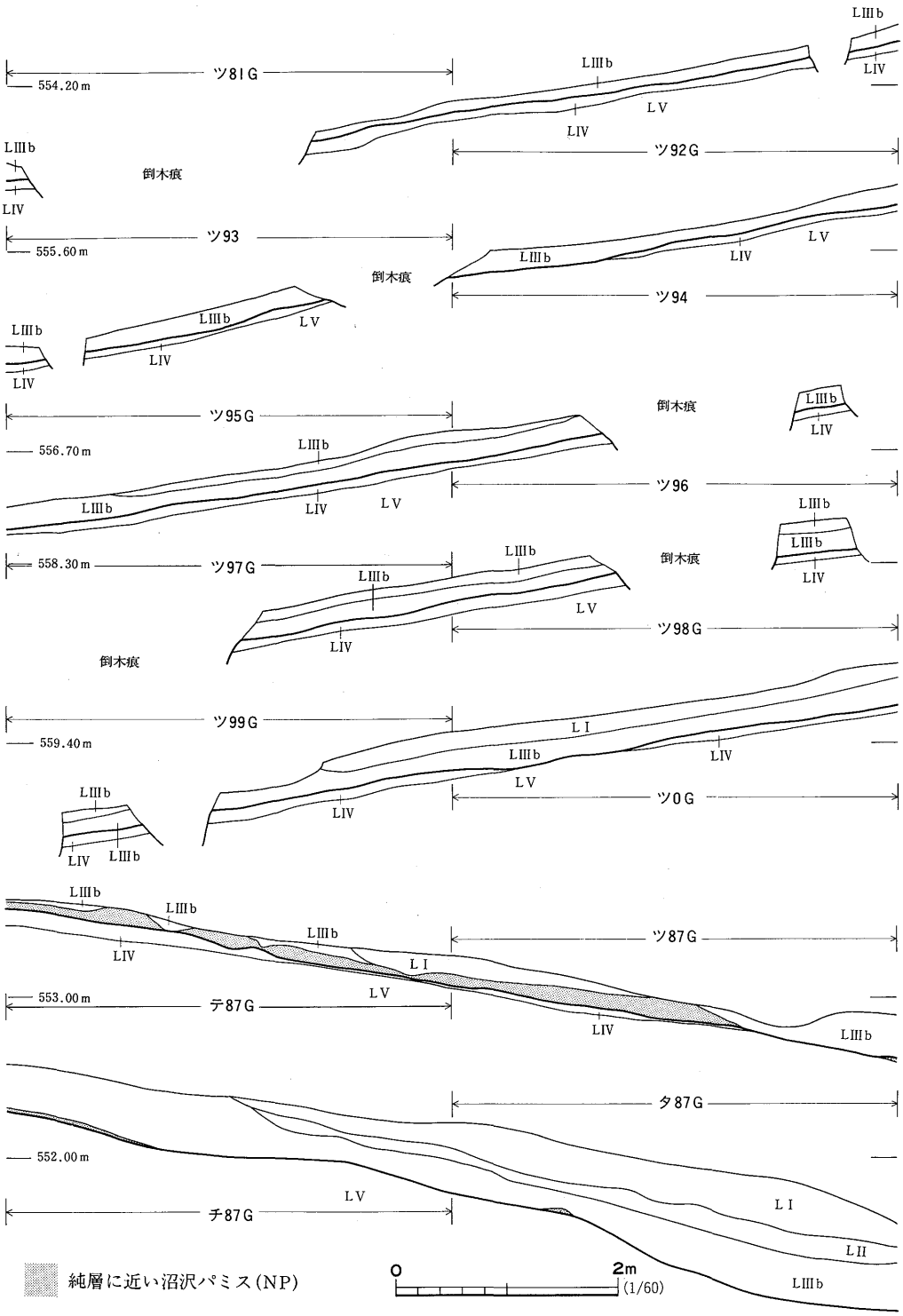

ツ81G
554.20m
LIIIb
LIV
LV
ツ92G
倒木痕
ツ93
555.60m
ツ94
ツ95G
556.70m
ツ96
ツ97G
558.30m
ツ98G
ツ99G
559.40m
ツ0G
ツ87G
テ87G
553.00m
タ87G
チ87G
552.00m
LI
LII
純層に近い沼沢パミス(NP)
0
2m
(1/60)

図6　基本土層（1）

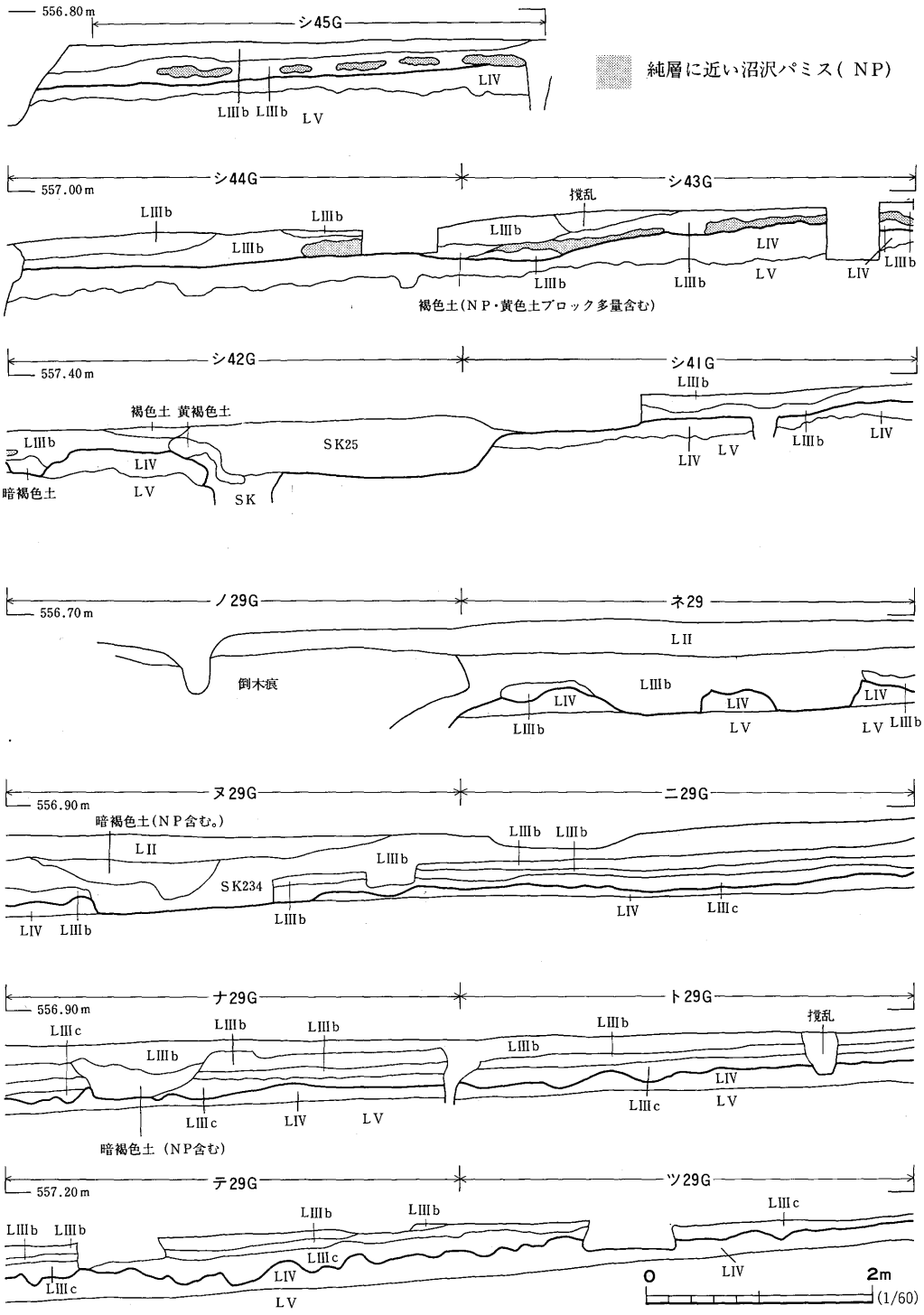

556.80m
シ45G
LIV
LIIIb LIIIb
LV
純層に近い沼沢パミス（NP）
557.00m
シ44G
シ43G
攪乱
LIIIb
LIIIb
LIIIb
LIIIb
LIIIb
LIV
LV
LIV
LIIIb
褐色土（NP・黄色土ブロック多量含む）
557.40m
シ42G
シ41G
LIIIb
褐色土 黄褐色土
LIIIb
SK25
LIV
暗褐色土
LV
SK
LIV
LV
LIIIb
LIV
556.70m
ノ29G
ネ29
LII
倒木痕
LIV
LIIIb
LIIIb
LIV
LV
LIV
LV LIIIb
556.90m
ヌ29G
ニ29G
暗褐色土（NP含む。）
LII
LIIIb LIIIb
LIIIb
SK234
LIV LIIIb
LIIIb
LIV
LIIIc
556.90m
ナ29G
ト29G
LIIIc
LIIIb
LIIIb
LIIIb
攪乱
LIIIb
LIV
LIIIc
LV
LIIIc
LIV
LV
暗褐色土（NP含む）
557.20m
テ29G
ツ29G
LIIIb LIIIb
LIIIb
LIIIb
LIIIc
LIIIc
LIV
LIV
0
2m
LIIIc
LV
(1/60)

図7　基本土層（2）

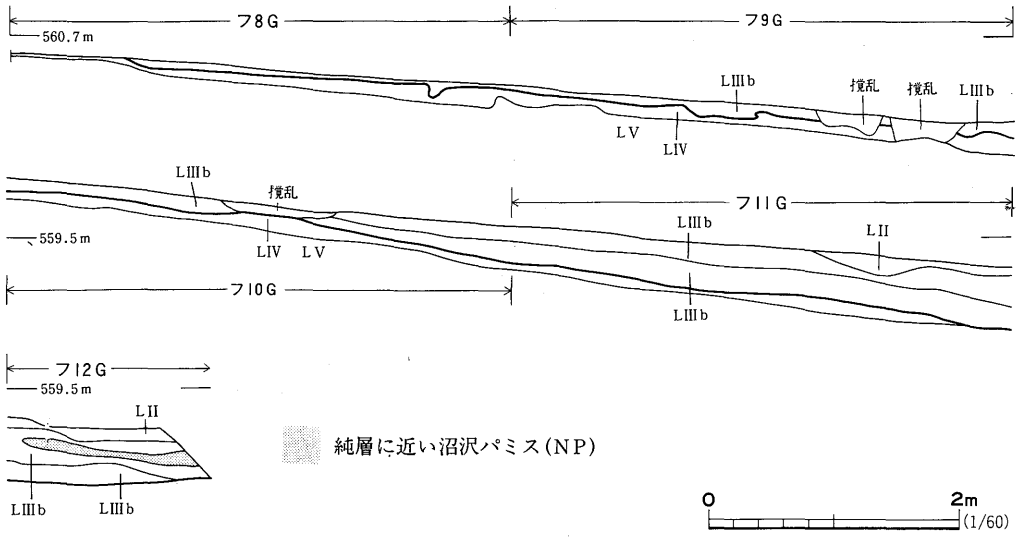


図8　基本土層（3）

ＳＩ53は，ＬⅢｂ下部に堆積する純層に近いパミス層を確実に掘り込んで作られていた。この他焼土遺構にはＬⅢｂの上面に作られているもの，中位につくられているもの，ＬⅣ・Ⅴ上面に作られているものが見られる。

ＬⅢｃ…粘土質の暗褐色土，層厚10～20㎝。堆積範囲はト～フ20～30Ｇの緩い窪地部で，ＬⅢｂの直下に堆積している。パミスはほとんど含まれていない。遺物は基本的に包含されていない。縄文時代中期の遺構は，本層上面で確認できた。ＬⅢｃについては，本層下位に堆積するＬⅣが土壌化した土と考えられる。

ＬⅣ…粘土質の明褐色土，層厚10～30㎝。ロームに近い性状を示す土で，遺跡の基盤を構成する土である。

ＬⅤ…粘土質の明褐色土。丘陵を構成する岩屑流堆積物が風化して，かなり土壌化したもので，場所により礫を含んでいる所がある。　（香内・松本）

第2節　竪穴住居跡

法正尻遺跡からは，129軒の竪穴住居跡が検出された。この内，平安時代に比定される20号住居跡1軒を除いて，他はすべて縄文時代中期初頭から末葉までの時期に作られたものである。これら縄文時代の住居跡は，それぞれ細別時期ごとに調査区内で地点をかえて作られている。このため，各時期ごとの集落の様子は比較的捉らえやすい。しかし，これについては土坑等の他の遺構と関連させて次章で総括することとし，本節では検出された個々の住居跡について記述する。

なお調査当初は住居跡としたが，調査の結果住居跡でないことが明らかとなったものは除外した。このため15・27・40・57・88・89・92号住居跡は，欠番となっている。

1 号 住 居 跡（ＳＩ1）

遺　　構（図9，写真8・9）

シ～セ38・39GのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ2・8と重複するが，本住居跡が新しい。遺存状態は比較的良好であるが，南壁部分については，傾斜面下位に作られ，さらに一部は倒木痕によって壊されているため，検出することはできなかった。

平面形は北西－南東が長い，不整の長方形を呈している。規模は東西5.5m，南北は遺存部から7.5mを超えるものと考えられる。検出面からの深さは北壁が最も深く20cmを測り，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は地山であるＬＶまで掘り込まれほぼ平坦で，炉の周辺部分は硬く締まっている。堆積土はＬⅢｂに近似するℓ1をはじめとして3層に分けられ，傾斜面に沿って流入した様相を呈しており，自然堆積と考えられる。

住居施設としては，24個の小穴と3基の炉が検出された。小穴の規模はP24・P25が長辺120cm，短辺70cm程の長方形を呈し，床面からの深さは，それぞれ100・80cmを測る。この小穴についてはその規模・平面形から，調査当初落し穴状の土坑と考えたが，住居跡の炉を挟んで対応する位置に作られていること，堆積土が人為堆積を示していることから，本住居跡に伴う主柱穴と判断した。さらにこれらより規模は幾分小さいが，床面からの深さがほぼ同じで，これらと直線的に並んで壁際に作られている，P1・P2・P23についても本住居跡の主柱穴と判断している。倒木痕の範囲内から主柱穴は検出されなかったが，ここにも1個柱穴があったものと考えられ，本住居跡の主柱穴は長方形状に配置された6個で構成されていたものと考えている。

その他の柱穴は，直径15～35cm，深さ15～48cmである。これらの小穴については，その作られた位置に特に規則制は認められず性格は不明である。住居跡北半部の小穴については，ＳＩ2に伴う小穴も含まれている可能性が高い。炉は住居跡中央から，長軸上に並ぶ3基の地床炉が検出された。炉の焼けは強く，いずれも炉上面から8cm下まで焼土化が認められた。

遺　　物（図10～図20）

本跡からは，縄文土器片2,050点と石器が82点出土している。これらの遺物は，ℓ1からℓ2の上面にかけてまとまって出土したが，その多くは破片であり，散在した状態で出土している。図10－1は浅鉢状を呈する体部に，「ハ」の字状の台が付けられた土器である。口縁部には眼鏡状の装飾把手を巡らせ，その縁に有節沈線を施している。直線的に立ち上がる高台部には有節沈線による入り組み状の連結文を施し，その一部は渦巻文を描いている。

図10－2・3，図11－3～図12－1，図14－1～5は口縁部がキャリパー状に内湾する深鉢である。

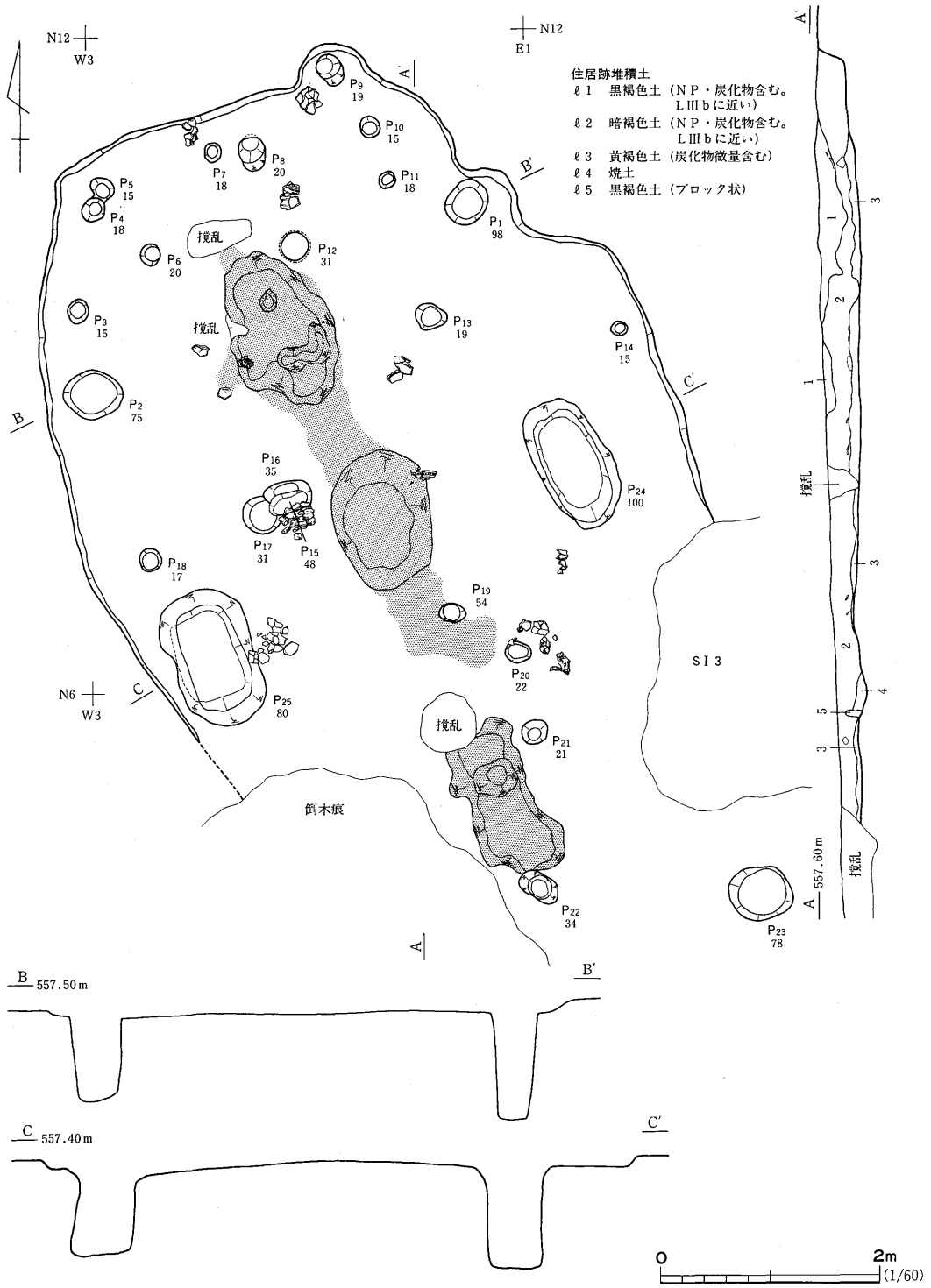

N12
W3
N12
E1
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（NP・炭化物含む。LⅢbに近い）
ℓ2　暗褐色土（NP・炭化物含む。LⅢbに近い）
ℓ3　黄褐色土（炭化物微量含む）
ℓ4　焼土
ℓ5　黒褐色土（ブロック状）
P1 98
P2 75
P3 15
P4 18
P5 15
P6 20
P7 18
P8 20
P9 19
P10 15
P11 18
P12 31
P13 19
P14 15
P15 48
P16 35
P17 31
P18 17
P19 54
P20 22
P21 21
P22 34
P23 78
P24 100
P25 80
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
倒木痕
SI3
N6
W3
A
A'
B
B'
C
C'
557.60m
B 557.50m
C 557.40m
0
2m
(1/60)

図9　1号住居跡

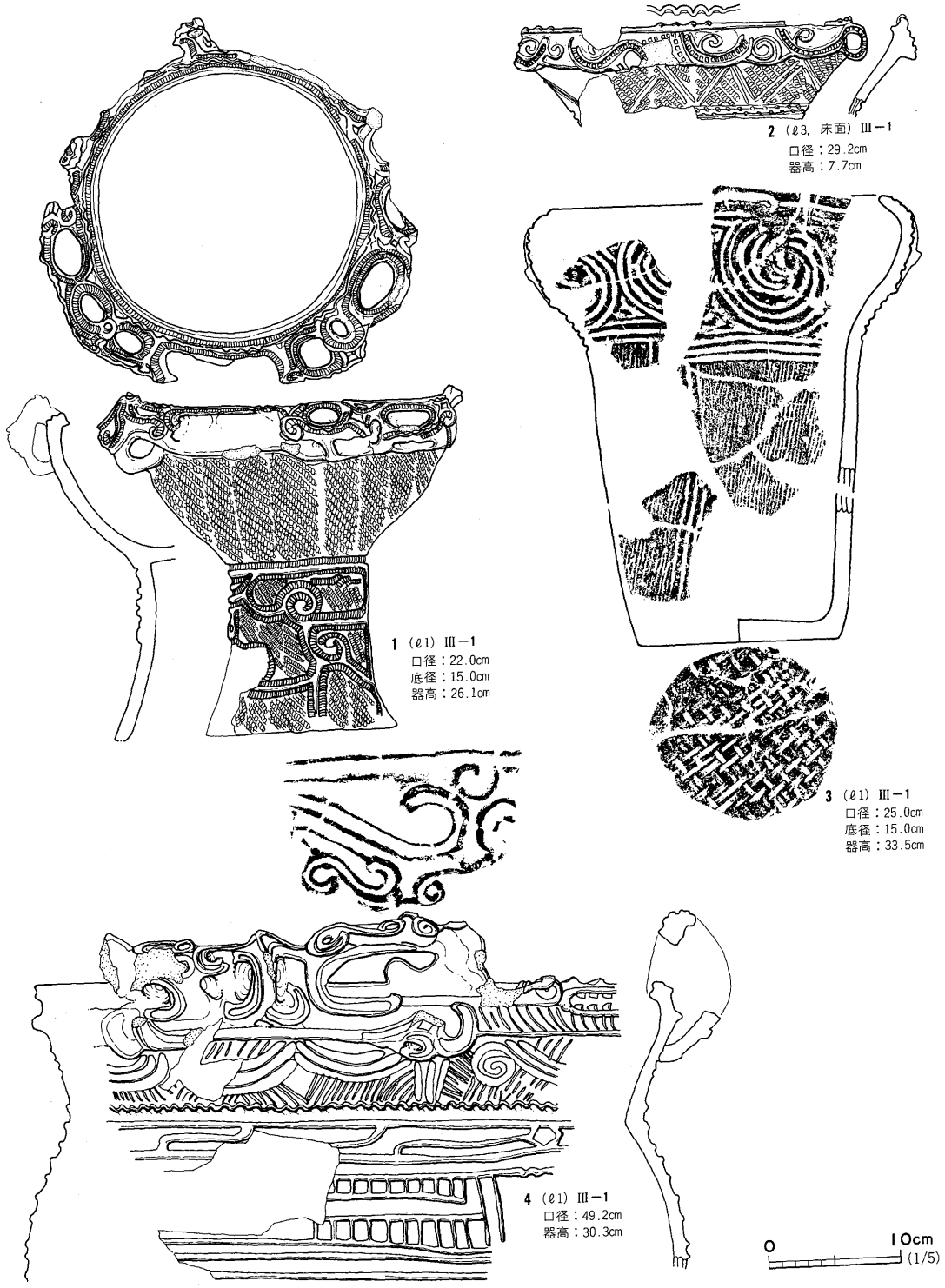


図10　1号住居跡出土遺物（1）

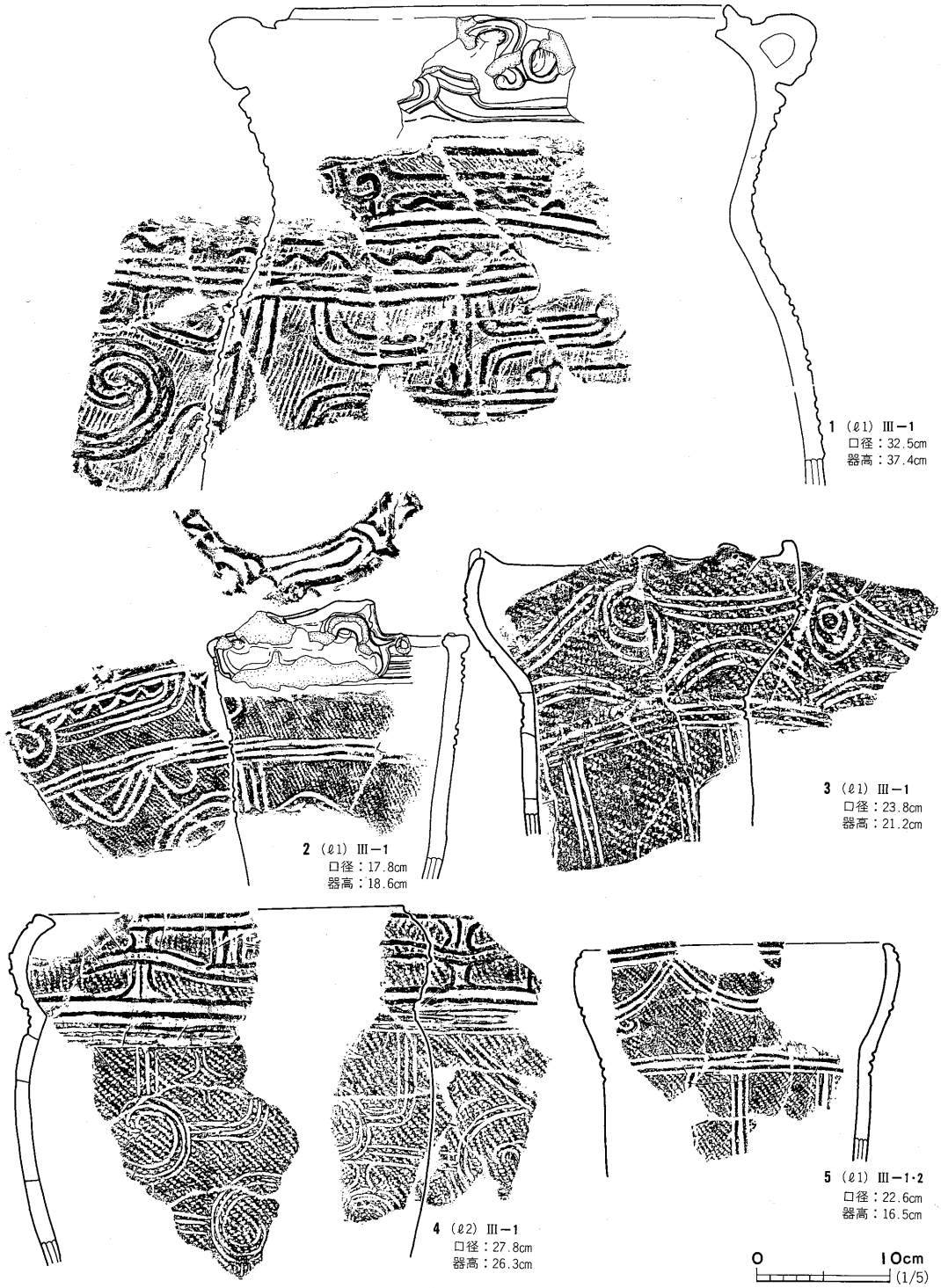
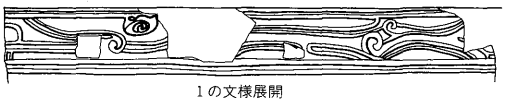
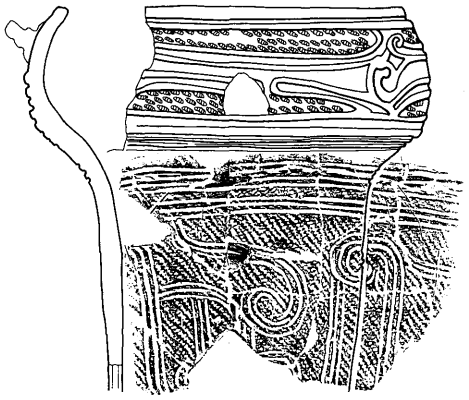


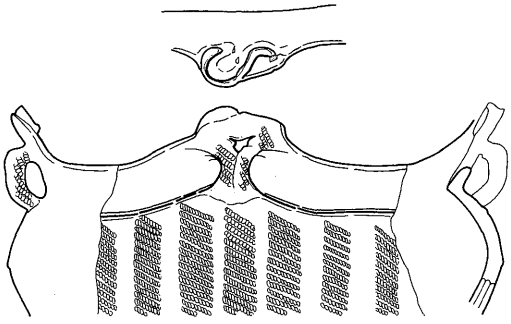
図11　1号住居跡出土遺物（2）



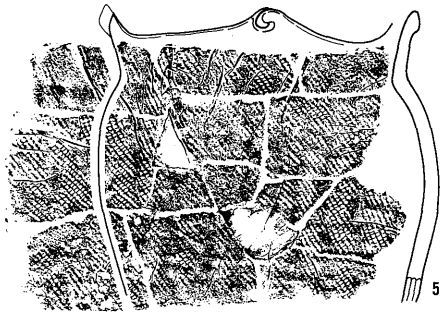
1の文様展開



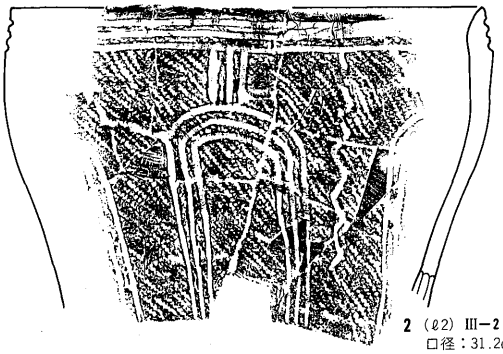
1 (ℓ1) III−2
口径：22.6cm
器高：25.5cm



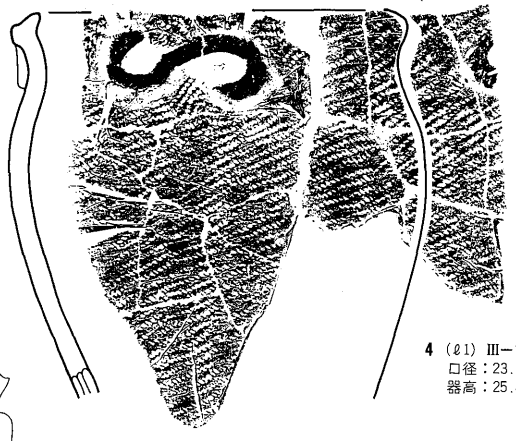
3 (ℓ1) II−3
口径：28.4cm
器高：13.3cm



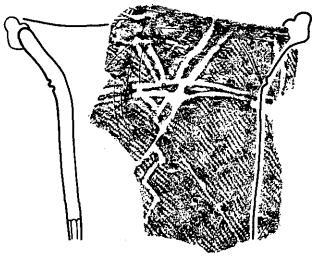
5 (ℓ3) II−7
口径：19.0cm
器高：19.2cm



2 (ℓ2) III−2
口径：31.2cm
器高：19.8cm



4 (ℓ1) III−1
口径：23.1cm
器高：25.4cm



6 (ℓ1) II−3
口径：19.2cm
器高：14.9cm

図12　1号住居跡出土遺物（3）

0　10cm
(1/5)

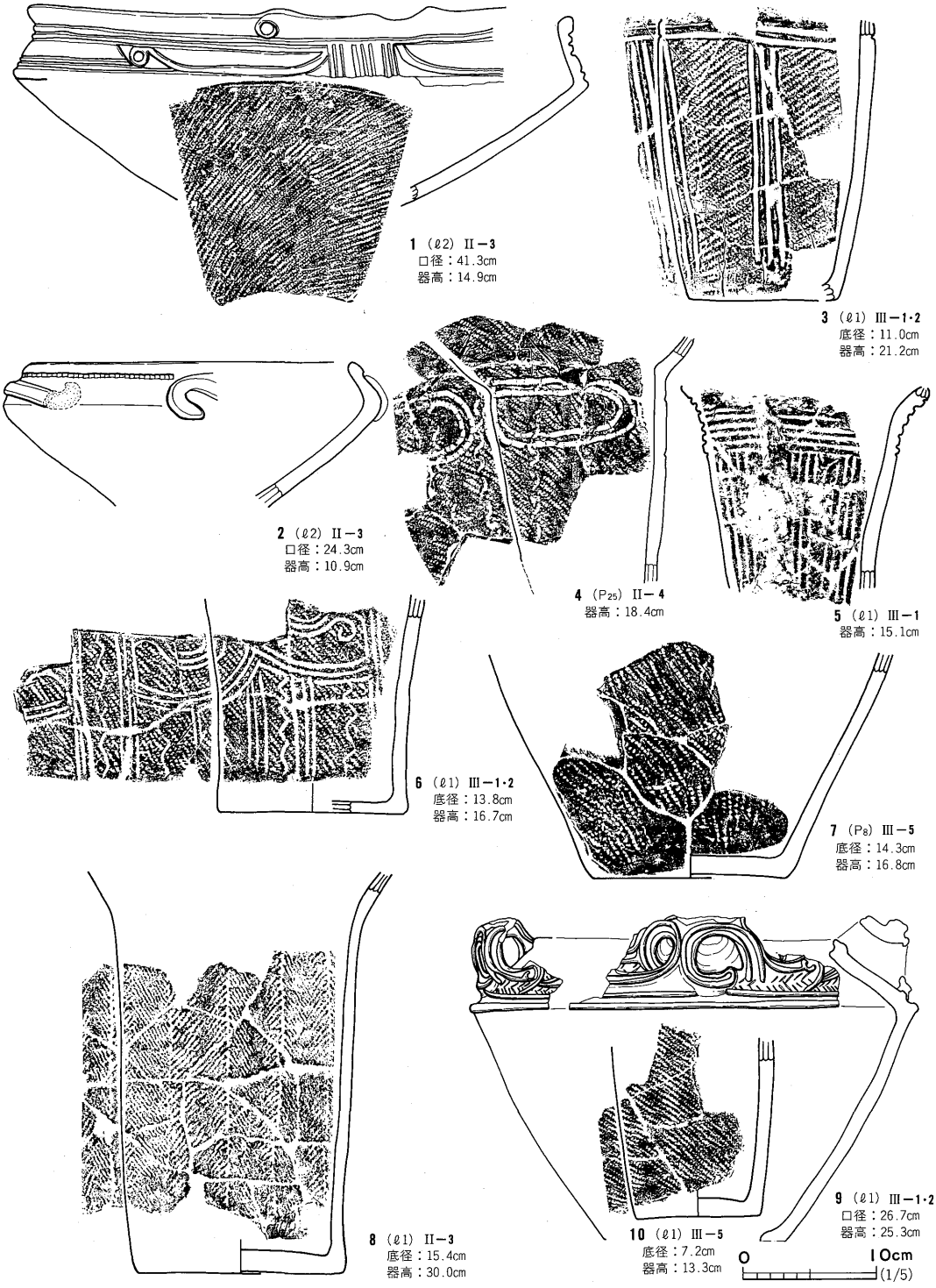


図13　1号住居跡出土遺物（4）

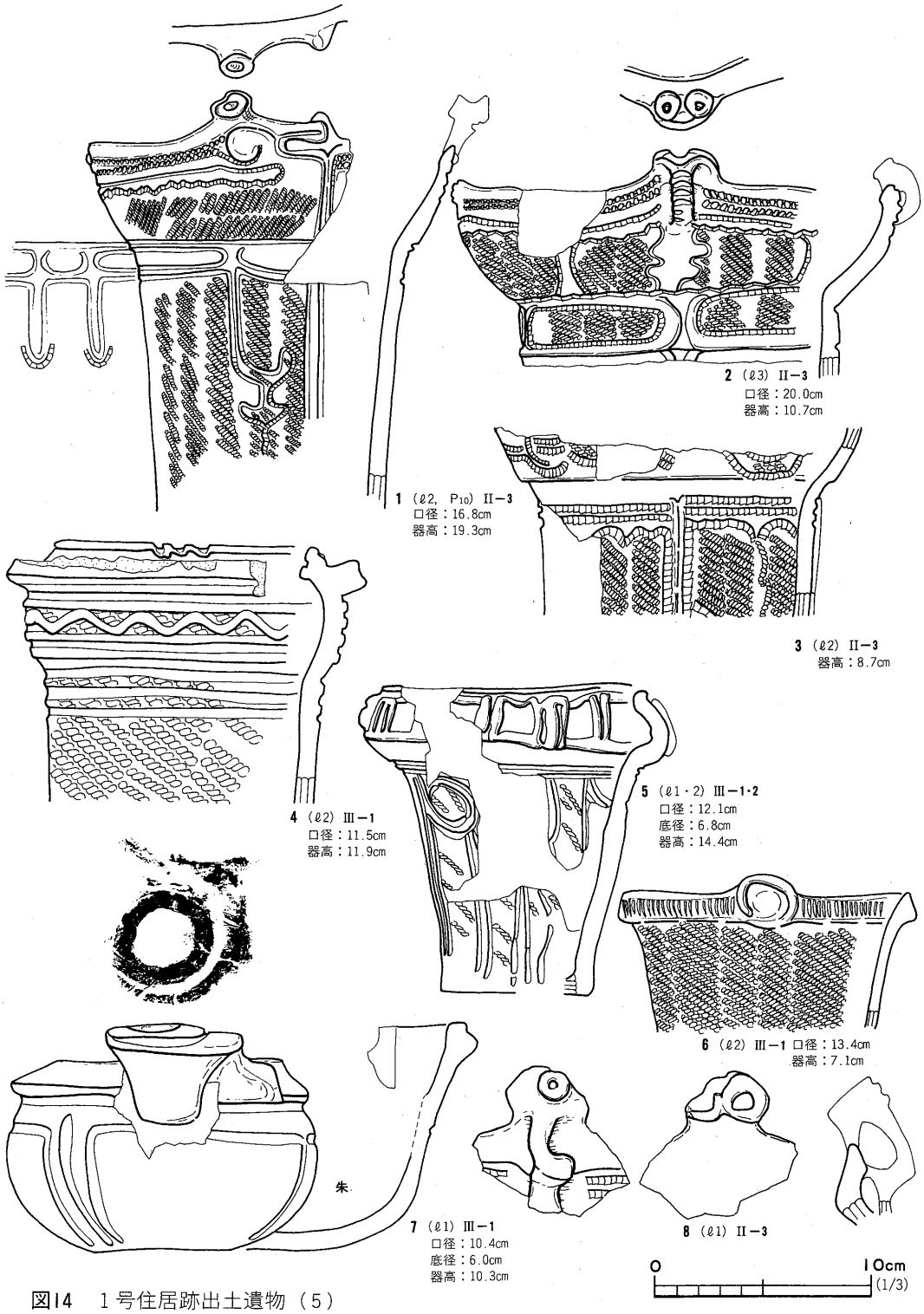


図14　1号住居跡出土遺物（5）

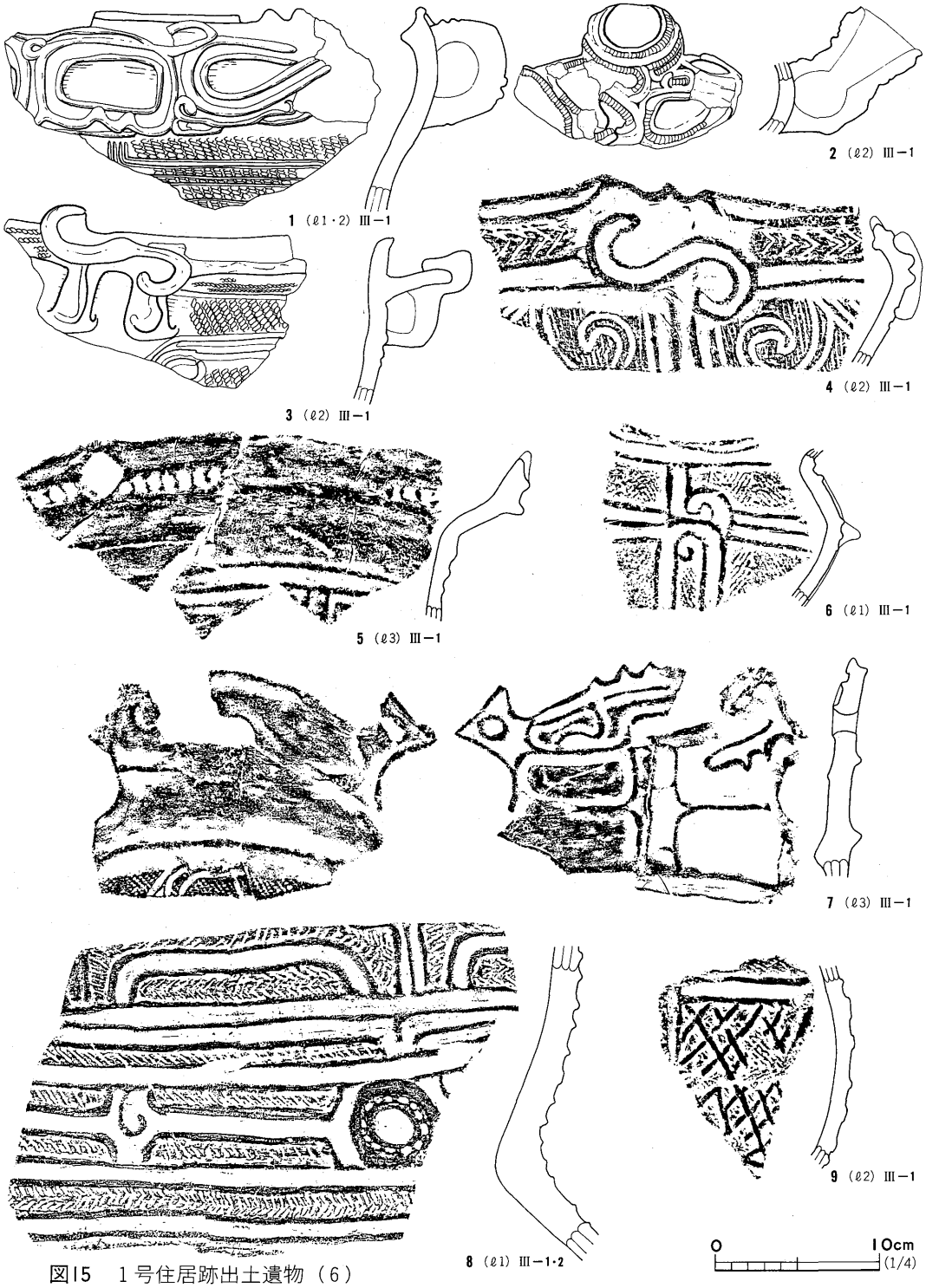


図15　1号住居跡出土遺物（6）

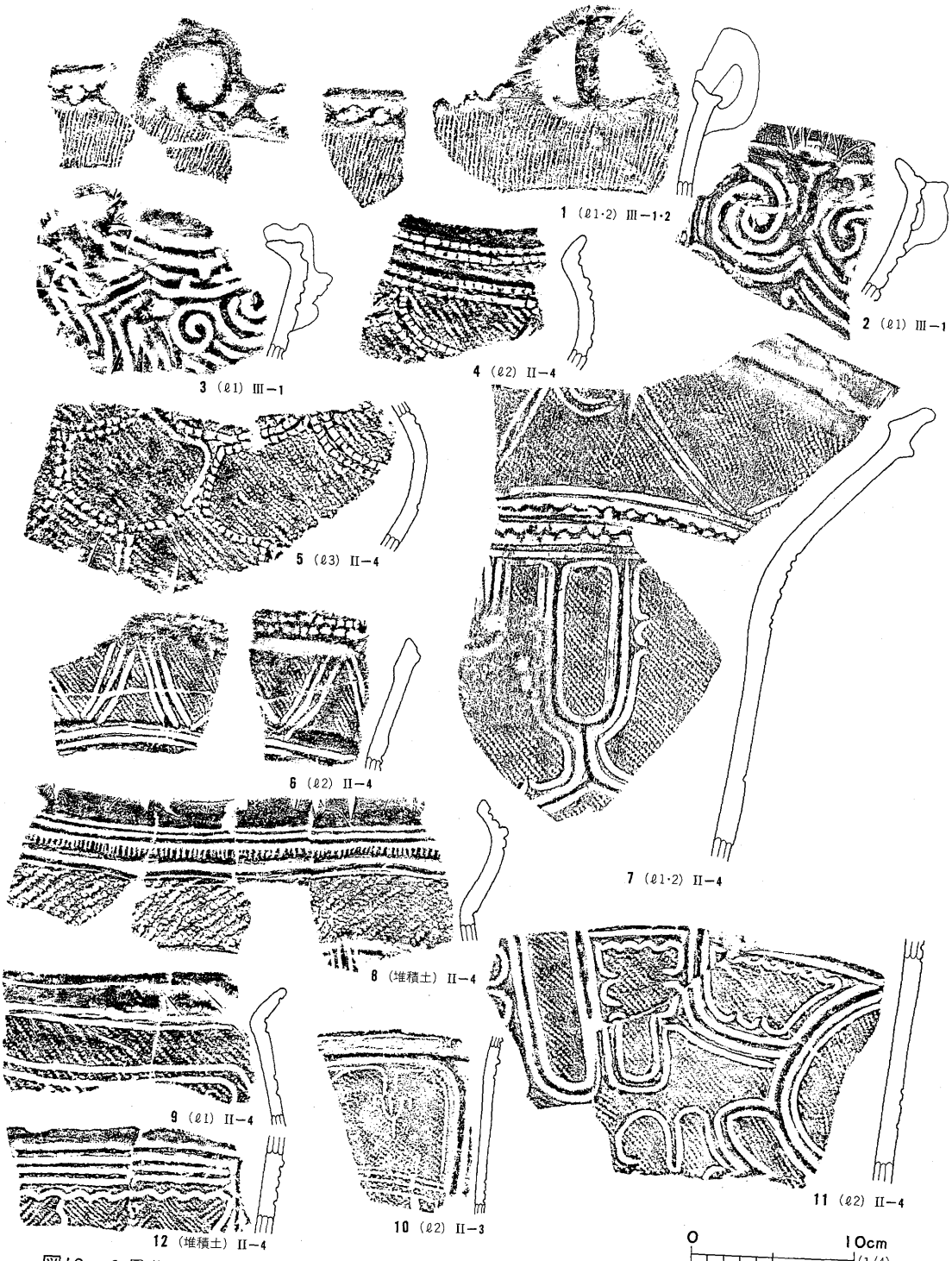
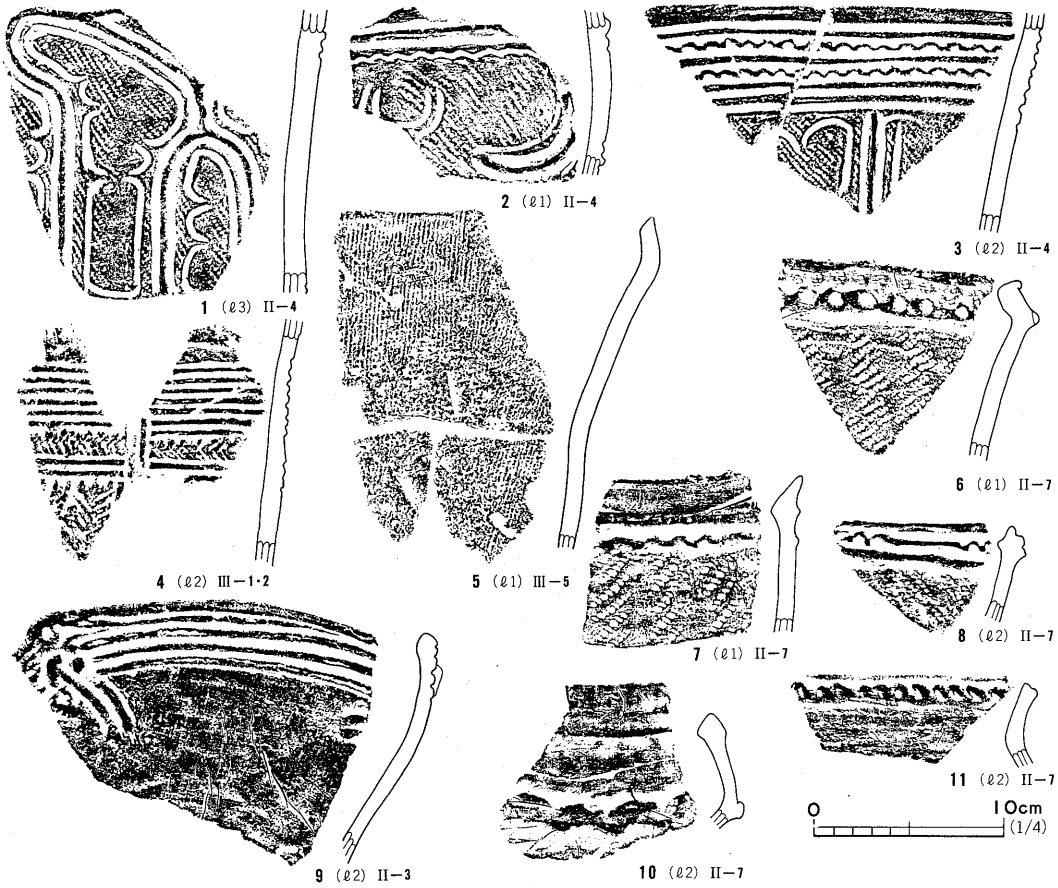


図16　1号住居跡出土遺物（7）



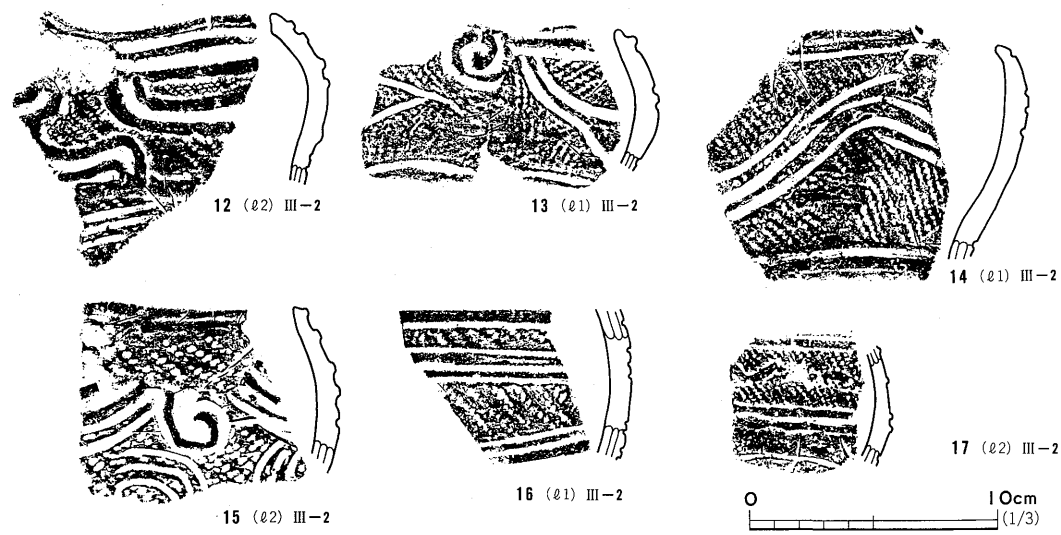


図17　1号住居跡出土遺物（8）

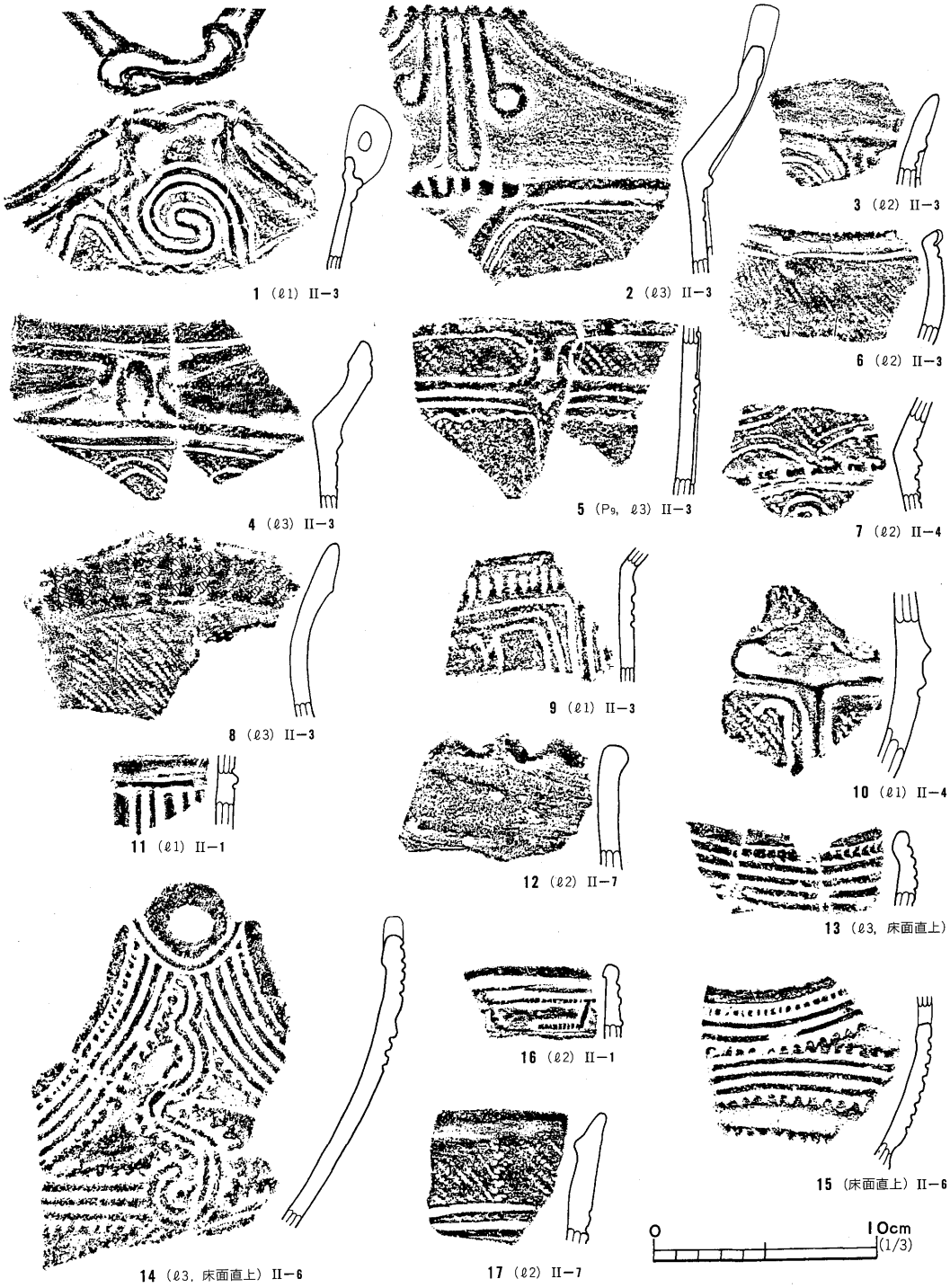
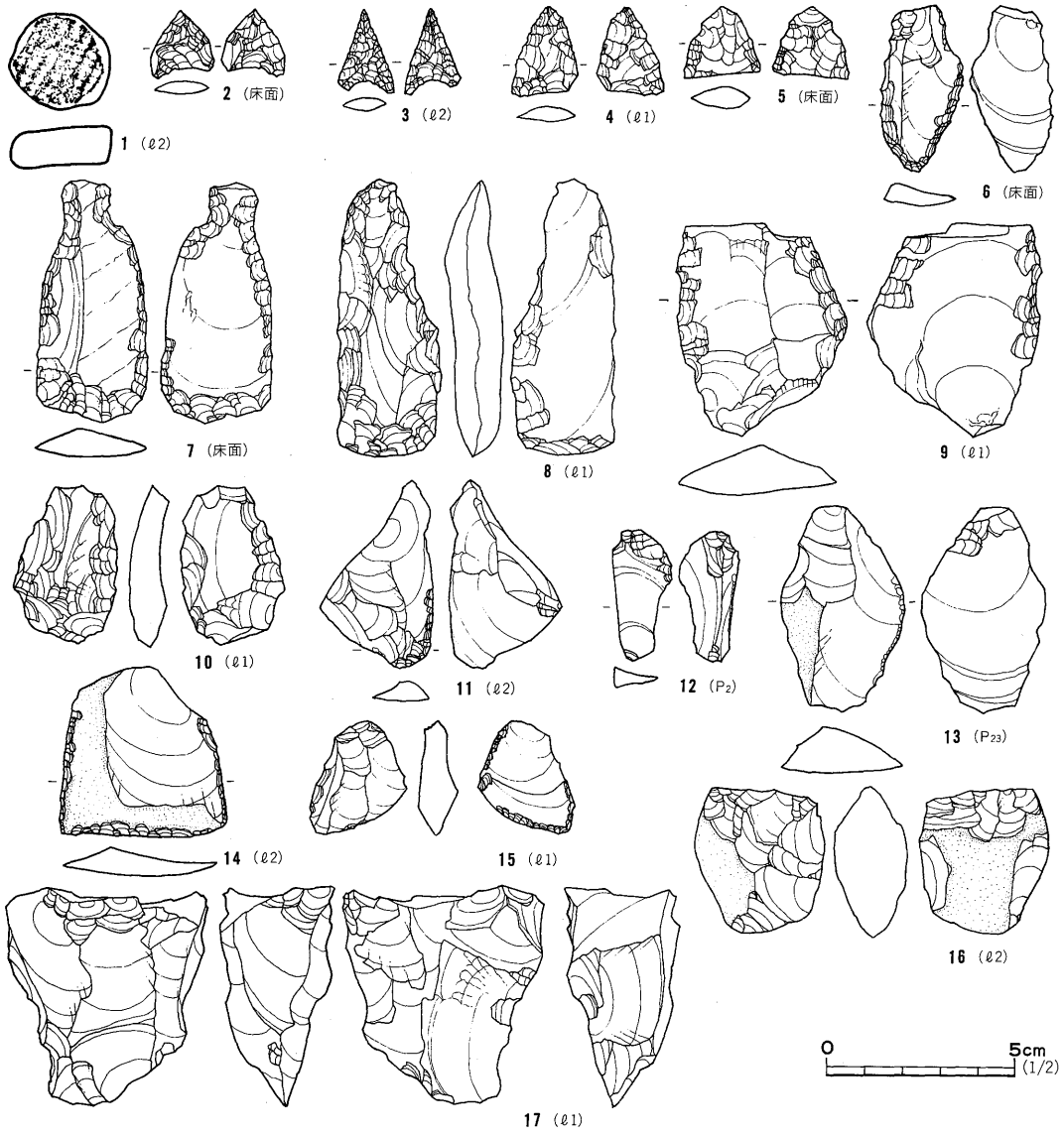


図18　1号住居跡出土遺物（9）



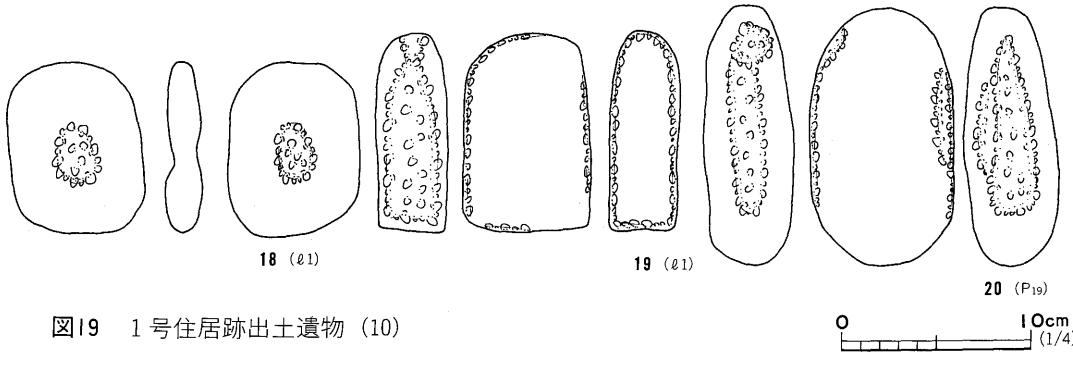


図19　1号住居跡出土遺物 (10)

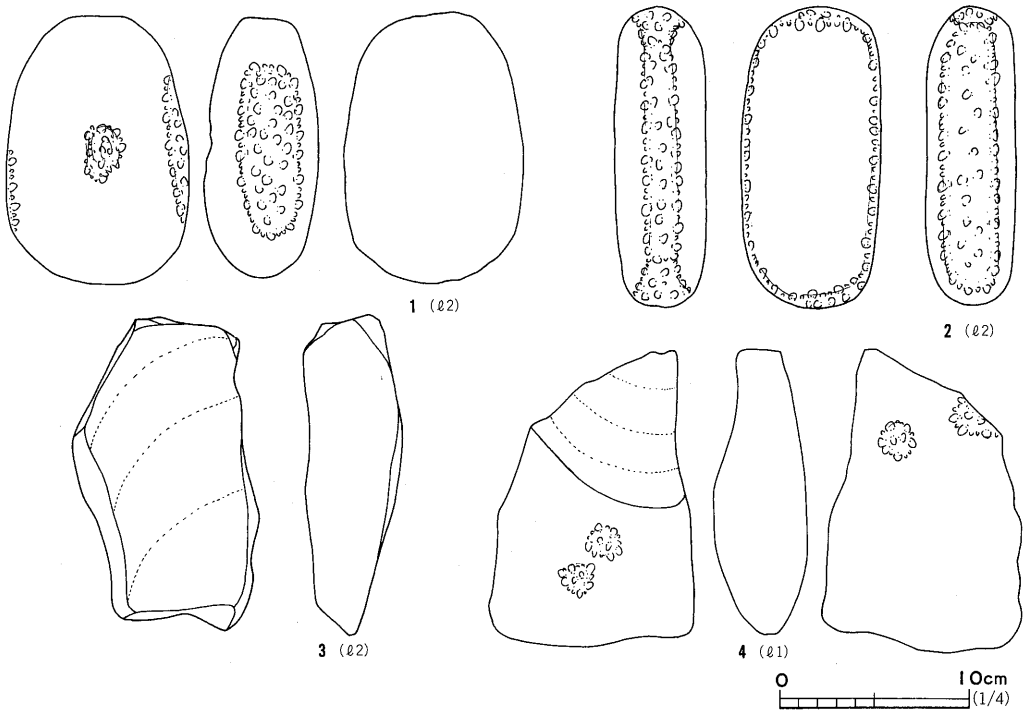


図20　1号住居跡出土遺物（11）

いずれも頸部に平行沈線を巡らせ，口縁部と胴部を区画している。図14－1～3は頸部に文様帯を配している。図10－3，図11－4，図12－1，図14－4・5の口縁部には，隆帯による渦巻文や平行線と縦位の区画文が，胴部には3条1組で垂下する沈線文が施されている。図11－3・5は口縁部と胴部に，3条1組の平行沈線や隆沈線で文様を描いている。図14－1～3は，有節沈線により文様を描いている。1・2は口唇部直下に交互刺突文を施し，2の口縁上には獣面状の突起が付けられている。同じ突起は同図8にも認められる。

図10－4，図11－1，図12－3～5は，頸部が「く」の字状に屈曲する深鉢である。図10－4，図11－1の口縁部には大型の装飾突起が付けられ，粘土紐によって平行線や弧状文などの幾何学的な文様を描き出している。図12－3は波頂部下位に4個の橋状把手をもち，波頂部内面にはS状の貼付文が見られる。同図4には4単位の横S状，同図5には波頂部から垂下する「し」の字状の貼付文を施している。

図11－2，図12－2，図14－6は，胴部から直線的に立ち上がる深鉢で，明瞭な頸部をもたない。図11－2は口縁部に大型の装飾突起が付けられ，以下には平行線や弧状の沈線文を施している。図12－2は口縁部を巡る平行線から垂下する，U字状の沈線文を施している。図14－6は肥厚する口縁部に円形の突起が付き，その間に縦位のスリットを施している。

図13－1・2・9は口縁部が「く」の字状に内折する鉢・浅鉢である。主要文様は，いずれも

口縁部に施されている。1は口縁部が3個一対の緩い波状を呈している。文様は波頂部下位に沈線を9条縦位に施し，その間に弧状の隆線を配している。この隆線の端部は環状をなし，その上下には三角文を施している。2は口唇部直下に有節沈線文を1条，隆帯による横S字状の貼付文を付けている。同図9は口縁部に中空の突起が付いたもので，突起間には矢羽状の沈線文を加えている。図14－7は注口土器である。胴部は球形を呈し，口縁部とのさかいに「く」の字状の段差をもっている。注口部はラッパ状に開き，器表面には赤色顔料の付着が認められる。これら出土土器の多くは縦位回転の単節縄文を地文としているが，図10－3，図11－1は撚糸文を，図13－6は結節の羽状縄文を地文としている。

図15～18に示した土器拓影も，上記の土器に器形・文様が類似するものが多い。図18－1・2は山形の波状口縁の土器である。1の波頂部には横S字状に隆帯が貼り付けられている。同図8の肥厚する口縁部には縦位の縄圧痕文が，同図13～15は沈線で文様図形を描くもので，沈線間には一部連続刺突文が加えられている。同図16はソーメン状の粘土紐が貼り付けられたもので，粘土紐上には爪形文を加えている。図19－1は土器片を利用した土製円盤である。

図19－2～5は無茎の石鏃である。同図6・7は縦長の石匙で，素材時の剝離面を大きく残している。同図8は石錐である。同図9～15は不定形石器で，剝片の周縁の一部に調整剝離を加え刃部としている。同図16・17はチョッピングトゥール状を呈する石核である。同図18～図20－2は磨石である。18は両面の中央部に浅い窪みをもっている。その他は，側縁部にアバタ状の敲打痕が認められる。図20－3・4は石皿である。

ま と め

本住居跡は南北が遺存値で7.5m，東西5.5mの長方形を呈する。南西部分は大きく撹乱を受け，柱穴は検出することができなかったが，主柱穴は東・西壁に沿って並ぶ6個によって構成されていたものと考えられる。炉は地床炉で，床面中央の長軸上に並んで3基検出された。本住居跡の所属時期は，検出状況および出土遺物から大木8a式期と考えられる。　　（山　岸）

2号住居跡（SI2）

遺　　構（図21，写真10）

ス38・39GのLⅣ上面において検出された竪穴住居跡である。SI1と重複し本跡が古い。遺存状態は悪く，住居跡の大半はSI1によって壊されている。このため検出できたのは住居跡北壁と東・西壁の一部である。

平面形はその遺存部の状態から，東西に長い長方形状を呈するものと考えられる。規模は東西が7.5m，南北は現況で4.9mである。検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北壁で最大15cm，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に

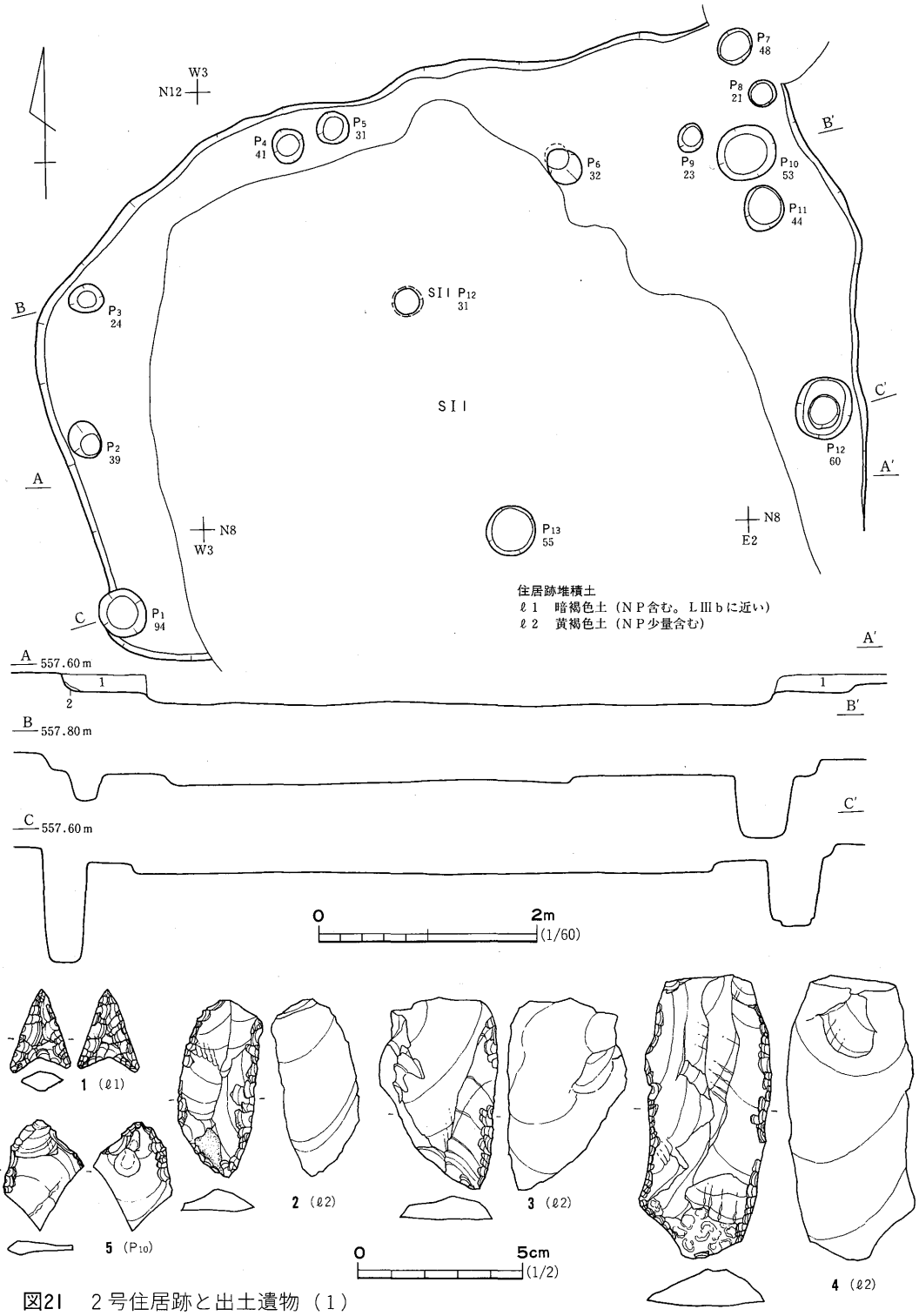


図21　2号住居跡と出土遺物（1）

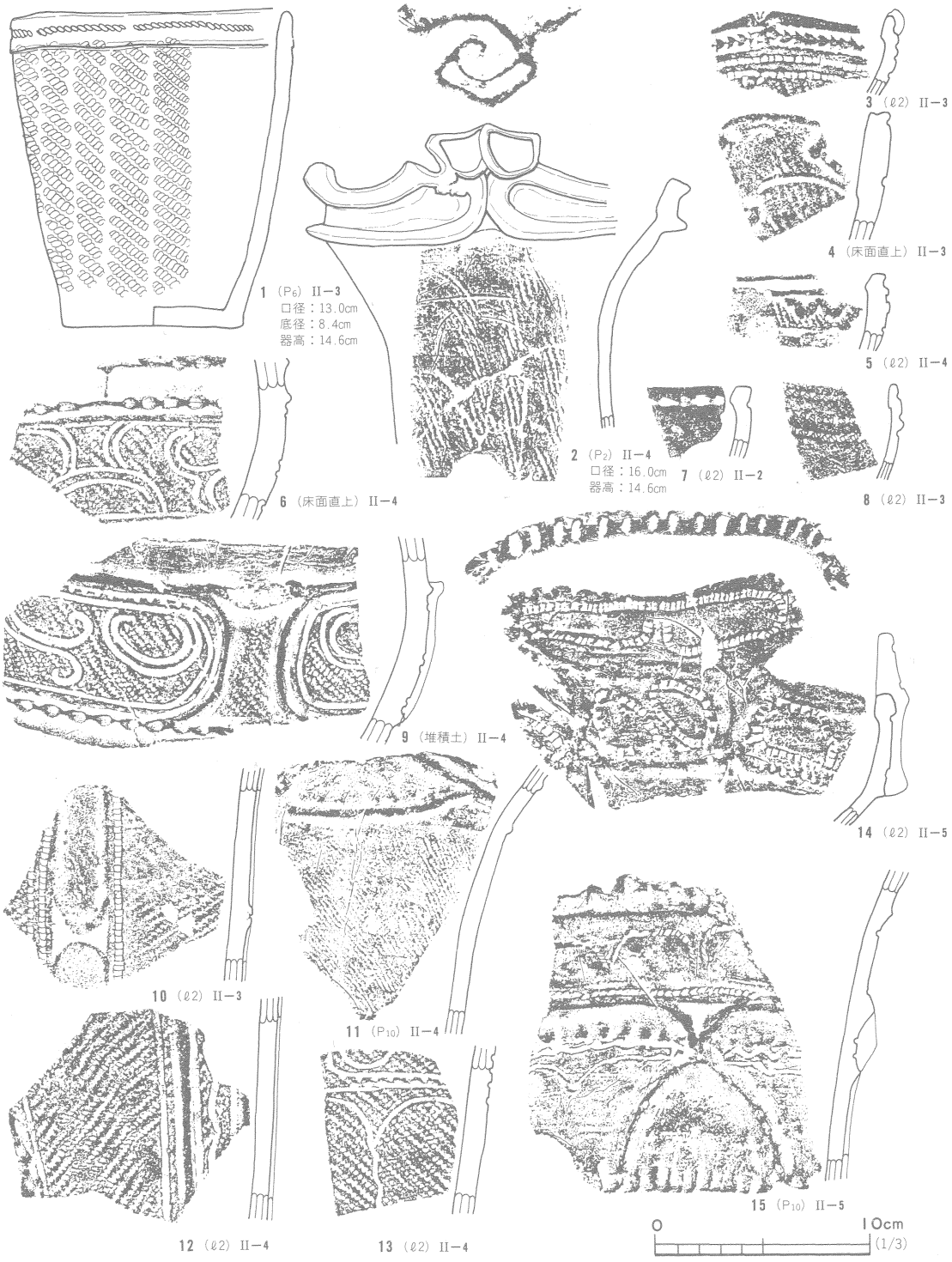


図22　２号住居跡出土遺跡（２）

緩やかに傾斜し，その比高差は最大15㎝である。住居跡内堆積土は，２層に区分した。堆積状態は，壁際に壁の崩落に起因すると考えられるℓ２が堆積していることから，自然堆積と判断した。ℓ１は基本土層のⅬⅢｂに近い。

住居施設としては，14個の小穴が認められた。小穴の規模は直径25～50㎝，深さは23～94㎝である。小穴内にはⅬⅢｂに近い暗褐色土が堆積していた。柱穴の配置を見ると，周壁際に作られたものが多い。この内Ｐ1・Ｐ12・Ｐ13は直線的に並び，深さも50㎝以上と他の小穴に比べて深く，小穴相互の間隔も3.5ｍ程と一定していることから，本跡の南側の主柱穴となるものと考えられる。北側の主柱穴はＰ2・Ｐ10が考えられる。これにＳＩ１床面で検出されたＳＩ1のＰ12が伴う可能性がある。炉はＳＩ１により壊されたものか検出することができなかった。

遺　　物（図21・22）

住居跡内からは，縄文土器の小破片が散在した状態で262点，石器が16点出土した。図22－1はP6，同図２はＰ2内から出土したものである。図22－1は円筒形状を呈する小型の深鉢である。口縁部が複合口縁状に肥厚し，この部分に縄圧痕を横位に１条施している。同図２は胴部上半が大きく括れ，口縁部がほぼ直立する小型の深鉢である。器体の約½が遺存している。口縁部には太い隆帯を貼り付け，長楕円形状の区画文を施している。口縁部には，対面する位置に突起が２個付けられるものと考えられる。

図22－3・10には有節沈線文が施され，同図3・13には斜め方向からの刺突による交互刺突文が施されている。同図6・9は同一個体で，胴部上端に隆線で楕円形の区画文を描き，区画内と胴下半部には沈線により弧状の文様を描いている。同図４は山形を呈する口縁部の破片である。同図14・15は断面が三角形状を呈する隆帯と連続刺突文によって，楕円形の区画文や半弧状の文様を描く。14は口縁部に突起を有し，15は粘土紐の接合部分に爪形文を加えている。

図21－1は凹基の石鏃，同図2・4は剥片の縁辺部に急角度の調整剥離を加えた掻器である。２の打面部は折り取られている。同図５は石鏃の未製品であろうか。

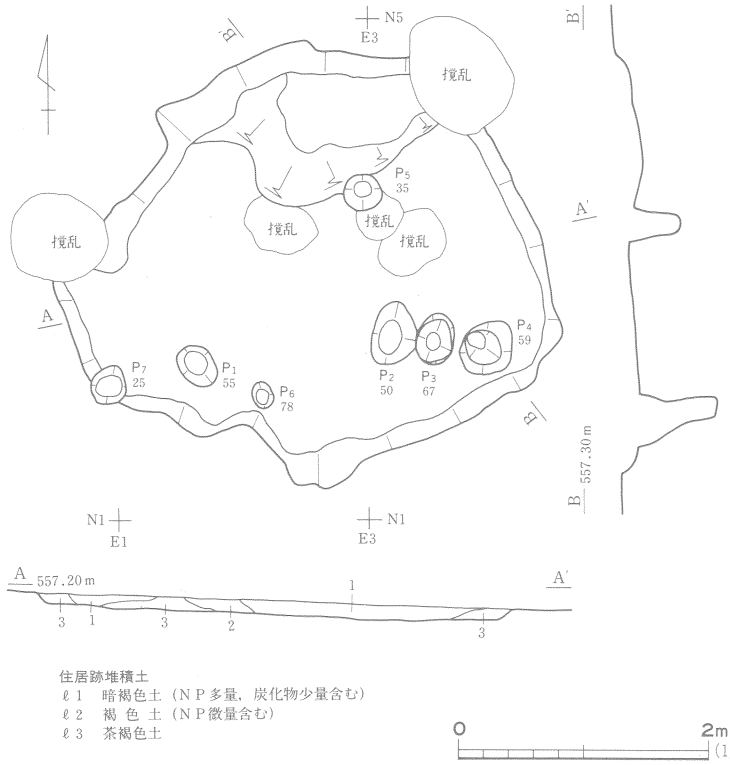
ま　と　め

本跡は長辺が7.5ｍ，短辺は現況で4.9ｍの長方形を呈する竪穴住居跡である。主柱穴はＳＩ１のＰ12が本跡に伴うとすれば６個で構成され，その配置は住居跡の平面形と同様長方形状を呈するものと考えられる。本跡の所属時期は，出土土器および遺構の重複関係から大木7b式期と考えている。（松　本）

３号住居跡（ＳＩ３）

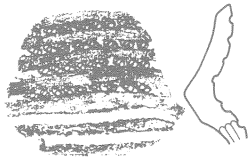
遺　　構（図23，写真11）

セ・ソ39Ｇにおいて検出した竪穴住居跡で，検出面はＳＩ８堆積土とⅬⅣ上面である。ＳＩ1・

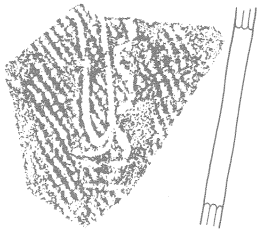


住居跡堆積土
ℓ1　暗褐色土（NP多量，炭化物少量含む）
ℓ2　褐　色　土（NP微量含む）
ℓ3　茶褐色土

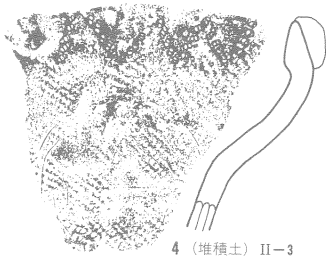
1（堆積土）II－5



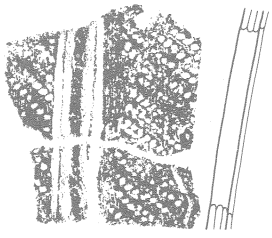
2（堆積土）II－3



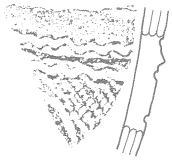
3（堆積土）II－3



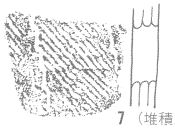
4（堆積土）II－3



5（堆積土）II－3

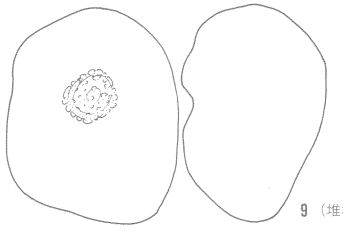


6（堆積土）II－3



7（堆積土）II－3

8（堆積土）II－3



9（堆積土）

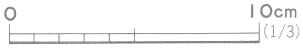


図23　3号住居跡と出土遺物

8と重複し，ＳＩ8より新しく，ＳＩ1より古い。小撹乱が数箇所見られるが遺存状態は良く，周壁のほぼすべてを確認することができた。平面形は隅丸方形を基調とするが，南西コーナー部は乱れている。規模は東西が3.7ｍ，南北は3.3ｍである。検出面からの深さは最大10㎝で，周壁は緩やかに立ち上がっている。床面は平坦であるが，北から南に向かって緩やかに傾斜している。北東コーナー部付近には，不整形を呈する浅い窪みが見られる。堆積土は2層に区分した。レンズ状の堆積が見られることから，自然堆積と判断している。

住居内からは，7個の小穴を検出した。P1～P4は直径30～40㎝，深さは45～80㎝である。P2～P4は相い接する位置に作られ，これらの柱穴のいずれかとP1が，本跡の南側の主柱穴を構成するものと考えている。住居跡北側にはP5があるが，深さ29㎝と前記の柱穴に比べ浅く，P5に対応する小穴が他に認められない。このことから本跡は，南側の2本の柱によって上屋を支えていたものと判断した。炉は住居内からは検出されなかった。

遺　　物（図23）

3号住居跡からは，縄文土器片120点と石器3点が出土している。縄文土器の多くは，住居跡堆積土中から小破片の状態で散在して出土した。図23－1は隆線で楕円形状の区画文を描くもので，区画内には平行沈線文を加えている。同図2・4は縄圧痕文が施された土器で，2は口縁直下に横位に数条，4は口縁部直下の波状隆帯の上に施文している。同図3・5～8は深鉢の胴部破片である。沈線を縦位を主体として施しているが，5・6には隆線が見られる。6は隆線に沿って，波状沈線文が施されている。9は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は炉を持たない，一辺が3.5ｍほどの隅丸方形状の小型の住居跡である。柱穴は住居跡南半部にしか認められないことから，2本柱構造の竪穴住居跡と判断した。本住居跡は出土した土器，他の住居跡との重複関係から大木7b式期の所産と考えている。　　（松　本）

4号住居跡（ＳＩ4）

遺　　構（図24，写真12）

調査区中央部チ・ツ37Ｇに位置する竪穴住居跡で，ＬＶ上面で検出した。北西部にはＳＩ38が隣接している。ＳＫ10と重複しており，本遺構が新しい。この周辺は後世の削平を受けており，ＬＩ直下にはＬＶが堆積している。また，住居跡東半部は倒木痕によって大きく破壊されている。このため本跡の遺存状態は極めて悪く，西壁部が3.0ｍ程検出されただけである。住居跡内堆積土は，褐色土の単一層である。この堆積土は，基本土層のいずれにも近似せず，周辺から流れ込んだものかどうか確認できない。このため，堆積状況については判断し得なかった。

本住居跡の平面形は，遺存部の形状から隅丸方形に近い形状を呈するものと考えている。規模

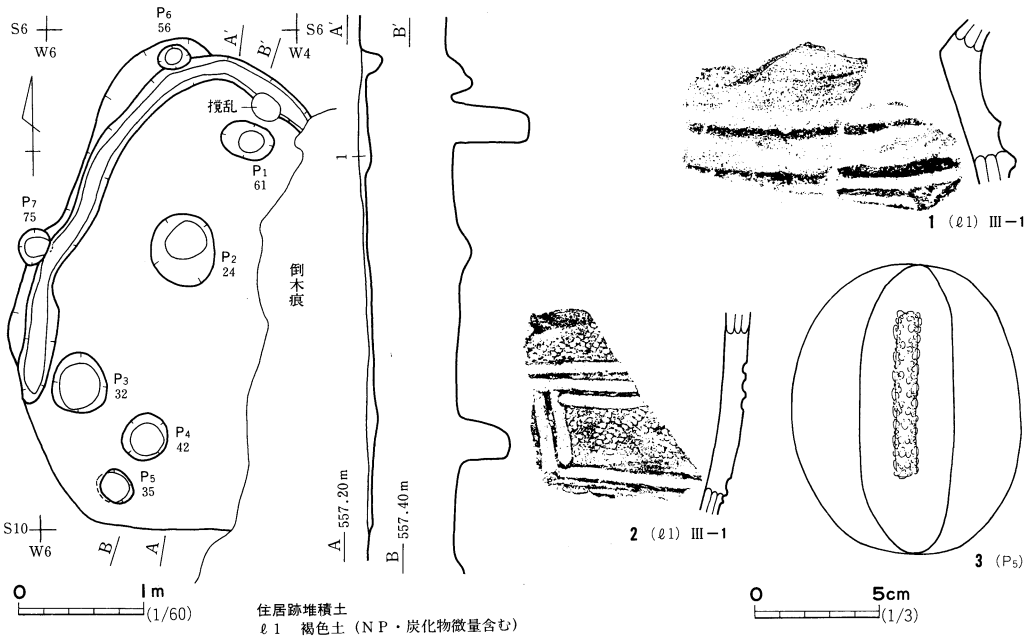


図24　4号住居跡と出土遺物

は南北3.8m，東西は遺存部で2.0mである。壁高は最大11cm，壁の立ち上がりは緩やかである。住居跡南西部から南部にかけては，床面がスロープ状に低くなり，壁の明確な立ち上がりは認められない。床面は平坦であるが，北西から南に向かって僅かに傾斜している。住居跡北東部から西部の壁際には，幅15～26cm，深さ4～10cmの壁溝が認められた。壁溝にはℓ1と同質の土が堆積している。

小穴は総数で7個検出された。P1・P3・P4・P5は直径25cm以上，床面からの深さは32～61cmと規模が大きい。この中のいずれかが，本跡の主柱穴を構成するものとかんがえられるが，遺存部分では全体の柱穴の配置が判断できないため，主柱穴を特定できない。P2については小穴内に黒褐色土が堆積し，褐色土が堆積しているP1・P3～P5とは堆積土に違いが認められることから，本住居跡には直接伴わないものと判断している。P6・P7は西壁から検出された壁柱穴で，直径が25cm以下でP1～P5より一回り小さいが，深さはP6が56cm，P7が75cmと深い。遺存部には炉は認められなかった。

遺　　物（図24）

4号住居跡からは，縄文土器片が44点，石器が4点出土している。縄文土器は堆積土中や小穴内から小破片の状態で出土している。図24−1・2は深鉢の胴部破片である。1は隆線，2は沈線で文様が描かれている。同図3は磨石で，側縁部に使用痕跡が見られる。

ま と め

本住居跡は遺存状態が極めて悪く，住居跡の規模や柱穴の配列等は不明である。本住居跡の所属時期については，重複関係がなく，また出土遺物が少ないため特定できないが，出土土器が大木8a式土器であることから，それに近い時期の所産と考えている。　（丹　治）

5号住居跡（ＳＩ５）

遺　　構（図25，写真13）

調査区中央部のソ41・42，タ41GのＬＶ上面で検出された竪穴住居跡である。ＳＩ７，ＳＫ２・21・23・24・31と重複し，ＳＫ２より本遺構が古く，他の遺構より新しい。平面形は円形を基調としているが，西壁は直線的である。規模は直径約5.4ｍを測る。住居内堆積土は3層に分層される。ℓ1は暗褐色土，ℓ2は黄色土の小ブロックを含む暗褐色土で，いずれも自然流入土である。ℓ3は壁の崩落による黄褐色土である。

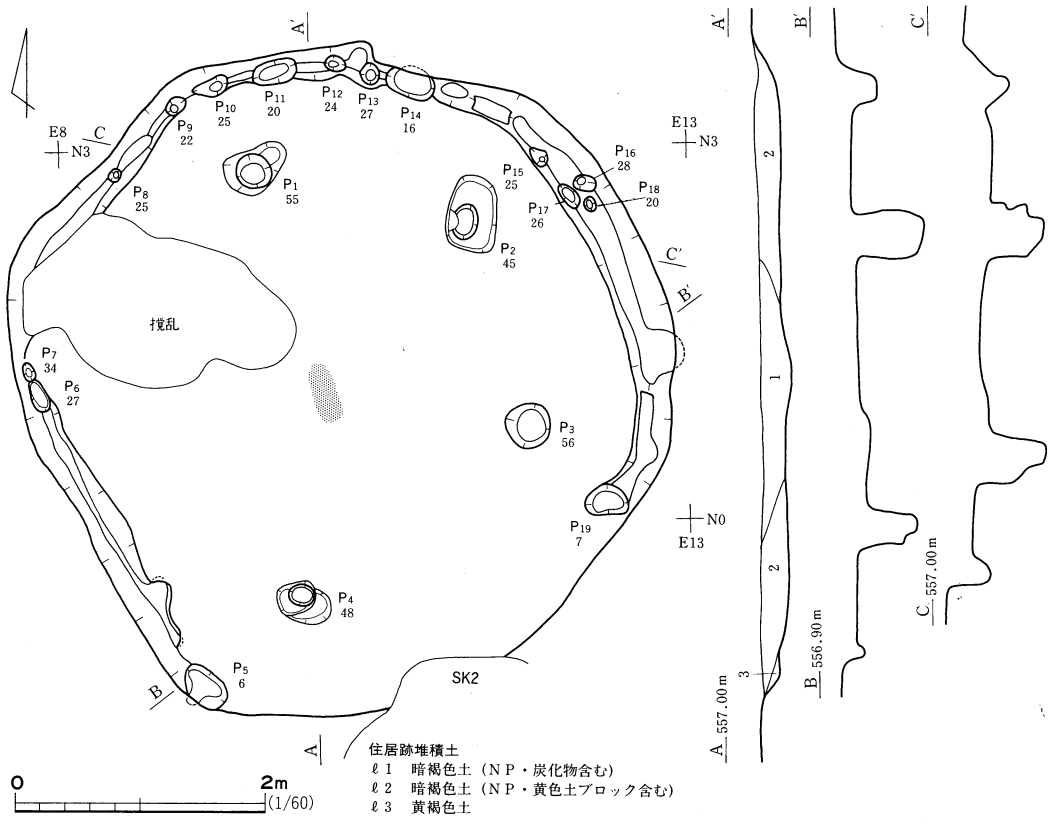
周壁はほぼ垂直に立ち上がっているが，住居跡南東部については傾斜面下位のためか，明確な立ち上がりは認められない。壁高は，西壁で最大24㎝，北壁で17㎝，東壁は21㎝である。床面はほぼ平坦であるが，北西から南東方向へ傾斜しており，最大比高差は21㎝である。壁溝は，住居跡南壁際を除いてほぼ全周している。幅は10～32㎝，床面からの深さは4～19㎝である。壁溝内は人為的に埋められた黄褐色土に挟まれるように，有機質を含む暗褐色土が柱痕状に堆積していた。この暗褐色土については，壁体の痕跡である可能性が高い。

小穴は総数19個検出された。P1～P4は壁から1ｍ程内側に作られたもので，炉を囲むように配置されている。規模は直径30㎝以上，床面からの深さも50㎝前後と深いことから，本遺構の主柱穴と考えられる。各柱穴の間隔は，P1とP2，P2とP3の間がそれぞれ約1.7ｍ，P3とP4の間は約2.3ｍである。西側の撹乱部分にも1個柱穴の存在が推測され，本住居跡の主柱穴は五角形状に配置されたものと考えている。P1・P4は底面に段差を有し，複数の柱穴が重複している可能性もあるが，堆積土からは新旧を判断できなかった。P5～P19は壁溝内に作られたもので，その位置から壁柱穴と考えている。最も深いものはP7の34㎝，最も浅いものはP5の6㎝であるが，深さ20～25㎝のものが大半を占める。径は，P5・P10・P14・P19のように長径が35㎝以上のものもあるが，10～30㎝のものがほとんどである。

炉は床面が焼けただけの地床炉で，遺構の中央部に作られている。炉の東側は撹乱によって壊され，確実に把握できた範囲は南北49㎝，東西18㎝である。炉の焼けは弱く，焼土化は焼土上面から3㎝下まで及んでいる。

遺　　物（図25）

5号住居跡からは，縄文土器破片が264点，石器が1点出土している。縄文土器は堆積土中か



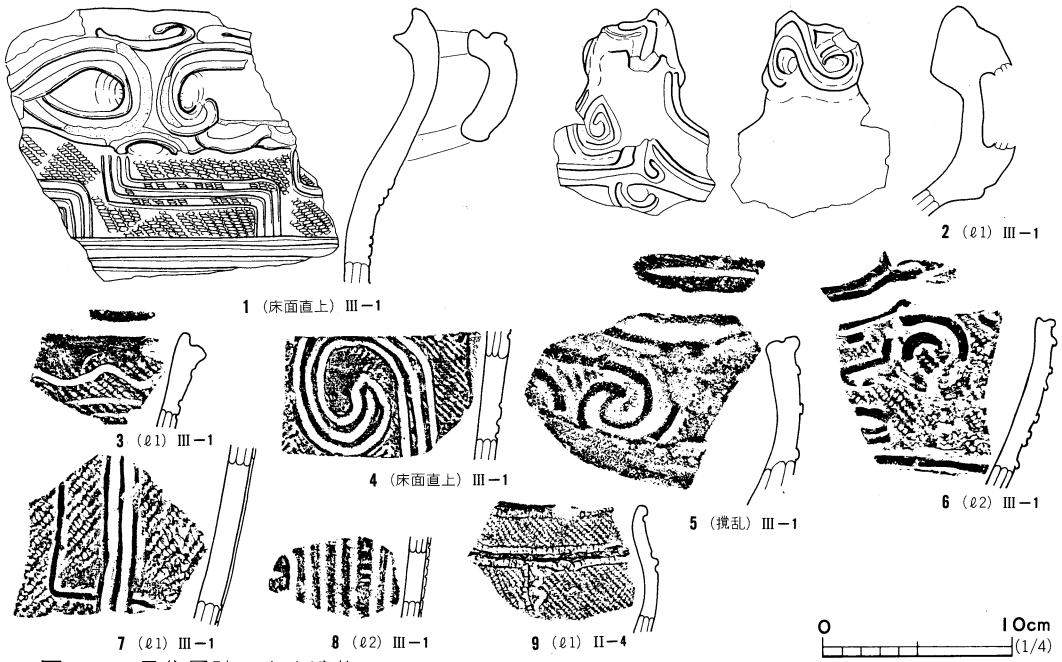


図25　５号住居跡と出土遺物

ら小破片の状態で出土したものがほとんどで，器形が推定できるまでに復元できたものはない。図25－1は大形の深鉢の口縁部の破片と思われる。頸部から緩く外反し，口縁部上端はわずかに内湾する。口縁上部には中空状の把手が付けられ，把手の下部には半截竹管を用いた平行沈線によりクランク状の文様を描いている。口縁部と胴部は，同種の平行沈線を横位に施し区画している。同図2は突起を有する深鉢の口縁部破片である。突起の内面は横「8」の字状を呈している。同図3・5・6・9は，深鉢の口縁部破片である。5・6は粘土紐によって文様が描かれ，隆線の端部は渦巻文を描き出している。9は有節沈線文が施されている。同図4・7・8は深鉢の胴部破片で，4は沈線，7は粘土紐で文様が描かれている。8は沈線を多用して文様を描くもので，地文に縄文は施されていない。

ま と め

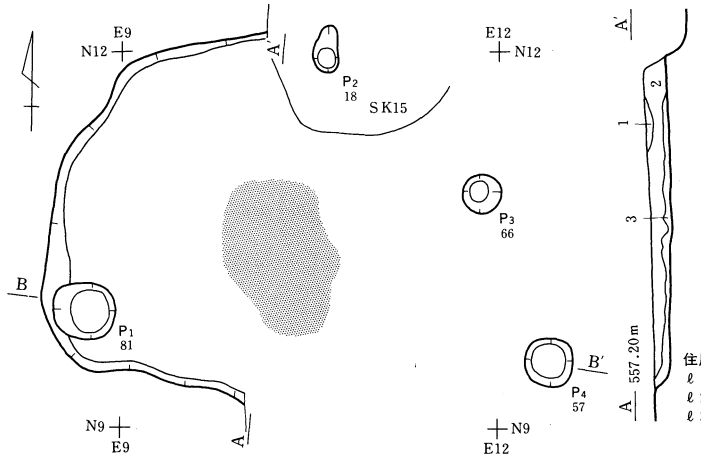
本住居跡は，遺存状態が比較的良好で，円形の平面形を呈している。検出された主柱穴は4本だが，基本的には五角形状に配されるものと考えている。所属時期は，出土土器の主体が大木8a式であることから，この時期と考えている。（丹　治）

6号住居跡（SI6）

遺　　構（図26，写真14）

ス41GのLⅣ上面で検出した竪穴住居跡で，SK15と重複し本跡が古い。遺存状態は悪く，住居跡の西半部のみが遺存していた。遺存部の平面形は方形を基調とするが，西壁は緩く弧を描いている。規模は南北が3.0m，東西は現況で1.6mである。壁高は最も遺存状態の良い西壁で17cm，壁の立ち上がりは比較的緩やかである。堆積土は3層に区分した。ℓ1はパミスを多量に含む暗褐色土で，LⅢbに近似する。堆積状態は，周辺部からの流れ込みの状態が観察できることから，自然堆積と判断した。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様西から東に向かって緩やかに傾斜し，その比高差は13cmである。

住居施設は，4個の小穴と1基の炉が検出された。P1は南西コーナー部に，P4は推定される住居跡南壁ライン際に作られている。P2・P3の配置には，特に規則制は認められない。これらの小穴は台形状に配置され，他の長方形状を呈する住居跡の柱穴のあり方とは異なっている。しかし，住居跡内には他に小穴は認められず，一方，この柱穴の配置でも住居跡の上屋を支えることは可能と考えられることから，P1～P4を本住居跡の主柱穴と判断した。小穴の直径は最も大きなP1が46cm，最も小さなP2は20cmである。深さはP2が床面から推定35cmと浅いが，他の小穴はそれぞれ57・66・81cmと柱穴として十分な深さを有している。小穴相互の間隔は，P1とP4の間が最も広く3.6mほどである。炉は地床炉で，住居跡の中央やや西に寄った位置に作られている。90×120cmの規模を有し，床面の焼土化は強い。



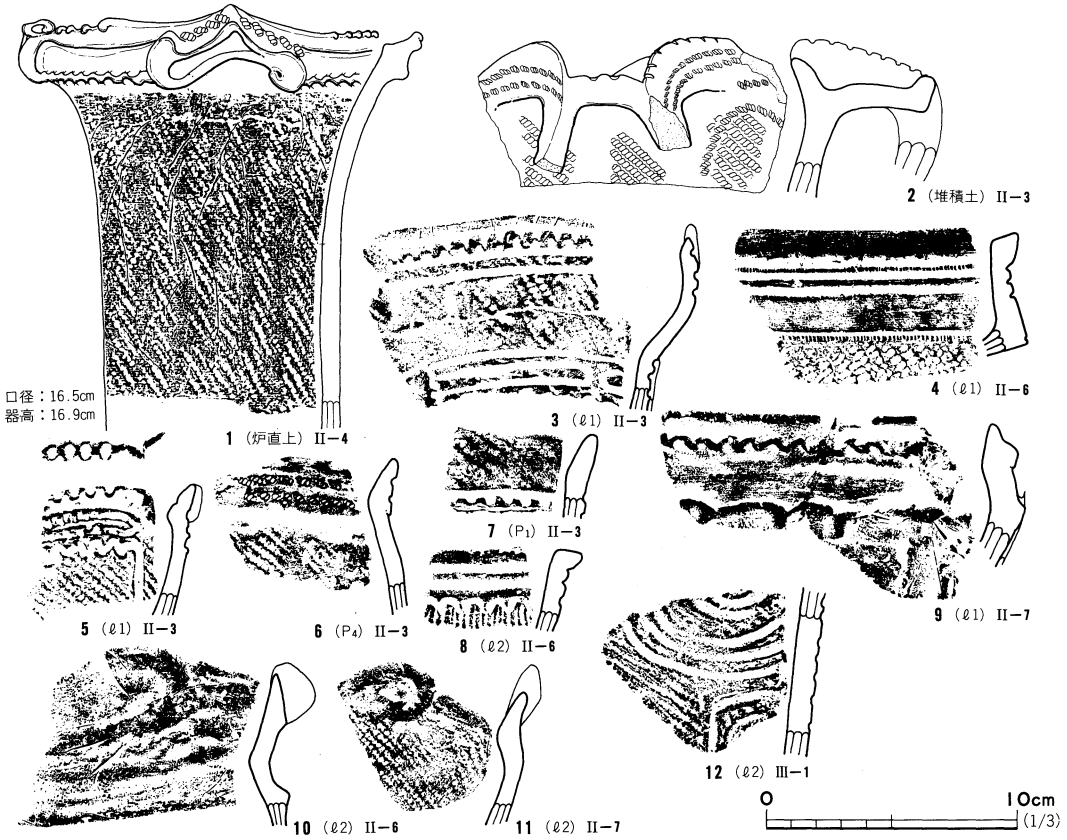


図26　６号住居跡と出土遺物

遺　　物（図26）

6号住居跡からは，縄文土器片が144点出土している。縄文土器の多くは，住居跡堆積土中から小破片の状態で散在して出土した。図26－1は炉の直上から，横倒しの状態で出土している。図26－1は胴部上半が外反し，口縁部が短く直立する深鉢である。口縁部には，4単位の突起が付き，突起間は緩い波状を呈している。波底部の口唇部上には，粘土紐を貼り付けている。口縁部の下端は，上下から交互に刺突を加えた小波状の隆帯で区画されている。

同図2・6は縄圧痕文が施されたもので，2は橋状把手の破片であろう。同図3・7は斜め方向からの突き刺しによる交互刺突文が施されたもので，3の胴部上端には沈線による楕円形の区画文が描かれている。同図5は有節沈線文，同図9は隆線により文様を描く。同図4は浅鉢であろうか。沈線間に竹管の凹面を用いた連続爪形文が加えられている。同図8は施文工具の竹管の末端部を意識的に押し付けた後，縦位に平行沈線を施している。同図10・11は粗製の深鉢で，口縁部に渦巻状の突起が見られる。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪く，規模を直接知ることはできなかった。しかし，柱穴の配置から東西の規模は4.4ｍ程で，東西が長い長方形状の住居跡であろうと推定している。本住居跡の所属時期については，出土土器中に若干大木8a式土器が見られるが，主体を占めるものが大木7b式土器であることから，この時期と考えている。　　（松　本）

7号住居跡（ＳＩ７）

遺　　構（図27，写真15）

調査区中央部，ソ41・42GのＬＶ上面で検出された竪穴住居跡である。本跡と重複している遺構はＳＩ5・9で，ＳＩ5より本遺構が古く，ＳＩ9より新しい。本住居跡西側は重複するＳＩ5によって破壊され，遺存状態は極めて悪い。ＳＩ5の床面から検出したＳＫ21・23・24・31についても，本跡の推定範囲内に取り込まれるものと考えられる。ＳＫ23・24・31の底面からは，ＳＩ7のものと推定される柱穴が検出されていることから，ＳＩ7が古い可能性を考えている。ＳＫ21との新旧関係は，直接の切り合いがないため不明である。

住居跡の平面形は，東壁と北壁の一部が遺存しているに過ぎないために明らかでないが，柱穴の配置から楕円形に近いものと推測している。規模は長径が推定3.5ｍ，短径は現況で最大2.4ｍである。遺存する周壁の立ち上がりは急で，壁高は最大19㎝である。床面は平坦であるが，西から東に向かって僅かに傾斜している。遺構内堆積土は2層に大別され，上層には明褐色土，下層にはＬⅣに近い黄褐色土が堆積している。

小穴は6個検出された。P3～P6は重複する土坑の底面，もしくはＳＩ5の床面を掘り下げ

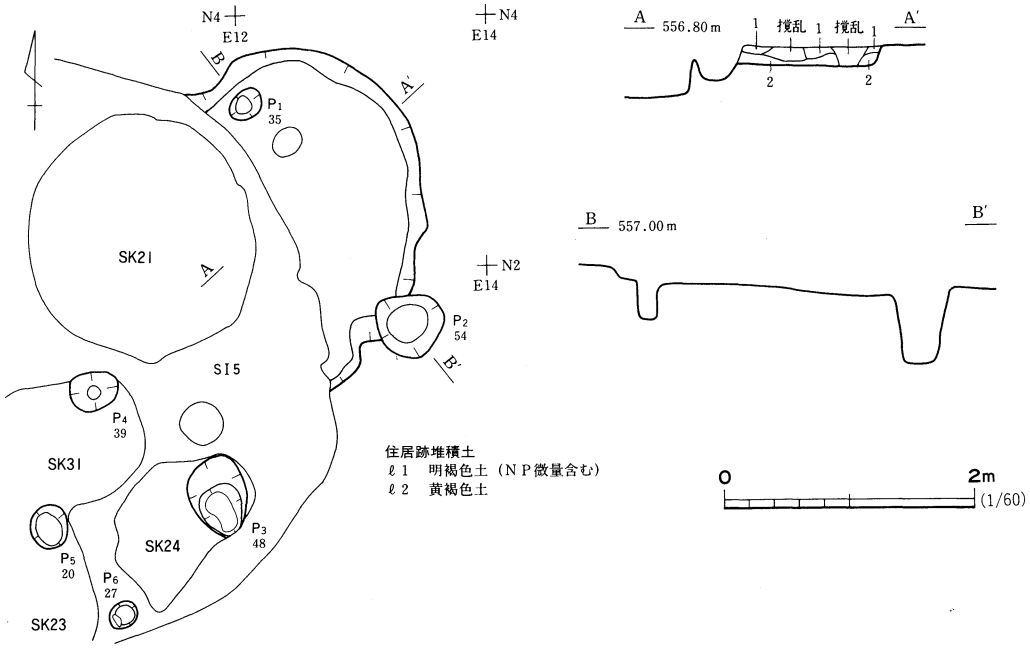


図27　7号住居跡

た面から検出された。これらの小穴については，本遺構の範囲が明確でないため必ずしもＳＩ７の柱穴とは断定できない。しかし，P3・P4に限っては，堆積土はP1・P2と同質の茶褐色土である。深さは検出面から30㎝以上と深く，P1とP2の間，P2とP3の間が等間隔であることから，P1～P4が本住居跡の主柱穴と判断している。炉は遺存部には認められなかった。

遺　　物

本住居跡から出土した遺物は，縄文土器の小破片が4点のみで，図示し得るようなものはない。

ま と め

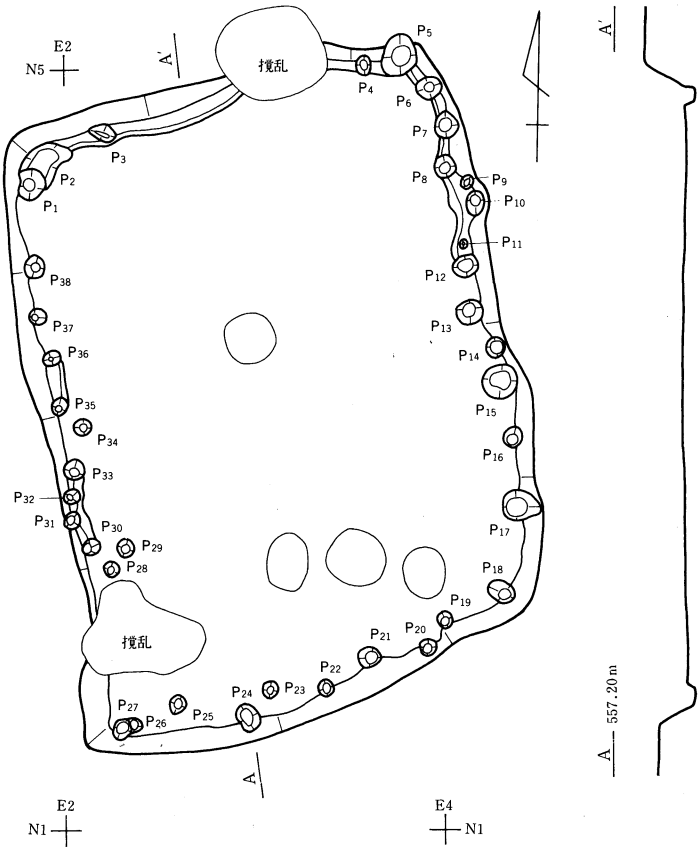
本住居跡は，重複によって大半が破壊されており，極めて遺存状態が悪い。このため，平面形や柱穴の構成など不明な点が多い。所属する時期については，重複する遺構から判断して大木8a式期と考えている。　　（丹　治）

8号住居跡（ＳＩ８）

遺　　構（図28，写真16）

セ・ソ39・40Ｇに位置し，ＳＩ３の床面精査の際，くすんだ黄褐色土の落ち込みとして検出した。ＳＩ３と重複し本住居跡が古い。遺存状態は良好で，すべての壁を検出できた。

平面形は東西2.3ｍ，南北3.2ｍの長方形を呈する。検出面からの深さはいずれも20㎝を測



SI8小穴一覧

P No.	深さ	P No.	深さ	P No.	深さ
1	27	14	10	27	16
2	13	15	11	28	14
3	9	16	5	29	4
4	11	17	13	30	8
5	8	18	6	31	10
6	11	19	3	32	16
7	12	20	3	33	14
8	9	21	8	34	14
9	4	22	6	35	14
10	10	23	8	36	8
11	6	24	5	37	10
12	11	25	14	38	16
13	20	26	9		

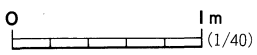


図28　8号住居跡

り，壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は地山であるＬＶまで掘り込まれ，ほぼ平坦で硬く締まっている。堆積土は黄褐色土の1層で，シミ状に暗褐色土を含んでいる。堆積状態については自然堆積か人為堆積か不明である。住居施設としては38個の小穴が検出された。小穴は径・深さともに10㎝前後のものが多く，いずれも壁際から検出されており，壁柱穴と考えられる。

遺　　物

堆積土中より数点の縄文土器細片が出土したが，図示できるものはなく，文様・類別についても不明である。

ま と め

本住居跡は，南北に長い長方形を呈する。柱穴はいずれも壁際から検出されており，これらの壁柱穴によって，上屋が支えられていたものと考えられる。炉は住居内からは検出されなかった。本跡の所属時期については，出土遺物が極めて少なく不明であるが，堆積土・住居跡の平面形等から，縄文時代前期から中期前葉のものと考えられる。　（山　岸）

9号住居跡（ＳＩ9）

遺　　構（図29，写真17）

調査区中央部，ソ～チ41・42Ｇで検出した大型の竪穴住居跡である。重複している遺構は，ＳＩ7，ＳＫ34・39・50で，新旧関係はＳＩ7，ＳＫ34・39より古く，ＳＫ50より新しい。検出面はＬＶ上面及び重複するＳＫ34・39の底面である。住居跡南東側は，傾斜面下位のために壁の立ち上がりが認められなかったが，東側については壁溝によりその範囲を知ることができた。

平面形は長方形を基調とするが，北東・北西コーナーは丸みをおび，また東壁と西壁の間隔は南側程広い。規模は現況で南北約6.9ｍ，東西は北壁で3.7ｍ，最大は5.7ｍである。周壁は北壁と西壁・東壁の北側が遺存し，床面からの高さは，最も遺存状態の良い西壁で最大18㎝である。周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は北から南に向かって緩やかに傾斜し，南東部の小穴付近では勾配がやや急になっている。床面の最大比高差は43㎝である。床面西側には159×293㎝，床面からの深さ15㎝ほどの楕円形状の窪みがあるが，この窪みは住居構築の際に埋め戻されている。遺構内にはＬⅢｂに類似する暗褐色土が堆積していた。

住居施設は，壁溝と柱穴・炉が検出された。壁溝は西側に1条（溝1），北側に2条（溝2・溝3），東側に1条（溝4）ある。それぞれの規模は，溝1が幅12～17㎝で深さ6～17㎝，溝2は幅12～30㎝で深さ12～17㎝，溝3は幅14～21㎝で深さ6～28㎝，溝4は幅14～39㎝で深さ5～29㎝である。

小穴は総数38個検出された。P1～P6・P9・P24は平面形と同様に長方形に配置されていることから本住居跡の主柱穴になるものと判断した。規模はいずれも直径45㎝以上，深さは50㎝以上である。南北に並ぶ柱穴の間隔は，P2とP5，P3とP24の間が1.3ｍと狭いが，他は2.0ｍ程である。東西に対応する柱穴の間隔は，約3.2ｍである。これらの小穴のうち，P1とP28，P4とP30，P24とP35，P5はP34・P38とそれぞれ重複している。新旧関係は，P1・P4・P5・P24が新しい。P7・P8・P10～P18・P20・P22・P31～P33・P36・P37は，位置的に壁柱穴と考えられる。直径は最大約70㎝のものもあるが，大半は20～35㎝である。深さは11～48㎝とばらついている。P13・P29と溝1，P25・P26と溝3は，切り合い関係から時間差を有することを確認している。

炉は，遺構中央のやや北寄りと遺構中央南側から検出された。いずれも地床炉で，1炉は62×132㎝の不整楕円形で，焼土化は弱い。炉の上からは図30－2に示した土器が，倒立の状態で出土している。2炉は90×151㎝の不整形で，焼土化は強く床面の下12㎝にまで及んでいる。

本住居跡については，壁溝と柱穴の遺存状況から北及び西に2回拡張・建て替えたものと考えられる。1本のみ，あるいは2本しか重複していない主柱穴は，同じ位置で建て替えられている可能性が高い。特に住居跡南側については，岩屑流の堆積物のため新たに柱穴を掘り込むことが

非常に困難であり，建て替え時に柱穴の移動を行っていないものと判断している。

構築当初の住居跡と確認された施設は，溝3・P27・P29のみで，推定される規模は南北7.5m，東西4.8mである。1回目の建て替えに伴う住居施設は，溝1・溝2・P25・P26である。推定される規模は，南北8.1m，東西5.4mで，P25・P26はその位置から壁柱穴と考えられる。最終の住居跡は，周壁・溝4によって範囲を捉えることができる。規模は南北が約9.0m，東西が約5.8mである。

壁柱穴については個々に時期分けすることはできなかった。炉については，検出された2基の炉の間に，特に時間差を求めるだけの材料はなく，住居跡の規模が大きいことから，住居跡構築当初から同じ場所で使用されていた可能性が高い。

遺　　物（図30・31）

9号住居跡からは，縄文土器片が304点，石器が4点出土している。縄文土器は堆積土中や小穴内から小破片の状態で出土したものがほとんどである。図30－2は北側の炉の直上から伏せた状態で出土した。図30－1はキャリパー状を呈する深鉢で，口縁部文様帯は横走する太い隆帯によって上下に区分される。口縁上部には中空の把手が何単位か付けられ，把手間を繋ぐように粘土紐を横位に施している。口縁下部は把手直下から粘土紐を数本垂下させて区画し，区画内にも連弧状・波状・三角形状に貼り付けている。連弧状を呈する粘土紐の端部は渦巻文を描く。頸部には粘土紐を4本横位に貼り付け，上から3本めの粘土紐は波状文を描いている。

同図2は口縁部が緩く内湾する浅鉢である。体部上端には，端部が渦巻状を呈する隆線を横位に連続させて4単位施している。渦巻文と渦巻文の中間部には把手が付いていた可能性があり，この部分に緩やかな隆起が見られる。同図3は頸部が外反し口縁部が短く直立する，小型の深鉢である。文様は口縁部直下と頸部に刺突文を横位に施し，胴部上端には斜め方向からの刺突による交互刺突文が見られる。

同図4～9・11・13は，波状または突起の付く深鉢の口縁部破片である。4・7は橋状の把手，6には中空の把手が付けられている。4・6・11の把手や突起の上面はS字状を呈している。同図5・8・9には有節沈線文が，同図12には交互刺突文が施されている。図30－14，図31－1～3は粗文の土器である。図31－3を除いて口唇部直下に隆帯を横位に施している。図30－14は隆帯の端部が渦巻状を呈し，図31－1・2は隆帯上に押捺が加えられている。同図4～9は深鉢の胴部破片である。5・8は隆線と沈線によって文様が描かれている。7は半截竹管を用いた平行沈線で文様を描いている。この沈線間は緩い凸面をなす。

図31－10は側縁部に使用痕跡がある磨石，同図11・12は尖頭器，同図13は欠損した磨製石斧である。12は基部に抉りが作り出されている。11は尖頭器の未製品であろう。周縁部から粗い剥離を加えている。

SK34
溝2
SI7
溝3
溝1
SK39
溝4
1炉
2炉
No.1
攪乱
E19
N2
S5
E14
S5
E19
A 556.60m
B 556.70m
C 556.70m
D 556.60m
柱痕
C′ 住居跡堆積土
ℓ1 暗褐色土（NP・黄色土ブロック含む）
0
2m
(1/60)

図29　9号住居跡

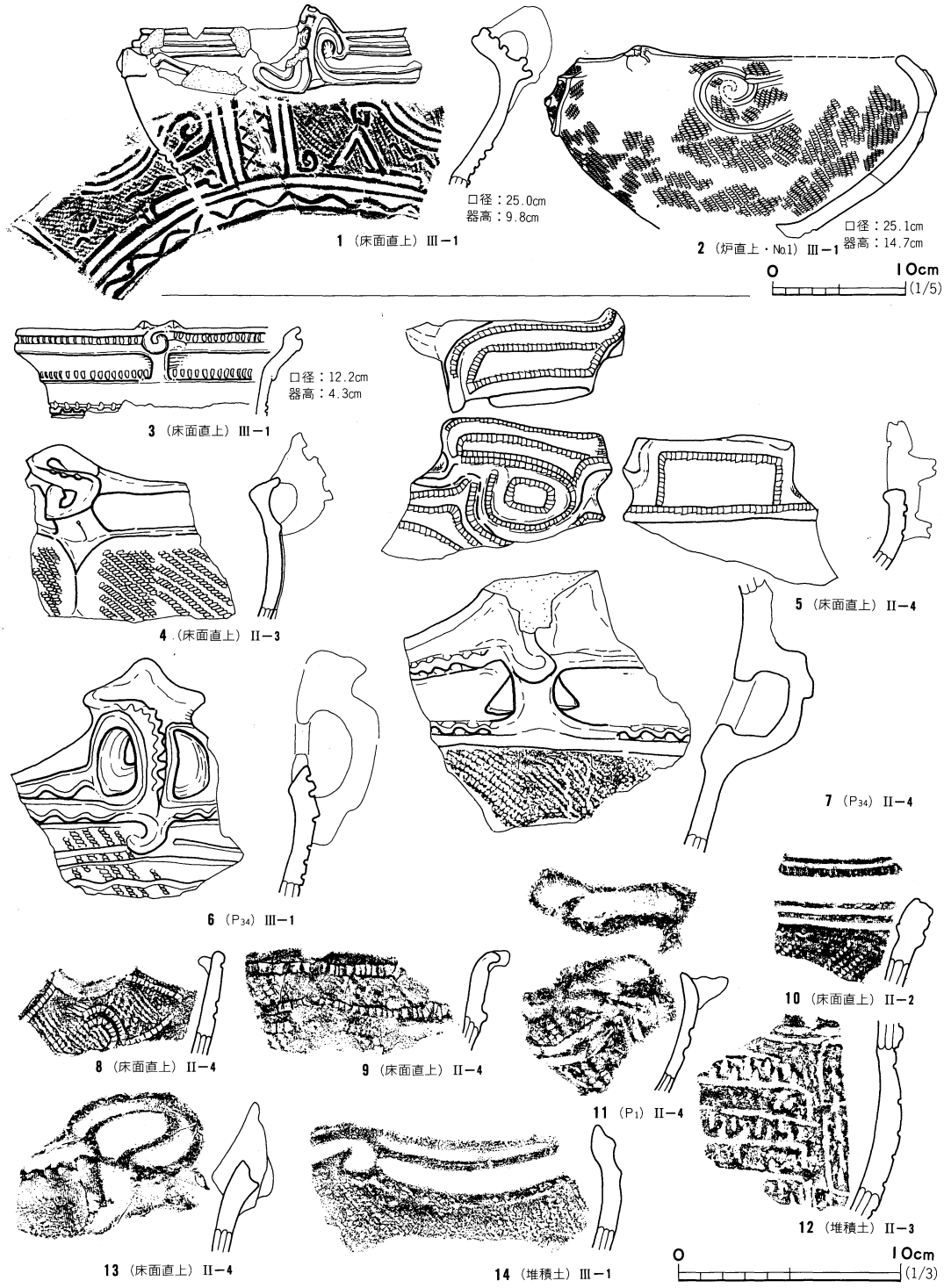


図30　9号住居跡出土遺物（1）

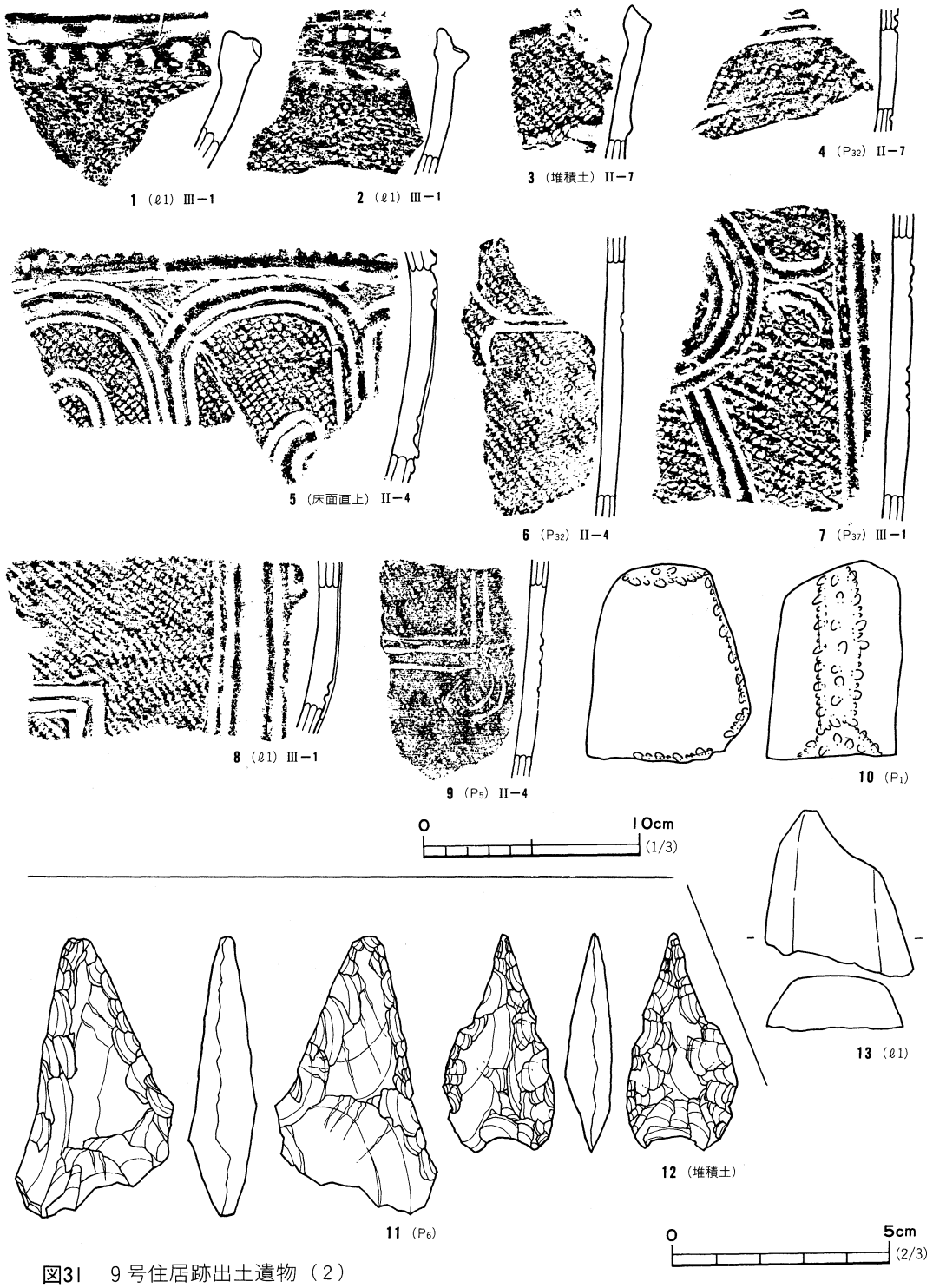


図31　9号住居跡出土遺物（2）

ま と め

本住居跡は長軸約9.0m，短軸5.8mを測る大型の住居跡である。柱穴・壁溝の遺存状態や重複関係から，主に北と西に拡張を伴う建て替えを2度行ったものと考えている。主柱穴は8本で構成され，住居跡の平面形と同じく長方形に配置されている。本住居跡の所属時期は，図30－2の完形土器及び堆積土中から出土した土器片が大木8a式を主体としているので，この時期と考えている。（丹　治）

10号住居跡（ＳＩ10）

遺　　構（図32，写真18）

ソ・タ45Gに位置し，ＬＶ上面においてＬⅡの落ち込みとして検出した。ＳＩ12・116と重複し，本住居跡が最も新しい。遺存状態は比較的良好で，南東壁の一部を除きすべて検出することができた。平面形は不整円形状を呈し，規模は東西7.0m，南北6.0mを測る。検出面からの深さはいずれも30cm前後で，壁は緩やかに立ち上がっている。床面は地山であるＬＶまで掘り込まれ，ほぼ平坦である。堆積土は暗褐色土を主体とする。ℓ2には壁の崩壊土を含み，流入状態を示して堆積していることから自然堆積と考えられる。

住居施設としては，11個の小穴を検出した。小穴は比較的壁の近くに位置するものが多いが規則的な配置は認められない。これらの小穴は径20～30cmで，内部にはシミ状に暗褐色土が混入した黄褐色土の堆積が認められた。床面からの深さはP2・P5・P8・P10が30cmに満たないのに対して，P1・P4・P6・P7・P9・P11は40cmの深さをもっており，この中のいずれかが主柱穴であったものと考えられる。

遺　　物（図33・34）

本住居跡からは縄文土器片151点，石器が3点出土している。図33－1・2は北西壁際から流入状態で出土した小型の深鉢である。1はキャリパー形の深鉢で，口縁部には大型の装飾突起を一個配している。頸部を巡る4条の平行沈線によって，口縁部と胴部の文様帯は区画され，口縁部には隆沈線により端部が渦巻状をなす連弧文を，胴部には垂下する渦巻文や平行沈線文が施されている。2は長胴をなし，頸部が「く」の字状に外反する小型の深鉢である。口縁部には粘土紐による鋸歯状の文様を，胴部には沈線文による方形の区画文を施している。

同図3～10は，粘土紐や隆沈線によって文様が描き出されるものである。5～7の口縁部には大柄な装飾突起が付けられ，頸部には波状文が認められる。9は浅鉢であろうか。口縁部に連弧状に隆線を貼り付けている。図34－2は長軸の端部に打ち欠きをもつ礫，同図3は刃部を欠損する磨製石斧である。同図4は縁辺部に敲打痕をもつ磨石である。

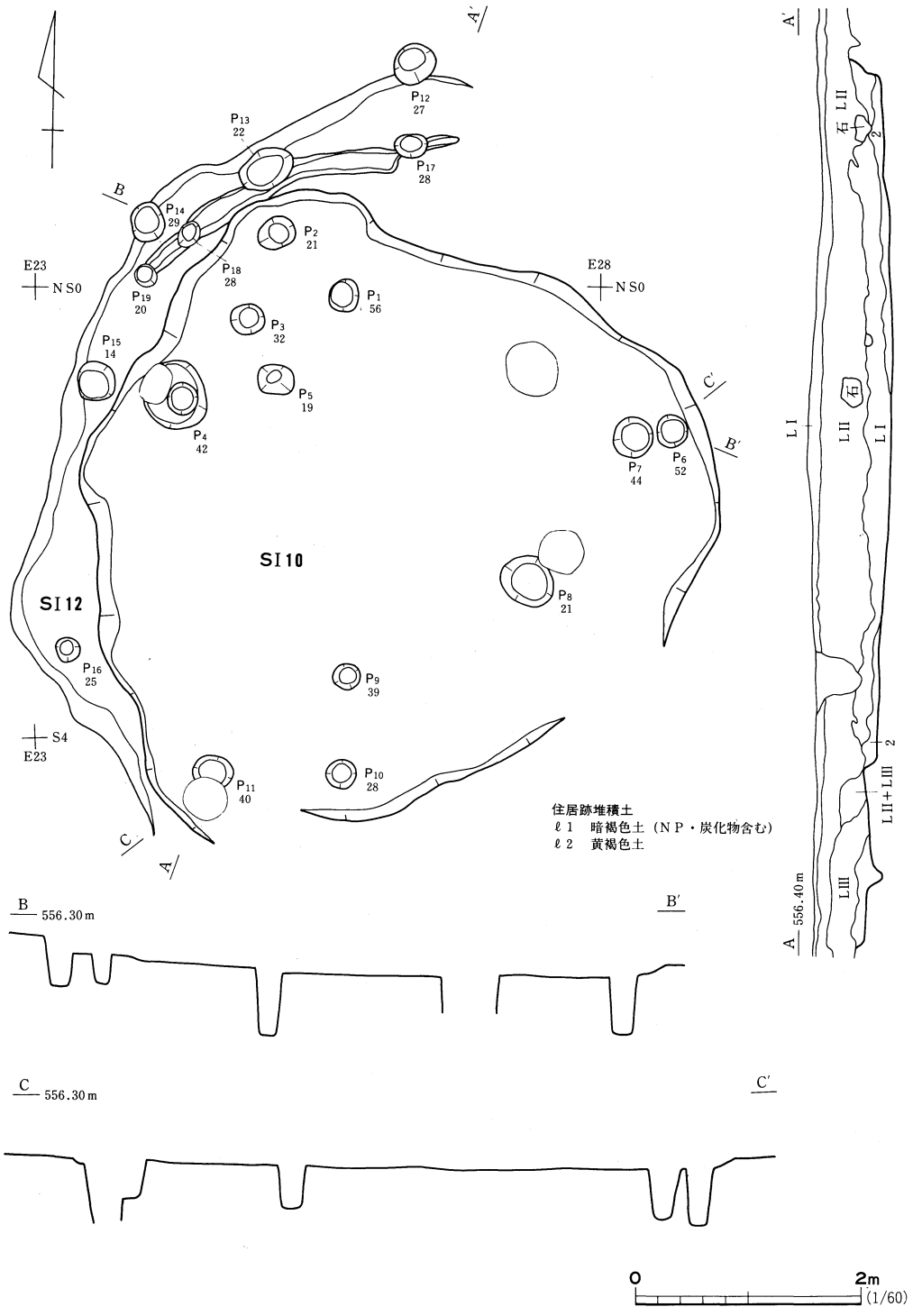


図32　10・12号住居跡

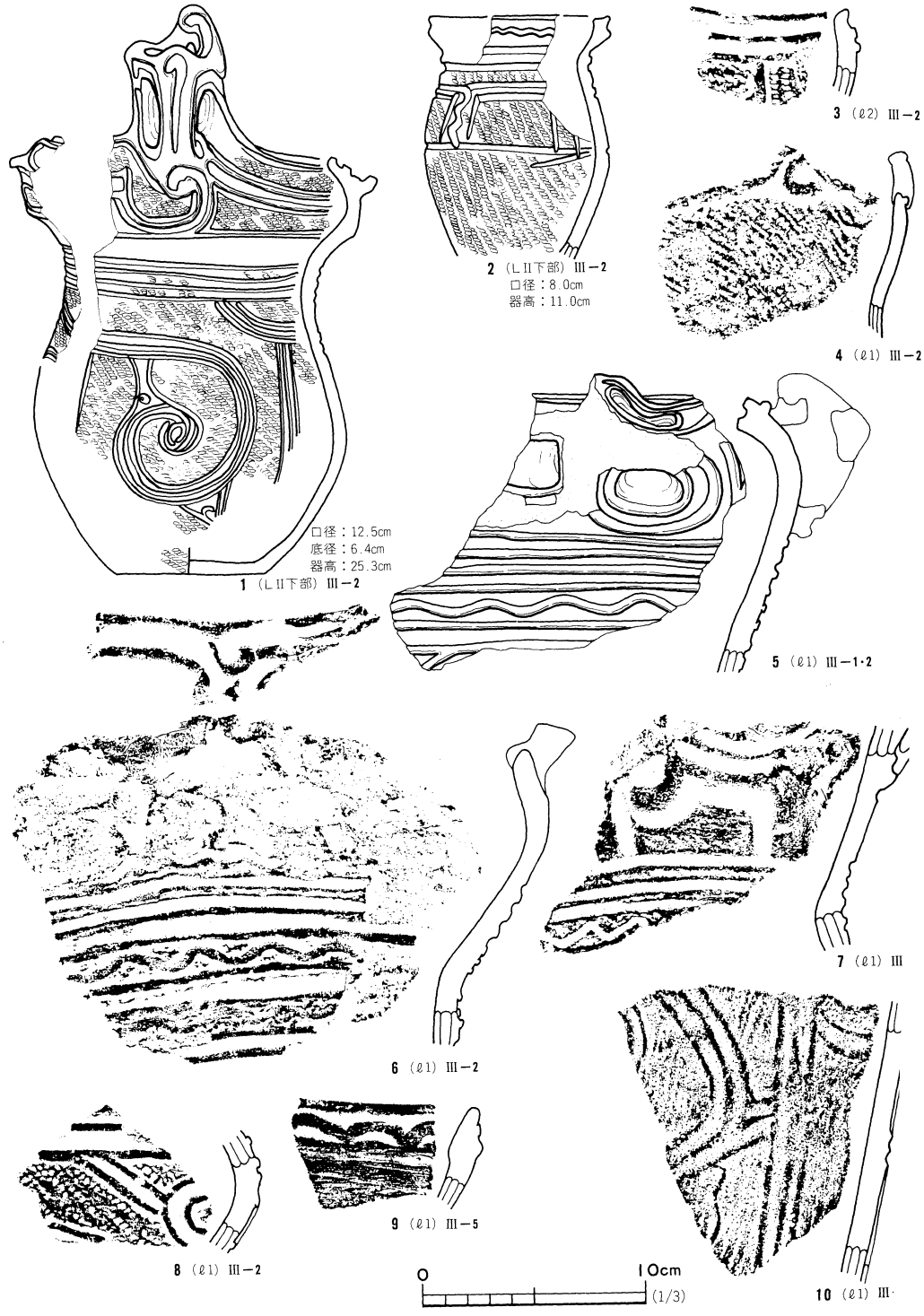


図33　10号住居跡出土遺物（1）

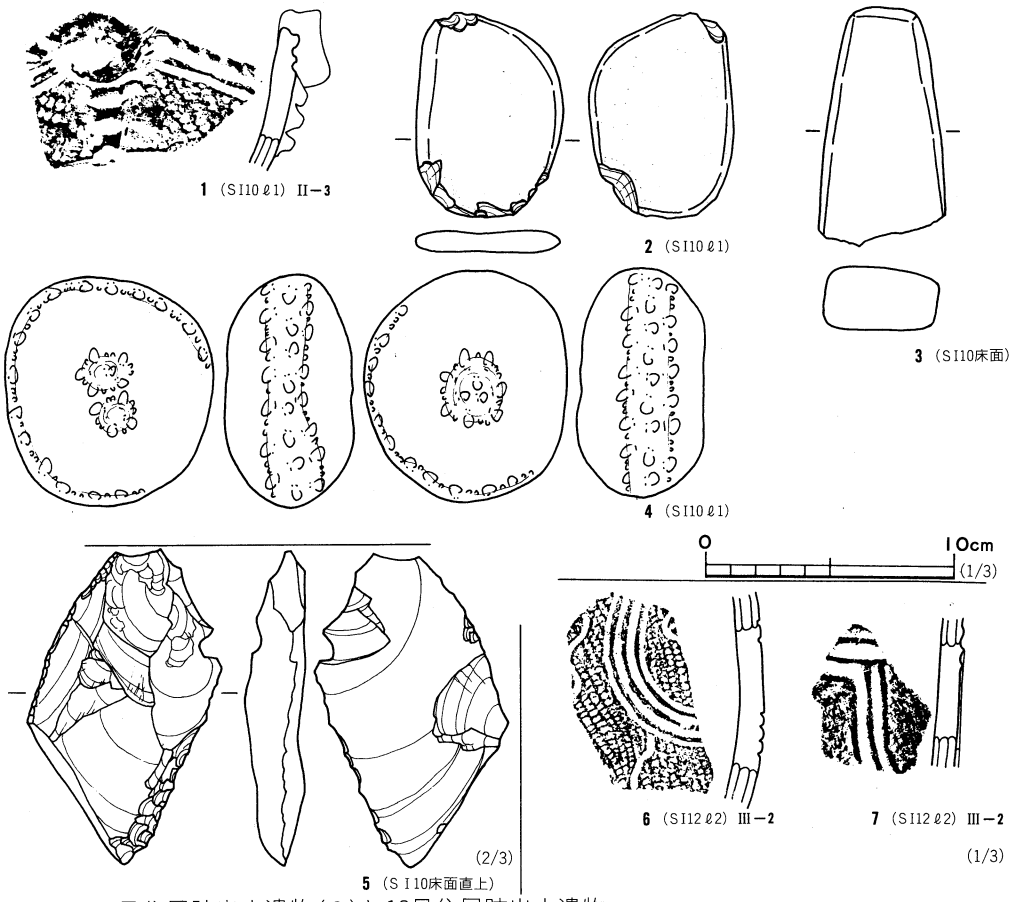


図34　10号住居跡出土遺物（2）と12号住居跡出土遺物

ま と め

本跡は不整の円形を呈する住居跡であった。主柱穴は明確にすることはできなかったが，南・北・東壁際に位置するP1・P4・P6・P7・P11は，その規模から主柱穴と考えられる。本住居跡の所属時期は，検出状況および出土土器から大木8b式期と考えられる。　（山　岸）

11 号 住 居 跡（S I 11）

遺　　構（図35，写真19）

チ・ツ48・49GのLV上面で検出した竪穴住居跡である。SK46・86・89と重複し，SK46より古く，他の土坑より新しい。遺存状態は良く，住居跡の周壁は調査時に若干掘り過ぎてしまった南東コーナー部を除いて，すべて検出することができた。平面形は長方形を基調とするが，北壁と西壁は緩く弧を描いている。規模は長辺が5.5m，短辺は最大4.1mで，東壁は真北から20°ほど東にずれている。壁の立ち上がりは急で，壁高は最も遺存状態の良い北西コーナー部で16cm

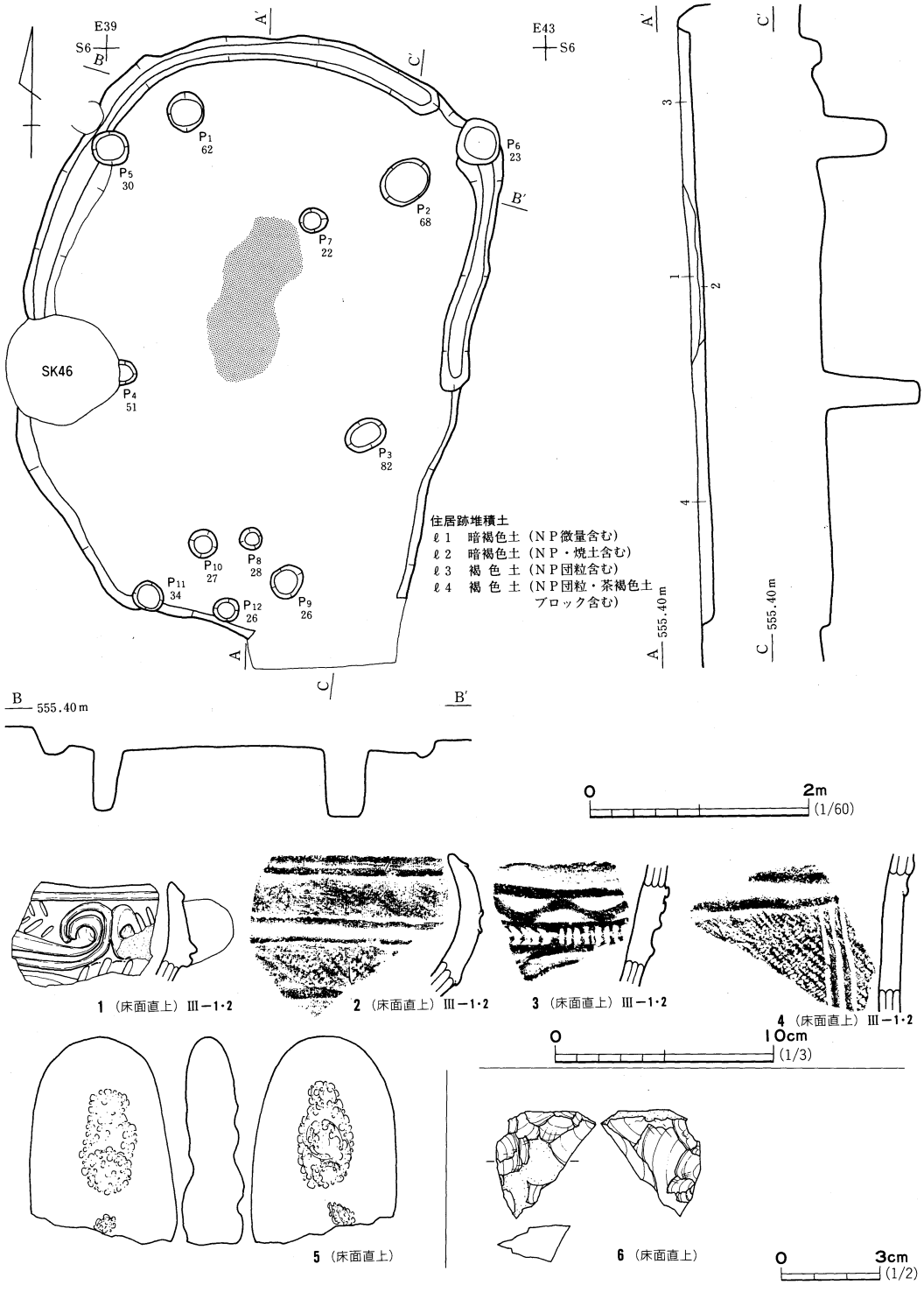


図35　11号住居跡と出土遺物

である。住居跡北半部の壁際には，北東コーナー部で一部とぎれるが，幅30㎝，床面からの深さが10～16㎝ほどの壁溝が認められる。

住居跡内堆積土は，4層に区分した。ℓ3・ℓ4は，ⅬⅢb上部とした土に近似する。堆積状態は，周辺部からの流れ込みの状態が観察できることから，自然堆積と判断した。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に向かって，緩やかに傾斜しその比高差は20㎝である。床面中央部は踏み締まりが強い。

住居施設は，12個の小穴と1基の炉が検出された。P1～P4は炉を取り囲むように方形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴となるものと判断した。これらの主柱穴は，住居跡の北半部に偏って配置されている。柱穴の直径は22～40㎝で，床面からの深さは51～82㎝である。柱穴相互の間隔は2.2ｍほどで，ほぼ一定している。住居跡南壁際からは，直径20～30㎝，深さ13～34㎝の小穴が5個検出された。これらの小穴の中の何本かは，主柱穴の配置から考えて，住居跡の上屋を支える機能を持っていたものと判断している。小穴内にはパミスを含む褐色土が堆積していたが，P9内にはパミスをほとんど含まない暗褐色土が堆積していた。

炉は地床炉で，住居跡のほぼ中央に作られ，規模は現況で60×160㎝である。炉上面は周辺の床面に比べ僅かではあるが窪んでいる。炉の焼土化は強い。

遺　　物（図35）

11号住居跡からは，98点の縄文土器破片と3点の石器が出土している。縄文土器の多くは，住居跡堆積土中から小破片の状態で出土し，器形が分かるまでに復元できたものはない。図35－1～4は，隆線を貼り付けて文様を描いている。1には渦巻状の突起が，3には波状の隆線が見られる。3の隆線間の一部には，縦のスリットが加えられている。同図5は凹部を持つ磨石，同図6は不定形石器で，剥片の左側縁部に表裏から粗い調整剥離を加えている。

ま と め

本跡は，炉を取り囲むように4個の主柱穴を方形状に配した，長方形状を呈する住居跡である。主柱穴についてはさらに南壁際から検出された小穴の一部が，上屋を支えるために使用されていたものと考えている。本住居跡の所属時期については，確実に本跡に伴う遺物の出土がないため明言できない。しかし，出土土器で主体を占めるものが大木8a式土器であること，またⅬⅢb上部とした土に近似する土が，住居跡の床面を直接覆って堆積していることから，大木8a式期のものと考えている。（松　本）

12号住居跡（ＳＩ12）

遺　　構（図32，写真18）

ソ・タ45Gに位置し，ⅬⅤ上面において暗褐色土の落ち込みとして検出した。ＳＩ10と重複

し本住居跡が古い。遺存状態は極めて悪く，検出することができたのは西壁部分のみである。遺存する壁から推定すると，平面形は南北に長い楕円形ないしは方形を呈し，規模は一辺が7ｍを超えるものと考えられる。周壁は緩やかに立ち上がっており，検出面からの深さは，いずれも15㎝ほどである。床面はほぼ平坦な作りとなっているものの，締まりがなく軟弱である。堆積土はⅬⅢに近似する暗褐色土が壁際で流入状態を示して堆積していることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は，８個の小穴と壁溝の一部を検出した。小穴のうちＰ12～Ｐ16は壁際に位置し，直径20～30㎝，床面からの深さは14～29㎝である。壁溝部分から検出されたＰ17～Ｐ19は径20㎝，深さ20～28㎝である。これらの小穴はすべて床面からの深さが浅く，本住居跡の主柱穴と考えられない。ＳＩ10と重複する部分からも，本跡の主柱穴と考えられる小穴は検出されなかった。壁溝は北西壁際から検出され，幅15㎝前後で深さ13㎝である。

遺　　物（図34）

遺物は縄文土器片が17点出土している。図示できたのは２点のみで，いずれも深鉢形土器の胴部破片である。図34－6は平行沈線，同図７は細い隆線により曲線文を施文している。

ま と め

本住居跡は遺存する西壁から推定して長辺７ｍ以上で，平面形は南北に長い楕円形ないし方形を呈するものと考えられる。本住居跡の所属時期は，検出状況および出土土器から大木8b式期と考えられる。

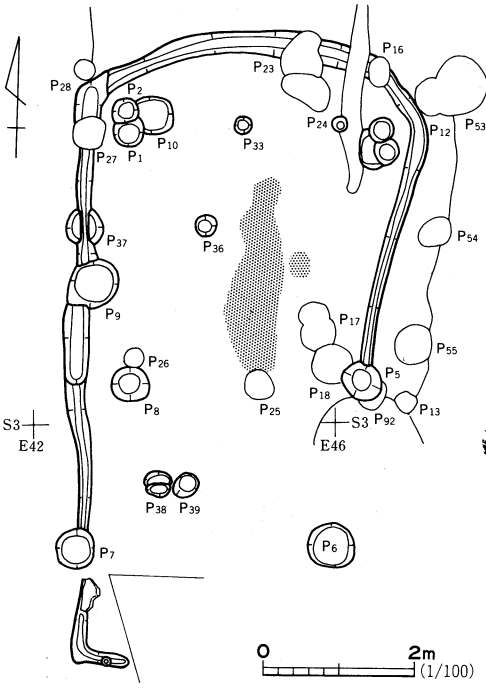
（山　岸）

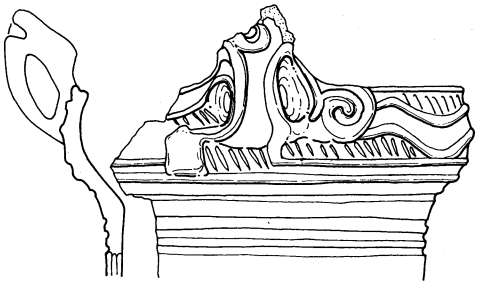
13号住居跡（ＳＩ13）

遺　　構（図36，付図３，写真20）

ソ～チ49・50ＧのＬⅣ上面，および重複するＳＩ26・31の堆積土上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ26・31，ＳＫ55・103・128と重複している。ＳＫ55との新旧は，本遺構の堆積土がこの付近には遺存していないため不明であるが，その他の遺構はすべて本遺構より古い。傾斜面下位に位置する住居跡南半部の遺存状態は悪く，周壁は遺存せず，南壁部分に作られた壁溝の一部が僅かに遺存していただけである。

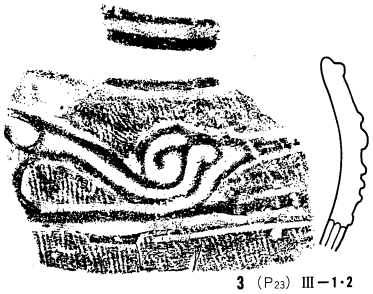
遺存部の平面形は長方形を基調とし，西壁は直線的でほぼ真北を指している。東壁部は西壁と平行せず，北側が若干開いている。このため厳密には北壁が南壁に比べて若干長い，台形状の平面形を呈するものと考えている。規模は長辺が8.6ｍ，短辺は北壁部で4.6ｍ，住居跡ほぼ中央で4.0ｍである。壁高は最大16㎝で，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁際には幅15～30㎝，床面からの深さが６～20㎝ほどの壁溝が，遺存状態の悪い住居跡南東コーナー部を除いて認められた。住居跡内堆積土は２層に区分した。堆積状態は，周辺部からの流れ込みの状態が観察できることから，自然堆積と判断している。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に向





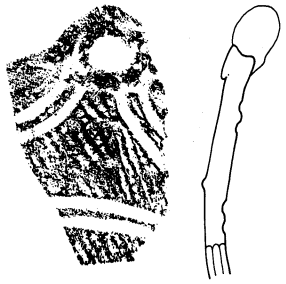
1（堆積土）Ⅲ－1・2
口径：15.6cm
器高：7.5cm

2（床面直上）Ⅲ－1
器高：8.9cm

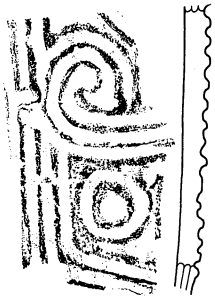


3（P23）Ⅲ－1・2

4（床面直上）Ⅲ－1・2

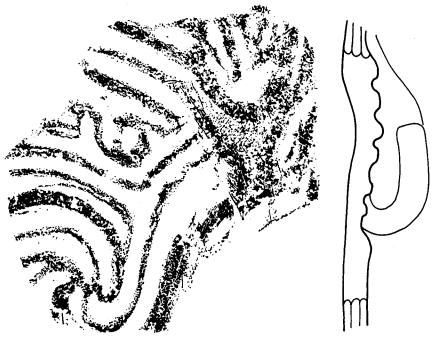


5（床面直上）Ⅲ－1・2



6（堆積土）Ⅲ－1

7（堆積土）Ⅲ－1



8（床面直上）Ⅲ－1

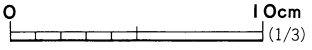


図36　13号住居跡と出土遺物（1）

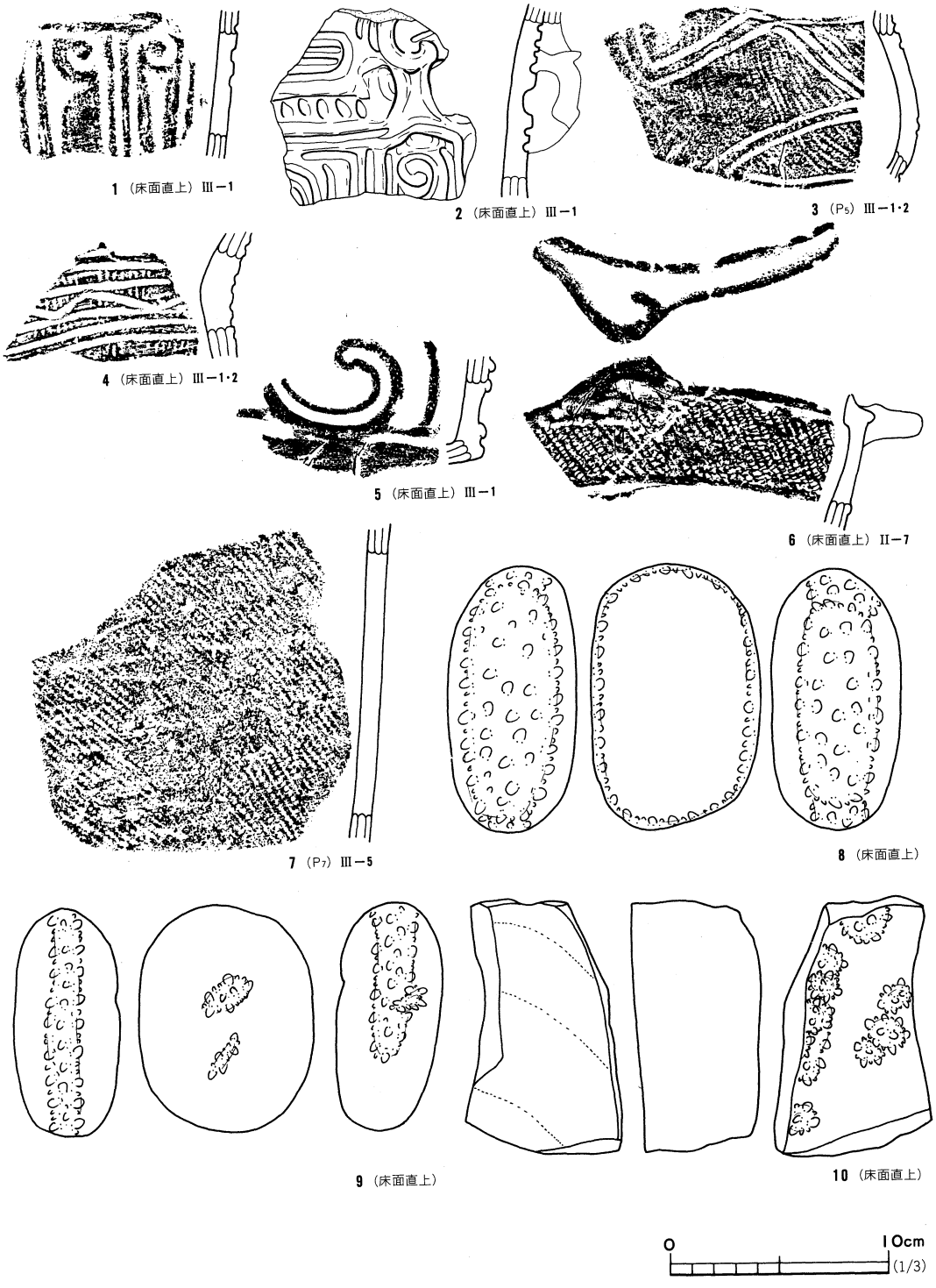


図37　13号住居跡出土遺物（2）

かって，緩やかに傾斜し，その比高差は最大23㎝である。

住居施設の中で小穴については，本住居跡内に先行するＳＩ26・31の小穴と考えられるものも認められ，個々の小穴についてはどの住居跡に伴うものか判断を下せないものも多い。そこで小穴については，相互に重複するＳＩ13・26・31・34から検出された小穴すべてに，P1～P93の番号を連続して付けている。各小穴の配置状態については，付図3を参照されたい。図36はＳＩ13とその周辺の小穴等を示したものである。図36に示した各小穴の中で，底面の記載があるものについては，その位置から本住居跡に伴う可能性が高いものと考えている。

P1～P10は東西のほぼ相対する位置に作られ，住居跡の平面形と同じく長方形状の配置が見られることから，本住居跡の主柱穴となるものと判断した。柱穴の直径は30～60㎝で，深さはP6が34㎝と浅いが，他の柱穴はいずれも50㎝以上の深さを有している。小穴内にはパミス混じりの褐色土が堆積していたものが多く，P8にはパミス混じりの暗褐色土の堆積が認められた。P8・P10はその作られた位置から，ＳＩ31の主柱穴となる可能性もある。柱穴相互の間隔はP1・P2とP9，P5とP6の間が狭く2.2ｍほどであるが，他は3.5ｍほどである。

炉は地床炉で，住居跡中央からやや北に寄った位置に作られ，66×260㎝の範囲が楕円形状に焼けている。炉の焼土化は強い。

遺　　物（図36・37）

13号住居跡からは，337点の縄文土器破片と4点の石器が出土している。縄文土器の多くは，住居跡堆積土中から小破片の状態で散在して出土し，器形が推定できるまでに復元し得たのは，図36－1に示した小型の深鉢1点のみである。図36－1はキャリパー状を呈する深鉢で，口縁部には眼鏡状の把手が付けられている。文様帯は頸部に施された数本の沈線によって，口縁部と胴部に区画される。口縁部には把手を繋ぐように波状隆線を2条施し，隙間には斜位の短沈線を加えている。

同図2～4は，縄文を地文とする深鉢の破片である。3・4は隆線の端部が渦巻文を描く。同図5は胴部上半から口縁部が直線的に外反して開く深鉢で，口縁部は波状を呈している。波頂部には環状の突起が付けられ，口縁部には連弧状の文様を沈線によって描いている。同図6～図37－2は沈線を多用し文様を描くもので，縄文は施されない。図37－5は浅鉢であろう。隆線の貼り付けによる渦巻状の文様が認められる。同図8・9は磨石で，8には凹部，9の側縁部には使用痕跡が認められる磨石である。同図10は石皿で裏面は多孔石状を呈している。

ま　と　め

本跡は長方形状の平面形をなす竪穴住居跡である。主柱穴は基本的に6個で構成され，住居跡の平面形と同じく長方形状に配置されていた。本住居跡の所属時期は，出土遺物と遺構の重複関係から大木8a式期と考えている。　　（松　本）

14号住居跡（SI14）

遺　　構（図38，写真21）

チ・ツ47・48Gに位置し，LV上面において暗褐色土の落ち込みとして検出した。SK91と重複し，本住居跡が新しい。遺存状態は良好で，すべての壁を検出することができた。

平面形は不整の長方形を呈し，東西2.5m，南北3.5mを測る。検出面からの深さはいずれも20cm前後と浅いものの，壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は地山であるLVまで掘り込まれ，ほぼ平坦で硬く締まっている。堆積土は暗褐色土を主体とし2層に分層され，ℓ1がレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は10個の小穴と炉を検出した。小穴は径が20～30cmのもので，内部にはシミ状に暗褐色土が混入した黄褐色土の堆積が認められた。P3～P10は深さが20cmに満たない小穴である。P1・P2はそれぞれ37・40cmの深さをもっており，住居跡の中軸線上に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えられる。炉は床面中央から南壁際にに位置している。床面が焼けただけの地床炉で，炉の焼土化は焼土上面から3cm下まで認められた。

遺　　物（図38）

出土遺物は縄文土器片が11点出土している。図38－1は，口縁部がキャリパー形を呈する深

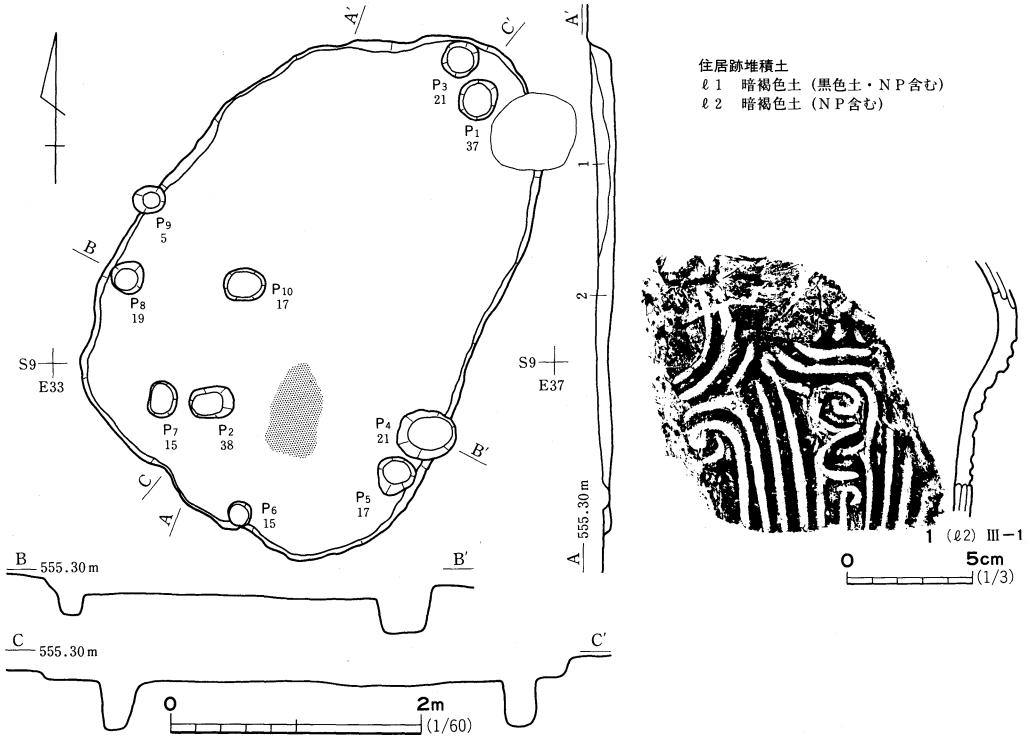


図38　14号住居跡と出土遺物

鉢の破片で，平行線や平行線の末端部が渦巻く沈線文を縦位に垂下させている。

ま と め

本住居跡は遺存状態が良好で，南北に長い不整の長方形を呈する。柱穴は南・北に位置するP1・P2が，その規模から主柱穴と考えられる。本住居跡の所属時期は，検出状況および出土土器から大木8a式期と考えられる。　（山　岸）

16号住居跡（SI16）

遺　　構（図39，写真22）

ソ・タ51・52GのLV上面において検出した竪穴住居跡である。遺存状態は悪く，住居跡の南半部は倒木痕により壊されている。このため検出できたのは住居跡の北壁と東壁・西壁の一部である。平面形はその遺存部の状態から，方形あるいは長方形を基調とするものと考えられる。規模は東西が3.4m，南北は現況で1.4mである。

検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北壁で最大20cm，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大10cmである。住居跡内堆積土は3層に区分した。ℓ1は倒木痕内堆積土，ℓ2は基本土層のLⅢb下部の土質に近似している。堆積状態は整ったレンズ状の堆積が観察されることから，自然堆積と判断した。住居跡施設には6個の小穴が認められた。小穴の規模は直径25～30cm，深さはP3が48cmで最も深い。これらの小穴は住居跡の壁際に設けられている。炉は遺存する部分からは検出できなかった。

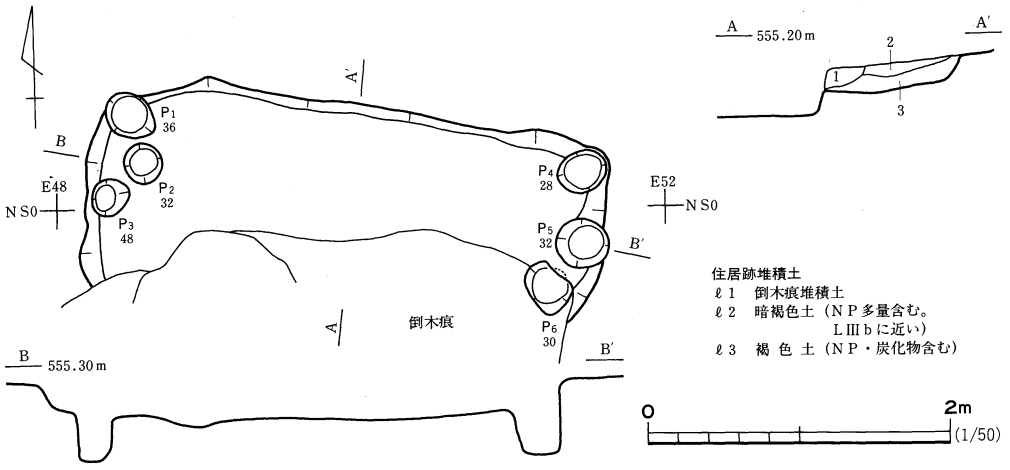


図39　16号住居跡

遺　　物

住居跡内からは磨滅した縄文土器の小破片が数点出土しているが，時期の分かるようなものは見られなかった。

ま と め

本住居跡は遺存状態が極めて悪く，出土遺物も極めて少ないことから，住居跡の構造や所属時期については不明である。しかし，住居跡内堆積土にはＬⅢｂ下部に類似する土の堆積が認められることから，縄文時代中期前葉に近い時期と考えている。（松　本）

17号住居跡（ＳＩ17）

遺　　構（図40）

ソ53GのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。遺存状態は悪く，住居跡の南半部は傾斜面下位のため壁は遺存していなかった。このため検出できたのは，住居跡北壁と東・西壁の一部である。平面形はその遺存部の状態から，方形あるいは長方形を基調とするものと考えられる。規模は東西が3.8ｍ，南北は現況で1.2ｍである。一方，本住居跡の南側に近接して検出されたＳＫ59堆積土中には，堅く締まった面が認められた。この面は本住居跡の床面と考えられることから，ＳＫ59は本住居跡の範囲内に取り込まれるものと判断している。

検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北壁で最大９㎝，周壁の立ち上がりは急である。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜している。住居内には，ＬⅢｂの土質に近似する暗褐色土が１層堆積していた。

住居跡の遺存部とＳＫ59の周辺からは総数10個の小穴と，焼土が１基検出された。小穴の規模は直径20～50㎝，深さは12～61㎝である。Ｐ1・Ｐ2はほぼ対応する位置に作られ，深さも61・55㎝と深いことから，本住居跡の主柱穴と考えている。住居跡南側でこれに対応するのは，Ｐ3とＰ4・Ｐ5のいずれかであろう。Ｐ7・Ｐ10については，それぞれＰ1とＰ4・Ｐ5，Ｐ2とＰ3を結んだ線上に位置することから，添柱的なものと考えている。

住居跡中央やや北に寄った位置から検出された焼土は，本住居跡の地床炉である。70×140㎝の楕円形状に床面が焼けていた。

遺　　物

住居跡内からは磨滅した縄文土器の小破片が数点出土しているが，時期の分かるようなものは見られなかった。

ま と め

本住居跡は遺存状態が極めて悪いが，検出された柱穴の配置から，南北が6.6ｍ程の長方形状の住居跡と考えている。本住居跡の所属時期については，出土土器がごく僅かであるため不明で

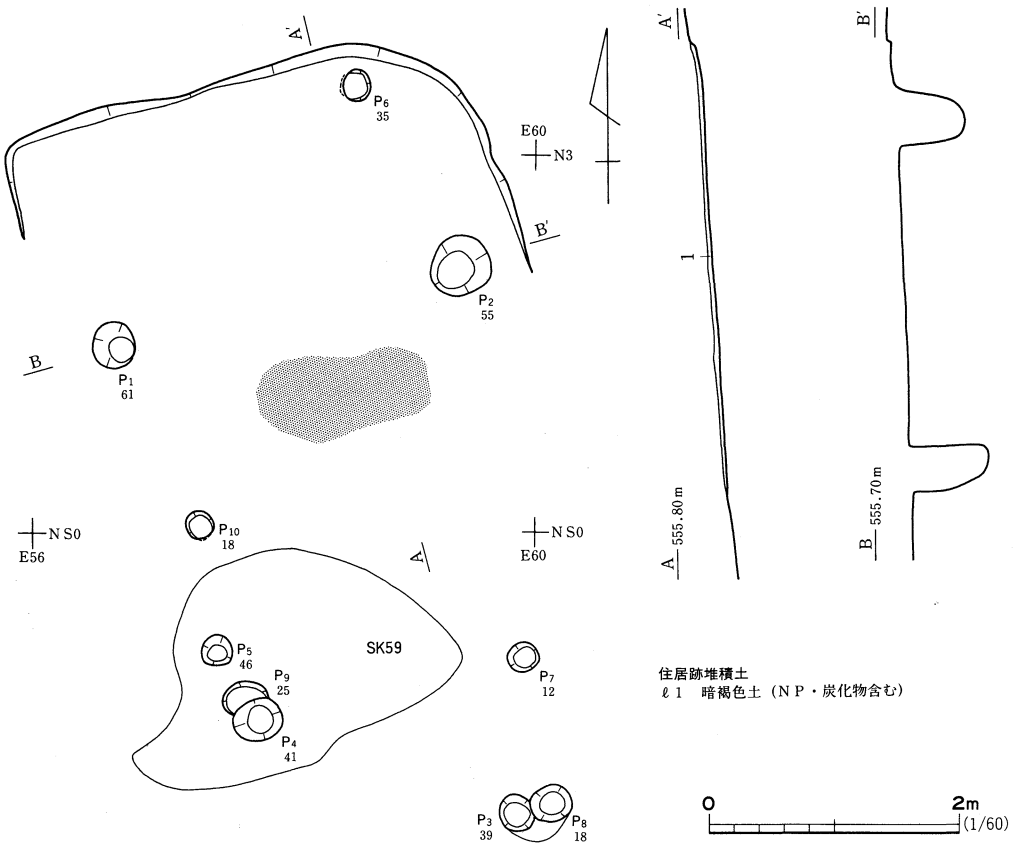


図40　17号住居跡

ある。しかし，住居跡内堆積土にはＬⅢｂに類似する土が堆積していることから，縄文時代中期前葉～中葉の時期と考えている。　（松　本）

18 号 住 居 跡（ＳＩ18）

遺　　構（図41）

ソ～シ47・48ＧのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＫ62・63と重複し本住居跡が新しい。遺存状態は極めて悪く，検出できたのは炉と小穴のみである。小穴は8個検出され，その規模はいずれも径50㎝，検出面からの深さは50～100㎝である。Ｐ2・Ｐ4・Ｐ6とＰ1・Ｐ3・Ｐ5は直線的に配置され，それぞれの小穴がほぼ東西に対応する位置に作られている。これらの小穴は確認面からの深さがいずれも80㎝以上であることから，Ｐ1～Ｐ6を主柱穴と考えている。炉は主柱穴を結んだ長方形の中軸線上，南側に片寄った位置から検出された。床面が焼けただけの地床炉で，平面は楕円形を呈し，規模は南北200㎝，東西100㎝である。炉の焼けは強く，焼

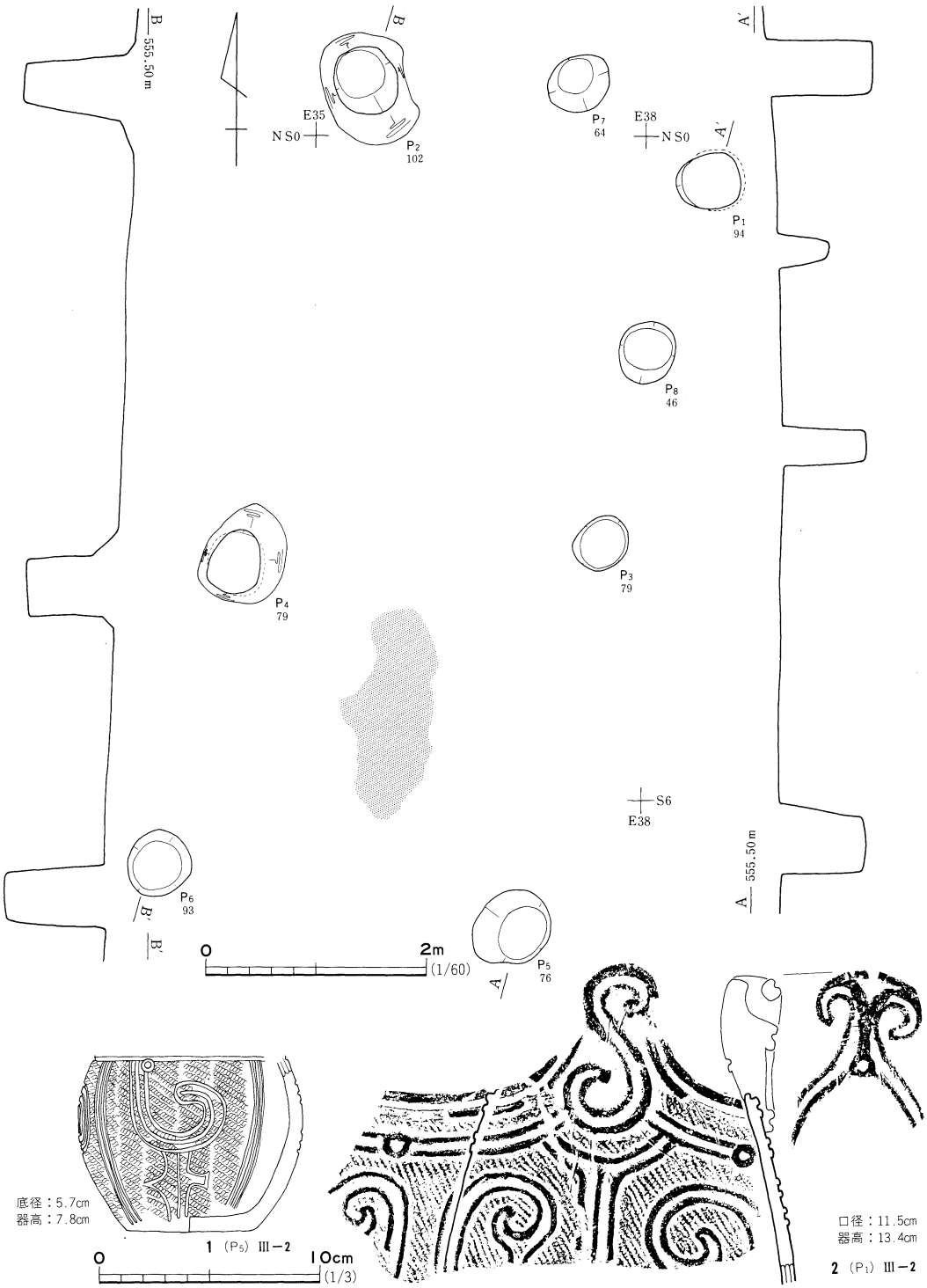


図41　18号住居跡と出土遺物（１）

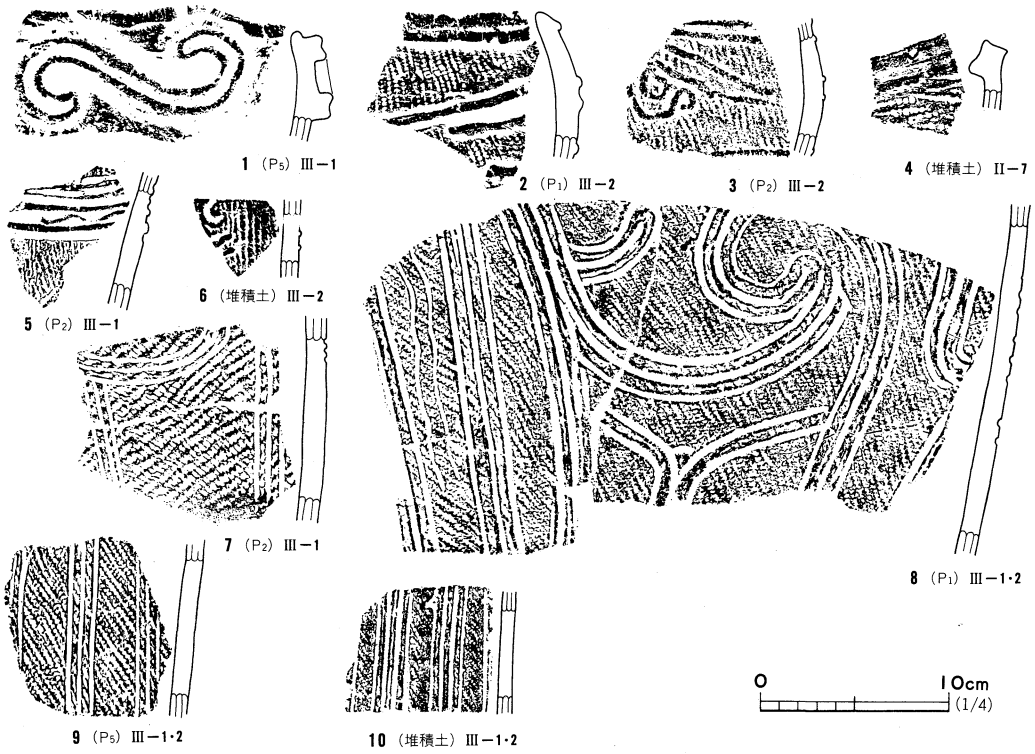


図42　18号住居跡出土遺物（2）

土上面から7㎝下まで焼土化が及んでいた。

遺　　物（図41・42）

出土遺物は縄文土器片15点が小穴内から出土している。図41−1は口縁部を欠損する鉢形土器で，胴部は球形状を呈している。文様は3本1組の平行する沈線を垂下させて胴部を4区画し，その間に同種の沈線で渦巻文を施している。この渦巻文の上端部には，円形の刺突文が加えられる。同図2は口縁部が内傾する深鉢で，口縁部には縦S字状の把手が付けられている。文様は2本1組の粘土紐によって描かれ，胴部には先端が渦巻状になる文様が描かれている。口縁部と胴部を区画する隆線上には，円形の貼付文が付けられている。

図42−1は口縁部に横S字状の突起が付く。同図2・3はキャリパー状を呈する深鉢で，隆線により端部が渦巻状を呈する連弧文を施している。同図7〜10は深鉢の胴部破片である。沈線を縦位を基本に配し，これを繋ぐように渦巻文を描いている。

ま　と　め

本住居跡は主柱穴の配置などから，南北8ｍ，東西4ｍをこえる規模をもち，平面形は南北に長い長方形を呈するものと考えられる。住居施設には柱穴の他に，楕円形状を呈する地床炉が検出された。本住居跡の時期は，検出状況および出土遺物から大木8b式期に属するものと考えら

れる。　（山　岸）

19号住居跡（SI19）

遺　　構（図43，写真23）

調査区中央部よりやや西側，ト・ナ22～24GのLV及び一部LⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。SK119と重複し，本遺構が古い。遺構の遺存状態は比較的良好であるが，南壁の立ち上がりは傾斜面下位のため明確に捉えることはできなかった。

住居跡の平面形はほぼ楕円形を呈し，規模は東西が6.0m，南北は現況で5.5mである。壁の立ち上がりは急で，壁の残存高は最も遺存状態の良い北壁で21cmある。床面は平坦であるが，北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。床面の最大比高差は21cmである。堆積土は2層に区分された。ℓ1・ℓ2は共に暗褐色土であるが，ℓ2には黄色土粒子やブロックが混じっている。ℓ1はLⅢb上部の土質と近い。傾斜面上位の北側から流れ込みの状況が観察されることから，自然堆積と判断した。

小穴は総数19個検出された。P1～P7は直径35cm以上，深さは67～84cmである。炉を囲むように配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。P1とP2，P4とP5，P6とP7は2本ずつ近接しているが，上屋構造から判断して，それぞれ2本が同時期に機能していたものとは考え難い。柱穴の堆積土は，P2・P3・P6が暗茶褐色土，P1・P4・P5・P7は黒褐色土である。この堆積土と各柱穴間の距離から判断して，P2・P3・P5・P6の4個が同時期の主柱穴として機能し，P1・P3・P4・P7の4個が前者と異なる時期の主柱穴として機能したものと考えられる。P3は付近に他の柱穴が認められないので，両時期に渡って機能していた可能性が高い。P8～P18はその位置から壁柱穴と判断している。深さは7～56cmとばらつきがあるが，直径は15～28cmと主柱穴よりも一回り小さい。

壁溝は，西壁沿いに2.1m，東壁沿いに約1m，北壁から40cm程離れて1.9m遺存している。西壁・東壁沿いの壁溝は，深さ5～20cm，幅9～24cmである。北部の壁溝は，深さ9～20cm，幅14～28cmである。

炉は住居跡中央やや南寄りから検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は45×64cmを測る。炉の中央には直径21cm，深さ17cmの小穴（P19）があり，小穴周壁上部は焼けている。P19内には当初，炉の施設として土器等が埋設されていた可能性がある。

遺　　物（図43）

19号住居跡からは，縄文土器片が19点，堆積土中や床面直上から散在した状態で出土している。図43－1・2は深鉢の胴部破片で，平行沈線で文様を描いている。同図3・4は深鉢の口縁部破片である。3は隆線と有節沈線によって文様が描かれ，口唇部直下には下方向からの刺突文も

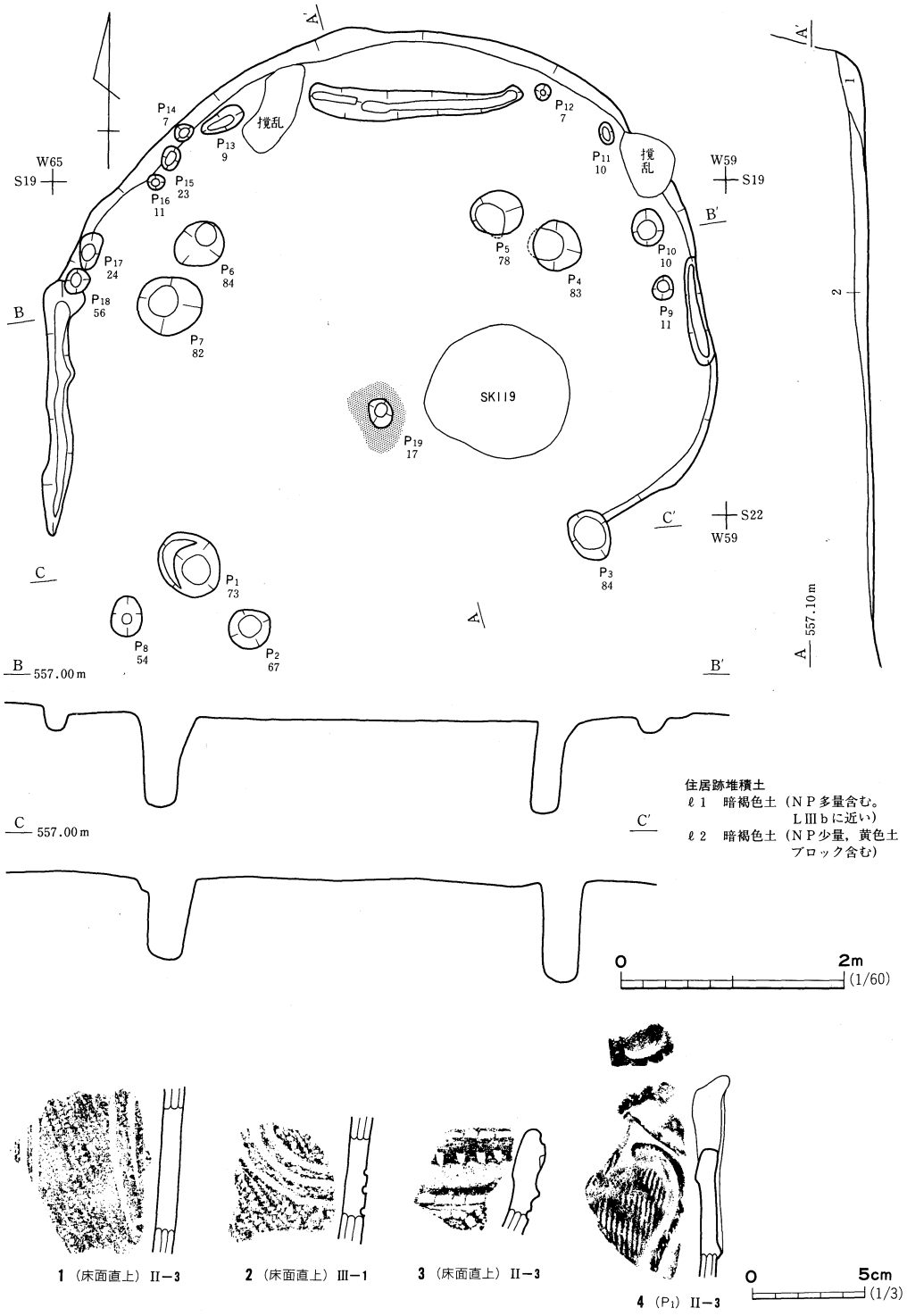


図43　19号住居跡と出土遺物

見られる。4は山形の波状口縁で，波頂部直下からは隆線が曲線を描いて降下する。

ま と め

本住居跡は，楕円形を基調とした平面形の竪穴住居跡である。主柱穴は7個検出されたが，そのうち2本ずつ近接する柱穴が3箇所で認められた。このことから，本住居跡は柱穴の位置をややずらせて1回建て替えている可能性が高い。炉には埋設土器の跡と思われる小穴が認められたが，他の住居跡では見られない特徴である。本住居跡の所属する時期については，出土土器中に大木7b式土器が若干見られるが，大木8a式土器が主体を占めることから，この時期のものと考えている。（丹　治）

20号住居跡（SI20）

遺　　構（図44，写真24・25）

ソ・タ33・34GのLⅢb上面で検出した，平安時代の竪穴住居跡である。35号住居跡と重複し，本住居跡が新しい。平面形は東西6.2m，南北6.7mの整った方形を基調とするが，東壁南半部には南北3.2m，東西1.2mの長方形の張り出しがある。検出面からの深さは最大30cmで，壁は急角度で立ち上がっている。床面は平坦で堅く締まり，住居跡の壁際とカマドの周辺には部分的に貼床が認められた。住居跡内堆積土は3層に区分した。ℓ1～ℓ3は基本土層のLⅡに近似する黒褐色土である。堆積状態は，レンズ状の堆積が認められることから自然堆積と判断した。

住居施設にはカマド・炉が各1基，直径1.2mほどの円形の穴が3個，小穴が12個ある。カマドは住居跡南壁，南東コーナー部に寄った位置に設けられ，住居跡の壁をU字状に掘り込んで作られている。カマドの袖は，住居跡内に僅かに張り出している。焚口の幅は70cm，焚口から奥壁までは150cmである。カマドは掘形を有し，粘土質の茶褐色土で埋め周壁を作っている。袖の先端部には角礫が芯材として設置されていた。

炉は住居跡中央やや南によった位置に作られ，80×140cmの範囲が楕円形に焼けていた。炉上面は，周辺の床に比べ若干窪み，炉上面から6cm下まで熱による酸化が及んでいる。炉の下には長径180cm，短径140cm，深さ30cmの楕円形状の掘形があり，焼土・炭化物を含む黒褐色土で埋め戻されている。

P1～P3は，直径が120cmほどの穴である。P1はカマド脇に取り付くもので，その位置から貯蔵穴と考えている。P2・P3上面には貼床が見られたことから，住居跡廃絶時には既に埋め戻されていたことが明らかである。

P4～P7は，直径30～40cm，深さ39～68cmの小穴である。これらの小穴は住居跡の中央にほぼ方形に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。これら小穴相互の間隔は2～2.2mと住居跡の規模に比べ極めて狭い。P8・P9はカマドの袖際に作られたもので，規模は

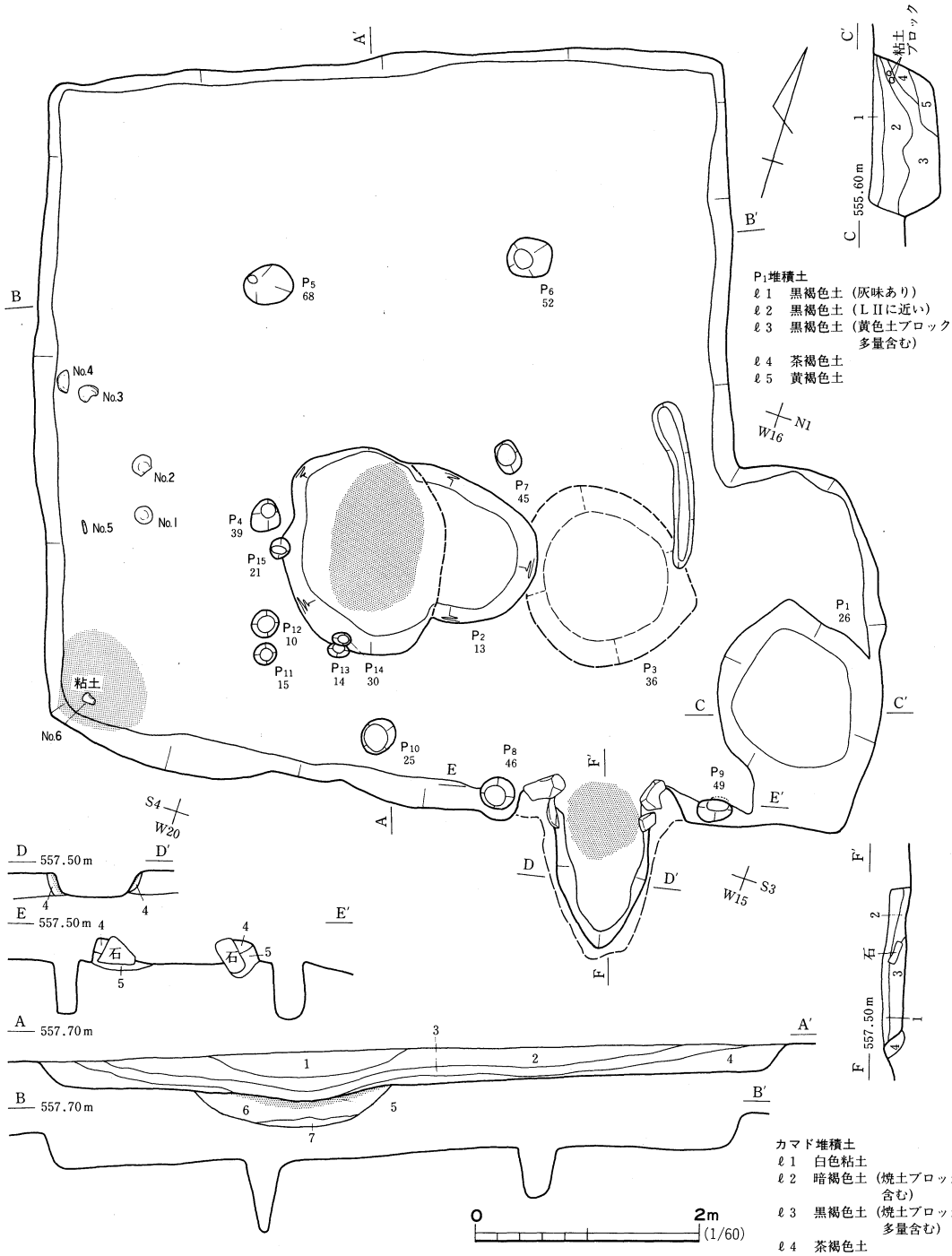

A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
P1 26
P2 13
P3 36
P4 39
P5 68
P6 52
P7 45
P8 46
P9 49
P10 25
P11 15
P12 10
P13 14
P14 30
P15 21
No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
粘土
粘土ブロック
石
N1 W16
S3 W15
S4 W20
555.60m
557.50m
557.70m
0
2m
(1/60)
P1堆積土
ℓ1　黒褐色土（灰味あり）
ℓ2　黒褐色土（LⅡに近い）
ℓ3　黒褐色土（黄色土ブロック多量含む）
ℓ4　茶褐色土
ℓ5　黄褐色土
カマド堆積土
ℓ1　白色粘土
ℓ2　暗褐色土（焼土ブロック含む）
ℓ3　黒褐色土（焼土ブロック多量含む）
ℓ4　茶褐色土
ℓ5　黒褐色土（白色粘土多量含む）
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（灰味あり）
ℓ2　黒褐色土（LⅡに近い）
ℓ3　黒褐色土（NP微量含む）
ℓ4　暗褐色土
ℓ5　焼土
ℓ6　黒褐色土（焼土含む）
ℓ7　黒褐色土（焼土少量含む）

図44　20号住居跡

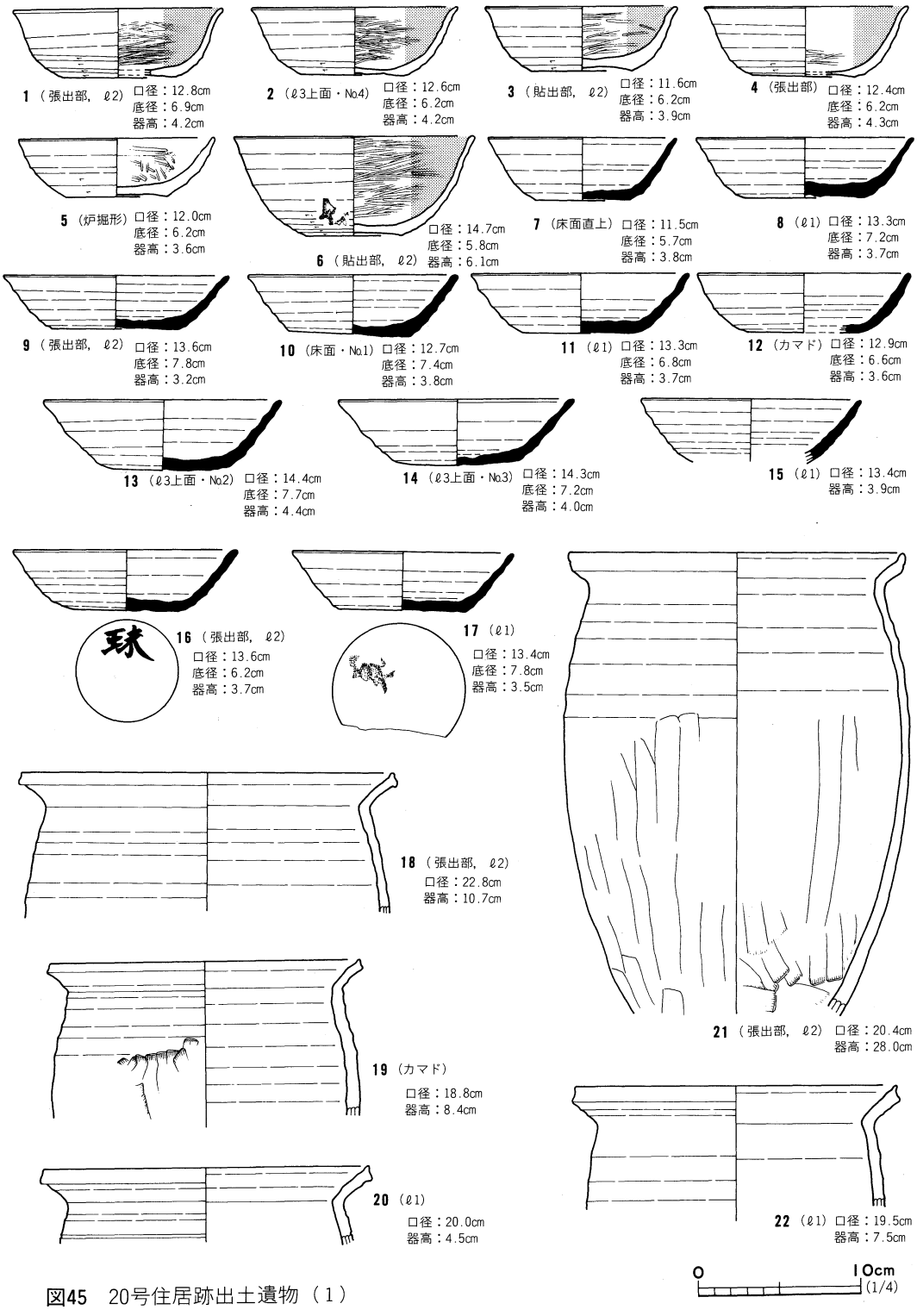


図45　20号住居跡出土遺物（1）

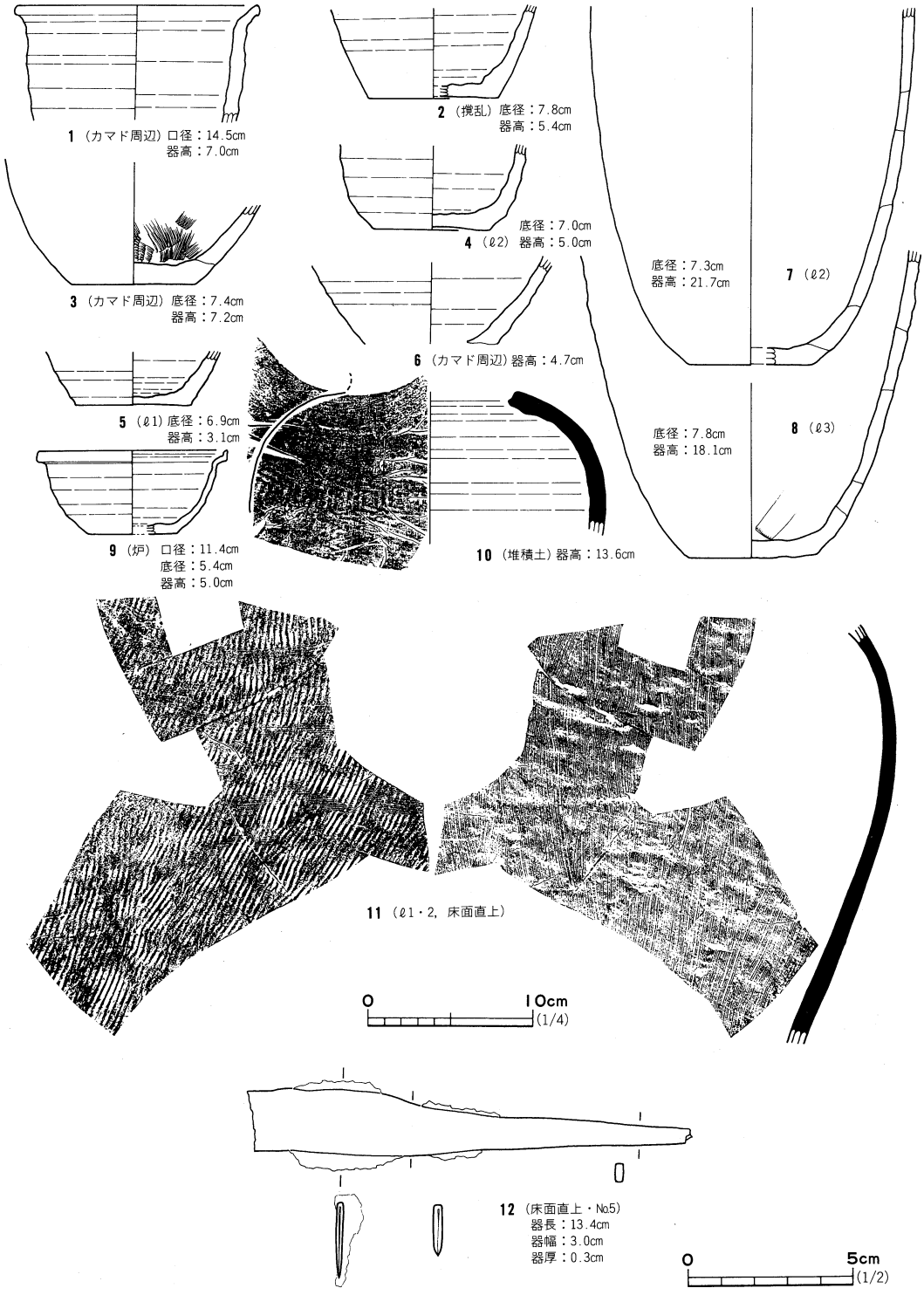


図46　20号住居跡出土遺物（2）

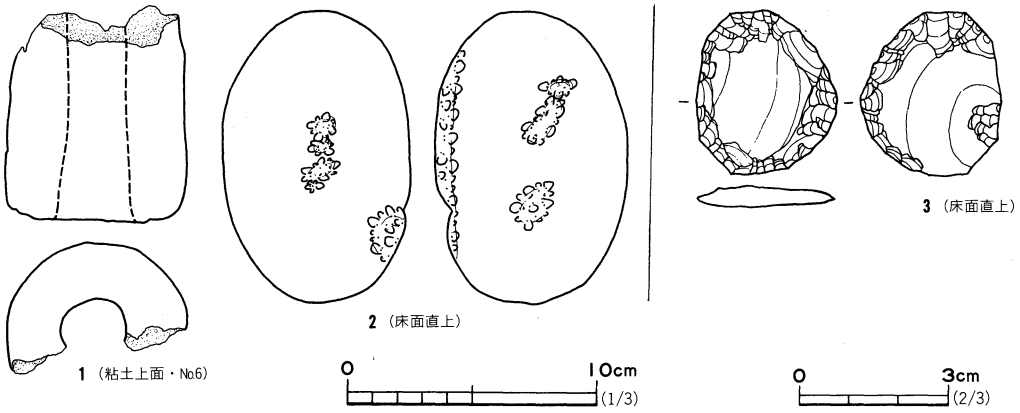


図47　20号住居跡出土遺物（3）

P4～P7に近く，P8はP6とP7の延長線上に位置していることから，これら2個の小穴も本住居跡の主柱穴と考えている。P10もその位置から主柱穴と考えられるが，他の小穴に比べ深さは25cmと浅い。P13～P15は貼床除去後に検出した小穴である。

遺　　物（図45～47）

本住居跡内からは約600点の土師器・須恵器破片，約400点の縄文土器破片と鉄製品が1点，羽口が1点，石器が数点出土している。これらの遺物は，住居跡の堆積土中から散在した状態で出土したものが多い。その中でもカマドおよび貯蔵穴周辺からの出土量が多く，住居跡西壁際からは，図45－2・10・13・14に示した杯や，図46－12の鉄製品が出土している。この他に住居跡南西コーナー部には，白色の粘土が集積し，この上から羽口が出土した。

さらに住居施設や出土遺物から，本住居跡では鉄生産に関連する何等かの営みがあったことが考えられた。このため住居跡全面にグリッドに平行させ1mの方眼を設定し，床面に堆積する土を採取した。こうして採取した土のうち，設定した方眼の半数に相当する18地点分について，微小遺物の検出作業を実施した。その結果，3地点から鉄・鉄滓の微小片を得たが，鍛造剝片と言えるものは見られなかった。

土師器杯（図45－1～6）　図化したものの他に，15点の破片がある。すべてロクロを使用して作られ，体部下半から底部全面に回転ヘラケズリ再調整が加えられる。内面はヘラミガキ後，黒色処理されたものが大半を占めるが，5は黒色処理が行われていない。6は椀に近い器形を呈し，体部下半に判読できないが墨書が見られる。

須恵器杯（図45－7～17）　図化したものの他に21点の破片がある。8は青灰色を呈し，堅く焼き締まっている。7・10・16は灰色を呈するが，焼きは比較的硬質である。その他のものは白色を呈し極めて軟質である。切り離し技法は，底部の遺存するものはすべて，回転ヘラキリである。8を除いてすべて底部にナデ調整を加えている。このナデ調整は体部下端まで加えられるも

の（7・11・16・17）もあるが，基本的には体部に再調整は加えられない。16・17には墨書が見られる。9 の内面には墨が付着しており，墨壺に転用されたものと考えている。

土師器甕・鉢（図45－18～図46－9）　図46－9 は鉢で他のものは甕と考えている。甕の器形は，長胴を呈し，頸部が「く」の字状に外反するもので，口縁部上端は短く直立するものがほとんどである。調整は，胴部下半には縦にヘラケズリを加えているが，胴部上半は無調整である。図45－19・22はタタキ調整の痕跡を残している。図46－2・5は小型の甕の底部であろうか，底面に回転糸切痕を残している。図45－19は灰色を呈し，焼きは硬質であり，その特徴は図45－ 7 の須恵器杯に近く，窯で焼かれている可能性がある。

須恵器壺・甕（図46－10・11）　10は壺の肩部，11は大甕の胴部破片である。いずれも青灰色を呈するもので，焼きは極めて硬質である。

その他の遺物　図46－12は両茎の刀子，図47－1は羽口，同図2は凹部を持つ磨石，同図3は剝片の周縁部に調整剝離を加えた不定形石器である。

ま と め

本住居跡は，一辺6.7ｍほどの方形状の住居跡である。住居跡の南東部には張り出しが見られ，ここに貯蔵穴が作られてていた。カマドは住居跡の南東コーナー部に寄せて作られていた。住居跡内には炉も認められ，出土遺物には羽口や鉄・鉄滓の微小片もある。さらに，白色の粘土も住居跡内に持ち込まれていたことから，鉄の加工あるいは生産に関連する作業が行われていたものと考えている。出土土器の中で，須恵器の杯が多いことも特記されよう。本住居跡は，出土した土器から9世紀中葉の所産と考えている。　（松　本）

21号住居跡（ＳＩ21）

遺　　構（図48，写真26）

セ・ソ36・37ＧのＬⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ30，ＳＫ212と重複し，本跡が最も新しい。遺存状態は良く，住居跡の周壁すべてを検出することができた。平面形は長方形を基調とし，住居跡北半部は整った長方形を呈するが，住居跡南端部は若干西側に屈曲している。規模は長辺が7.9ｍ，短辺が4.2ｍで，東壁は真北から30°ほど西に傾いている。壁高は10㎝ほどで，壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

住居跡内堆積土は2層に区分した。ℓ1はパミスを多量に含む黒褐色土で，部分的にＬⅢｂ下部に堆積している土に近似する。堆積状態は，周辺部からの流れ込みの状態が観察できることから，自然堆積と判断した。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に向かって，緩やかに傾斜し，その比高差は25㎝である。床面中央やや北に寄った所には，一辺2.2ｍ，床面からの深さが15㎝ほどの不整方形状の浅い掘り込みが見られ，この底面には炉が作られていた。

住居施設は，6個の小穴と3基の炉が検出された。小穴は東西のほぼ相対する位置に作られ，長方形に配置されていることから，本住居跡の主柱穴となるものと判断した。柱穴の直径は40～56㎝で，深さは西側の柱穴（P1～P3）が約80㎝と深く，東側の柱穴（P4～P6）は50～60㎝ほどと若干浅い。柱穴相互の間隔は，P1とP2，P5とP6の間が若干広く3.4ｍほどであるが，他は2.6ｍ程である。

検出された3基の炉は，いずれも地床炉である。1炉は先述した浅い掘り込みの底面に作られ，80×160㎝の規模を有する。2炉もほぼ同様な規模である。3炉は浅い掘り込みによって北側を壊され，規模は現況で30×70㎝である。いずれも炉の焼土化は強い。

遺　　物（図49～51）

21号住居跡からは，縄文土器破片758点と石器が8点出土している。縄文土器の多くは，堆積土中から小破片の状態で散在して出土した。図49－1はP2，同図2・4はP3，同図5はP5内から出土している。

図49－1は，胴部に丸みをもち，口縁部が短く外反する深鉢で，口縁部には4単位の縦に長い突起が付けられるものと考えている。文様は隆線と沈線によって口縁部直下に横に長い楕円形状，それ以下には連弧状の区画文が描かれている。この区画文内は斜め方向からの突き刺しによる交互刺突文を施す。同図4は，1とほぼ同じ器形・文様を有する小型の深鉢である。胴部上半には2段の楕円形区画文を配し，以下は隆線を垂下させ胴部を4単位に区画している。

同図2は，胴部上半で外反し，口縁部が短く直立する完形の深鉢である。口縁部には，上面が渦巻状を呈する4単位の突起が付けられている。口縁部の下端は，上下から交互に突き刺しを加えた小波状を呈する隆帯で区画されている。同図5はキャリパー状の深鉢で，口縁部上端は「く」の字状に屈曲する。口縁部には突起を有し，文様は隆線と縄圧痕文によって描かれている。口縁部の突起直下にはX字状の隆線を配し，その下にY字状の隆帯を垂下させ口縁部を区画している。縄圧痕文は区画内に横位・連弧状に施されている。同図10も口縁部に，横位の縄圧痕文が施されている。

同図6は胴部上半が緩く内湾する，円筒形状の小さな深鉢である。文様は口縁部直下に無文帯を置き，その下には沈線と斜め方向からの突き刺しによる交互刺突文によって，楕円形状の区画文を描いている。同図3は口縁部が外反する粗製の深鉢で，口縁部には小突起が認められる。同図9は台付土器であろうか。

図50－1～7は，波状口縁部の破片である。5の波頂部からは，Y字状の隆線が2本垂下している。文様は沈線によって描かれるものが多く，1は沈線間に刺突を加え，7は有節沈線文が施されている。同図10・19・16は斜め方向からの突き刺しによる交互刺突文が見られ，同図12は縄圧痕文が施されている。同図16～18は隆線とそれに沿った沈線とによって，楕円形の区画文

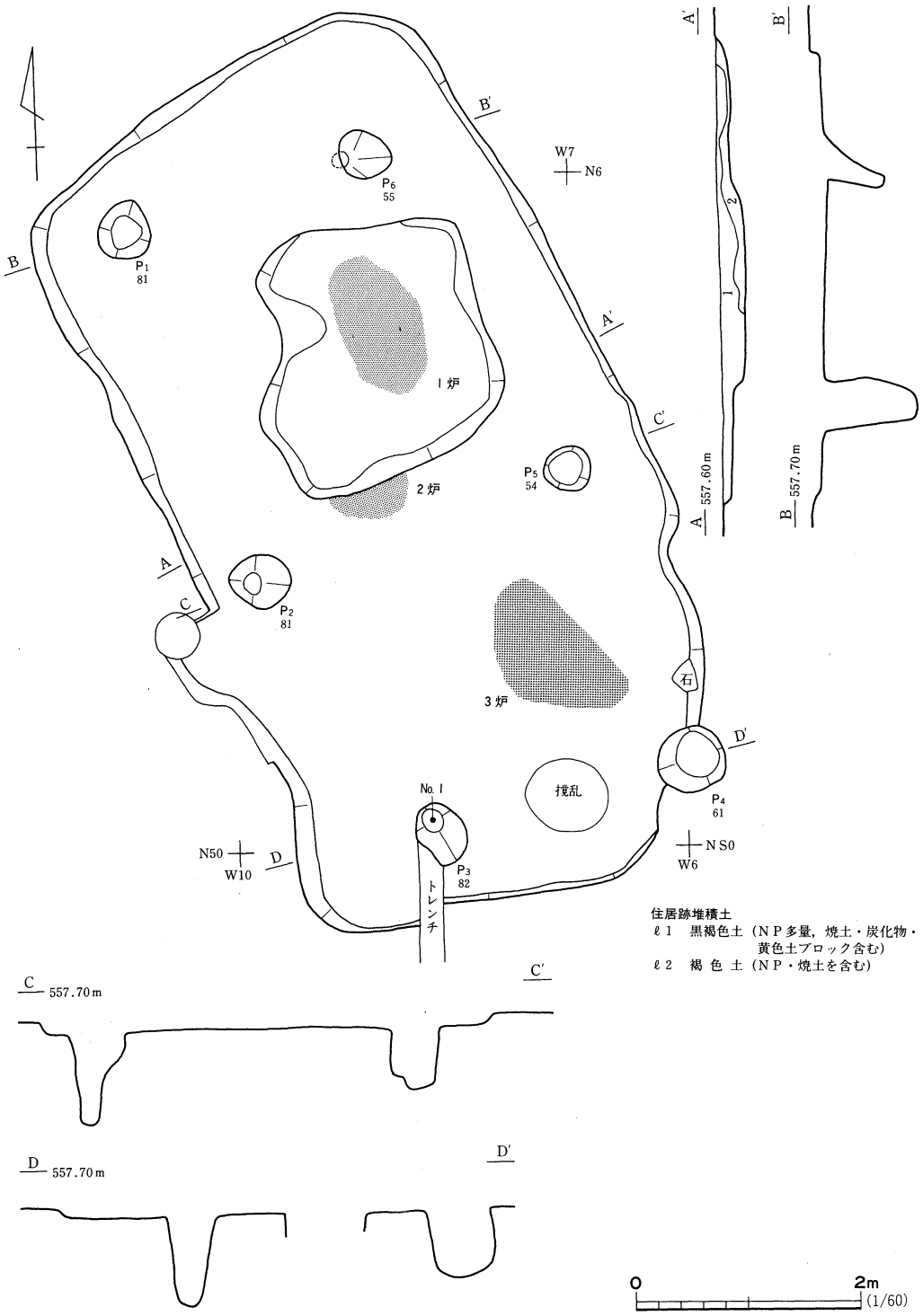

A'
B'
W7
N6
P6
55
P1
81
B
A'
1炉
C'
P5
54
2炉
A
557.60m
B
557.70m
A
C
P2
81
3炉
石
D'
P4
61
No. 1
撹乱
N50
W10
D
P3
82
トレンチ
NS0
W6
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（NP多量，焼土・炭化物・黄色土ブロック含む）
ℓ2　褐色土（NP・焼土を含む）
C
557.70m
C'
D
557.70m
D'
0
2m
(1/60)

図48　21号住居跡

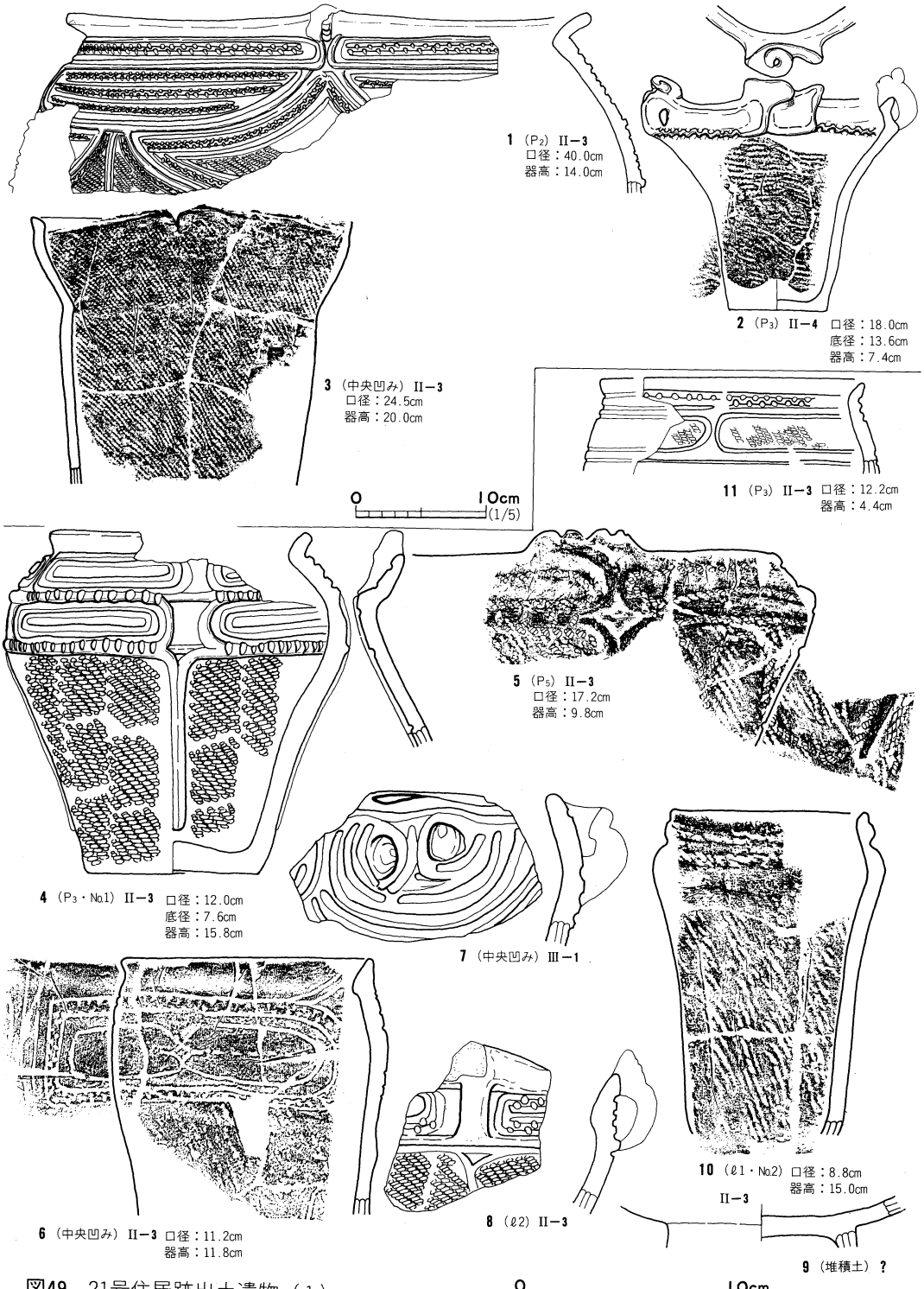


図49　21号住居跡出土遺物（1）

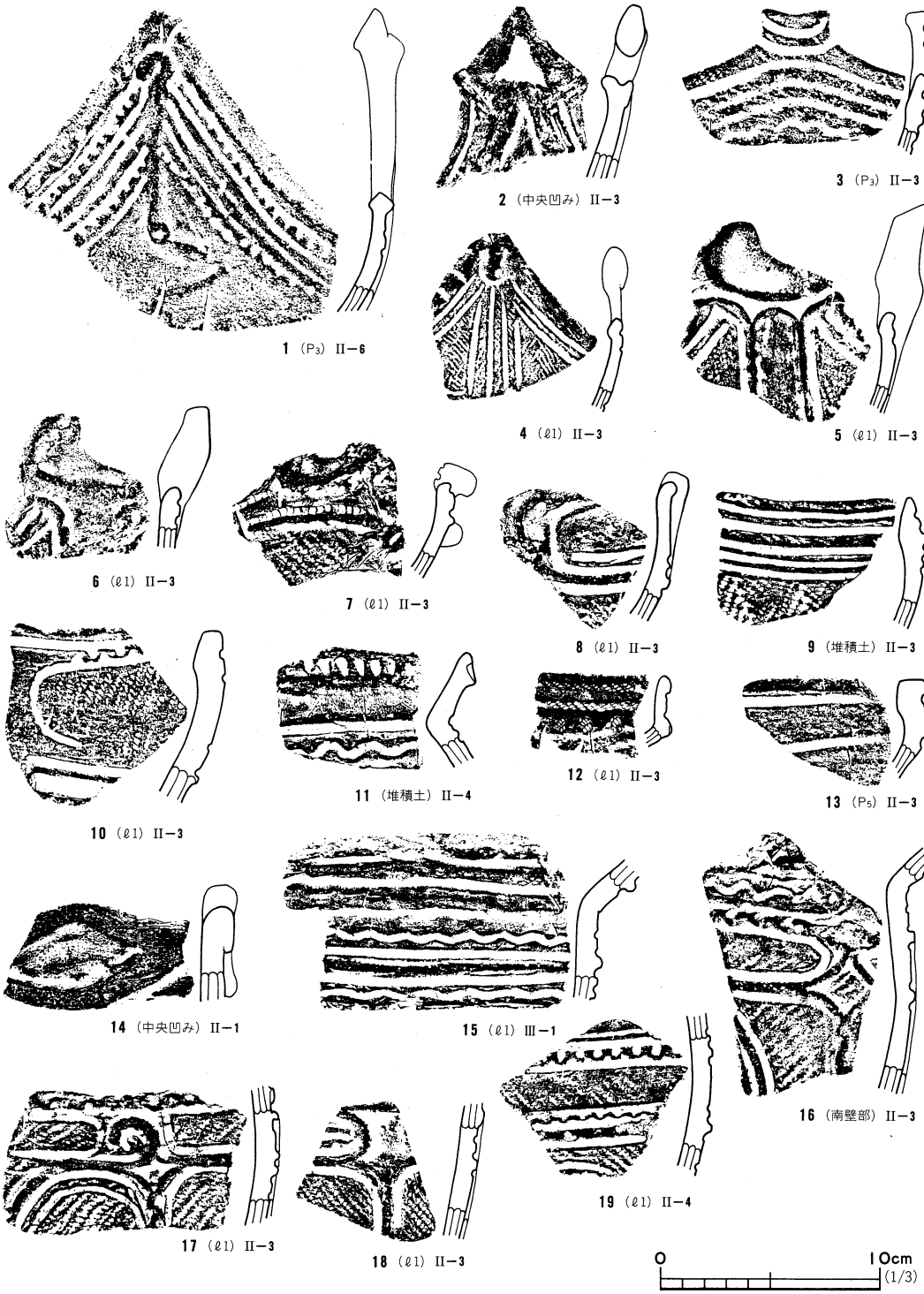


図50　21号住居跡出土遺物（2）

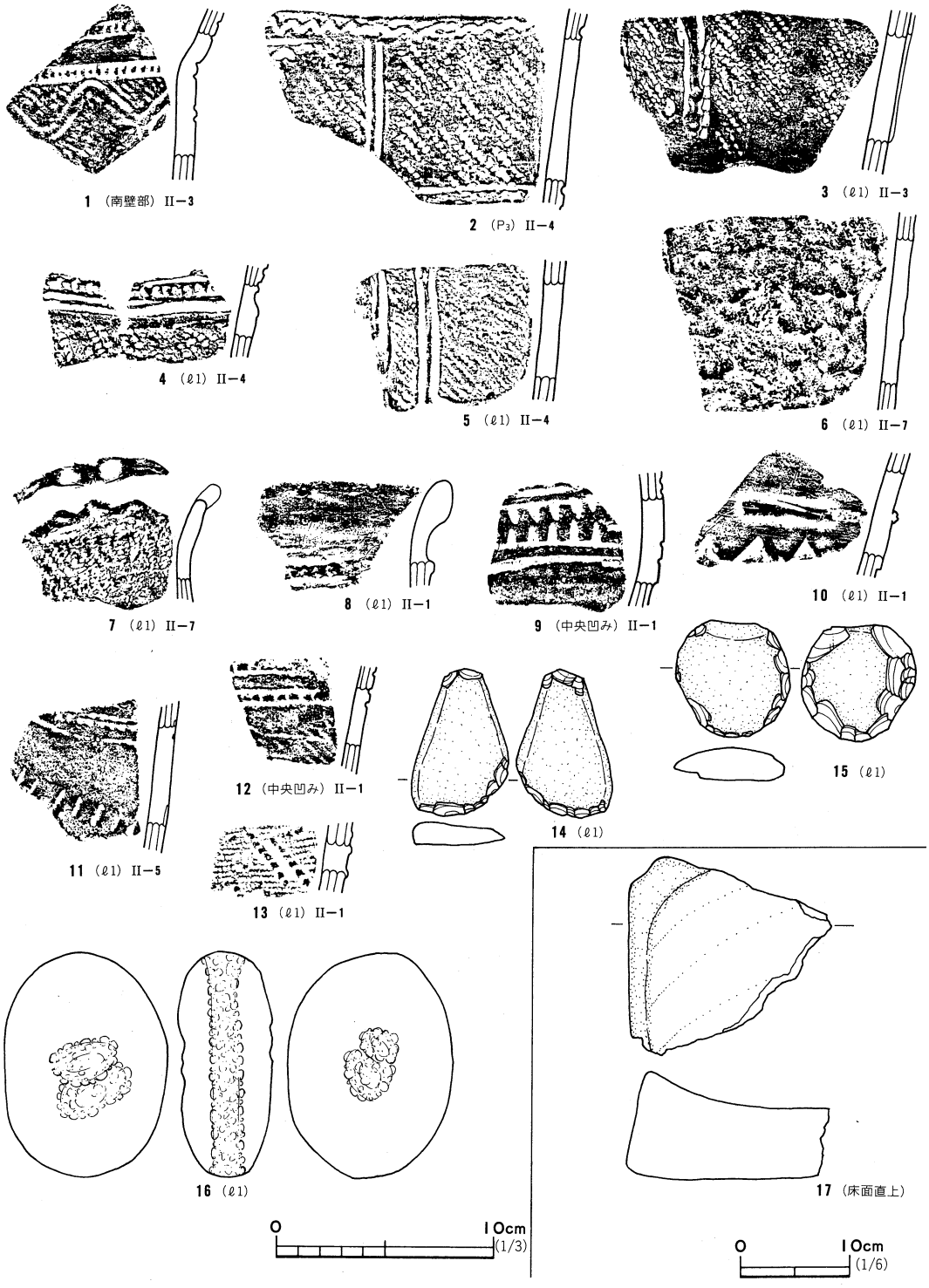


図51　21号住居跡出土遺物（3）

が描かれている。図51－1・12は，竹管の凹面を用いた連続爪形文が，同図8・13は同じ爪形文が隆線上に施されている。同図9・10は，彫刻手法による交互刺突文・三角文が認められる。同図14・15は偏平な礫の周縁部に調整剝離を加えた礫器，同図16は円礫の側縁部にはぜたような使用痕跡が見られる磨石，同図17は石皿である。

ま と め

本住居跡は遺存状態が良く，周壁や住居施設がすべて遺存していた。その特徴は長辺が短辺のほぼ2倍の規模を有すること，柱穴が住居跡の平面形と同様に長方形に配置されること，炉が住居跡の中央に長辺とほぼ平行して作られていることである。このことは法正尻遺跡で検出された遺存状態の悪い他の長方形の住居跡を検討する上で，手掛かりとなるものと考えている。本住居跡の所属時期については，出土土器中に若干大木8a式土器も見られるが，主体を占めるものが大木7b式土器であることからこの時期と考えている。　　（松　本）

22 号 住 居 跡（S I 22）

遺　　構（図52，写真27）

ケ・コ50GのＬＶ上面において検出した竪穴住居跡である。遺存状態は良く，住居跡の周壁すべてを検出することができた。平面形は円形を基調とし，規模は直径3.3ｍ程である。検出面からの深さは最大20㎝で，周壁は緩やかに立ち上がっている。床面は中央部に向かって緩やかに傾斜している。住居跡内にはＬⅢｂに近似する暗褐色土・黒褐色土が，周辺部から流れ込んだ状態で堆積していることから，自然堆積と判断した。

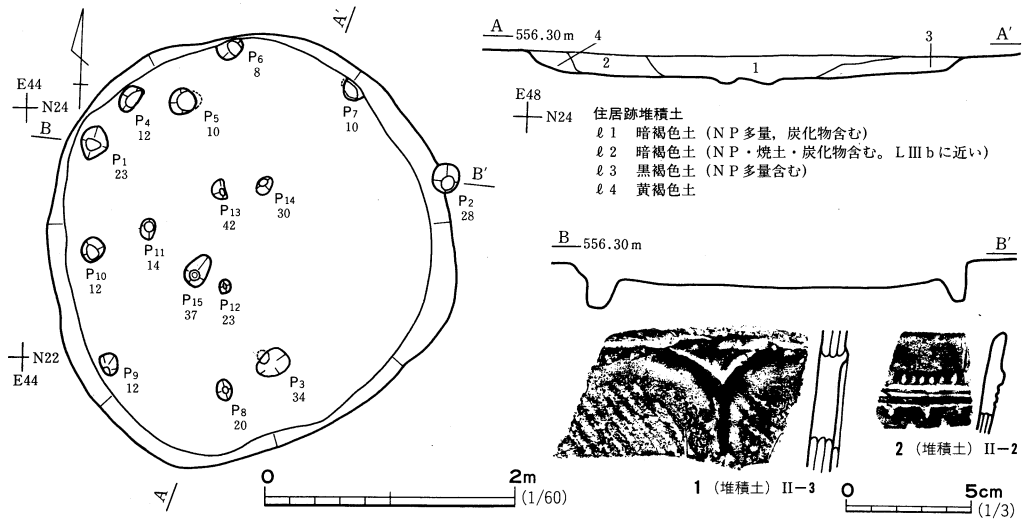


図52　22号住居跡と出土遺物

住居施設は15個の小穴が検出された。これらは直径10～20㎝，床面からの深さは8～42㎝である。P1～P10は周壁際に作られたもので，その多くは深さ10㎝程と浅いが，P1～P3は深さ23～34㎝と他の小穴に比べて深い。P11～P15は住居跡中央に設けられたもので，P13～P15は深さ30～42㎝である。本住居跡の主柱穴については，住居跡中央から検出されたP13～P15のいずれかと，壁際から検出されたP1～P3の4個で構成されるものと考えている。炉は住居跡内からは検出されなかった。

遺　　物（図52）

本住居跡からは，堆積土中から散在した状態で縄文土器片が42点出土した。図52－1は深鉢の胴部破片で，Y字状の隆線で胴部を区画している。同図2は口縁部が直線的に開く深鉢であろう。口縁部と胴部は押捺された隆線で区画されている。この隆線の直下には，三角形状の彫り込みによる交互刺突文が認められる。

ま と め

本住居跡は，直径3.3ｍほどの円形状を呈する小型の住居跡である。主柱穴は住居跡中央の1個と，これを取り囲むように壁際に三角形状に配置された3個で構成されるものと考えている。本住居跡については出土遺物は少ないものの，時期の違う土器の出土は認められない事から，大木7b式期の所産と考えている。（山　岸）

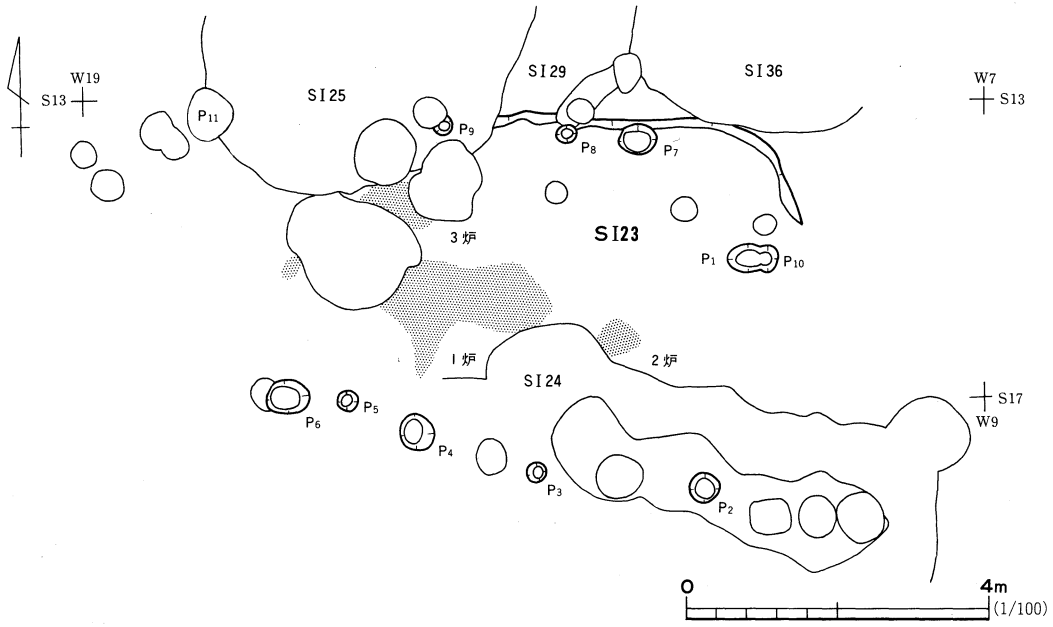
23号住居跡（ＳＩ23）

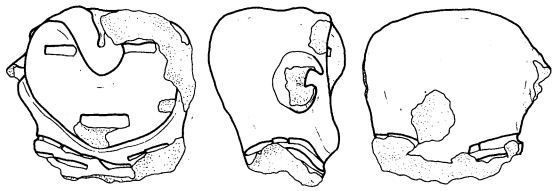
遺　　構（図53，付図3）

テ35・36GのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ24・25・29・36，ＳＫ163と重複し，ＳＩ24・25・36，ＳＫ163より古く，ＳＩ29より新しい。遺存状態は悪く，住居跡の大半は重複する新しい時期の遺構によって壊されている。このため検出できたのは，住居跡の北壁と東壁の一部だけである。

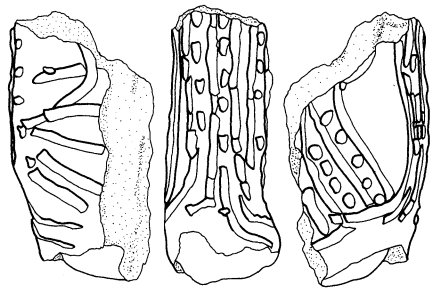
平面形はその遺存部の状態から，東西に長い長方形状を呈するものと考えられる。検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北東コーナー部で最大11㎝，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大25㎝である。住居跡内堆積土は5層に区分した。堆積状態は整ったレンズ状の堆積が見られることから，自然堆積と判断した。ℓ2は基本土層のＬⅢｂの土質に近似する。

住居施設は11個の小穴と，3基の炉が確認された。小穴の規模は直径20～70㎝，床面からの深さは29～92㎝で，深さ40～65㎝程のものが多い。小穴内には，パミスの混入が少ない褐色土が堆積していた。小穴の配置を見ると，P7～P9・P11とP2～P6は直線的に配置され，各小穴はほぼ南北に対応する位置にあることから，本住居跡の主柱穴と考えている。P1・P10もP2に

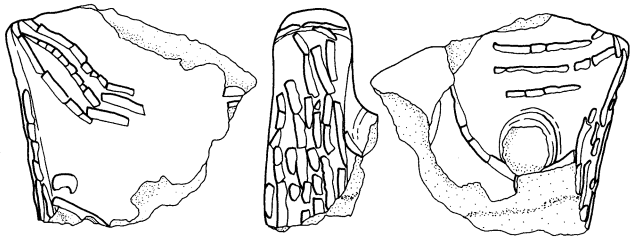




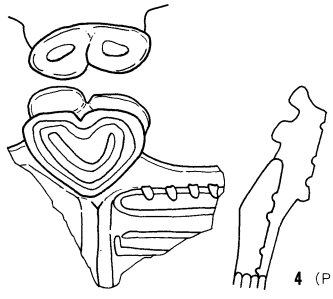
1（ℓ1・2）長さ：4.6cm
厚さ：3.6cm
重さ：78g



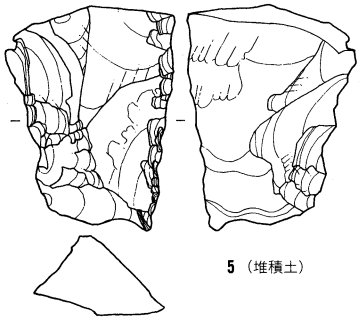
2（ℓ1・2）長さ：7.4cm
厚さ：3.0cm
重さ：82g



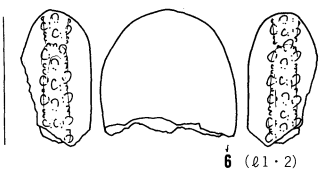
3（堆積土）長さ：5.8cm
厚さ：2.9cm
重さ：91g



4（P1）II−3



5（堆積土）



6（ℓ1・2）

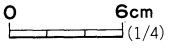


図53　23号住居跡と出土遺物（1）

図54　23号住居跡出土遺物（2）

対応する位置に作られていることから，主柱穴を構成するものと考えている。P12・P13は本住居跡に伴うものかどうか不明な小穴である。

炉は壁の遺存部や主柱穴の配列から想定される，住居跡の中央やや南壁に寄った位置に1基，南東部に1基，北西部に1基の合計3基が認められた。いずれも床面が焼けているだけの地床炉である。3基の炉はいずれも他の遺構によって一部を壊されている。規模は現状で1炉が100×230㎝，2炉が50×50㎝，3炉が50×80㎝である。炉上面の焼土化はいずれも強い。

遺　　物（図53・54）

住居跡内からは，縄文土器の小破片が散在した状態で293点，石器が3点出土した。図54－1は，北壁際の床面直上から潰れた状態で出土した。図54－1・2は深鉢の胴部である。1は垂下する隆線によって胴部を区画し，区画内には有節沈線を用いて，上部にキンチャク状，下部に連弧状の文様を描いている。区画の中央にはアヤクリ文を縦位に加えている。2は沈線を垂下させ胴部を区画するもので，沈線の下端部には小さな弧状文等を付加している。

同図3・4は中空の把手の付いた深鉢で，同図5～7・11は波状口縁の破片である。5・6の波頂部直下には，隆線による縦長の楕円形区画文が見られる。7は上下に対応する弧状文，11は口唇部直下に交互刺突文を施し，その下に沈線による長方形状の区画文を加えている。同図9は連弧文が，14は楕円形状の文様が沈線によって描かれている。同図13は楕円形状の区画文内に，縄圧痕文を施している。同図12の口縁部には，沈線を多用して文様が描かれている。同図18は断面三角形状の隆線で描いた楕円形区画文の中に，有節沈線文を施している。

図53－1～3は土偶である。2・3は体部が逆ハート状を呈する土偶の破片で，沈線や有節沈線によって文様が描かれている。2の上端部は製作時の接合痕に沿って割れている。同図4は内面に獣面を現した，深鉢の口縁部突起である。同図5は剥片の側縁部に調整剥離を加えた不定形石器，同図6は側縁部に使用痕跡の認められる磨石である。

ま　と　め

本跡は遺存部・柱穴の配置から，長辺が8m，短辺5m程の東西に長い長方形の竪穴住居跡と考えられる。本跡の所属時期については，Ⅲ群1類土器の出土が少なからず認められることから，大木8a式期と考えている。本住居跡から多く出土しているⅡ群4類土器については，ＳＩ29の土器が，何等かの要因で本住居跡内に流れ込んだものと考えている。　　（松　本）

24号住居跡（ＳＩ24）

遺　　構（図55，付図3）

ト・ナ35・36GのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ23，ＳＫ154・186・197・202・222・228，ＳＭ14と重複し，ＳＩ23，ＳＫ154・228は本住居跡より古い。その他の遺構は，

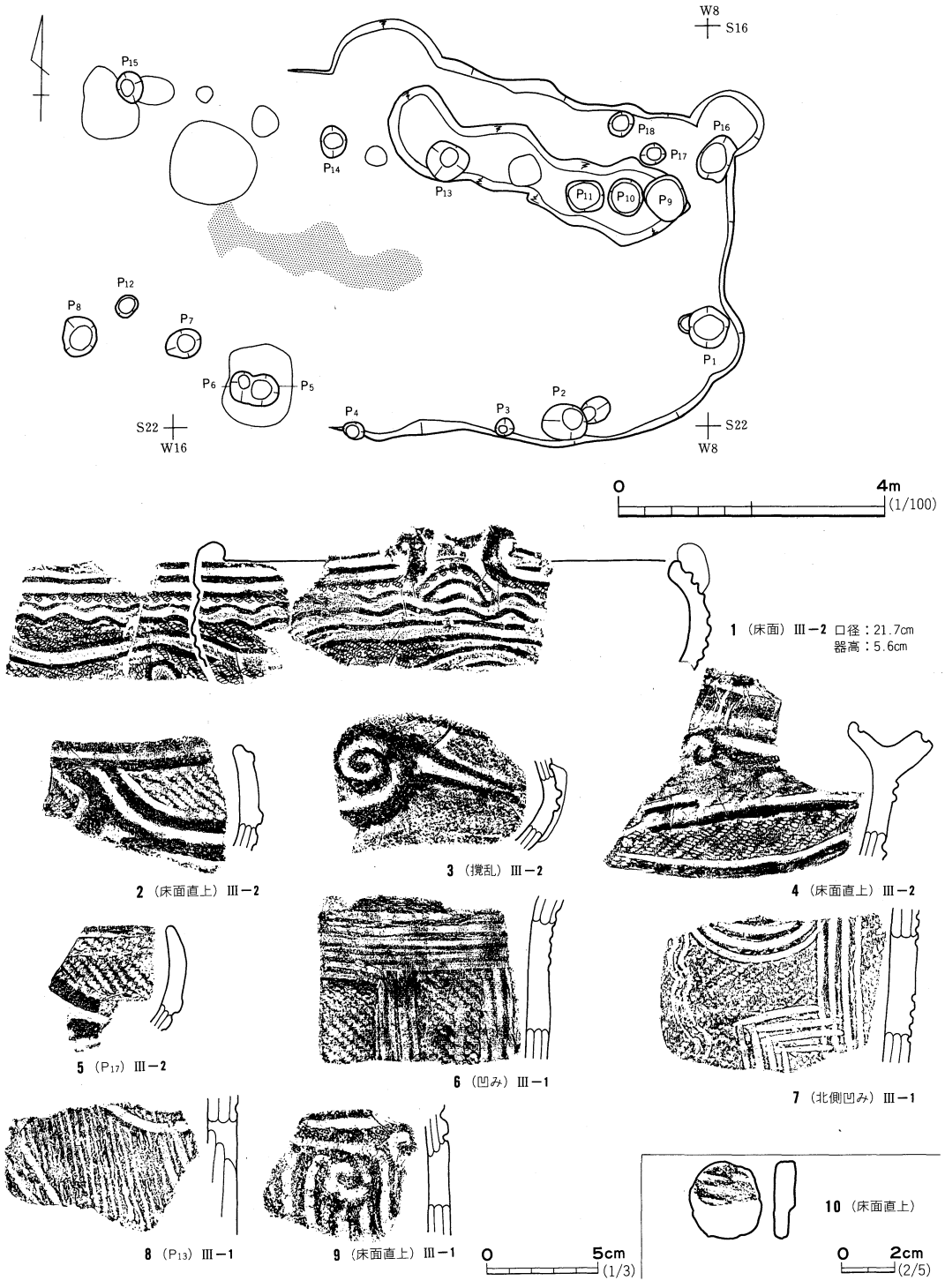


図55　24号住居跡と出土遺物（1）

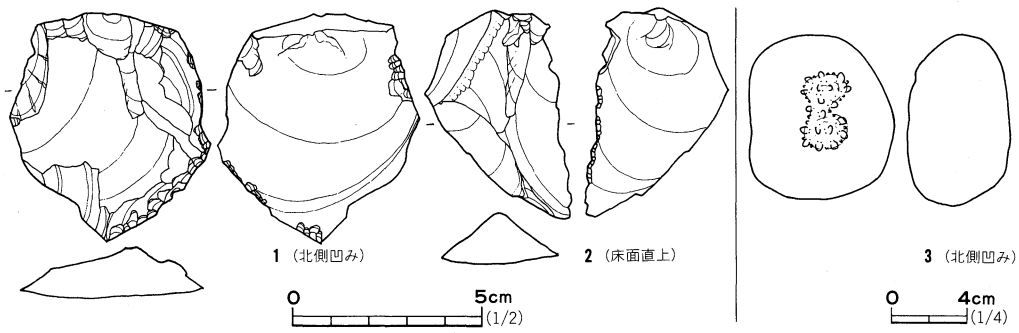


図56　24号住居跡出土遺物（2）

本住居跡の堆積土の遺存しない部分から検出されているため，新旧を判断できない。遺存状態は悪く，壁の遺存していたのは住居跡の東半部のみである。

平面形は，遺存部の状態から東西に長い長方形と考えられる。規模は南北が5.4m，東西は現況で6.8mである。東壁はほぼ真北を示す。検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北壁中央で最大10cm，周壁は緩やかに立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大10cmである。住居跡内堆積土は5層に区分した。堆積状態は壁際に高い堆積が見られることから，自然堆積と判断した。

住居施設は14個の小穴と，1基の炉が確認された。小穴の規模は直径26～70cm，床面からの深さは26～75cmで，50～60cmほどの深さのものが多い。小穴内には，パミスの混入が少ない暗褐色土が堆積していたものが多く，P3・P4には褐色土の堆積が認められた。小穴の配置を見ると，P2～P8，P9～P15は住居跡の壁に沿って直線的に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。P1もその規模・作られた位置から，主柱穴と判断した。P16～P18はその位置から，本住居跡に伴うものかどうか不明な小穴である。P5とP6，P9～P11は，それぞれごく近接した位置に作られている。これらは同時期に機能していたものとは考えられず，本住居跡に伴わない小穴も含まれている可能性がある。

炉は壁の遺存部や主柱穴の配列から想定される住居跡の中央，西に寄った位置から検出された。床面が焼けているだけの地床炉で，規模は現状で80×330cmである。炉の焼土化は強い。

遺　　物（図55・56）

住居内からは，縄文土器の小破片が散在した状態で197点，石器が6点出土した。図55－1～5は口縁部が内湾する，キャリパー状の深鉢の口縁部である。1は粘土紐を横位に施し，一部は波状文を描いている。粘土紐に沿って縄圧痕文を加えている。2・5は隆沈線によって，端部が渦巻状を呈する区画文を描く。4の口縁直下は鍔状に張り出し，この部分に渦巻文を施す。同図6～9は深鉢の胴部破片である。8の地文には撚糸文が，9は沈線を多用して文様を描くもので，

地文は施されていない。図56－1・2は剥片の側縁部に調整剥離を加えた不定形石器，同図3は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本跡は遺存部・柱穴の配置から，長辺が10ｍ，短辺が5.4ｍ程の東西が長い，長方形の竪穴住居跡と考えられる。本跡の所属時期は，出土土器から大木8b式期と考えている。　（松　本）

25号住居跡（ＳＩ25）

遺　　構（図57，付図3，写真29）

ツ・テ34・35Ｇにおいて検出した竪穴住居跡で，検出面はＳＩ23堆積土上面である。ＳＩ23・29，ＳＫ139と重複し，本跡が最も新しい。遺存状態は良く，周壁すべてを確認することができた。平面形は隅丸方形状を呈し，規模は東西が4.4ｍ，南北は現況で4.8ｍである。検出面からの深さは最大30㎝，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦でほぼ水平である。

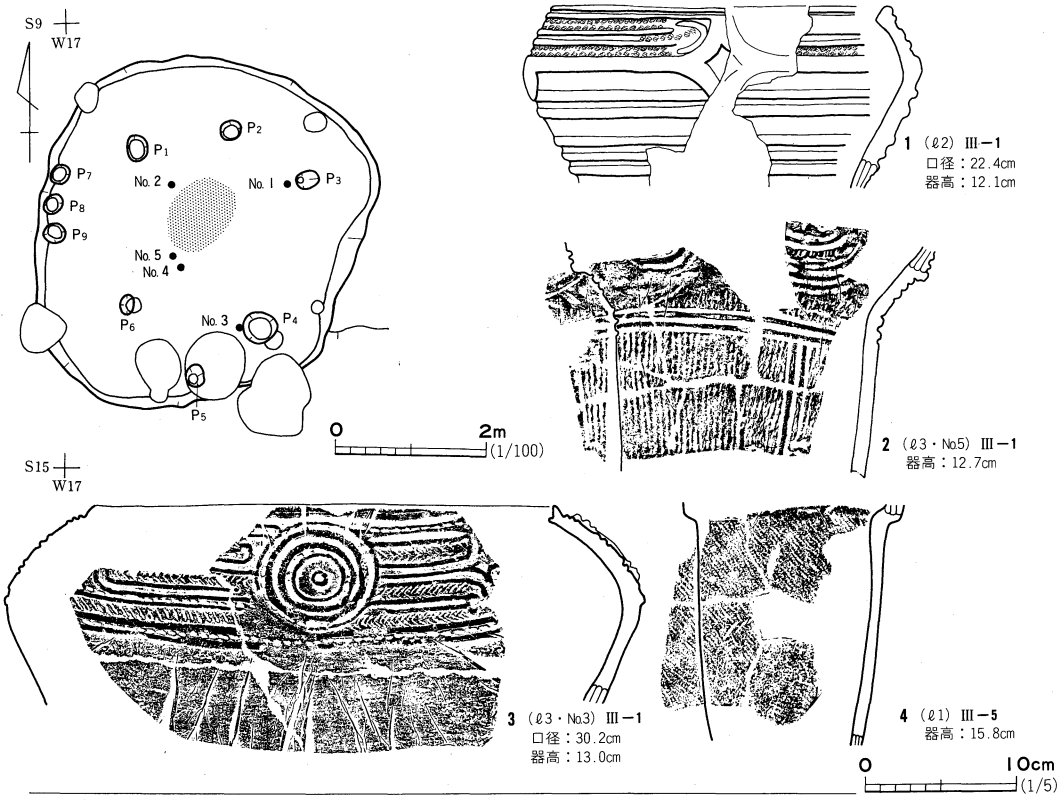
住居内堆積土は，4層に区分した。整然としたレンズ状の堆積が見られることから，自然堆積と判断した。ℓ2の土質は，基本土層のＬⅢｂ上部に堆積する土に近似している。ℓ3はＬⅤに近似するくすんだ黄褐色土である。調査当初には他の遺構を作る時の排土を住居跡内に捨てたものと考えたが，それにしてはブロックが極めて少なく，粒度も細かく均質である。ℓ3については堆積経過が判然としない。

住居施設は9個の小穴と，1基の炉が検出された。Ｐ1～Ｐ6は直径26～40㎝，深さは35～56㎝で，六角形状に配置され，各小穴が相対する位置に作られていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。これらの小穴内には，パミスを含む暗褐色土が堆積していた。Ｐ7～Ｐ9は西壁際に作られた小穴で，深さは12～16㎝と浅い。炉は住居跡の中央やや北に寄った位置に作られている。床面を浅く掘り窪めただけの地床炉である。炉の焼土化は強い。

遺　　物（図57～60）

25号住居跡からは，1,396点の縄文土器破片と9点の石器が出土している。縄文土器の多くは，住居跡堆積土中から小破片の状態で散在して出土した。図57－5は，堆積土中位から横に倒れた状態で出土している。

図57－1は口縁部が内湾するキャリパー状の深鉢で，図58－11と同じ個体の土器である。文様は口唇部直下に太い隆帯で横楕円形の区画文を描き，その下には横位に数状の隆帯を施している。区画文内には縄圧痕文を加えている。同図2は頸部が「く」の字状に括れる深鉢で，図59－2も同じ個体の土器である。頸部には沈線を横位に施し，口縁部と胴部を区画している。文様は，半截竹管を用いた平行沈線を多用して渦巻状の文様を描く。胴部には撚糸文が施されているが，口縁部に地文は施されない。



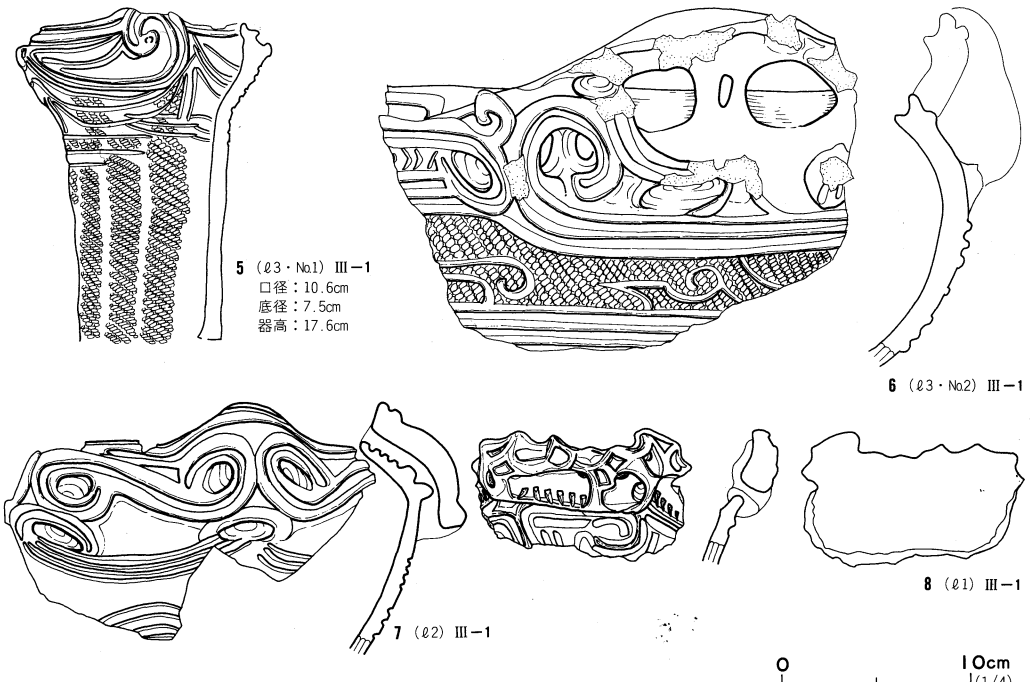
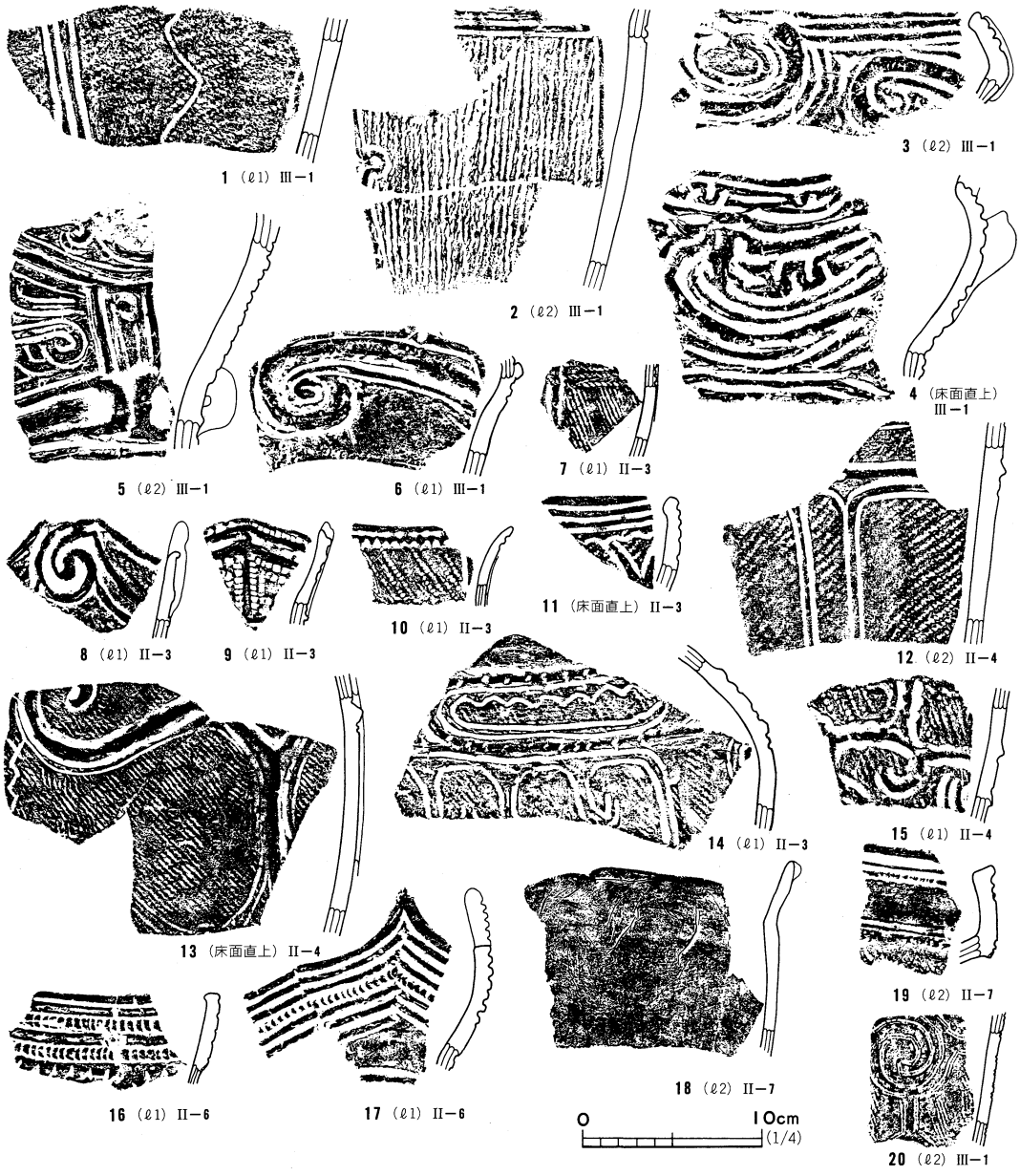


図57　25号住居跡と出土遺物（1）

図58　25号住居跡出土遺物（2）



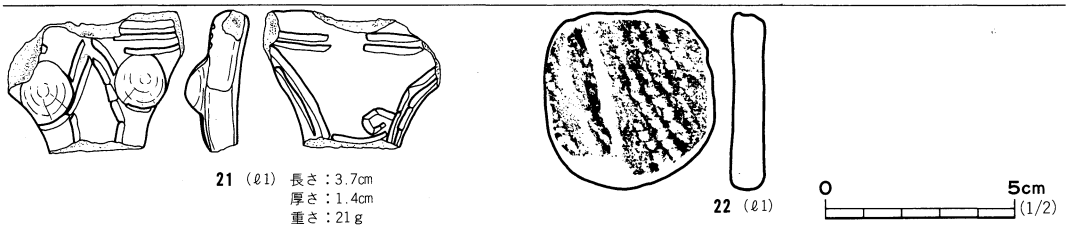


図59　25号住居跡出土遺物（3）

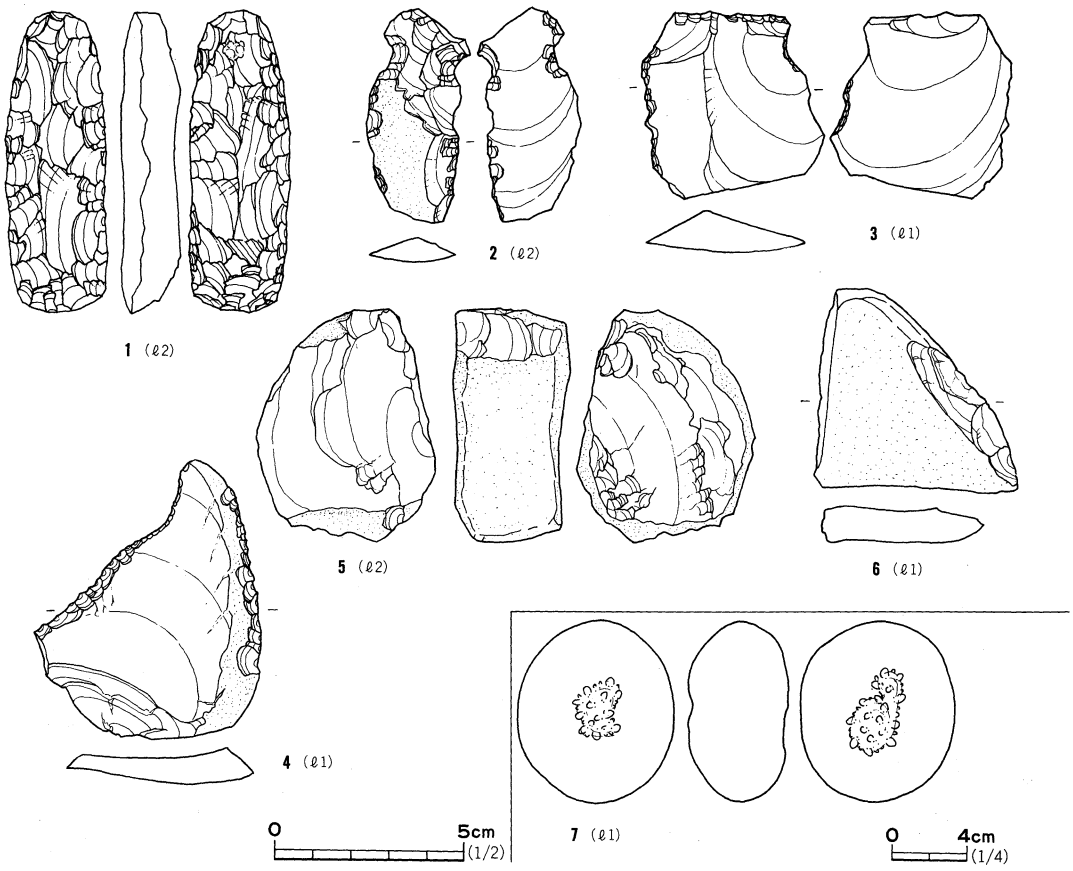


図60　25号住居跡出土遺物（4）

同図3は口縁部が内湾する鉢か浅鉢であろう。円形の文様を中心に，これを繋ぐように細い粘土紐を横位に施す。粘土紐の間にはスリットや列点文を加えている。同図4は頸部がほぼ水平に張り出す深鉢である。同図5は小型のキャリパー状の深鉢で，口縁部の対面する位置には，渦巻状の突起を一対配し，突起と突起の中間には瘤状の小突起を加えている。突起を繋ぐように細い粘土紐や沈線を横位・弧状に加えている。

図57－6～図58－3は，把手の付けられた口縁部の破片である。図58－2・3は橋状，図57－6・7は中空，同図8はS字状の把手である。図58－5～10・12は，口縁部が内湾するキャリパー状の深鉢であろう。文様は細い粘土紐や隆帯で，渦巻文や楕円形区画文を描いている。細い粘土紐には，貼り付けたままのもの（6・8）と，粘土紐の両脇を沈線等で調整したもの（5・7・9・10）とがある。5は粘土紐の両脇に縄圧痕文を施している。同図14は胴部上半に最大径を有する深鉢で，隆沈線文を縦位弧状に施す。

同図15～17は口縁部が外傾し，口唇部直下で「く」の字状に屈曲する深鉢である。15の口縁

部にはS字状の突起が付けられ，突起上には有節沈線文を施している。いずれも口唇部直下に縦位の短沈線を施し，15・16ではこの下位に沈線を主に用いて曲線的な文様を描いている。図58－20～図59－1は深鉢の胴部破片で，文様は沈線によって描かれている。図58－20～22には渦巻文が見られる。20の地文には上部に撚糸文・下部に縄文が施されている。図59－3～5は，沈線を多用して文様を描くもので，一部に隆帯による渦巻文や弧状文が見られる。

同図14は胴部上半に最大径を有する深鉢で，楕円形の区画文が施されている。胴部を区画する縦位の隆線上には，縄文が施されている。同図16・17は，半截竹管による平行沈線文が施されるものである。沈線の幅は狭く，器面に対して深い。一部に同種工具の腹面を用いた，連続爪形文を加えている。同図19は浅鉢の破片であろう。17と同じ沈線によって文様を描き，連続爪形文も一部に認められる。同図21は体部がハート状を呈する土偶，22は土器の破片を利用した土製円盤である。22は沈線によって文様を描いている。

図60－1は小型の石篦であろうか，表裏面に入念な調整剥離を加えている。裏面の一部には磨痕が見られる。同図2は石匙の未製品であろうか，剥片上部には抉りが作り出されている。同図3・4は不定形石器で，4は掻器に近い角度の刃部を作り出している。同図5は石核，同図6は自然石の一部に粗い剥離を加えた礫器，同図7は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は，一辺4.5ｍほどの隅丸方形状の住居跡である。住居跡の中央やや北寄りに地床炉があり，これを取り囲むように主柱穴が六角形状に配置されていた。本住居跡は出土した土器や他の住居跡との重複関係から大木8a式期の所産と考えている。　（松　本）

26号住居跡（ＳＩ26）

遺　　構（図61，付図3，写真20）

セ・ソ49・50Ｇに位置する竪穴住居跡である。ＳＩ13・31・34と重複し，ＳＩ31・34より新しく，ＳＩ13より古い。検出面はＬⅣ上面とＳＩ34の堆積土上面である。調査当初においては，ＳＩ31との重複に気付かなかったため，ＳＩ31とＳＩ26を同時に掘り込んでしまった。このため遺存状態は，住居跡南半部をＳＩ13によって壊されていることとあわせて悪い。検出できたのは，住居跡北半部を巡る壁溝と，柱穴と考えられる小穴だけである。

平面形は南北に長い長方形を呈するが，北壁は緩やかな弧を描いている。規模は東西5.3ｍ，南北は現況で4.3ｍである。壁高は最大12㎝で，壁の立ち上がりは急である。住居跡内堆積土は3層に区分した。堆積状態は，周辺部からの流れ込みの状態が観察できることから，自然堆積と判断している。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に向かって緩やかに傾斜している。

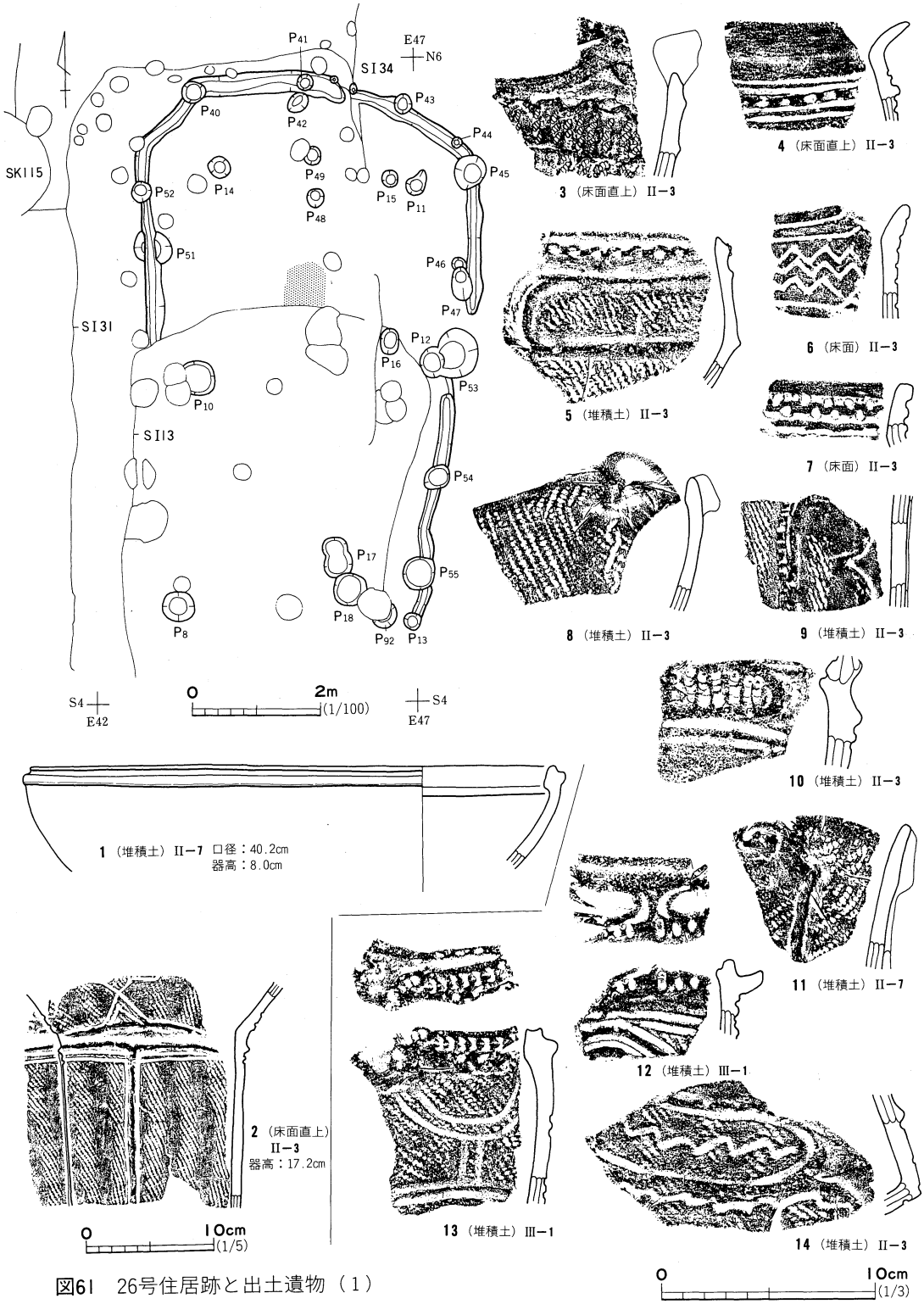


図61　26号住居跡と出土遺物（1）

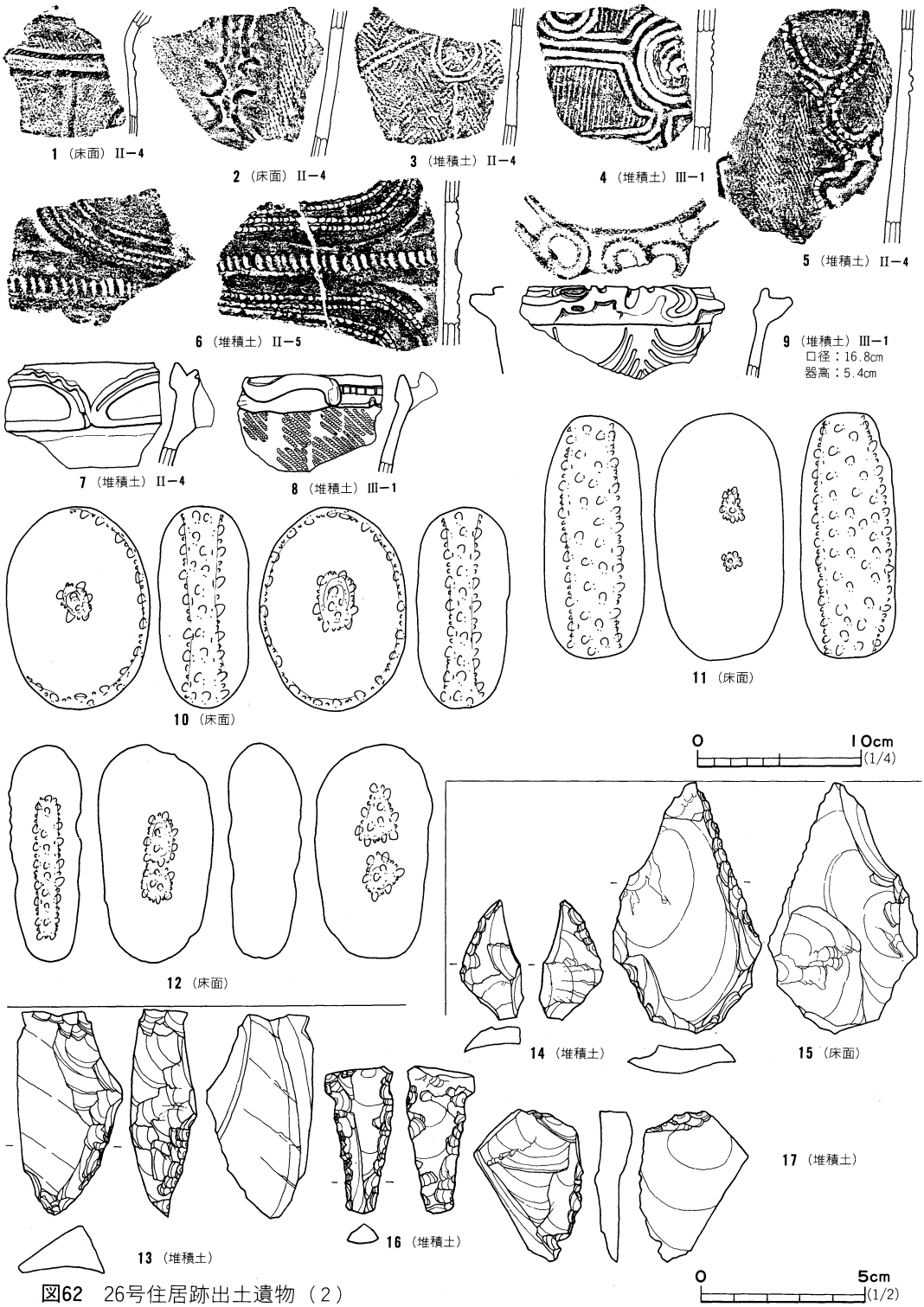


図62　26号住居跡出土遺物（2）

図61には，本住居跡に伴うと考えられる壁溝と小穴・炉を示した。小穴のうち壁溝とほぼ平行して作られている，P8・P11・P12・P14～P16，P17・P18のいずれかと，P10が本住居跡の主柱穴を構成するものと判断している。柱穴の直径は25㎝ほどのものが多く，床面からの深さは最も深いP10が60㎝で，他の小穴も40㎝以上の深さがある。炉は短辺のほぼ中軸線上に位置し，床面が焼けただけの地床炉である。炉の焼けは強かった。

遺　　物（図61・62）

26号住居跡ついては，調査当初31号住居跡との重複に気付かず同時に掘り込んでしまった。出土遺物も，一括して26号住居跡として取り上げている。このため遺物の中には31号住居跡の遺物も含まれている。26号住居跡として取り上げた遺物は，縄文土器破片217点と石器13点である。縄文土器の多くは，住居跡堆積土中から小破片の状態で散在して出土した。

図61－1は無文の浅鉢で，口縁部直下に隆帯が1条巡る。同図2は口縁部が外傾して開く深鉢である。胴部にはT字状に隆帯を垂下させている。同図3は口縁部に縦位の縄圧痕文を，同図5・14には楕円形区画文が認められる。図62－6は楕円形区画文を描く隆帯に沿って，複列の角押文が施されている。同図9の口縁部直下を巡る隆帯は，器外面に張り出している。同図4の地文には，撚糸文が施されている。

同図13は右側縁下部に急斜度の調整剥離を加えた掻器，14～17は剥片の縁辺部に調整剥離を加えた不定形石器である。同図10～12は凹部を持つ磨石で，すべての側縁部には使用によると考えられる平坦面が認められる。

ま　と　め

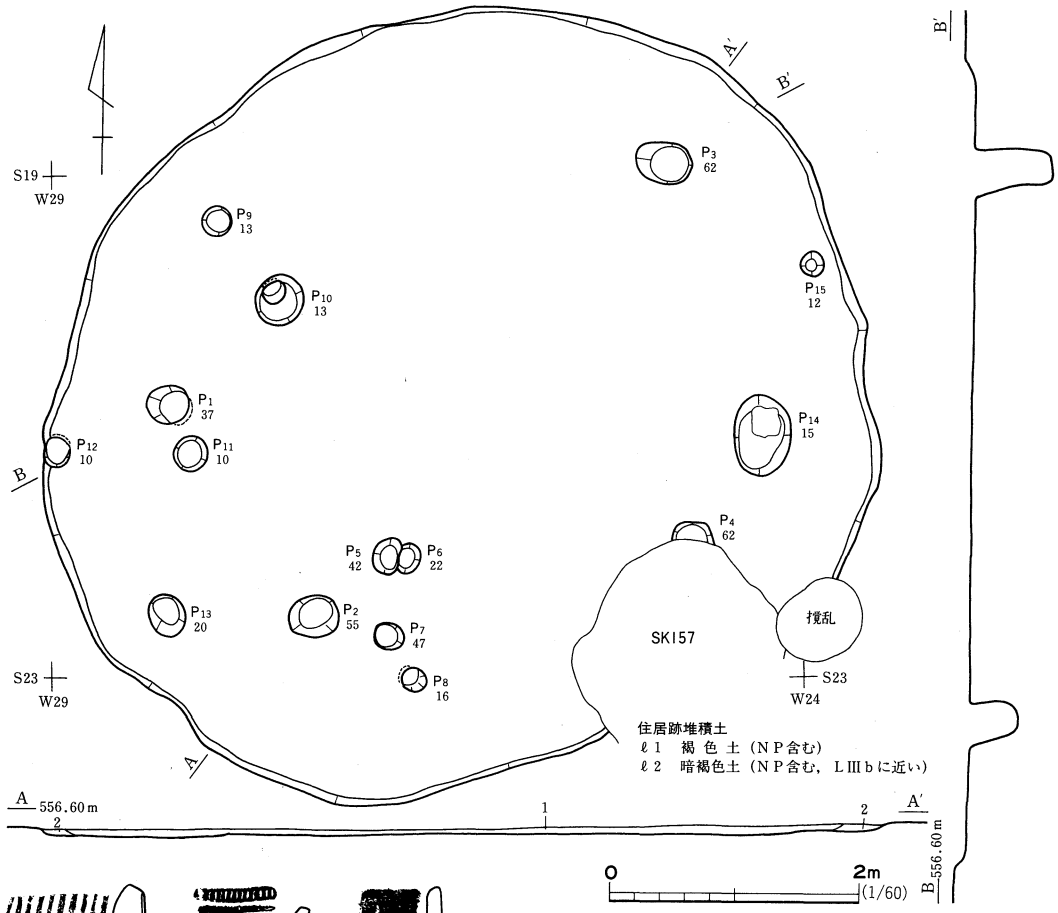
本跡は遺存部の形状・柱穴の配列から，東西5.3m，南北8m程の長方形の竪穴住居跡と考えている。住居跡施設には地床炉と，長方形に並ぶ主柱穴がある。本跡の時期は，出土遺物と遺構の重複関係から大木8a式期と考えている。（磯　上）

28号住居跡（SI28）

遺　　構（図63，写真28）

ナ・ニ31～33GのLⅣ上面で検出した竪穴住居跡で，ス～ニ31～39Gに位置する住居跡群の中では，最も西に位置する。SK157と重複し本跡が古い。遺存状態は良く，周壁すべてを確認することができた。平面形は円形状を呈し，規模は東西が5.9m，南北は6.8mである。検出面からの深さは最大12㎝で，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は固く踏み締まり，ほぼ水平である。住居跡内堆積土は2層に区分した。壁際からの流れ込みが見られることから，自然堆積と判断した。ℓ2の土質は，基本土層のLⅢb下部に堆積する土に近似している。

住居跡施設には，15個の小穴がある。P1～P4は直径40㎝，深さは37～62㎝で，長方形状に



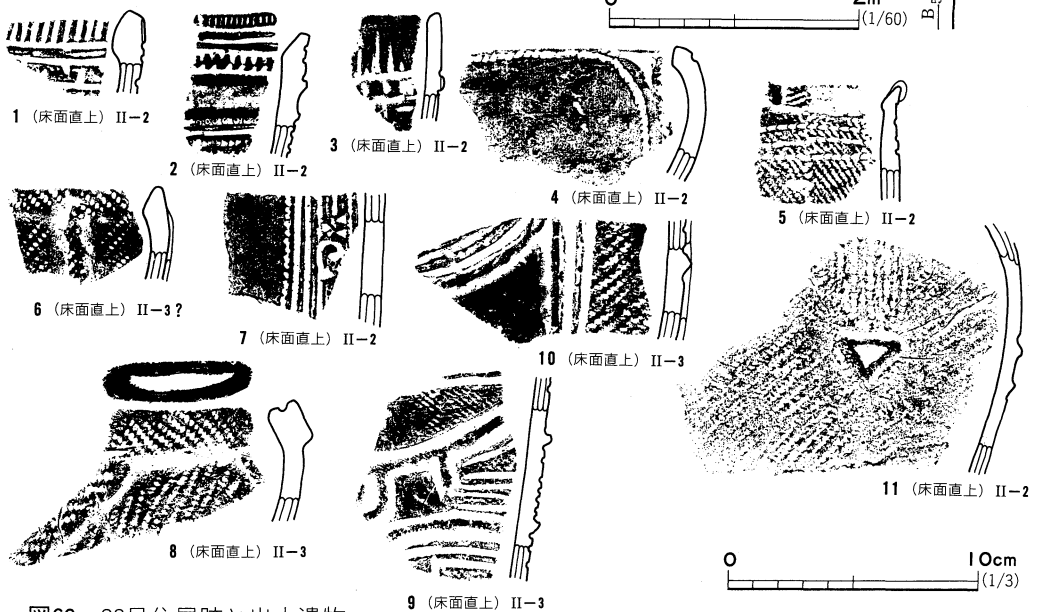


図63　28号住居跡と出土遺物

配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。これらの小穴内には，パミスを含む暗褐色土が堆積していた。P5・P7は直径約30㎝，深さは42・47㎝である。他の小穴の深さは10～25㎝と浅く，配置にも特に規則制は認められない。炉は住居内には作られていなかった。

遺　　物（図63）

28号住居跡からは，280点の縄文土器破片と1点の石器が出土している。縄文土器の多くは，住居跡堆積土中から小破片の状態で散在して出土した。図63－1・2は交互刺突文が，同図5は縄圧痕文が施されている。同図4～7は有節沈線文が施されたもので，地文は施されていない。同図7・11は有節沈線文の間に，三角文を左右交互に加えている。同図8は山形の波状口縁部の破片，同図11は深鉢の胴部破片で，胴部上半から4条の有節沈線文を垂下させ，その末端部に隆線により独立した小三角文を加えている。同図9・10は隆沈線によって，区画文的な図形を描いている。

ま　と　め

本住居跡は出土した土器，他の遺構との重複関係から大木7b式期の所産と考えている。主柱穴の配置は，法正尻遺跡から検出されている同時期の住居跡の主柱穴配置と共通する。しかし，床面に強い踏み締まりが認められるにもかかわらず，住居内に炉を持たない点は，同時期の住居跡のあり方と異なっている。　　（松　本）

29号住居跡（ＳＩ29）

遺　　構（図64，付図3，写真31）

ツ・テ33～36GのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ23・25・36と重複し本跡が古い。遺存状態は悪く，住居跡の大半は新しい時期の住居跡によって壊されている。このため検出できたのは，住居跡の北壁と西壁の一部である。平面形はその遺存部の状態から，東西が長い長方形を呈するものと考えられる。規模は現況で東西10.4ｍ，南北5.0ｍである。検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北壁で最大16㎝，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大22㎝である。住居跡内堆積土は，2層に区分した。堆積状態は壁際に，壁の崩落土と考えられるℓ2が堆積していることから，自然堆積と判断した。

住居施設は33個の小穴と，炉と考えられる焼土が2基認められた。小穴の規模は直径20～50㎝，深さは18～82㎝である。大半の小穴内には，パミス粒を含む褐色土が堆積していた。柱穴の配置は壁際に作られるものと，壁から1ｍほど離れた位置に作られ，ほぼ直線的に並ぶものがある。後者は前者に比べて規模が大きいことから，本跡の主柱穴と考えている。具体的には，P1～P3・P8・P17・P19～P21・P27～P33である。壁際を巡る小穴は，壁柱穴と考えているが，

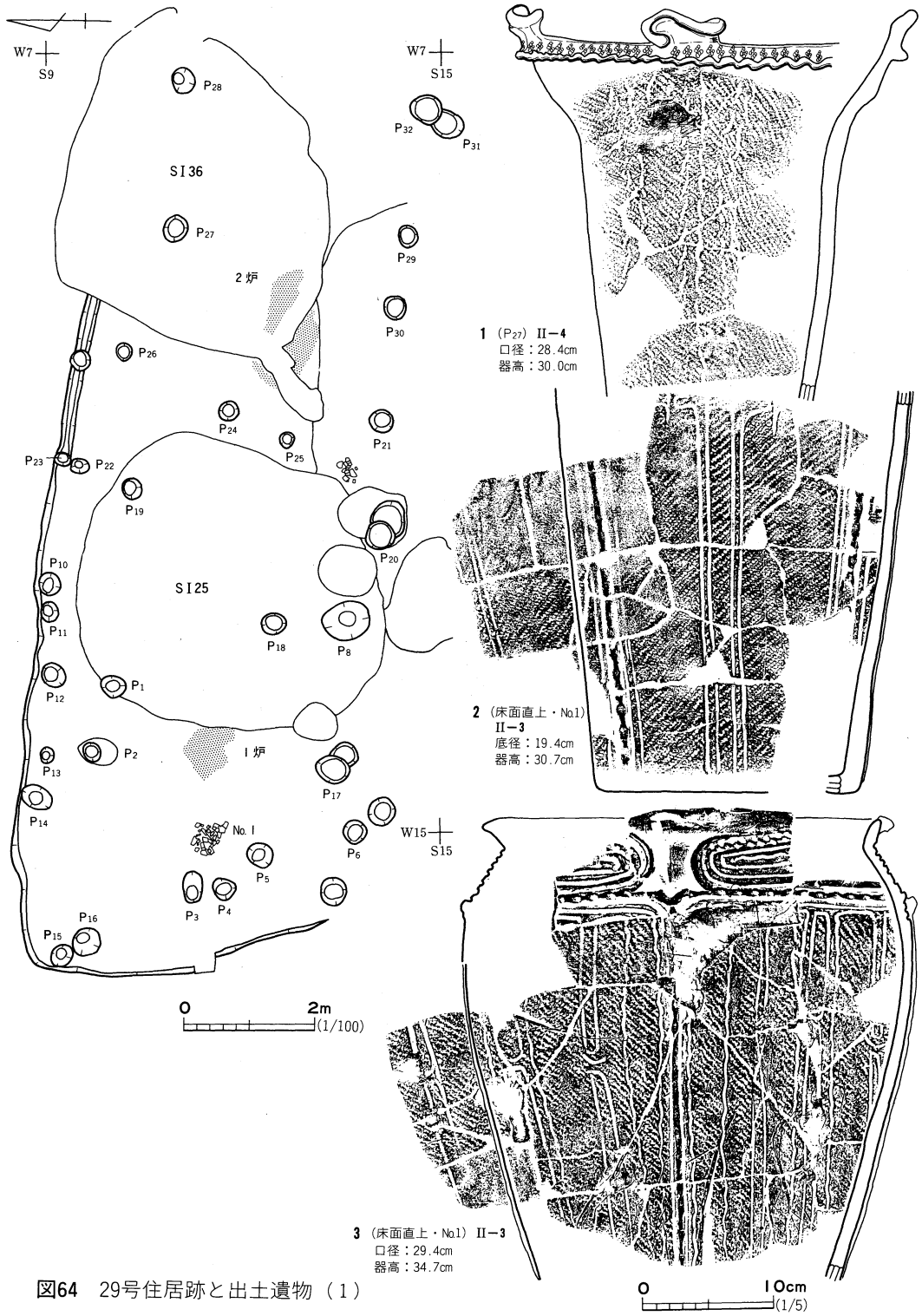


図64　29号住居跡と出土遺物（1）

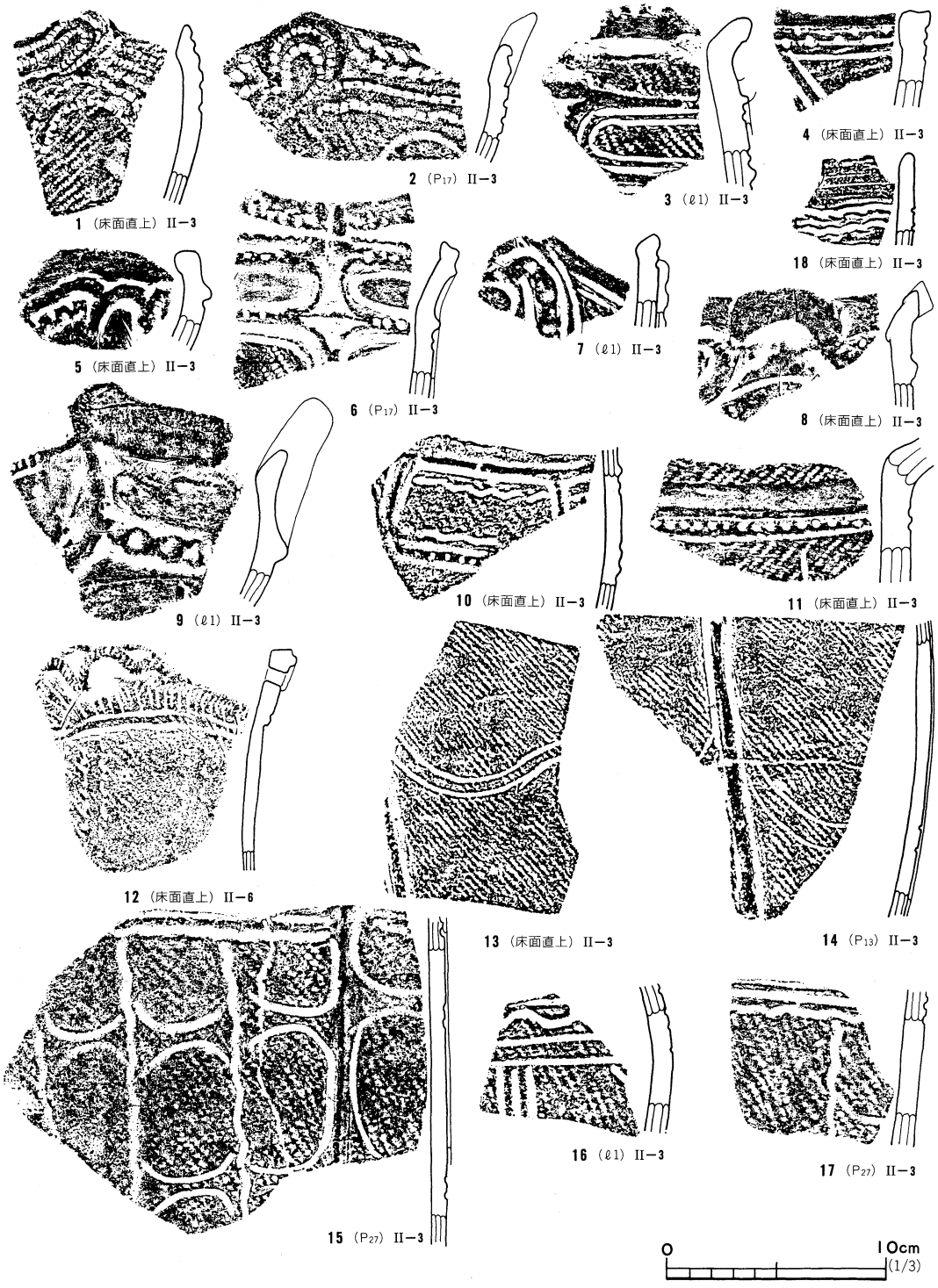


図65　29号住居跡出土遺物（2）

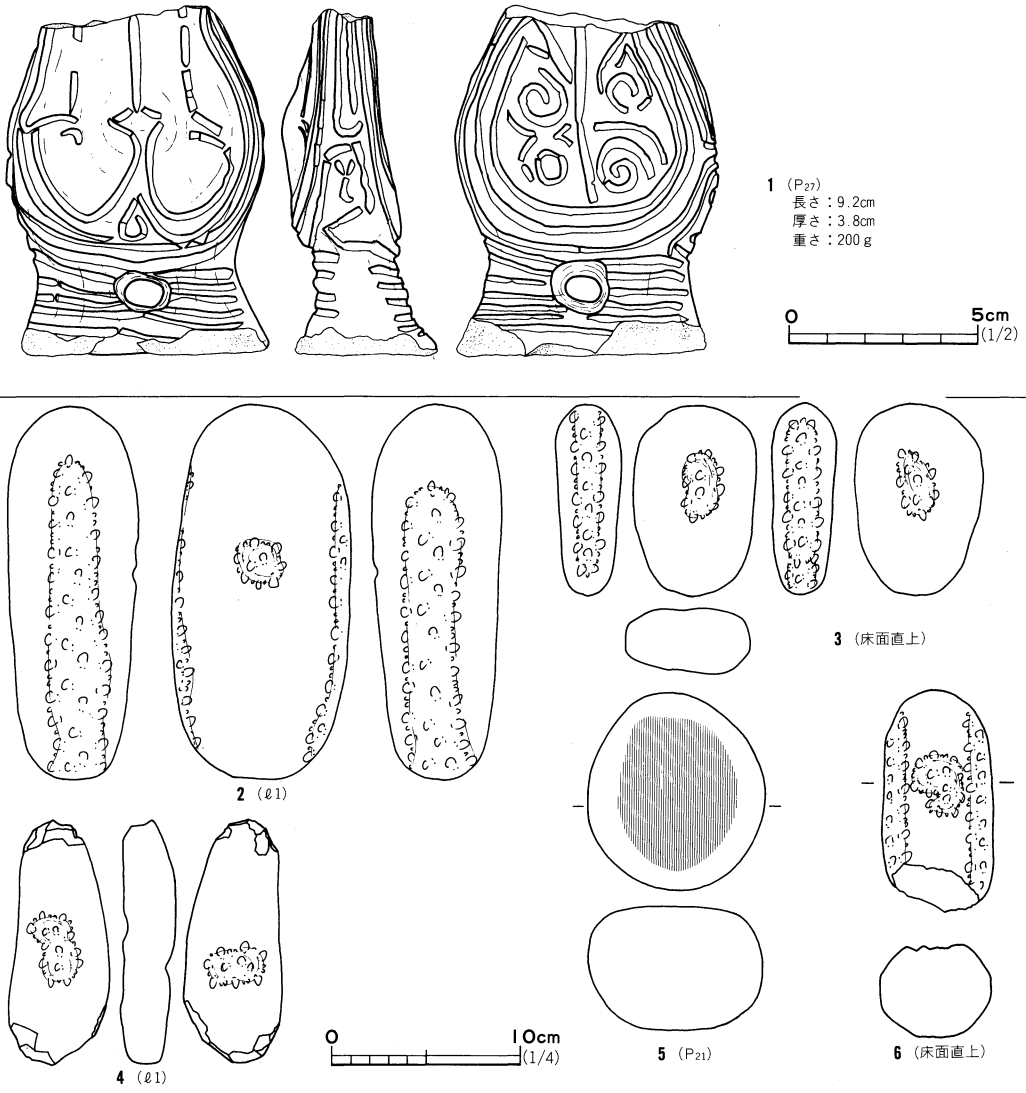


図66　29号住居跡出土遺物（3）

P10・P12・P13のように主柱穴と比較しても，遜色のない規模を有するものも認められる。2基の炉は住居跡の短辺中央に位置している。いずれも床面が焼けただけの地床炉である。炉の焼土化は強かった。

遺　　物（図64～66）

本跡からは縄文土器破片が230点，石器が10点出土している。縄文土器の多くは，小破片の状態で堆積土中から散在して出土している。図64－2・3は住居跡の西壁寄りの床面から潰れた状態で出土している。P27からは破片を折り重ねて置いたような状態で，図64－1に示した土器が，

さらにその下からは図66－1に示した土偶が出土している。

図64－1は，口縁部が外傾して開く深鉢である。口縁上には，S字状の突起を4個付けている。口縁部文様帯の幅は狭く，文様帯下端は上下から押捺を加えた波状の隆帯によって区画されている。文様帯内には縄圧痕文を縦位に施している。同図2は深鉢の胴部である。同図3は胴部が樽状をなす深鉢で，口縁部は短く外反する。口縁部には隆線による楕円形区画文を配し，区画文内には沈線文と交互刺突文を施している。胴部はY字状の隆線を垂下させ，隆線の間には沈線文によって短冊状の文様を描いている。

図65－3・6・10の口縁部には，隆線による楕円形区画文が見られる。同図1・2・5・7・12は，口縁部が緩い波状をなす深鉢である。1・2は隆線と有節沈線によって文様が描かれる。5は隆線に沿って交互刺突文が施され，12は口縁部が複合口縁状に肥厚し，ここに縦位のスリットを加えている。波頂部直下にはスリットを加えた隆線を波状に施す。

図66－1は下腹部が張り出すハート形の土偶である。全面に沈線による文様を施している。同図2～6は磨石である。2・3の側縁部は，使用による平坦な面が認められる。

ま　と　め

29号住居跡は，遺存部の状態と柱穴の配置状況から，東西14m，南北5m程の規模を有する住居跡と判断している。住居施設には，長方形に配置された主柱穴と，短辺のほぼ中央に位置する地床炉がある。P27における土器と土偶の出土状態は，特異なあり方を示すものかも知れない。本跡は出土遺物と遺構の重複関係から，大木7b式期の所産と判断した。　　（松　本）

30号住居跡（SI30）

遺　　構（図67，写真30）

タ・チ36・37GのLⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。SI21・38，SK138・185・210と重複し，SI38との新旧は不明であるが，SK210より新しく，その他の遺構より古い。遺存状態は悪く，新しい時期の遺構と重複する部分の周壁は遺存していない。さらに住居跡東壁は，流出したものか検出されなかった。平面形は隅丸長方形を基調とし，住居跡南壁は真北から30°程西を示す。規模は短辺が4.6m，長辺は現況で7.2mである。周壁の立上がりは緩やかで，壁高は北壁で最大20cmである。床面は平坦であるが，SK210と重複する部分では周辺に比べ8cm程床面が陥没していた。住居跡堆積土は混入物から2区分した。堆積状態はレンズ状の堆積を示すことから，自然堆積と判断している。

住居施設は13個の小穴と2基の炉が検出された。12個の小穴は，すべて住居跡周壁際や周壁に取り付くように配置されている。P1～P6・P8～P11・P13は直径40～50cm，深さ42～93cmで，北壁と南壁にそれぞれ4個認められることから，本住居跡の主柱穴と判断した。小穴内堆積

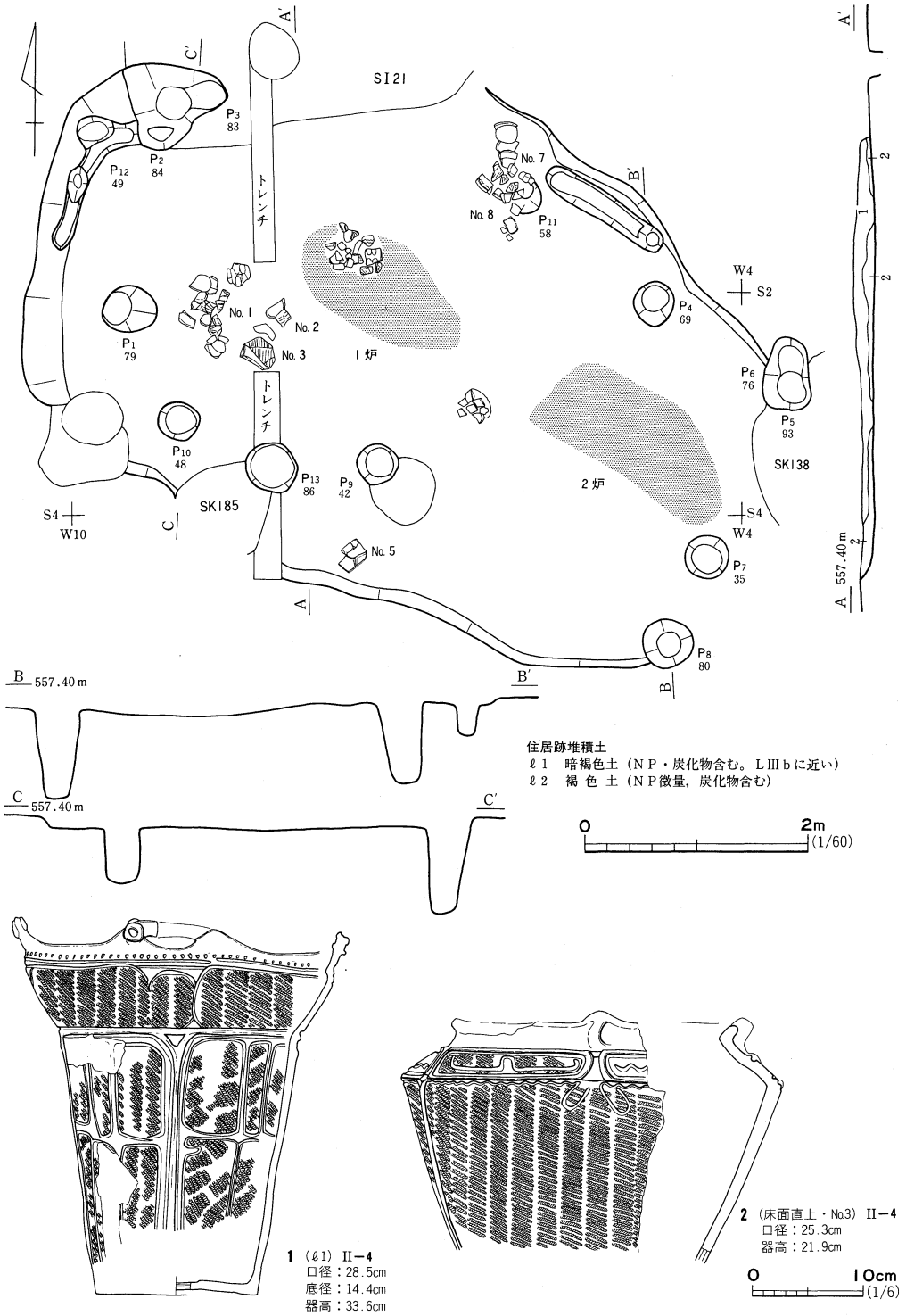


図67　30号住居跡と出土遺物（1）

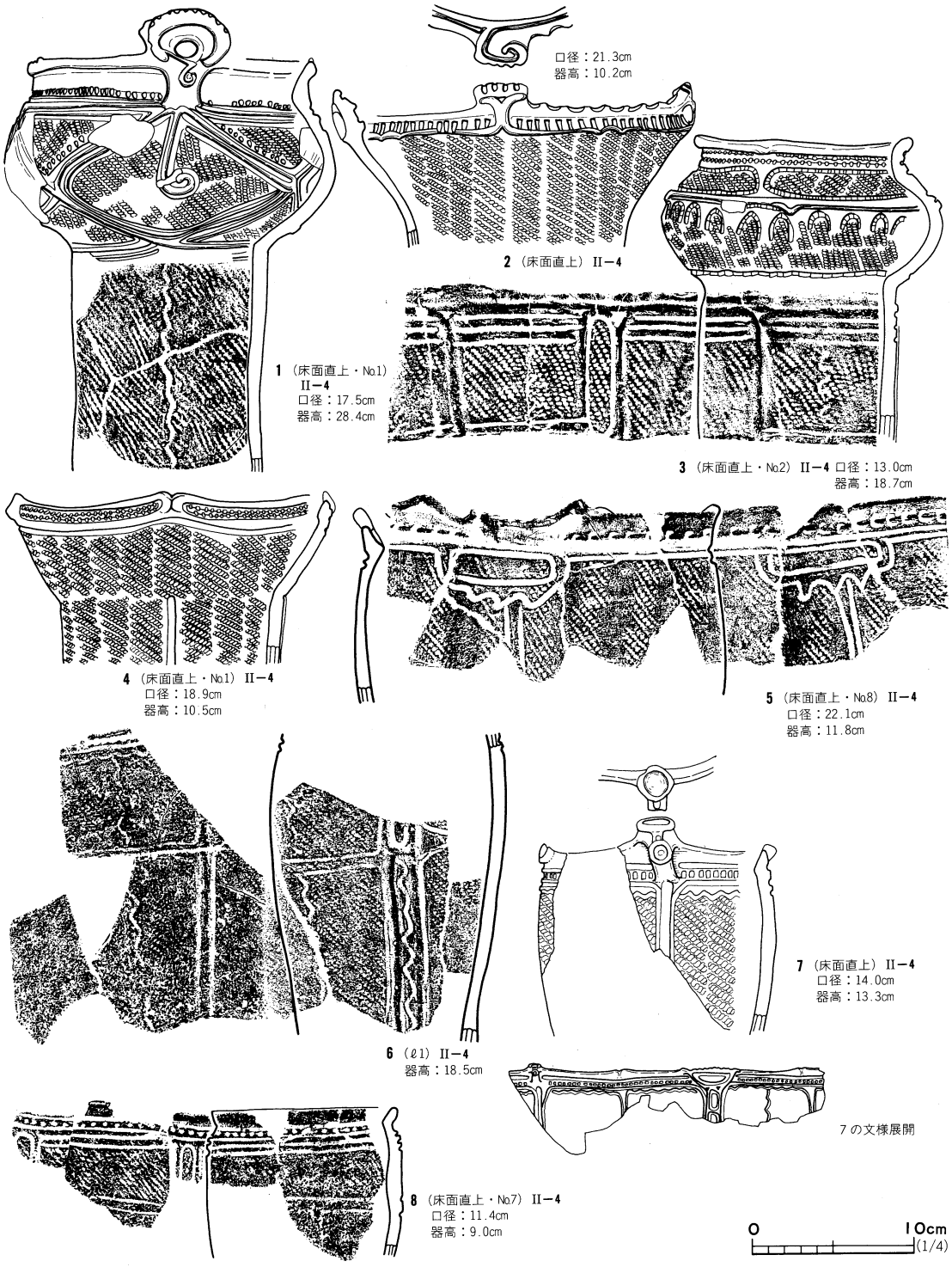


図68　30号住居跡出土遺物（2）

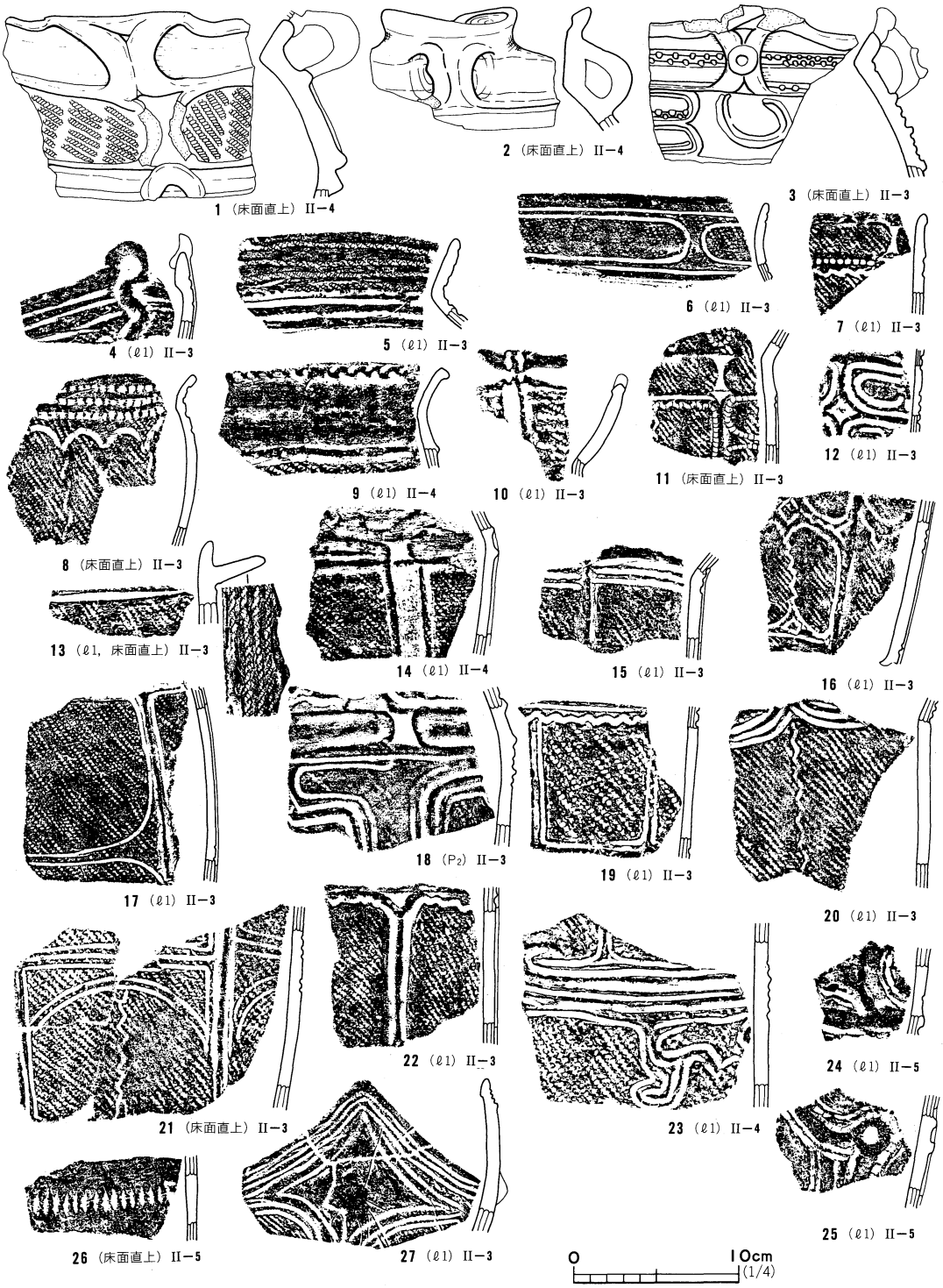


図69　30号住居跡出土遺物（3）

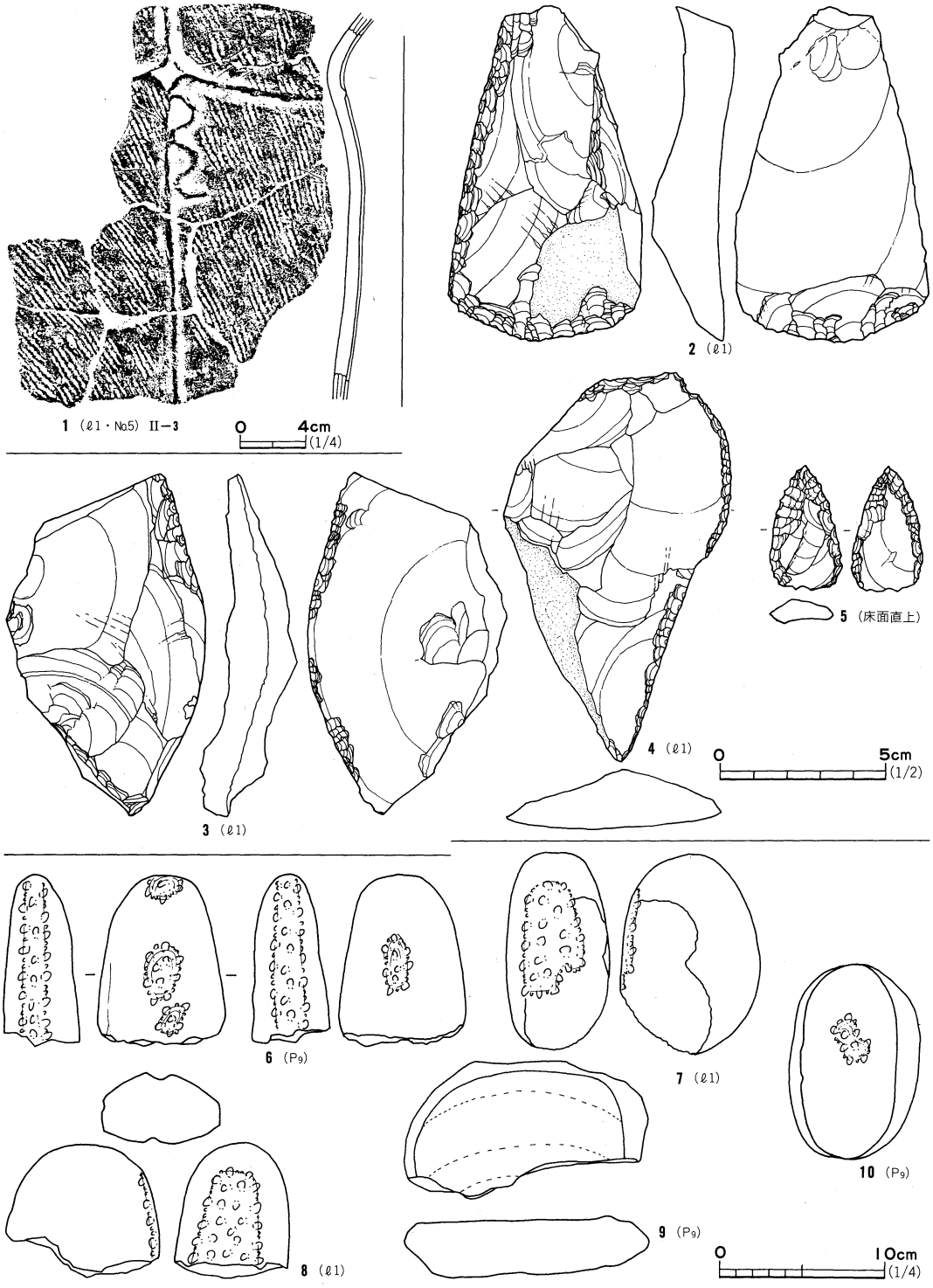


図70　30号住居跡出土遺物（4）

土はP7・P8が暗褐色土，その他の小穴には褐色土が堆積していた。2基の炉は，住居跡の長軸上に並んで検出されている。いずれも床面が焼けただけの地床炉である。平面形はいずれも楕円形状を呈し，規模は1炉が90×170㎝，2炉は80×190㎝である。2炉は土坑上面に作られているため，焼土上面は周辺の床面に比べて幾分低い。炉の焼けは強く，炉上面から6㎝下まで焼土化していた。

遺　　物（図67～70）

本住居跡からは，縄文土器破片が1,350点，石器32点と多量の遺物が出土した。とくに，住居跡の床面直上からは，一括個体や大型の破片が潰れたような状態で出土している。図67－1は口縁部が波状を呈する深鉢で，波頂部の内外面にはボタン状の貼付文が見られる。口縁部には沈線で楕円形の単位文を描く。胴部はY字状の隆線で区画され，区画内に沈線で縦楕円形文を上下2段施している。ボタン状の貼付文は，図68－7，図69－3にも認められる。同図2は胴部上端が「く」の字状に屈曲し，口縁部が短く外反する深鉢である。口縁部には小突起が付けられている。胴部の屈曲部上位には，隆沈線で楕円形区画文が描かれ，区画文内には沈線を横位に施している。胴部はY字状の隆線で区画され，屈曲部直下には波状沈線文を施している。この沈線は口縁部の突起下位で，「ハ」の字状の図形を描いている。

図68－1・3は，口縁部が球形状を呈する深鉢である。1には上部が環状を呈する，橋状の把手が付けられている。共に口唇部直下に無文帯が見られ，その下端に1は刺突文，2は交互刺突文が施されている。1の無文帯下には隆沈線により菱形の区画文が描かれ，頂点部から隆沈線を垂下させている。この隆沈線の下端は渦巻文を描き，区画文上部には刺突文を加えている。3は隆線で口縁部文様帯をさらに上下に区画し，上部には楕円形区画文，下部にはC字状のアクセント文を有節沈線で描いている。胴部には1が波状沈線，2はY字状の隆線を施している。この隆線の一部は，2本一組で配置され，その間に縦長の楕円形文が見られる。胴部中位には，横位の沈線文を施す。同図6にも，これに近い胴部文様が認められる。

同図5・7・8も口縁部を無文とするもので，5の口縁部下端には爪形文，7・8には列点状の刺突文を施す。7・8の胴部文様は同図3に類似する。同図2・4は口縁部が外傾する深鉢で，口唇部直下に幅の狭い文様帯を配している。2では縦の短沈線，4は交互刺突文を施す。図69－5・10・13は，縄圧痕文が施されたものである。13は鍔状に張り出した粘土板の下面に施されている。同図24・25は隆線に沿って2列の角押文が施されている。

図70－2は掻器，同図5は石鏃，同図3・4は不定形石器である。4の刃部の角度は同図2に近い。同図6～8・10は凹部を持つ磨石で，すべての側縁部には敲打痕状の痕跡が認められる。同図9は石皿である。

ま と め

本跡は，長方形状を呈する住居跡である。住居施設には，長方形状に配置された8個の主柱穴と地床炉が2基検出された。復元できた土器については潰れたような状態で出土し，出土層位もほぼ同じであることから，極めて一括性の高いものと考えている。本住居跡の所属時期は，出土遺物から大木7b式期と考えている。　（松　本）

31号住居跡（SI31）

遺　　構（図71，付図3，写真20）

セ・ソ49・50Gに位置する竪穴住居跡である。SI13・26・34，SK131と重複し，SI13・26より古く，SI34より新しい。検出面はLⅣ上面とSI34の堆積土上面である。調査当初においては，SI26との重複に気付かなかったため，SI31とSI26を同時に掘り込んでしまった。このため遺存状態は，住居跡南半部をSI13によって壊されていることとあわせて悪く，検出できたのは住居跡北半部を巡る壁溝と，柱穴と考えられる小穴だけである。

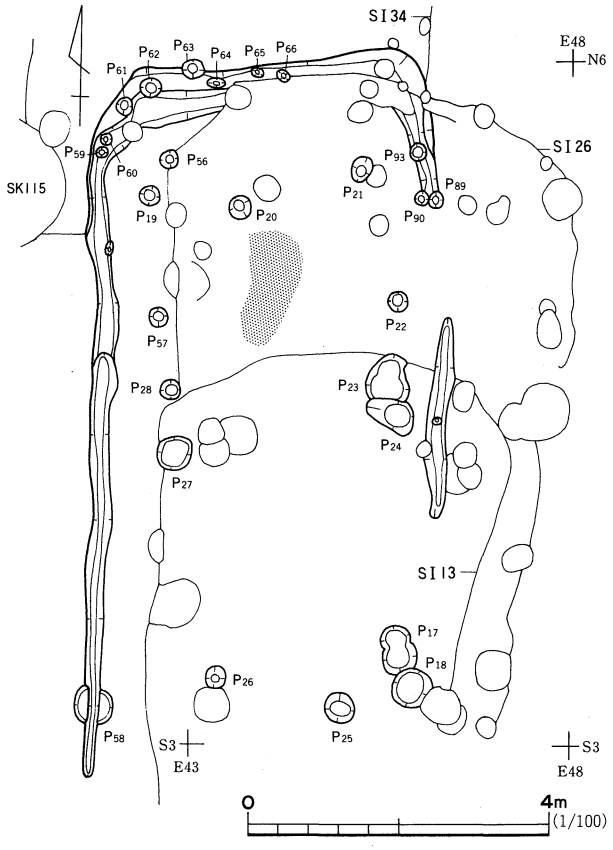


図71　31号住居跡

平面形は，ほぼ南北に長い長方形状を呈する。規模は東西4.8m，南北は現況で4.0mである。壁高は最大14cmで，壁の立上がりは急である。住居跡内堆積土は2層に区分した。堆積状態は壁際に高い堆積が見られることから，自然堆積と判断している。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様，北から南に向かって緩やかに傾斜している。

図71には本住居跡に伴うと考えられる壁溝と小穴・炉を示した。小穴のうち壁溝とほぼ平行するように作られているP19～P28とP17・P18のいずれかが，本住居跡の主柱穴を構成するものと判断し

ている。柱穴の直径は25㎝ほどのものが多く，床面からの深さは最も深いP20が86㎝，最も浅いP26が31㎝で，他の小穴も42㎝，あるいはそれ以上の深さを有している。炉は短辺のほぼ中軸線上に位置し，床面が焼けただけの地床炉である。規模は南北160㎝，東西60㎝で，楕円形状の平面形を呈している。炉の焼けは強い。

遺　　物

31号住居跡ついては，調査当初26号住居跡との重複に気付かず同時に掘り込んでしまった。出土遺物も，一括して26号住居跡として取り上げている。このためこれらの遺物の中に31号住居跡の遺物が含まれているものと考えているが，明確に本跡に伴う遺物は認められなかった。

ま と め

本跡は遺存部の形状・柱穴の配列から，南北は9ｍ程の規模を有するものと考えている。住居施設には，地床炉と長方形状に並ぶ主柱穴がある。本跡の時期は，遺構の重複関係から大木7b式～大木8a式期のいずれかの時期と考えられる。（磯　上）

32号住居跡（ＳＩ32）

遺　　構（図72，付図3，写真32・44）

ニ・ヌ34・35Ｇにおいて検出した竪穴住居跡で，検出面はＬⅣ上面である。ＳＩ44・45，ＳＫ199・200・236・240・253と重複しＳＫ199・200より古く，他の遺構より新しい。遺構の重複が著しいため遺存状態は悪く，住居跡の北壁と南東コーナー部を確認できただけである。平面形は台形状を呈し，北壁はほぼ東西を示している。規模は現況で東西が6.6ｍ，南北は6.2ｍである。検出面からの深さは，最大18㎝で周壁の立上がりは緩く，床面は平坦である。

住居跡内堆積土については，土層観察用畦の設定場所が不適当であったため，詳細に観察し得なかった。しかし，調査時の所見では，人為堆積を示すような知見は得られなかった。堆積土の上部には，ＬⅡに近似する暗褐色土が堆積していた。

住居施設は11個の小穴と，1基の炉が本跡に伴うものと考えている。11個の小穴P1～P8・P10・P12は直径30～86㎝，深さは31～92㎝で，P12を除くほかは40㎝以上の深さを有している。これらの小穴は，想定される住居跡の壁際にほぼ直線的に配置され，それぞれ南北に相対する位置にあることから，本住居跡の主柱穴と判断した。これらの小穴内には，混入しているパミスの量に多少はあるが，褐色土を主体とする土が堆積していた。炉は住居跡の中央から西に寄った位置に作られている。床面が焼けているだけの地床炉で，規模は東西290㎝，南北56㎝である。炉の焼土化は強い。

遺　　物（図72～74）

32号住居跡からは，1,380点の縄文土器片と16点の石器が出土している。縄文土器の多くは，

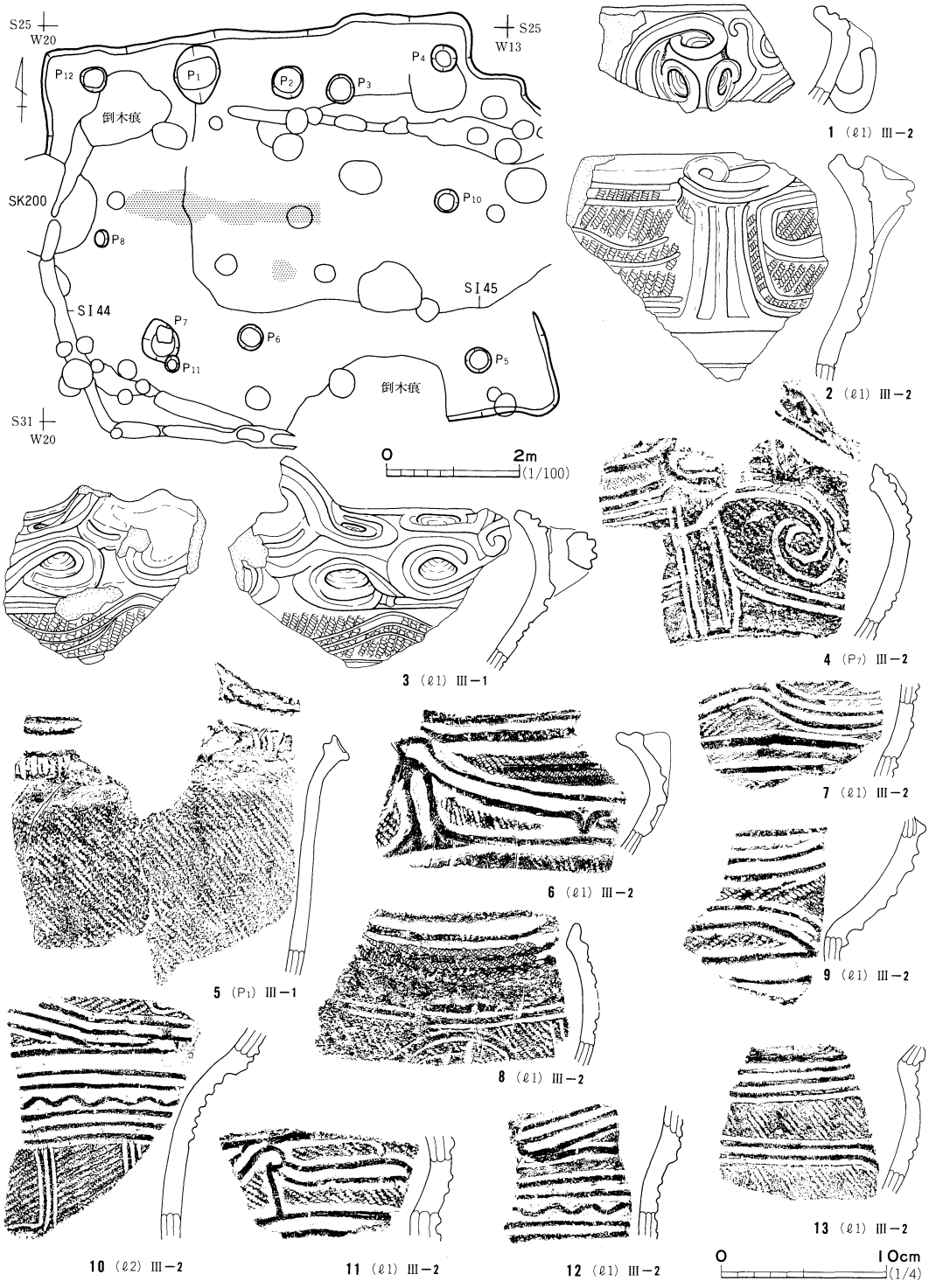


図72　32号住居跡と出土遺物（1）

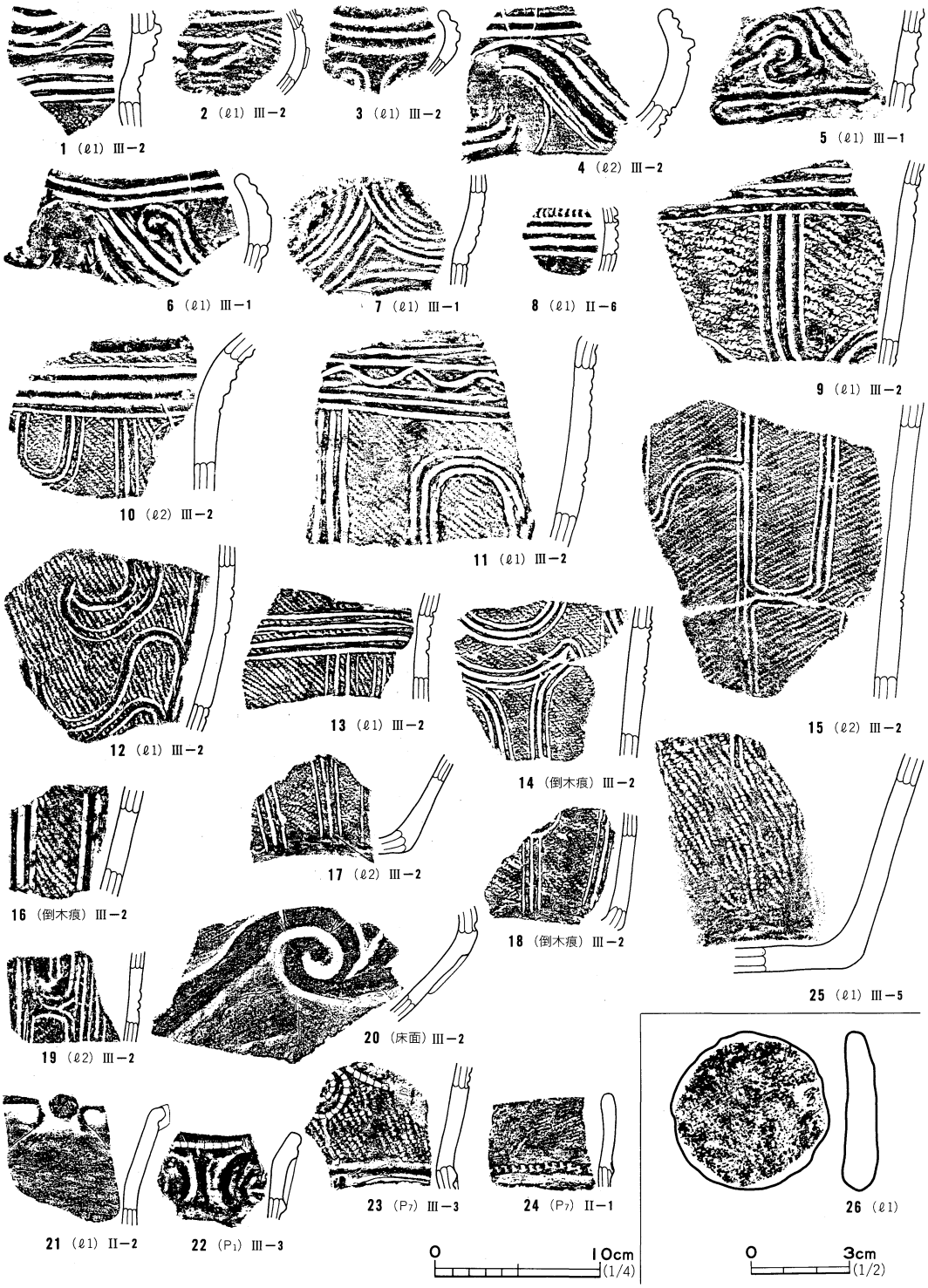
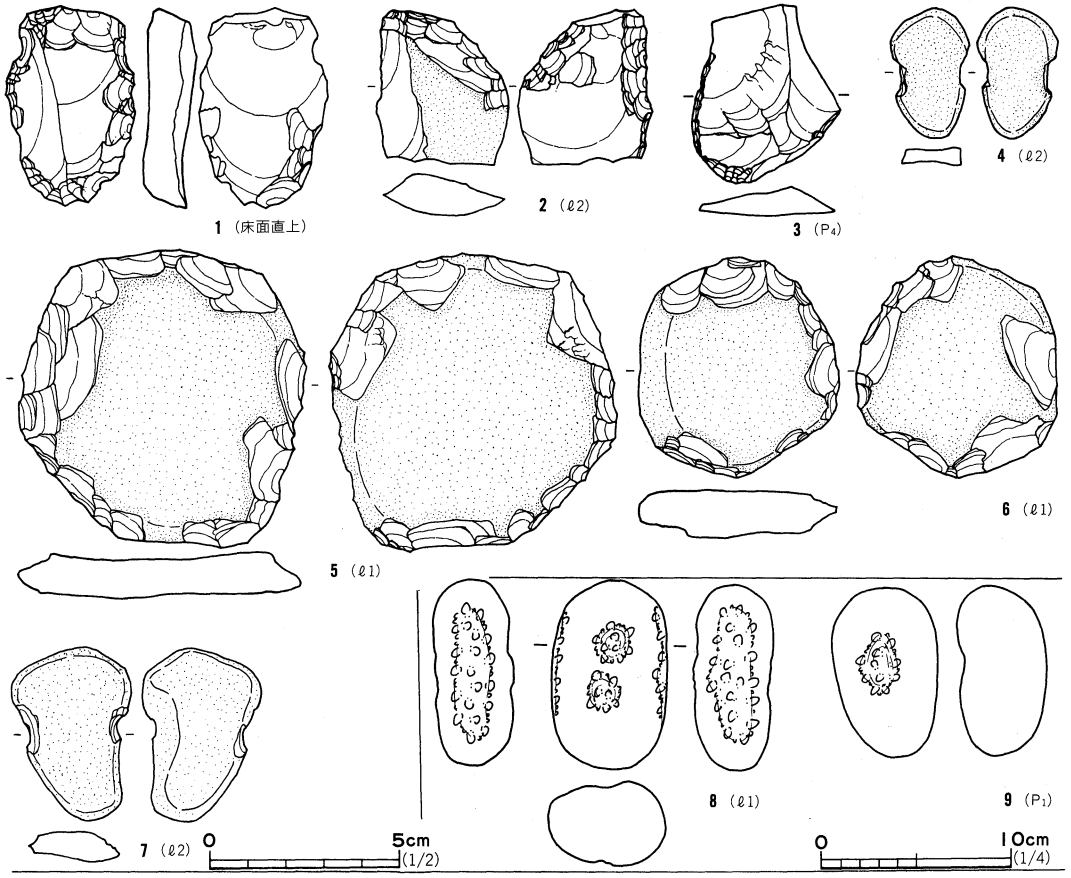


図73　32号住居跡出土遺物（2）



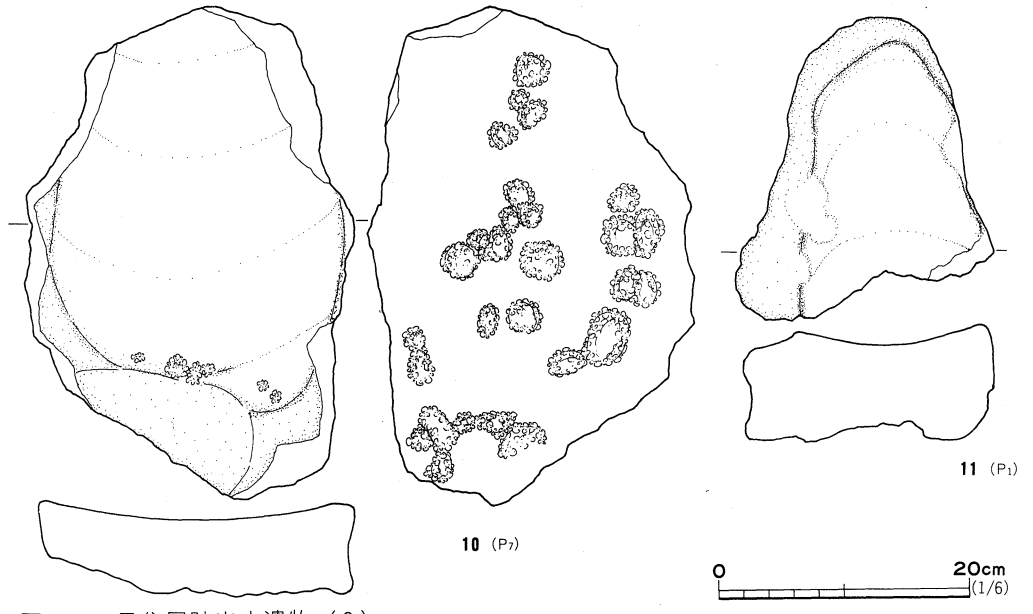


図74　32号住居跡出土遺物（3）

住居跡堆積土中から散在して出土した。図72－1・3は，把手を有する深鉢の口縁部破片である。同図5は口縁部が「く」の字状に屈曲する深鉢で，口唇部直下に幅の狭い文様帯が見られる。文様帯の中には，短沈線を縦位に加えている。同図8は口縁部に縄圧痕文を横位に数条施している。図72－6・11，図73－1～4はキャリパー状の深鉢の口縁部破片である。文様は隆沈線によって描かれている。同図20は浅鉢の破片で，幅の広い隆帯によって渦巻文を表している。

図74－1は下縁部に急斜度の調整剝離を加えた掻器，同図2・3は剝片の縁辺部に調整剝離を加えた不定形石器である。同図4・7は石錘であろうか。偏平な小礫の側縁部に抉りを加えている。同図5・6は偏平な円礫の周縁部に調整剝離を加えた礫器である。同図8・9は凹部を持つ磨石，同図10・11は石皿である。10の裏面は多孔石状を呈している。

ま と め

本住居跡は，一辺が6.6ｍ程の方形状の住居跡である。住居跡の中央西寄りに地床炉があり，主柱穴は方形状に配置されていた。本住居跡は出土した土器や他の住居跡との重複関係から，大木8b式期の所産と考えている。　（松　本）

33号住居跡（ＳＩ33）

遺　　構（図75，写真33）

ス～ソ47・48Ｇで検出した竪穴住居跡である。本跡については，調査に至るまでの条件が完備しなかったため，昭和63年と平成元年の2年に渡って調査を実施した。検出面はＬⅣ上面であるが，堆積土の観察からＬⅢｂ下部から掘り込まれていることを確認している。ＳＩ37，ＳＫ114・565と重複し本跡が最も古い。調査当初2軒の住居跡の重複に気付かず，ＳＩ37と重複する部分について同時に掘りこんだ。さらに検出面がＬⅣ上面である事から遺存状態は悪く，住居跡北西コーナー部以外では，周壁の立ち上がりはほとんど確認できなかった。

平面形は南北が長い長方形状を呈し，規模は東西4.8ｍ，南北は現況で10.0ｍである。周壁の立ち上がりは緩やかで，壁溝は最大20㎝を測る。床面は平坦であるが，ＬⅣと同様に北から南に向かって傾斜し，比高差は最大38㎝である。住居内には，ＬⅢｂに近似する暗褐色土が堆積していた。住居施設は，壁溝と40個の小穴・2基の炉が検出された。壁溝はほぼ全周するが，住居跡西側の壁溝は南北に連続せず，ＳＫ565と重複する部分で大きく括れる可能性が高い。規模は幅25㎝，床面からの深さは10～15㎝程である。

小穴は壁溝と重複する位置に作られたものが多く，住居の平面形と同じく，南北に長い長方形状に配置されている。Ｐ2・Ｐ5・Ｐ8・Ｐ9・Ｐ12～Ｐ18・Ｐ22・Ｐ31～Ｐ33の15個は直径25～60㎝，床面からの深さは44～77㎝である。これらはＰ2とＰ31，Ｐ5とＰ32のように東西にほぼ対応する位置に作られていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。東西に対応する柱穴相互

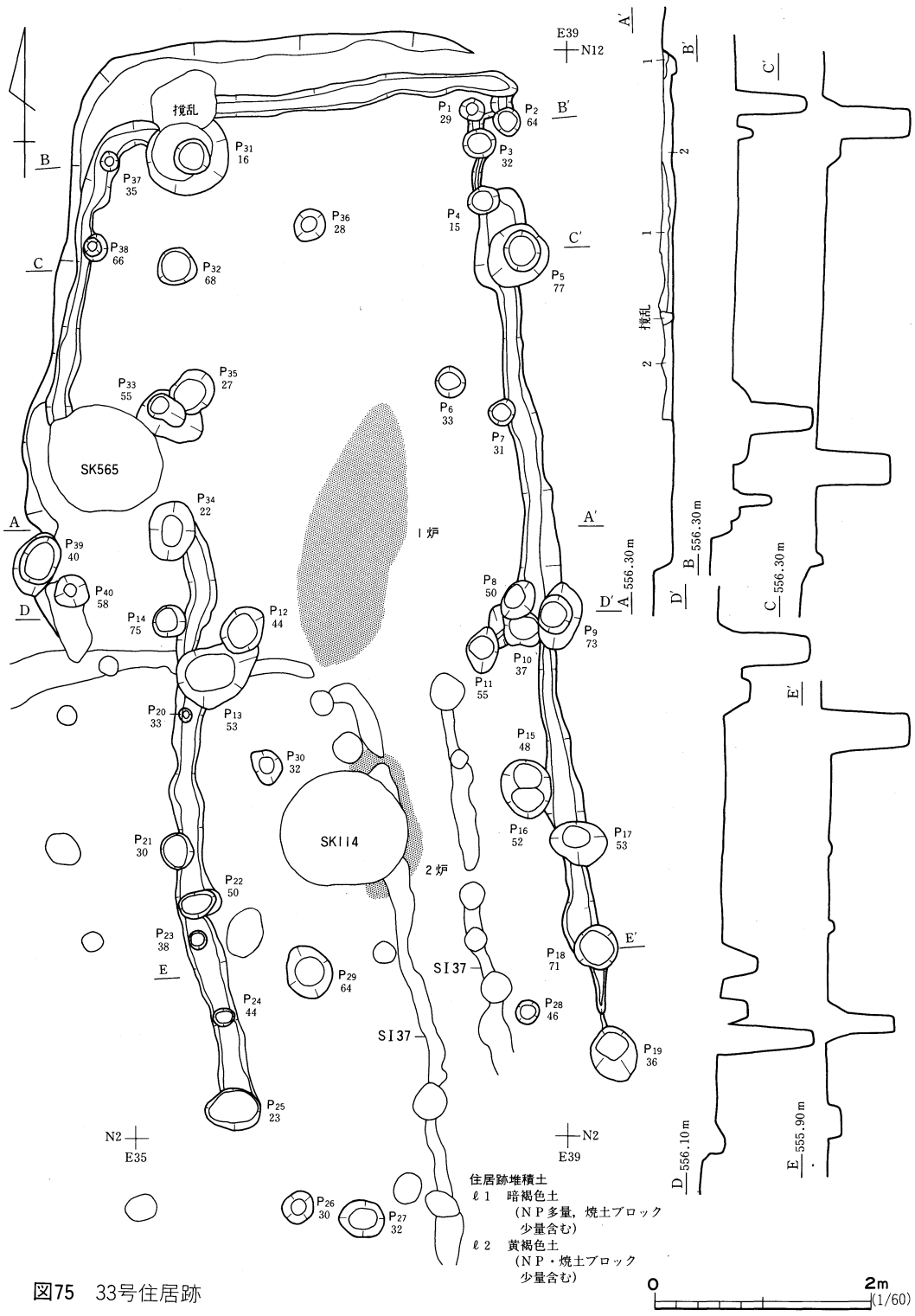

E39
N12
攪乱
P1 29
P2 64
P3 32
P4 15
P5 77
P6 33
P7 31
P8 50
P9 73
P10 37
P11 55
P12 44
P13 53
P14 75
P15 48
P16 52
P17 53
P18 71
P19 36
P20 33
P21 30
P22 50
P23 38
P24 44
P25 23
P26 30
P27 32
P28 46
P29 64
P30 32
P31 16
P32 68
P33 55
P34 22
P35 27
P36 28
P37 35
P38 66
P39 40
P40 58
SK565
SK114
1炉
2炉
SI37
SI37
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
A 556.30m
B 556.30m
C 556.30m
D 556.10m
E 555.90m
N2
E35
N2
E39
住居跡堆積土
ℓ1　暗褐色土
（NP多量，焼土ブロック
少量含む）
ℓ2　黄褐色土
（NP・焼土ブロック
少量含む）
0
2m
(1/60)

図75　33号住居跡

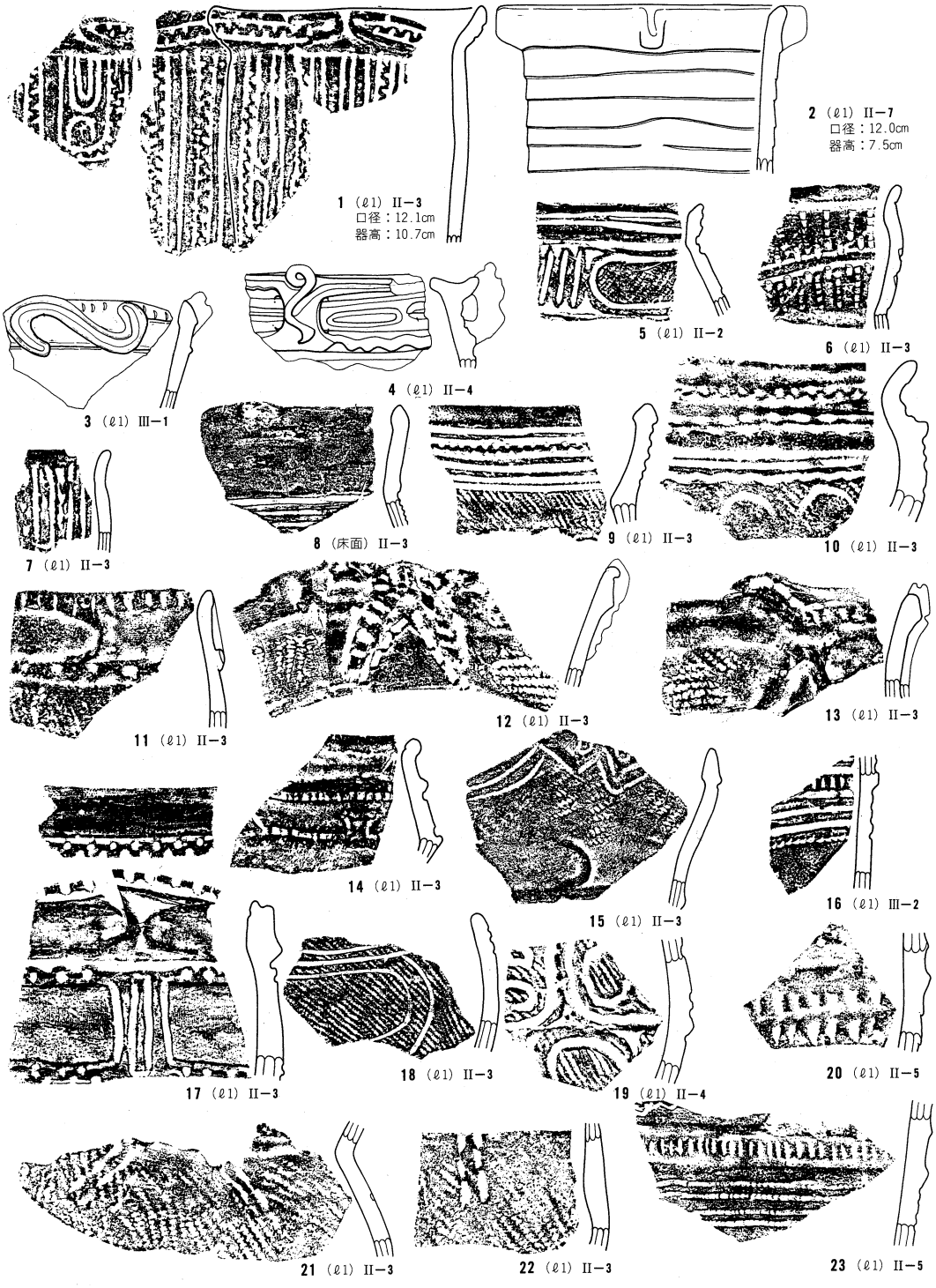


図76　33号住居跡出土遺物（1）

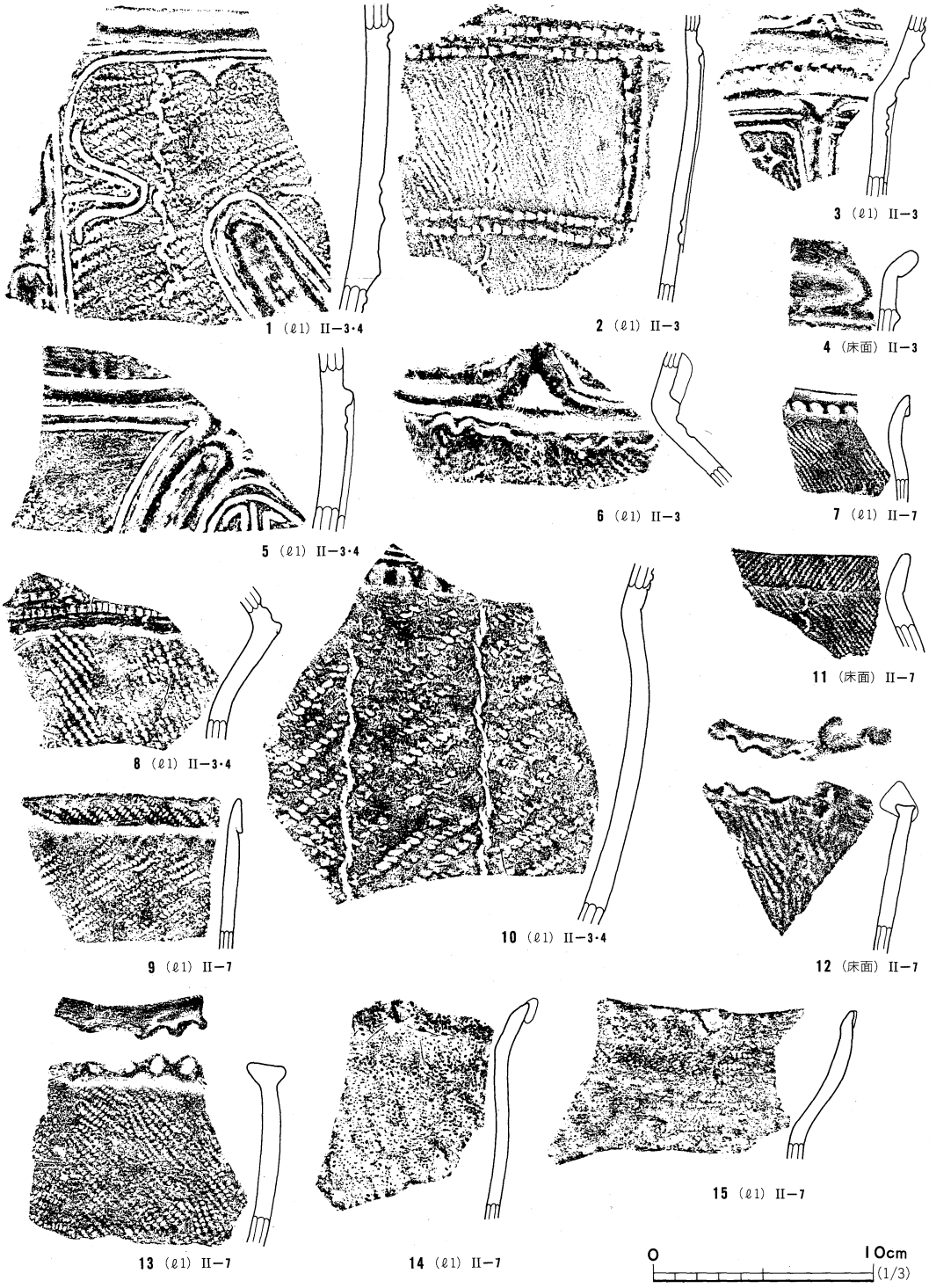
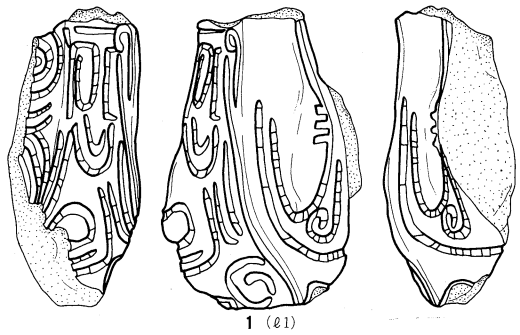
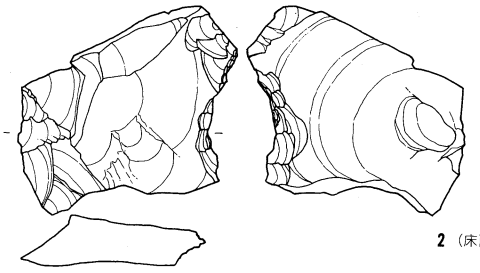


図77　33号住居跡出土遺物（２）

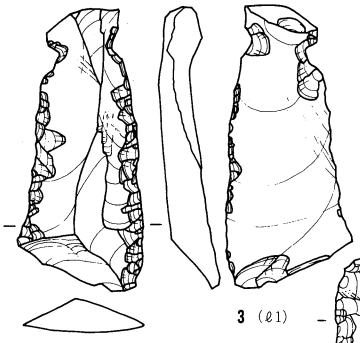


1（ℓ1）

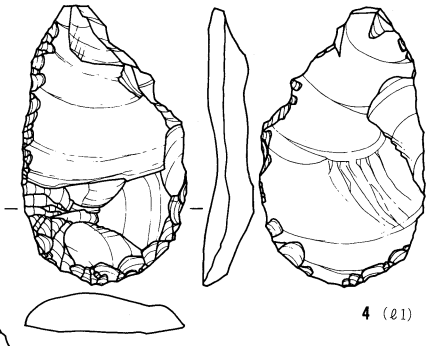
長さ：7.9cm
厚さ：3.5cm
重さ：92g



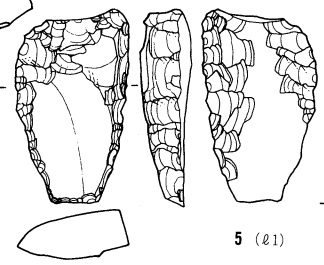
2（床面）



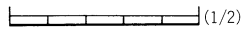
3（ℓ1）

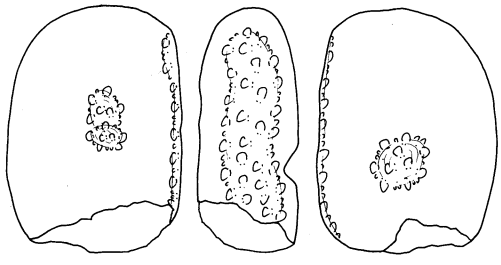


4（ℓ1）

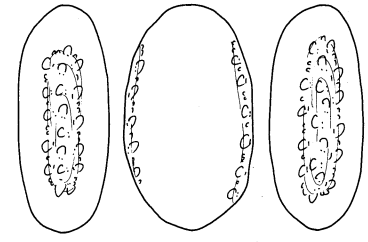


5（ℓ1）

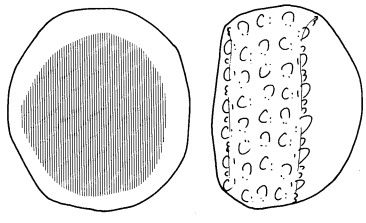




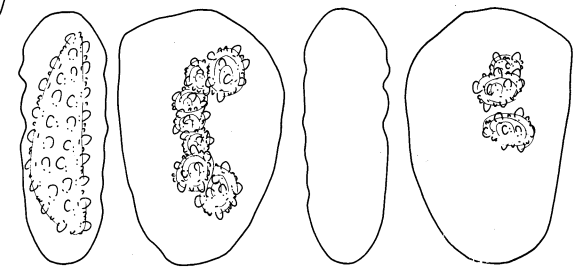
6（床面）



7（床面）



8（床面）



9（床面）

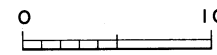


図78　33号住居跡出土遺物（3）

の間隔はほぼ3mである。P29についてもP18と対応する可能性が高いため，主柱穴と判断している。その他の小穴は，深さ20cmほどのものが多いが，P28・P38～P40のように深さ40cm以上のものも見られる。P26・P27については本住居跡に伴うものか判断できなかった。

炉は住居跡の中軸線上に並ぶように2基検出された。いずれも床面が焼けただけの地床炉である。平面形は1炉・2炉ともに楕円形状を呈し，規模は1炉が90×240cm，2炉は60×120cmである。いずれも炉の焼けは強く，炉上面から1炉は9cm，2炉は6cm下まで焼土化していた。

遺　　物（図76～78）

住居跡内からは縄文土器破片122点，石器が12点出土した。縄文土器の小破片は，堆積土中から散在して出土している。図76－1は口縁部が短く外傾する深鉢である。口縁部に楕円形の単位文を施し，中に交互刺突文を加えている。胴部は縦位の沈線文を密接して施し，一部の沈線間には交互刺突文を加えている。同図2は円筒形状を呈する深鉢で，粘土の積み上げ痕を残している。口縁部には4単位の棒状突起が付けられている。

同図3は隆帯による横S字状の突起が，同図5は沈線による楕円形の単位文が見られる。5の単位文の間には，三角文が施されている。同図9・10・17は交互刺突文が，図77－3は隆線上に交互に刺突を加えて波状文を描いている。図76－6・7・21・22は刺突文が施されている。同図10～13は，押捺された隆帯で文様を描き，10にはC字状のアクセント文が，沈線で描かれている。図77－7・10・12・13の口端部や口縁部下端には押捺文が見られる。

図76－14・23，図77－2・8は有節沈線文を施したものである。図76－23は横位に施された断面三角形状の隆線間に，ヘラ状工具によりスリットを施している。同図15は波状の口縁部で，波頂部にはW字状の隆線を施している。同図16・18は沈線文が施され，16には三角形の列点文も見られる。図77－1・5は，隆沈線で文様が描かれる深鉢の胴部破片である。図78－1は土偶の胴部破片で，器面全面に有節沈線文を施している。

図78－2は不定形石器で，右側縁部には表裏面から調整剥離を加えている。同図3は縦長の石匙，同図4・5は掻器である。5では側縁部に刃部を作り出している。同図6～9は磨石で側縁部にはすべて敲打痕状の使用痕が認められる。6・9は凹部を持ち，8は磨きにより器面が平らになっている。

ま　と　め

本跡は長方形状を呈する住居跡で，長辺は短辺のほぼ2倍の規模を有している。主柱穴は長方形状に配置され，炉は地床炉で2基検出された。本跡の所属時期は，出土遺物から大木7b式期と考えている。（磯　上）

34号住居跡（ＳＩ34）

遺　　構（図79，付図3，写真34）

ス・セ49・50GのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ26・31，ＳＫ115・143と重複し，本跡が古い。遺存状態は悪く，住居跡南半部は重複する各遺構によって壊されている。しかし，住居跡南壁の一部はＳＩ26とＳＫ115の隙間から検出することができた。平面形は方形を基調とし，西壁はほぼ真北を示す。規模は一辺5.4ｍ程で，検出面からの深さは最大10㎝である。周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大24㎝である。堆積土は3層に区分した。堆積状態はレンズ状に近い堆積を示していることから，自然堆積と判断した。

住居施設は26個の小穴と壁溝，1基の炉が検出された。小穴はすべて周壁際に作られている。Ｐ29～Ｐ32は直径30㎝程で，床面からの深さは，ＳＩ26床面から検出されたＰ32が現況で55㎝と若干浅いが，他の小穴の深さはすべて70㎝以上である。これらの4個の小穴は，相対する位置に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。その他の小穴は，床面からの深さが20～40㎝と浅い。これらの中で壁際に作られた小穴については，本住居跡の壁柱穴と考えている。

壁溝は，住居跡北壁中央から西壁際で検出された。幅20㎝，床面からの深さは5～10㎝である。炉は，住居跡ほぼ中央に位置している。床面が焼けただけの地床炉で，平面形は南北が長い不整楕円形状を呈している。規模は，炉南端部をＳＩ26によって壊されているため不明であるが，現況で100×200㎝を測る。炉の焼けは強く，炉上面から12㎝下まで焼土化していた。

遺　　物（図79）

住居内からは，縄文土器の小破片が散在した状態で145点，石器が11点出土した。図79－1～4・8は，隆沈線で文様を描いている。1～3の口縁部には楕円形区画文が描かれ，2・4には，斜方向からの刺突文も加えられている。同図5は口縁部に沿って斜方向から刺突を加えた沈線文を，同図7は有節沈線を口縁部に沿ってそれぞれ3条施している。有節沈線文は同図5にも施されている。同図9～11は同一個体の破片である。楕円形区画文を描く隆帯に沿って，複列の角押文を施している。区画文内には波状沈線文，区画文直下と口縁部には縦のスリットが加えられている。同図15は磨製石斧，同図16は剝片の縁辺部に表裏から調整剝離を加えた不定形石器である。同図12～14は凹部を持つ磨石で，側縁部にはすべて敲打痕状の使用痕が見られる。

ま　と　め

本住居跡は，一辺が5.4ｍの方形を呈する竪穴住居跡である。住居施設には，方形状に配置された4個の主柱穴と，地床炉が1基検出された。本住居跡の所属時期は，出土土器および遺構の重複関係から大木7b式期と考えている。　　（磯　上・松　本）

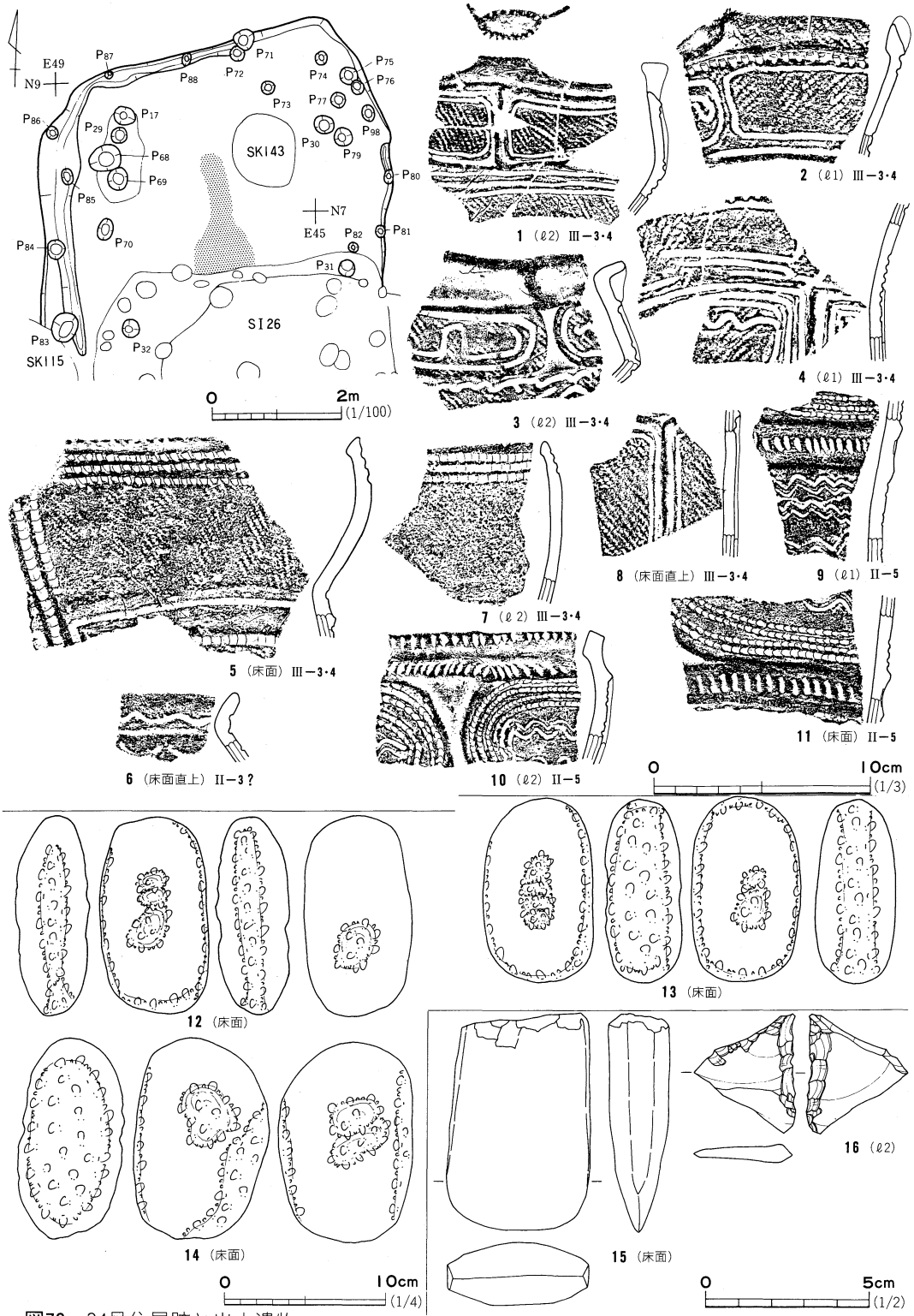


図79　34号住居跡と出土遺物

35号住居跡（ＳＩ35）

遺　　構（図80，写真35）

調査区中央部ソ・タ32・33ＧのＬⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ20，ＳＫ229と重複し，ＳＩ20より古く，ＳＫ229より新しい。遺存状態は悪く，わずかに北壁と南壁の一部が確認できただけである。このため規模や平面形については断言し難いが，遺存部の形状から東西が長い長方形状の住居跡と考えられる。遺構内堆積土は3層に区分した。この中でℓ1はＬⅢｂ近似の暗褐色土，ℓ2はℓ1に比べやや明るい色調のものである。3層に区分した堆積土はレンズ状の堆積を示していることから，自然堆積と判断する。

住居跡内には19個の小穴がある。この内，P1・P5・P10・P11・P13・P15・P16は炉を取り囲むように配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。大きさは直径が30㎝程度，床面からの深さは50～80㎝である。炉は住居跡中央やや北に寄った所に作られている。掘り込みを持つ円形の地床炉で，規模は直径90㎝，床面からの深さは7㎝である。焼土の範囲はここから東南東へ120㎝ほど延びている。

遺　　物（図80）

本住居跡からは，縄文土器破片が60点，石器2点が出土している。縄文土器破片は，堆積土中より散在して出土している。図80－1・2は隆沈線で文様を描くものである。1は波頂部から連弧状の文様が縦位に，2は楕円形の区画文を描くものと考えられる。1の波頂部上面にはスリットが加えられている。同図3は隆沈線で胴部を区画するものである。隆線上には縄文が，地文には羽状縄文が施されている。同図4は胴部に爪形文と波状沈線文が施されている。同図5は半載竹管による平行沈線文と連続爪形文を，横位・弧状に施している。同図6は凹部を持つ磨石，同図8は不定形石器である。

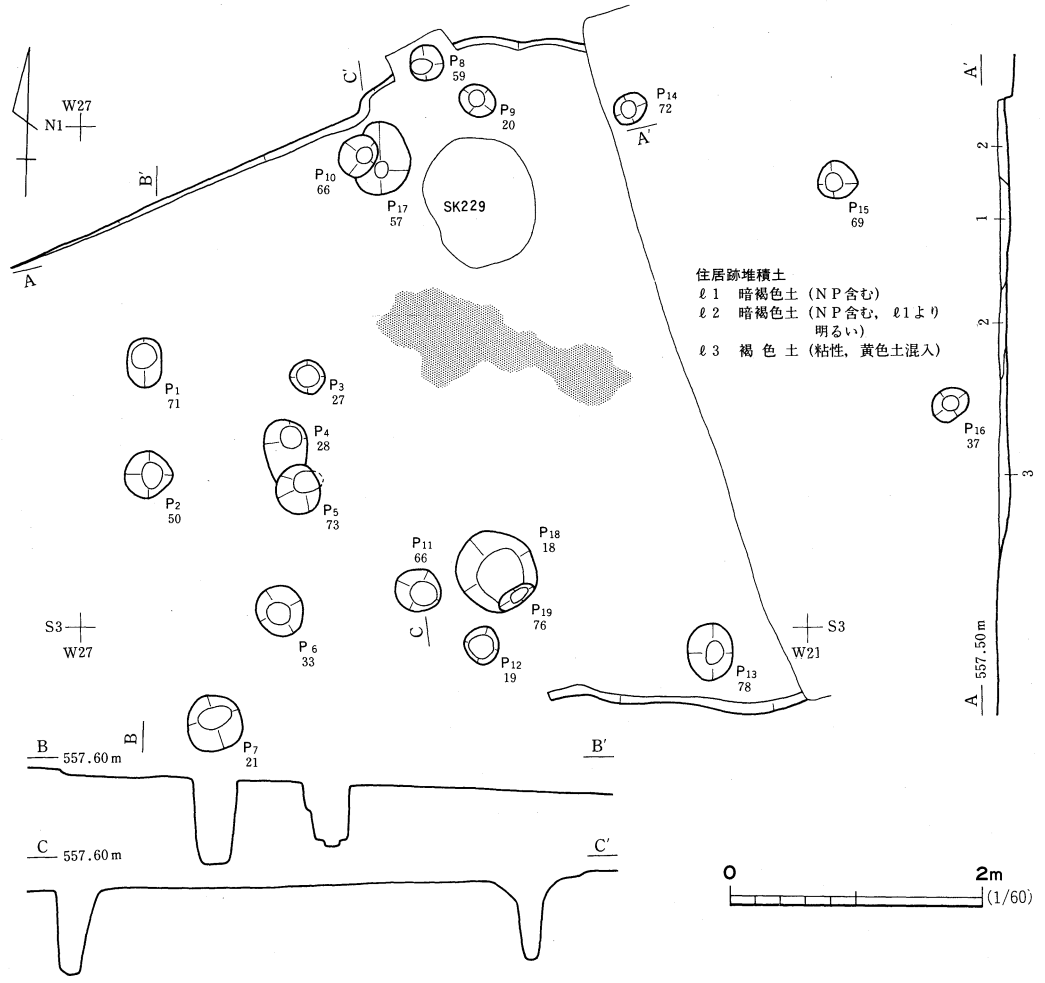
ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪く，平面形・規模を正確に確認できなかった。現況から判断すれば5×7ｍ程の規模を有する，長方形の竪穴住居跡と推測できる。所属時期については，出土土器から大木7b式期と判断している。　（福　山）

36号住居跡（ＳＩ36）

遺　　構（図81，付図3，写真36）

ツ・テ36Ｇにおいて検出した竪穴住居跡で，検出面はＳＩ29の堆積土上面である。ＳＩ29，ＳＫ201・227と重複し，ＳＫ201が新しく，他の遺構は古い。遺存状態は悪いが，壁溝により住居跡の平面形と規模は知ることができた。



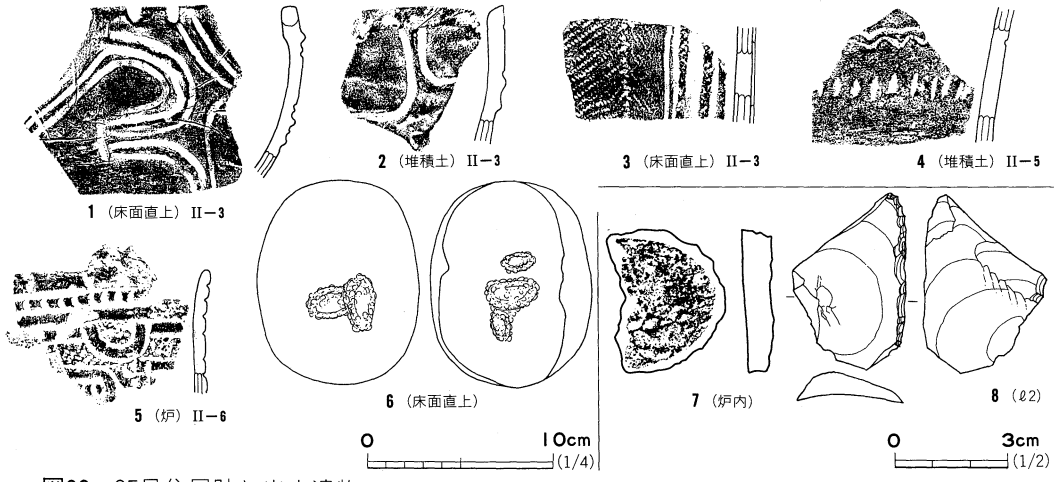


図80　35号住居跡と出土遺物

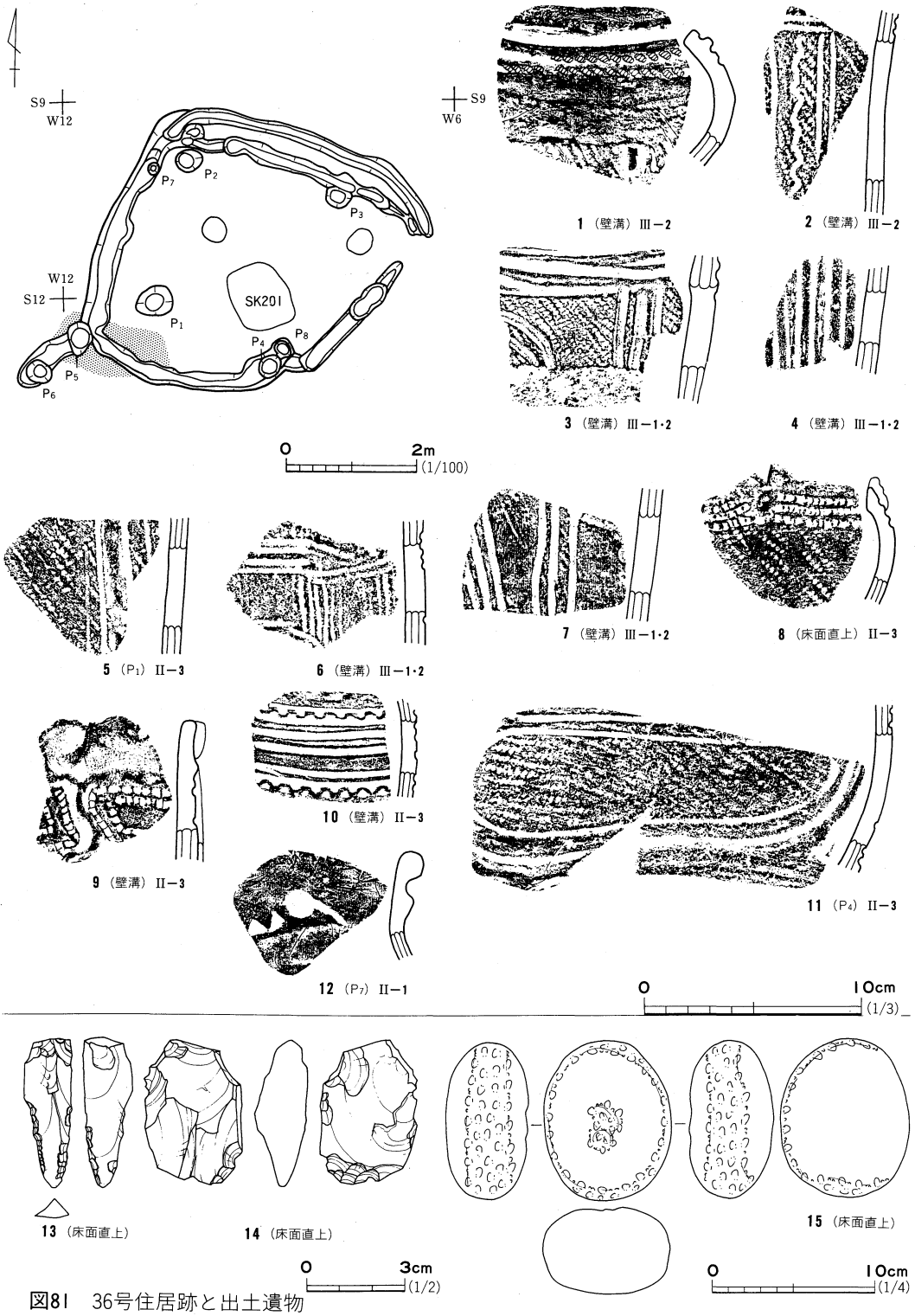


図81　36号住居跡と出土遺物

平面形は東壁が南壁・北壁と直行しないため，住居跡東半部がひしゃげた台形状を呈する。規模は北壁4.4m，南壁3.0m，南北は4.4mである。検出面からの深さは最大11cmで，周壁の立ち上がりは緩い。床面は平坦であるが，北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は基本的に褐色土1層のみであることから，堆積状態は判然としない。ℓ3は，壁溝内に堆積する土である。

住居施設は8個の小穴と，壁際を巡る壁溝がある。8個の小穴のうちP1～P4は，直径30～44cm，床面からの深さ41～60cmで，住居跡の平面形と同様，方形状に配置されていることから，主柱穴と判断した。各柱穴間は，P3とP4の間が2.8mと若干広いが，他は2.3m程である。P5～P8は壁溝内に作られた小穴で，床面からの深さは20～40cmである。これらの小穴についても，主柱穴を補助する柱穴と考えている。

壁溝は，住居跡北東コーナー部で途切れるが，住居跡をほぼ全周している。北壁際には平行する2条の壁溝が認められた。壁溝の一部は，南西コーナー部から傾斜面下位に向かって，130cmほど住居跡外に張り出している。壁溝の幅は30cm，床面からの深さは平均25cmほどである。炉は住居跡内には認められなかった。しかし，SK201堆積土内には薄い焼土粒子の堆積が見られることから，本跡の炉がSK201によって壊されている事も考えられる。

遺　　物（図81）

36号住居跡からは，300点の縄文土器破片と4点の石器が出土している。縄文土器破片の多くは，壁溝や小穴内から散在して出土した。図81－1はキャリパー状の深鉢の口縁部破片である。剝落のため判然としないが，隆線とそれに沿って施された縄圧痕文で，文様を描くものと考えられる。同図2～7は深鉢の胴部破片である。沈線を縦位・波状・渦巻状に施している。同図12の口縁部は肥厚し，口縁部下端には三角形や円形の抉りが加えられている。同図13・14は不定形石器である。14は厚い剝片の下縁部に粗い剝離を加えている。15は側縁部に使用痕跡が見られる磨石である。

ま と め

本住居跡は，一辺が4.4m程の台形状の住居跡である。主柱穴は，方形状に配置されている。壁溝はほぼを全周し，南西コーナー部から住居跡外に張り出している。本住居跡は出土した土器，他の住居跡との重複関係から大木8b式期の所産と考えている。　　（松　本）

37号住居跡（SI37）

遺　　構（図82，写真33）

セ・ソ47・48Gにおいて検出した竪穴住居跡である。本跡についてはSI33と同じ経緯から，昭和63年・平成元年の2年に渡って調査を実施した。SI37，SK114と重複し，SI33より新

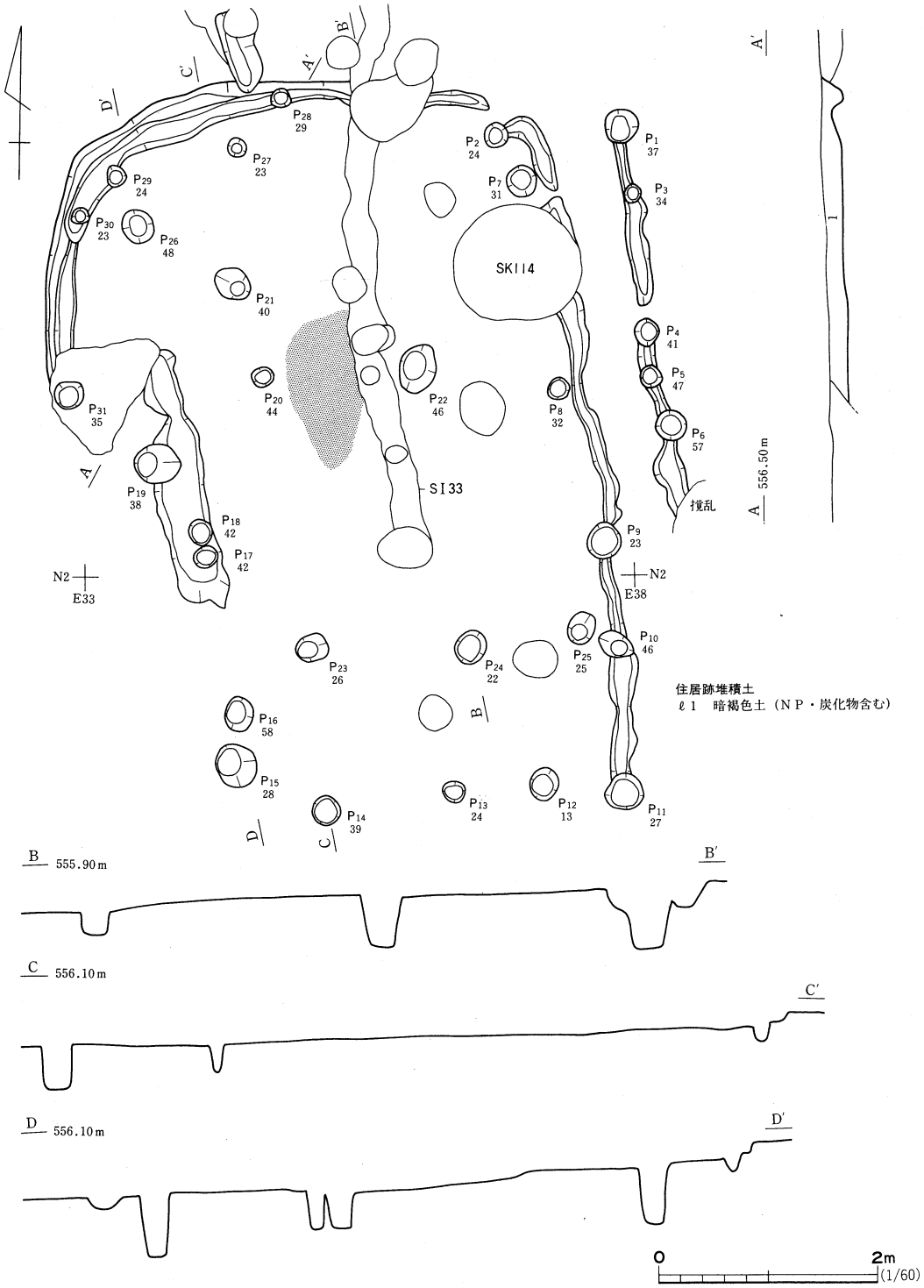

P28 29
P27 23
P29 24
P30 23
P26 48
P21 40
P31 35
P20 44
P22 46
P8 32
P2 24
P7 31
P1 37
P3 34
SK114
P4 41
P5 47
P6 57
撹乱
SI33
P19 38
P18 42
P17 42
P9 23
N2 E33
N2 E38
P10 46
P25 25
P23 26
P24 22
P16 58
P15 28
P14 39
P13 24
P12 13
P11 27
A 556.50m
A'
1
住居跡堆積土
ℓ1　暗褐色土（NP・炭化物含む）
B 555.90m
B'
C 556.10m
C'
D 556.10m
D'
0
2m
(1/60)

図82　37号住居跡

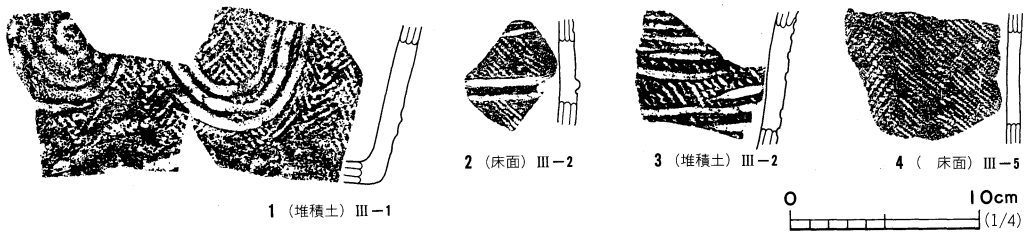


図83　37号住居跡出土遺物

しく，ＳＫ114より古い。遺存状態は，検出面がＬⅣ上面である事から悪く，住居跡北西コーナー部以外では，周壁の立上がりはほとんど確認できなかった。平面形は南北が長い長方形を呈し，規模は東西5.7ｍ，南北は現況で7.0ｍである。周壁の立上がりは緩やかで，壁高は最大10㎝を測る。床面は平坦であるが，ＬⅣと同様に北から南に傾斜し，比高差は最大34㎝である。住居内には，ＬⅢｂに近似する暗褐色土が堆積していた。

住居施設は壁溝と31個の小穴，炉が1基検出された。壁溝は北壁と東壁際に作られている。東壁部分からは，平行して南北に走る壁溝が2条検出された。2条の壁溝のうち東側のものについても，これと関連する溝や小穴が他に認められないことから，本跡に伴うものと判断した。壁溝の規模は幅15～25㎝，床面からの深さは3～15㎝である。

小穴は，壁溝と重複する位置に作られているものが多い。Ｐ1・Ｐ4～Ｐ6・Ｐ10・Ｐ16～Ｐ22・Ｐ26は直径22～36㎝，床面からの深さは35～57㎝である。これらについては，作られた位置と規模から本住居跡の主柱穴と考えている。住居跡西側のＰ16～Ｐ18・Ｐ26は，直線的に配置されている。Ｐ20・Ｐ22は炉に近接して作られた柱穴である。その他の柱穴は，床面からの深さが35㎝と浅い。炉は住居跡のほぼ中央，やや北に寄った所から検出された。床面が焼けただけの地床炉である。平面形は楕円形状を呈し，規模は150×170㎝である。炉の焼けは強く，炉上面から6㎝下まで焼土化が及んでいた。

遺　　物（図83）

遺物の出土量は少なく，縄文土器片が13点，石器が3点出土しただけである。図83－1は深鉢の底部破片である。底部直上まで沈線を施している。地文には羽状縄文を施している。同図2は隆沈線，同図3には沈線文が施されている。

ま　と　め

本跡の遺存状態は悪いが，検出された壁溝・柱穴から長方形状の住居跡と考えている。東側には2条の壁溝が認められることから，拡張されている可能性も考えられる。本住居跡の時期については，出土遺物と他遺構との重複関係から，大木8a式期と判断している。（磯　上・松　本）

38号住居跡（ＳＩ38）

遺　　構（図84，写真37）

チ36・37ＧのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ30と重複するが，重複部が僅かであるため新旧関係は不明である。周壁は，遺物包含層ＬⅢｂを掘り込んだ際に削平してしまったらしく，周壁の立ち上がりを検出できたのは，住居跡北西コーナー部だけである。

平面形は遺存部の状態や小穴の配置から，長方形を基調とするものと考えられる。検出面からの深さは北西コーナー部で最大7㎝で，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，比高差は最大17㎝である。住居内堆積土は不明であるが，北西コーナー部にはＬⅢｂと同質な土が堆積していた。

住居施設は，7個の小穴と炉が検出された。小穴の規模は直径40～50㎝，深さは41～77㎝である。これらの小穴は，Ｐ1～Ｐ3とＰ5～Ｐ7が，それぞれ直線的に配置されている。さらに各小穴は後述する炉を挟んで，相対する位置に作られていることから，本住居跡の主柱穴と判断した。各小穴の東西間隔は3ｍと一定している。Ｐ4についてはその作られた位置から，本住居跡に直接伴わない可能性がある。Ｐ1～Ｐ3を結んだ線は，真北から60°ほど西を示している。炉は床面が焼けただけの地床炉で，主柱穴で囲まれた中央に位置している。規模は90×500㎝の長楕円形状を呈し，炉の主軸はＰ1～Ｐ3を結んだ線とほぼ平行している。炉の焼けは強く，炉上面から5㎝下まで焼土化が認められた。

遺　　物（図84）

住居内からの遺物の出土量は少なく，縄文土器破片が45点出土しただけである。図84－1～3は同一個体の破片である。波状口縁を呈する深鉢で，口縁部に隆沈線により区画文を描き出している。区画文内には，交互刺突文と波状沈線文を施す。交互刺突文は，波頂部上面にも見られる。同図4は樽状の器形を呈する深鉢である。隆線で口縁部と胴部を区画している。口縁部には横位に数条の縄圧痕文を施し，胴部はＹ字状の隆線で縦に区画されている。同図5は口縁部が複合口縁状に肥厚する緩い波状口縁の深鉢である。波頂部は双頭状を呈し，この下には盲孔が認められる。盲孔の間と複合口縁の下端には，三角の刻みを施している。胴部上端には横位に数条，連続爪形文を施している。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪く，周壁はほとんど検出できなかった。しかし，検出された炉と主柱穴の配置から，東西7.5ｍ，南北4.5ｍ程の，長方形状を呈する竪穴住居跡と考えられる。所属時期については，出土遺物から大木7b式期と考えている。　　（松　本）

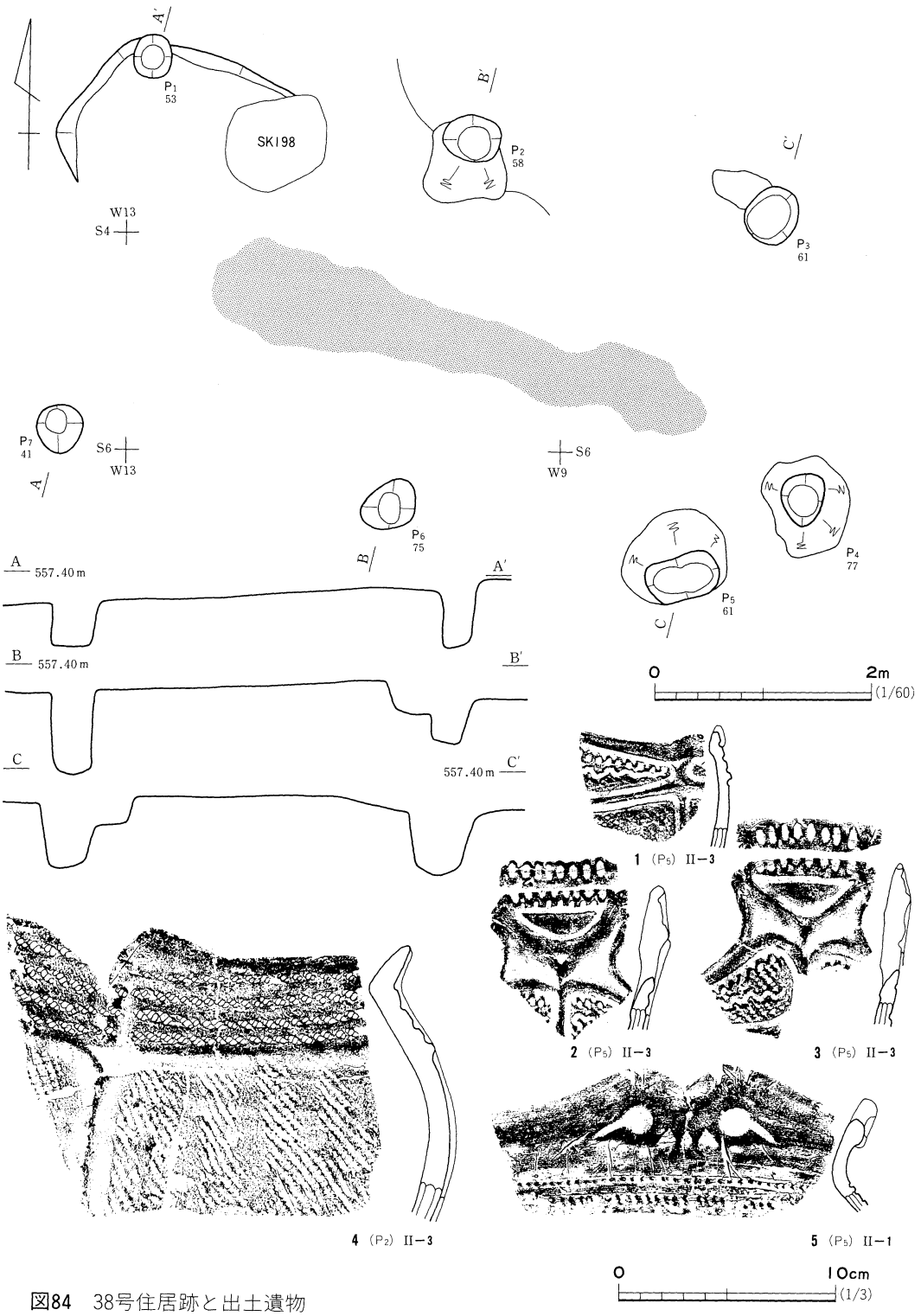


図84　38号住居跡と出土遺物

39号住居跡（ＳＩ39）

遺　　構（図85，写真38）

ソ37・38GのＬⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ41，ＳＫ4と重複し，ＳＫ4より古く，ＳＩ41より新しい。住居跡南東部は倒木痕によって壊され遺存していないが，その他の部分の遺存状態は良い。平面形は遺存部の状態から，方形を基調とするものと考えられる。規模は東西が4.4ｍ，南北は現況で3.6ｍである。検出面からの深さは最大17㎝，周壁は緩やかに立ち上がっている。床面はＳＩ41の堆積土中に作られ，固く踏み締まっている。住居内堆積土は3層に区分した。堆積状態は，ℓ2がブロック状に堆積しているが，基本的にはレンズ状の堆積を示していることから，自然堆積と判断した。

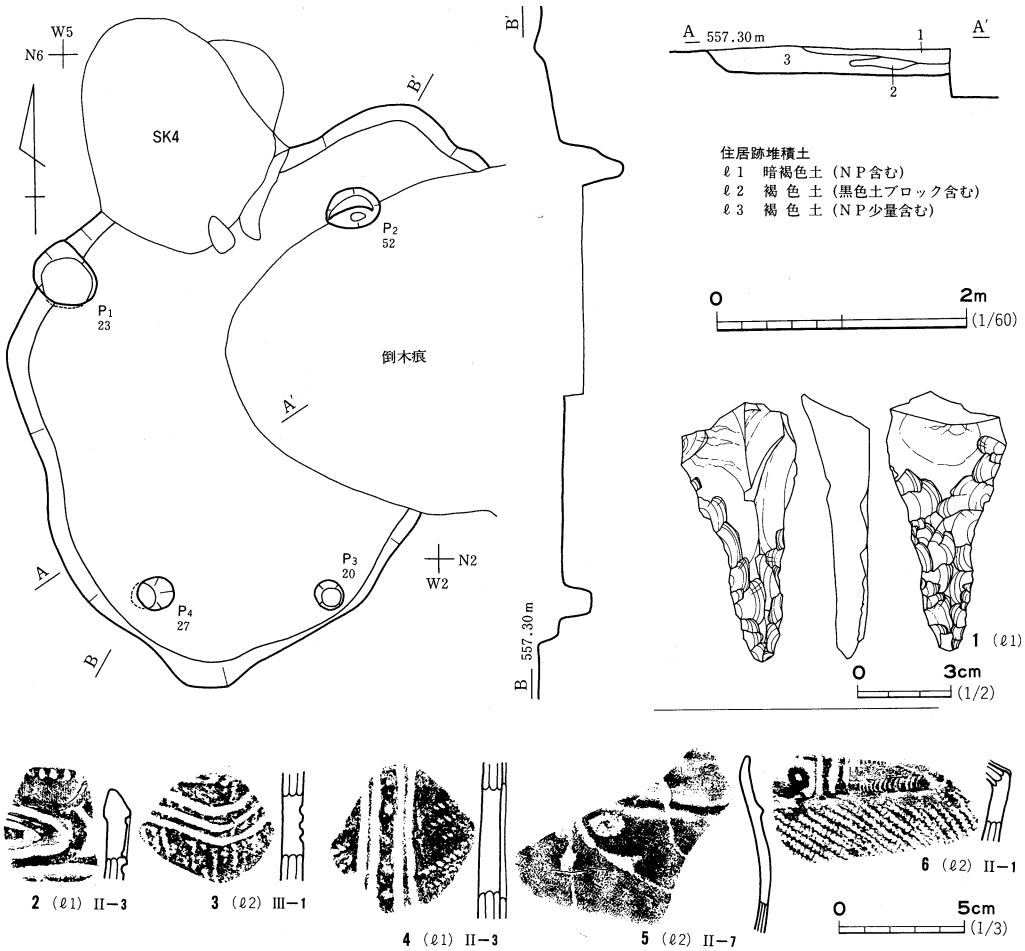


図85　39号住居跡と出土遺物

住居施設は，4個の小穴が検出された。小穴の規模は直径25～50㎝，床面からの深さはP2が52㎝と深いが，その他の小穴は20～27㎝と浅い。これらの小穴については，すべて住居跡コーナー部の壁際に作られていることから，本跡の主柱穴と考えている。炉は倒木痕により壊されたものか，検出することができなかった。

遺　　物（図85）

住居跡内からは，80点の縄文土器破片と1点の石器が出土した。これらの土器片はすべて堆積土中から，散在した状態で出土している。図85－2は口縁部に楕円形状の区画文を施したものである。同図3は胴部に3本一組の沈線で，弧状の文様を描いている。同図4は，垂下する隆線で胴部を区画するもので，隆線上には縄文が施されている。同図5・6は，細い隆線で文様を描いている。6の隆線上には連続爪形文が施されている。同図1は剥片の下縁部両側縁に表裏面から調整剥離を加えて，断面が三角形状を呈する刃部を作り出している。

ま と め

本跡は，方形を基調とする住居跡である。住居施設には4個の柱穴があるが，炉は倒木痕によって壊されたものか検出できなかった。所属時期については，出土遺物が少なく判然としない。住居跡内から出土した土器で最も新しいものは，大木8a式土器である。　　（松　本）

41号住居跡（ＳＩ41）

遺　　構（図86，写真39）

ソ37・38Ｇに位置する竪穴住居跡で，ＳＩ39の床面で検出した。ＳＩ39と重複し，本跡が古い。住居跡南東部は，倒木痕によって壊され遺存していないが，その他の部分の遺存状態は良好である。平面形は遺存部の形状から，不整楕円形を呈するものと考えている。住居跡の長軸は，真北から45°西へ傾いている。規模は長軸3.2ｍ，短軸2.8ｍである。検出面からの深さは最大23㎝で，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦で固く締まっている。住居跡南半部の周壁際には床面より10㎝ほど高い，テラス状の高まりが認められた。住居跡内にはパミスを含む褐色土が1層堆積していた。

住居施設は2個の小穴が検出された。小穴の規模は直径20㎝，床面からの深さはＰ1が69㎝，Ｐ2は11㎝である。Ｐ1についてはその深さから本住居跡の主柱穴と考えている。Ｐ2については主柱穴と判断できなかった。倒木痕によって壊された部分には，Ｐ1に対応する主柱穴が作られていた可能性がある。炉は住居跡内には作られていなかった。

遺　　物

住居跡内からは18点の縄文土器破片が出土した。いずれもごく小さい破片であることから図示できなかった。

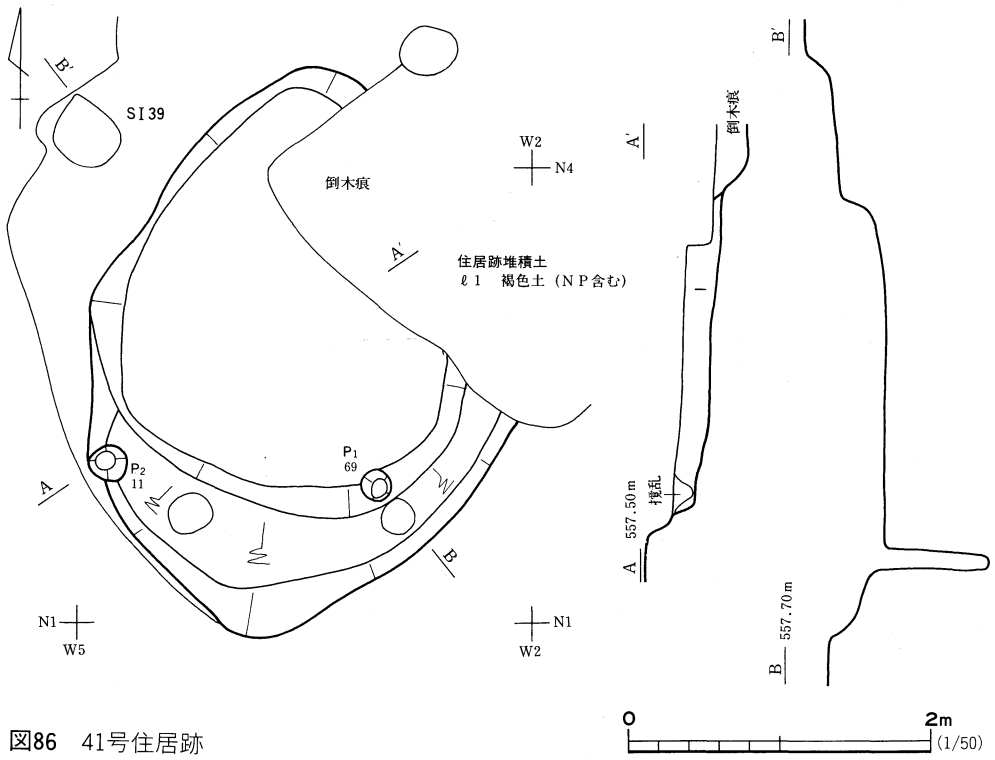


図86　41号住居跡

ま と め

本住居跡は楕円形を基調とし，住居跡南側の壁際にはテラス状の高まりが認められた。住居施設は，主柱穴が1個検出されただけである。所属時期については，出土遺物が少ないが，遺構の重複関係から，大木8a式期以前と考えている。　（松　本）

42号住居跡（SI42）

遺　　構（図87，写真40）

調査区西部のセ・ソ17・18Gで検出された竪穴住居跡である。重複している遺構は，SK237・238で，そのいずれよりも本遺構が新しい。検出面はLⅢb上面で，遺構内堆積土と非常に近似した土であるため，検出には困難を伴った。平面形は，隅丸の長方形状を呈しているが，東壁は西壁よりやや短い。長軸は真北から東に約15°傾いている。規模は南北7.3m，東西5.5mである。壁高は最大13cmで，壁の立ち上がりは急である。床面はLⅢb中に作られているが，特に貼床等の施設は認められなかった。床面は平坦であるが，北から南に緩やかに傾斜しており，比高差は最大23cmである。住居跡内には，暗褐色土が1層堆積していた。堆積状況については判断の材料がないため明言できない。

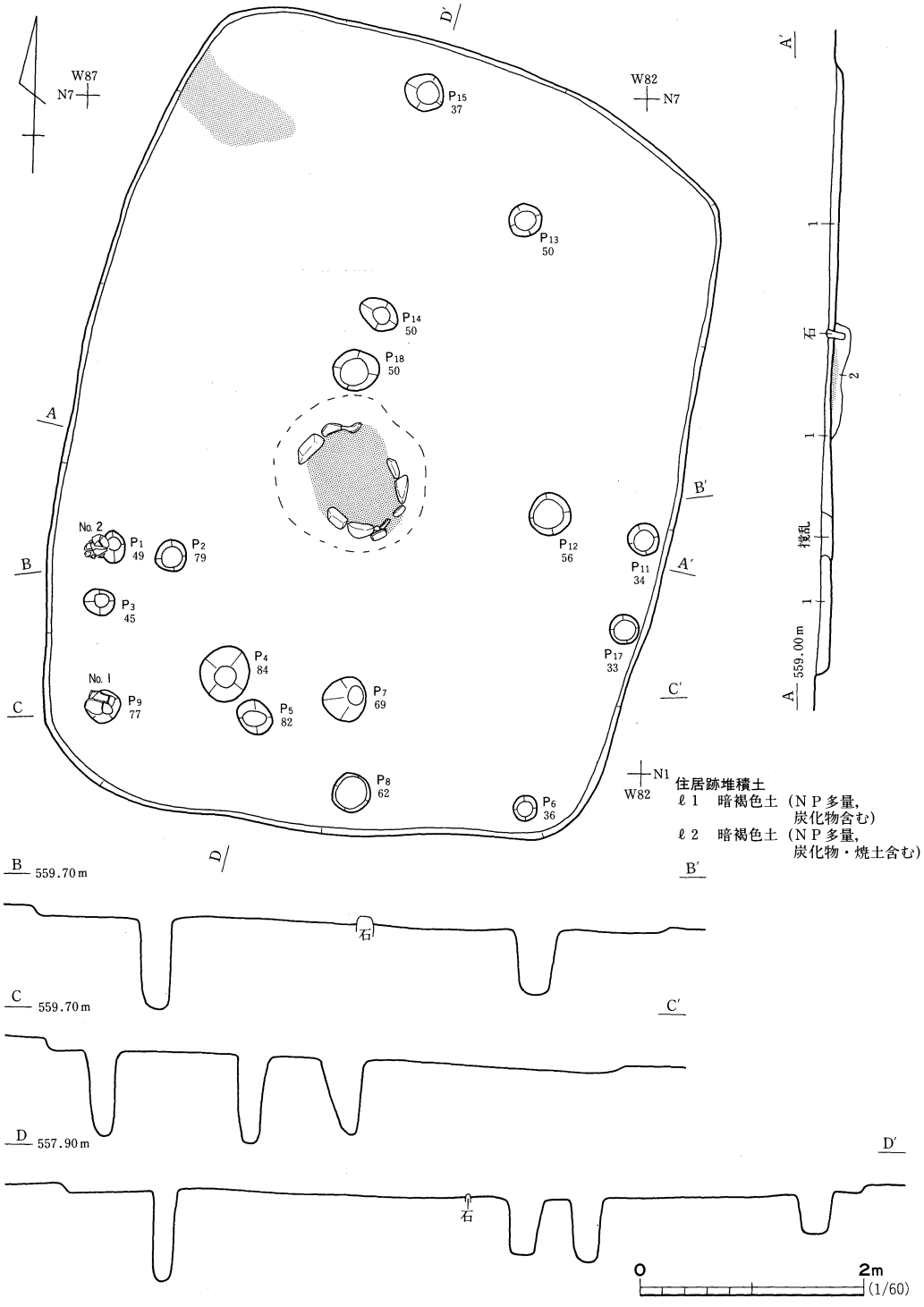

W87
N7
W82
N7
P15
37
P13
50
P14
50
P18
50
P12
56
P11
34
P17
33
No. 2
P1
49
P2
79
P3
45
No. 1
P9
77
P4
84
P5
82
P7
69
P8
62
P6
36
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
N1
W82
住居跡堆積土
ℓ1　暗褐色土（NP多量，炭化物含む）
ℓ2　暗褐色土（NP多量，炭化物・焼土含む）
559.00m
撹乱
石
559.70m
559.70m
557.90m
0
2m
(1/60)

図87　42号住居跡

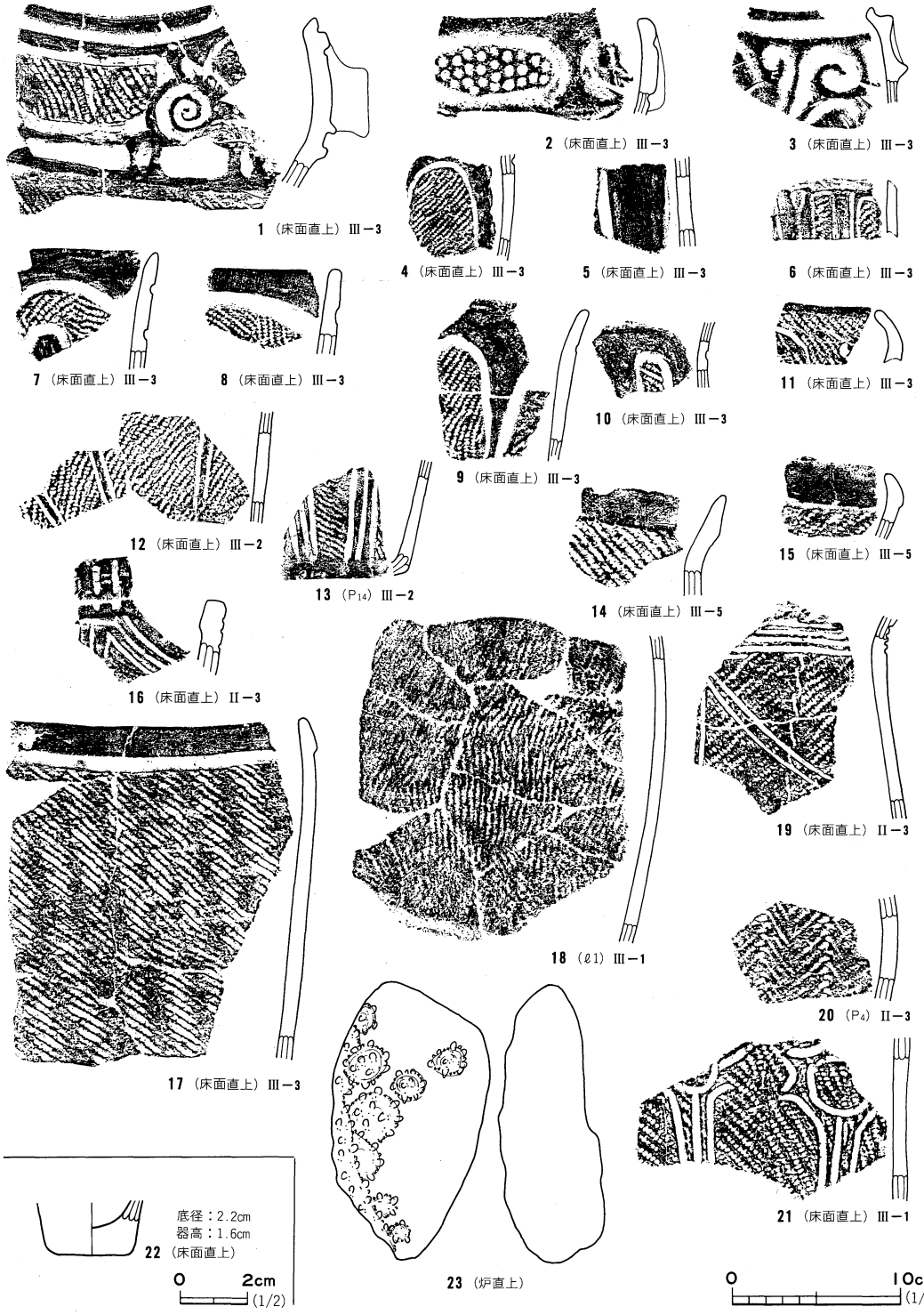


図88　42号住居跡出土遺物

小穴は，床面下位に堆積するⅬⅢｂを除去して，ⅬⅣ上面のレベルで検出した。その結果，総数18個の小穴を検出した。小穴内にはすべて，暗褐色土が堆積していた。P2・P4・P5・P7・P12・P14・P18は，炉を囲むように配置されている。小穴の規模は直径28～43㎝，床面からの深さは推定50㎝以上で，本住居跡の主柱穴と考えている。P1・P3・P6・P8～P11・P15は，その位置から壁柱穴と判断した。深さはP8が推定62㎝，P9が推定77㎝と深いものの他は推定50㎝以下で，直径は21～33㎝と主柱穴より一回り小さい。住居北西部については，倒木痕によって壊されているため，柱穴は検出できなかった。

炉は，楕円形状の石囲炉で，住居跡のほぼ中央に作られている。規模は，75×105㎝を測るが，炉の北東側と西側の炉石は一部欠落している。炉石には拳大の円礫の他に，多孔石の破片も使用されている。炉の焼土化は強く，焼土上面から約6㎝下まで熱変化が及んでいる。この石囲炉は深さ約15㎝，規模が136×142㎝の掘形を持っていた。

遺　　物（図88）

42号住居跡からは，縄文土器破片が472点，石器が1点出土している。縄文土器破片の多くは，堆積土中や床面から散在して出土している。

図88－1～3は，深鉢の口縁部破片である。1は太い隆線によって，横楕円形の区画文を描き，この区画文内には，0段多条2段撚りの縄文が施されている。楕円形区画文の間には，渦巻状の突起を付けている。2は凹線状の沈線により横楕円形区画文を描き，区画内を刺突文で充填している。3はナデツケられた断面三角形状の隆帯で，末端が渦巻状をなす文様を描く。同図4～10は，沈線によって逆U字状の単位文を描く。この逆U字状の単位文内には，縄文を充填施文している。7は2本の沈線によって区画された逆U字状の縄文帯を有する。

同図16は山形を呈する波状口縁で，口唇部には刻目が加えられ，口唇部直下から数条の沈線が扇状に降下する。同図17は，口縁直下に1条の凹線状の沈線を巡らせている。同図19には沈線に加えてアヤクリ文が施され，同図20には羽状縄文が見られる。同図22は小型の深鉢の底部である。同図23は多孔石の破片で，石囲炉の炉石に使用されていた。

ま　と　め

本住居跡は，ⅬⅢｂを掘り込んで作られた竪穴住居跡で，平面形は長方形を呈している。小穴を検出する際，ⅬⅣ上面まで掘り込んだ。このため，浅い壁柱穴については，壊してしまっている可能性がある。主柱穴は，炉を囲むように多角形状に配置されていたものと判断した。所属時期は，出土土器から大木9式期と考えている。　　（丹　治）

43号住居跡（ＳＩ43）

遺　　構（図89，写真41）

ハ・ヒ11・12GのＬⅣ上面で検出された竪穴住居跡である。ＳＭ18と重複し，本住居跡が古い。平面形は楕円形を呈し，長軸は真北から約30°東へ傾いている。規模は南北7.3ｍ，東西6.0ｍを測る。斜面上位の西壁の遺存状態は良いが，斜面下位の東壁は遺存状態が悪く，壁の明瞭な立ち上がりは見られなかった。周壁は急傾斜で立ち上がり，壁高は西壁で最大20㎝である。床面は平坦であるが，ＬⅣの傾斜と同様に西から東へ緩やかに傾斜し，その比高差は最大45㎝である。住居跡南東隅の床面は，一部灰褐色粘土を貼って作られていた。住居跡内堆積土は，4層に区分した。ℓ1はＬⅡに近似する黒褐色土で，この土が住居跡中央部の床面を直接覆って堆積していた。周壁際には，褐色土の堆積が認められた。堆積状態については，壁際からの流れ込みが観察できることから，自然堆積と判断した。

住居内からは，31個の小穴が検出された。P5・P6・P8・P9・P12～P14・P17・P19・P21・P23・P26～P29は，住居跡中央の炉から約2.4ｍの等距離に位置している。これらの小穴については，床面からの深さが50㎝以上と深いことから，本跡に伴う主柱穴と考えている。特に東西南北の四隅にあるP6・P12・P14・P26・P28は，床面からの深さが70㎝以上と深い。周壁際に作られた小穴については，その位置から壁柱穴と判断した。炉は，地床炉で住居跡中央から検出された。平面形は不整形状を呈し，規模は100×80㎝を測る。炉の焼けは周辺部が強く，中央部は弱い。周辺部の焼けの強い部分では，炉上面から6ｍ下まで焼土化が認められた。

遺　　物（図90）

本住居跡より出土した遺物は，縄文土器破片123点，石器1点である。土器片のほとんどが堆積土中から出土したが，図90－1・13・14・15は住居跡西側の，主柱穴と壁柱の間の床面から，大型破片の状態で出土した。図90－1は胴部が樽状を呈し，口縁部が短く外反する深鉢である。口縁部と胴部上端を橋状の把手で繋いでいる。文様は口縁部を無文とし，胴部上端には隆線と沈線によって三角形状の区画文を上下交互に4単位づつ描くものと考えられる。上位の区画文内には交互刺突文が，下位の区画文の頂点部には渦巻文が施されている。下位の区画文間には隆線による小突起が付けられている。胴部下位には沈線を垂下させ，胴部を8単位に区画するものと思われる。この垂下する沈線の一部は，Ｃ字状のアクセント文を描いている。

同図2は隆沈線を，同図3は太い隆帯を配し，その上方に刺突文を施している。同図5・7は梯子状の沈線文が，同図8には三角文が施されている。同図10・12は，稜線で区画された無文帯で文様を描くものである。同図13・14は隆線と沈線で胴部を上下に区画している。13には刺突文も施されている。16は凹部を持つ磨石である。

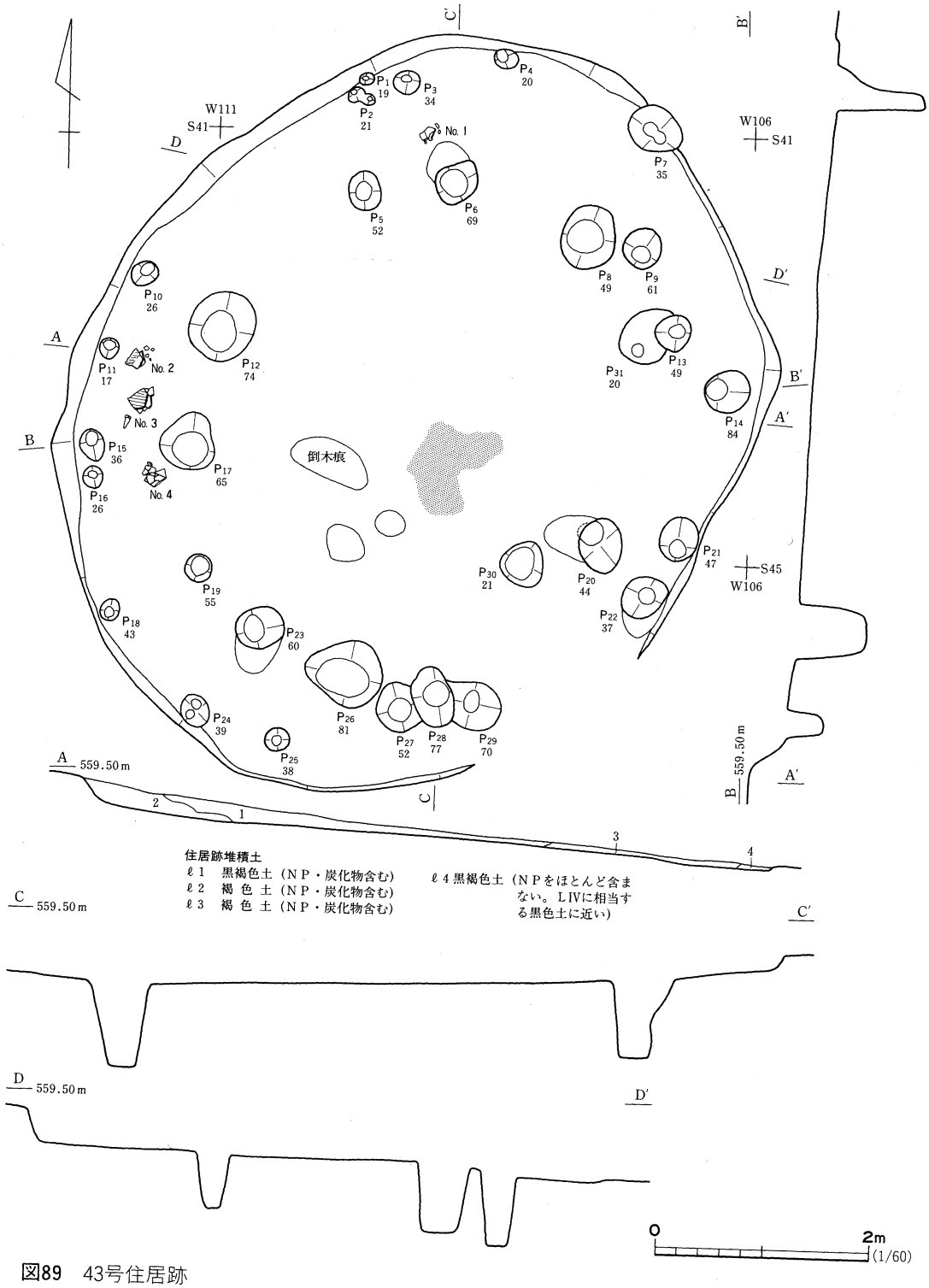

W111
S41
W106
S41
W106
S45
P1 19
P2 21
P3 34
P4 20
P5 52
P6 69
P7 35
P8 49
P9 61
P10 26
P11 17
P12 74
P13 49
P14 84
P15 36
P16 26
P17 65
P18 43
P19 55
P20 44
P21 47
P22 37
P23 60
P24 39
P25 38
P26 81
P27 52
P28 77
P29 70
P30 21
P31 20
No. 1
No. 2
No. 3
No. 4
倒木痕
A 559.50m
B 559.50m
C 559.50m
D 559.50m
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（NP・炭化物含む）
ℓ2　褐色土（NP・炭化物含む）
ℓ3　褐色土（NP・炭化物含む）
ℓ4 黒褐色土（NPをほとんど含まない。LIVに相当する黒色土に近い）
0
2m
(1/60)

図89　43号住居跡

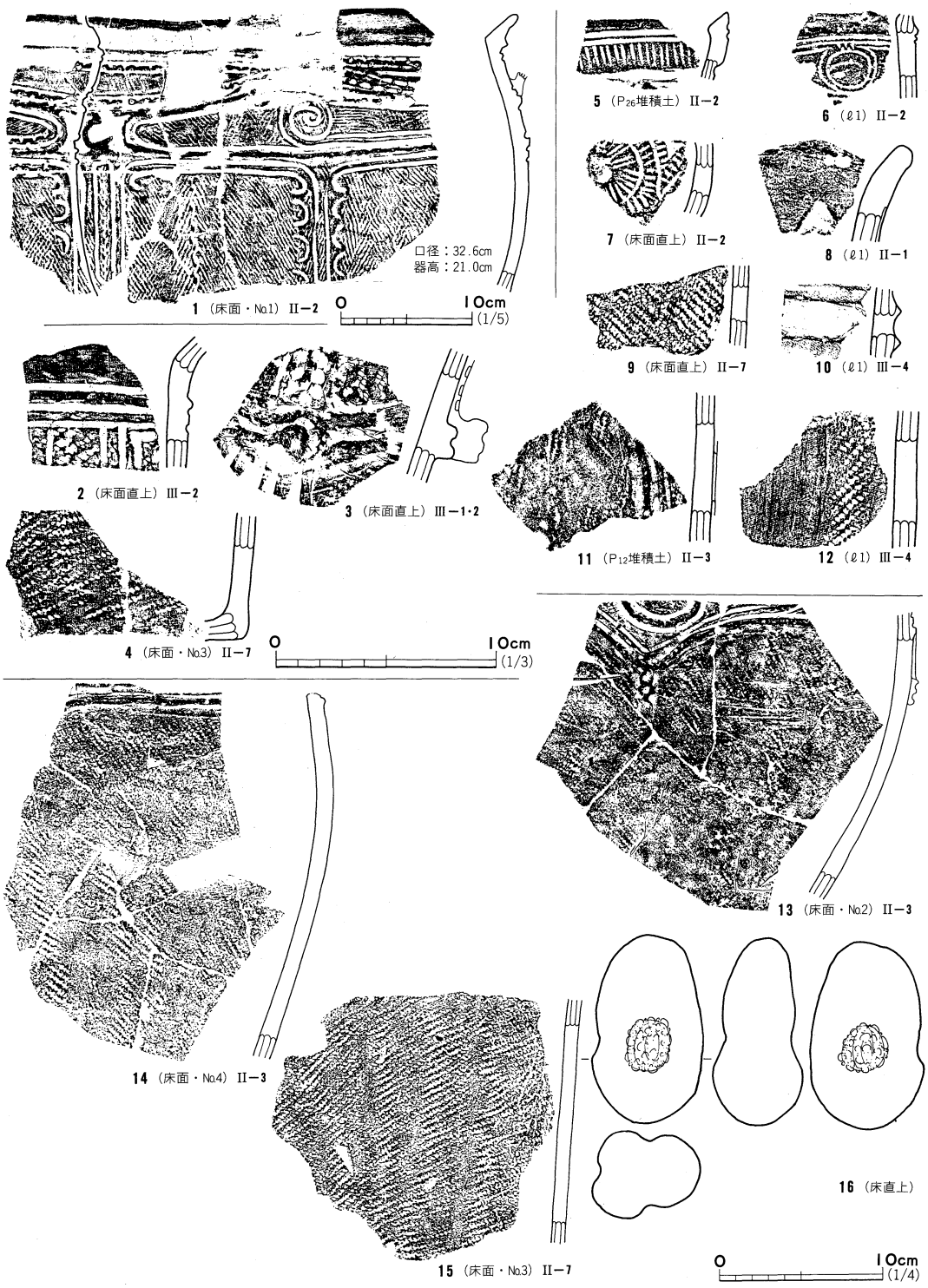


図90　43号住居跡出土遺物

ま と め

本住居跡は，6.0×7.3ｍの規模を有する楕円形の竪穴住居跡である。住居施設には，円形に配置された柱穴と，１基の地床炉が認められた。出土土器には，Ⅲ群土器が相当数含まれている。これらの土器はℓ1から出土していることから，本住居跡には直接伴わないものと判断した。本住居跡の所属時期については，床面から出土した大型破片とＳＭ18との重複関係，住居施設の特徴から大木7b式期と考えている。（福　山）

44号住居跡（ＳＩ44）

遺　　構（図91，付図3，写真44）

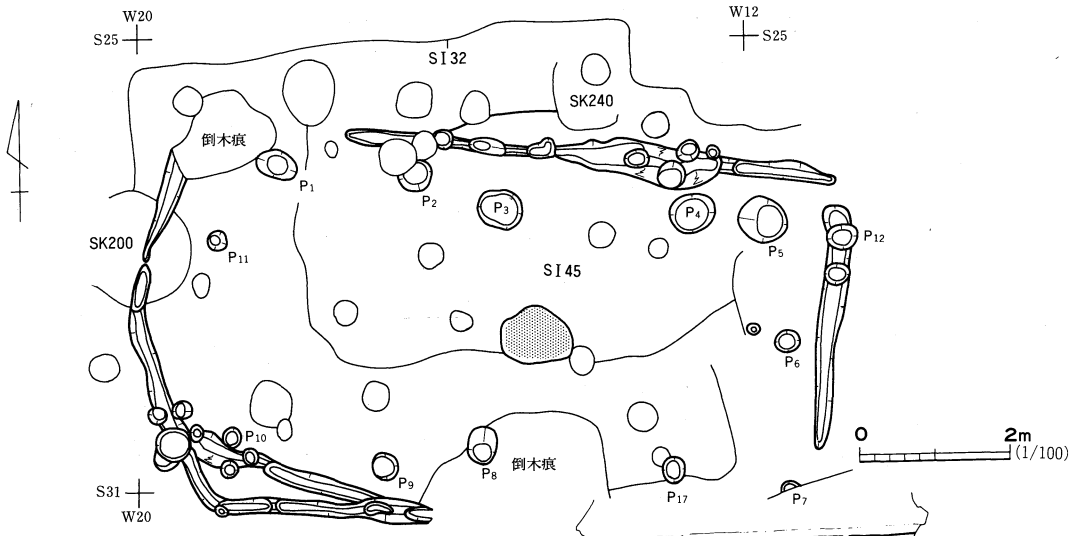
ニ・ヌ34・35Ｇにおいて検出した竪穴住居跡で，検出面はＬⅣ上面とＳＩ32床面である。ＳＩ32・45，ＳＫ199・200・225・236・239・241・242・247・252・253と重複し，ＳＩ32，ＳＫ199・200より古く，他の遺構より新しい。遺構の遺存状態は悪いが，壁溝によりほぼその全容を知ることができた。平面形は東西が長い長方形状を呈し，規模は東西が9.2ｍ，南北は5.0ｍである。検出面からの深さは，ＳＩ32と重複していない住居跡南西コーナー部で，最大10㎝である。ＳＩ32と重複する部分では，ＳＩ32床面と本跡の床面に高低差はほとんど認められない。住居内堆積土は，７層に区分した。堆積状態は，比較的整ったレンズ状の堆積を示すところから，自然堆積と判断している。ℓ１は，ＬⅡに近似する黒褐色土である。

住居施設は11個の小穴と，１基の炉が本住居跡に伴うものと考えている。Ｐ1～Ｐ6，Ｐ8～Ｐ11・Ｐ17は，直径30～60㎝，深さは30～68㎝で，Ｐ2・Ｐ11が30㎝と浅いものの，他の小穴は50㎝以上の深さを有している。これらの小穴は，住居跡の南・北壁と平行するように直線的に並び，さらにそれぞれが南北に相対する位置にあることから，本住居跡の主柱穴と判断した。この他に壁溝内に位置する，多くの小穴もそのほとんどは本住居跡に伴う壁柱穴と考えている。これらの小穴内には，褐色土を主体とする土が堆積していた。

炉は住居跡のほぼ中央，本住居跡構築時には埋まりきっていなかった，ＳＫ253の堆積土上面に作られている。このため炉底面は，周囲の床面から15㎝程窪んでいる。炉の規模は60×84㎝で，炉の焼土化は強い。

遺　　物（図91・92）

44号住居跡からは，250点の縄文土器破片と３点の石器が出土している。土器片の多くは，住居跡堆積土中から散在して出土した。図91－1～3は，把手を有する深鉢の口縁部破片である。同図10は，頸部が「く」の字状に屈曲する深鉢である。口縁部直下に幅の狭い文様帯が見られ，ここに，短沈線を縦位に加えている。



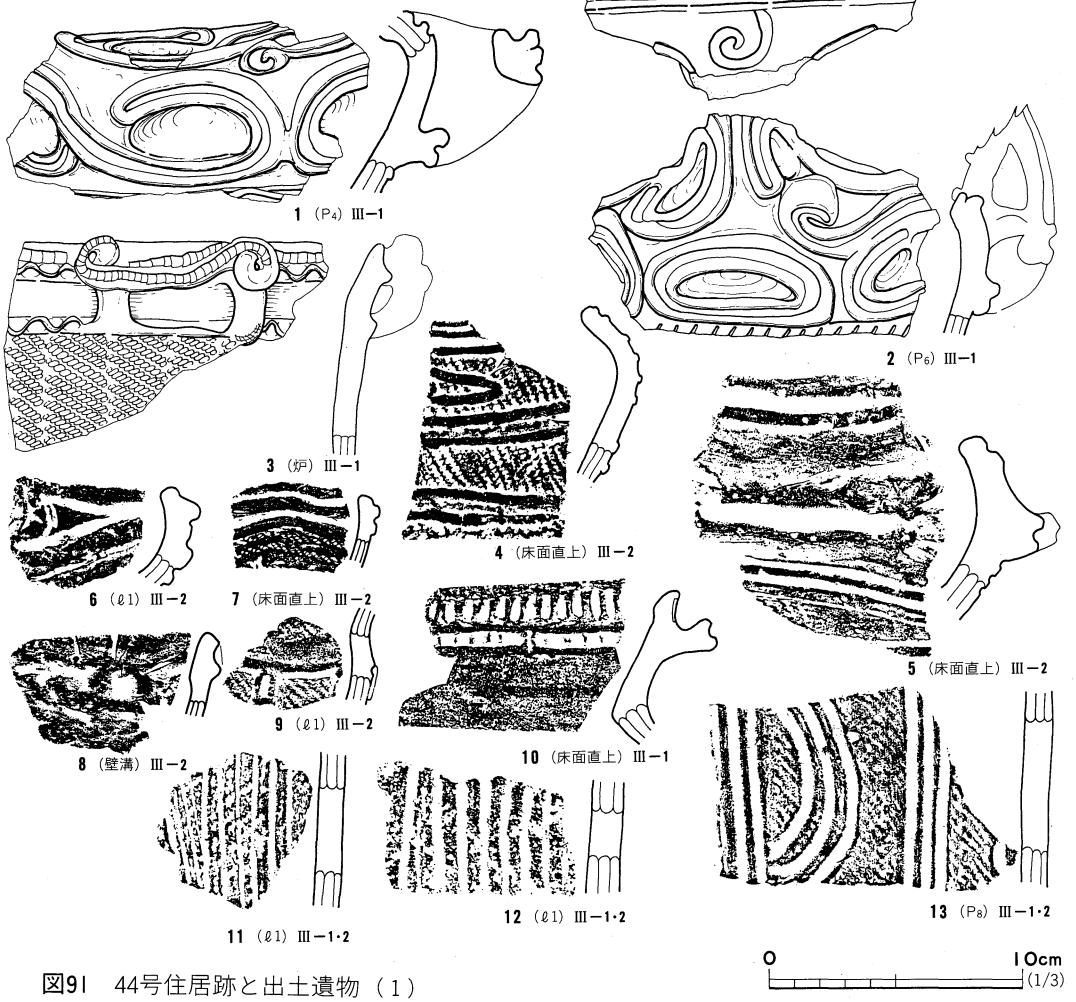


図91　44号住居跡と出土遺物（1）

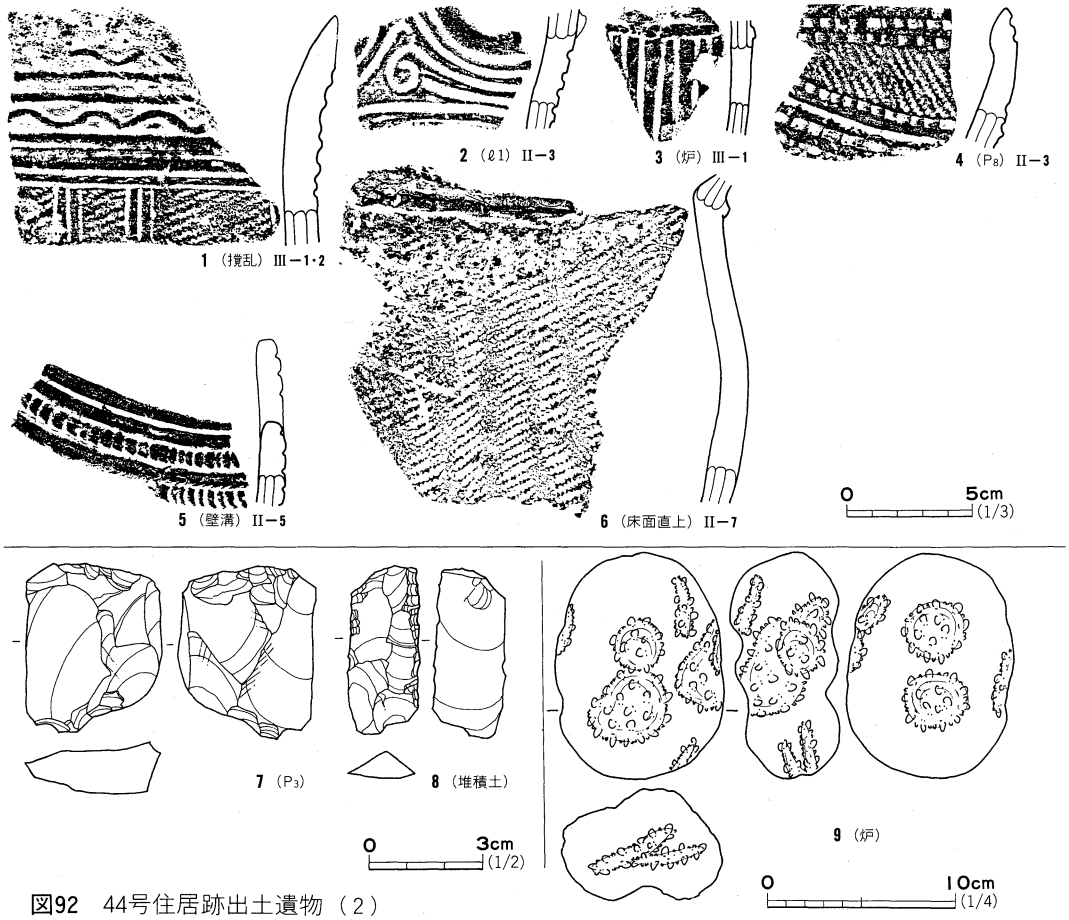


図92　44号住居跡出土遺物（2）

同図4～7は，キャリパー状の深鉢の口縁部破片である。文様は隆線や隆沈線によって描かれている。7は隆線に沿って縄圧痕文が施されている。図92−5には，連続して爪形文が施されている。同図7・8は剥片の縁辺部に調整剥離を加えた不定形石器，同図9は凹部を持つ磨石で，下縁部は溝状に削られている。

ま と め

本住居跡は，東西が長い長方形の竪穴住居跡である。住居跡の中央に地床炉があり，主柱穴は住居跡の平面形と同様長方形に配置されていた。本住居跡は出土した土器と他の住居跡との重複関係から，大木8b式期の所産と考えている。　（松　本）

45 号 住 居 跡（S I 45）

遺　　構（図93，付図3，写真44）

ニ・ヌ34・35Gにおいて検出した竪穴住居跡で，検出面はS I 32・44の床面である。S I 32・

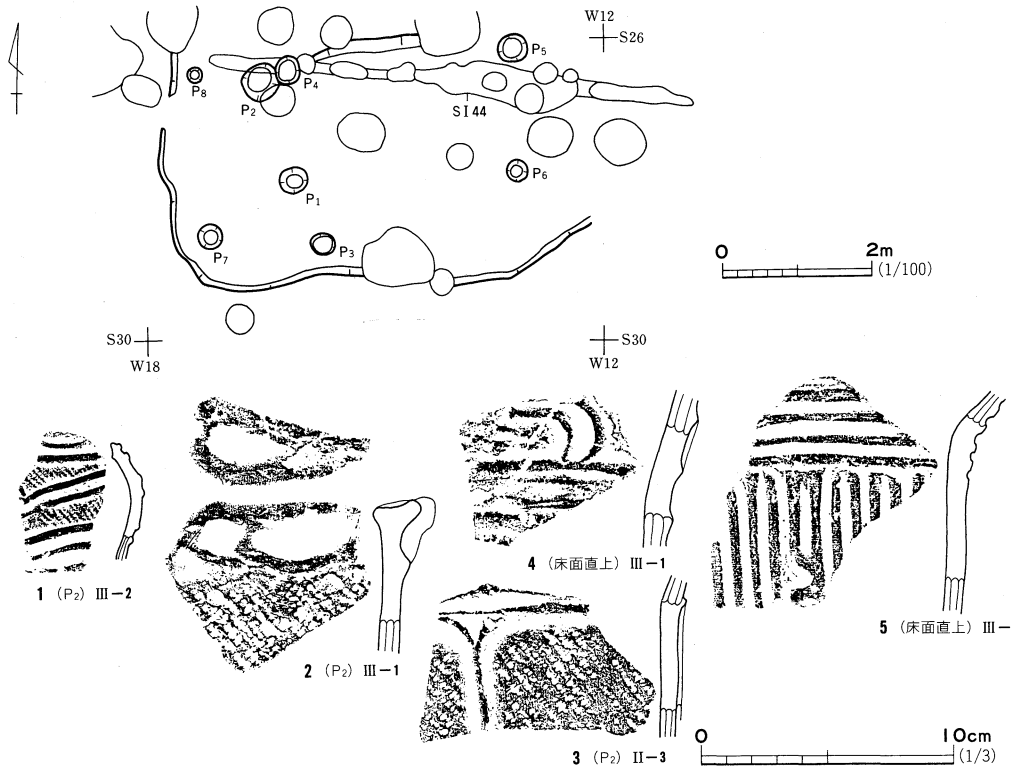


図93　45号住居跡と出土遺物

44，ＳＫ240・253と重複し，ＳＩ32・44より古く，ＳＫ240より新しい。ＳＫ253との新旧については，同土坑堆積土上面にＳＩ44の炉が作られ，直接には本住居跡と重複していないため不明である。遺構の遺存状態は悪いが，東壁を除く周壁について，そのほとんどを検出することができた。平面形は長方形状を呈し，規模は東西が5.3ｍ，南北は3.4ｍである。検出面からの深さは，最大11㎝である。住居内にはくすんだ褐色土が堆積していた。

住居施設については，８個の小穴を本住居跡に伴うものと考えている。P2～P5は住居跡の壁際に作られ，深さも40㎝以上である。これらを本跡の主柱穴と判断している。他の小穴は深さ20～30㎝と浅いが，P5とP6，P7とP8は，南北にそれぞれ対応する位置にあることから，本住居跡の主柱穴と判断した。こらの小穴内には，褐色土を主体とする土が堆積していた。P3内には，焼土粒子が多く含まれていた。炉は検出できなかった。

遺　　物（図93）

45号住居跡からは，50点の縄文土器破片が出土している。土器破片の多くは，住居跡堆積土中から散在して出土した。図93－1～3はP2内から出土している。P2についてはＳＩ44の柱穴・壁溝と重複しているため，これらの遺物が直接P2に伴うものかどうか判断できない。同図4・5

は床面直上から出土している。1はキャリパー状の深鉢の口縁部破片で，文様を隆沈線によって描いている。5は沈線文を多用して文様を描く土器である。

ま と め

本住居跡は，東西が長い長方形の竪穴住居跡である。住居跡の壁際には主柱穴が作られ，その配置は，住居跡平面形と同様長方形状を呈している。本住居跡は出土した土器，他の住居跡との重複関係から，大木8a式期の所産と考えている。　（松　本）

46号住居跡（SI46）

遺　　構（図94，写真42）

調査区西端部，マ・ミ95・96GのLV上面で検出した竪穴住居跡である。本住居跡は約15°の勾配を有する比較的急な斜面部に構築されており，傾斜面下位の北側は壁が遺存していない。平面形は，西壁・南壁・東壁の遺存状況から隅丸の長方形と考えられ，長軸は真北から約45°東にずれている。規模は東西5.9m，南北は現況で3.5mである。周壁の立ち上がりは急で，壁の残存高は最大50cmである。床面は平坦だが，南東から北西に向かって傾斜しており，最大比高差は27cmである。遺構内堆積土は，4層に大別される。ℓ1はLⅢbより黒い黒褐色土，ℓ2・ℓ4は暗褐色土，ℓ3は黄褐色土である。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから，自然堆積と判断した。

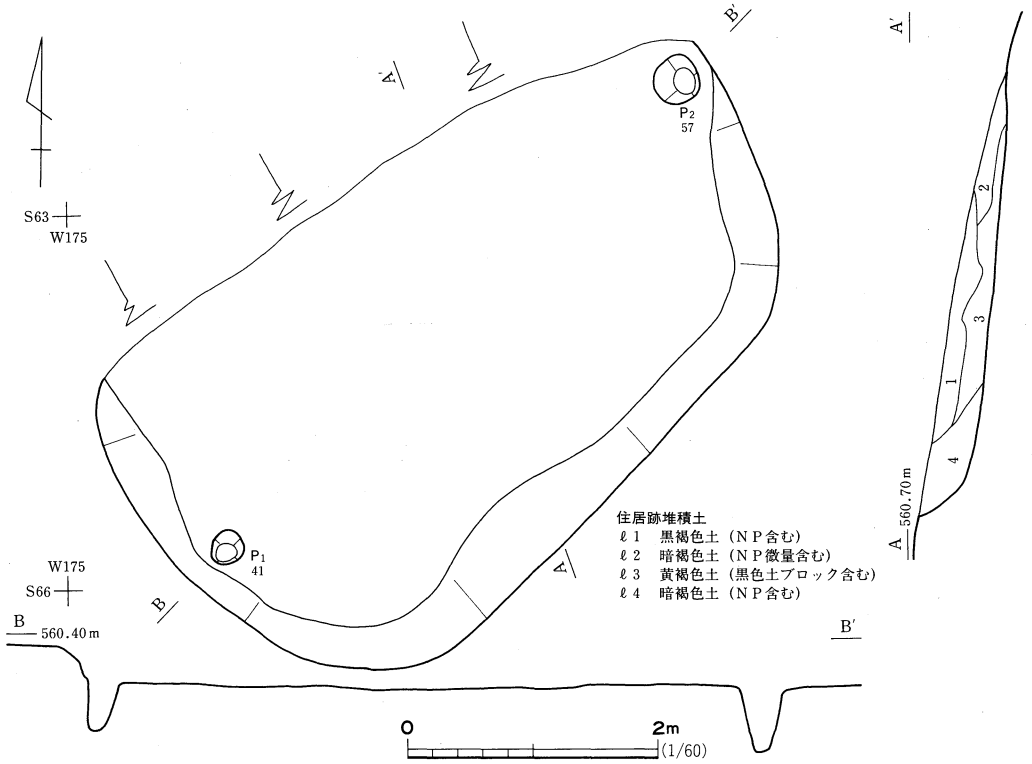
柱穴と考えられる小穴が，西壁のほぼ中央付近と東壁の北端で検出された。P1は直径26cmで深さ41cm，P2は直径37cmで深さ57cmである。この他，壁が遺存していない北側の傾斜面下位部を精査したが，柱穴は認められなかった。これにより本跡は，P1とP2を結ぶ線を長軸とした2本柱構造の住居跡と考えられる。炉は，遺存部に認められなかった。

遺　　物（図94）

46号住居跡からは，84点の縄文土器破片と，1点の石器が出土している。土器破片は堆積土中から散在した状態で出土している。図94－1～3は，深鉢と推定される土器の口縁部破片である。1は隆線と沈線でV字状文を描き，地文には縦位の羽状縄文が施されている。2は同図8と同じ個体で，複合口縁の深鉢である。文様は縦位のアヤクリ文が施され，その間を無文としている。同図5も同様の文様を呈している。3は口縁部上端に斜め方向からの刺突文を有し，ボタン状の貼付文が認められる。同図4～8は深鉢の胴部破片である。4は隆線に連続刺突文を加え，6は横位のアヤクリ文，7は横位の羽状縄文が施されている。同図9は不定形石器で，剥片の下縁部に細かな調整剥離を裏面から加えている。

ま と め

本跡は，他にあまり住居跡の検出されていない，調査区西側の北西向き斜面に位置している。



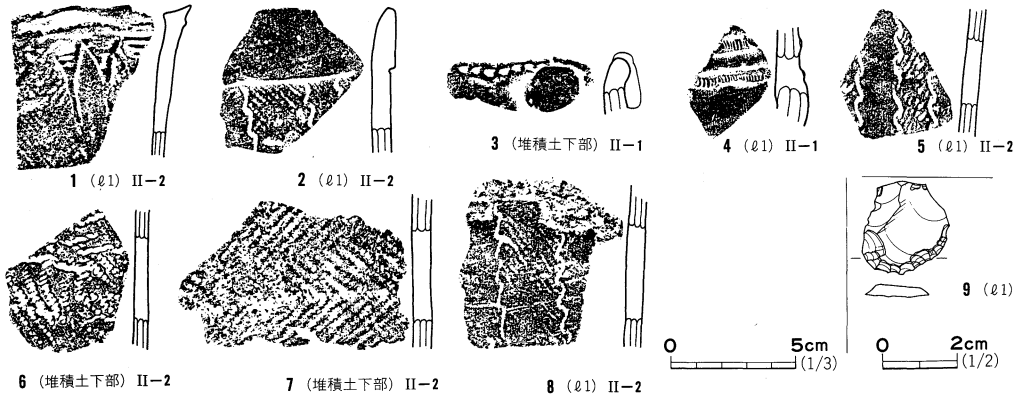


図94　46号住居跡と出土遺物

炉を持たない2本柱構造の住居跡で，所属時期は，出土土器の主体が大木7a式であることから，この時期と考えている。（丹　治）

47号住居跡（SI47）

遺　　構（図95，写真43）

調査区東側丘陵の南向き斜面裾部，タ56・57Gで検出された竪穴住居跡である。SI54・55

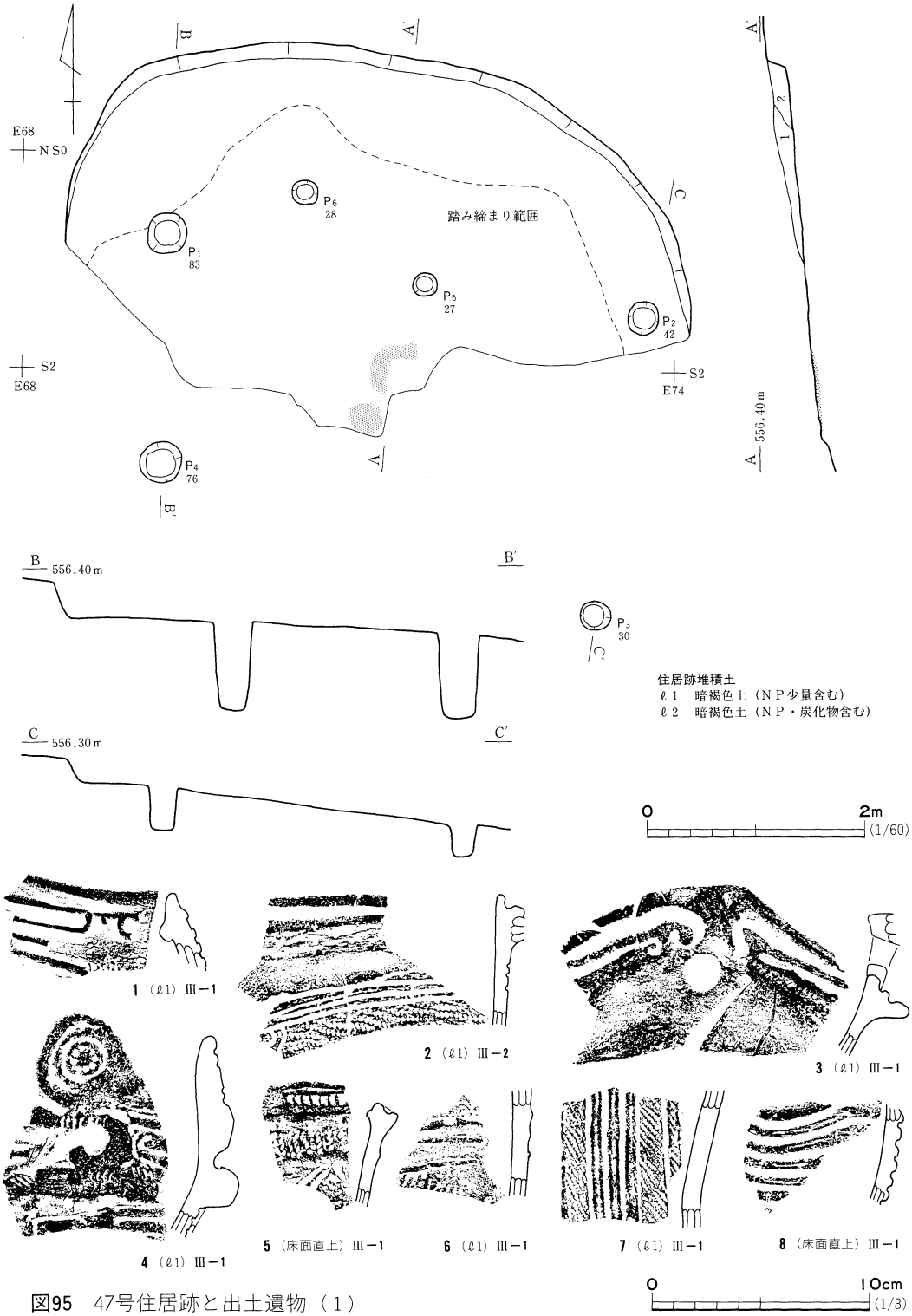


図95　47号住居跡と出土遺物（１）

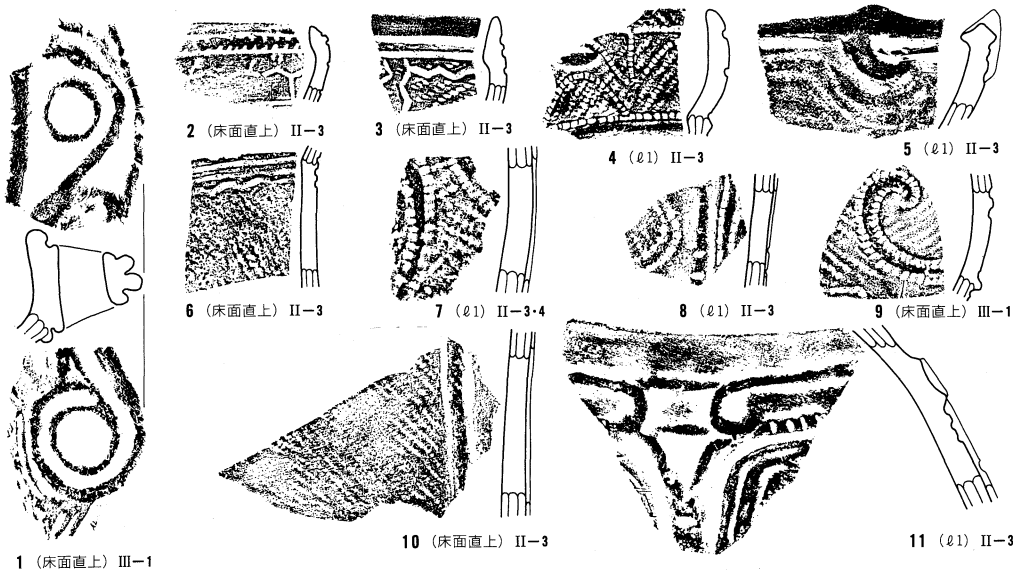


図96　47号住居跡出土遺物（2）

と重複し，本跡が最も新しい。検出面は，これら重複する遺構の堆積土上面である。遺存状態は悪く，検出できたのは北壁だけである。このため，規模・平面形については断言し難いが，遺存部の状況から，東西が長い楕円形状の住居跡と判断した。規模は東西5.8ｍ，南北は床面の踏み締まりの認められる範囲で3.5ｍである。周壁は急傾斜で立上がり，壁高は最大34㎝である。床面は平坦であるが，ＬＶの傾斜と同じく北から南に緩やかに傾斜している。図95に破線で示した範囲内には，部分的にＬＶと同質な黄色土を貼って，床面を作っていた。住居内堆積土は，2層に区分した。ベースとなる土はすべて，ＬⅢｂに近似する暗褐色土である。堆積状況については，壁際に高い堆積が見られる事から，自然堆積と判断している。

住居内からは，6個の小穴と1基の炉が検出された。小穴は直径25～40㎝，深さは現況で27～83㎝である。これらの小穴の中で，住居跡コーナー部に作られているＰ1・Ｐ2と，これと対応する位置にあるＰ3・Ｐ4が，本住居跡の主柱穴と考えている。Ｐ3については深さ30㎝と浅いが，これは，小穴の検出面が床面よりも下位であったためであろう。本住居跡の主柱穴は西側の2個が深く，東側のものは浅い。Ｐ5・Ｐ6についてはその作られた位置から，主柱穴を補う機能を考えている。炉は，住居跡中央からやや南に寄った所に作られている。床面が焼けただけの地床炉である。一部焼けていない部分が認められるが，基本的には1つの炉と判断した。焼土の範囲は30×60㎝，焼土化は炉上面から5㎝下まで認められた。

遺　　物（図95・96）

本住居跡からは，縄文土器破片が200点出土している。土器破片は堆積土中より散在して出土

している。図95－1・6は粘土紐，同図2・7は平行する沈線文が施されたものである。同図3は波状を呈する深鉢で，口縁上端に端部が渦巻状をなす沈線文を施している。同図4は，隆帯で胴部と口縁部を区画している。口縁部には円盤状の突起が付き，突起下には渦巻状の隆帯が見られる。隆帯上には，部分的に爪形文を施している。同図5は口縁部直下に縦位の縄圧痕文を施し，その下には平行する沈線で山形の文様を描いている。口端部には，横位に一条有節沈線が加えられる。同図8は密接する沈線で文様を描いている。

図96－1は中空の把手である。同図2・3は沈線を横位・波状に施すものである。2の口縁部直下には交互刺突文を施している。同図4・7～9は，有節沈線で文様を描いている。7・9には渦巻文が認められる。同図10は隆沈線で胴部を区画している。同図11は隆沈線で楕円形状の単位文を施している。胴部にはY字状の隆線を垂下させている。

ま と め

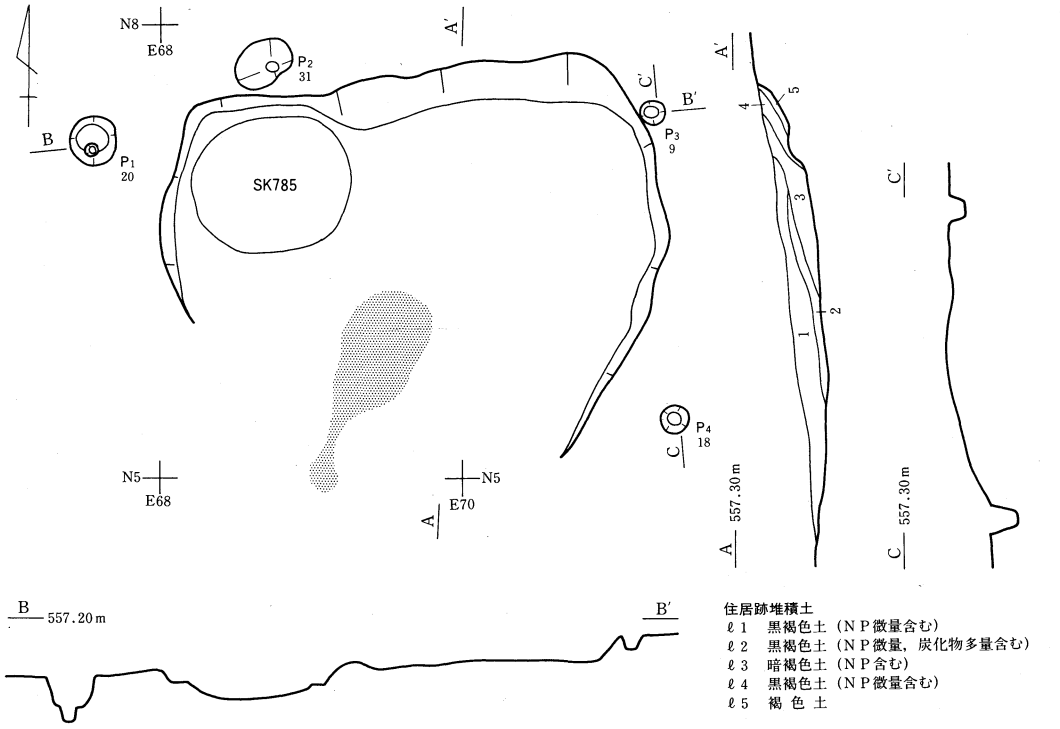
本住居跡は遺存状態が悪く，正確な平面形や規模は確認できなかった。遺存部と住居施設のあり方から東西5.8m，南北5.0mの楕円形状を呈する住居跡と推定される。本跡の所属時期は，出土土器と遺構の重複関係から，大木8a式期と判断している。　（松　本）

48号住居跡（SI48）

遺　　構（図97）

調査区東南部，セ56GのLV上面で検出された。調査区東部の小丘においては，本住居跡が最も高い場所に占地している。他の遺構との新旧関係は，SI52より新しいが，SK785との新旧は不明である。遺存状態は悪く，検出できたのは住居跡の北壁と東壁・西壁の一部である。平面形はその遺存部の状態から，南側が狭い隅丸台形状を呈するものと考えられる。北壁は東西方向を示している。規模は東西が3.4m，南北が現況で3.0mである。検出面からの深さは，最も遺存状態の良い北壁で最大23cm，周壁は緩やかに立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大23cmである。床面には，地山に含まれる小礫～大礫が散在している。遺構内堆積土は4層に区分した。堆積状態は，北壁より南側の斜面下位に向かってレンズ状に堆積しており，自然堆積と考える。ℓ1～ℓ3については基本土層のLⅢbに近いものである。ℓ2は炭粒を多く含んでいる。

本住居跡に伴うと考えられる小穴4個は，すべて住居外から検出した。これらの小穴は住居跡の各コーナー部に近接して作られている。P1・P2は直径が約30cm，深さが30cmである。P3・P4は直径が約18cm，深さはそれぞれ9・18cmである。P1・P3の間隔は3.7mで，P3・P4の間隔は2mである。近接しているP1・P2は2本同時に機能していたものとは考え難く，いずれかが移設されたものと判断している。さらに上屋を支えるためには，南西コーナー部付近に，1個



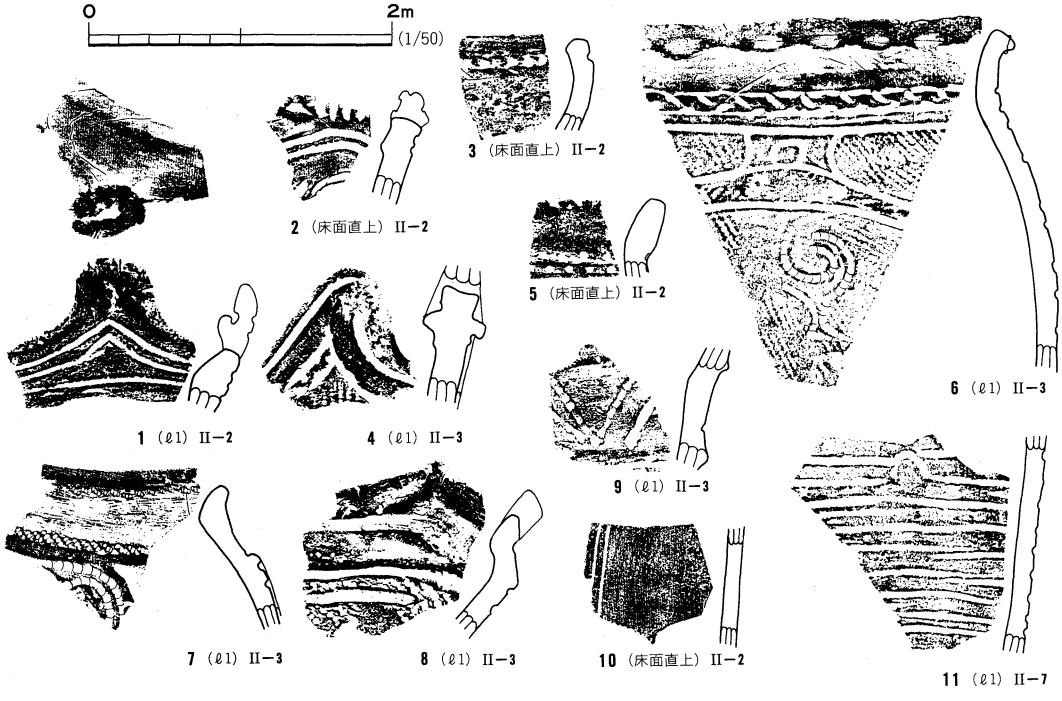


図97　48号住居跡と出土遺物（1）

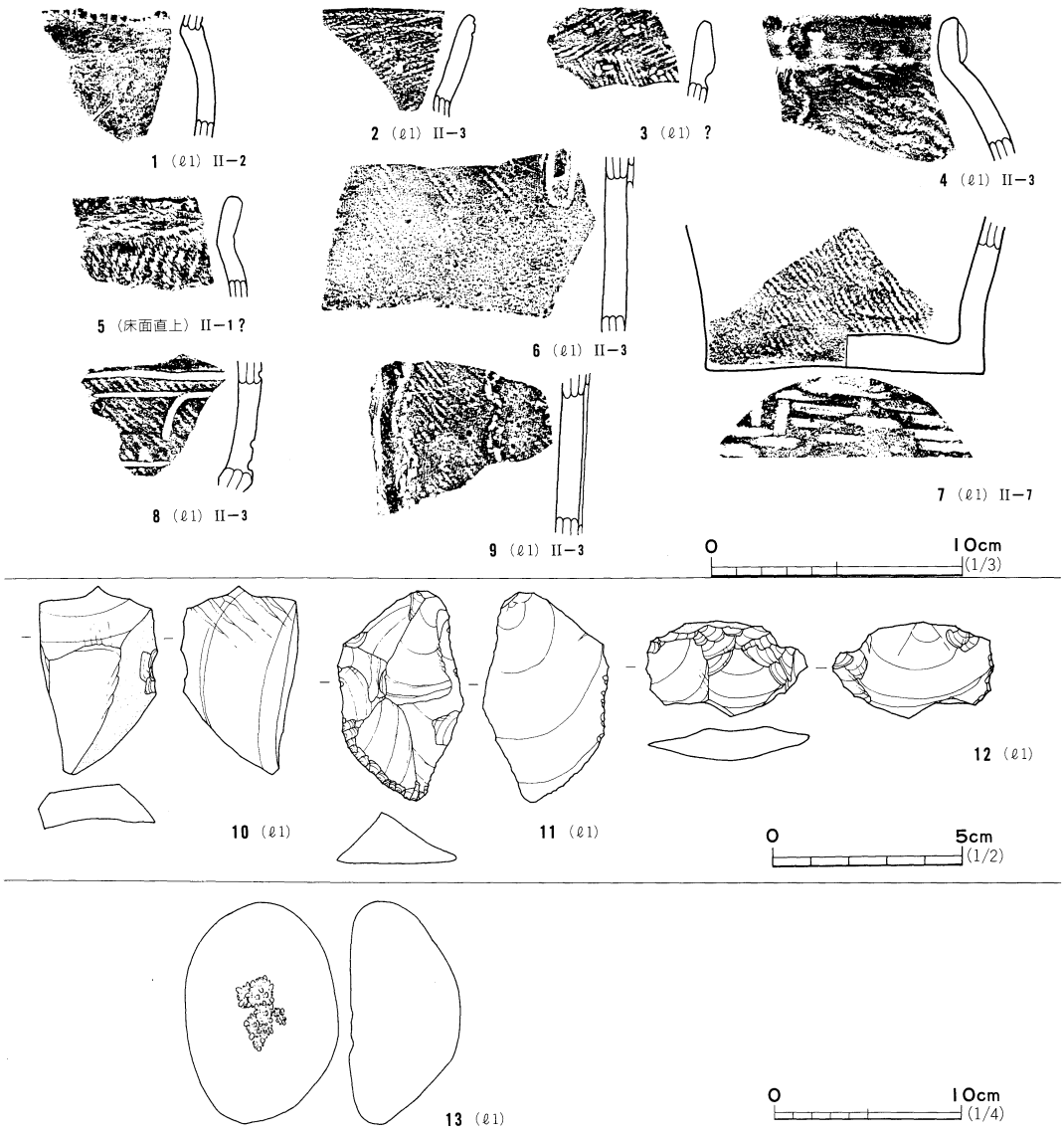


図98　48号住居跡出土遺物（2）

の柱穴が必要と推測されるが，調査時にはそのような柱穴は確認できなかった。炉は床面が焼けただけの地床炉で，住居跡の南側に作られている。南北に長い瓢箪形の平面形を呈し，規模は長軸145㎝，幅は53㎝である。炉の焼けは強く，炉上面から5㎝下まで焼土化が及んでいる。

遺　　物（図97・98）

出土した遺物は縄文土器片184点である。堆積土及び床面直上から，破片が散在した状態で出土した。図97−1・2は複合口縁状に肥厚する口縁部に，沈線文が施されたもので，2の口唇部

には刻みが加えられている。同図4は波状口縁部の破片で，隆沈線により文様が描かれ，一部に交互刺突文が施される。同図6・7の胴部文様帯上端には，6が交互刺突文，7は隆線と縄圧痕文が施されている。6の口唇部外縁には押捺が，7の口唇部直下には縄圧痕文が施される。6の胴部に描かれた渦巻文と7の隆線に沿う部分，同図9には有節沈線文が施されている。

同図3・5は連続刺突文，同図8は沈線文，同図10・11は細い沈線文が施されている。図98－1には連続爪形文，同図2には縄圧痕文，同図4は口縁部に棒状の突起が付けられている。同図3は刺突文状に縄の端部を押し付けている。同図10～12は，剥片の縁辺部に調整剥離を加えた不定形石器である。同図13は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本住居跡は，遺存状態は悪いが現況から判断すると，一辺3.5ｍ程度の台形状を呈するものと考えられる。住居施設は地床炉と，屋外に設けられた柱穴が確認された。本住居跡の所属時期は，出土土器から大木7b式期と考える。（香　内）

49号住居跡（ＳＩ49）

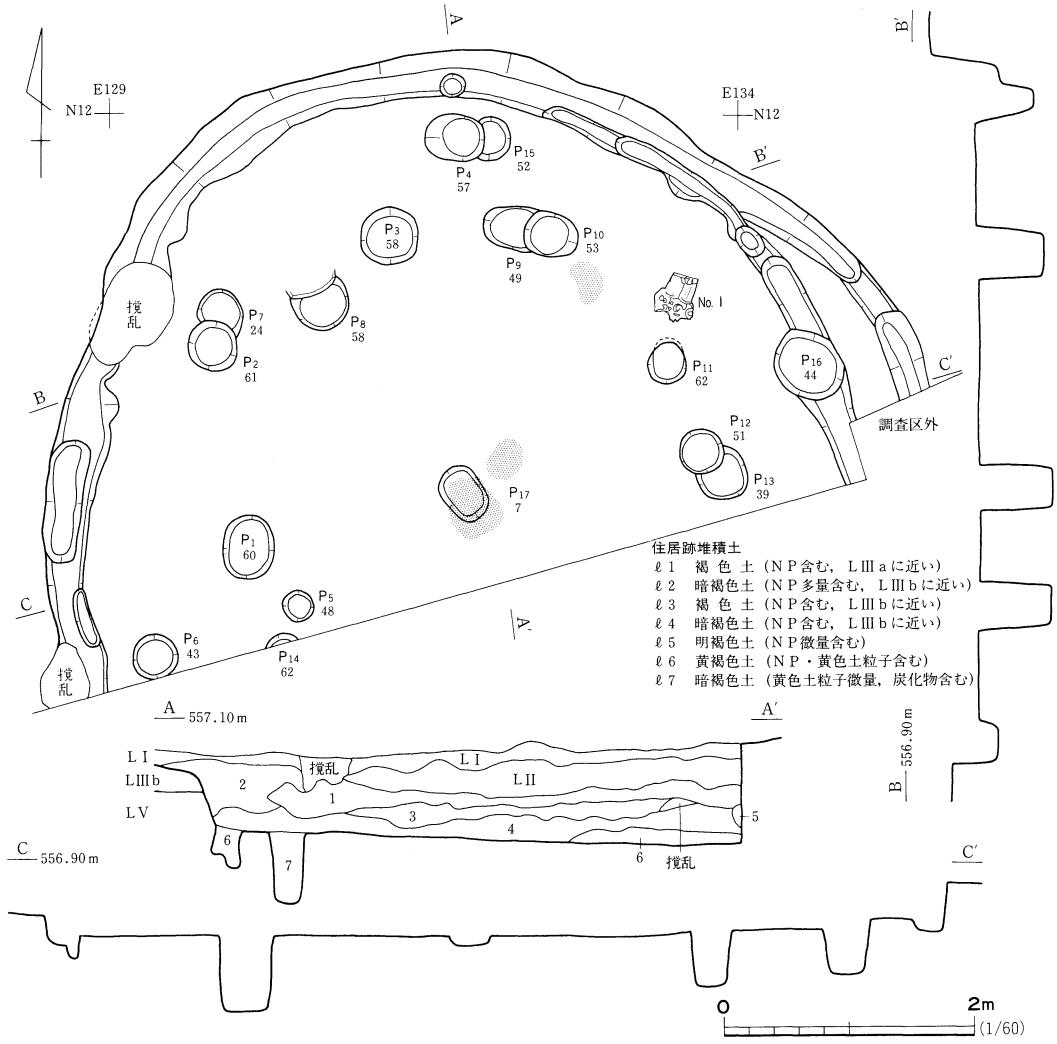
遺　　構（図99，写真45）

調査区東端部，ス・セ71Ｇから検出された竪穴住居跡である。本住居跡周辺部には土坑が数基見られるだけで，遺構の密度は極めて低い。検出面はＬⅣ上面であるが，土層観察の結果ＬⅢｂを掘り込んで作られていることを確認した。遺存状態は良好であるが，住居跡東半部は調査区外に延びるため，正確な規模や平面形は不明である。住居跡西半部の平面形は整った円形状を呈し，規模は現況で東西7.2ｍである。周壁の立上がりは急で，壁高は最大31㎝を測る。床面は平坦で固く締まっている。堆積土最上部にはＬⅡが窪みを埋めるように堆積している。堆積状態はレンズ状の堆積を示すことから，自然堆積と判断される。

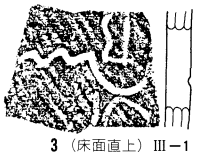
住居内からは，壁溝・小穴・炉が検出された。壁溝は周壁際を途切れること無く全周し，住居跡東壁際では2条に枝別れしている。幅は36㎝，床面からの深さは20㎝程である。壁溝底には小穴状・溝状の窪みが多数認められる。小穴は16個検出された。この中で，周壁と平行するように円形状に配置されている，P2・P4・P6・P16が本住居跡の主柱穴と考えている。規模は直径34～56㎝，床面からの深さは43～57㎝である。P1・P3・P5・P8～P12・P14は，前述した小穴の内側に配置されている。規模は直径25～50㎝，床面からの深さは48～62㎝で，主柱穴に劣らない規模を有している。炉は3か所から検出された。いずれも直径40㎝と規模が小さい。焼けは弱く，焼土化は炉上面から2～3㎝程度下までしか認められなかった。

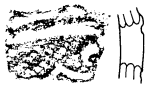
遺　　物（図99・100）

本住居跡からは，土器片278点と石器3点が出土している。その多くはℓ1及びℓ2の上部か



1（堆積土）Ⅲ－1


3（床面直上）Ⅲ－1


4（床面直上）Ⅲ－1

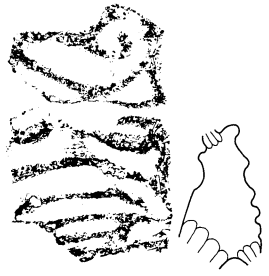

2（床面直上）Ⅲ－1

図99　49号住居跡と出土遺物（１）

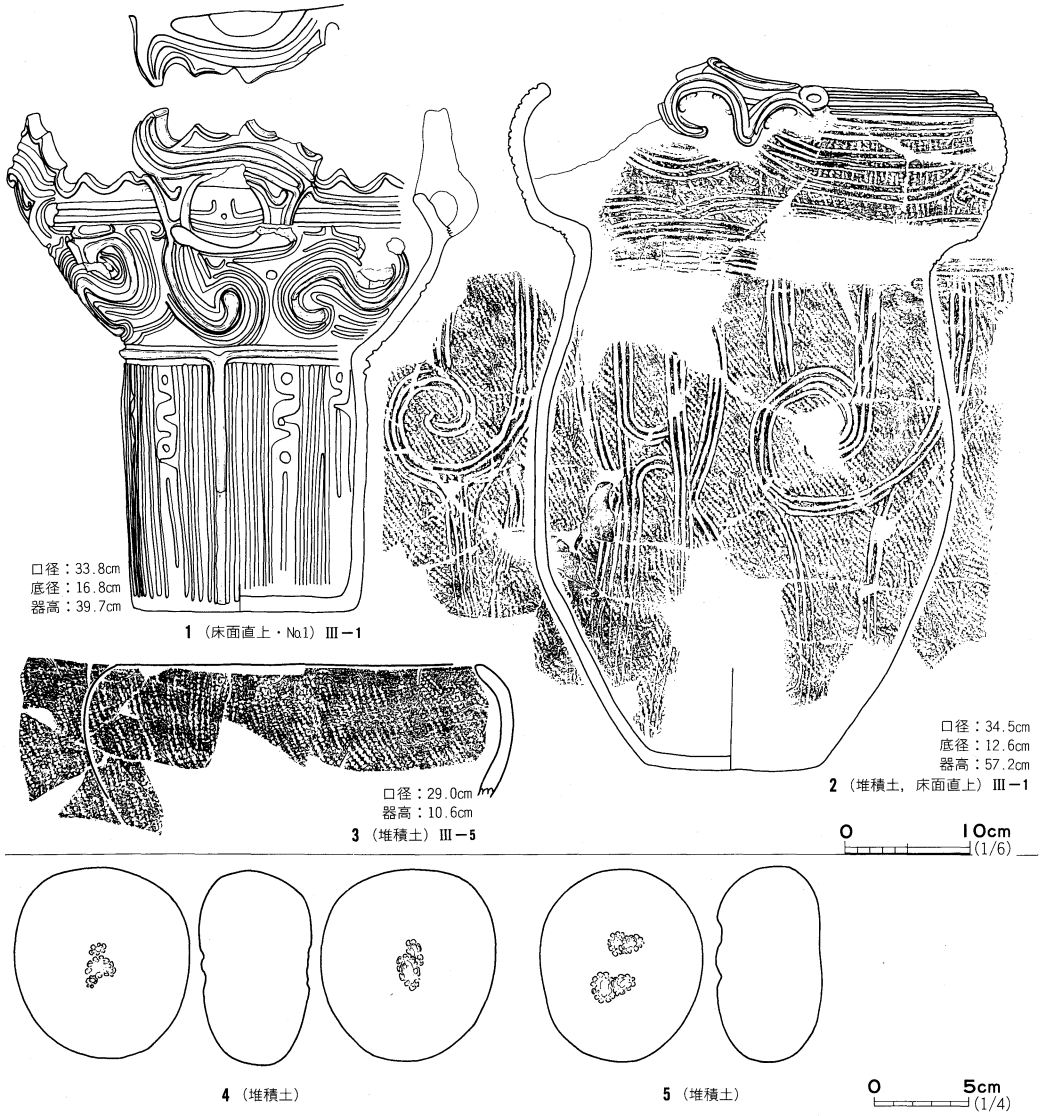


図100　49号住居跡出土遺物（2）

ら散在した状態で出土しているが，P11に近接する位置から図100－1に示した深鉢が潰れた状態で出土している。図100－1は，口縁部に鶏頭冠状の把手を持つ深鉢である。文様は，密接して施された沈線で描かれている。口縁下部には隆帯による渦巻文を配し，その間を沈線文で充填している。胴部はT字状の隆帯で区画され，区画内には縦位に沈線文を施している。この沈線文の一部は入り組み文を描き，この部分に円形の刺突文を加えている。

同図2は，口縁部が浅く内湾する深鉢である。口縁部に中空の突起が付き，その間を平行沈線による弧状文で繋いでいる。胴部には同種の沈線を縦位・渦巻状に施し，たがいに横に連続させ

ている。同図3は縄文の施された粗製土器である。図99－1・2は，両脇を調整しない粘土紐で文様を描いている。1にはクランク文と波状文が見られる。同図3・4は沈線で文様を描くものである。図100－4・5は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本遺構は，直径7.5m程の円形状の住居跡と推定される。住居施設には枝別れする壁溝と，円形状に配置された2列の柱穴列が認められた。このことから，本住居跡は立替・拡張されたものと判断している。本住居跡の所属時期は，出土遺物から大木8a式期と考えている。　（松　本）

50号住居跡（SI50）

遺　　構（図101，写真46）

調査区東部，セ56・57Gとソ57GのLⅣ及びLⅤ上面で検出した竪穴住居跡である。SI54と重複し，本住居跡に伴うと考えられる小穴が，SI54堆積土上面から検出されていることから，本跡が新しいと判断した。本跡は小丘陵の比較的急な南向き斜面に構築されていることから，住居跡南半部の遺存状態は悪く，壁の立ち上がりは捉えられなかった。

平面形は北壁の遺存状況から，円形を基調とするものと考えられる。規模は現況で東西4.8m，南北4.3mである。北壁の立ち上がりは急で，壁の残存高は最大16cmである。遺存する床面は，北から南に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は，LⅢb上部に堆積する土に近似する暗褐色土であるが，黄褐色土ブロックも混入している。堆積状況については，判断するだけの材料が得られなかった。

住居施設には，柱穴と考えられる小穴が8個と壁溝がある。P1～P5は直径が約30cm，床面からの深さは，P1・P2・P5がそれぞれ42・50・31cm，P3・P4は傾斜面下位に作られているため，現況で30cm程である。近接しているP1とP2の堆積土は暗褐色土であるが，その位置から2本同時に機能したものとは考え難く，いずれかが移設されたものと判断している。従って，P1またはP2のいずれかと，P3～P5の計4本の柱で主柱を構成するものと捉えている。P6～P8はその位置から壁柱穴と考えられる。直径20～30cm，床面からの深さは14～21cmで主柱穴より一回り小さい。

壁溝は，北壁際に途切れることなく遺存している。幅は約25cm，深さは 5～14cmである。壁溝内には，黒褐色土及び暗黄色土が堆積していた。P5の南東部には現況で33×45cmの規模を有する焼土が検出された。焼けの状態は極めて弱く，本住居跡に伴う炉と判断することはできなかった。

遺　　物（図101）

SI50からは，縄文土器片31点と石器が3点出土している。土器片は住居跡堆積土中と小穴

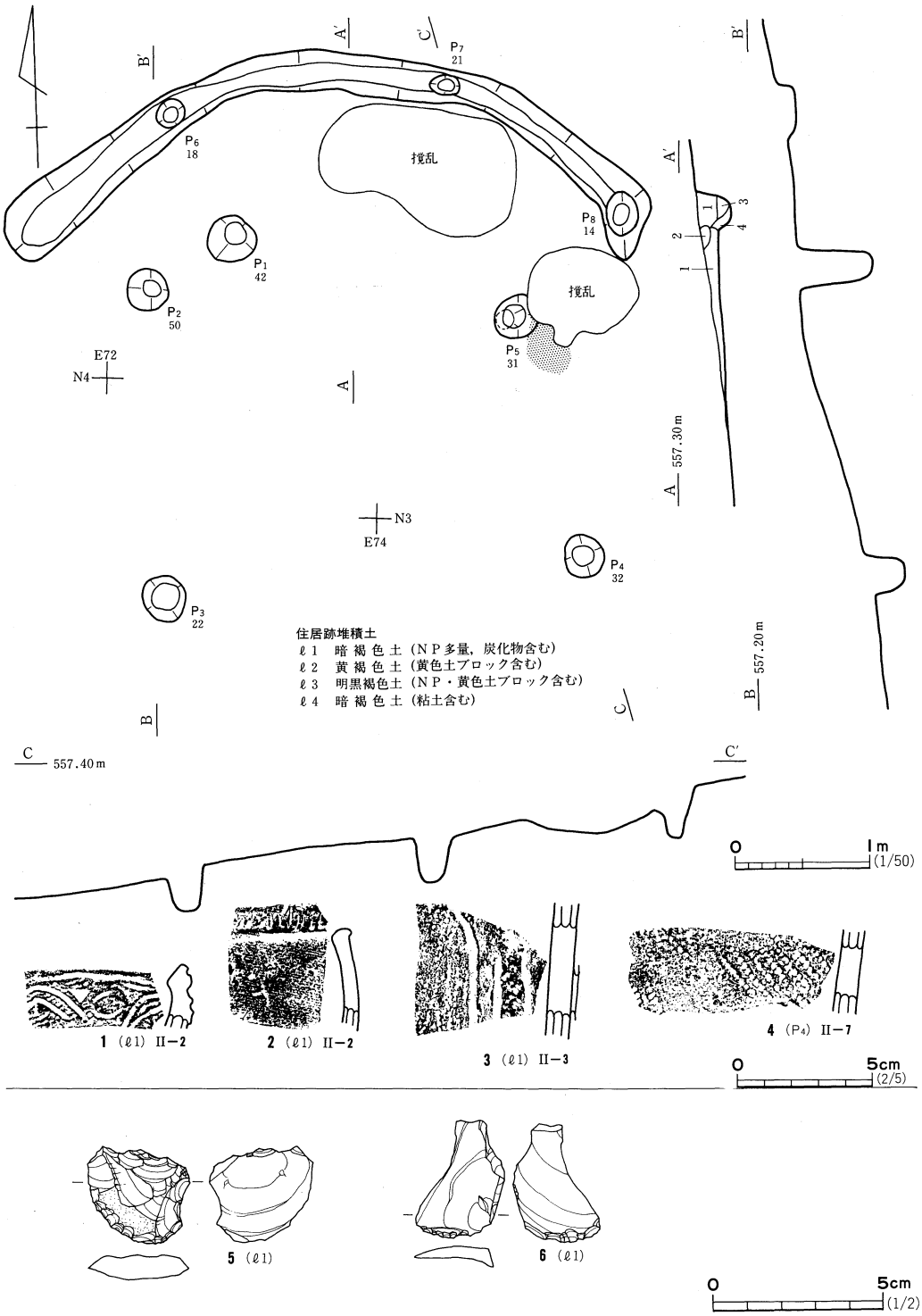


図101　50号住居跡と出土遺物

内から散在して出土した。図101－1・2は，深鉢の口縁部破片である。1は沈線による文様の隙間に，三角文を加えている。2は，口唇部に刻みを施している。同図3・4は深鉢の胴部破片で，3は沈線文と隆帯，4は縄文を施している。同図5・6は不定形石器で，5は側縁部に，6は下縁部に表裏面から調整剥離を加えている。

ま と め

本住居跡は遺存状態が悪く，平面形と規模を正確に確認できなかった。現況から判断すれば，直径5.5ｍ程の円形の竪穴住居跡と推測される。主柱穴は，方形状に配置されている。炉は検出されなかった。所属時期は，重複する遺構や数は少ないものの出土遺物から判断して，大木7a式期末葉から大木7b式期初頭に近接する時期と考えている。（丹　治）

51号住居跡（ＳＩ51）

遺　　構（図102，写真47）

タ・チ58～60ＧのＬＶ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＫ261・264・272と重複し，ＳＫ261より古いが，他の遺構との新旧は不明である。住居跡北側の遺存状態は良いが，傾斜面下位に作られた住居跡の南壁は検出できなかった。平面形は遺存部の状態から，東西が長い楕円形を呈するものと考えられる。規模は現況で東西10.1ｍ，南北5.5ｍである。検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北壁で最大69㎝を測り，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面はほぼ平坦であるが，北から南に緩やかに傾斜しており，比高差は最大40㎝である。住居内堆積土は4層に区分した。堆積状況は，壁際からの流れ込みの状況が観察されることから，自然堆積と判断した。

小穴は，総数37個検出された。Ｐ1～Ｐ4，Ｐ6～Ｐ22 は径24～50㎝，床面からの深さは39～74㎝である。これらの小穴は，住居跡の平面形と同じく楕円形状に配置されていることから，本住居跡に伴う主柱穴と考えられる。Ｐ10・Ｐ11・Ｐ15は，炉に近接した位置に作られている。Ｐ5については床面からの深さ，東壁の状況から本住居跡に伴わない可能性がある。これらの柱穴については，Ｐ1・Ｐ12・Ｐ13のように重複するものも多いことから，すべての柱穴が同時期の所産とは考えていない。Ｐ23～Ｐ36はその位置から，壁柱穴と判断している。深さ14～50㎝とばらつきがあるが，径は20～30㎝と主柱穴よりも一回り小さい。

炉は，住居跡の中軸線上から2基検出された。いずれも床面をそのまま利用した地床炉で，掘り込み等は認められなかった。規模は1炉が120×64㎝，2炉は98×64㎝で，いずれも炉の焼けは強かった。

遺　　物（図103・104）

51号住居跡堆積土中からは，縄文土器片が486点，石器が1点出土した。図103－1は，口縁

住居跡堆積土
ℓ1　黒色土（NP少量）
ℓ2　赤褐色土（NP含む）
ℓ3　黒褐色土（NP少量）
ℓ4　暗褐色土（NP含む）

0　2m
(1/60)

図102　51号住居跡

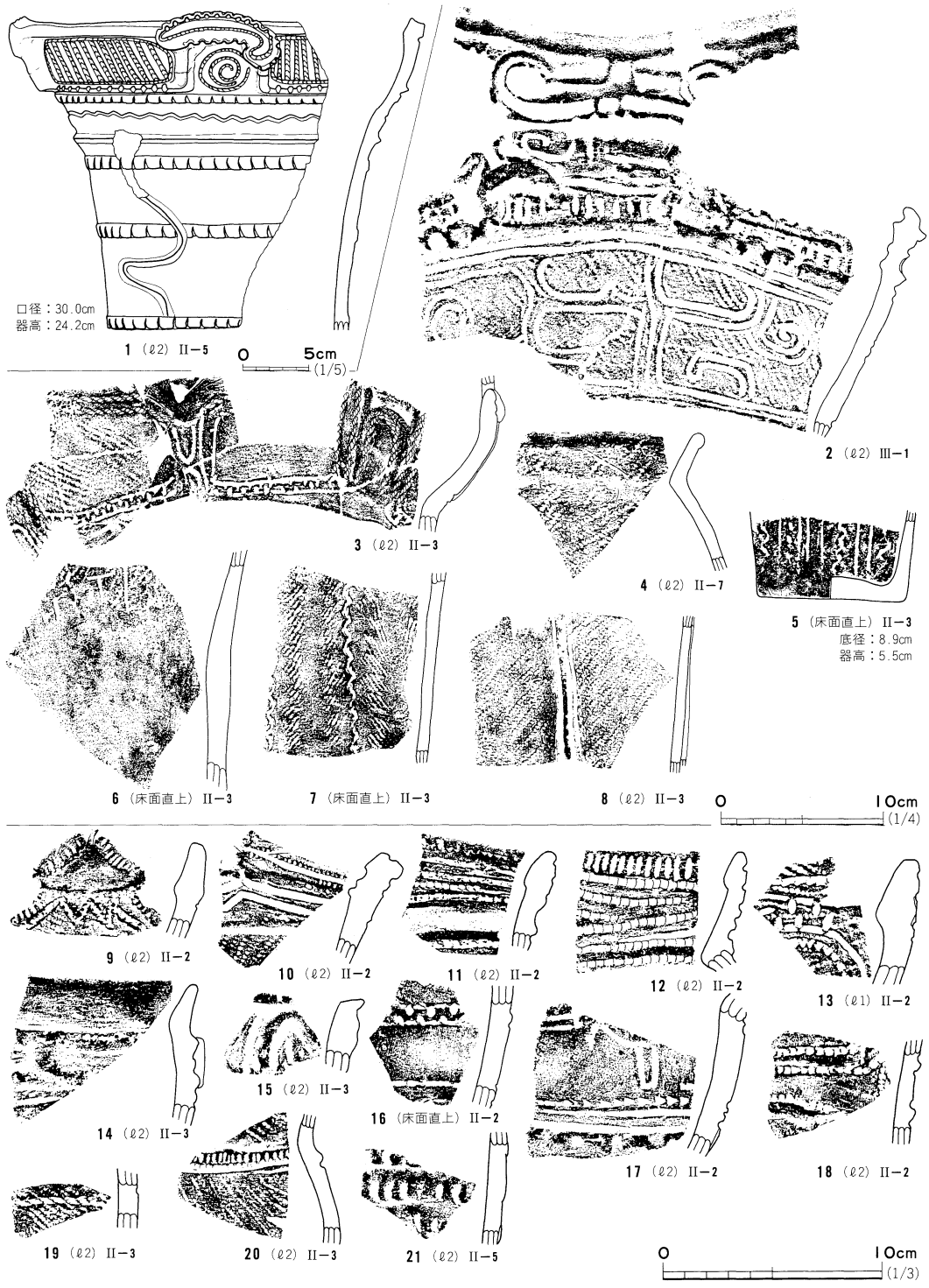


図103　51号住居跡出土遺物（1）

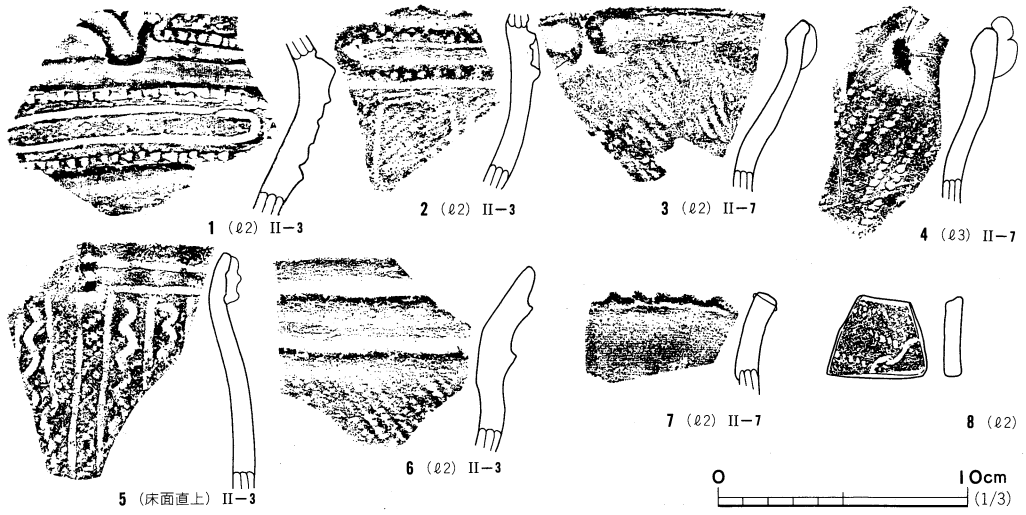


図104　51号住居跡出土遺物（2）

部に扇状の把手が付けられた深鉢である。文様は，口縁部に隆線による楕円形の区画文を施し，区画文内にはヘラの隅を用いた連続刺突文を斜位に施している。扇状把手の頂部には，交互刺突を加えた環が付き，その下位には連続刺突文により渦巻文を描いている。頸部下端は隆線で区画され，ここから蛇行する隆線を胴部へと下ろしている。胴部の粘土紐積み上げ痕の上には，刺突が加えられている。

同図2は口縁部にS字状の突起が付けられている。口縁部直下には，縦位の短沈線を施した幅の狭い文様帯が見られる。同図3は波状口縁の深鉢であろう。H字状の隆線で口縁部を区画している。この区画内には交互刺突文と縄圧痕文が施されている。同図5，図104−5は縦位に沈線文を施すもので，その一部は波状文を描いている。図103−9〜12は，口唇部にスリットや列点文が施され，9・11・12・18や図104−1には，有節沈線文が施されている。図103−13・16には交互刺突文が，同図17には三角形状の連続刺突文が施されている。

ま と め

本住居跡は，東西が長い長方形の竪穴住居跡で，住居施設としては2基の地床炉と楕円形状に配置された21個の主柱穴が検出されている。主柱穴については複数の柱穴が重複しているものが多いことから，拡張を伴う建て替えが行われているものと考えている。本跡の時期は出土土器から，大木7b式期のものと考えられる。　（光　家）

52 号 住 居 跡（S I 52）

遺　　構（図105）

調査区東南部の，セ56GのLV上面で検出された。調査区東部の小丘，南向き斜面上位に立地している。SI48，SK262より古く，SK263より新しい。遺存状態は極めて悪く，住居跡の北西・南東コーナー部は，重複する他の遺構のため検出することができなかった。平面形は不

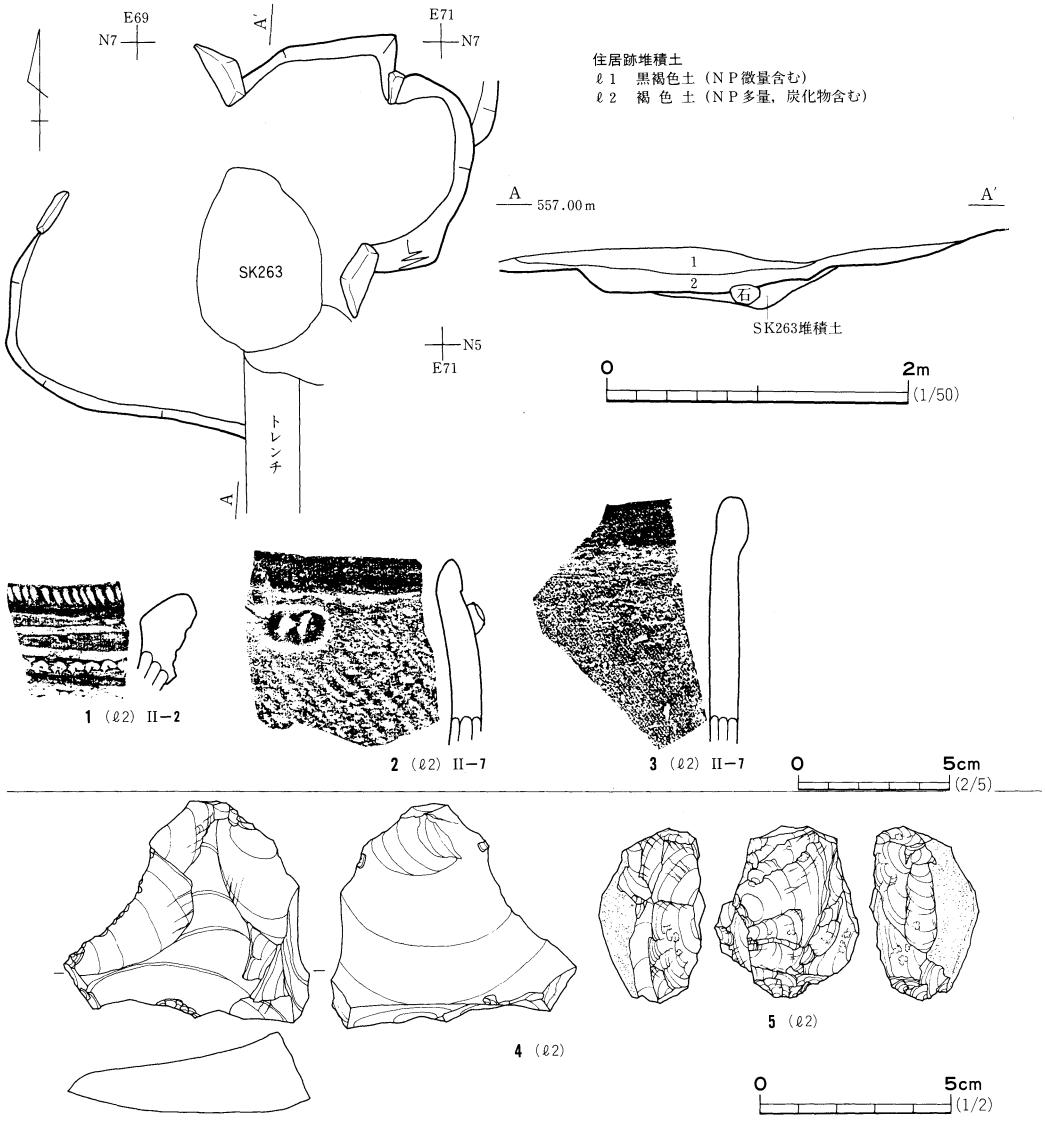


図105　52号住居跡と出土遺物

整方形状を呈するが，遺存する各壁にも括れが多く認められる。規模は東西が最大3.6ｍ，南北は最大で2.6ｍである。検出面からの深さは，最も遺存状態の良い北壁で最大11㎝，周壁は緩やかに立ち上がっている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大22㎝である。床面には，地山に含まれる小礫～大礫が露出している。遺構内堆積土は2層に区分した。堆積状態はレンズ状に近い堆積が認められることから，自然堆積と判断した。本住居跡に伴うと考えられる小穴や炉は検出できなかった。

遺　　物（図105）

出土した遺物は縄文土器片7点，石器4点である。堆積土中や床面直上より破片が散在した状態で出土した。図105－1は複合口縁状に肥厚する口縁部に，沈線文が施されたもので，口唇部には刻みが加えられている。同図2・3は口縁部が丸く肥厚するもので，2の口縁部直下には瘤状の貼付文が見られる。同図4は不定形石器，同図5は黒曜石の石核である。

ま と め

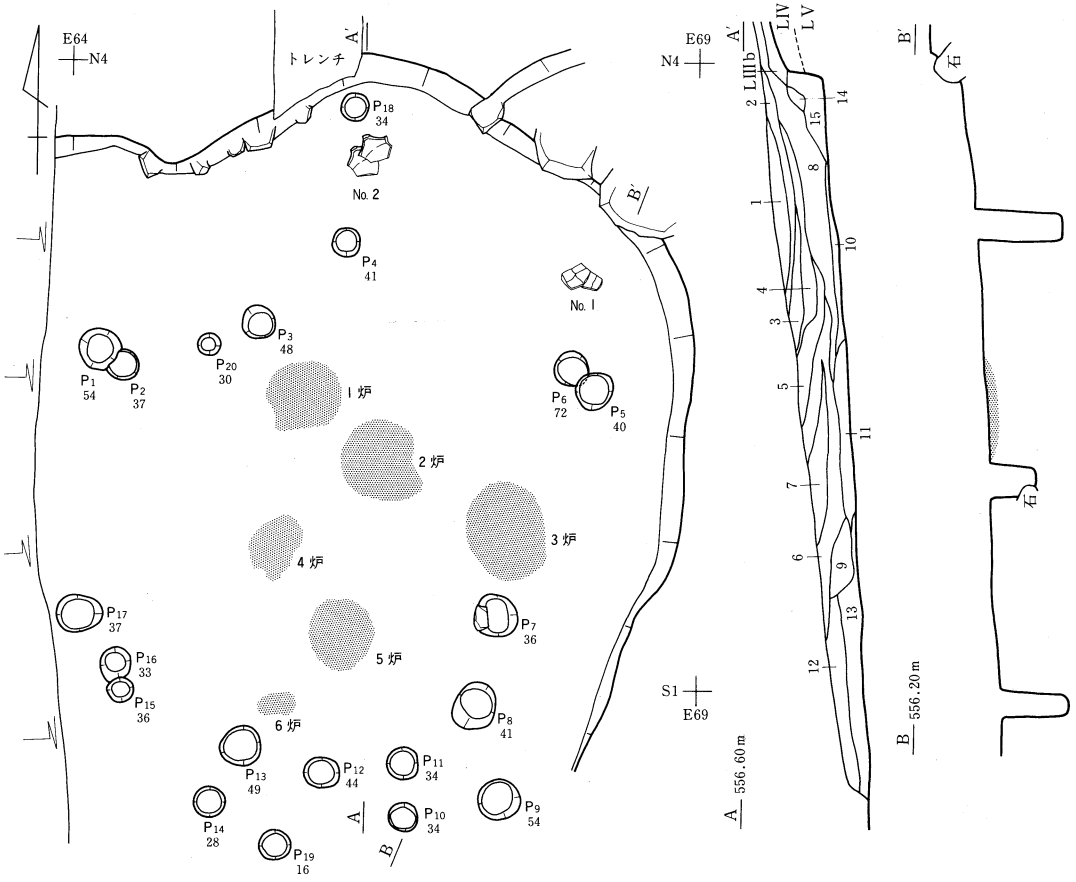
本住居跡の遺存状態は悪く，遺構の性格を含め断定し得ない部分が多い。あるいは竪穴住居跡でない可能性もあるが，本報告では，その規模と平面形から竪穴住居跡として取り扱った。所属時期は，出土土器から大木7b式期と考える。　　（松　本）

53号住居跡（ＳＩ53）

遺　　構（図106，写真48・49）

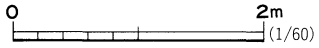
調査区東南の小丘南向き斜面上，ソ55・56Ｇに位置する竪穴住居跡である。ＳＩ54と重複し本住居跡が新しい。検出面はＬⅣ上面であるが，炉・小穴の一部は，ＬⅢb下部にブロック状に堆積している純層に近い沼沢パミスを掘り込んでいることを確認した。このことから，住居跡本来の掘り込み面は，ＬⅢb下部付近と推定している。遺存状態は悪く，住居跡の西端部は昭和63年度の調査で本遺構の存在に気付かずに掘り込んでしまったためすでに失われている。また住居跡の南壁については，傾斜面下位のため検出できなかった。

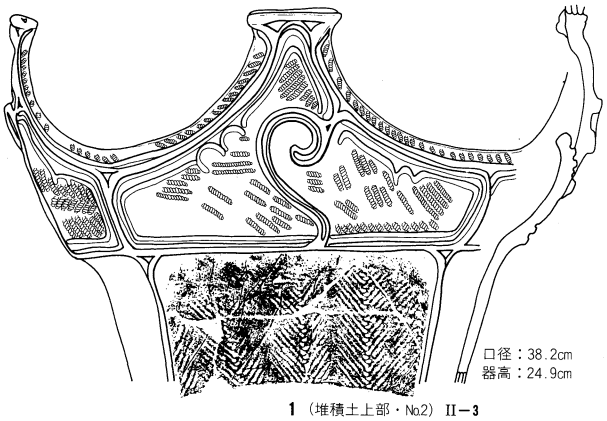
平面形はその遺存部の状態から，南北が長い楕円形を基調とするものと考えられる。住居跡北壁は，地山に含まれる大きな礫が露頭しているため歪んでいる。規模は現況で東西5.2ｍ，南北6.0ｍである。検出面からの深さは，最も遺存状態の良好な北壁で最大43㎝，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大52㎝である。住居跡南東部の床面は，周辺の床に比べて若干窪んでいる。住居内堆積土は13層に区分した。堆積状態はレンズ状に近い堆積を示すことから，自然堆積と判断している。ℓ9はℓ12・ℓ13を切っているように見えるが，ℓ9自体が褐色土のブロックであることから，この部分を住居跡の南壁と考えることはしなかった。



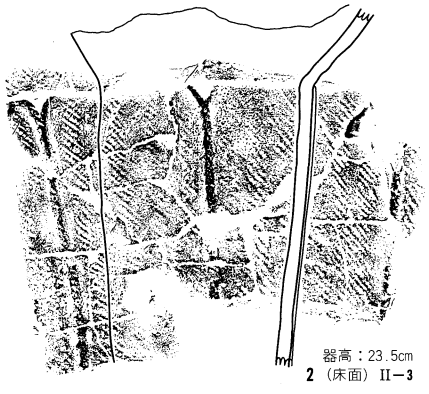
住居跡堆積土

ℓ1　暗褐色土	ℓ6　暗褐色土（ＮＰ少量含む）	ℓ11　褐　色　土（ＮＰ・黄色土ブロック多量含む）
ℓ2　褐　色　土（ＮＰ少量含む）	ℓ7　褐　色　土（ＮＰ少量含む）	ℓ12　暗褐色土（ＮＰ含む）
ℓ3　褐　色　土（ＮＰ少量含む）	ℓ8　褐　色　土（ＮＰ多量，炭化物含む）	ℓ13　黒褐色土（ＮＰ含む）
ℓ4　焼土・炭化物	ℓ9　褐　色　土（ブロック）	ℓ14　明褐色土
ℓ5　褐　色　土（ＮＰ・炭化物含む）	ℓ10　褐　色　土（黄色土ブロック多量含む）	ℓ15　茶褐色土（ＮＰ含む）





1（堆積土上部・No2）II−3



2（床面）II−3

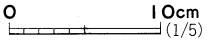
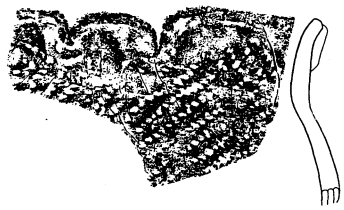
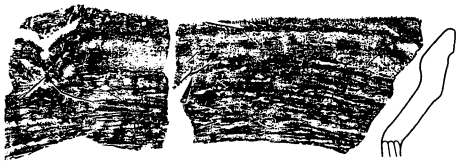


図106　53号住居跡と出土遺物（1）

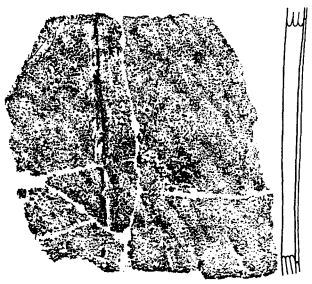
図107　53号住居跡出土遺物（2）



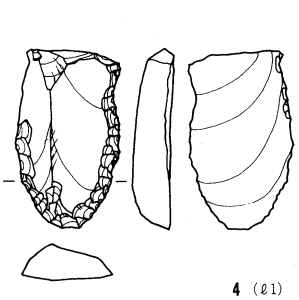
1（堆積土）II－7



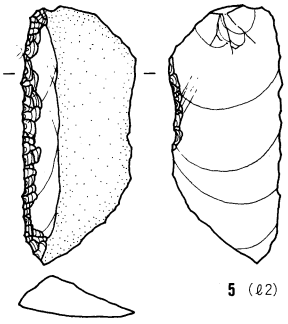
2（堆積土）II－7



3（床面・No1）II－3

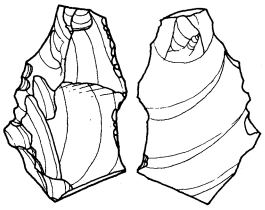


4（ℓ1）

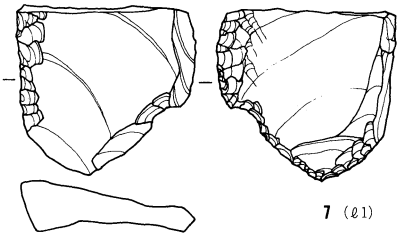


5（ℓ2）

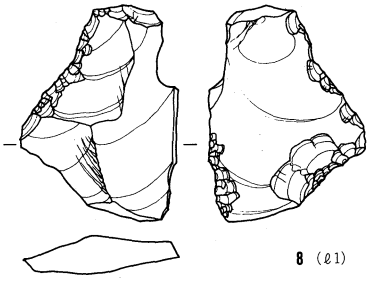
0　10cm（1/4）



6（ℓ1）

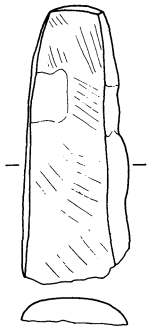


7（ℓ1）

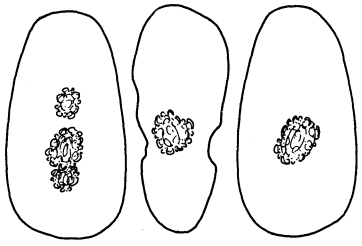


8（ℓ1）

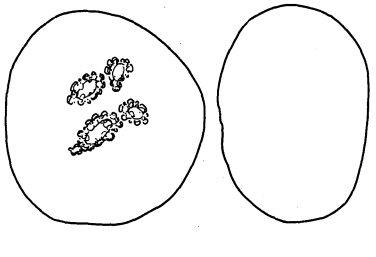
0　5cm（1/2）



9（ℓ1）



10（床面）



11（堆積土）

0　10cm（1/4）

図108　53号住居跡出土遺物（3）

住居施設は，20個の小穴と6基の炉が検出された。小穴の規模は直径20～40㎝，床面からの深さはP19が16㎝と最も浅く，P6は72㎝と最も深い。他の小穴の深さは，30～50㎝ほどである。これらの小穴は，楕円形状に配置されていることから，P18・P19を除いた18個の小穴について本住居跡の主柱穴と考えている。これらの柱穴は，住居跡南部では平行するように2列，住居跡北部ではP5とP6のようにほぼ同じ場所に作られたものが認められる。

6基の炉は，すべて床面が焼けただけの地床炉で，住居跡中央やや東南に寄った位置から密集して検出された。平面形はいずれも円形を基調とし，最も大きな3炉は直径80㎝，最も小さな6炉は直径30㎝である。いずれも炉の焼けは強く，特に3炉・5炉は焼土中央が還元状態を示し，鈍いオレンジ色を呈していた。

遺　　物（図106～108）

住居跡内からは，736点の縄文土器片と13点の石器が出土した。住居跡北壁際，床面から30㎝上からは図106－1，北東コーナー部の床面からは，図108－3に示した土器が，大型破片の状態で出土した。図106－1は，山形の波状口縁を呈する深鉢である。口縁部は，隆沈線によって4単位に区画されている。区画文内には波頂部下に隆線で渦巻文を描いている。区画に沿って施された沈線の一部は，C字状のアクセント文を描いている。胴部は，波底部下位からY字状の隆線を垂下させ縦に区画している。胴部の地文には，結束された縄による羽状縄文が施されている。同図2もこれに近い器形・胴部文様を持つものと考えられる。しかし，口縁部と胴部は明確には区画されていない。図107－1も低い山形の波状口縁を呈する，小型の深鉢である。横走する沈線で口縁部と胴部を区画している。波頂部下には縄圧痕文で渦巻文を描き，さらにこの間に弧状の縄圧痕文を重層させて施している。胴部には縄圧痕文を垂下させているが，一部は沈線文が施されている。

図107－2・10は三角文の施されたもので，10にはボタン状の貼付文が見られる。同図3～7・27は口縁部が僅かに肥厚するもので，口縁部直下には4・7が交互刺突文，3・27に沈線文，6には弧状の隆線に沿って有節沈線文が施されている。同図8・13・15・16・18・23も有節沈線文が施されている。13・18は押し引き手法によるものではなく，沈線内に斜方向からの刺突を加えている。8・13には刻みを施した棒状の貼付文も付けられている。16は押捺された隆線で楕円形状の単位文を描き出している。同図24は一部に有節沈線文が見られる。

同図11・12・14・19は沈線で文様を描き，12の沈線間には爪形文が施されている。同図17は眼鏡状の把手が付けられたもので，左右には盲孔が見られる。突起下の口縁部には，横位の縄圧痕文が施されている。同図20は胴部に縦位の沈線が，同図28は粘土の積み上げ痕を残すものである。同図22・25は胴部の粘土の積み上げ痕上に爪形文を施すもので，22では断面が三角形状を呈する隆線に沿って，有節沈線文が施されている。25には断面が三角形状を呈する蛇行隆線

が施されている。

図108－4は掻器，同図5・7は剥片の縁辺部に部分的に調整剥離を加え刃部を作り出した不定形石器である。5の刃部の角度は掻器に近い。同図9は磨製石斧の破片，同図10・11は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本住居跡は遺存部の形状，小穴の配置から東西6ｍ，南北7ｍ程の住居跡と推定している。住居施設には6基の地床炉と20個の柱穴が検出された。柱穴には重複するもの，近接して作られるものが多いことから，本住居跡は建替え・拡張が行われたものと判断している。本住居跡の所属時期については，出土遺物から大木7b式期と考えている。　（松　本）

54号住居跡（ＳＩ54）

遺　　構（図109，写真50・51）

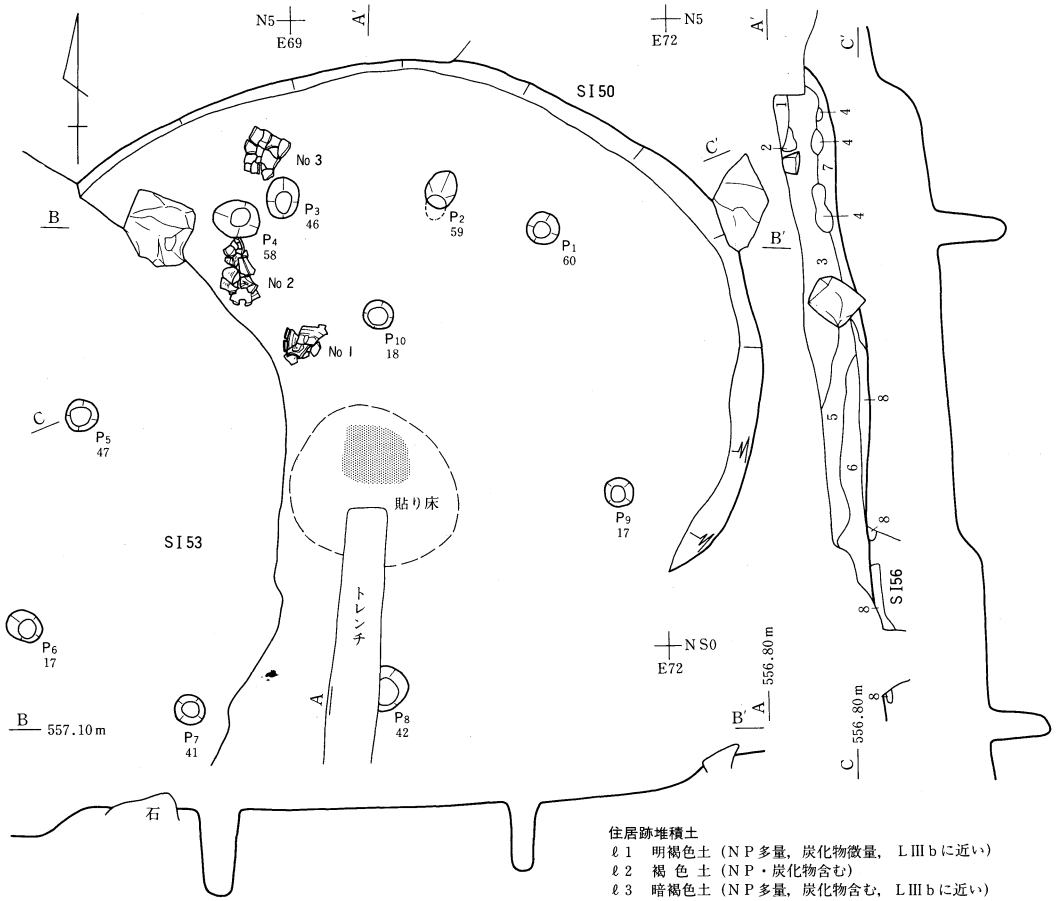
調査区東部の住居跡密集域，ソ55・56ＧのＬＶ上面と，ＳＩ50床面及びＳＩ56堆積土上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ47・50・52・53・56と重複し，ＳＩ56より新しく，ＳＩ47・50・52・53より古い。本住居跡は，ＳＩ53によって住居跡西側の¼程を壊され，斜面下位の南側についても，壁の立ち上がりは確認できなかった。

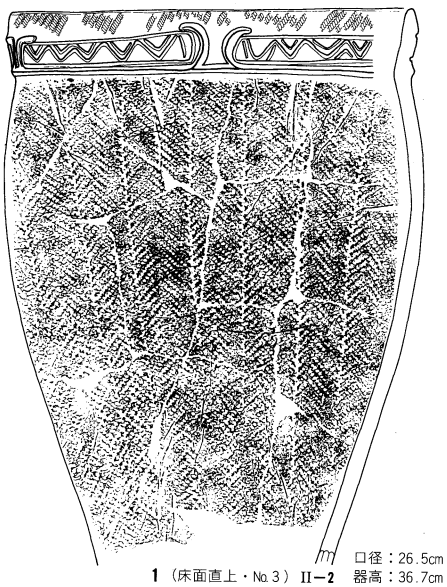
平面形は遺存している周壁及び柱穴と見られる小穴の配列から，東西が長い楕円形状を呈すものと推測している。規模は現況で長径6.6ｍ，短径5.0ｍである。周壁は急傾斜で立ち上がり，壁高は最大37㎝である。床面は平坦ではあるが，北から南に向かって傾斜し，最大比高差は58㎝である。住居中央部の床面は，一部貼られていた。その範囲は部分的に欠失しているが，長さ3ｍ，幅1.5ｍ程である。遺構内堆積土は8層に区分した。主体となるのはＬⅢｂ層に土質が近似する暗褐色土で，全体的にパミスが多く含まれている。堆積状況は，斜面下位から順層をなして堆積していることから，自然堆積と判断している。

住居内からは，ＳＩ53の床面より検出したＰ5～Ｐ7を含め，10個の小穴と1基の炉が検出された。Ｐ1～Ｐ9は直径22～37㎝，深さはＰ6・Ｐ9が浅いが，他の小穴は40～68㎝である。これらは，住居跡の周壁と平行するように楕円形状に配置されていることから，主柱穴と判断している。小穴内の堆積土は，Ｐ1～Ｐ3・Ｐ5・Ｐ7が褐色土，他は暗褐色土である。炉は地床炉で，遺構中央部の貼床上面から検出された。規模は46×55㎝，焼土の厚さは2㎝である。

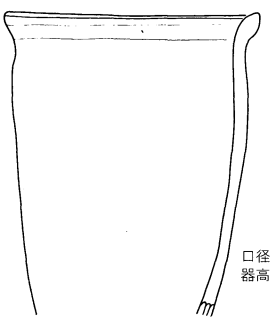
遺　　物（図109～111）

本住居跡からは，587点の縄文土器片と13点の石器が出土している。土器片は住居跡堆積土中から散在して出土したものがほとんどであるが，図109－1，図110－1・2は住居跡北西コーナー部付近の床面直上から，潰れた状態で出土している。





1（床面直上・No.3）II−2　口径：26.5cm　器高：36.7cm



2（堆積土）II−7　口径：17.0cm　器高：20.0cm

0　10cm
(1/5)

図109　54号住居跡と出土遺物（1）

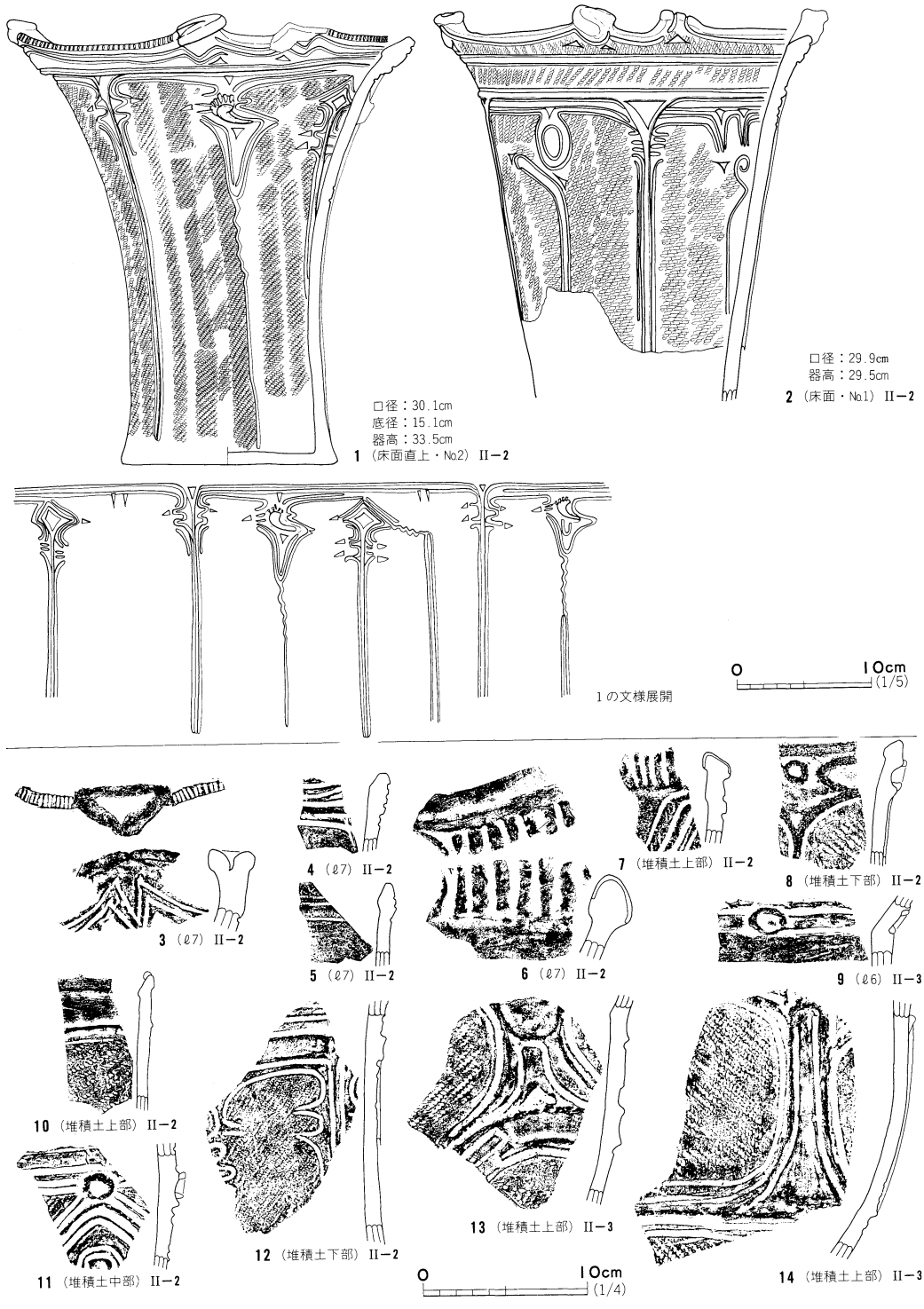


図110　54号住居跡出土遺物（2）

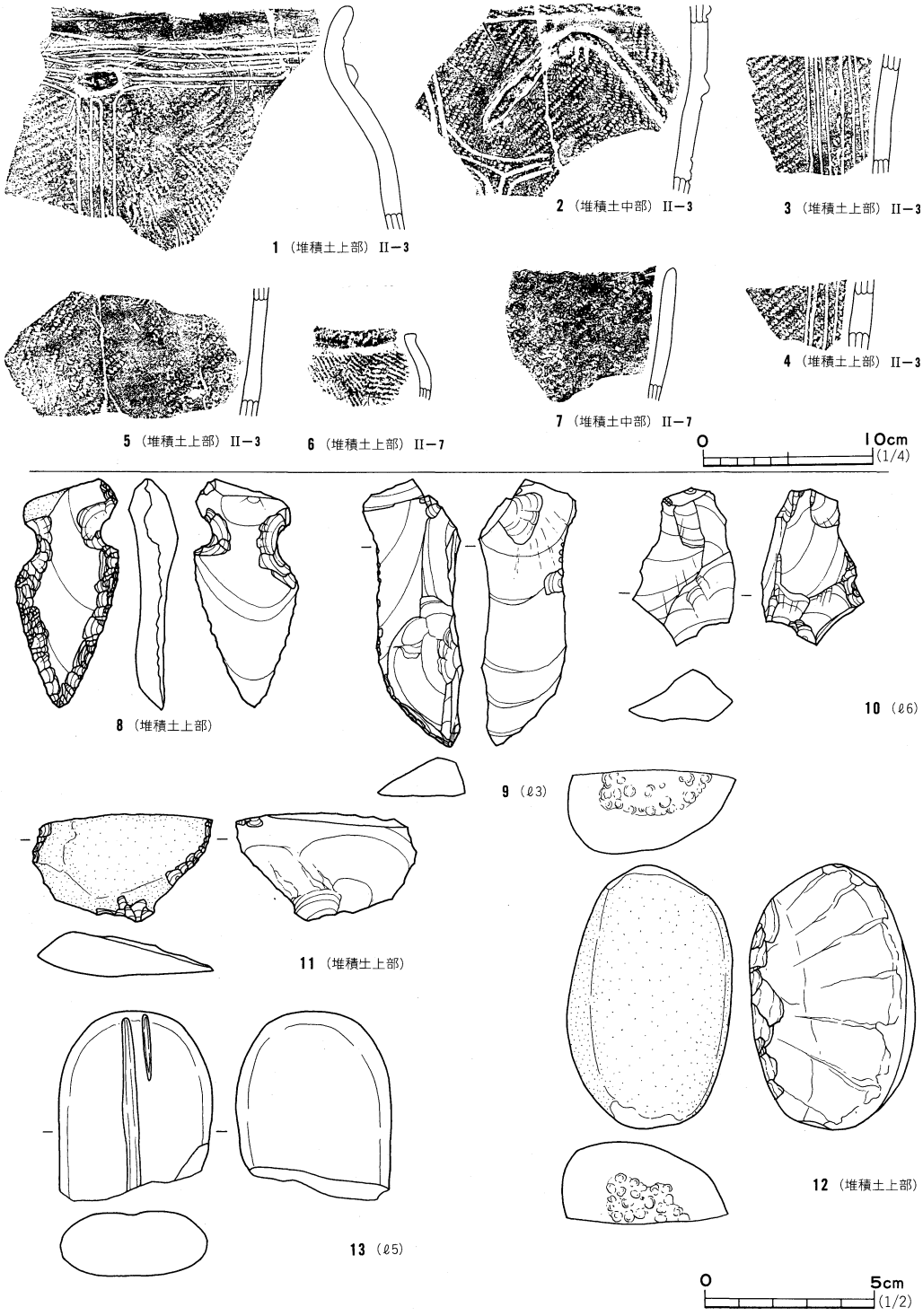


図111　54号住居跡出土遺物（3）

図109－1は胴部上半に最大径をもち，口縁部が僅かに外傾する深鉢である。口縁部文様帯と胴部文様帯は，断面が三角形状を呈する隆線によって区画されている。口縁部には，隆線をX字状に貼り付けて区画した楕円形状の区画文を4単位施している。この区画文内には，有節沈線で連続山形文を描いている。胴部には結束された原体により羽状縄文が施されている。同図2は無文の粗製土器である。

図110－1・2は，口縁部が複合口縁状を呈する深鉢である。1は胴下半部から口縁部まで，緩く外反して開く器形を呈している。1・2とも口縁部には4単位の突起が付けられている。この内，対面する2つの突起は，左右非対象の突起2つで1単位を構成している。文様はいずれも複合口縁状に肥厚する部分に認められた。口縁部には沈線を口唇部外縁と平行するように施し，突起直下の隙間には三角文を加えている。胴部は垂下するY字状の隆線で縦に4区画している。この区画内には隆線に沿うように沈線文が施されているが，この沈線は一部でC字状を呈したり，円形文を描いたり，短沈線・刺突文化したりとバラエティに富んでいる。さらに，これらの沈線が突出する部分には，彫刻的な三角文が付されるものが多い。1の口唇部にはスリットが認められる。同図3・5もこれに近い。

同図6・7は波状口縁を呈する深鉢で，波頂部上面にスリットを加えている。同図8・9は，胴部から口縁部が僅かに外傾して開く深鉢であろう。8にはボタン状の貼付文が認められる。この貼付文は，同図9・11にも付けられている。同図11～14は，深鉢の胴部破片である。隆沈線によって区画文を描いている。13・14の隆線間は磨かれ無文帯となっている。図111－1は口縁部が緩く外反して開き，丸みの強い胴部を有する深鉢であろう。口唇部直下を無文とし，頸部には横走する数条の沈線を施し，さらに瘤状の突起を付けている。突起直下からは，平行沈線が胴部を縦に区画するように垂下している。同図2は，隆線と沈線で文様が描かれている。この隆線上には縄文が施されている。同図3・4は沈線，同図5はアヤクリ文が施されている。同図6・7は縄文が施された粗製土器である。

同図8は石匙，同図9～11は不定形石器である。同図12は敲石で側縁部に使用痕がある。同図13は，偏平な河原石に2条の凹線状の窪みが観察される。

ま と め

本住居跡は，数軒の住居跡が密集する南向き斜面に構築されている。重複による削平を受けて遺存状態は若干悪いが，遺存部の形状と柱穴の配列から，平面形は楕円形で，5.5×7 m程の規模を持つものと判断している。本住居跡の所属時期は，床面直上から出土した土器と重複状況から，大木7a式期と考えている。　（丹　治）

55号住居跡（ＳＩ55）

遺　　構（図112，写真52）

調査区東南の小丘南向き斜面下位，タ・チ56・57Ｇに位置する竪穴住居跡である。ＳＩ47・56，ＳＫ271・293・294・295・296・297・298・299と重複し，ＳＩ47，ＳＫ271より古く，ＳＩ56，ＳＫ293・294・295より新しい。そのほかの遺構との新旧は不明である。検出面は，ＬⅣに相当する黒色粘質土上面である。調査当初ＳＩ56との重複に気付かず，両遺構を同時に床面まで掘り下げてしまった。このため本住居跡の北壁については立ち上がりを確認することはできなかった。重複関係については土層観察の結果，本住居跡の壁溝とほぼ対応する位置に，立ち上がりが認められた事から，ＳＩ56よりも新しいものと判断した。

遺存状態は悪く，住居跡の南壁は傾斜面下位のため検出できなかった。平面形は遺存部の状態から，東西が僅かに長い円形を基調とするものと考えられる。規模は現況で東西7.7ｍ，南北5.0ｍである。検出面からの深さは最大12㎝であるが，ＳＩ56堆積土上面からの深さは30㎝を測る。周壁の立ち上がりは急である。床面は地山の傾斜と同様北から南に緩やかに傾斜し，その比高差は最大60㎝である。ＳＩ56床面との間には明確な段差は認められなかった。住居内堆積土は7層に区分した。堆積状態は，傾斜面上位から流れ込んだ状況が観察できることから，自然堆積と判断した。ℓ3の下位には小豆大の円礫が，レンズ状に堆積していた。

住居施設は，52個の小穴と4基の炉が検出された。これらの小穴には，ＳＩ56に伴うものも含まれている。Ｐ2～Ｐ7は，床面からの深さが40㎝以上のものである。これらの小穴には，特に整った配置は認められないが，これらの小穴を結んだ矩形の中に後述する炉が位置していることから，本住居跡の主柱穴と判断した。Ｐ8～Ｐ12・Ｐ39は，深さ30㎝程である。これらもその作られた位置から，本跡に伴う可能性が高い。さらに，Ｐ17・Ｐ22・Ｐ24のいずれかが本跡に伴うとすれば，全体の柱穴配置は整った楕円形状を呈する。住居跡北半部については主柱穴を特定できなかった。これについては，Ｐ31・Ｐ36・Ｐ47・Ｐ49の内のいずれかが，主柱穴として機能していたものと考えている。Ｐ1は床面からの深さが50㎝と深い小穴で，主柱穴を結んだ矩形の中央に位置していることから，本跡に伴うものと判断した。

本住居跡に伴うと考えられる炉は，1炉～3炉の3基である。すべて床面が焼けただけの地床炉で，住居跡南に寄った位置から検出された。これらの炉は，ほぼ直線上に並ぶように作られている。規模は1炉が現況で80×70㎝，2炉は60×30㎝，3炉は現況で50×35㎝である。炉の焼けは強く，1炉では上面から5㎝下まで焼土化が及んでいた。

遺　　物（図113～115）

住居内からは，900点の縄文土器片と18点の石器が出土した。これらの遺物には，ＳＩ56の遺

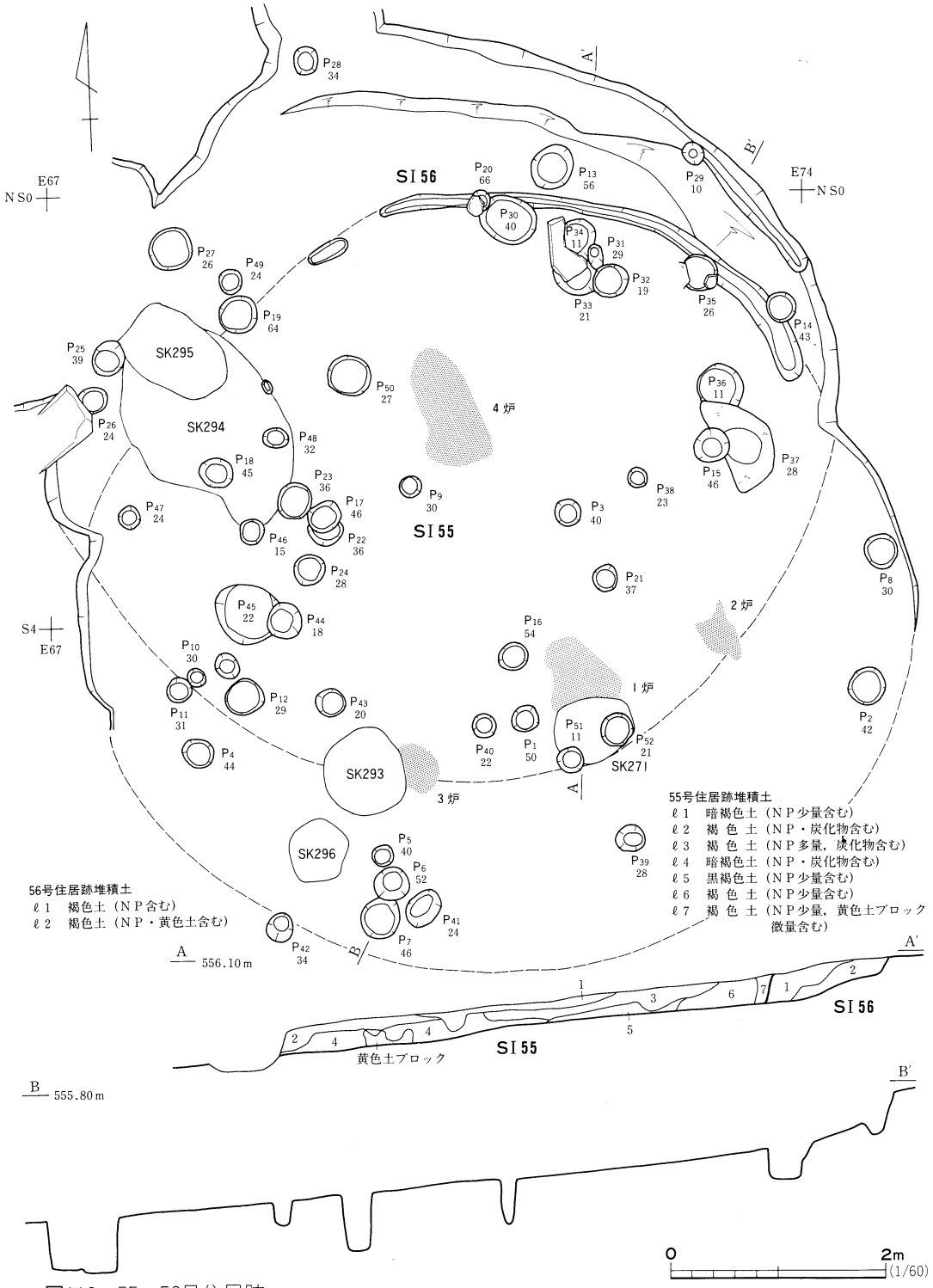


図112　55・56号住居跡

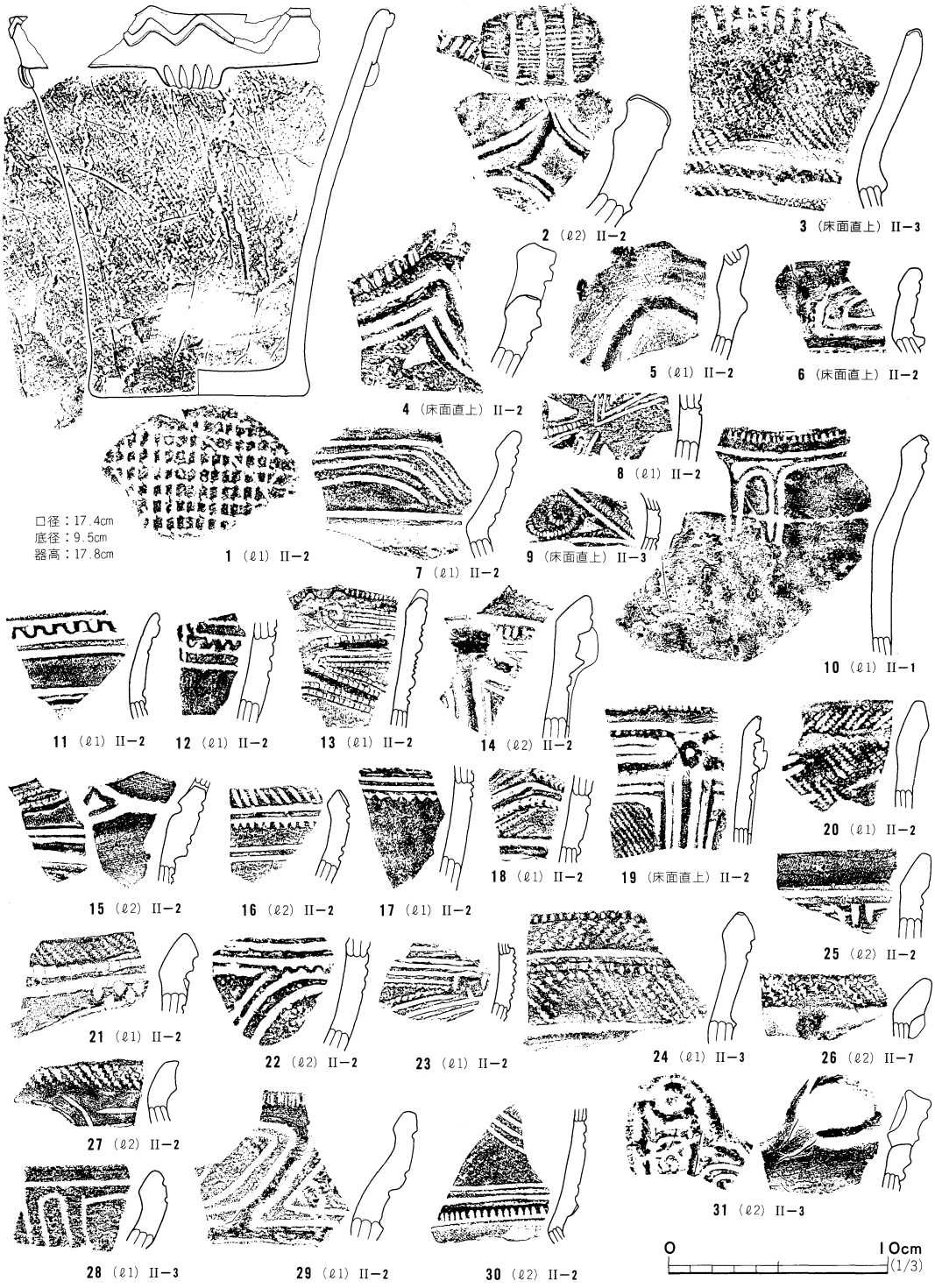


図113　55号住居跡出土遺物（1）

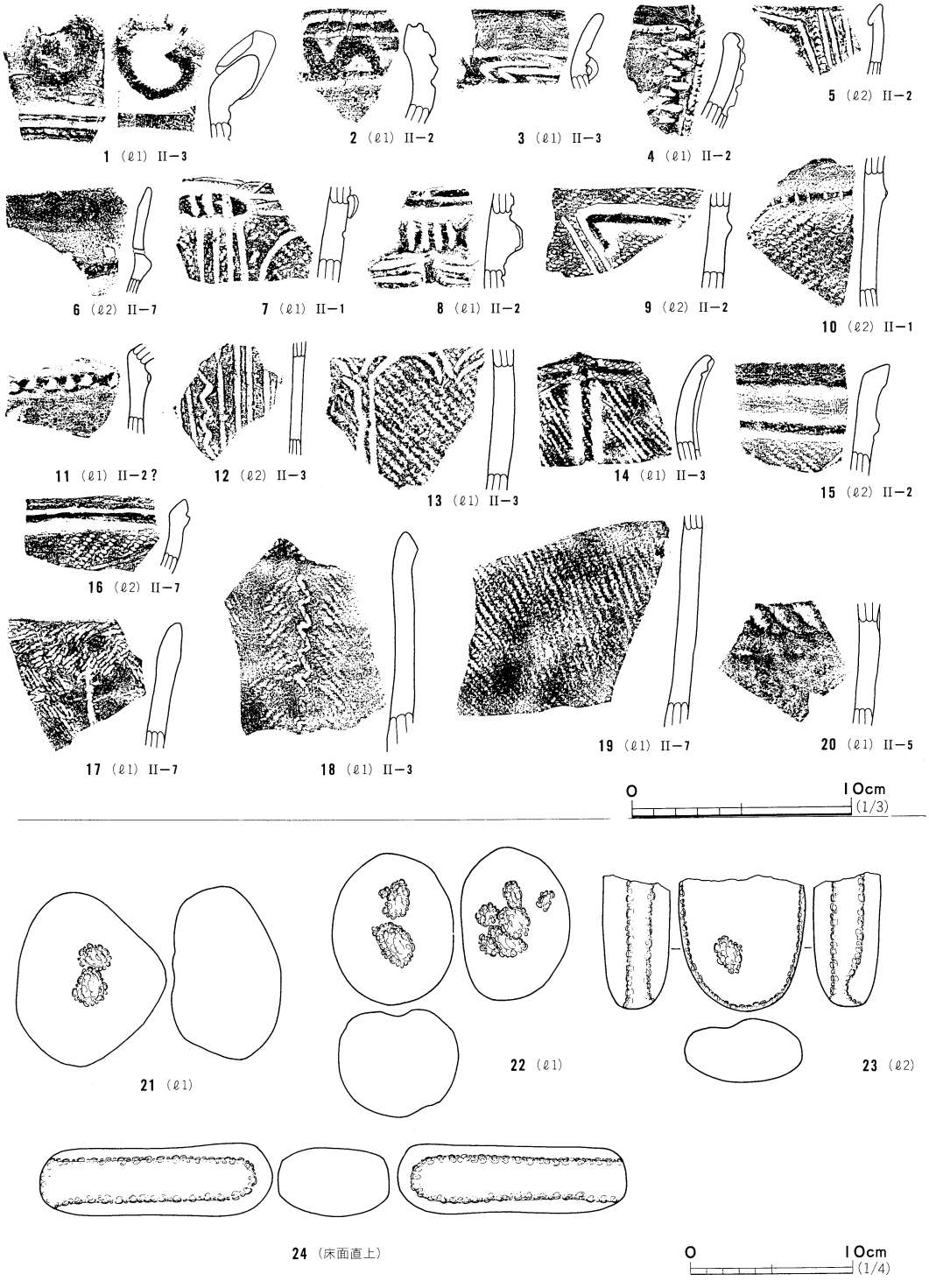


図114　55号住居跡出土遺物（2）

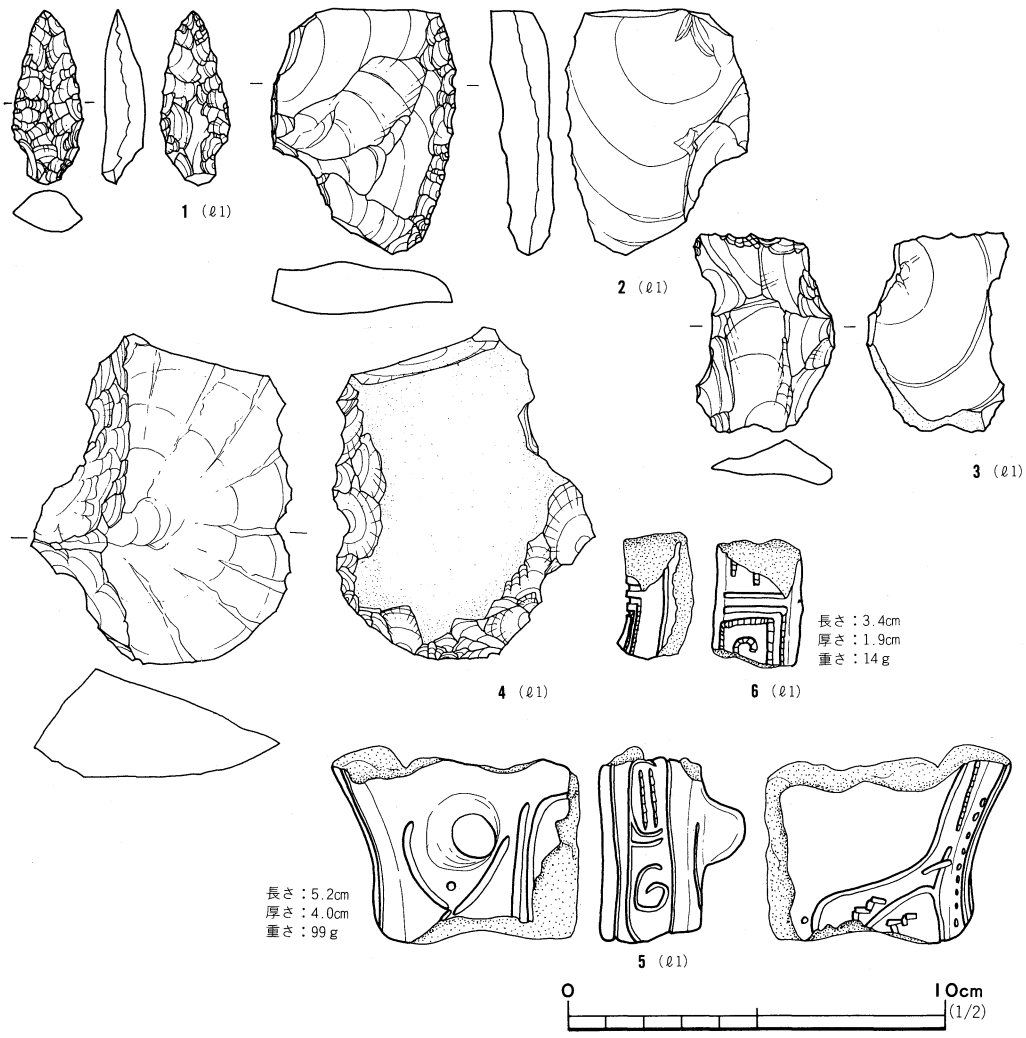


図115　55号住居跡出土遺物（3）

物も含まれていると考えているが，調査時点で分離できなかったため，本項で報告する。図113－1は，口縁部が複合口縁状を呈する小型の深鉢である。口唇部直下には，隆帯による連続山形文を施し，この下位には縦のスリットを加えた横長の瘤が貼り付けられている。同様な瘤は，同図14・26，図114－7・8にも見られる。

図113－2～5は，波状口縁の深鉢で，2・4の口唇部にはスリットが，5の側縁部には小瘤が，3の波頂部には縄圧痕文が施されている。口縁部文様は，4が三角文と有節沈線文，2は隆線と有節沈線文，5は隆線で描かれている。同図8～10・15は三角文と有節沈線文・沈線文が施され，15の内面には，三角文が施されている。同図11・12・21～23，図114－4は交互刺突文が施され，

21～23では文様の頂点部に部分的に施している。図113－6・7・19・27・28・30，図114－3・7・8・12・13は，沈線文を施すものである。図113－6・19は，隆線による楕円形の区画文が見られる。19にはボタン状の貼付文，図114－3には，小さな橋状の把手が付けられている。

図113－13・18・25・29は，沈線と有節沈線文で文様を描き，同図16・17・24，図114－5は，沈線と列点文が見られる。図113－31，図114－1は，口縁部の突起である。内面はいずれも渦巻状を呈している。図114－2は隆帯による波状文が見られ，口唇部と波状文の上下には有節沈線文が施されている。同図10には稜線上に刺突文が施され，同図14の口唇部直下には縄圧痕文が施されている。同図20は胴部に刺突文を施したものである。図115－5・6は土偶の体部破片である。沈線・有節沈線によって文様を描いている。

図114－21～24は，磨石である。23・24の側縁部には，敲打痕状の使用痕が認められる。図115－1は石鏃である。基部は若干有茎状を呈している。同図2・3は不定形石器である。2の刃部の角度は掻器に近い。同図4は打製石斧の欠損品である。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪く，平面形と規模・住居施設については不明な点が多い。一応，遺存部の形状と柱穴の配置状況から，東西7.8m，南北7.2m程の円形状の住居跡と考えている。本住居跡の所属時期については，出土遺物の大半を占めるものが大木7a式期のものであることから，これに近接する時期と考えている。（松　本）

56号住居跡（ＳＩ56）

遺　　構（図112，写真52）

調査区東南の小丘南向き斜面下位，タ・チ56・57Ｇに位置する竪穴住居跡である。ＳＩ47・53・54・55，ＳＫ294・295・299と重複し，他の住居跡より古い。土坑との重複関係については，直接本跡と重複していないため不明である。検出面は，ＬⅣに相当する黒色粘質土上面とＳＩ53・54の床面である。遺存状態は悪く，そのほとんどをＳＩ55によって壊され，住居跡北側が僅かに遺存しているにすぎない。しかし，ＳＩ55の掘り込みは，本跡床面のレベルで止まっていることから，住居施設についてはほぼそのすべてを検出することができた。

平面形はその遺存部の状態から，円形を基調とするものと考えられる。規模は現況で東西6.4m，南北3.6mである。壁高は最大26cmで，周壁の立ち上がりは急である。床面は平坦であるが，住居跡北壁内側には，比高差10cmほどの緩いスロープが見られる。住居内堆積土は2層に区分した。堆積状態は傾斜面上位から流れ込みと考えられることから，自然堆積と判断した。

住居施設は，52個の小穴と4基の炉が検出された。これらの小穴には，ＳＩ55に伴うものも含まれている。P13～P20は，床面からの深さが40cm以上のものである。これらの小穴は，後述

する炉を囲むように配置されていることから，本住居跡の主柱穴と判断した。P24・P29・P40・P43～P45・P47は，深さ20～40㎝ほどの小穴である。これらについては，主柱穴の外側を巡るように配置されていることから，本跡に伴う可能性が高いものと判断している。本跡に伴う炉は，4炉と考えている。床面が焼けただけの地床炉で，想定される住居跡範囲のほぼ中央に位置している。平面形は東西が長い楕円形状を呈し，規模は120×80㎝を測る。炉の焼けは強く，炉上面から5㎝下まで焼土化が及んでいた。

遺　　物

本住居跡出土遺物については，調査時点でＳＩ55出土遺物と分離し得なかった。このため本項では出土遺物についての報告は省く。

ま と め

本跡については遺存状態が悪く，規模・住居跡施設について不明な点が多い。一応，遺存部の形状，主柱穴・壁柱穴と考えられる小穴の配置状況から，直径7ｍ程の円形の住居跡と考えておく。所属時期については重複関係から，大木7a式期と判断している。　　（松　本）

58号住居跡（ＳＩ58）

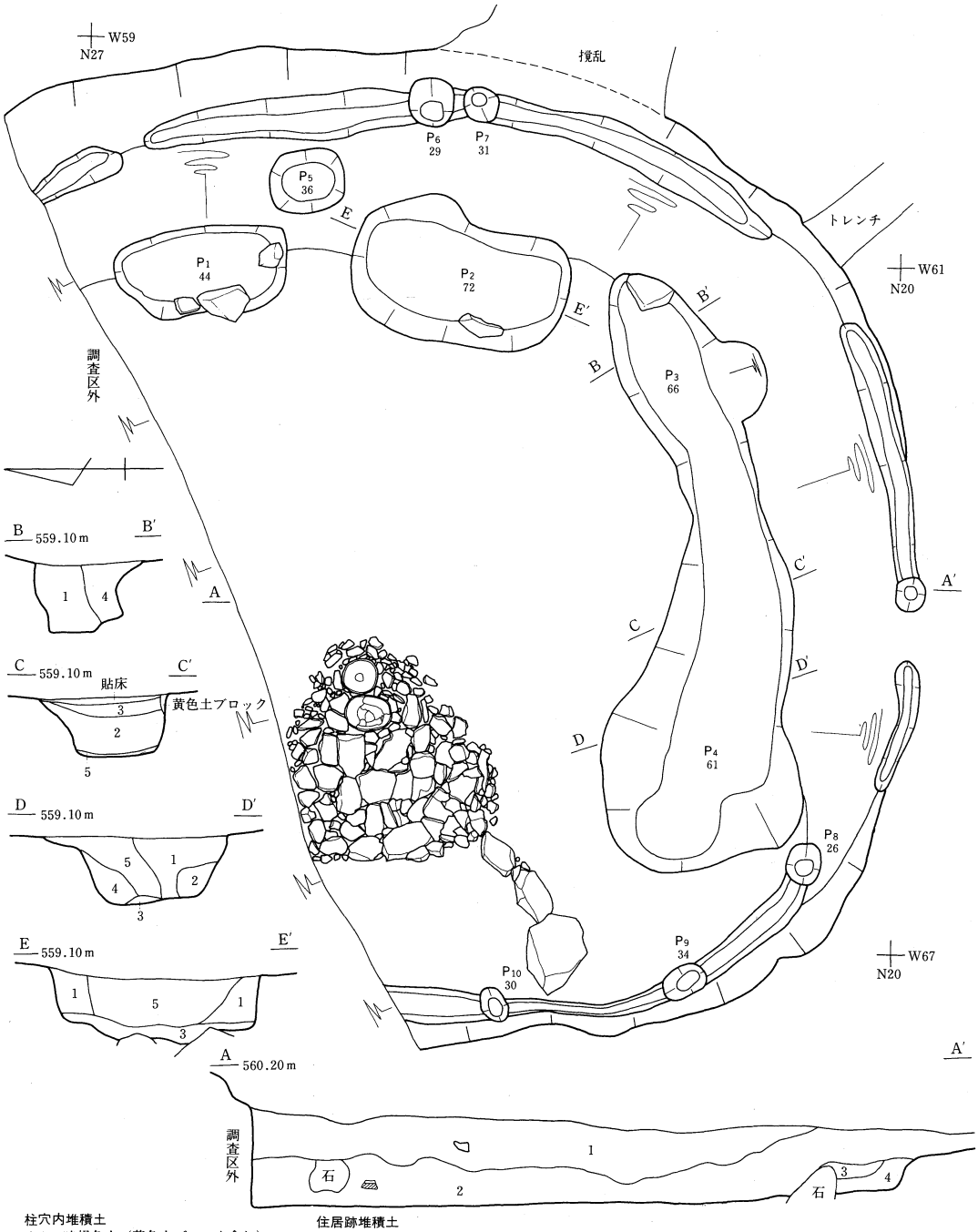
遺　　構（図116・117，写真53・54）

調査区中央部北端，ケ・コ22～24ＧのＬⅢｂ上面で検出された竪穴住居跡である。住居跡北半部は調査区域外に延びるため，調査を実施したのは住居跡の南側ほぼ½程度である。ＳＩ72，ＳＫ315と重複し，本住居跡が新しい。

遺構の遺存状態は良好で，周壁はほぼ全周している。正確な規模・平面形は不明であるが，現況から，一辺8.8ｍ程の隅丸方形状を呈するものと推測される。東壁はほぼ南北を示す。周壁の立上がりは急で，壁高は東壁で最大70㎝を測る。床面は平坦で固く締まっているが，壁際から1ｍ程の間は緩やかなスロープ状をなしている。堆積土はＬⅡに近似する黒色土と暗褐色土の2層に区分され，レンズ状の堆積を示すことから，自然堆積と判断される。

住居跡内からは，小穴・壁溝・炉が検出された。小穴は11個検出され，この中で，周壁と平行するように配置されているP1～P4が，本住居跡の主柱穴と考えられる。これらの柱穴は，土坑に匹敵するような大きな掘形をもっている。とくにP3・P4としたものは，調査の結果溝状に掘り込まれた一つの掘形であることが明らかとなった。この掘形内には掘形相互の間隔から考えて，3本の柱が据えられていた可能性が高い。これらの柱穴の深さは，床面から44～72㎝である。P6～P10は，その作られた位置から壁柱穴と考えられる。壁溝は周壁際を何箇所かで途切れるものの，ほぼ全周している。壁溝の幅は40㎝，床面からの深さは15～29㎝である。

炉は土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉で，前庭部は西壁中央に取り付いている。平



柱穴内堆積土
ℓ1　暗褐色土（黄色土ブロック含む）
ℓ2　黄褐色土（ブロック状）
ℓ3　黒褐色土（黄色土ブロック含む）
ℓ4　褐 色 土（黄色土ブロック含む）
ℓ5　暗褐色土（ＮＰ微量含む）

住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（ＮＰ微量含む，ＬⅢに近い）
ℓ2　暗褐色土（ＮＰ・炭化物含む）
ℓ3　黄 色 土
ℓ4　暗褐色土（ＮＰ微量含む）

0　2m
(1/60)

図116　58号住居跡

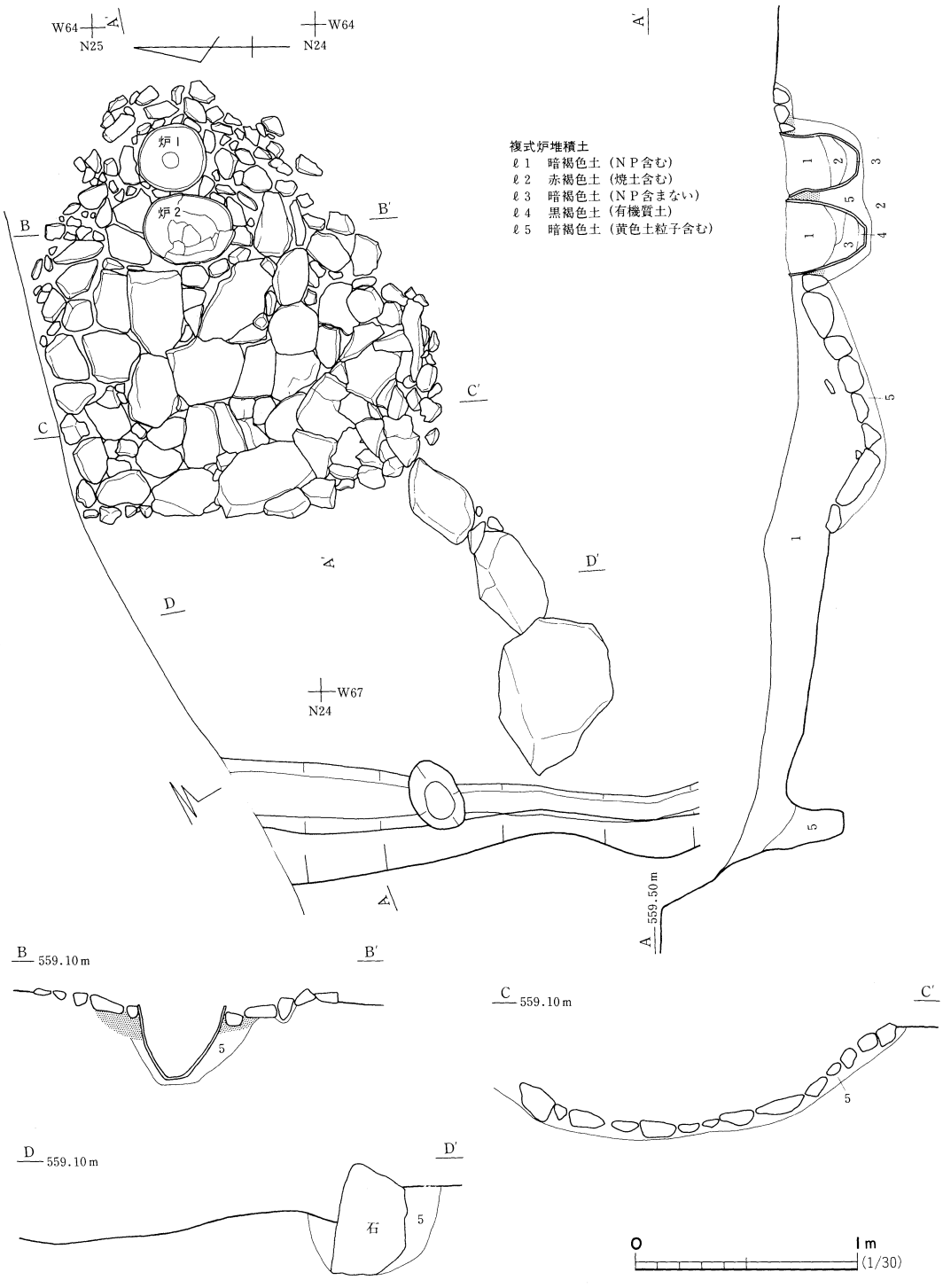
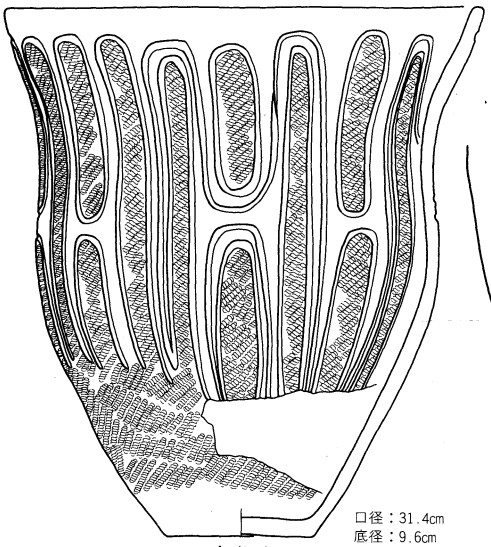
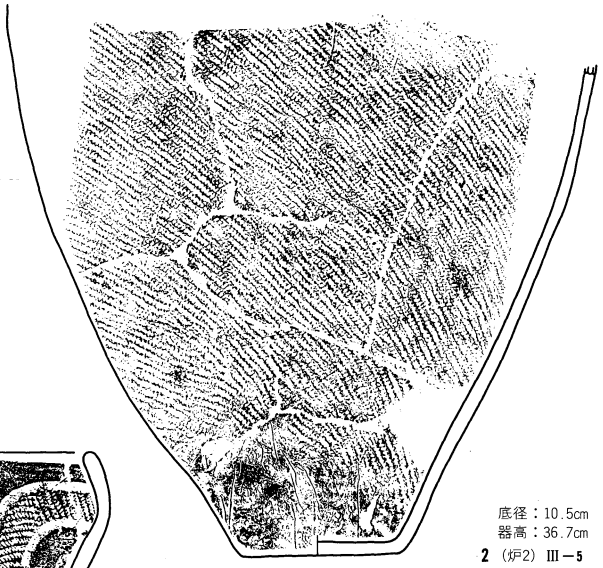


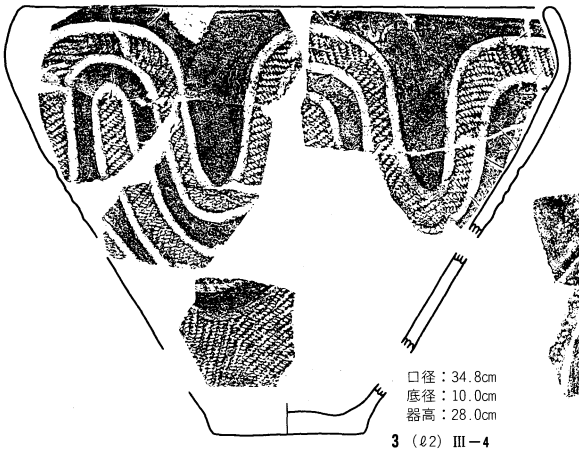
図117　58号住居跡複式炉



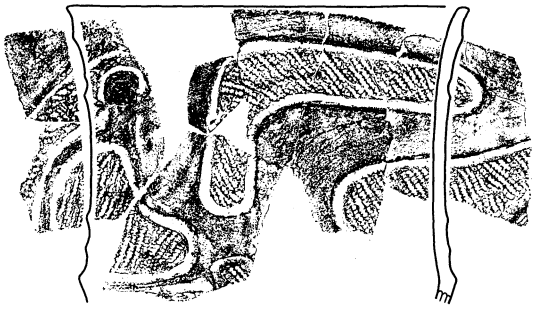
口径：31.4cm
底径：9.6cm
器高：34.8cm
1（炉1）Ⅲ－3



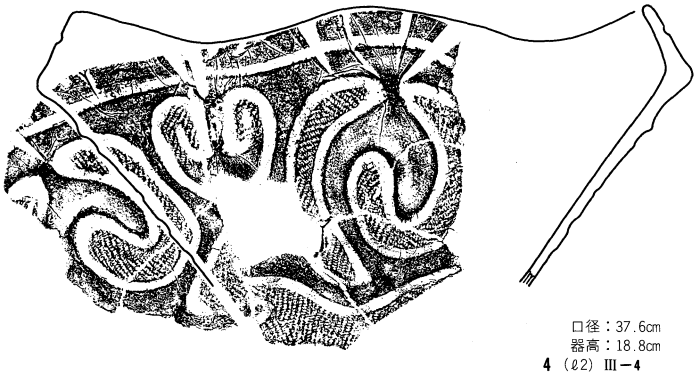
底径：10.5cm
器高：36.7cm
2（炉2）Ⅲ－5



口径：34.8cm
底径：10.0cm
器高：28.0cm
3（ℓ2）Ⅲ－4



口径：26.3cm
器高：19.4cm
5（ℓ1）Ⅲ－4



口径：37.6cm
器高：18.8cm
4（ℓ2）Ⅲ－4

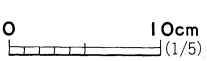
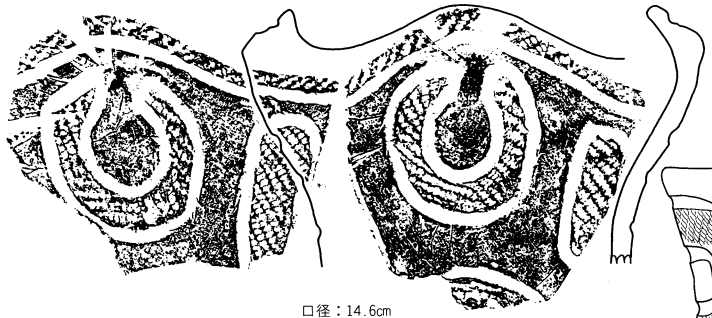
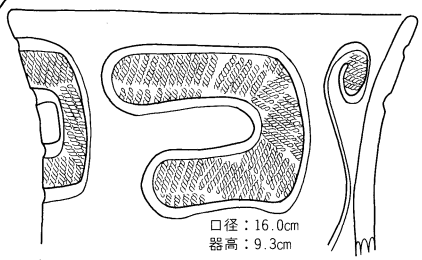


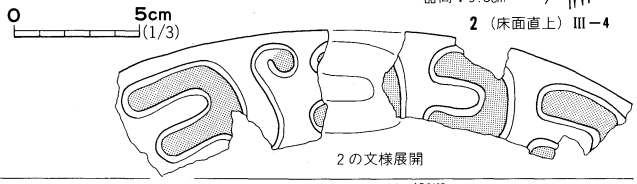
図118　58号住居跡出土遺物（1）

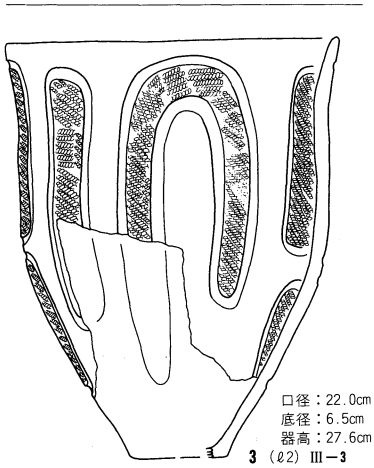


口径：14.6cm
器高：10.3cm
1（ℓ1）Ⅲ－3･4

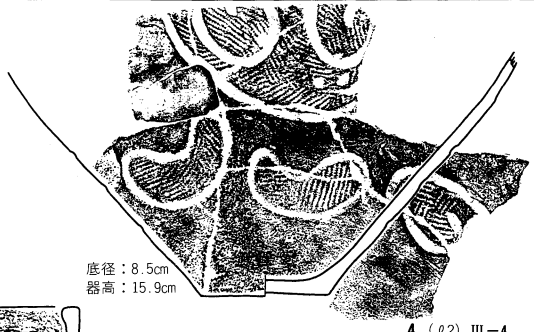


口径：16.0cm
器高：9.3cm
2（床面直上）Ⅲ－4



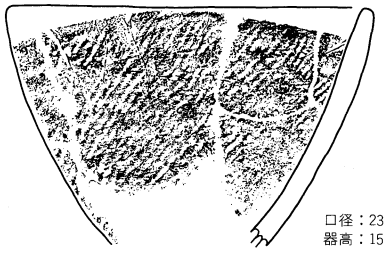


口径：22.0cm
底径：6.5cm
器高：27.6cm
3（ℓ2）Ⅲ－3

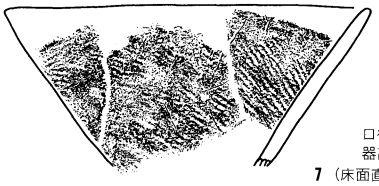


底径：8.5cm
器高：15.9cm
4（ℓ2）Ⅲ－4

口径：39.4cm
底径：11.2cm
器高：37.0cm
5（ℓ1）Ⅲ－4



口径：23.8cm
器高：15.7cm
6（床面直上）Ⅲ－5



口径：24.2cm
器高：10.4cm
7（床面直上）Ⅲ－5

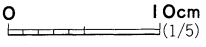


図119　58号住居跡出土遺物（2）

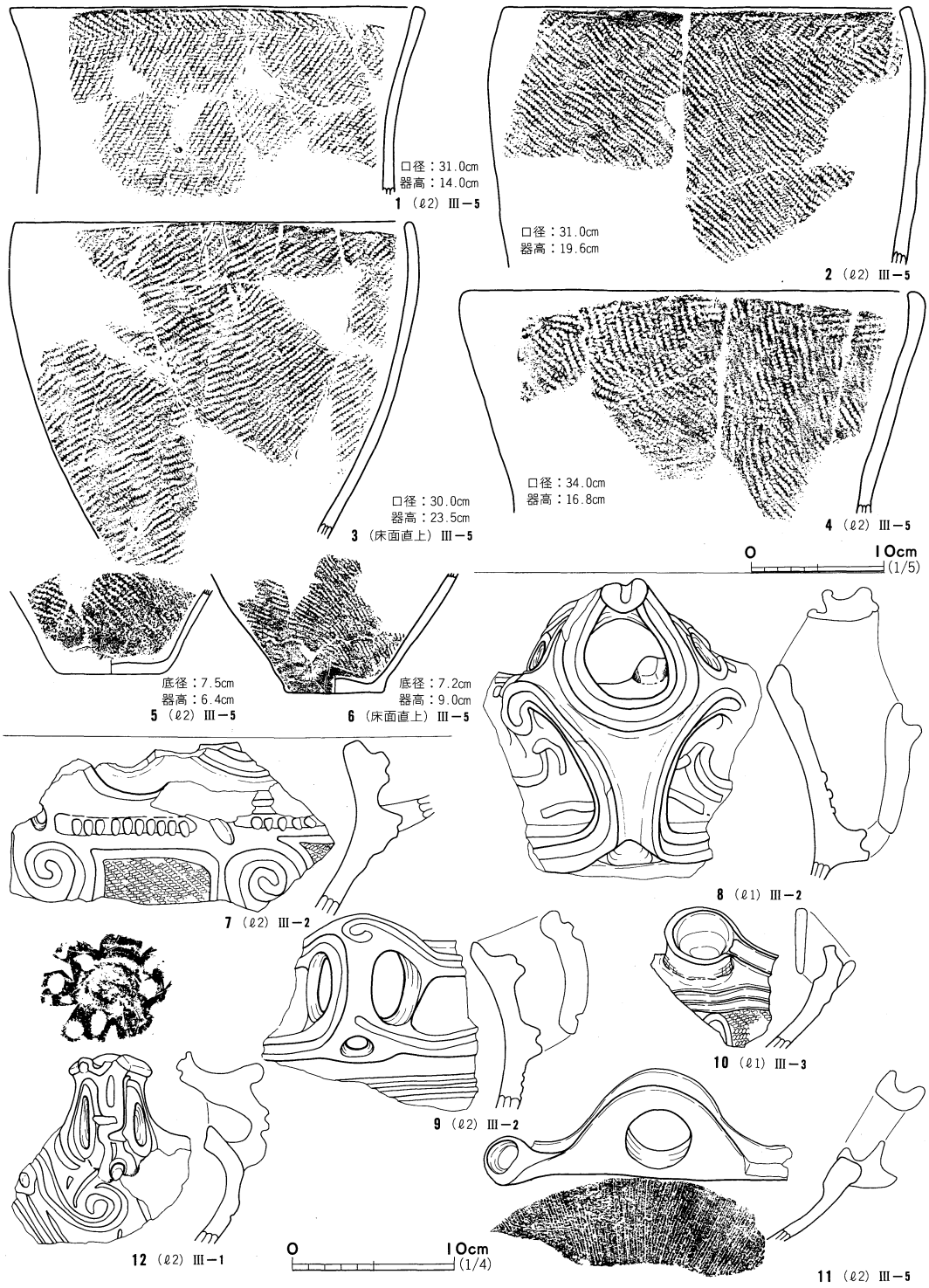


図120　58号住居跡出土遺物（3）

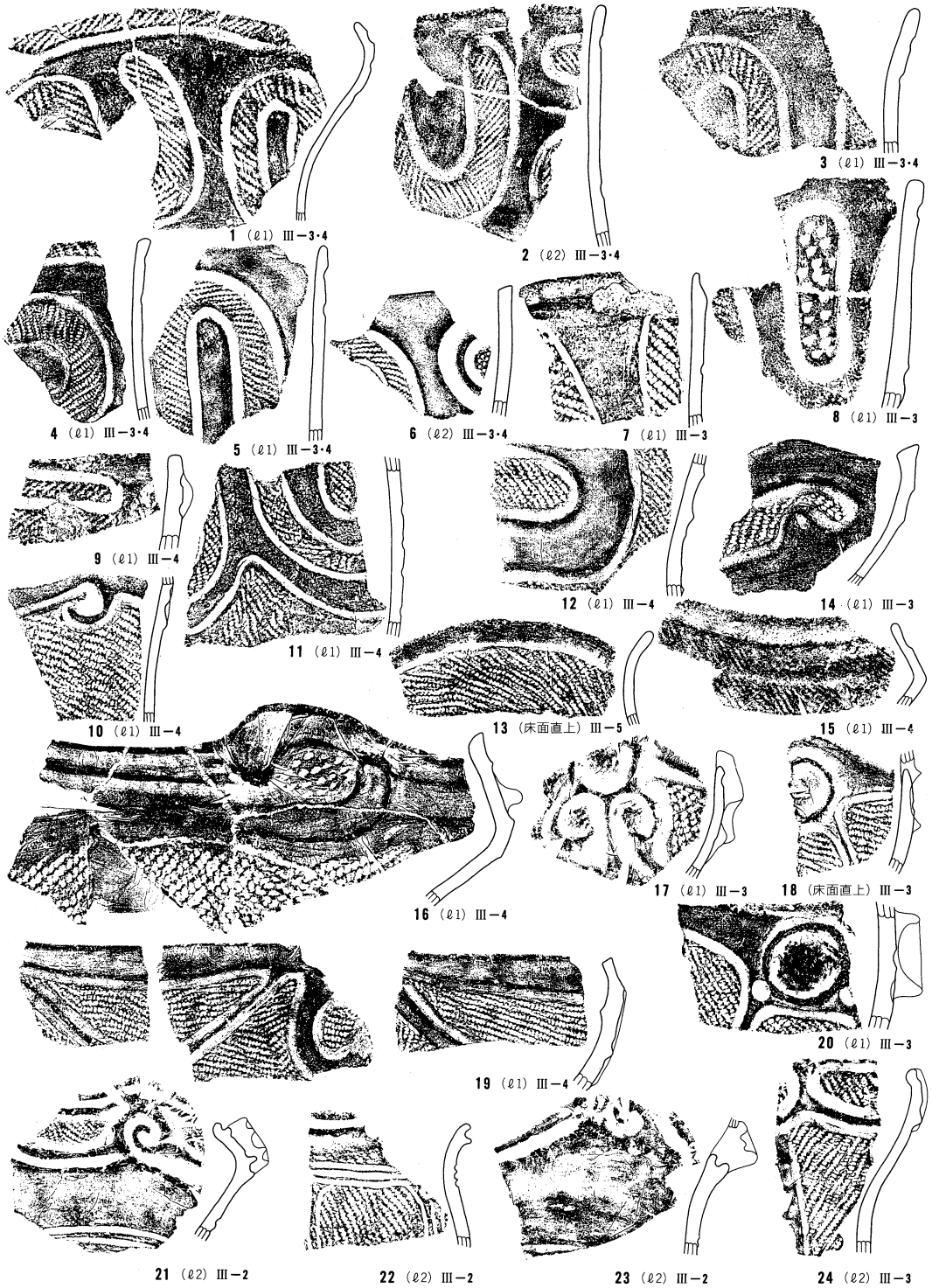


図121　58号住居跡出土遺物（4）

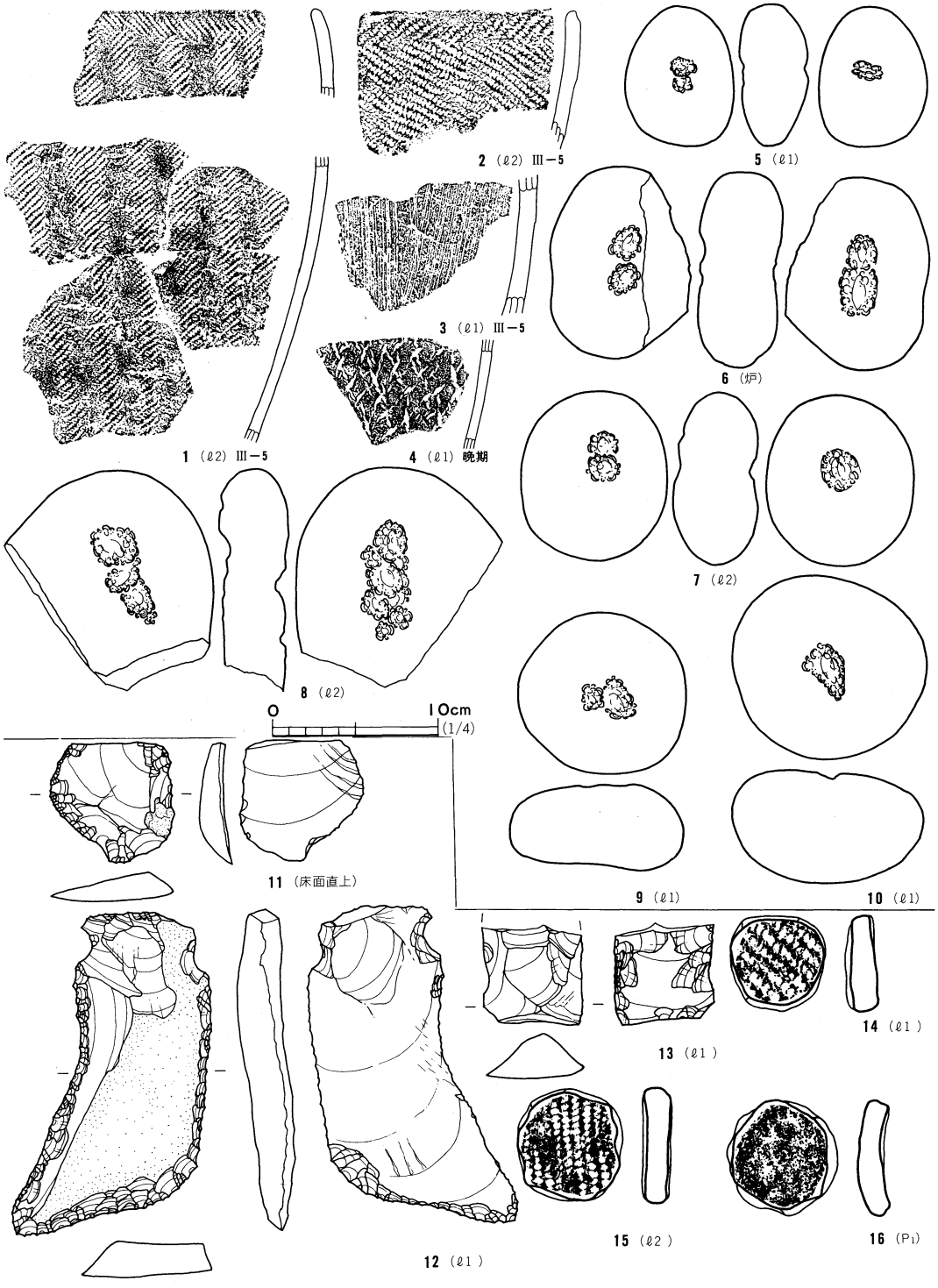


図122　58号住居跡出土遺物（5）

面形は正三角形状を呈し，主軸はほぼ東西を示す。規模は全長370㎝を測る大型の複式炉である。土器埋設部は幅140㎝程で，2個の深鉢形土器を主軸上に並べて埋設している。埋設土器の周囲には，拳大の石を面を揃えるように設置している。石組部は長さ110㎝，幅200㎝程で，人頭大の偏平な石を斜位に設置し，隙間は小型の石で充填している。主軸方向の断面形は，土器埋設部側から緩やかに下り，前庭部側が比較的急に立ち上がる逆「へ」の字状を呈している。床面からの深さは最大36㎝を測る。前庭部は長さ160㎝，幅240㎝程と推測され，西壁に向かって開く形状を呈する。底面は住居跡床面より10㎝程低い。前庭部底面は，周壁際から石組部に向かって緩やかに傾斜し，側壁には大型の石が設置されている。側壁西端の大石は設置したものではなく，地山から露頭している石をそのまま縁石として使用している。

複式炉内堆積土は，4層に区分した。ℓ1は住居跡堆積土のℓ2に相当する。埋設土器の最下層にはℓ4とした有機質土が堆積している。炉の焼けは埋設土器周辺が特に強く，埋設土器に接する土は熱のため焼土化していた。石組部の石には熱のため表面が剥落しているものが見られた。炉の掘形は，意図する炉各部位の形状に合わせて掘り込まれている。

遺　　物（図118～122）

本住居跡からは，土器片4,000点と石器15点が出土している。その多くは，ℓ1及びℓ2の上部からまとまって出土している。図118－1・2は，炉の埋設土器である。1は胴部上位が括れ，口縁部が外反する深鉢である。沈線で区画された長楕円・帯状の単位文を交互に施している。この単位文の間は，H字状の無文帯を構成する。図119－3もこれに近いが，単位文の一部は逆U字状を呈している。

図118－3は，口縁部が内湾する鉢である。文様は沈線で区画された上下二段の縄文帯で，波状文を描いている。胴部の文様帯は，沈線で上下に区画されている。同図4は口縁部が緩い波状を呈する浅鉢である。口縁部直下は「く」の字状に屈曲する。文様は，波頂部下位に凹線で区画された半弧状の単位文を対面させて配置し，波底部下位にはハート状の単位文を施している。波頂部下位の単位文の接点部は瘤状に肥厚する。単位文を区画する凹線の脇は一部稜線状を呈し，胴部文様帯は波状の凹線で上下に区画されている。同図5は胴部下端に括れを持つ深鉢である。文様は稜線で縁取られた帯状の無文帯で，横位に連続する曲線的な文様を描き出している。図121－12・14の文様もこれに近い。

図119－1は波状口縁を呈する深鉢で，口縁部直下は「く」の字状に屈曲する。波頂部下位にはC字状，波底部下位には楕円形状の単位文を配している。この単位文は，凹線で区画されている。C字状の単位文上部は瘤状に肥厚し，口唇部直下には，帯状の縄文帯が認められる。図121－1もこれに近い。図119－2には凹線で区画された，横C字状の単位文が4単位見られる。同図4は，浅鉢の底部で，底部直上まで凹線で区画された単位文が施されている。図121－2～8・11は，

凹線で区画されたU字・C字状の単位文が見られる。11には胴部を上下に区画する波状沈線文が施されている。同図10・16・19は稜線で縁取られた無文帯で文様を描くもので，すべてに渦巻文が見られる。これらの土器の単位文内の縄文は，すべて充填施文されている。

図120－10は注口土器，同図11は条線文が施された浅鉢であろう。図118－2，図120－1～6，図122－1～3は粗製土器で，図120－1・2，図122－1・2は，口縁部直下とそれ以下で，縄文原体の回転方向を違えている。縄文は縦位施文されるものが多く，図122－1は間隔をあけて縄文を施文している。同図5～10は凹部を持つ磨石，同図11・13は不定形石器，同図12は石匙である。同図14～16は，土器破片を用いた土製円盤である。

ま と め

本遺構は，直径8.8mの隅丸方形を呈する大型の住居跡である。炉は複式炉で，長軸370cmと本遺跡内最大の規模を持つ。所属時期は，炉埋設土器から大木9式期と判断している。（福　山）

59号住居跡（SI59）

遺　　構（図123，写真55）

セ・ソ8・9GのLV上面で検出した竪穴住居跡である。本跡の周辺は遺構密度が高く，SI63・67，SK319・320・321・322・323・351・355と重複している。SK310より古く，他の遺構より新しい。遺存状態は良く，周壁はほとんど検出することができた。

平面形は隅丸方形を呈し，規模は一辺5.8m程である。住居跡西壁は真北から30°程東へ傾いている。壁の立ち上がりは急で，壁高は最大24cmである。床面は平坦で，堅く締まっている。住居跡の堆積土は，4層に区分した。堆積状態は，ℓ1が一部本住居跡堆積土を掘り込んだような状態で堆積しているが，ℓ2以下の土については壁際に高い堆積状態が認められることから，自然堆積と判断した。

住居施設は，小穴と炉・埋甕が検出された。小穴は21個検出された。P1・P2・P4～P6は，暗褐色土が堆積する小穴である。規模は直径59～120cm，床面からの深さは61～70cmである。これらの小穴は，正方形に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と判断した。P1・P2・P4については平面形から，すべて2個の柱穴が重複しているものと考えている。P5・P6は近接する位置に作られている。この他の小穴には，褐色土が堆積していた。床面からの深さが40cm以上のものが多いが，配置に規則性が認められないことから，本跡に伴うものか判断できなかった。

炉は複式炉・埋甕炉・地床炉が，各1基検出された。1炉は複式炉で，住居跡中央やや北東に寄りに位置している。炉の前庭部は，住居跡東壁中央に取り付くものと考えられるが，SK310によって壊されている。遺存状態は悪く，土器埋設部の縁石・石組部の配石が部分的に遺存して

いるにすぎない。平面形は遺存部の形状からコケシ状を呈するものと考えられる。炉の主軸は，住居跡北壁とほぼ平行している。規模は全長210㎝，最大幅は100㎝程と推定している。

埋設土器部は円形状を呈するものと推定され，埋設土器から若干離して縁石を置いている。石組部の縁石はほぼ垂直に設置され，底面には偏平な板状の石が据えられていた。このことから，石組部は平面形が方形状，断面形は「コ」の字状を呈していたものと考えている。石組部と前庭部は柱状の石で区画されている。石組部と接する前庭部北壁際には，楕円形状の石が設置されていた。床面から石組部底面までの深さは，最大20㎝である。前庭部は石組部から直線的に東壁に向かって伸びるものと考えている。床面からの深さは最大18㎝である。

炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。石組部の石も表面が熱のため脆くなっている。炉内には住居跡堆積土と同質な褐色土，埋設土器最下層には，有機質の黒褐色土が堆積していた。炉掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器・配石との間に，隙間はほとんど見られない。

2炉は埋甕炉で，住居跡中央やや北寄りに位置している。倒立の状態で設置された深鉢の周囲に焼土が見られるものである。埋設土器内には下部に有機質の黒色土が，上部には本住居跡の貼床と考えられる黄褐色土が堆積していた。このことから，埋甕炉は直接本住居跡に伴わないかも知れない。3炉は直径70㎝，床面からの深さ15㎝程の円形の窪みを持つ地床炉で，住居跡中央やや南寄りに位置している。焼土の範囲はこの窪みの外にまで広がっている。

埋甕は3基検出された。ＳＭ1はＰ18の上部に胴部を欠損する深鉢が，倒立の状態で設置されていた。ＳＭ2は複式炉の北側に近接して，完形の深鉢が正立の状態で設置されていた。ＳＭ3は複式炉の埋設土器と並んで検出されたものである。土器の周辺に焼土が認められないことから，単独の埋甕と判断した。口縁部を欠く深鉢が成立の状態で埋置されていた。この他に埋甕と認識しなかったが，Ｐ17内から胴部下半を欠損する深鉢が横倒しの状態で出土している。

遺　　物（図124～127）

59号住居跡からは，900点の縄文土器片と20点の石器が出土している。炉埋設土器や埋甕以外の縄文土器片は，住居跡堆積土中から散在して出土したものがほとんどである。

図124－1は1炉の埋設土器，同図3はＳＭ3である。いずれも縄文が全面に施されている。同図2は2炉の埋設土器で，稜線で区画された帯状の無文帯で横に連続する図形を描いている。図125－8・9，図126－10・11もこれに近い。図124－4はＳＭ1，同図5はＰ17から出土したものである。いずれも沈線で区画された帯状の縄文帯で，逆Ｕ字状，波状の文様を描き出している。胴部は，横位に施された波状の沈線で上下に区画されている。図125－11～14の文様もこれに類似する。同図1は稜線で区画された，窓枠状の単位文を施している。図126－8・9の文様もこれに近い。

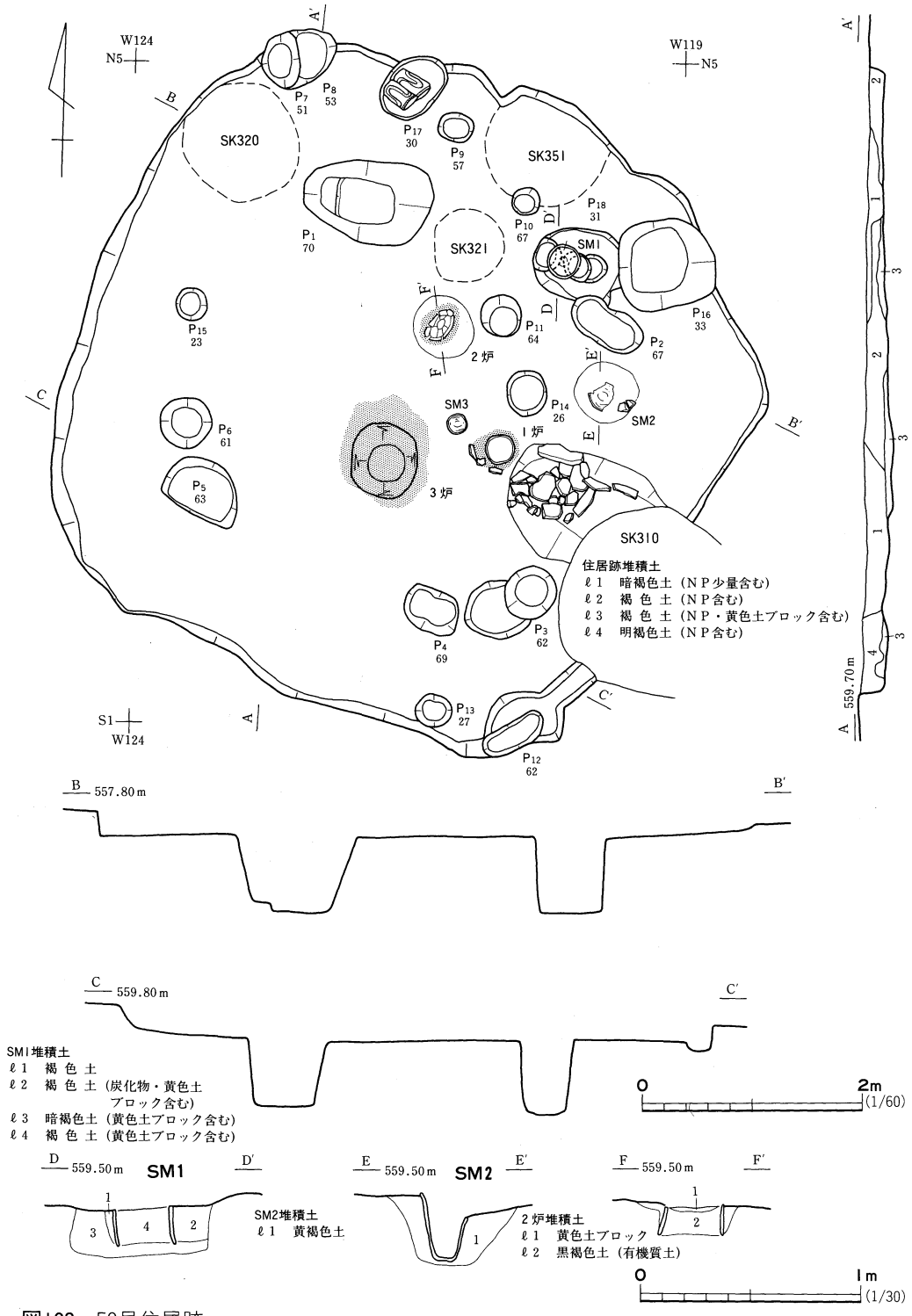
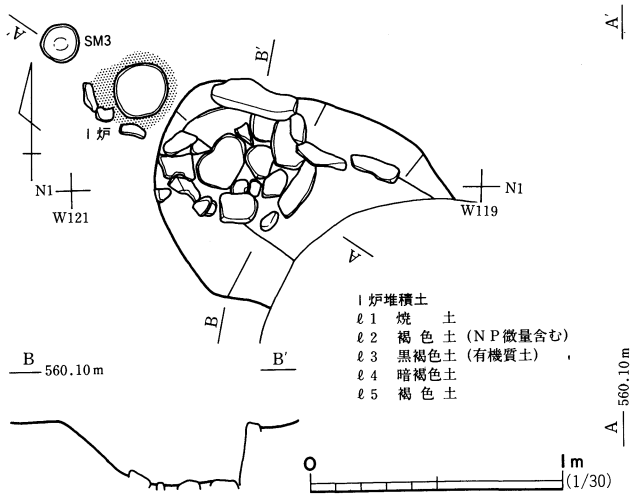
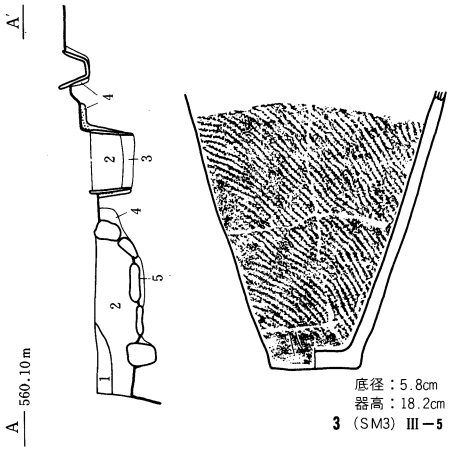
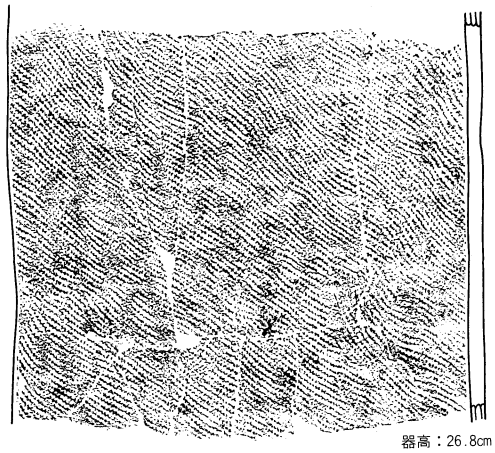
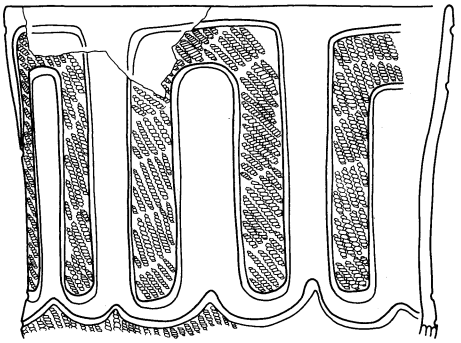

W124
N5
W119
N5
S1
W124
SK320
SK321
SK351
SK310
SM1
SM2
SM3
1炉
2炉
3炉
P1 70
P2 67
P3 62
P4 69
P5 63
P6 61
P7 51
P8 53
P9 57
P10 67
P11 64
P12 62
P13 27
P14 26
P15 23
P16 33
P17 30
P18 31
A 559.70m
B 557.80m
C 559.80m
D 559.50m
E 559.50m
F 559.50m
住居跡堆積土
ℓ1 暗褐色土（NP少量含む）
ℓ2 褐色土（NP含む）
ℓ3 褐色土（NP・黄色土ブロック含む）
ℓ4 明褐色土（NP含む）
SM1堆積土
ℓ1 褐色土
ℓ2 褐色土（炭化物・黄色土ブロック含む）
ℓ3 暗褐色土（黄色土ブロック含む）
ℓ4 褐色土（黄色土ブロック含む）
SM2堆積土
ℓ1 黄褐色土
2炉堆積土
ℓ1 黄色土ブロック
ℓ2 黒褐色土（有機質土）
0 2m (1/60)
0 1m (1/30)

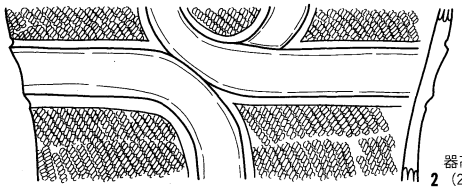
図123　59号住居跡

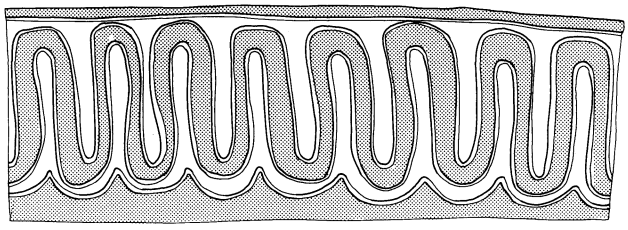












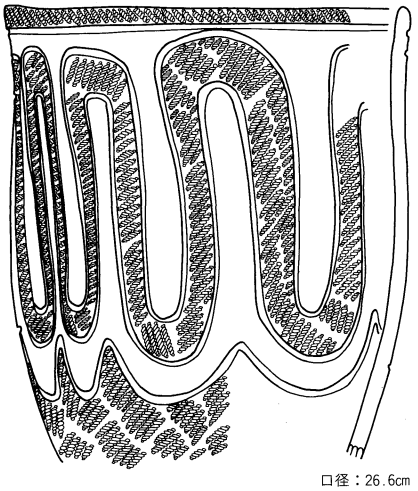


図124　59号住居跡複式炉と出土遺物（1）

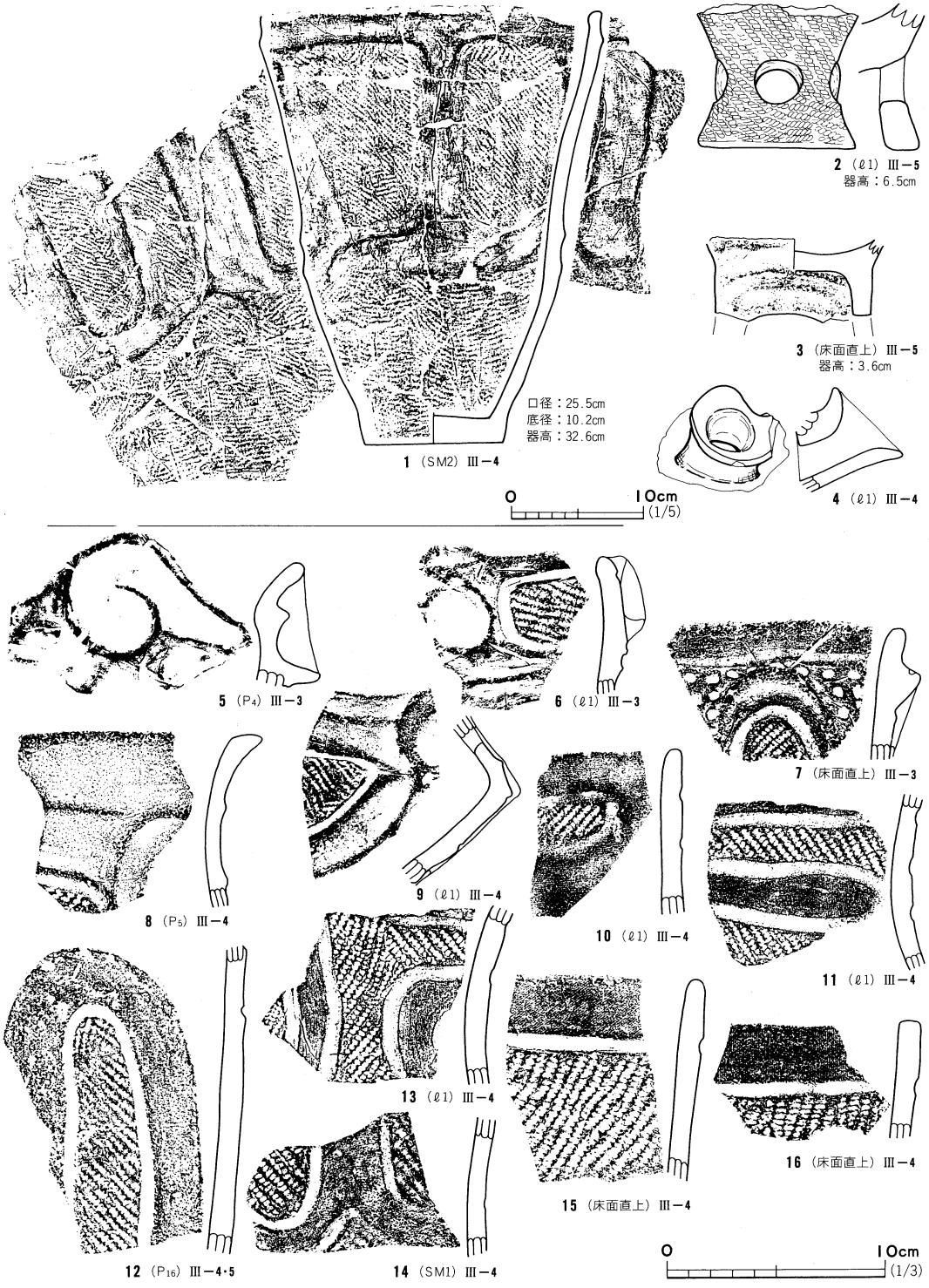


図125　59号住居跡出土遺物（2）

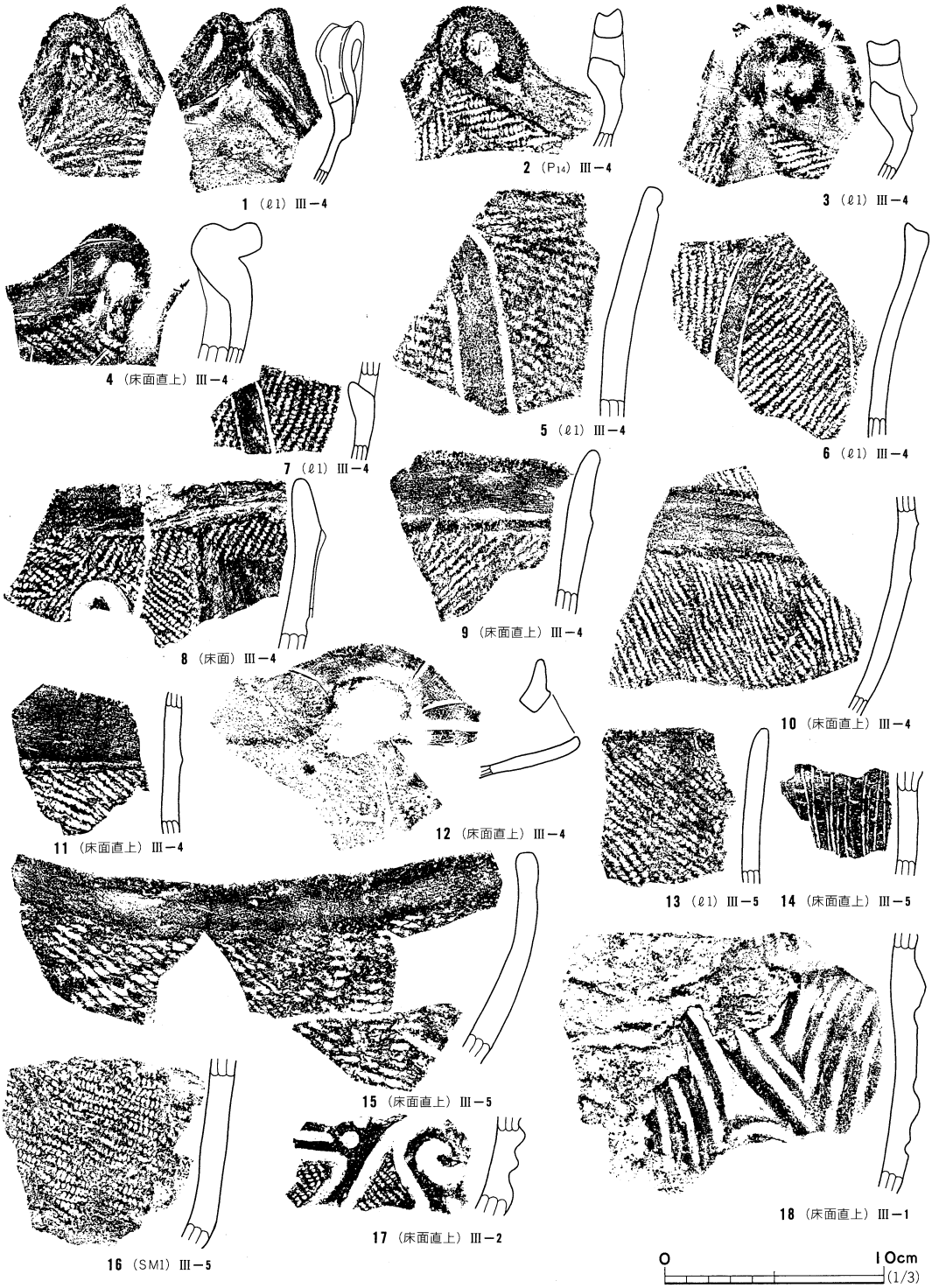


図126　59号住居跡出土遺物（3）

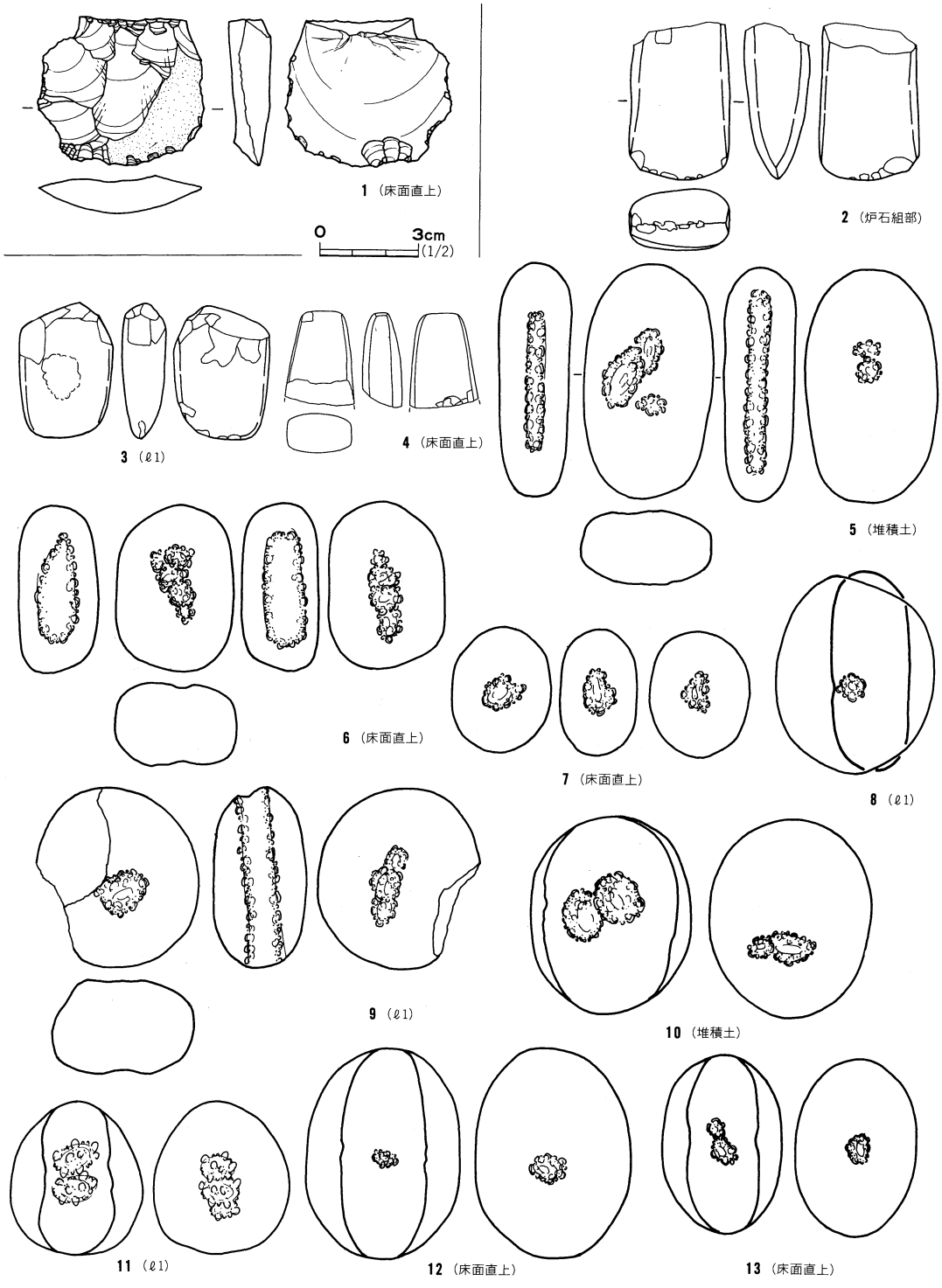


図127　59号住居跡出土遺物（4）

図125－2・3は，円孔を有する台付土器の台部，同図4，図126－12は注口土器の注口部である。図125－5・6は，ヒレ状の隆線で口縁部に渦巻文が描かれている。図126－1～4は，口縁部に稜線で区画された無文帯を配するもので，波状を呈する口縁上には渦巻状の突起が付けられている。同図5～7は細い沈線で区画された無文帯が，逆U字状に配されるものである。同図14には細い沈線文，同図17は隆沈線文，同図18には沈線が密接して施されている。

図127－1は，剝片の下縁部に調整剝離を加えて刃部を作り出した，不定形石器である。同図2～4は磨製石斧である。同図5～13は凹部を持つ磨石である。5・6・9の側縁部には敲打痕状の使用痕が認められる。

ま　と　め

本住居跡は，一辺が5.8m程の隅丸方形状を呈する竪穴住居跡である。住居施設には，方形状に配置された4個の柱穴と，複式炉・地床炉・3基の埋甕が検出された。柱穴にはほぼ同じ場所で重複するものが多いことから，本跡は立て替えられている可能性が高い。埋甕炉については，土層の観察から，住居跡の廃絶時には機能していなかったものと判断している。本住居跡については，出土遺物から大木10式期の所産と考えている。　（松　本）

60号住居跡（SI60）

遺　　構（図128，写真56）

調査区北西部，チ・ツ6・7GのLⅣ上面で検出された竪穴住居跡である。重複する他の遺構との新旧関係は，SG78より古く，SK340・469・487より新しい。削平及び倒木痕の撹乱のため，遺存状態は悪いが，壁溝により，住居跡の平面形と規模を明らかにすることができた。平面形は隅丸の方形を基調とし，主軸は真北より45°東にずれている。規模は北東－南西が4.7m，北西－南東は5.0mである。床面は平坦であり，よく締まっている。重複する古い時期の土坑堆積土上面には，貼床が認められた。周壁は住居跡南半部で最大10cm残存しているが，北半部では壁の立ち上がりは認められなかった。

小穴は，10個検出した。小穴内堆積土は，主に暗褐色のシルト質土である。10個の小穴中，深さが40cm以上のものはP1・P4～P6・P10の5個で，他の小穴はいずれも深さ10～30cmと浅い。小穴の配置を見ると，P1とP4・P10は炉を挟んで対応する位置にある。さらに規模はやや小さいが，これらと対応する位置にあるP5とP8，P5・P8の中間に位置するP6を，その作られた位置から，本住居跡の主柱穴と判断した。壁溝は幅20～30cm，床面からの深さ20～30cmで，北西コーナーを除きほぼ全周している。壁溝内には，細礫を含む褐色土が堆積していた。

炉は，住居跡中央から複式炉が検出された。前庭部は住居跡北西壁中央に取り付いている。規模は長軸220cm，短軸110cmで，炉の中軸線はほぼ南西を示す。平面形は土器埋設部が円形，石

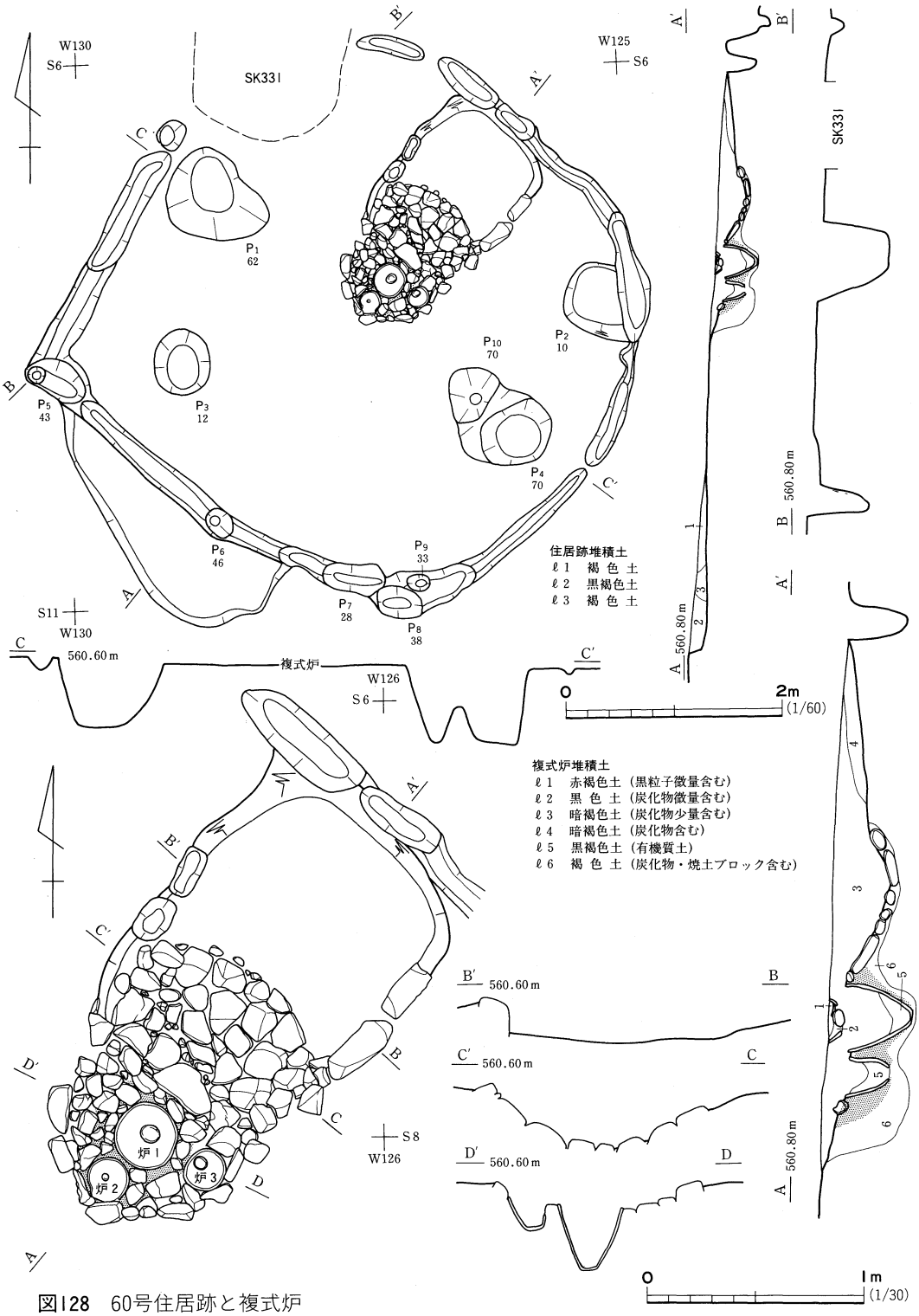
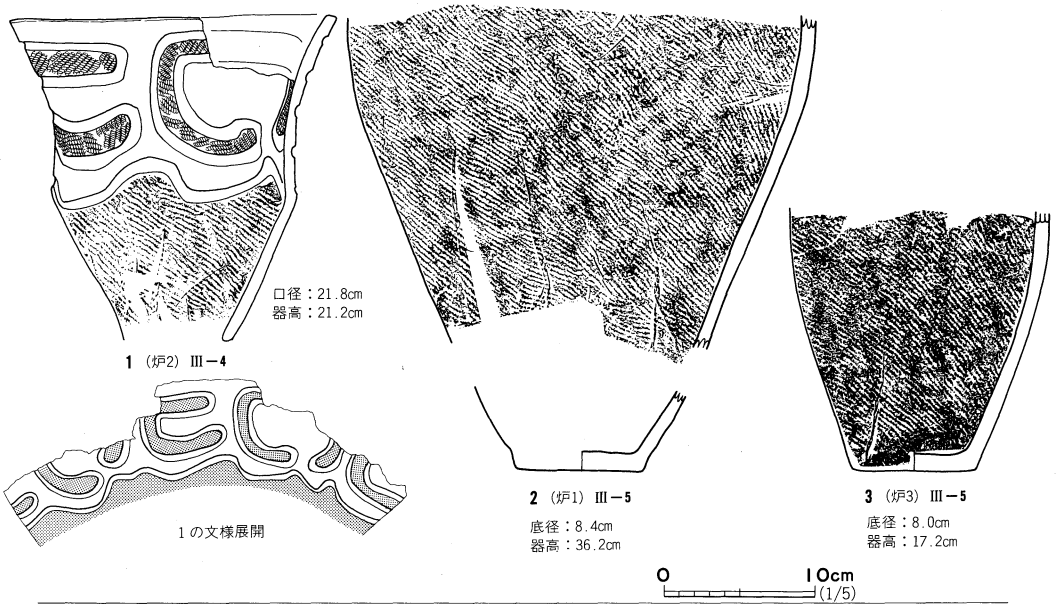


図128　60号住居跡と複式炉



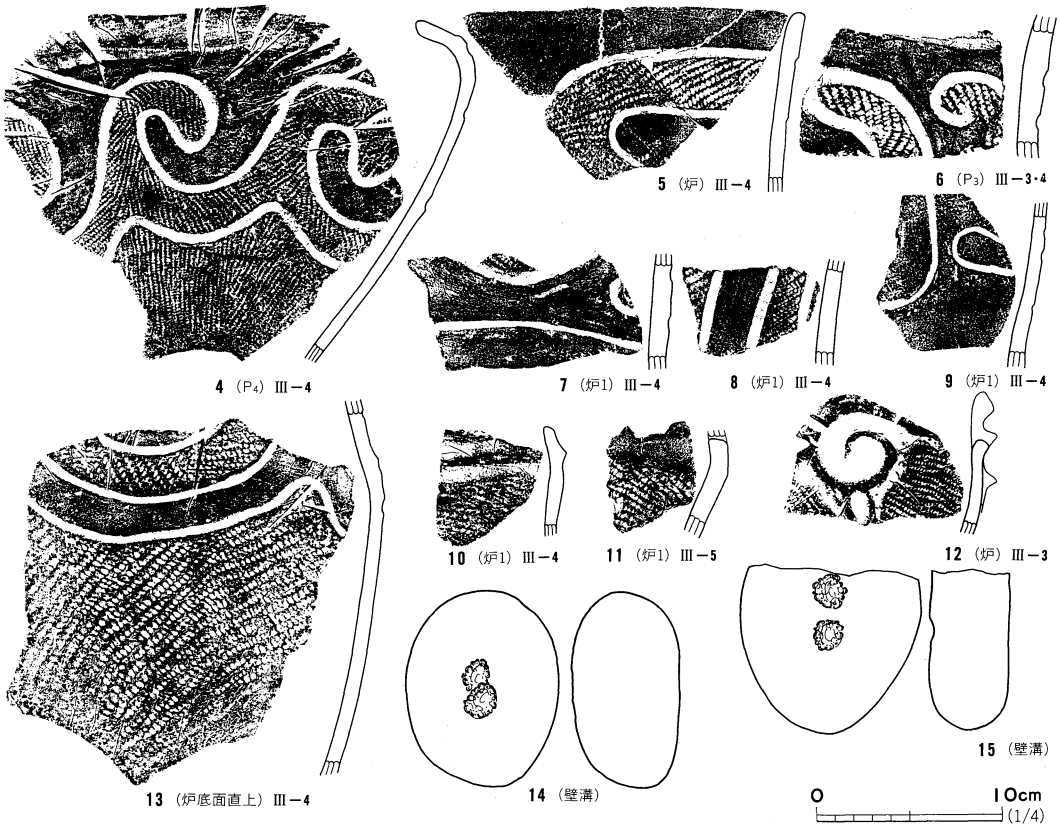


図129　60号住居跡出土遺物（1）

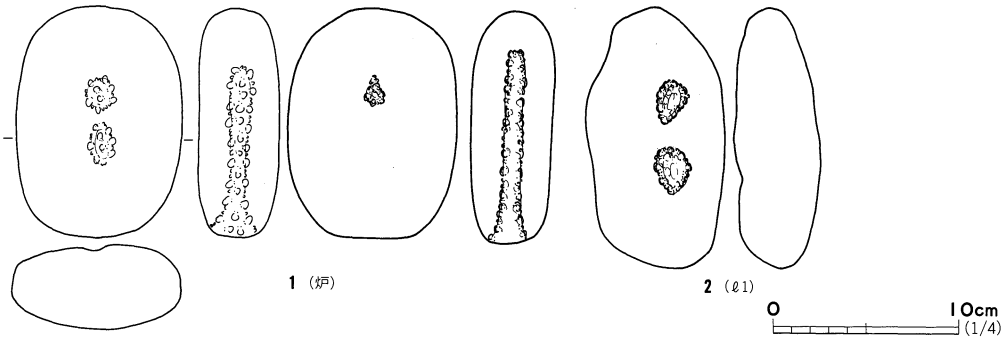


図130　60号住居跡出土遺物（2）

組部から前庭部は楕円形状を呈し，土器埋設部と石組部の境界は，僅かに括れている。

土器埋設部は，直径100㎝程の半円形状を呈し，炉の中軸線上に2個，土器埋設部の東側に寄った位置に1個，計3個の土器が埋設されていた。土器埋設部の周縁部には15～20㎝のやや偏平な礫を立てて設置し，その内部に亜円礫を面を揃えて置いている。石組部は幅100㎝，長さ70㎝の台形状で，周縁部には，20㎝以上の偏平な礫を斜めに設置している。このため石組部の断面形は，鍋底に近い形状を呈している。床面からの深さは，最大27㎝である。前庭部は長方形状で，規模は幅120㎝，長さ90㎝である。前庭部南東壁と石組部が接する部分には，長さ30～40㎝の細長い石を2個設置している。北東壁については，遺構検出時に石を除去してしまったが，これとほぼ同じ状態であったことを確認している。前庭部の底面は石組部に向かって緩やかに傾斜しており，底面からの深さは最大14㎝である。

炉の焼土化は，埋設土器の周辺と埋設土器と石組部の境界部付近が著しい。しかし，炉3の周りはほとんど焼土化していない。炉内堆積土は，埋設土器下部に木炭粒を主体とする黒褐色土が堆積しているが，他の部分は住居跡内堆積土と同質な土が堆積していた。掘形は意図する複式炉の形状に合わせて作られており，断面形は階段状を呈している。石組部では，掘形の周壁・底面に接して，石が設置されている。

遺　　物（図129・130）

出土した遺物は，埋設土器3点，土器片260点，石器2点である。図129－1～3は炉の埋設土器，他は炉内・床面，柱穴内から出土したものである。

図129－1は，胴部中央がややふくらみ，口縁部が外傾する，底部を欠く深鉢である。凹線によるC字状の単位文が，4単位施されている。同図2・3は，縄文の施された粗製の深鉢である。同図4は，口縁部が内傾する鉢形土器であろう。凹線により，波頭状の図形が描かれている。同図5～9・13は，凹線で曲線的な単位文様が描かれている。単位文様内には，縄文が充填施文されている。同図10・11は，無文帯の下限を横位の稜線で区画している。同図12は，波状口縁部

に渦巻状の突起が付けられている。同図14・15は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本住居跡は，隅丸の方形状を呈する竪穴住居跡である。住居施設には，5個の柱穴と複式炉・壁溝がある。本住居跡の所属時期については，重複関係や出土土器から，大木10式期と考えている。　（香　内）

61号住居跡（SI61）

遺　　構（図131・132、写真57）

調査区中央部、ケ26・27GのLⅢb上面で検出した竪穴住居跡である。周辺は遺構密度の低い地域で，北東部にSI120が隣接しているものの，重複する遺構はない。遺存状態は良好で，周壁すべてを確認した。

平面形は円形状を呈し，規模は南北6.1m，東西6.8mである。壁の立ち上がりは急で，壁の残存高は19～41cmを測る。床面は平坦であるが，北から南に傾斜しており，最大比高差は43cmである。本住居跡の堆積土は3層に大別した。ℓ1は黒褐色土，ℓ2は暗褐色土でLⅢbに近似する土である。堆積状態については，整ったレンズ状の堆積が認められることから，自然堆積と判断している。

住居施設は，小穴と壁溝・複式炉が検出された。小穴は10個検出された。P1～P7は直径58～90cm，深さ35～63cmと規模が大きく，住居跡南側を除く周壁沿いにほぼ等間隔に配置されている。これらの小穴については，規模と配置状況から，本住居跡の主柱穴と判断した。主柱穴内の堆積土は，P1～P6が住居跡と同様の暗褐色土，P7は褐色土である。複式炉前庭部底面からは，P8・P9が検出された。直径はいずれも18cm，深さは13cm・10cmと，主柱穴と比較して小さい。壁溝は住居跡の北西部，周壁全体の⅓程度の範囲から検出された。深さは2～28cm，幅は平均25cmである。壁溝内には，黄色土ブロックを含む暗褐色土が堆積していた。

炉は，住居中央南寄りから複式炉が検出された。遺存状態は悪く，土器埋設部は欠失し，埋設土器の掘形と思われる浅い小穴，P10が痕跡をとどめるのみである。石組部に付いても北西側の縁石は，一部失われている。全体の平面形は，P10を頂点とする二等辺三角形状を呈しているが，石組部と前庭部の間にやや括れを持つ。炉の主軸は南北方向を示す。規模は全長272cm，最大幅205cmである。

石組部は長さ115cm，幅150cmの三角形状を呈し，土器埋設部付近の石は一部欠失している。石の多くは拳大の亜円礫であるが，周縁部には人頭大の平石も数個設置されている。これらの石は，周縁部から中央に向けて斜めに据えられている。床面から石組部底面までの深さは，最大19cmである。石組部の掘形は石組より若干大きく掘られ，床面から掘形底面までの深さは最大30cmである。

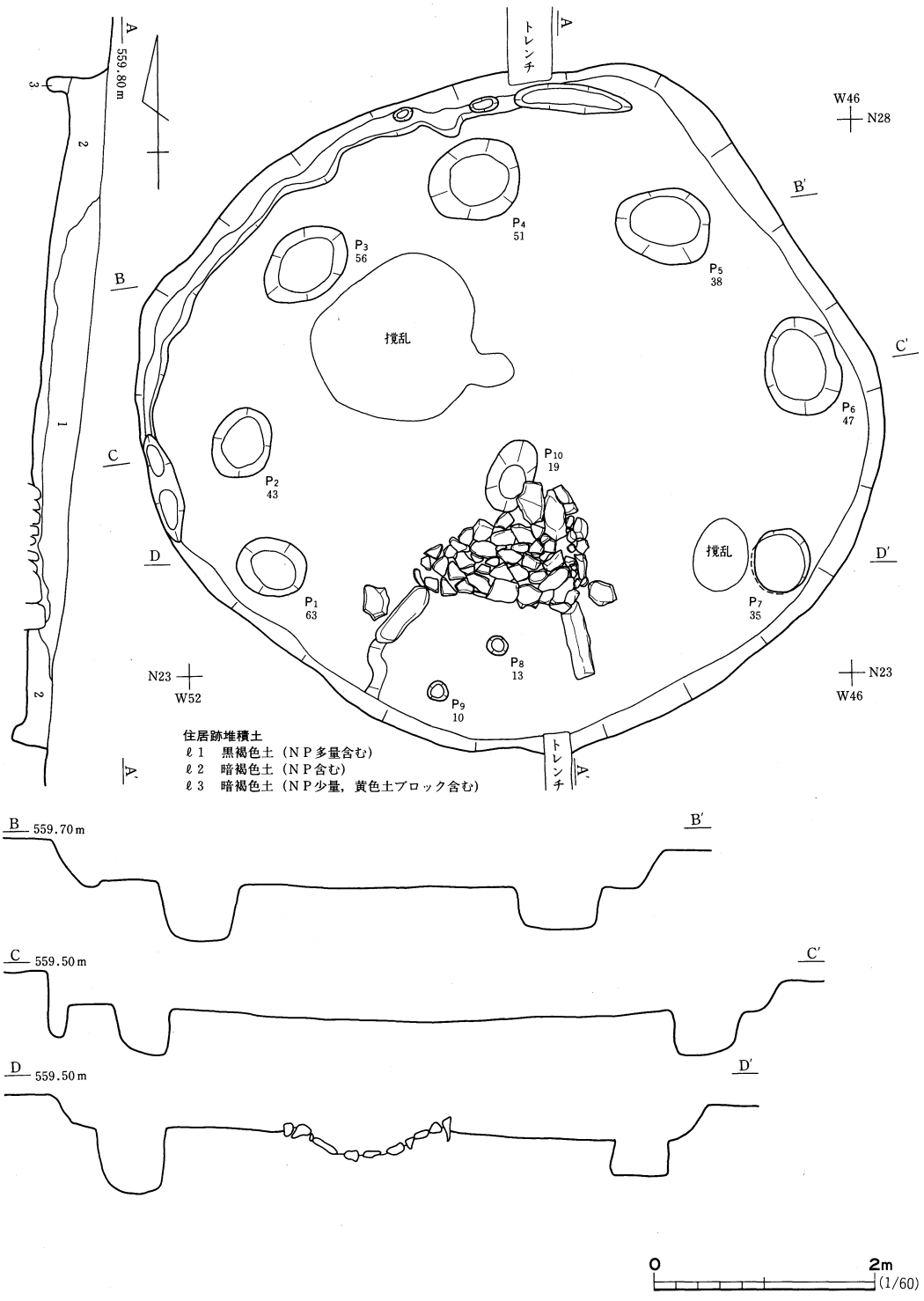

A
559.80m
3
2
1
2
A'
トレンチ
W46
N28
B
B'
C
C'
D
D'
P1
63
P2
43
P3
56
P4
51
P5
38
P6
47
P7
35
P8
13
P9
10
P10
19
撹乱
撹乱
N23
W52
N23
W46
トレンチ
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（NP多量含む）
ℓ2　暗褐色土（NP含む）
ℓ3　暗褐色土（NP少量，黄色土ブロック含む）
B
559.70m
B'
C
559.50m
C'
D
559.50m
D'
0
2m
(1/60)

図131　61号住居跡

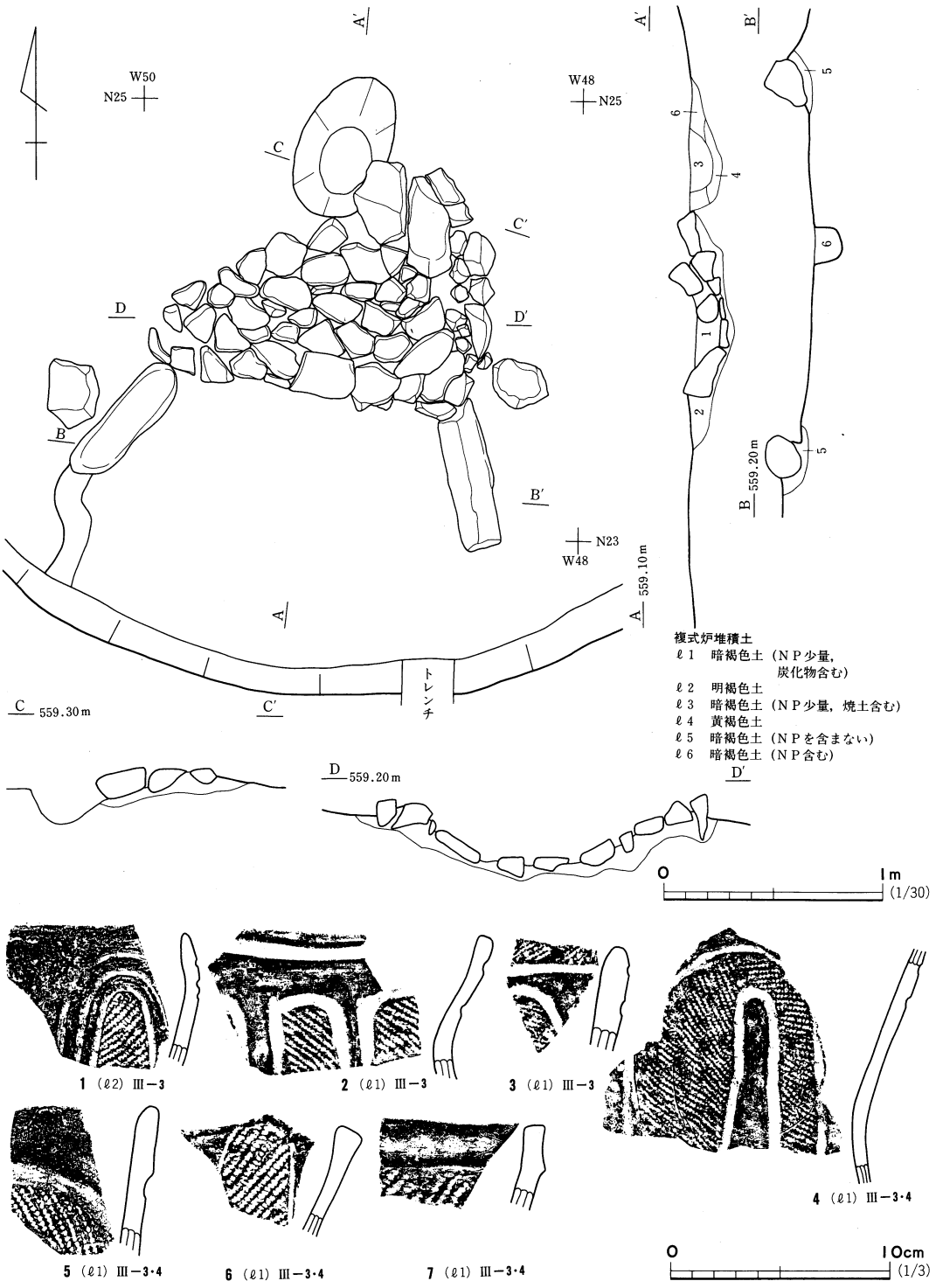


図132　61号住居跡複式炉と出土遺物（1）

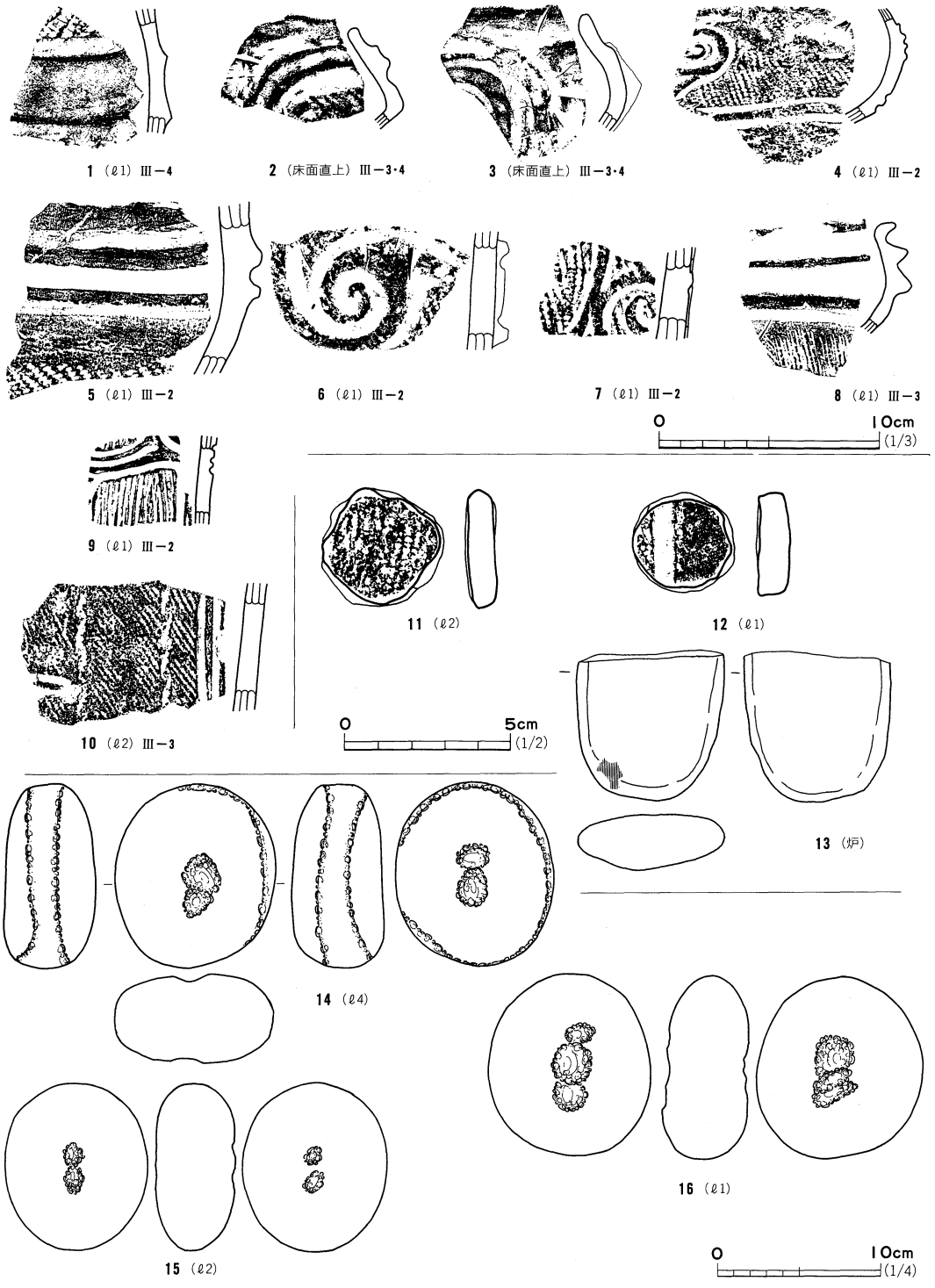


図133　61号住居跡出土遺物（2）

前庭部は石組部から「ハ」の字状に開き，末端は住居跡の南壁に取り付いている。平面形は台形を呈し，規模は南北125㎝，東西205㎝を測る。前庭部の周壁は西側でのみ確認され，東側では明瞭な立ち上がりは認められない。西壁はS字状に湾曲しながら住居跡の周壁に至る。周壁の立ち上がりは緩やかで，壁高は最大12㎝を測る。底面は平坦で，床面からの深さは最大13㎝である。石組部と接続する部分には，長さ60㎝～70㎝の柱状の石が付設されている。埋設土器掘形のP10は，42×66㎝の楕円形状を呈し，深さは19㎝と浅い。掘形内堆積土は3層に分かれ，ℓ3には焼土粒が含まれていた。

遺　　物（図132・133）

61号住居跡からは，400点の縄文土器片と7点の石器が出土した。縄文土器は住居跡堆積土中から小破片の状態で，散在して出土したものがほとんどである。図132－1～6は沈線や凹線によって逆U字状の単位文を施している。4は，2本の沈線によって区画された逆U字状の縄文帯を有する。2・3は口縁部に横走する沈線を施し，3は口縁部にも縄文を施している。6は口縁部が波状を呈するもので，波頂部から細い沈線によって区画された縄文帯が垂下している。単位文内の縄文はすべて充填施文されている。

図132－7～図133－3は，稜線に縁取られた無文帯で文様を描いている。2・3は口縁部が「く」の字状に屈曲する浅鉢であろう。図133－4～9は，隆沈線によって文様を描いている。4・6・7には渦巻文が見られる。8の隆線はヒレ状に発達し，断面は三角形状を呈している。地文には8が細い条線文，9は撚糸文，他は縄文が施されている。同図10にはアヤクリ文が見られる。同図11・12は，土器破片を利用した土製円盤である。同図13は磨製石斧であるが，器面の剝落が著しい。同図14～16は凹部を持つ磨石で，14には側縁部に敲打痕状の使用痕が見られる。

ま　と　め

本住居跡は，直径が6.5ｍ程の円形の竪穴住居跡である。7個の主柱穴は，住居跡の平面形と同じく円形に配置されている。複式炉の平面形は三角形状を呈している。土器埋設部は欠失し，埋設土器の掘形だけが認められた。本住居跡の所属時期については，出土土器で主体を占めるものが大木9式土器であることと，炉の形態的特徴から，大木9式期と考えている。　（丹　治）

62号住居跡（ＳＩ62）

遺　　構（図134・135、写真58・59）

タ・ツ7・8GのLⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。遺存状態は良く，住居跡の周壁をほぼすべて検出することができた。ＳＫ314・343と重複し，本住居跡が最も新しい。この他に住居跡西壁部で，検出面からの深さ18㎝，断面形が鍋底状を呈する，楕円形状の掘り込みと重複している。これについては，形状・規模から竪穴住居跡の可能性が高いが，これに伴うと考

えられる，柱穴や炉が認められないことから，その性格を判断することはできなかった。このため本報告においては，特に遺構名を付すことはしていない。この掘込みとＳＩ62との新旧関係については，調査当初両遺構の重複に気付かなかったため不明である。

平面形は楕円形状を呈し，規模は東西5.4ｍ，南北4.6ｍである。長軸は真北から30°程西に傾いている。壁高は最大30㎝で，周壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は全体的によく締まり，北東方向へ若干傾斜しているものの，ほぼ水平である。遺構内堆積土は，色調・混入物から4区分した。整ったレンズ状の堆積状態を示すことから，自然堆積と判断している。

住居内からは23個の小穴と，1基の複式炉・2基の焼土と壁溝が検出された。23個の小穴のうち，P1・P4～P6は床面からの深さが55㎝以上と，他の小穴に比べて深い。さらに，これら4個の小穴は，それぞれ相対する位置に作られていることから，本跡の主柱穴と判断した。複式炉前底部に作られた，P7・P20～P22についても，深さとその位置から，主柱穴に近い機能を果たしていたものと考えられる。

複式炉は住居跡中央に位置し，前庭部は北壁の中央に取り付いている。平面形は二等辺三角形状を呈し，長軸は250㎝を測る。炉の長軸は，住居跡の長軸とほぼ直交している。埋設土器部には，長軸上に2個の土器が並んで埋設され，その周囲には拳大の石が配置されている。土器埋設部の先端には，埋設土器と接するように石を一列巡らせている。土器埋設部の規模は，長軸上で75㎝を測る。石組部は台形状を呈し，規模は長軸上で70㎝，幅は130㎝である。底面や周壁にはところどころに大きな平石を置き，その隙間を拳大の石で埋めている。石組部の断面形は鍋底状を呈し，床面から底面までの深さは30㎝である。前庭部も台形状を呈し，規模は長軸上で80㎝，幅は165㎝である。周壁の立ち上がりは緩やかで，断面形は鍋底状を呈している。

炉の焼けは強く，埋設土器の周辺は焼土化が著しい。石組部の石にも，表面が熱により剝落しているものが多く認められた。炉内堆積土は，暗褐色土が主として堆積しているが，埋設土器内には，炭化物を多く含む黒褐色土が堆積していた。炉の掘形の断面形は階段状を呈しているが，土器埋設部と石組部のレベル差は僅かである。埋設土器部の掘形内には，埋設土器を固定するためであろうか，比較的大きな土器片を設置していた。

2基の焼土は，住居跡中央のやや北寄りから検出された。いずれも床面が加熱により焼土化したものである。どちらも撹乱によってその一部を壊されているため規模は不明であるが，現況で20×60㎝・30×40㎝の範囲が焼けていた。焼土化は上面から5㎝下までおよんでいた。壁溝は幅20～40㎝，床面からの深さは10㎝程で，住居跡内を全周している。

遺　　物（図134～137）

本住居跡からは830点の縄文土器片と，7点の石器が出土している。炉の埋設土器を除くと，いずれも堆積土内から散在した状態で出土した。図135－1・2は炉埋設土器，図136－1は炉掘形

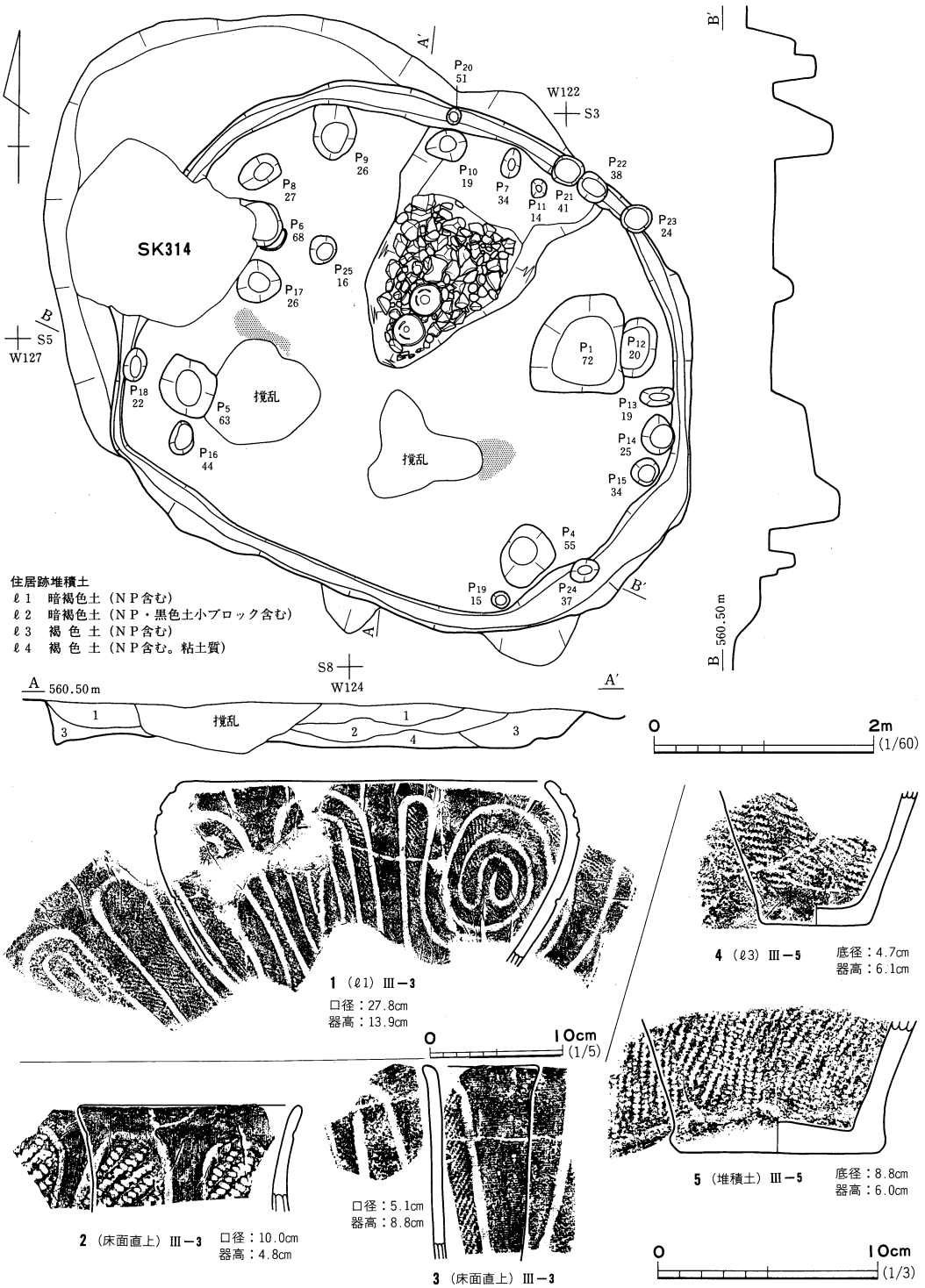


図134　62号住居跡と出土遺物（1）

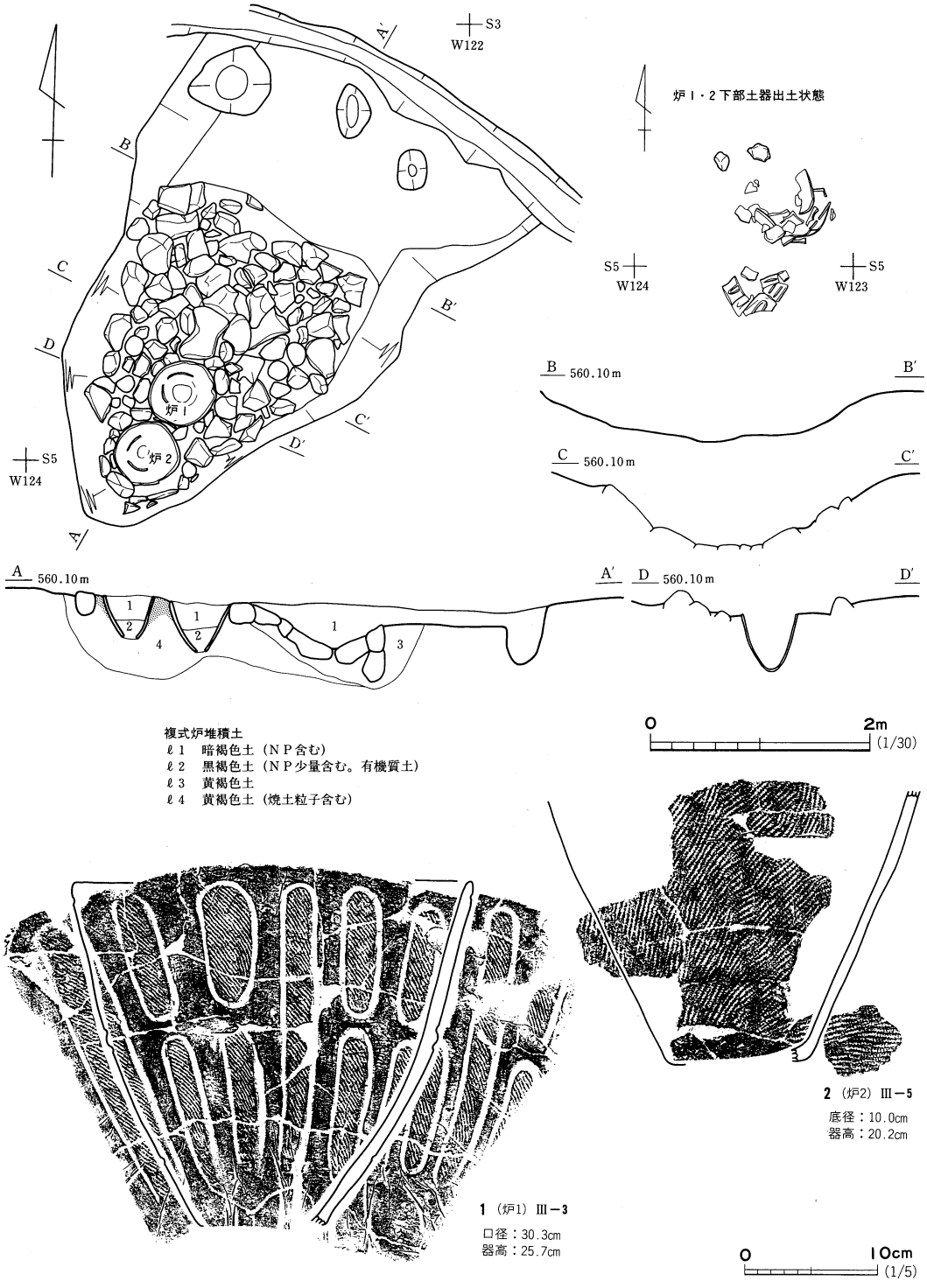


図135　62号住居跡複式炉と出土遺物（2）

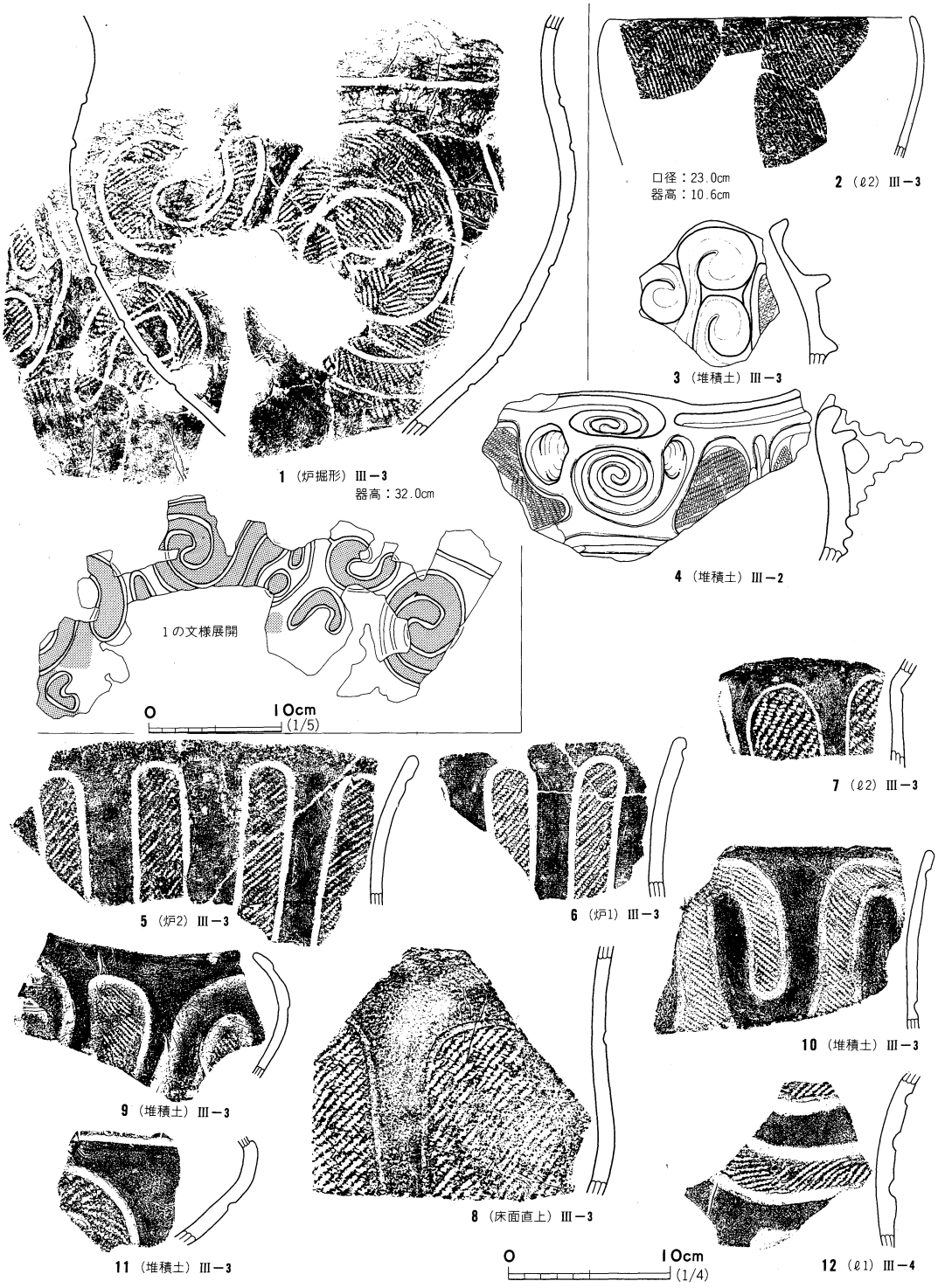


図136　62号住居跡出土遺物（3）

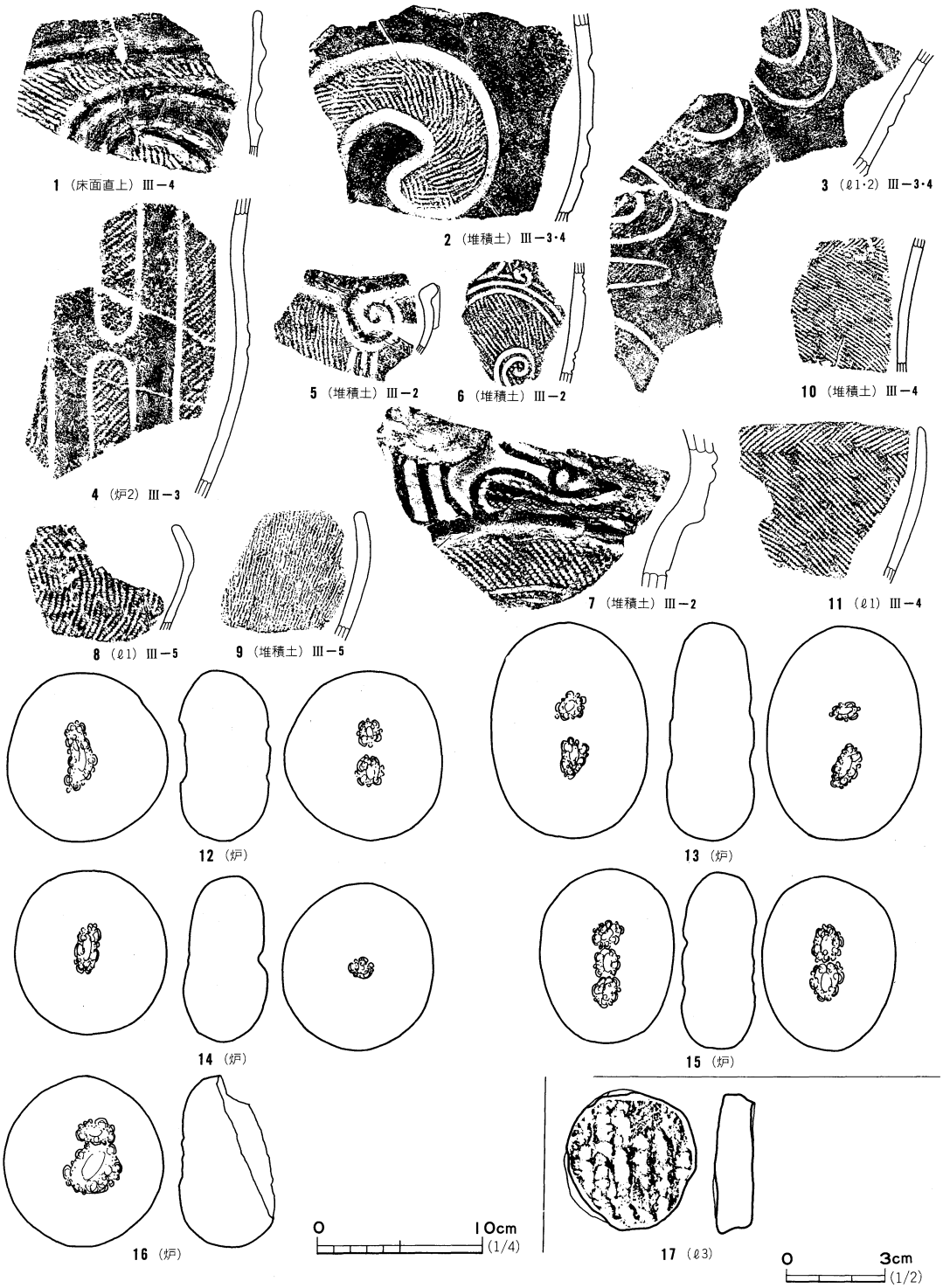


図137　62号住居跡出土遺物（4）

内から出土したものである。図135－1は沈線によって区画された楕円形の単位文で，文様が構成されている。図137－4もこれに近い。図136－1は，球状の胴部を持つ深鉢である。頸部を無文とし，胴部には沈線で区画されたC字状・渦巻状の単位文を描いている。単位文内には縄文が，充填施文されているが，渦巻状の単位文については，区画外にも縄文が施されている。図134－1は沈線で区画された渦巻状の単位文内に，縄文を充填施文したものである。

図134－2・3，図136－5～8は，沈線で区画された縄文帯を縦位に施している。図136－9～12，図137－2・3は沈線や凹線によって，曲線的な単位文を描くものである。単位文内には，縄文が充填施文されている。図136－3は，ヒレ状に発達した稜線で渦巻文を描く。同図4，図137－5～7は，隆沈線によって文様を描いている。図137－12～16は凹部を持つ磨石である。同図17は土器片を利用した土製円盤である。

ま と め

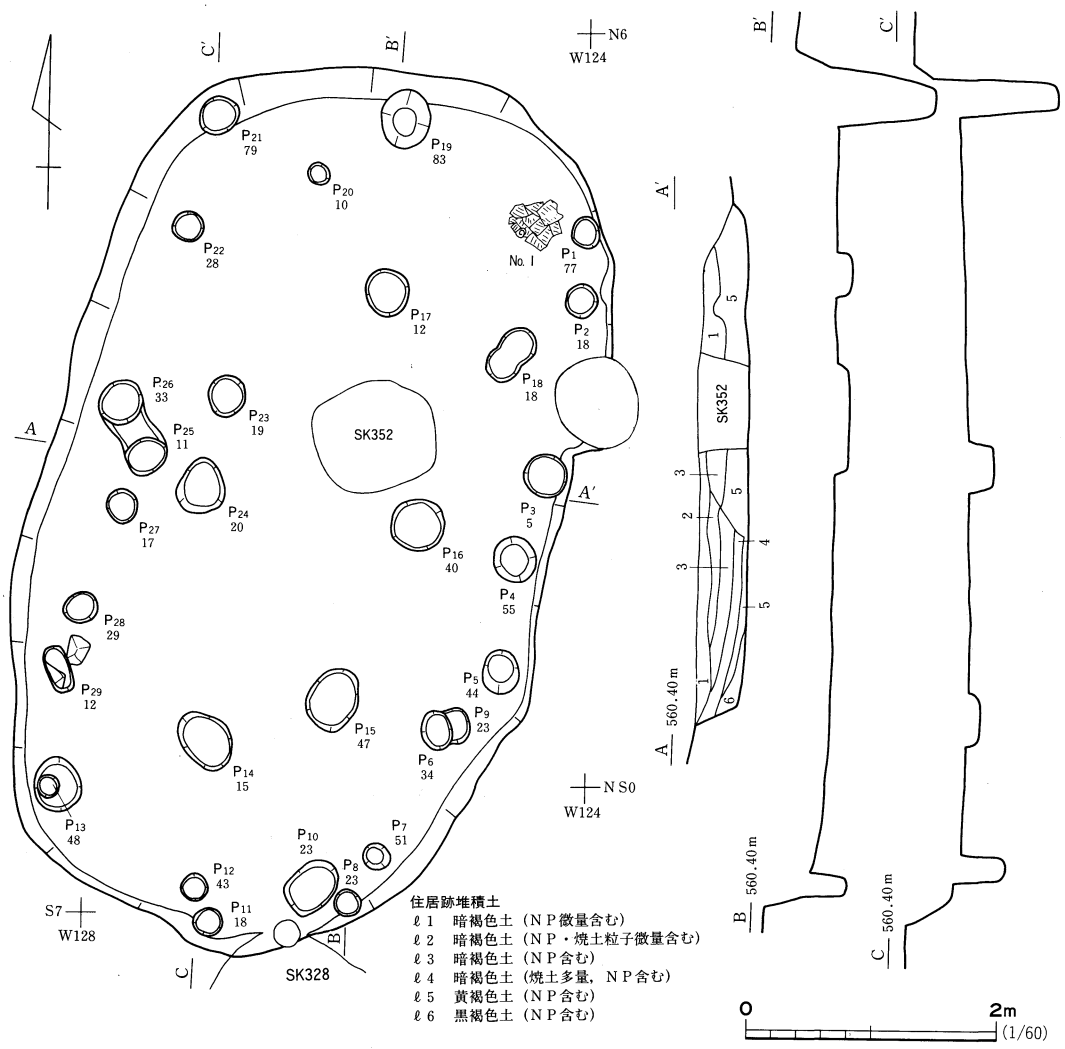
本跡は楕円形状を呈し，4本の主柱を持つ竪穴住居跡である。複式炉のほかに，2基の焼土が認められた。この焼土については，本住居跡に伴う地床炉と判断している。本住居跡の所属時期は，出土遺物から大木9式期のものと判断している。（光　家）

63号住居跡（SI63）

遺　　構（図138、写真60）

セ・ソ7Gに位置する竪穴住居跡である。遺存状態は良好で，住居跡の周壁すべてを検出することができた。SI59，SK328・352・363・364，SM23と重複し，SI59，SK328・352，SM23より古く，SK363・364より新しい。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し，規模は東西4.1m，南北6.9mである。検出面はLV上面及びSI59の床面で，検出面から床面までの深さは，35cmである。壁の立ち上がりは急で，床面は比較的平坦で硬く締まっている。住居跡内堆積土は色調・混入物から5層に分層された。ℓ5はLVに対比できる黄褐色土で，人為的に住居内に捨てられた土である。

住居施設は，小穴が29個検出された。直径はP14・P15が最も大きく50cm，P20cmは最も小さく18cmである。床面からの深さは，P1・P19・P21が77～83cm，P4・P5・P7・P12・P13・P15・P16・P22・P26は30～50cmである。小穴の堆積土は，褐色土・赤褐色焼土・暗褐色土・茶褐色土と多様である。これらの小穴は，住居跡の壁際に作られたものが多い。これらの小穴の中でP1・P4・P5・P7・P12・P13・P19・P21・P22・P26と，深さ29cmのP28は，ほぼ等間隔に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。P15・P16については，これらと対応する小穴が他に見いだせず，本住居跡に伴うものかどうか判断できなかった。炉は検出されなかった。



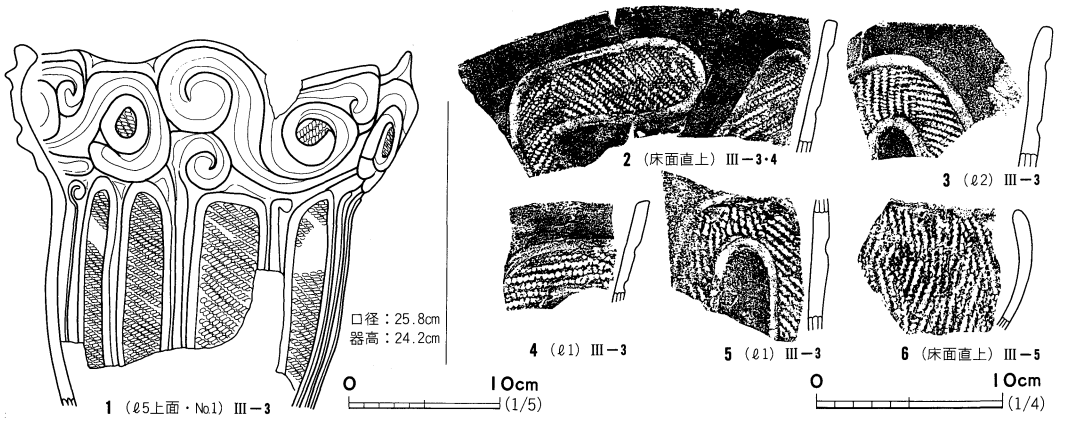


図138　63号住居跡と出土遺物

遺　　物（図138）

出土した遺物は，縄文土器片280点と石器3点である。図138－1は本住居跡北東隅の床面から20㎝程浮いた位置から潰れた状態で出土した。その他は，小破片状態で堆積土中から散在して出土している。

図138－1は，キャリパー状を呈する深鉢である。胴部には沈線で区画された縦位・短冊状の縄文帯を配している。口縁部には稜の発達した隆線で，渦巻文を密接して描き出している。この渦巻文の一部は口縁上部から突出し，突起状を呈している。同図2～5は，凹線によりU字状の単位文を描くものであろう。単位文内の縄文は，充填施文されている。同図6は縄文の施された粗製土器である。

ま　と　め

本住居跡は，隅丸長方形を呈する比較的大型の住居跡である。住居跡内に炉はないが，柱穴は壁際に直線的に並ぶように配置されていた。所属時期は，出土遺物と他遺構との重複関係から判断して，大木9式期と考えている。（松　崎）

64号住居跡（SI64）

遺　　構（図139，写真61）

タ5・6Gに位置する竪穴住居跡である。検出面はLVと，古い時期の遺構であるSI66の堆積土上面である。遺存状態は良く，周壁はほぼ全周している。平面形は楕円形状を呈するが，住居跡南東部の壁は直線的である。規模は長軸5.6m，短軸4.7mで，長軸は真北から45°東に傾いている。壁の立ち上がりは急で，壁高は最大24㎝である。床面は平坦で締まっている。住居跡の堆積土は，3層に区分した。主体をなすのはℓ2・ℓ3とした褐色土で，この土が一様に住居跡内に堆積していることから，堆積状態については判断できなかった。

住居施設は，壁溝と小穴・炉・石組が検出された。壁溝は住居跡南東壁際を除く，周壁際に認められた。幅は20㎝，床面からの深さは4～15㎝程である。小穴は12個検出された。直径は24～40㎝とほぼ同じである。P1・P2は床面からの深さがそれぞれ63・48㎝と深い。他の小穴は床面からの深さ16～36㎝である。P1・P2については炉を挟んでほぼ対応する位置に作られていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。住居跡西側の主柱穴については特定しえないが，P3・P4がその深さから本住居跡に伴う可能性が高い。P4を主柱穴とすれば，本住居跡の主柱穴は三角形状に配置されていたものと理解できる。

炉は複式炉で，前庭部の末端は住居跡東南壁中央に取り付いている。平面形は，長方形状を呈する石組部と前庭部に，半円形状の土器埋設部が取り付いた形態を示している。遺存状態は比較的良いが，土器埋設部と石組部の北西側の縁石は，一部失われている。規模は長軸200㎝，幅は

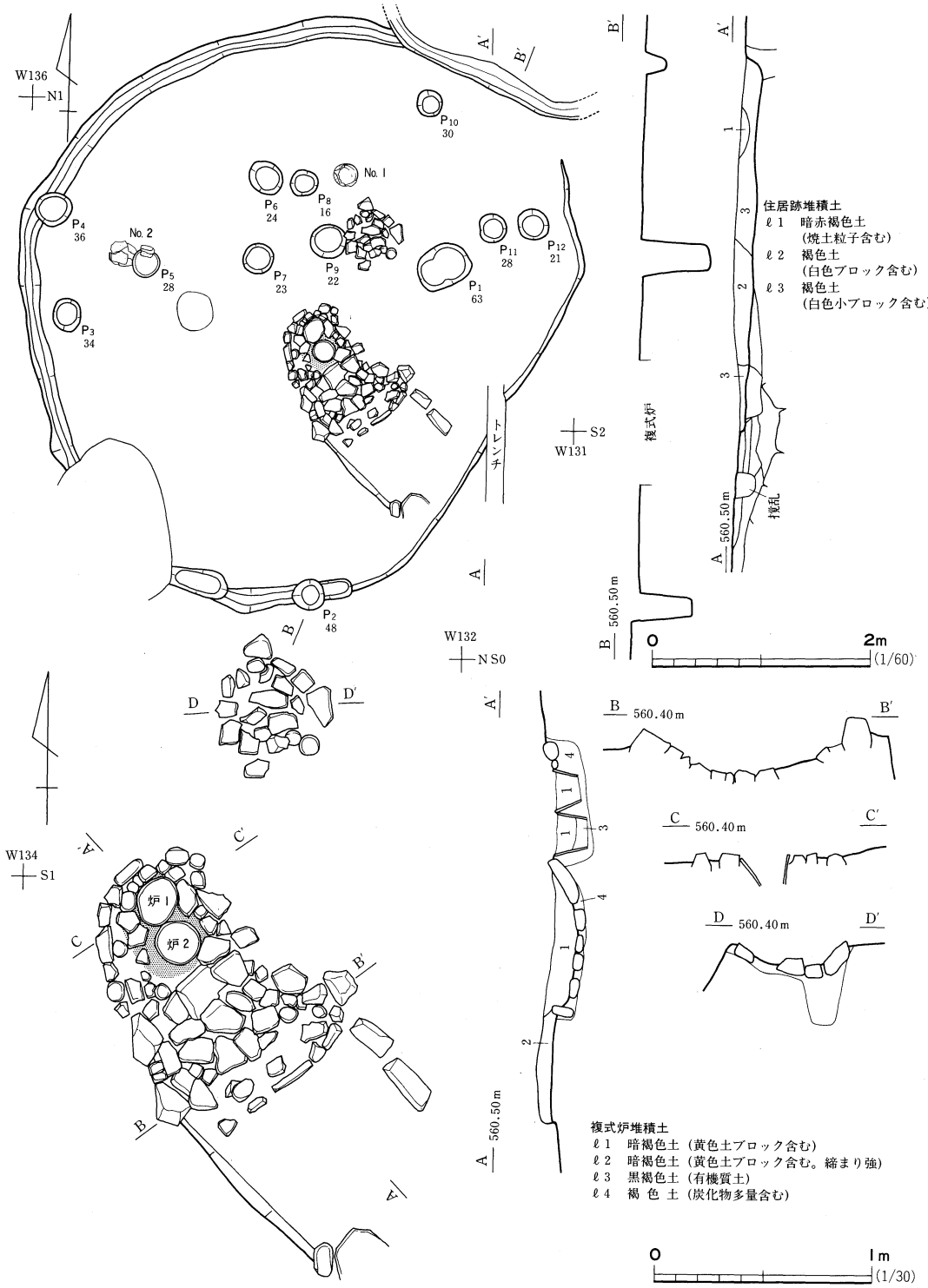


図139　64号住居跡と複式炉・石組

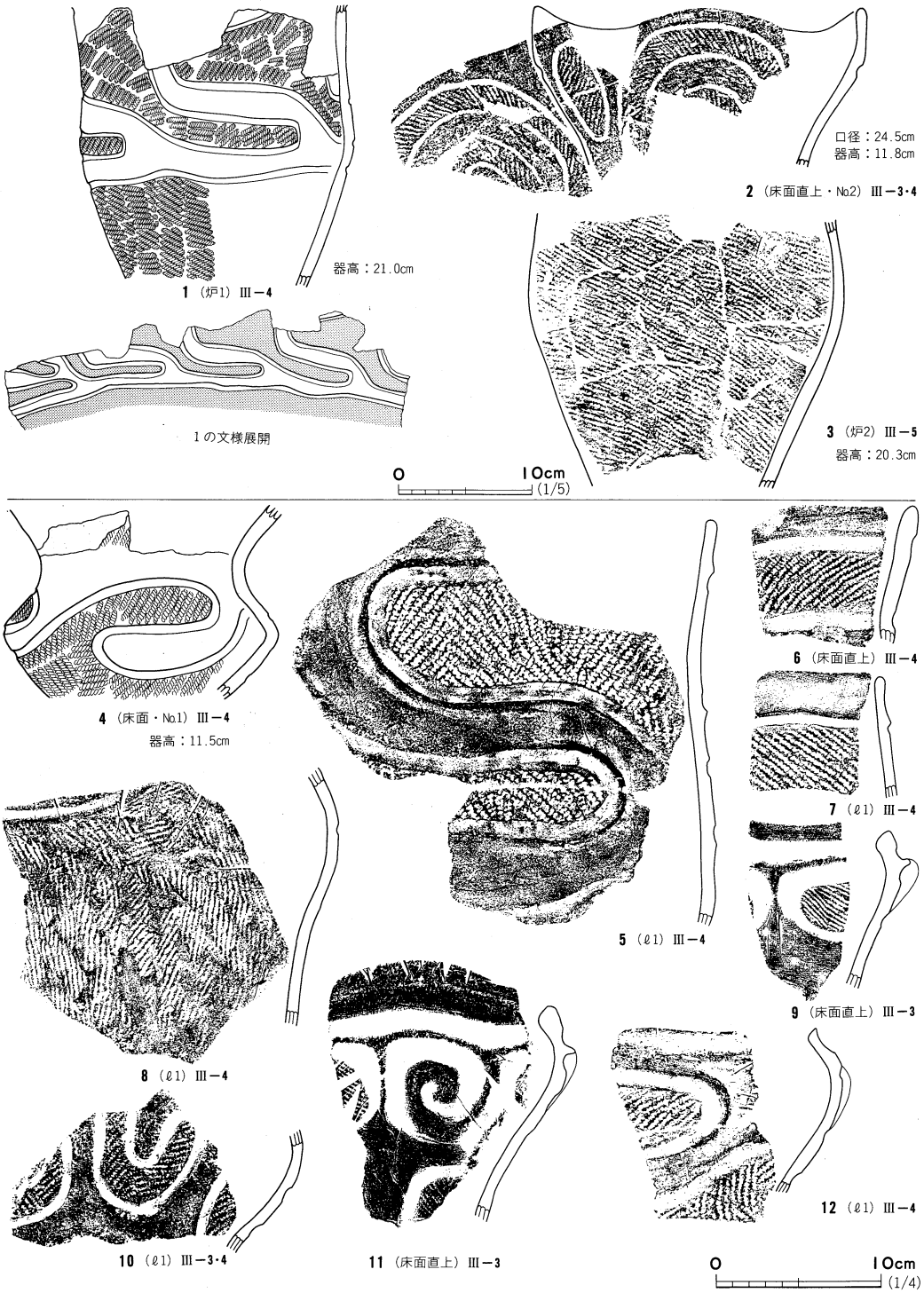


図140　64号住居跡出土遺物（1）

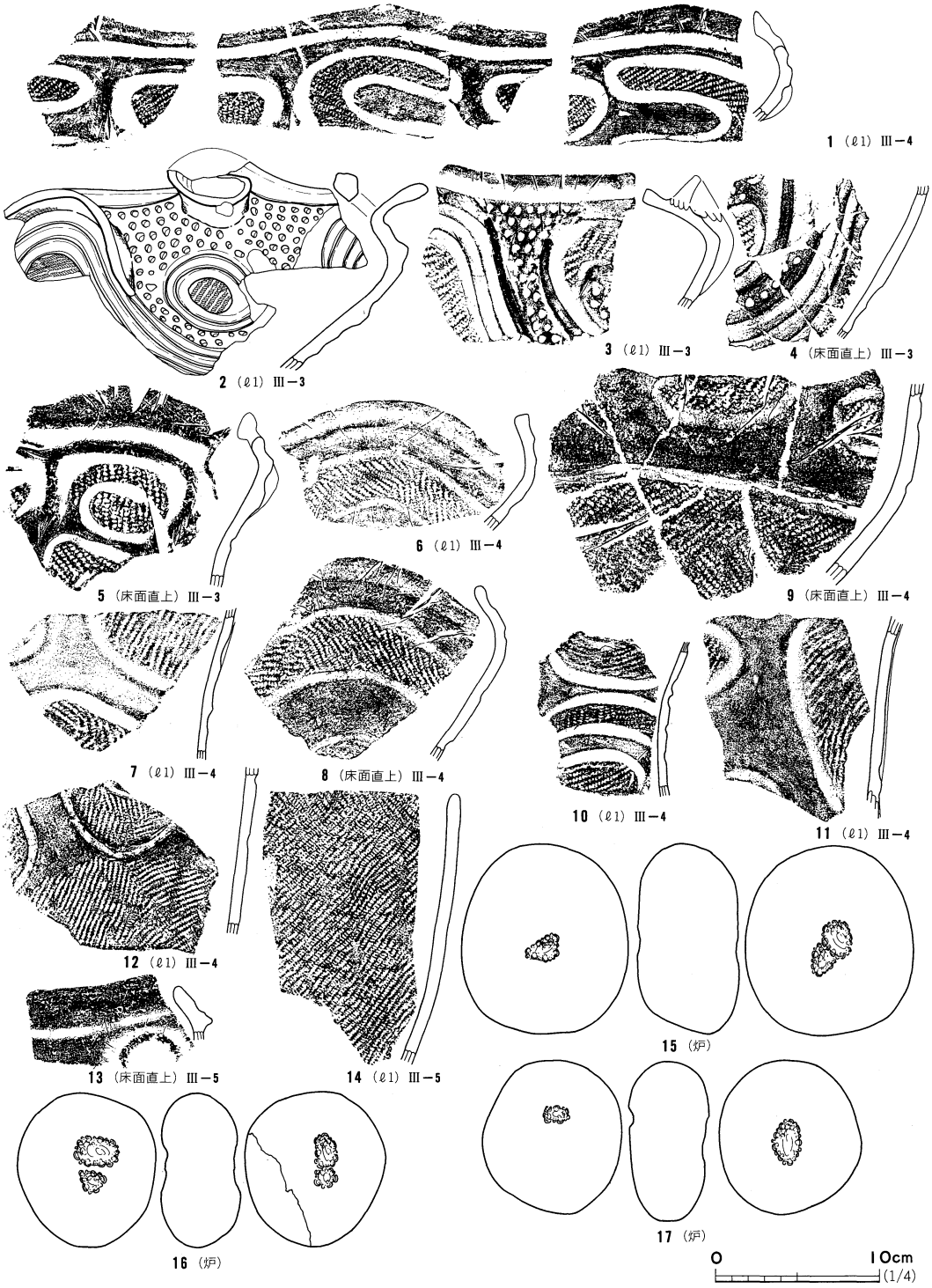


図141　64号住居跡出土遺物（2）

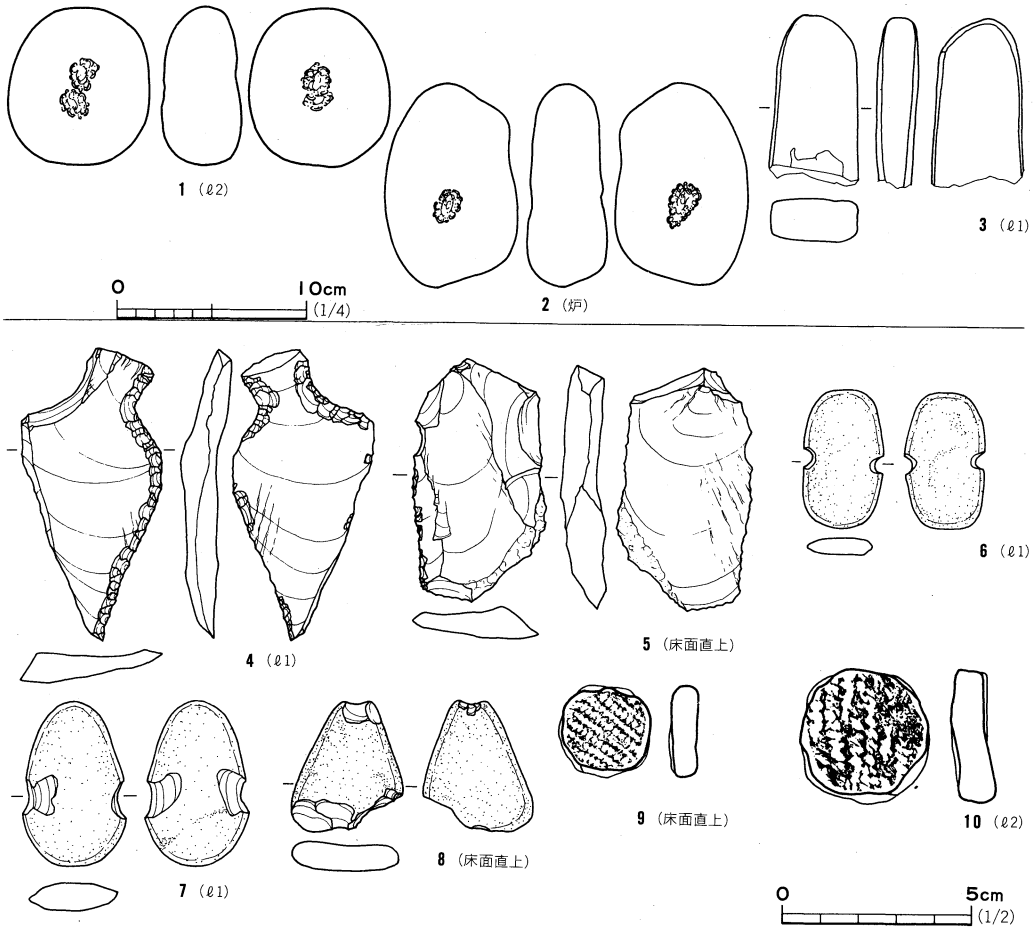


図142　64号住居跡出土遺物（3）

最大110㎝である。長軸は真北から45°西に傾き，住居跡の長軸とほぼ直交している。

埋設土器部には，2個の土器が設置され，土器から10㎝程離して拳大の石を設置して縁石としている。縁石と土器との隙間には，面を揃えて石が敷かれている。石組部は，70×120㎝の長方形状を呈している。縁石は斜位に設置されているため，石組部の断面形は鍋底状を呈している。床面から石組部底面までの深さは，最大10㎝である。前庭部も長方形状を呈し，石組部と接する側壁部には楕円形の石を設置している。床面からの深さは，最大8㎝である。

炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。炉内には主として暗褐色土が堆積し，埋設土器下部には，有機質の黒褐色土が堆積していた。炉の掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれているが，土器埋設部については当初から2個の土器を埋設するため，大きな掘形を掘っている。

石組は住居跡中央，やや北東に寄った位置から検出された。平面形は円形状を呈し，規模は現

況で直径50㎝である。これらの石は斜位に設置され，石組部の断面形は鍋底状を呈している。床面からの深さは最大8㎝である。石組内部には焼けた痕跡が認められた。これについては本住居跡に先行する住居跡の複式炉石組部とも考えられるが，この他に，複式炉施設と考えられるものが認められないことから，本住居跡に伴う単独の石組と考えている。

遺　　物（図140～142）

64号住居跡からは，2,000点の縄文土器片と20点の石器が出土している。炉埋設土器以外の土器は，住居跡堆積土中から小破片の状態で，散在して出土したものがほとんどであるが，図140－2・4は，床面や床面直上からまとまって出土している。図140－1・3は，複式炉の埋設土器である。1は沈線で区画された横Y字状の単位文が，4単位描かれるものであろう。胴部は波状の沈線で上下に区画されている。3は縄文の施された粗製土器である。

同図2・10，図141－1は，沈線や凹線で区画されたC字状・渦巻状の単位文を施している。図140－4は小型の鉢であろうか。凹線で胴部下半からせりあがる波頭状の文様を描き出している。同図5は稜凹線で区画された無文帯でS字状の単位文を，同図12，図141－6～8も同じ手法で，曲線的な単位文様を描き出している。図140－9・11，図141－5はヒレ状に発達した隆帯で口縁部に渦巻文を描き出すものである。図141－2～4は，浅鉢状の土器に注口を取り付けた注口土器である。文様は平行する4本の稜線で波状文を描き，波頂部の上端は庇状に器外面に張り出している。同図14は縄文の施された粗製土器で，口縁部直下とそれ以下で縄の回転方向を変えて，縄文を施文している。図142－9・10は土器破片を利用した土製円盤である。

図141－15～図142－2は凹部を持つ磨石，図142－3は，側縁部に使用痕の見られる礫である。同図4は縦型の石匙，同図5は不定形石器である。同図6～8は偏平な小礫の縁辺部に抉りを加えた石錘である。

ま　と　め

本住居跡は，4.7×5.7ｍの楕円形状を呈する竪穴住居跡である。住居施設は，壁溝・複式炉・石組と柱穴が検出された。柱穴については，その配置に特に規則制は見られないが，P1・P2・P4をその規模から本住居跡の主柱穴と判断した。所属時期住居跡については，出土遺物から大木10式期と考えている。　　（松　本）

65号住居跡（SI65）

遺　　構（図143，写真62）

調査区北側の南東緩斜面上，サ・シ19～21Gに位置する竪穴住居跡で，LⅢb中部で検出した。SK366・367・368・387・388・436と重複し，SK436より古く，他の土坑より新しい。平面形は隅丸長方形で，長軸は真北から65°程東に傾いている。規模は長辺5.6ｍ，短辺4.0ｍ

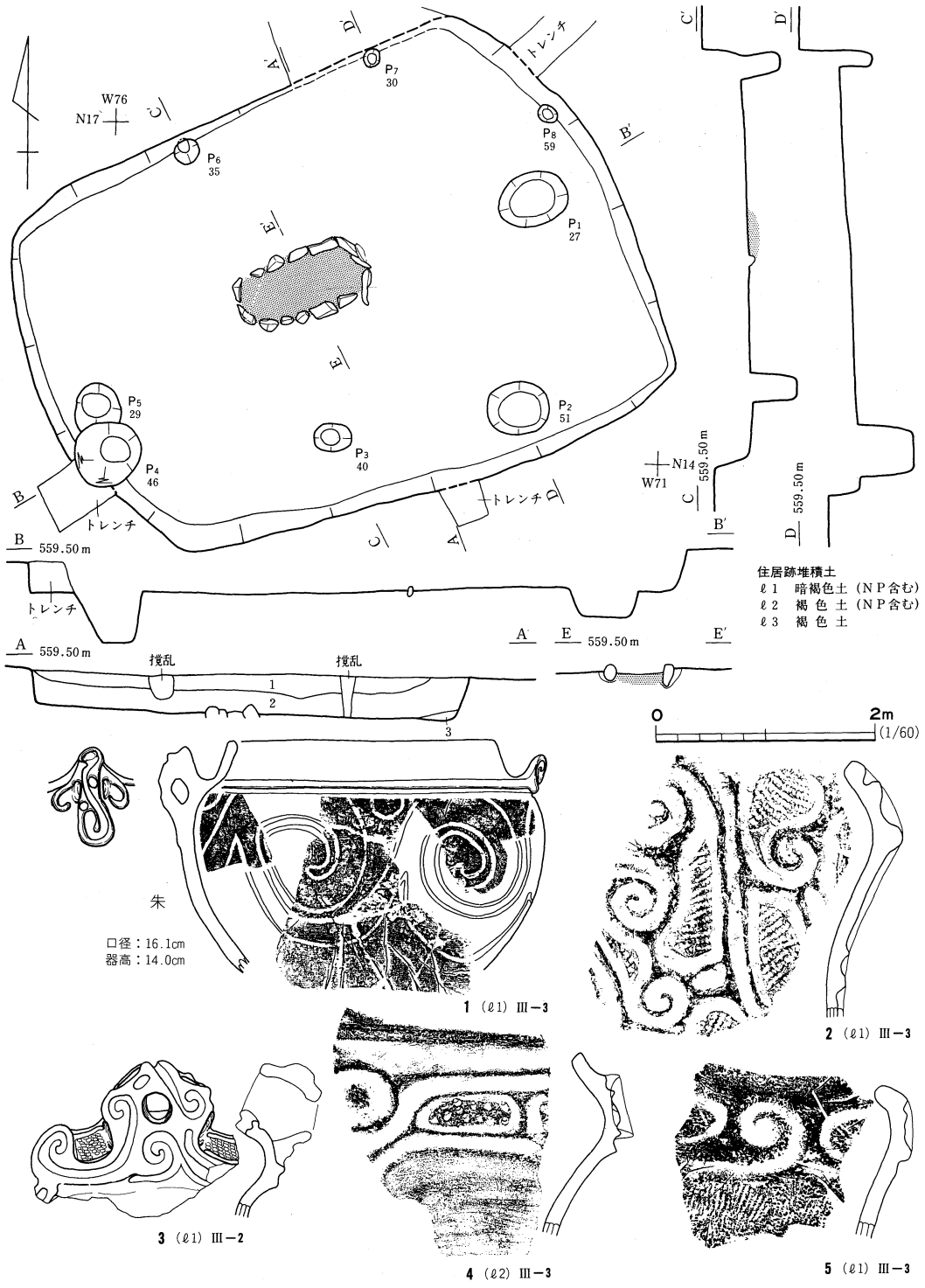


図143　65号住居跡と出土遺物（1）

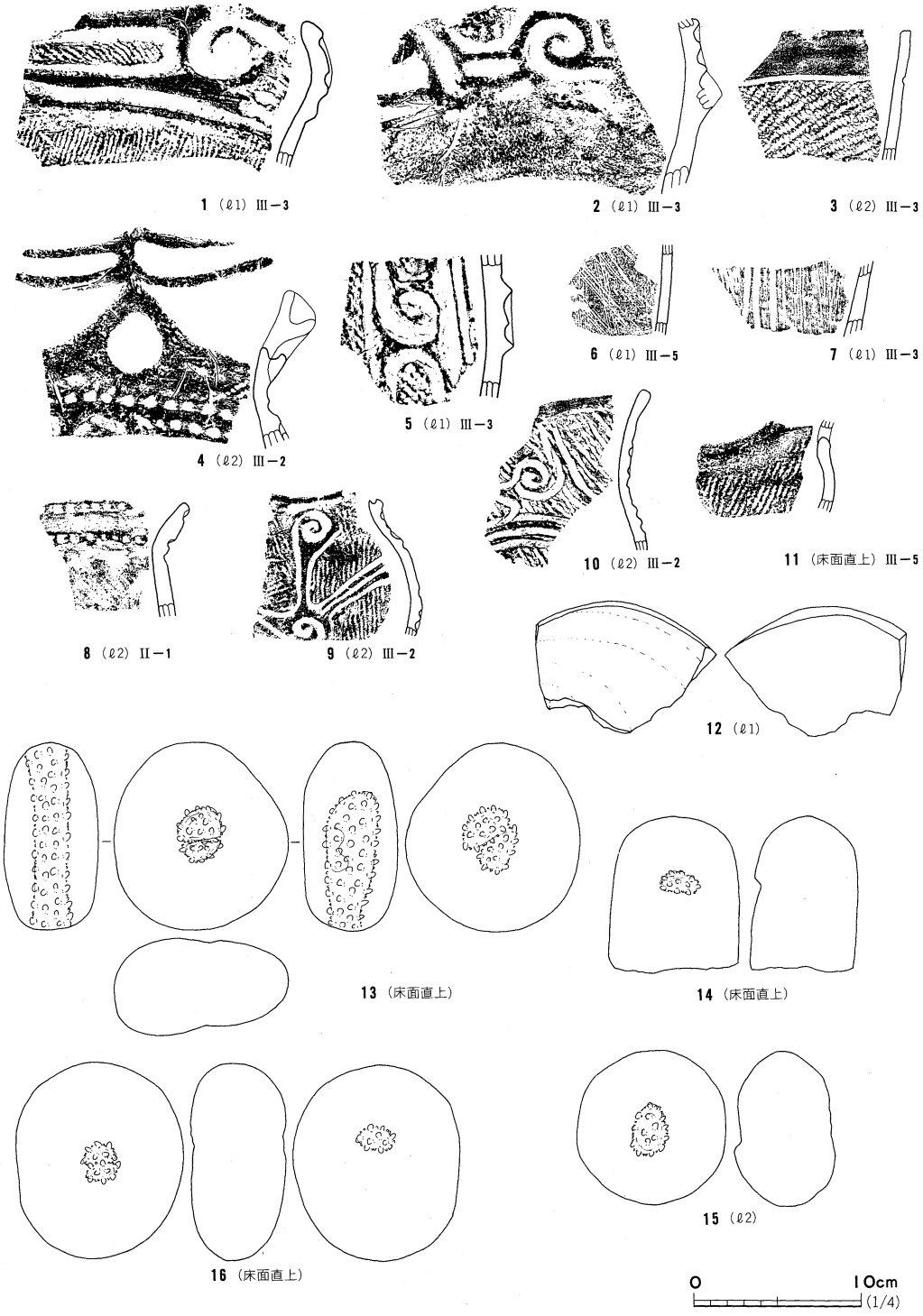


図144　65号住居跡出土遺物（2）

である。周壁は急峻に立ち上がり，壁高は32～36㎝を測る。床面は平坦で固く締まっている。堆積土は色調等から3層に区分され，レンズ状の堆積が見られることから自然堆積と判断した。

住居内からは，小穴と炉を検出した。小穴は8個検出され，規模は直径18～60㎝，深さ27～59㎝である。各小穴は壁際に位置し，長辺に2個，短辺に1個，それぞれ対応する位置に配置されていることから，本跡の主柱穴と考えている。小穴内にはすべて褐色土が堆積していた。炉は住居跡中央に位置し，長方形状を呈する石囲炉である。規模は70×130㎝で，炉の長軸は住居跡の長軸と一致する。縁石は，現状で10個の亜角礫が残っているが，石の抜取痕が4か所に見られることから，本来14個であったと推測される。これらの縁石は，個々に一回り規模の大きい掘形を持っている。炉の焼けは強く，炉上面から最大12㎝下まで焼土化が及んでいる。

遺　　物（図143・144）

本住居跡からは，土器片500点と石器9点が出土している。大部分が堆積土中から破片の状態で出土したものである。図143－1は胴部が球状を呈し，口縁部下端が鍔状に張り出す土器である。口縁部を無文とし，胴部には沈線による渦巻文が横に連続して描かれている。口縁部下端の鍔状の張り出し部には，相対する位置に渦巻文を施した突起と把手が付けられている。同図2はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部である。口縁部文様帯と胴部文様帯が区分されず，隆沈線による縦位の文様が器面一面に施されている。縦位の隆沈線の一部は渦巻文を描いている。地文の縄文は充填施文されている。

同図3は中空の把手，同図4はヒレ状を呈する隆線で描かれた楕円形の区画文内に，刺突文を充填している。図143－5，図144－1・2は，隆沈線で端部が渦巻状を呈する横楕円形状の単位文を施すものである。用いられる隆線は太く，断面は凸線状をしている。図144－5はヒレ状の隆線，同図9・10は沈線で渦巻文を描いている。同図3は口縁部に沈線で区画された無文帯を持つ。同図4・8には連続刺突文，同図6・7には条線文が施されている。同図12は石皿の欠損品，同図13～16は凹部を持つ磨石で，13の周縁部には敲打痕が見られる。

ま　と　め

本遺構は，4.0×5.6ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居施設には，住居跡中央に石囲炉と壁際の相対する位置に配置された6個の柱穴が認められた。所属時期は，出土土器から大木9式期と判断している。（福　山）

66号住居跡（ＳＩ66）

遺　　構（図145・146，写真63）

タ・チ4～6ＧのＬＶ上面で検出した竪穴住居跡である。本跡の周辺は遺構の密度が高く，ＳＩ64，ＳＫ396・424・425・463と重複し，ＳＩ64，ＳＫ396より本跡は古いが，他の遺構よりは

新しい。遺存状態は良く，周壁はほとんど検出することができた。平面形は円形状を呈し，規模は直径8.4m程である。壁の立ち上がりは急で，壁高は最大34cmである。床面は平坦で，堅く締まっている。住居跡の堆積土は8層に区分した。ℓ5～ℓ7は住居跡複式炉の石組部に堆積する土である。堆積状態は，レンズ状の堆積が認められることから，自然堆積と判断した。ℓ4は地山に起因する小礫を多量に含む黄褐色土である。これについては，人為的に住居跡内に捨てられた土と考えている。

住居施設は，壁溝と小穴・炉が検出された。壁溝はＳＩ64と重複する住居跡北側と住居跡南側で一部とぎれているが，その他の部分では良好な状態で検出された。幅は20～40cm，床面からの深さは6～20cm程である。壁溝内からは後述する小穴が数多く検出された。

小穴は30個検出された。P1～P9は長軸が100cm以上，床面からの深さは49～107cmと規模が大きい。これらの小穴は，すべて住居跡の周壁から80cm程内側に作られ，住居跡周壁と同心円を描くように配置されていることから，本住居跡の主柱穴と判断した。P1・P3・P5については，柱痕を検出することができた。P20・P26は，複式炉の前庭部を挟んでほぼ対応する位置に作られている小穴である。直径は40cm程であるが，床面からの深さはそれぞれ50・63cmとP1～P9と比べても遜色は見られない。この2個の小穴についても，本跡の主柱穴と考えている。さらに，P27・P28についてはその作られた位置から，複式炉周辺の上屋構造となんらかの関連を持つ小穴と判断している。P10～P25は壁柱穴と考えられるもので，床面からの深さは21～52cmである。

炉は4基検出された。1炉は二等辺三角形状を呈する複式炉で，前庭部の末端は住居跡北東壁際の壁溝に取り付いている。遺存状態は良いが，土器埋設部と石組部の北側は，ＳＩ64によって一部壊されている。規模は全長3.6m，幅は最大2.7mで，炉の中軸線は真北から45°程東に傾いている。

埋設土器部には，3個の土器が三角形状に埋置されている。土器の周縁には偏平な石を設置し，縁石としている。石組部は整った台形状を呈し，周壁部には大型の偏平な礫を斜位に，底面には同様な石をほぼ水平に敷いている。このため，石組部の断面形は鍋底状を呈している。床面から石組部底面までの深さは，最大40cmである。前庭部も台形状を呈し，末端は住居跡の壁溝に取り付いている。周壁の立ち上がりは緩やかで，床面からの深さは最大15cmである。

炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。炉内には暗褐色土が主として堆積し，埋設土器下部には，有機質の黒褐色土が堆積していた。炉の掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器・敷石の間に，隙間はほとんど見られない。

2～4炉は床面が焼けただけの地床炉である。いずれも，住居跡主柱穴に近接する部分から検出されている。規模は2炉が100×120cm，3炉が40×60cm，4炉は30×50cmである。炉の焼

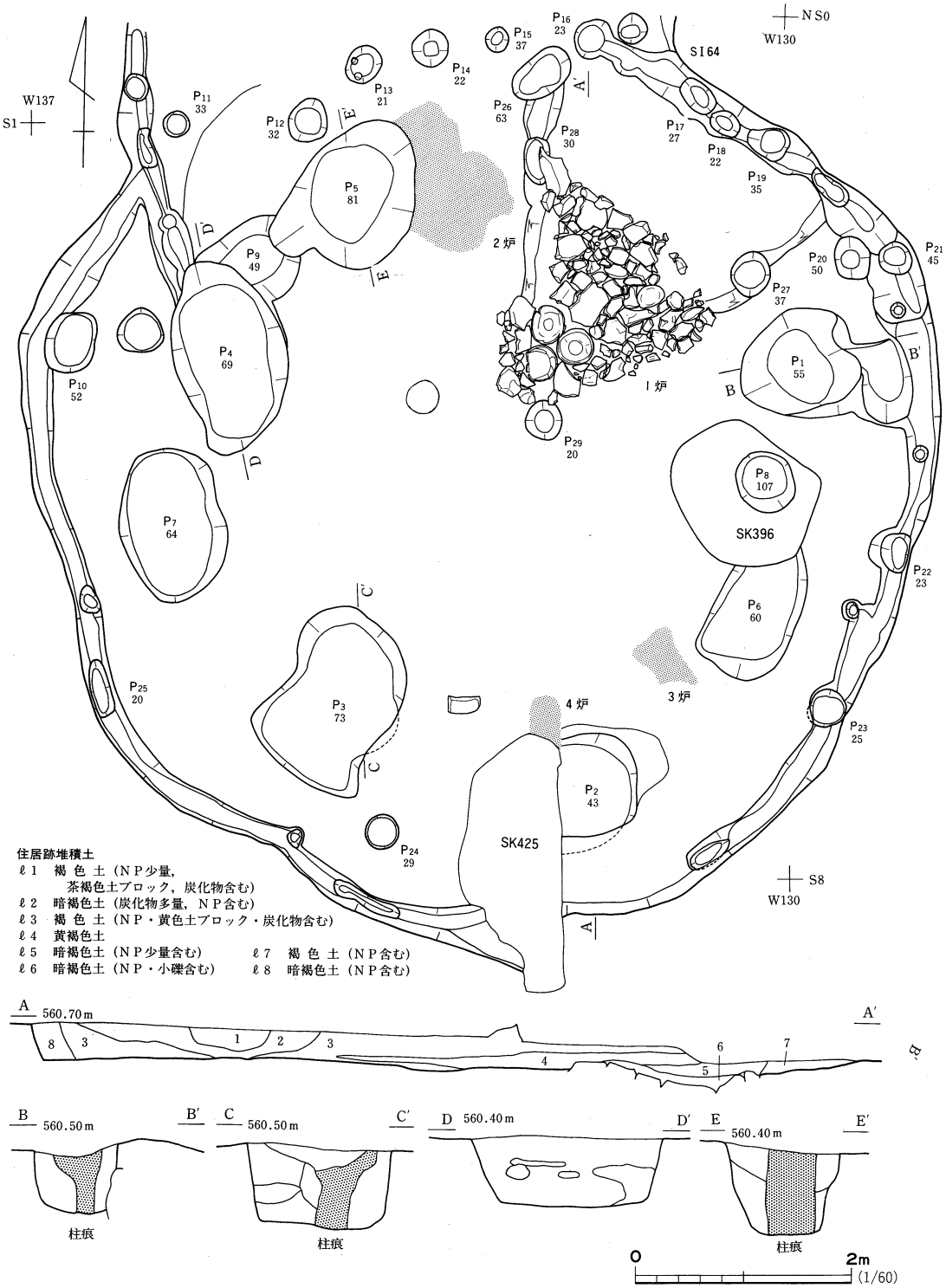

NS0
W130
SI64
W137
S1
P16 23
P15 37
P14 22
P13 21
P11 33
P12 32
P26 63
P28 30
P17 27
P18 22
P19 35
P5 81
2炉
P9 49
P20 50
P21 45
P27 37
P4 69
P1 55
1炉
P10 52
P29 20
P8 107
SK396
P7 64
P22 23
P6 60
P25 20
P3 73
4炉
3炉
P23 25
P2 43
SK425
P24 29
S8
W130
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
住居跡堆積土
ℓ1　褐色土（NP少量，茶褐色土ブロック，炭化物含む）
ℓ2　暗褐色土（炭化物多量，NP含む）
ℓ3　褐色土（NP・黄色土ブロック・炭化物含む）
ℓ4　黄褐色土
ℓ5　暗褐色土（NP少量含む）
ℓ6　暗褐色土（NP・小礫含む）
ℓ7　褐色土（NP含む）
ℓ8　暗褐色土（NP含む）
A 560.70m
B 560.50m
C 560.50m
D 560.40m
E 560.40m
柱痕
柱痕
柱痕
0
2m
(1/60)

図145　66号住居跡

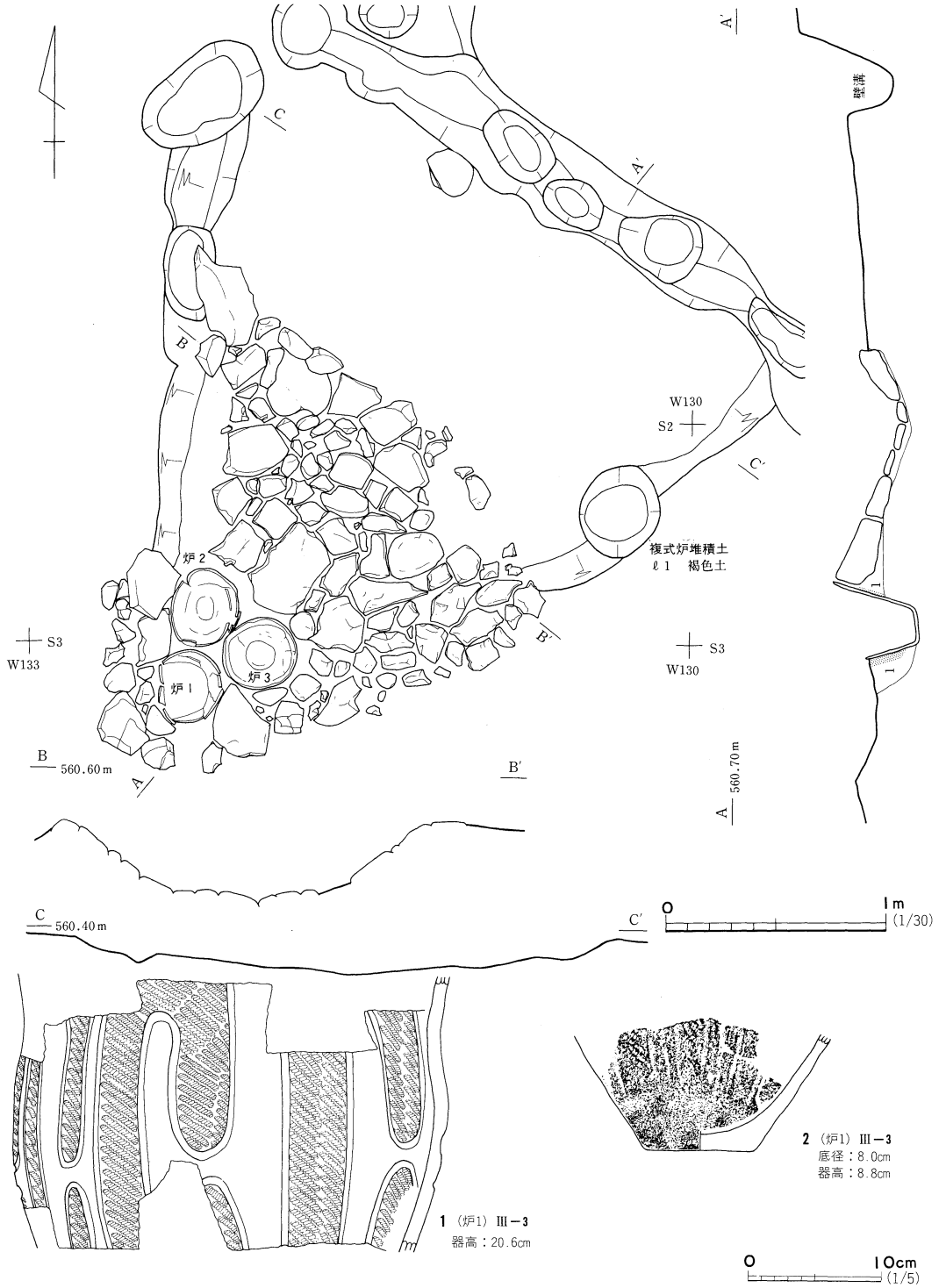


図146　66号住居跡複式炉と出土遺物（1）

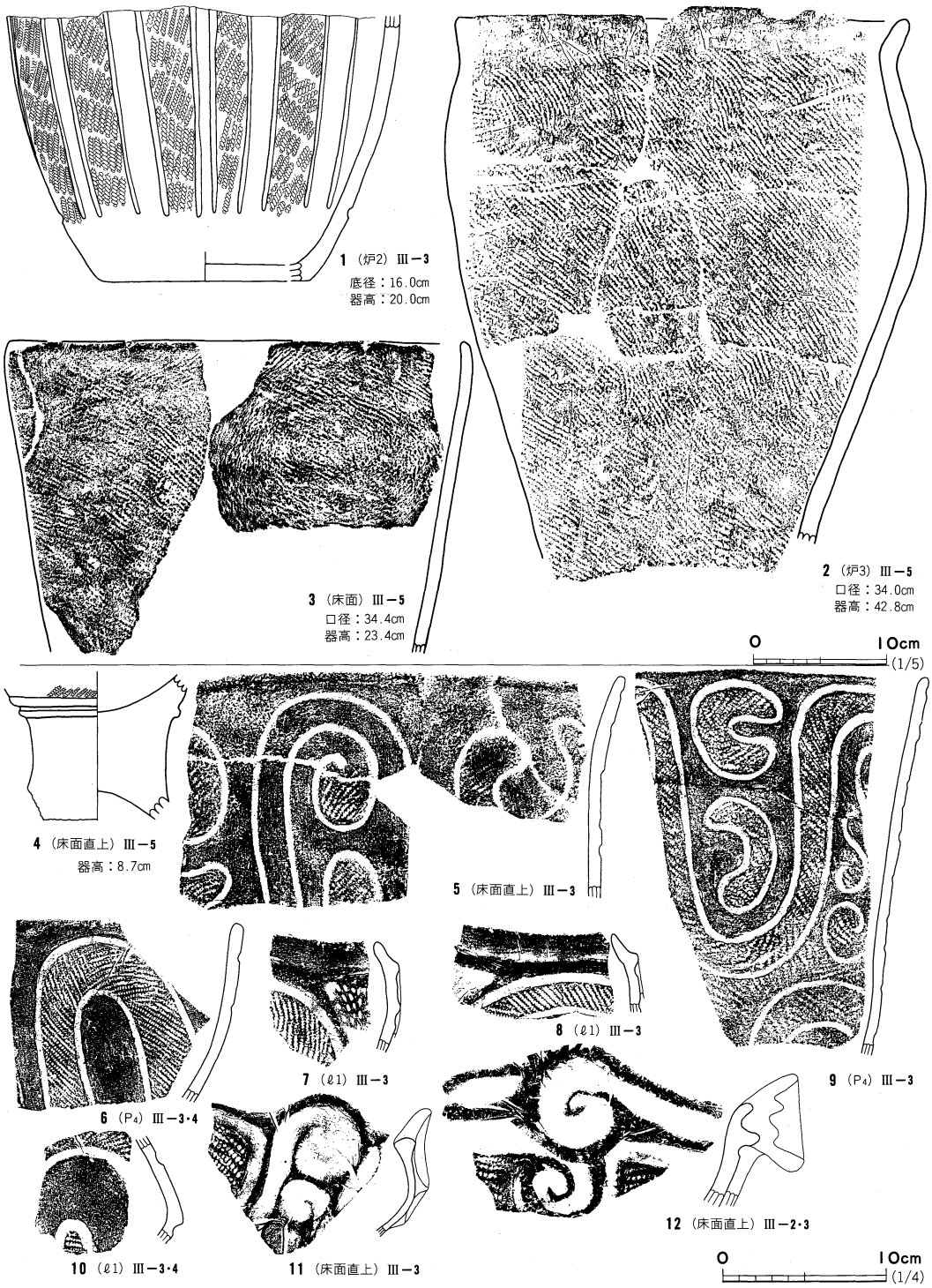


図147　66号住居跡出土遺物（2）

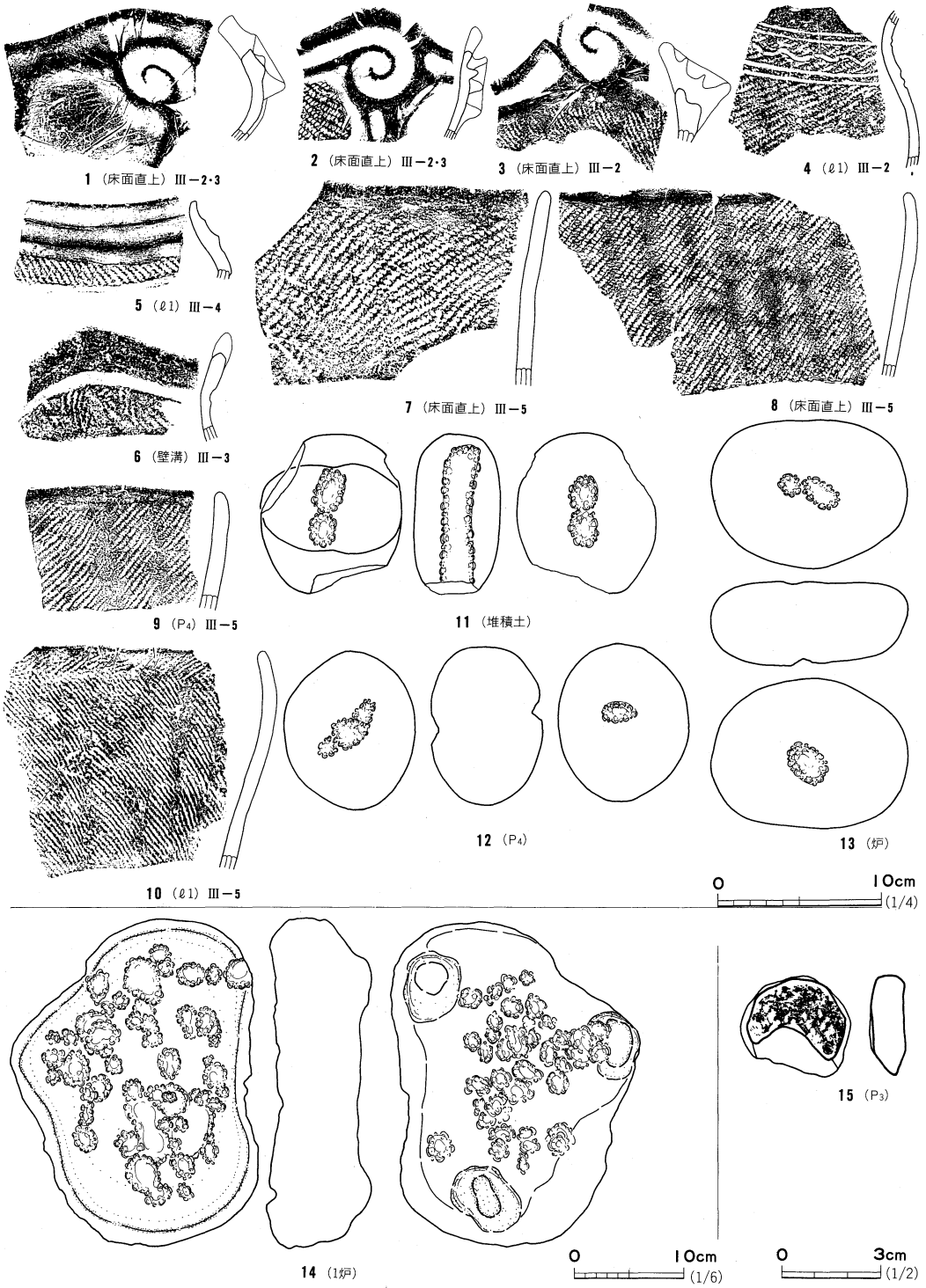


図148　66号住居跡出土遺物（3）

けは強く焼土上面から5㎝下まで，焼土化が認められた。

遺　　物（図146～148）

66号住居跡からは，1,370点の縄文土器片と6点の石器が出土している。炉埋設土器以外の縄文土器は，住居跡堆積土中から小破片の状態で，散在して出土したものが多い。図146－1・2，図147－1・2は，複式炉の埋設土器である。図146－1は，沈線で区画されたC字状の単位文が描かれている。同図2，図147－1は，沈線で区画された帯状の縄文帯を縦位に配したものである。図147－5・9は文様の隙間に小さなC字状の単位文を，同図6～8は沈線・隆沈線で逆U字状の単位文を描き出している。単位文内の縄文は，すべて充填施文されている。

同図4は，台付土器の脚部である。同図11～図148－3は，隆沈線・隆帯で口縁部に渦巻文を描き出すもので，隆線はすべてヒレ状をなしている。同図4は沈線を横位・波状に，同図5は稜線で文様図形を描くものである。図147－2・3，図148－7～10は縄文の施された粗製土器である。図148－8は間隔をあけて，同図10は口縁直下とそれ以下で原体の回転方向を違えて縄文を施している。同図11～13は凹部を持つ磨石である。同図14は脚を持つ石皿で，表裏面は凹石状を呈している。同図15は土器破片を利用した土製円盤である。

ま と め

本住居跡は，直径8.4ｍの円形状を呈する竪穴住居跡である。住居施設は壁溝・複式炉・地床炉と円形に配置された9個の柱穴が検出された。柱穴には，この他に複式炉を挟んで対応する位置に作られるものが見られ，複式炉周辺の上屋を相当意識して作っていることが窺われる。本住居跡については，出土遺物から大木9式期の所産と考えている。（松　本）

67号住居跡（ＳＩ67）

遺　　構（図149，写真64）

タ7・8Ｇに位置する竪穴住居跡で，ＳＩ59とＳＩ62の間の地点から検出された。住居跡北側をＳＩ59，南側をＳＩ62，西壁付近はＳＫ354によって壊されているため，遺存状態は極めて悪い。この他に，住居跡西側には床面からのレベル差が4㎝程の窪地が見られる。これについては，本跡よりも新しい時期の遺構と考えているが，遺存状態が悪いため遺構自体の性格については不明である。

検出面はＬＶ上面で，検出面から床面までの深さは，北壁で最大10㎝である。壁は急斜度で立ち上がり，床面は比較的平坦で硬く締まっている。平面形は遺存部から考えて，方形を基調とするものと考えられる。規模は東西4.1ｍ，南北は現況で2.5ｍである。住居跡内堆積土は，色調と混入物から2層に区分した。ℓ2とした土は，前述した住居跡西側の窪地に堆積する土であると考えられる。

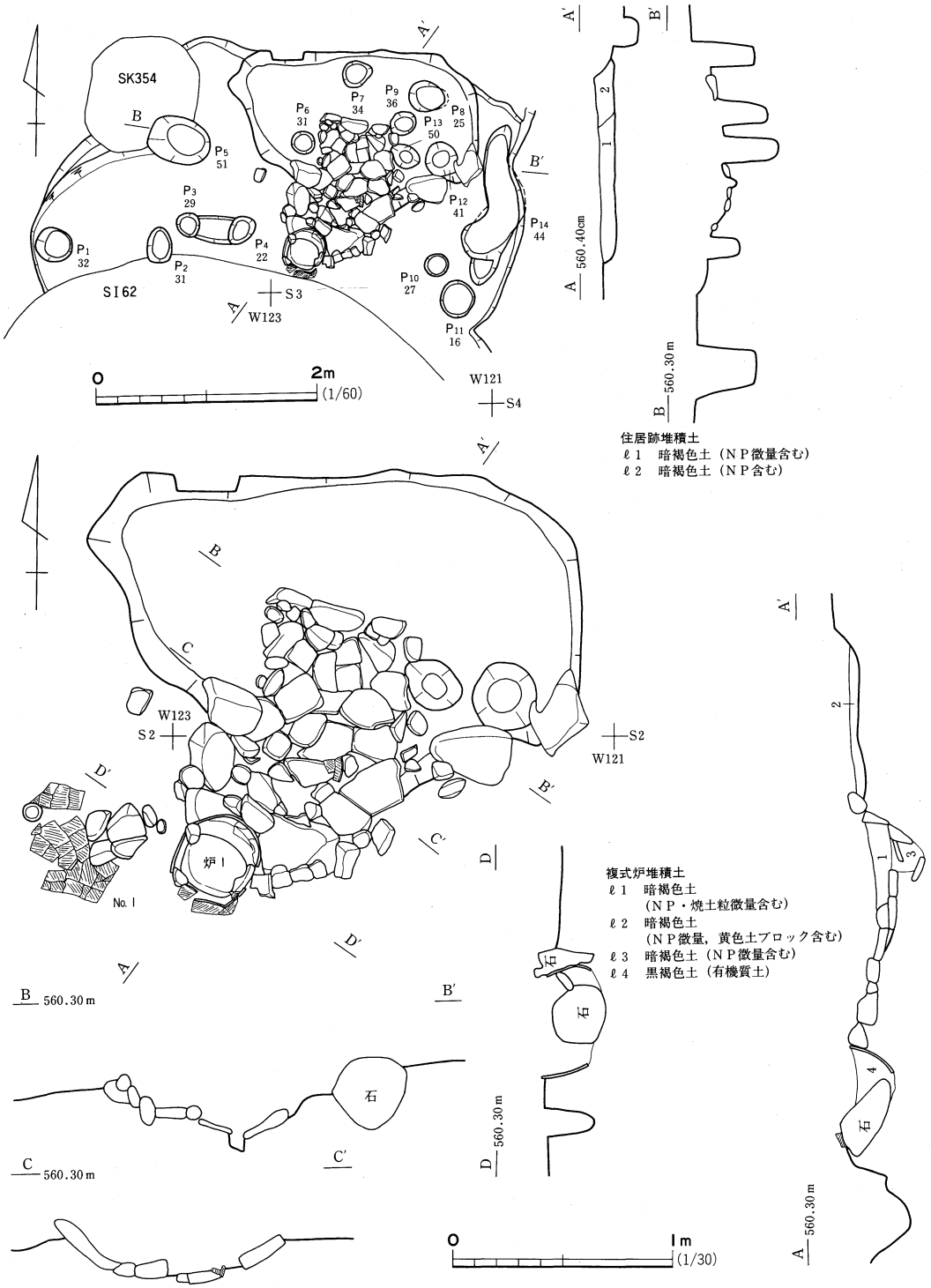


図149　67号住居跡と複式炉

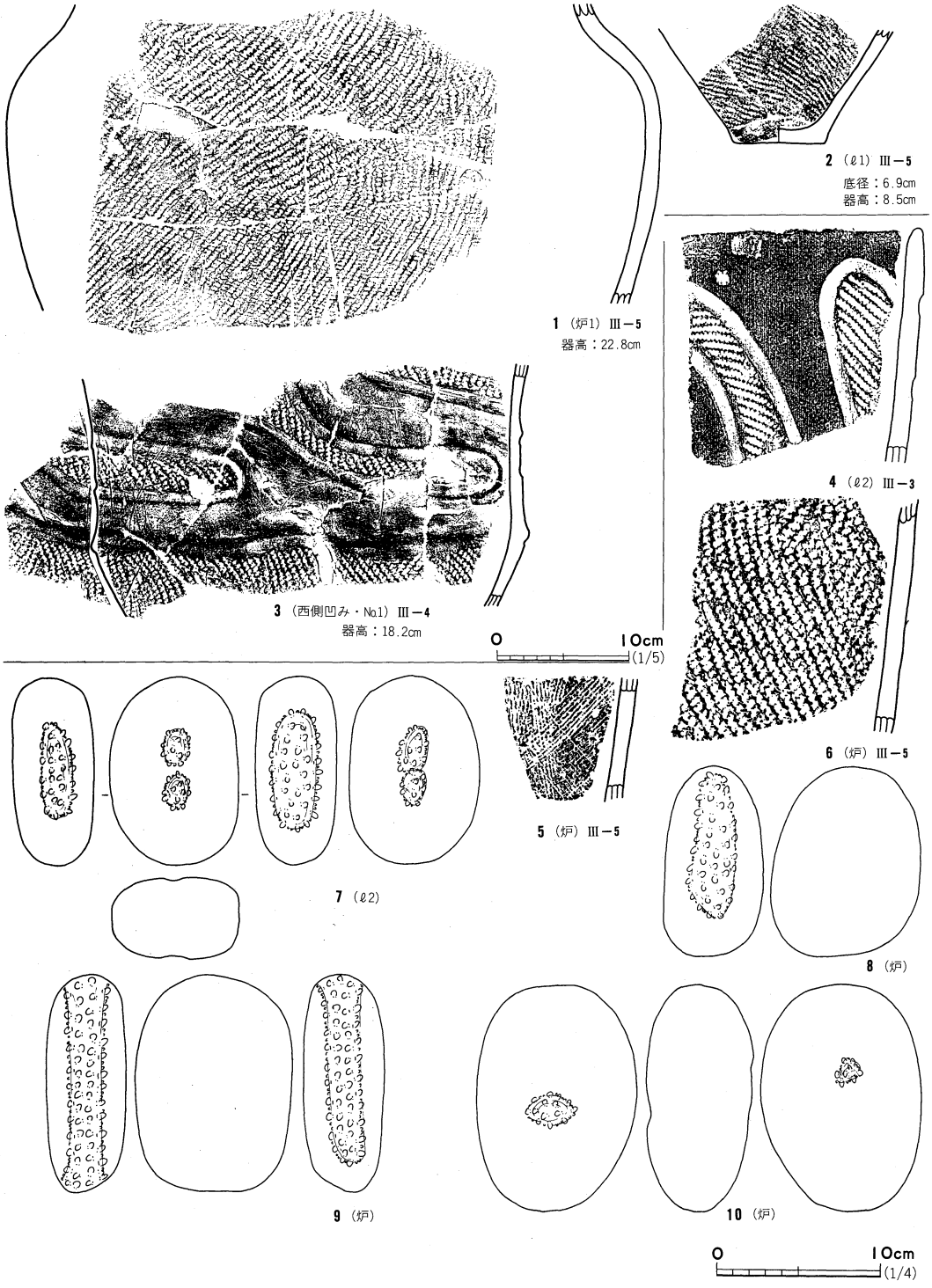


図150　67号住居跡出土遺物

住居施設は，小穴と炉が検出された。小穴は13個検出され，規模はP5が最も大きく直径56㎝，P3・P4・P6・P9・P10 は直径20㎝程度である。床面からの深さは，P5・P13が最も深く50㎝程で，P11は14㎝と最も浅い。小穴の堆積土はほとんどが暗褐色土であるが，P12・P13には黒褐色土が堆積していた。これらの小穴のうち，P5とP14は後述する複式炉を挟んで，相対する位置に作られていることから，P5とP14を本住居跡の主柱穴と考えている。これらに対応する南側の柱穴については，その想定される位置に，ＳＩ66の複式炉が作られているため，明らかにすることは出来なかった。P6・P12・P13については，炉の一部を壊している事から本跡に伴わないものと判断した。

炉は複式炉で，北壁のほぼ中央に炉の前庭部が取り付いている。炉の遺存状態は悪く，土器埋設部や石組部の一部は壊されている。規模は現況で長軸長1.9ｍ，短軸長1.5ｍである。平面形は三角形状を呈している。埋設土器部には図150－1に示した土器が，正立の状態で据えられていたが，土器の周りの縁石は遺存していない。埋設土器内には大きな礫が見られるが，これについては，本複式炉が壊された時に，埋設土器内に入り込んだものと考えられる。

石組部も遺存部の状態から，平面形は台形状を呈するものと考えられる。規模は90×120㎝程と推定され，床面から底面までの深さは25㎝である。石組部底面には，20×20㎝前後の板状の石を面を揃えて敷き，その隙間を拳大の角礫等で埋めている。周壁部には比較的大きな板状の石が斜位に設置されている。このため石組部の断面形は鍋底状に近い形態を示す。石組部の底面・側面の石には，脆くなったり，亀裂が入ったりしているものが認められ，強い火勢を受けたものと考えている。

前庭部は現況で，東西に長い不整な楕円形状を呈している。規模は長軸220㎝，短軸100㎝程で，床面からの深さは10㎝である。周壁の立上がりは緩やかである。前庭部の東壁が石組部に取り付く部分には，板状の石が斜位に設置されていた。

遺　　物（図150）

出土した遺物は，縄文土器片230点と石器5点である。図150－1は複式炉の埋設土器，同図3は西側の窪地内より出土している。同図1・2・6は縄文が施文されているもので，1は肩が張る器形を呈する粗製の深鉢と考えられる。同図3には，稜凹線で区画された横に連続する曲線的な図形が描かれている。区画文内には縄文が充填施文されている。同図5には条線文が施されている。同図7 ～10は磨石である。7～9の周縁部には敲打痕状の使用痕がみられ，7・10は表裏面に窪みが見られる。

ま と め

本住居跡は，複式炉を伴う住居跡である。遺存状態が悪く，平面形や主柱穴の配置等は不明であるが，遺存部の状態から平面形は方形を基調とし，主柱穴は三角形状に配置されていた可能性

が高い。所属時期は出土遺物と重複関係から，大木9式期に比定されよう。　　（松　崎）

68号住居跡（ＳＩ68）

遺　　構（図151，写真65）

調査区西半，テ・ト10ＧのＬＶ上面とＳＩ79堆積土上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ79と重複し，本住居跡が新しい。遺構の遺存状態は良好である。遺構内堆積土は6層に分かれる。ℓ1はパミスと炭化物を多く含み，ℓ3はパミスを含む。堆積状態から見て，ともに自然流入土の可能性が高い。これに対し，ℓ2は礫・土器・ＬＶブロックを含み，人為堆積の可能性が高いものと考えられる。ℓ4・ℓ6は，周壁の崩落・流入土と見なされる。住居跡中央の床面上に薄く堆積するℓ5は，炭化物を多く含む有機質の黒褐色シルト質土で，上屋の崩壊に由来する堆積物と考えている。

遺構は，直径4.3ｍのほぼ正円の平面形を呈する。周壁は，70°～80°の角度で急峻に立ち上がる。周壁の残存高は8～20㎝で，特に遺構の南西縁で良く遺存している。床面は平坦に作り出されているが，地形の傾斜と同様南西から北東に傾斜し，約20㎝の比高差を有する。P1・P2・P3を結ぶ範囲の南側を中心に，顕著な踏み締まりが認められるが，ＳＩ79の堆積土を床とする部分については，踏み締まりを認めることができなかった。ピットは11個確認できた。このうち，炉の長軸延長線を軸に線対称に設置されているP1・P2・P3の3個は群を抜く深さを有し，主柱穴と考えられる。他のピットも柱穴として十分な規模をもつものである。

炉は複式炉で，長軸は真北から20°程東に傾いている。土器埋設部は複式炉南端に作られている。土器埋設部と石組部の間に括れを持つ平面形をなしている。前庭部はトレンチによる観察でも検出できなかった。ただ，黒褐色土（ＳＩ79堆積土）中における検出作業であったため，前庭部がもともと存在していなかったという確証はない。炉の規模は，全長95㎝である。土器埋設部が長さ35㎝で幅45㎝，石組部が長さ60㎝で幅75㎝を測る。埋設土器とその周囲，及び石組部に用いられている石には，酸化による赤変が認められる。また，ℓ2には，黒褐色をなすの有機質土が堆積している。

遺　　物（図151～153）

本遺構内から出土した遺物は，縄文土器片980点，石器2点，土製品1点である。出土土器は，Ⅲ群4類・5類が主体を含め，少量のⅢ群2類が含まれる。遺構に確実に伴う遺物は，図151－1の炉埋設土器のみである。

図151－1は，5単位の波頭状文を胴部上半に施文する深鉢形土器である。文様描線は側縁に緩い稜を持つ凹線で（稜凹線），文様区画内には単節ＲＬ縄文が充填施文されている。

図152－1・8　9・12～14は稜凹線，同図2・7・10・11・15は沈線で文様を描く土器である。

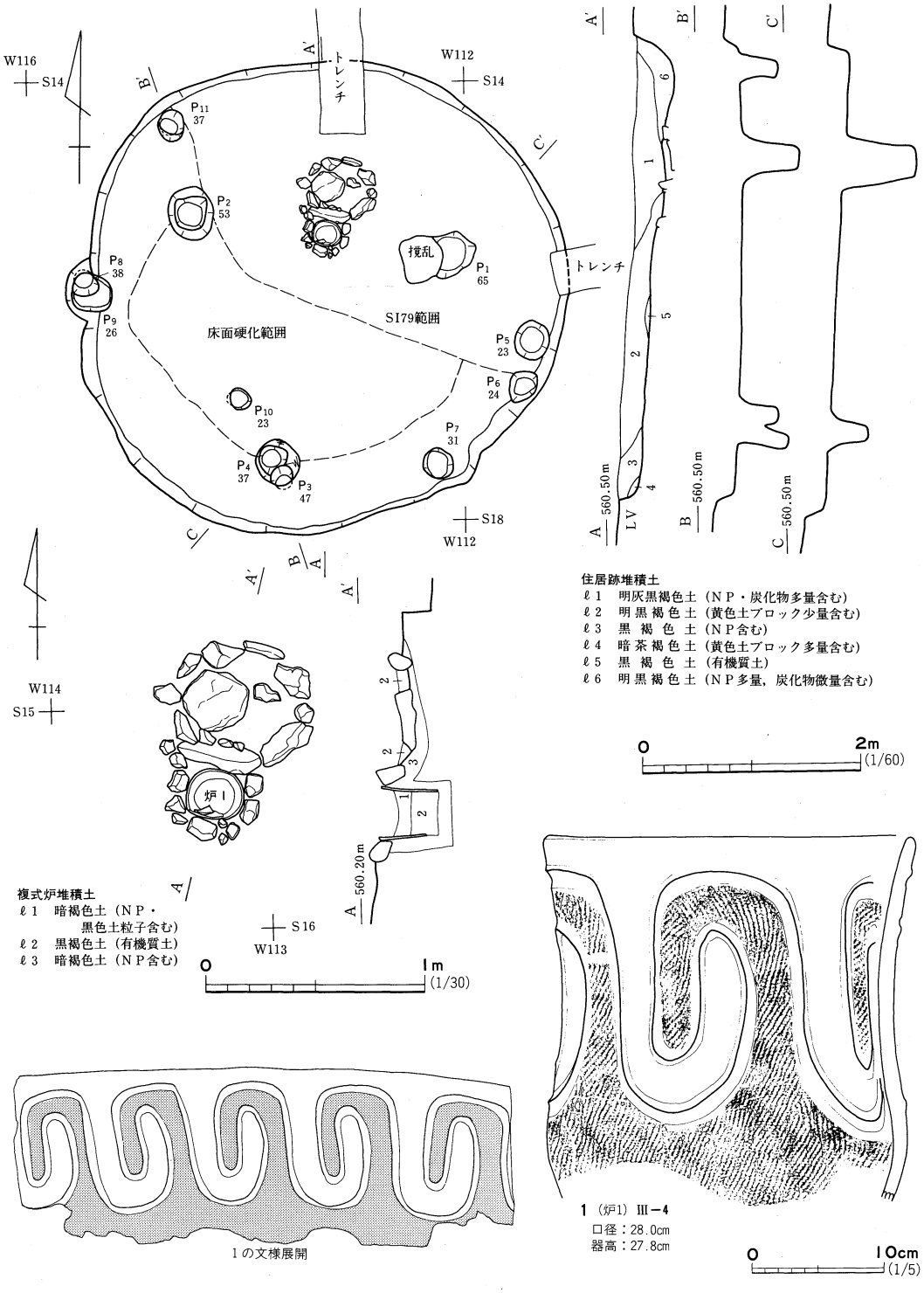


図151　68号住居跡と複式炉・出土遺物（1）

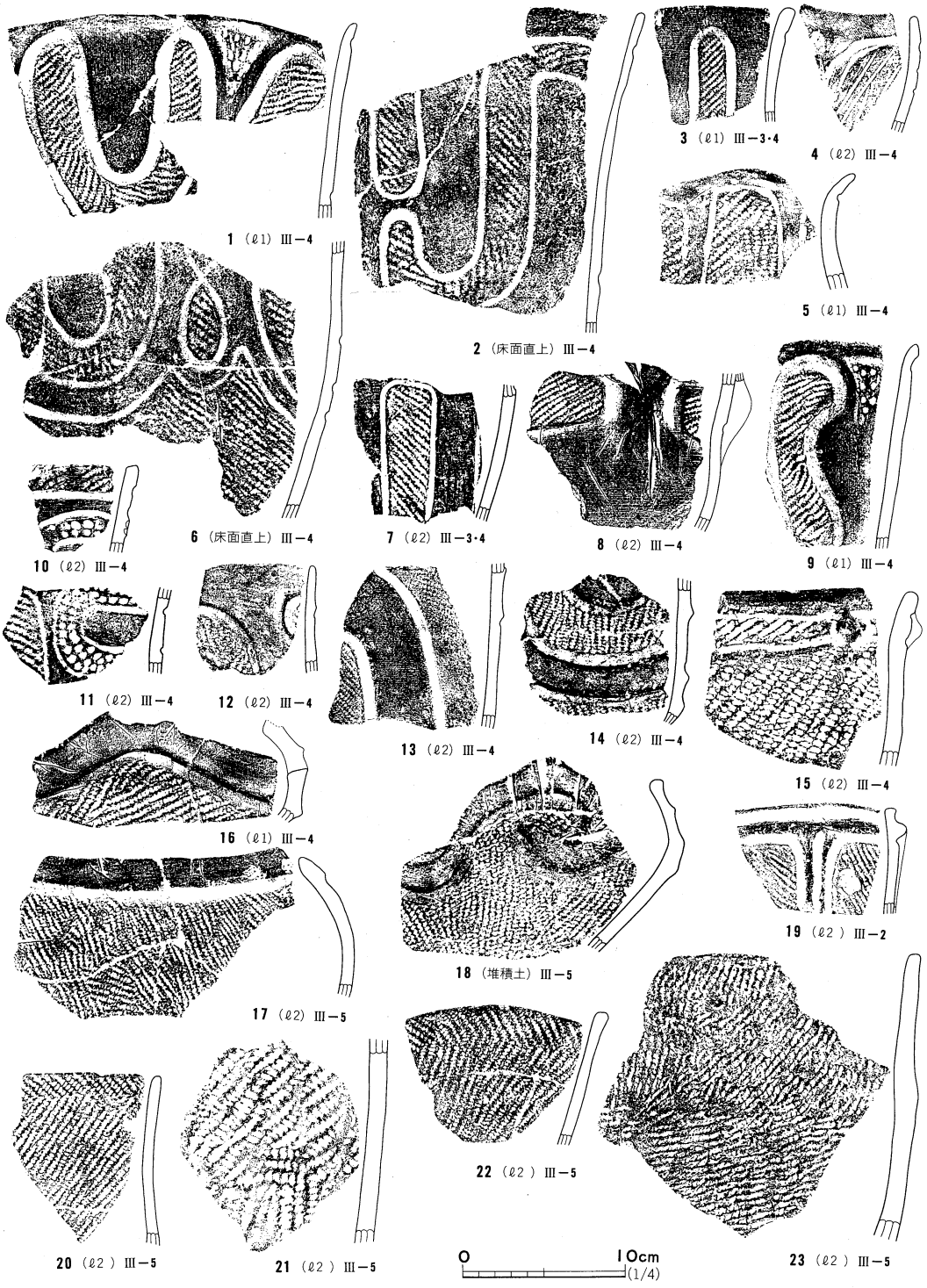


図152　68号住居跡出土遺物（2）

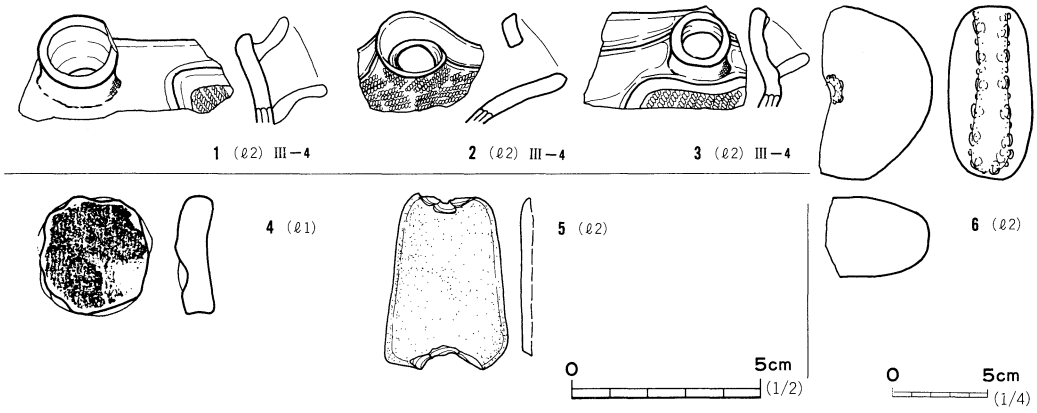


図153　68号住居跡出土遺物（3）

4の区画内には沈線による斜走条線文が描かれ，10・11には刺突列点文が充填されている。15は，短く外反する口縁部に狭い文様帯を持つ異質な土器である。同図16・18は，口縁部が強く内湾する鉢または浅鉢であろう。無文部が極めて入念に磨かれている。同図17・20～23は，半精製・粗製の深鉢形土器である。20・22では，口縁部で横方向，胴部で縦方向に縄文を回転施文している。図153－1～3は，注口付土器である。2では，口縁を縁取る隆線が孔の周囲を巻き込むように貼付されている。

図153－4は，Ⅲ群4類土器の無文部の破片を素材とした円盤状土製品である。同図5は，自然礫の側縁に加工を施した石錘である。節理面において剝離している。同図6は，側面に敲き石としても併用された使用痕が認められる磨石である。

ま　と　め

本遺構は，3本の主柱と複式炉を有する円形の竪穴住居跡である。遺構の年代は，炉埋設土器から大木10式の古段階期と考えている。　（本　間）

69号住居跡（ＳＩ69）

遺　　構（図154，写真66）

調査区西半，ッ10ＧのＬＶ上面および，ＳＩ79・105の堆積土上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＩ79・105と重複し，本住居跡が新しい。遺構内堆積土は2層からなり，堆積状態・混入物などの状況から，自然堆積によるものと判断している。

遺構は，直径4.8ｍのほぼ正円の平面形を呈する。周壁は，約80°の角度で急峻に立ち上がる。周壁残存高は11～22㎝を測る。遺構西半部では，周壁に沿って幅約15㎝の壁溝が認められた。床面から壁溝底面までの深さは，6～14㎝を測る。遺構東半部は，ＳＩ79・105との重複部分に当たるため，壁溝の存在の有無を肉眼では判別しがたく，トレンチによる断面観察によってもそ

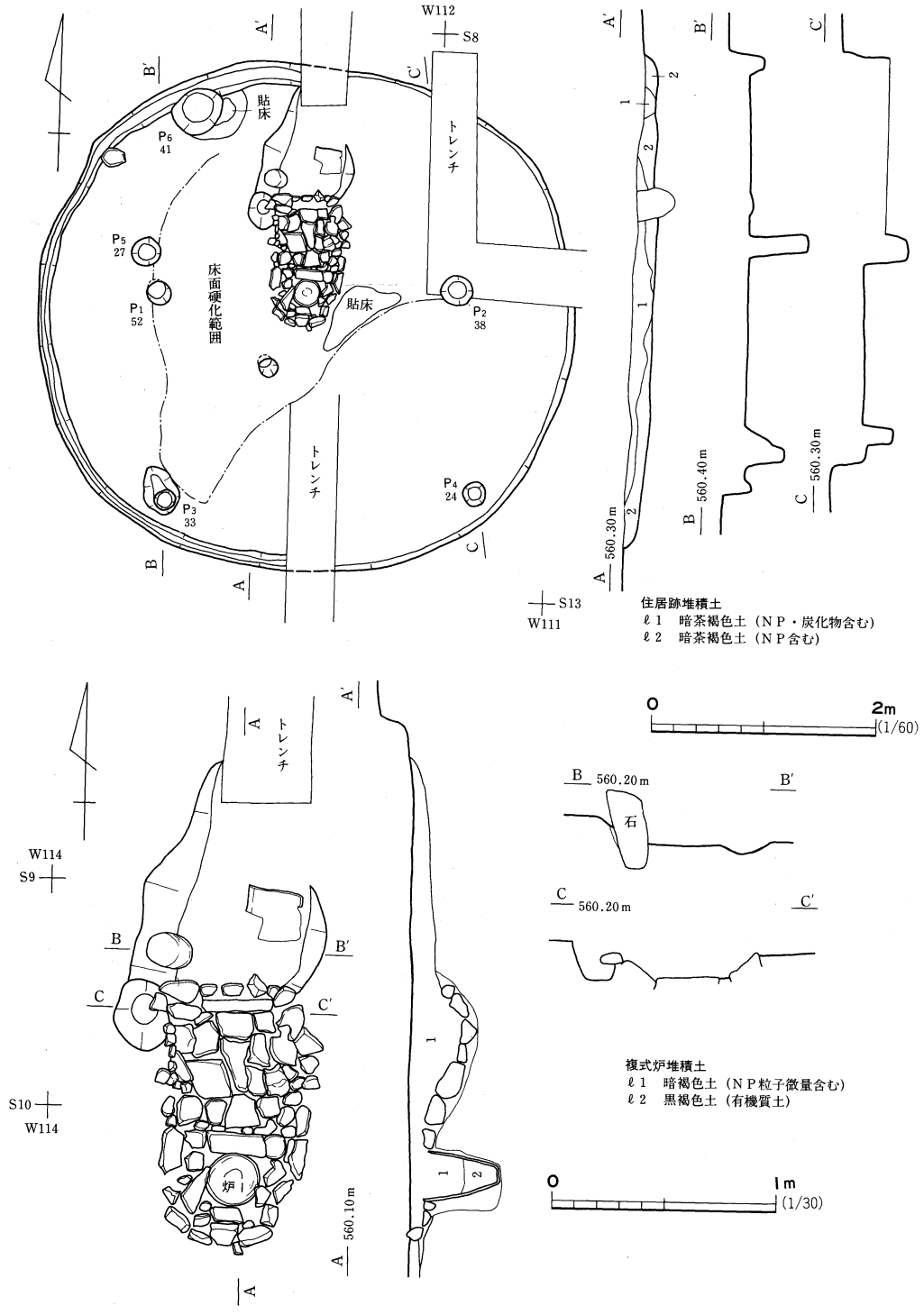


図154　69号住居跡と複式炉

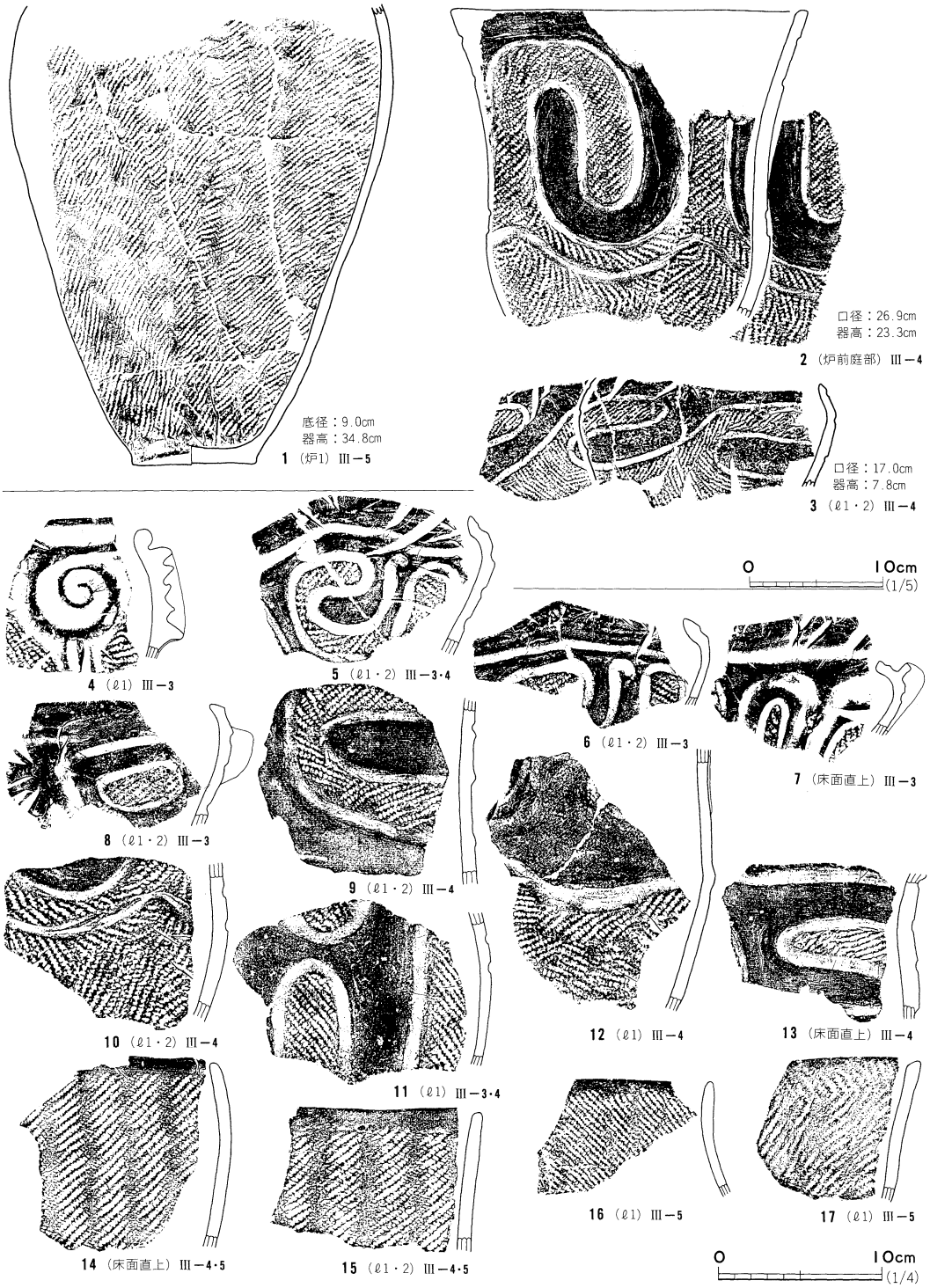


図155　69号住居跡出土遺物（1）

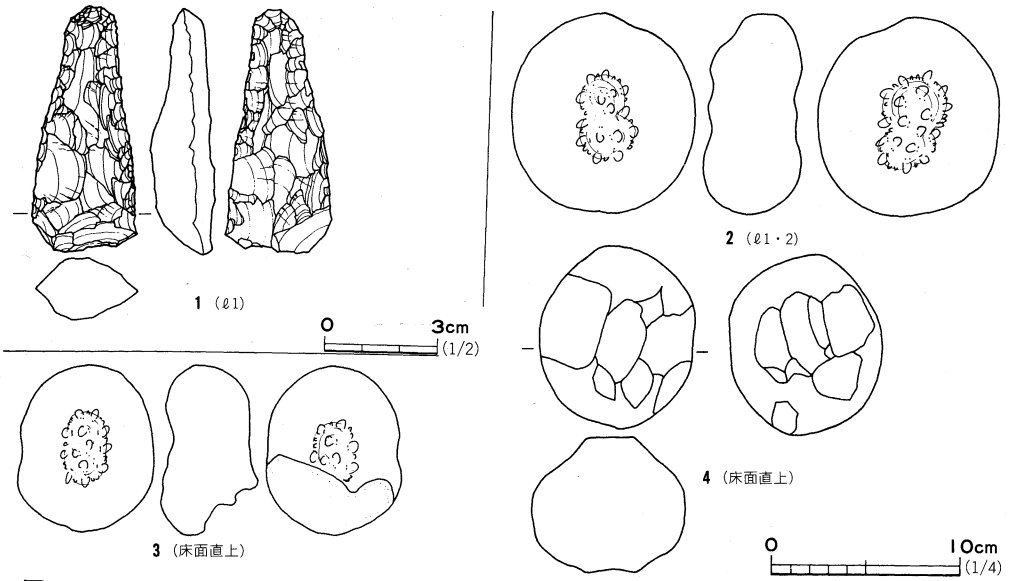


図156　69号住居跡出土遺物（2）

の存在を確認することができなかった。床面は，極めて平坦に作り出されている。遺構中央部の西半に顕著な踏み締まりが認められたが，他の遺構と重複する部分では踏み締まりを認めることができなかった。部分的に貼床が敷設されており，図中にその位置を示した。ピットは，総計6個確認できた。このうち，炉の長軸延長線を軸に線対称に配置されているP1・P2・P3・P4の4個は主柱穴と考えられる。また，P6も主柱穴の可能性があるが，炉を挟んだ東側で対応する柱穴を確認することはできなかった。

炉は，長軸方位が真北を示す複式炉で，土器埋設部は複式炉南端に作られている。土器埋設部と石組部の周囲には石列を作て，平面形をU字状に整えた丁寧なつくりのものである。規模は，全長215㎝で，土器埋設部は長さ50㎝で幅64㎝，石組部は長さ65㎝で幅70㎝，前庭部は長さ100㎝で幅81㎝を測る。埋設土器とその周囲，および石組部では，火の使用による酸化の痕跡が顕著に認められる。また，埋設土器内に堆積するℓ2は，有機質に富む黒褐色シルトである。前庭部底面の西側には石がやや斜めに埋設されている。前庭部底面から石の頂部までの高さは24㎝である。

遺　　物（図155・156）

本遺構内から出土した遺物は，縄文土器片710点，石器3点である。出土土器はⅢ群4類が主体を占める。遺構に確実に伴う土器は，図155－1の炉埋設土器であるが，炉前庭部底面から出土した同図2も住居跡廃絶時の年代を示すものと考えられよう。

図155－1は，単節ＲＬ縄文を縦方向に回転施文した深鉢形土器である。同図2は，胴部上半

に凹線による波頭状文を持ち，胴部中央には波状の凹線を横位に巡らして文様帯を区画している深鉢である。

同図4は，隆凹線による渦巻文を口縁部直下に持つもので，Ⅲ群3類に属するものである。同図5～8は口縁が内湾し，幅の狭い口縁部無文帯を有するものである。同図9～13は胴部破片で，いずれも凹線ないし稜凹線によって文様表出を行っている。同図14～17は粗製深鉢形土器である。いずれも縄文を縦方向に回転施文する特徴があるが，17の口縁部に限っては，横方向に回転させている。14・15の施文原体の末端には結節が認められる。

図156－1は，両面加工が施された厚手の箆状石器である。裏面の整形を先に行い，その剝離面を打面として背面の整形を行っている傾向がある。基部には，両面から入念な調整剝離が加えられている。刃部と思われる下縁部は欠損している。同図2～4は磨石で，2・3は凹部を持っている。3・4は床面直上から出土したものであり，本遺構にともなう可能性がある。

ま と め

本遺構は，4本の主柱と整った複式炉を有する円形の竪穴住居跡である。内部施設として注目されるものとして，複式炉前庭部に埋置された立石が挙げられる。本遺構の年代は，炉埋設土器および炉前庭部出土土器から判断して，大木10式の古段階期と考えている。　　（本　間）

70号住居跡（ＳＩ70）

遺　　構（図157，写真67・68）

調査区北西部，テ・ト4～6ＧのＬⅣ上面で検出された竪穴住居跡である。床面の標高は560.7～561.0ｍで，これは調査区北西部の遺構密集地区における住居跡としては，ＳＩ73・83とならび最も標高が高い部分に占地している。ＳＩ73，ＳＫ652，ＳＭ20と重複し，ＳＫ652より新しく，他の遺構より古い。住居跡南西部の一部を倒木痕により破壊されているが，遺存状態は良好である。

平面形は隅丸方形状を呈し，規模は北東－南西が6.7ｍ，北西－南東は7.0ｍである。主軸は，真北から30°程東に傾いている。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様に，南から北に緩やかに傾斜し，その比高差は最大25㎝である。周壁は南側及び西側で20～30㎝，北側は10㎝程である。東壁の立ち上がりはほとんど認められなかった。遺構内堆積土は，3層に区分した。レンズ状の堆積状態が観察されることから，自然堆積と判断される。

住居施設は，壁溝と小穴・複式炉が検出された。壁溝は幅20～30㎝，床面からの深さは10～25㎝で，南西コーナーを除き周壁際を全周している。小穴は20個検出した。小穴内堆積土の大部分は暗褐色のシルト質土からなるが，下部には褐色土を含むものもある。Ｐ1～Ｐ6は直径45～93㎝，床面からの深さが50㎝以上の小穴である。これらの小穴は住居跡の周壁とほぼ平行す

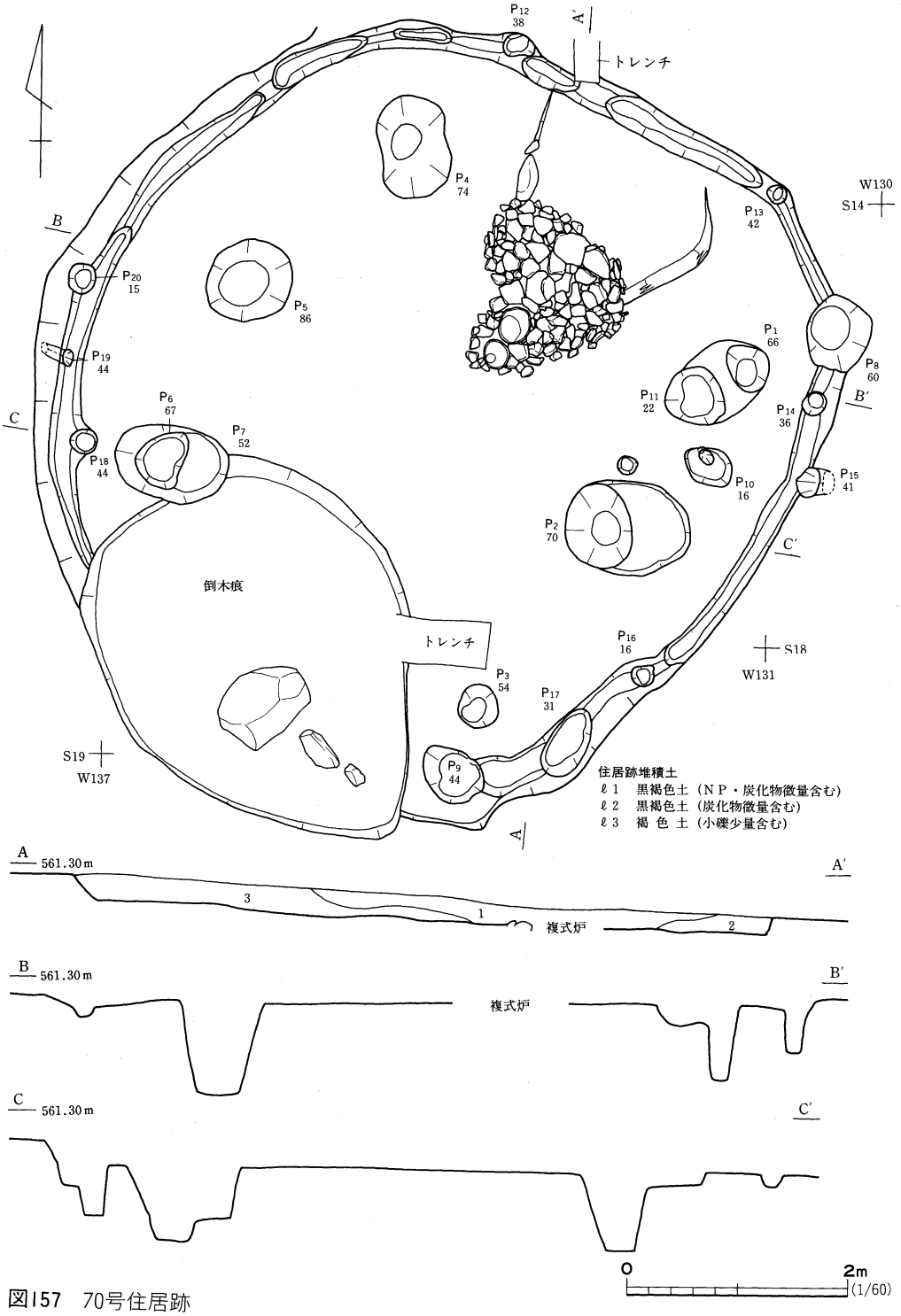

P12
38
A'
トレンチ
P4
74
W130
S14
B
P13
42
P20
15
P5
86
P1
66
P19
44
P8
60
B'
P11
22
P6
67
P14
36
C
P7
52
P18
44
P10
16
P15
41
P2
70
C'
倒木痕
トレンチ
P16
16
S18
W131
P3
54
P17
31
S19
W137
P9
44
A
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（ＮＰ・炭化物微量含む）
ℓ2　黒褐色土（炭化物微量含む）
ℓ3　褐 色 土（小礫少量含む）
A
561.30m
A'
3
1
複式炉
2
B
561.30m
B'
複式炉
C
561.30m
C'
0
2m
(1/60)

図157　70号住居跡

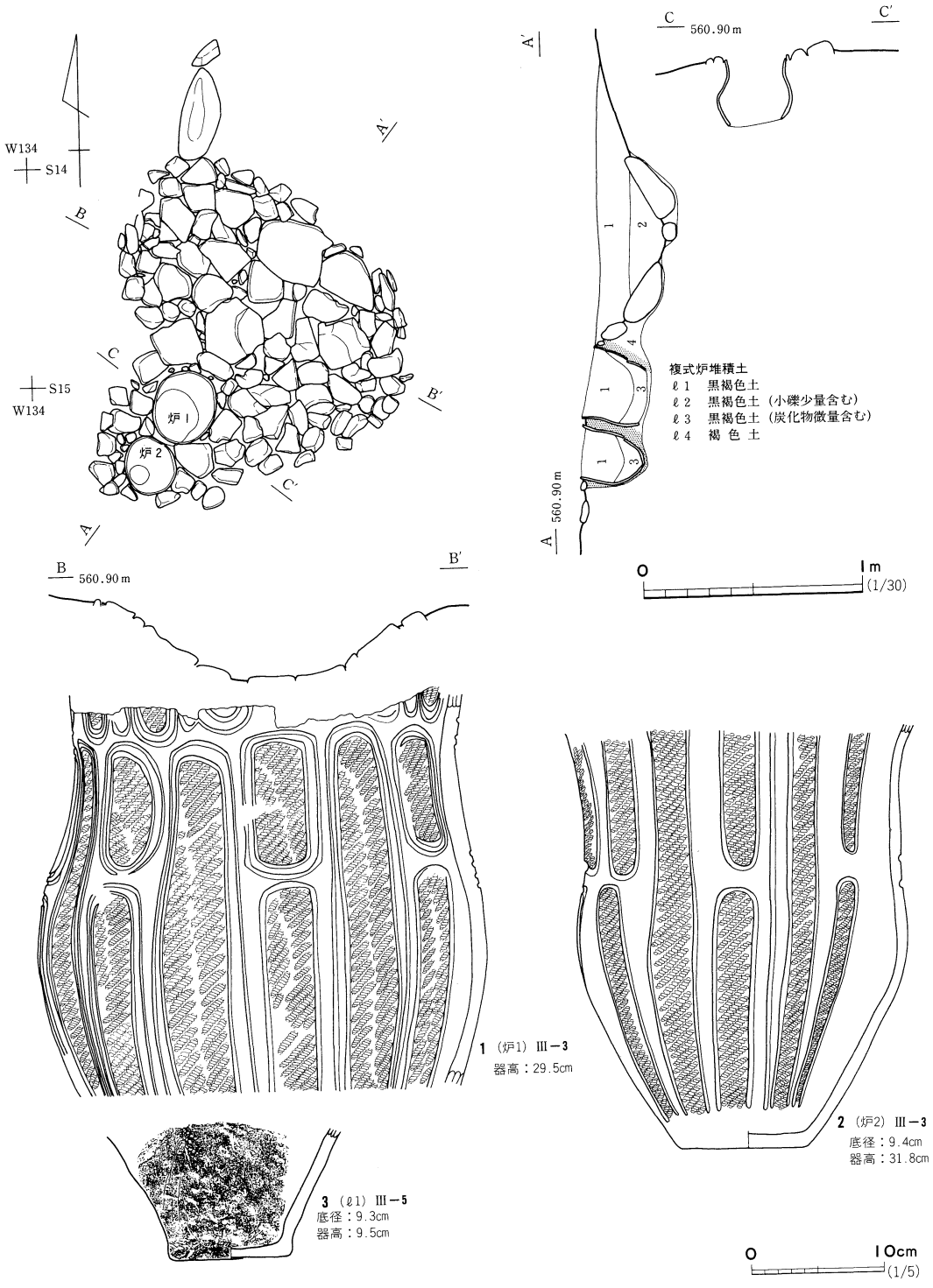
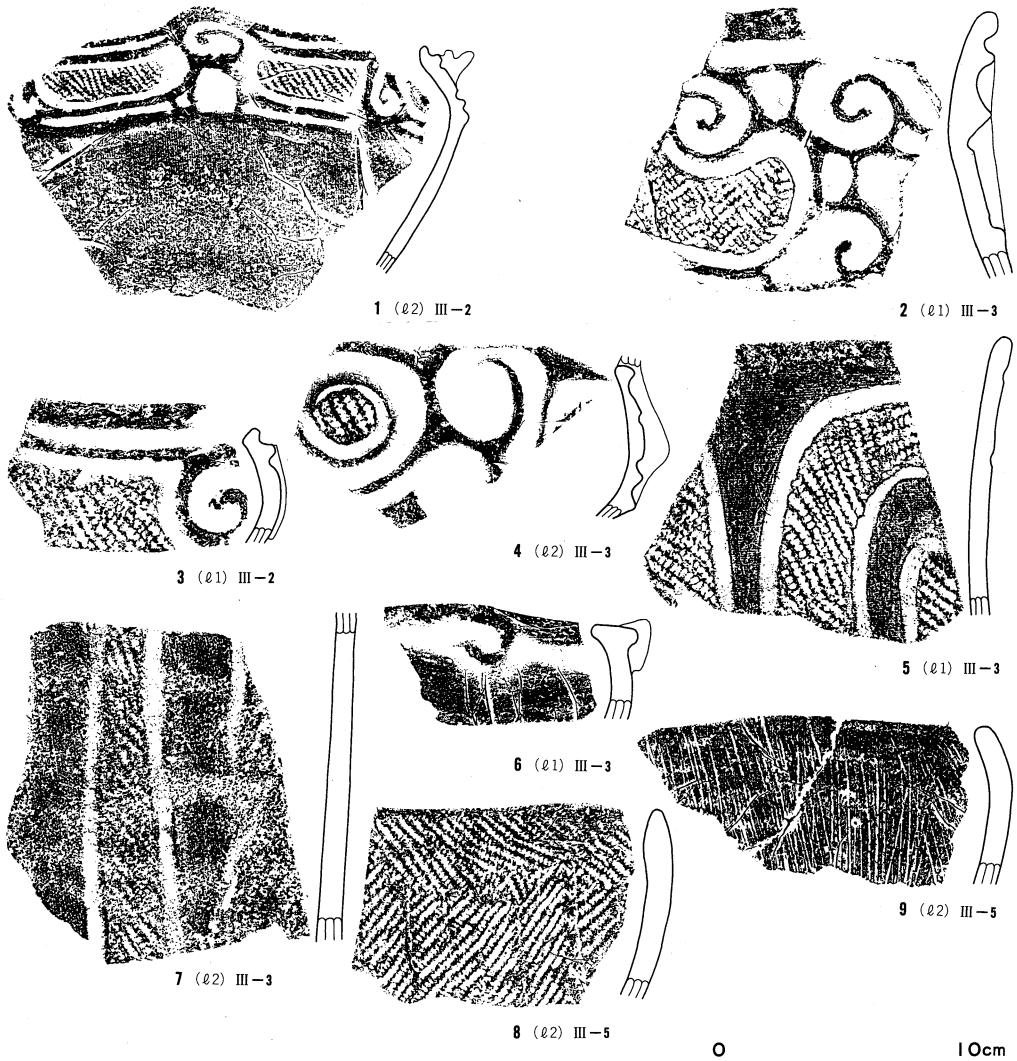


図158　70号住居跡複式炉と出土遺物（1）



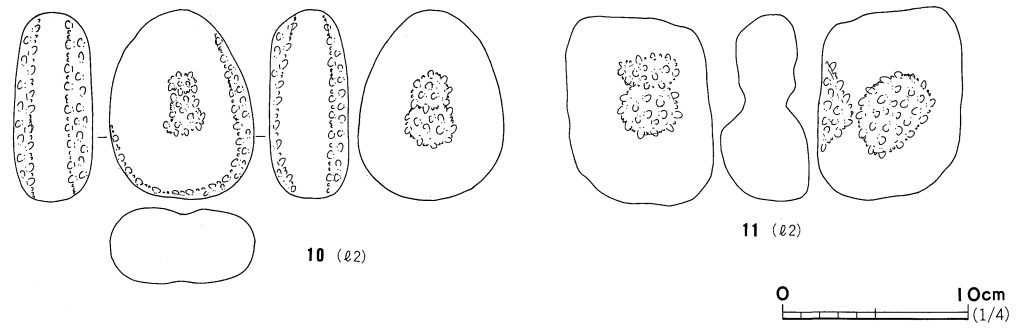


図159　70号住居跡出土遺物（2）

るように方形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と判断した。P7・P9はP3・P6と近接・重複する位置に作られている。この2個の小穴についても，本住居跡の主柱穴と考えているが，P3・P6と同時に機能していたものとは考えられない。P8については，床面からの深さ60㎝と主柱穴とした小穴と大差は無いが，その作られた位置から本跡に伴うものとは判断できなかった。壁溝内からは8個の小穴が検出された。P16・P20は床面からの深さが15㎝と浅いが，他の小穴は30㎝以上の深さを有している。これらについては，その作られた位置から壁柱穴と考えている。P15・P19は斜めに掘り込まれている。

炉は複式炉で，前庭部の末端は住居跡北壁中央に取り付いている。遺存状態は良いが，北西側の土器埋設部と石組部の接する部分の縁石は一部失われている。平面形は三角形状を呈し，規模は長軸250㎝，短軸150㎝を測る。炉の中軸線は住居の主軸と平行している。

土器埋設部の平面形は三角形状を呈し，長さは72㎝，幅は75㎝である。埋設土器は炉の中軸線上に並んで2個埋設され，埋設土器の周縁には10㎝程度のやや偏平な礫が面を揃えて設置されている。石組部は台形状を呈し，規模は炉中軸上で長さ90㎝，幅155㎝を測る。周縁部には10～20㎝のやや細長い礫が設置されているが，底面及び内側には大きさが20～30㎝で偏平な礫が斜位に設置されている。石組部の断面形は鍋底状を呈し，床面からの深さは最大35㎝である。前庭部は台形状を呈し，北西壁は壁溝に取り付いている。規模は幅190㎝，長さ50㎝を測り，北西壁が石組部に取り付く部分には，長さがそれぞれ43㎝，16㎝の細長い2個の礫が設置されている。

炉の焼土化は，埋設土器周辺が著しい。炉内堆積土は，埋設土器下部にほとんど木炭粒からなる黒褐色土が堆積しているが，他は住居跡内堆積土と同質な土が堆積していた。掘形は意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。2個の埋設土器は一つの掘形内に埋設されている。

遺　　物（図158・159）

70号住居跡からは，縄文土器片513点，石器3点が出土した。図158－1・2は，炉の埋設土器である。他は堆積土から散在した状態で出土した。図158－1は胴部上半部が括れる深鉢で，文様は沈線で帯状・楕円形状の単位文が施されている。同図2は胴上半部が括れる深鉢で，胴部に沈線で区画された短冊状の縄文帯を縦位に配している。縄文帯間を無文とし，この無文部はH字状を呈する。同図3は，縄文の施された粗製土器の底部である。

図159－1は口縁部が内傾する鉢形土器で，口縁部には隆沈線による窓枠状の区画文が施されている。区画文の間には渦巻文を加えている。同図3の文様もこれに近い。同図2・4は断面三角形状の隆線により，渦巻文が描かれるものである。同図5・7は凹線によるC字状の単位文を描くものであろうか。縄文は充填施文されている。同図6は，口縁直下に隆線による小さな渦巻文が描かれている。同図8・9は粗製土器で，8は口縁直下とそれ以下で回転方向を違えて縄文

を，9は細い条線文を施している。同図10・11は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本跡は6個の主柱穴と，三角形状の平面形を呈する複式炉をもった竪穴式住居跡である。本住居跡の所属時期は，重複関係と出土土器から大木9式期と考える。　（香　内）

71号住居跡（ＳＩ71）

遺　　構（図160・161，写真69・70）

調査区東側チ・ツ8・9GのＬＶ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＫ357・361・378・783と重複し，ＳＫ361より古く，他の土坑より新しい。平面形は方形を基調とし，規模は南北5.6m，東西5.0mを測る。住居跡西壁は，真北から30°程東へ傾いている。壁高は最大35cmを測り，周壁は急角度で立ち上がっている。床面は西へ緩く傾斜するものの，ほぼ水平で硬く締まっている。住居内堆積土は4層に区分した。堆積状態は，壁際に高い堆積がみられることから自然堆積と判断した。

小穴は10個検出された。規模は直径20～52cm，床面からの深さは21～54cmで，深さ26～42cm程のものが多い。炉を囲むように配置されているＰ1～Ｐ4は，床面からの深さが40cm以上と深く，本住居跡の主柱穴と考えている。主柱穴については，ＳＫ783と重複する部分にもう1個あった可能性が高い。Ｐ7～Ｐ10はその位置から壁柱穴と考えている。Ｐ5・Ｐ6はその作られた位置から本跡に伴わない可能性が高い。

炉は複式炉で，前庭部は住居跡北壁中央に取り付いている。長軸は住居跡西壁とほぼ平行し，規模は長さ240cm，最大幅110cmで，平面形は楕円形状を呈している。埋設土器部は直径50cm程の円形状を呈し，2個の深鉢土器が並んで埋設されていた。埋設土器から15cm程離して縁石を巡らせているが，そのほとんどは失われている。縁石と埋設土器の隙間には，拳大の礫を設置していたものと考えられるが，現況ではその一部が確認できただけである。

石組部は長軸80cm，最大幅100cmを測り，土器埋設部と接する部分には40cm程の平石を設置している。縁石や底面には小児頭大の礫を配し，その隙間には拳大の礫を設置している。石組部の断面形はＵ字状を呈している。床面からの深さは30cm程である。前庭部は110×120cmの規模を有し，石組部に取り付く側壁際には小児頭大の礫を設置している。床面より前庭部底面までの深さは22cmを測り，側壁は緩やかに立ち上がっている。炉の掘形は，意図する各部位の形状を意識して作られている。このため埋設土器・配石と掘形との間に，隙間はほとんど見られなかった。埋設土器内には，有機質の黒色土が堆積していた。炉の焼けは強く，埋設土器の周辺は熱を受け赤変していた。

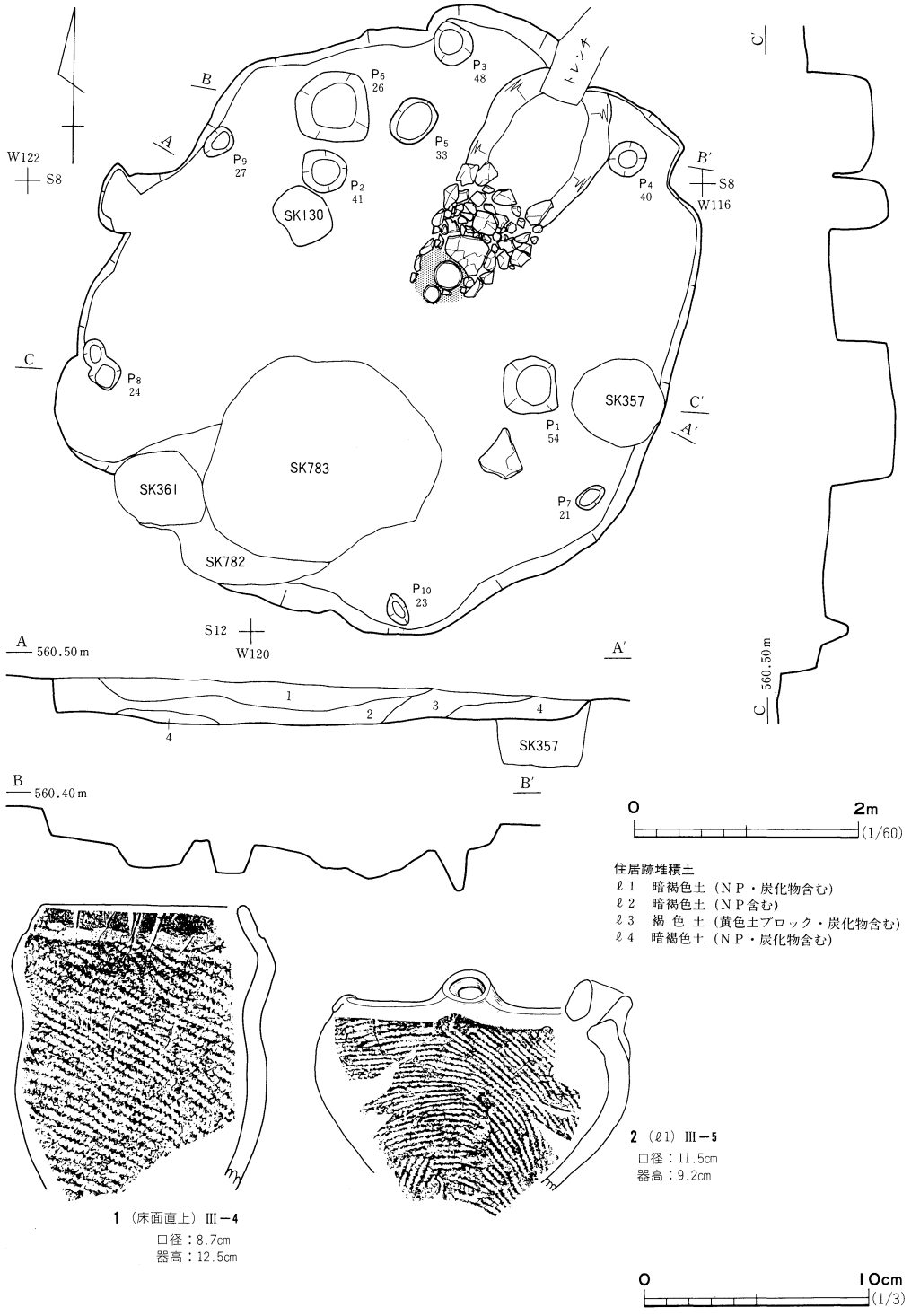
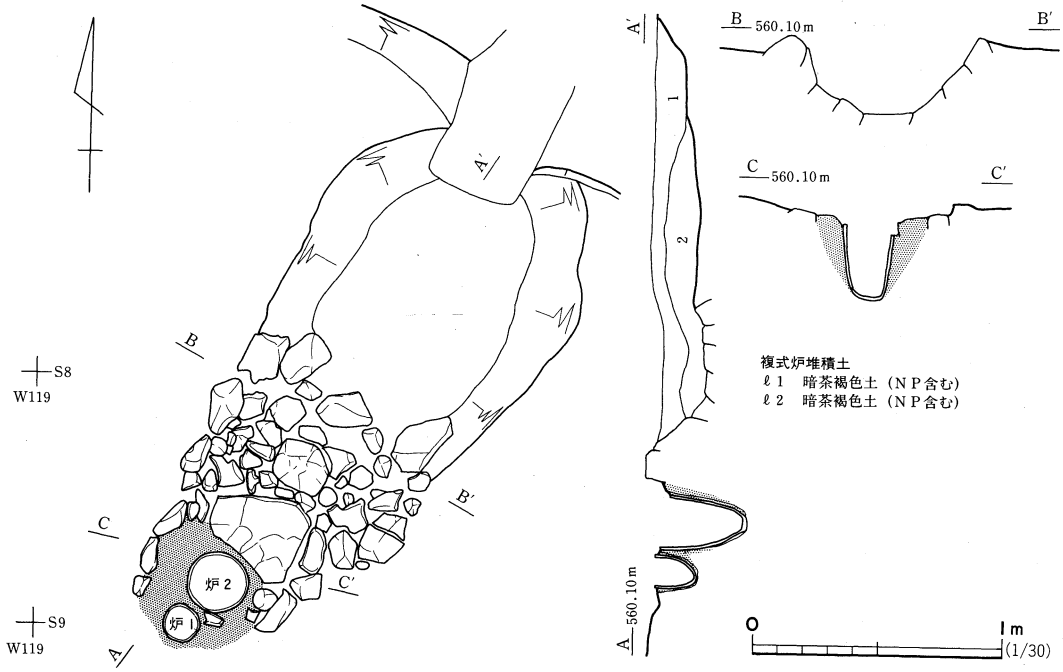


図160　71号住居跡と出土遺物（1）



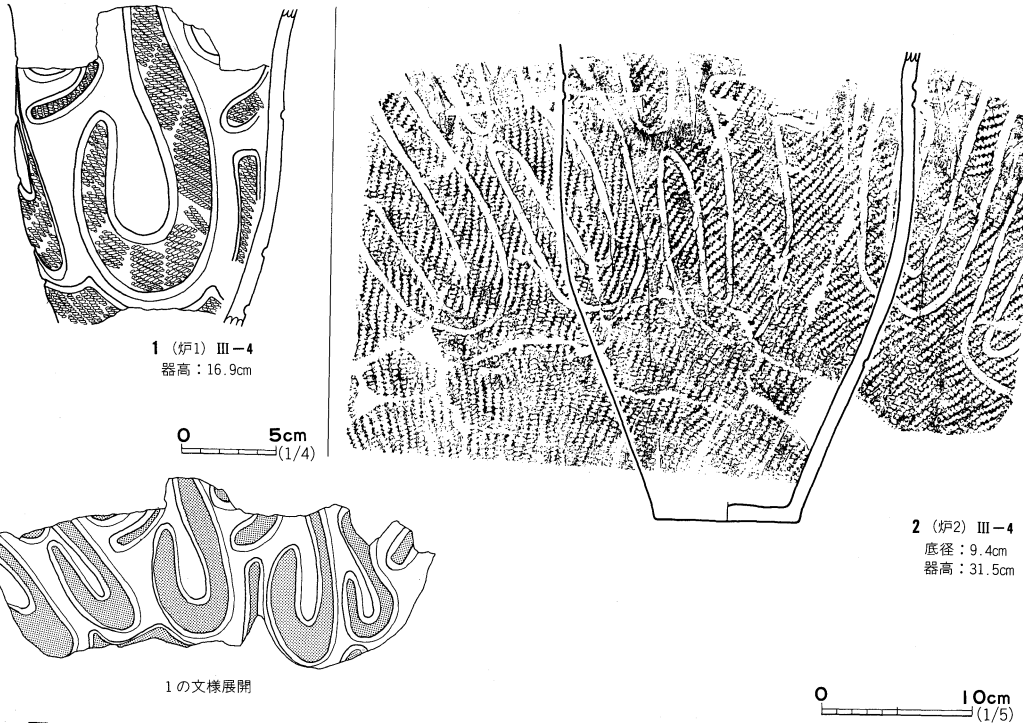


図161　71号住居跡複式炉と出土遺物（2）

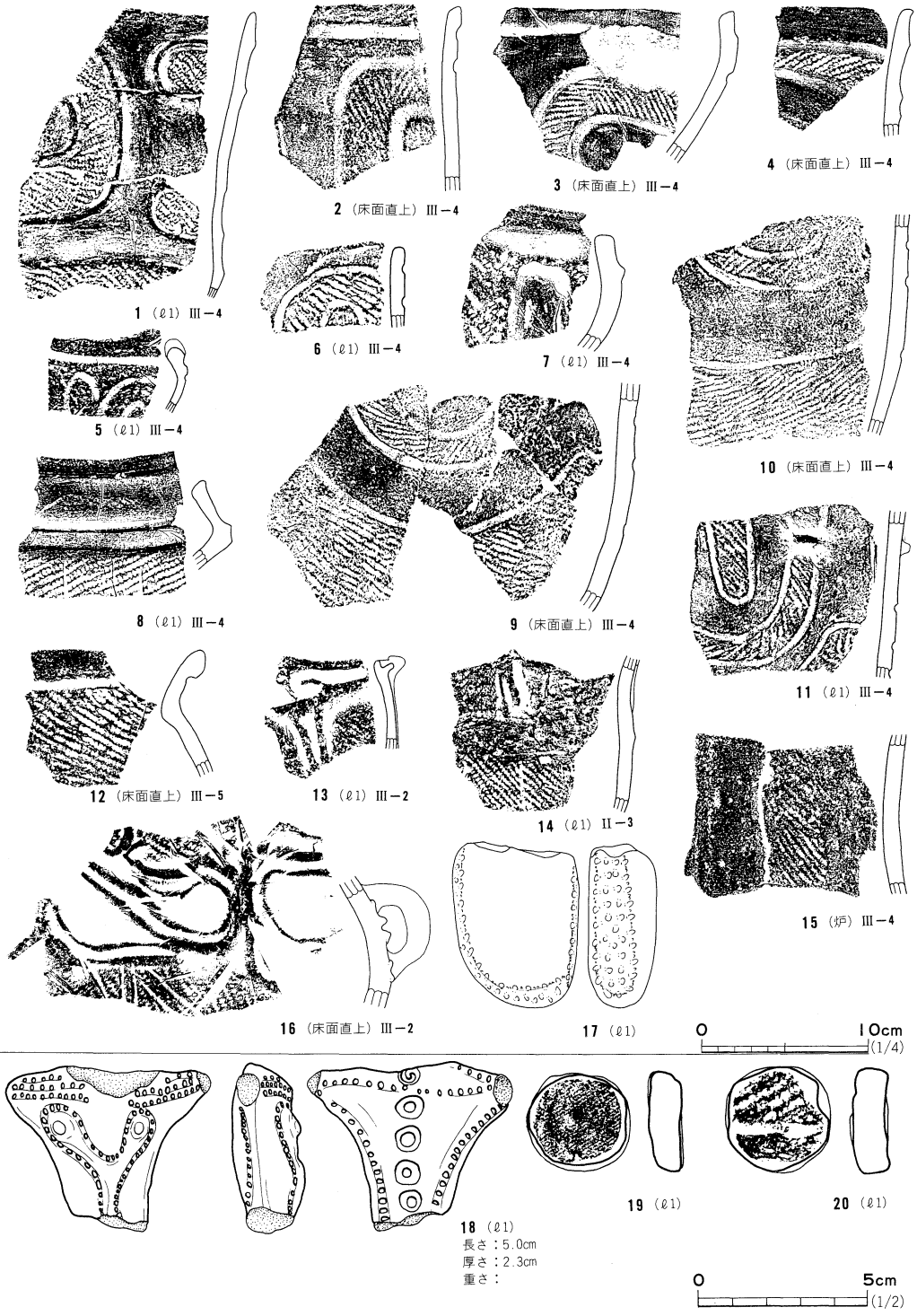


図162　71号住居跡出土遺物（3）

遺　　物（図160～162）

本住居跡からは，土器片630点と石器1点，土偶が1点，土製品が2点が出土している。図161－1・2は炉の埋設土器である。いずれも沈線で区画されたC字・S字状の単位文を施している。1の胴部は波状沈線で上下に区画されている。図160－1は口縁直下に凹線を施した小型の深鉢，同図2も小型の注口土器である。

図162－1・4・8は，稜線で区画された縄文帯で，同図2・3・5～7・9～11は，沈線や凹線で区画された縄文帯で，曲線的な単位文が描かれている。9・10の胴部は，波状沈線で上下に区画される。同図14には縦位の縄圧痕文が施されている。同図17は，側縁部に敲打痕状の使用痕が認められる磨石である。同図18は土偶で，背部の正中線は円形刺突文で表現されている。同図19・20は，土器破片を利用した土製円盤である。

ま と め

本跡は，一辺が5.5m程の方形の竪穴住居跡である。住居施設には，複式炉と柱穴が検出された。主柱穴についてはP1・P2の2個と，SK783と重複する位置にさらにもう1個柱穴があったものと考えている。複式炉前庭部を挟んで対置されているP3・P4についてもその位置と規模から本住居跡の主柱穴と判断している。本住居跡の時期は，出土遺物から大木10式期のものと考えられる。（光　家）

72号住居跡（SI72）

遺　　構（図163，写真71）

調査区北側の南向き緩斜面上，サ22・23GのLⅢb下部で検出された住居跡である。SI58，SK394と重複し，SI58より古く，SK394より新しい。北壁が遺存しないため正確な規模・平面形は不明であるが，遺存する壁の形状から直径4.6m程の円形を基調とする住居跡と推測される。東壁以外の周壁は急峻に立ち上がり，残存高は東壁で最大25cmを測る。床面は，平坦で固く締まっている。堆積土は色調から4層に区分され，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断される。

住居跡内からは，小穴と炉を検出した。小穴は4個検出された。小穴内堆積土はいずれも褐色土である。規模は直径18～22cm，深さ34～48cmである。各小穴の間隔は2.1～2.6mと一定している。これらの小穴は，方形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えられる。炉は住居跡ほぼ中央に位置し，長方形状の地床炉である。規模は34×60cmで，炉上面から4cm下まで焼土化が及んでいた。

遺　　物（図163・164）

本住居跡からは，土器片400点と石器6点が出土している。図163－2以外は堆積土中から破片

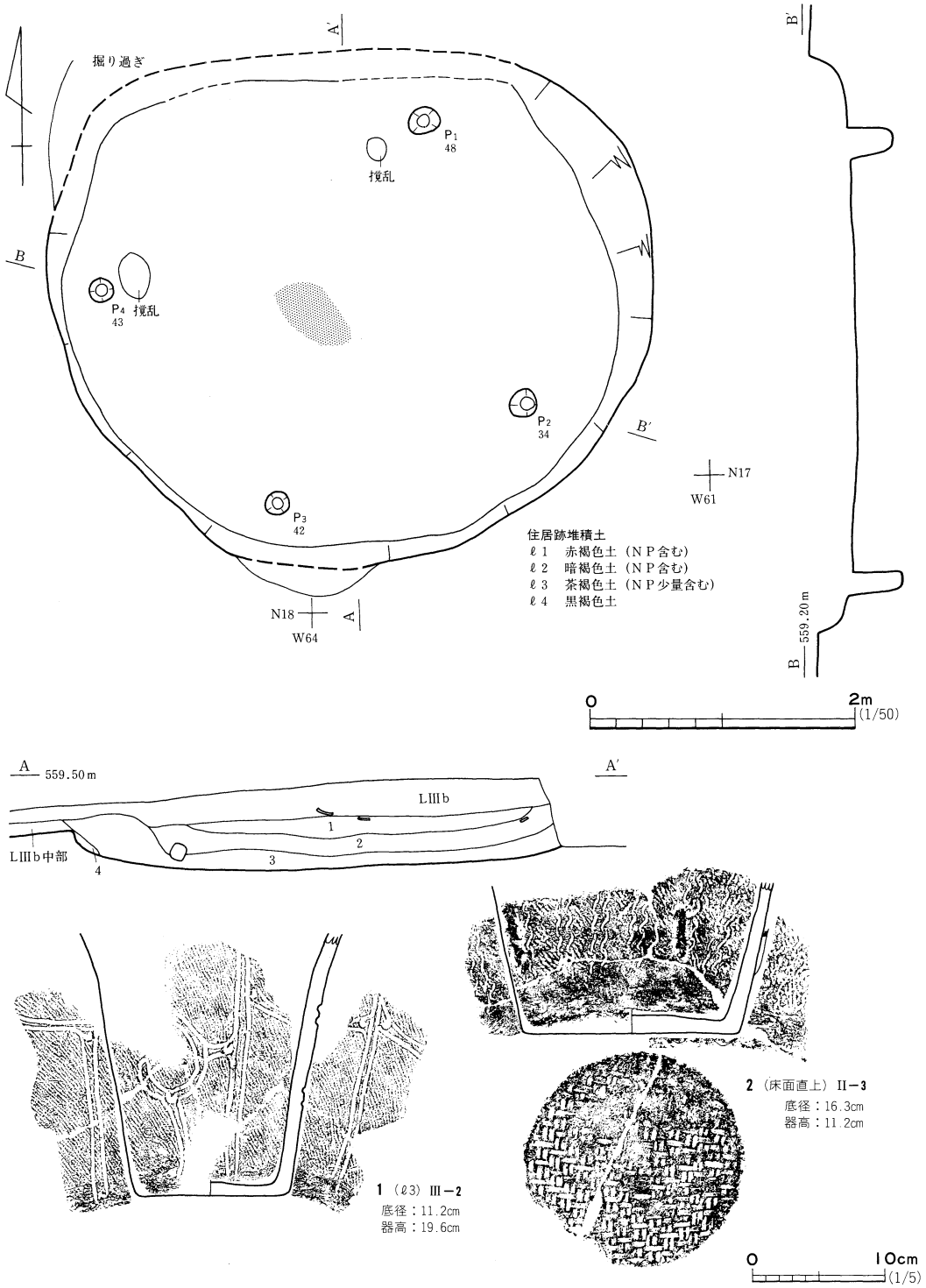


図163　72号住居跡と出土遺物（1）

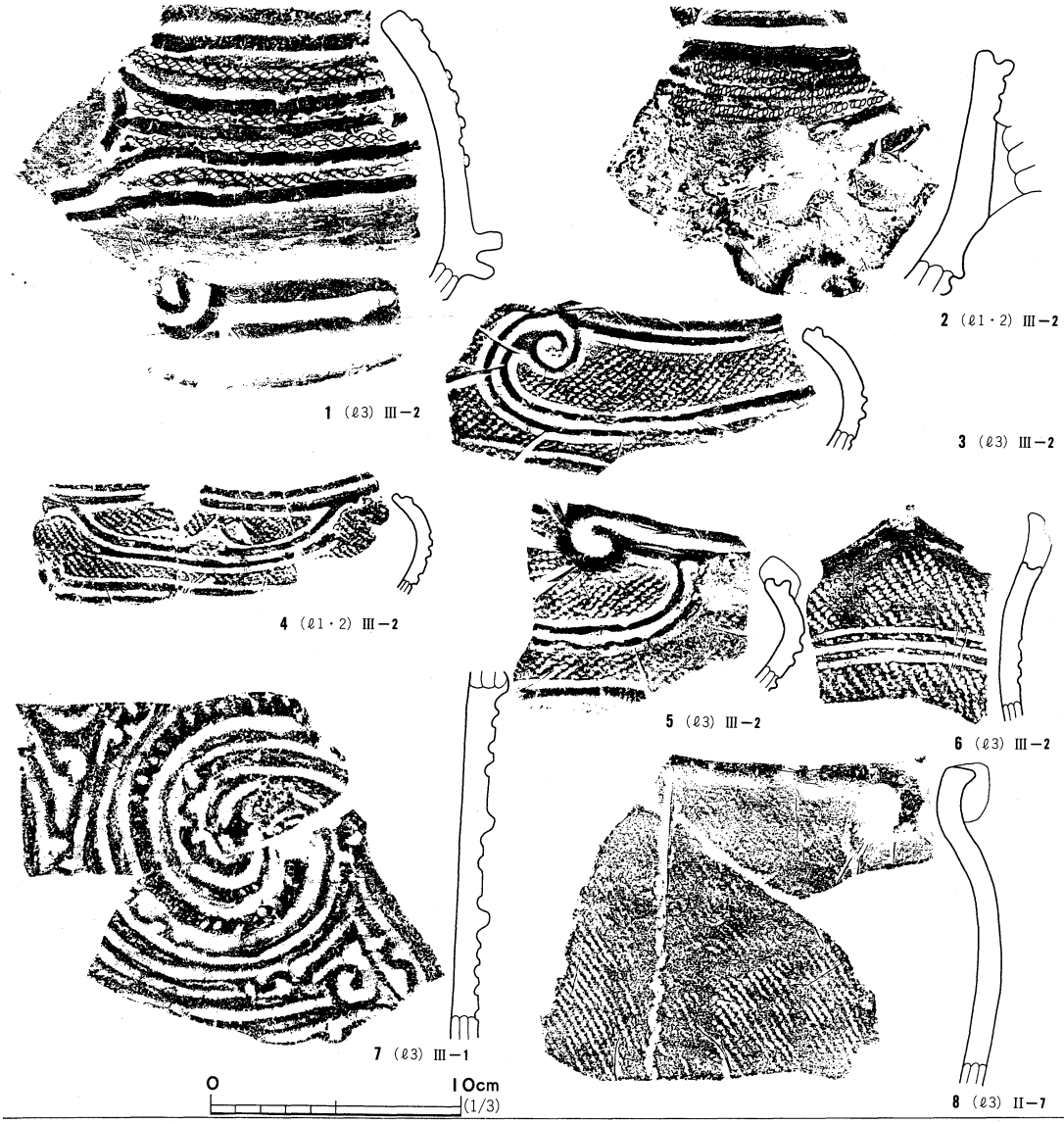


図164　72号住居跡出土遺物（2）

の状態で散在して出土したものである。同図1は深鉢の胴部で，2本1組の沈線を縦位に施し胴部を4区画している。区画間は，横位の渦巻文や弧状文で繋がれている。同図2は深鉢の底部である。隆線によって胴部を4単位に区画し，地文に縦位のアヤクリ文が施されている。底部には網代痕が認められる。

図164－1は隆線を主体とするもので，隆線に沿って縄圧痕文を施している。同図2にも縄圧痕文が見られる。同図3～5は，隆沈線で横S字状・弧状の文様を描いている。これらの文様の端部は渦巻文を描き出している。同図7は，沈線文が多用される土器である。隆帯で渦巻文を描き，これに沿って沈線を密に加えている。隆帯上には刺突を施している。同図8は口唇部がわずかに肥厚する粗製の深鉢である。同図9は石核，10は周縁部に敲打痕を持つ磨石である。

ま　と　め

本跡は，円形を基調とする竪穴住居跡である。住居施設には，中央に地床炉とこれを取り囲むように方形状に配置された4個の柱穴がある。所属時期は，出土土器から大木8b式期と判断している。（福　山）

73号住居跡（SI73）

遺　　構（図165，写真72・73）

調査区北西部，テ・ト6GのLV上面で検出された竪穴住居跡である。SI70，SG108と重複し，SG108より古く，SI70より新しい。遺存状態は悪く，炉と柱穴が検出されただけである。床面の標高は560.9mで，調査区北西部の遺構密集地区における住居跡としては，SI70・83とならび最も標高が高い位置に占地している。

平面形・規模については，周壁が遺存していないため不明である。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様南東から北西に向かって緩やかに傾いている。堆積土については，床面上に黒色のシルト質土を主体とする土が薄く堆積していた事を確認している。

小穴は8個検出した。小穴内には黒色のシルト質土が堆積していた。P1・P2は直径45cmほどで，深さは94・53cmである。その他の小穴は直径が20～30cm，深さは30～40cmほどである。P1とP2は，他の小穴に比べて深く，炉を挟んで対応する位置にある事から，本住居跡の主柱穴と考えている。その他の小穴についても，後述する炉を中心として，同心円状に配置されていることから，本住居跡に伴う柱穴と判断した。

炉は柱穴によって取り囲まれる範囲の中央，やや東に寄った位置から検出された。土器埋設部と石組部で構成される小型の複式炉である。平面形は台形状を呈し，規模は長辺80cm，短辺58cmを測り，炉の中軸線は真北から60°程西に傾いている。土器埋設部・石組部共に比較的大きな礫を1個づつ各辺に設置し，方形状の区画を作り出している。埋設土器と縁石の隙間・石組部底

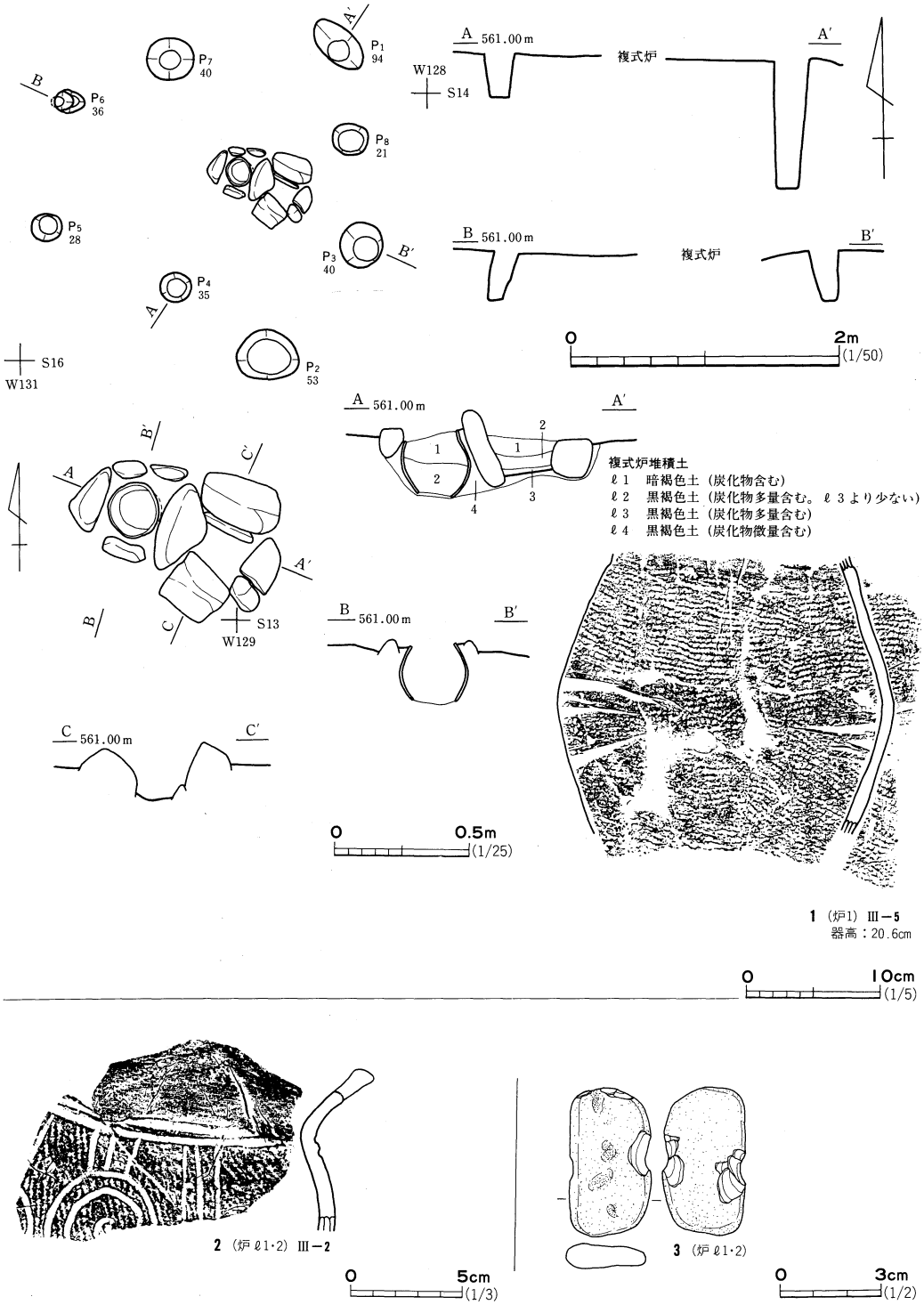


図165　73号住居跡と複式炉・出土遺物

面には，石は設置されていない。石組部の床面からの深さは15㎝で，断面は逆台形状を呈している。

炉の焼けは弱く，埋設土器の周辺にも焼土は認められなかった。炉内堆積土は，埋設土器下部と石組部下部にほとんど木炭粒からなる黒色土，その上には暗褐色土が堆積していた。炉掘形の断面形は逆台形状で，埋設土器・石組部の縁石は共に掘形底面に接して設置されていた。

遺　　物（図165）

出土した遺物は，埋設土器1点，土器片90点，石器1点である。図165－1は炉の埋設土器である。他は炉の堆積土のℓ1・2より出土した。同図1は胴部中央が膨らむ粗製の深鉢で，縄文が施されている。同図2は波状口縁の深鉢で，口縁部を無文とする。胴部には，縦位・横位・渦巻状の沈線文が施されている。同図3は偏平な礫の縁辺部に抉りが認められる石錘である。

ま と め

本住居跡は遺存状態が悪いため，正確な平面形，規模は不明である。柱穴の配列から判断すれば，直径3ｍ程の円形を基調とした竪穴式住居跡と考えられる。主柱穴は台形状に配列され，炉は前庭部を持たない小型の複式炉であった。本住居跡の所属時期は，出土遺物が少なく明言し得ないが，遺構の重複・炉の形態から大木10式期と考える。　　（香　内）

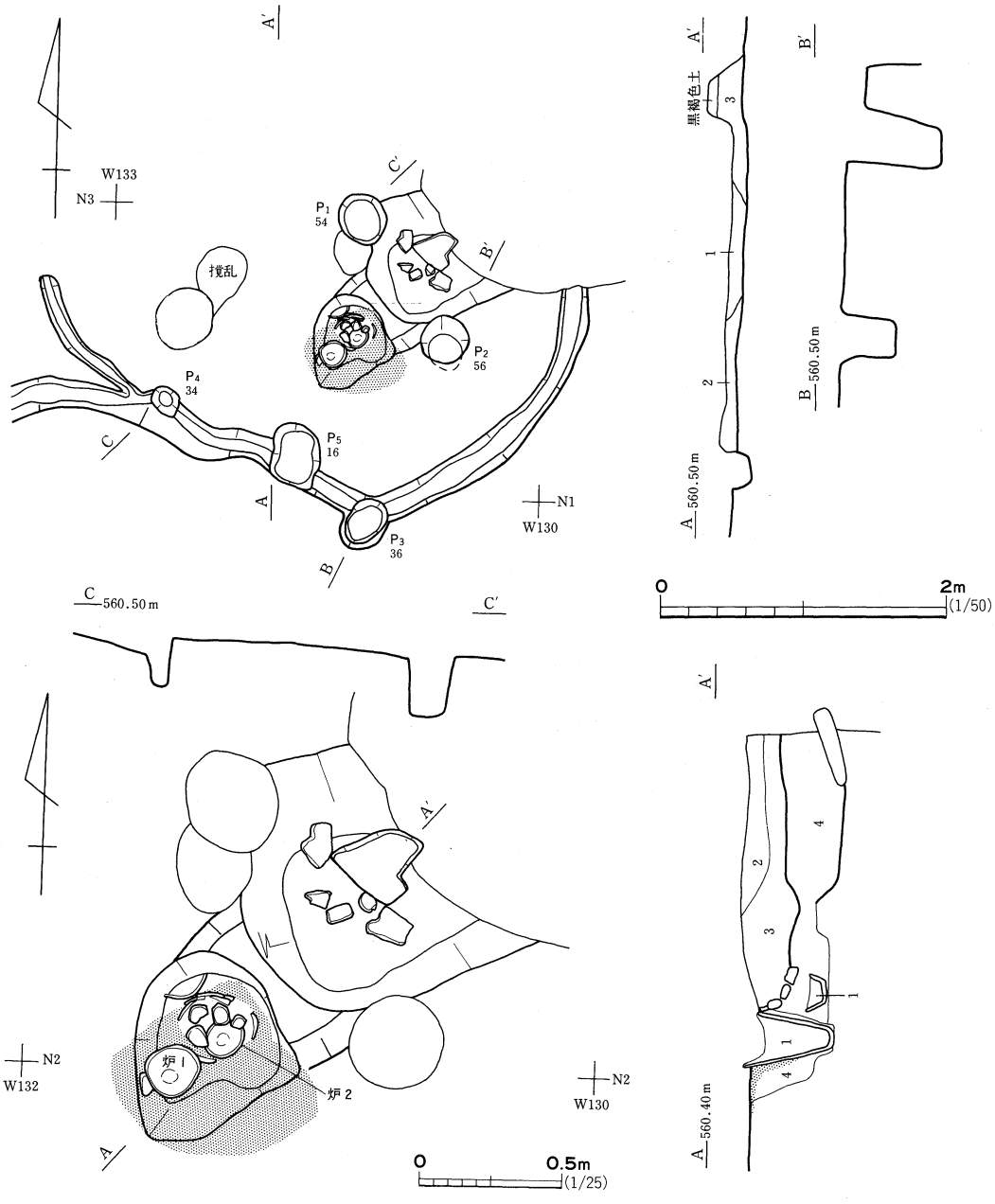
74号住居跡（ＳＩ74）

遺　　構（図166，写真74）

セ・ソ5・6GのＬＶ上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ64・102，ＳＫ334と重複し，ＳＫ334より新しいが，他の遺構との新旧については不明である。遺存状態は悪く，検出できたのは壁溝の一部と，小穴・炉だけである。遺存部の平面形は隅丸長方形状を呈し，規模は現況で東西3.5ｍ，南北2.4ｍである。壁の立ち上がりはほとんど確認できなかった。床面は平坦で，堅く締まっている。住居跡の堆積土は3層に区分した。堆積状態はℓ1がレンズ状の堆積状態を示している事から，自然堆積と判断した。

住居施設は，壁溝と小穴・炉が検出された。壁溝は住居跡南半部から検出された。規模は幅20㎝，床面からの深さは4～13㎝である。小穴は5個検出された。P1・P2は複式炉前庭部に取り付き，P3～P5は壁溝内に作られている。これらの小穴は直径20～35㎝，床面からの深さは16～56㎝である。この内P1～P4は，複式炉を取り囲むように配置されていることから，本跡の主柱穴と考えられる。これらの小穴には褐色土が堆積していた。

炉は複式炉で，住居跡中央やや南東に寄った位置から検出された。この複式炉については，土層の観察と各施設のあり方から，造り替えが行われているものと判断している。しかし，いずれも遺存状態が悪いため，詳細は不明である。前庭部については，調査当初ＳＫ334との新旧を間



住居跡堆積土
ℓ1　褐 色 土（NP少量含む）
ℓ2　明褐色土（NP少量含む）
ℓ3　明褐色土（NP少量，小礫含む）

炉堆積土
ℓ1　暗褐色土（有機質土）
ℓ2　褐 色 土（NP少量含む）
ℓ3　暗褐色土（NP少量，焼土含む）
ℓ4　褐 色 土（黄色土ブロック，焼土含む）

図166　74号住居跡と複式炉

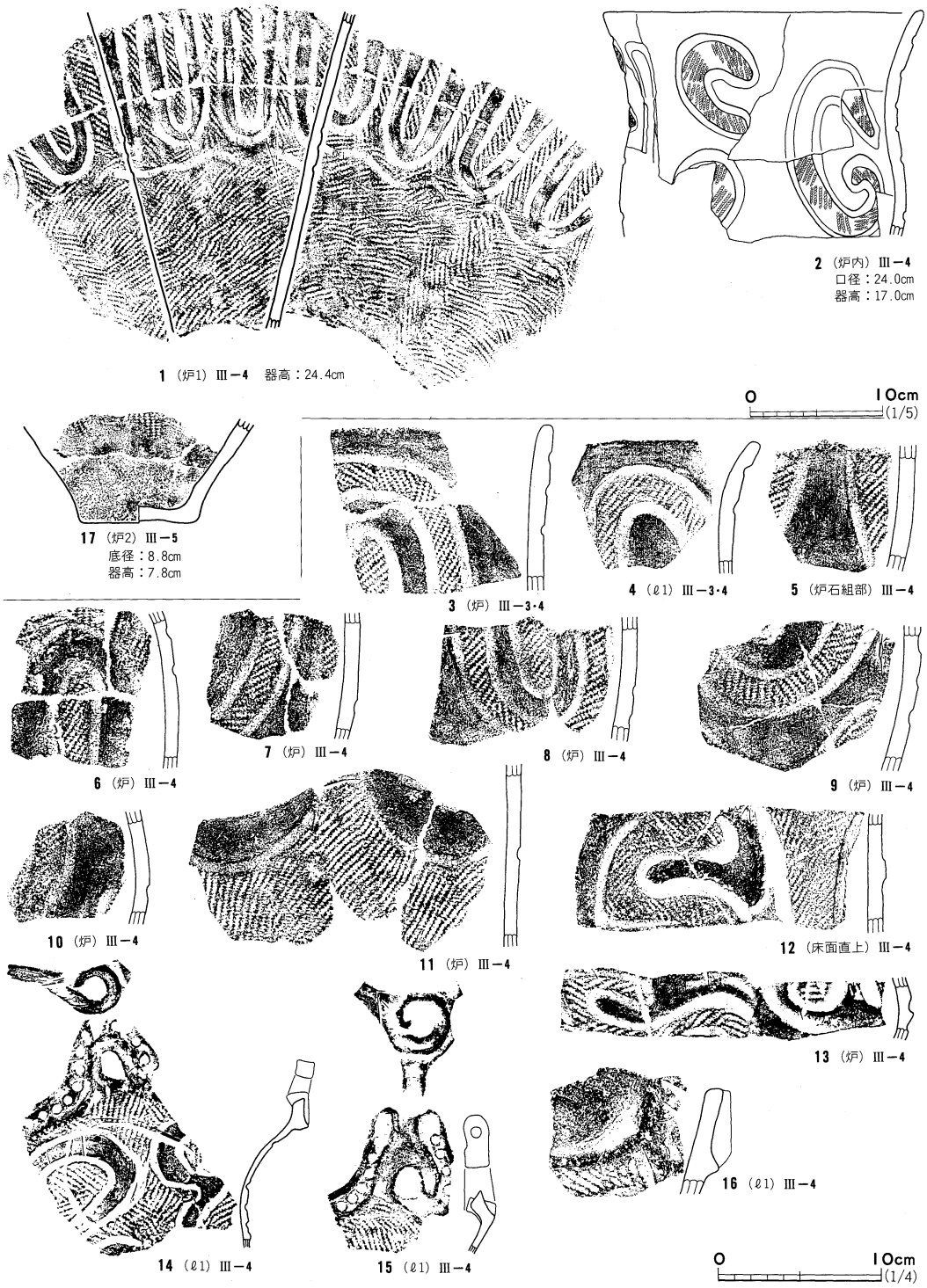


図167　74号住居跡出土遺物（1）

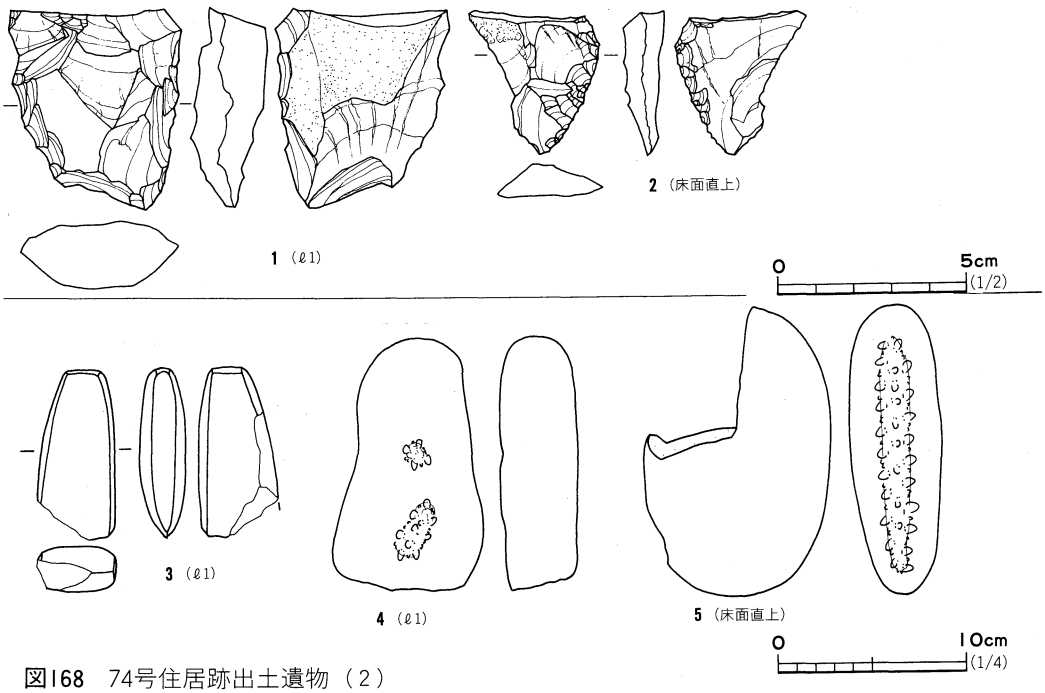


図168　74号住居跡出土遺物（2）

違えて掘り込み，その一部を壊してしまった。平面形は新期・旧期の炉ともに，遺存部の形状からコケシ状を呈するものと考えている。炉の主軸は住居跡南壁とほぼ平行し，真北からは45°程東に傾いている。

新期の炉は，埋設土器（炉1）とそれに接して設置されている数個の小礫が，その施設と考えている。前庭部の底面については，堆積土のℓ4上面と判断した。埋設土器は正立に埋置され，石組部の断面形は鍋底状に近い形態を示している。規模は現況で全長150㎝，最大幅は90㎝である。炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。炉内には住居跡堆積土と同質な暗褐色土，埋設土器内には，有機質の黒褐色土が堆積していた。

旧期の炉は新規の炉の石組部下から検出された埋設土器（炉2）と，ℓ4下面から検出された敷石をその施設と判断している。埋設土器は正立に埋置され，これを囲むように土器破片を設置していた。埋設土器内には，炉1内部に堆積しているℓ1と同じ黒褐色土が堆積していた。ℓ4下面から出土した大型の板状の石は，旧期の炉の石組部の敷石と考えている。

遺　　物（図167・168）

74号住居跡からは，480点の縄文土器片と9点の石器が出土している。土器片は，住居跡堆積土中から散在して出土している。図167－1は，複式炉の埋設土器である。沈線で区画されたU字状の単位文を配している。単位文内の縄文は，充填施文されている。胴部の文様帯は，波状沈線で上下に区画されている。同図3～11もこれに近い。同図2はC字状の単位文が施されている。

同図12は無文部が肥厚するものである。同図14・15は波状口縁の深鉢である。口唇部直下には，稜線で区画された帯状の無文帯が見られる。この無文帯内には，円形の刺突文が施されている。波頂部には突起が付けられ，この突起の内面には渦巻文が描かれている。同図16は，口縁部直下に隆線による楕円形状の単位文を施している。図168－1・2は不定形石器である。1には粗い調整剝離が加えられている。同図3は磨製石斧，同図4・5は磨石である。5の側縁部には敲打痕状の使用痕が見られる。

ま と め

本住居跡は，長辺が3.6m，短辺が3.0m程の隅丸長方形状を呈する住居跡と考えられる。住居施設には，4個の柱穴と複式炉が認められた。複式炉については土層観察，各施設のあり方から造り替えられているものと判断した。本住居跡については，出土遺物から大木10式期の所産と考えている。（松　本）

75号住居跡（SI75）

遺　　構（図169，写真75）

テ・ト13Gに位置する竪穴住居跡で，検出面は重複するSI81の堆積土上面である。SI81と重複し，本跡が新しい。遺存状態は悪く，住居跡西壁が検出できただけである。平面形は，遺存部の形状から隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は南北4.1m程である。住居跡西壁は南北を示している。壁の立ち上がりは緩やかで，壁高は最大9cmである。床面は平坦であるが，とくに強い踏み締まりは認められなかった。住居跡の堆積土は2層に区分した。基本的にはレンズ状の堆積状態を示していることから，自然堆積と判断した。

住居施設は，小穴と炉が検出された。小穴は5個検出された。P1～P4は，ほぼ等間隔に方形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。規模は直径20～30cm，床面からの深さは28～40cmである。P4については，深さ91cmと飛び抜けて深い。これについては，重複するSI81よりもさらに古い，SK452の堆積土まで掘り込んでしまったためと考えている。本来の深さはもっと浅いものであろう。

炉は，P1とP2を結んだ線のほぼ中間に位置している。現況では土器埋設部と石組部からなる，小型の複式炉である。土器埋設部の縁石の一部は失われているが，他の部分の遺存状態は，比較的良好である。平面形は方形の石組部に，円形の土器埋設部が取り付いた形態を示す。炉の中軸線は住居跡西壁と同じく南北を示している。規模は全長95cm，最大幅は70cm程である。

埋設土器部は円形状を呈するものと推定され，埋設土器を丸く囲むように石を2列並べている。さらに，部分的に埋設土器に接して，土器破片を立てて埋置しているのが認められた。石組部には大きな礫を設置している。石組部の平面形は方形，断面形は鍋底状をなす。床面から石組部底

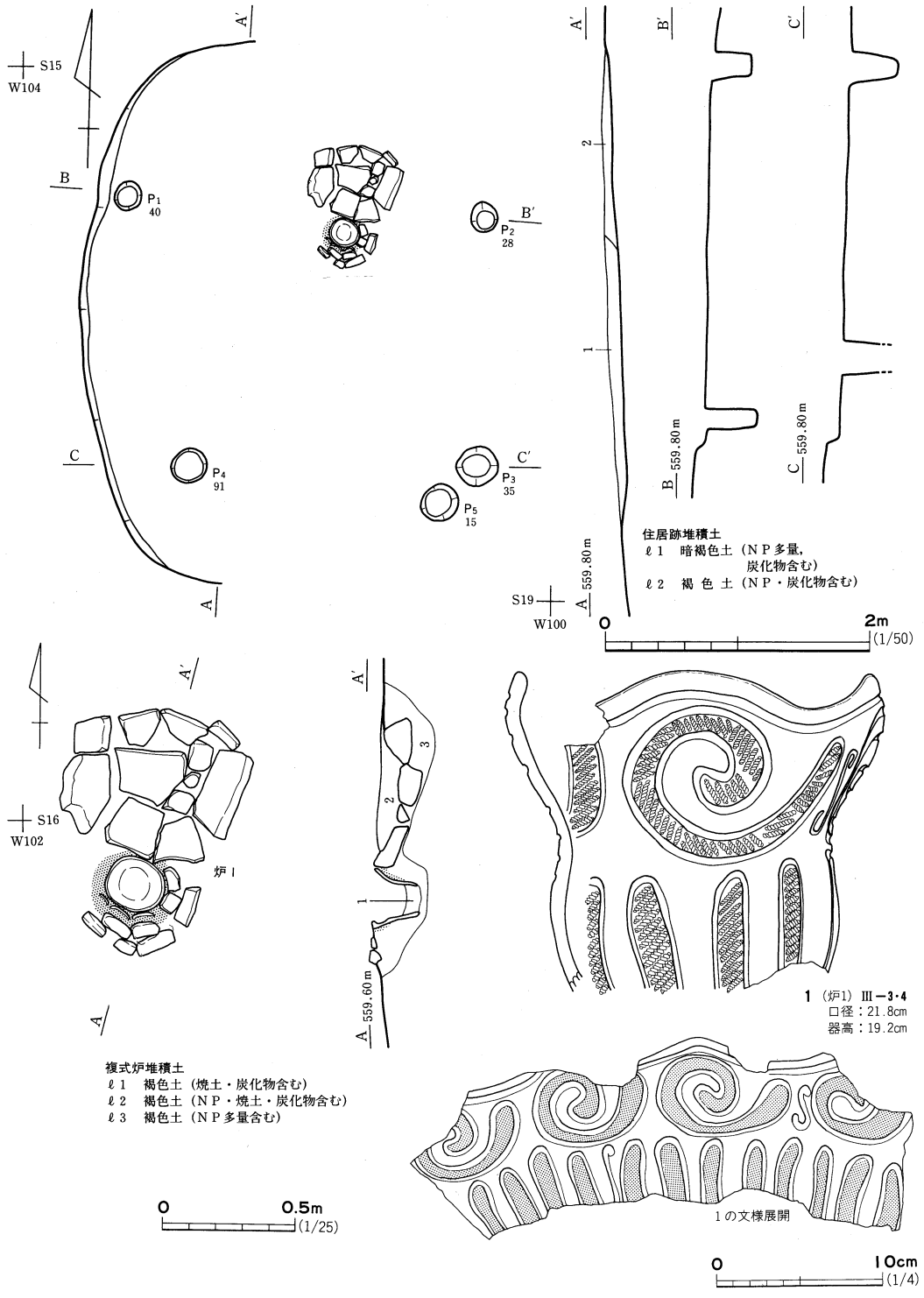


図169　75号住居跡と複式炉・出土遺物（1）

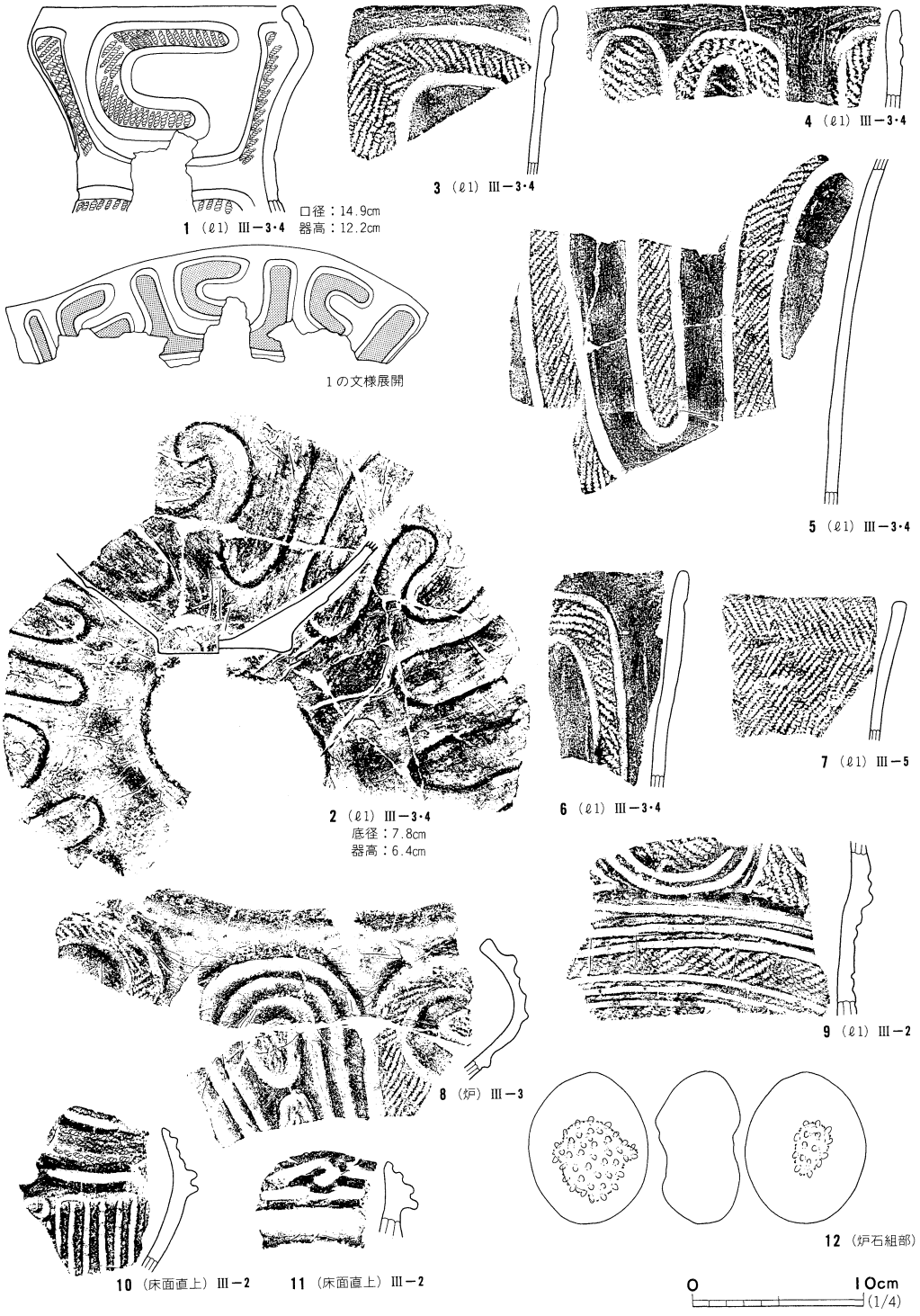


図170　75号住居跡出土遺物（2）

面までの深さは，最大8㎝である。前庭部については明らかにできなかったが，土層の観察からは，前庭部が作られたものとは考えられない。炉内には，住居跡堆積土と同質な褐色土が堆積していた。炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。炉の掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器・配石との間に，隙間はほとんど見られない。

遺　　物（図169・170）

75号住居跡からは，220点の縄文土器片と2点の石器が出土した。土器片は住居跡堆積土中から小破片の状態で，散在して出土したものがほとんどである。図169－1は，複式炉の埋設土器である。胴部中央が括れ，口縁部が内湾して開く深鉢で，文様帯は括れ部で，口縁部文様帯と胴部文様帯に2区分される。口縁部文様帯には沈線で区画された渦巻状の単位文を，4単位描いている。胴部には帯状の縄文帯を縦位に施しているが，あるいは下部で連結し，C字状の単位文を描く可能性もある。単位文の間には一部縦S字状の文様を充填している。単位文内の縄文は充填施文されている。

図170－1は，口縁部にC字状の単位文が4単位施されるものであろう。単位文の間には頂部がほぼ口縁部にまで達する波状文が見られる。同図3～6は沈線や凹線で区画された，C字・U字状の単位文が施されるものと考えている。これらの土器の縄文は，すべて充填施文されている。同図2は浅鉢の胴部下半である。稜線により渦巻状の単位文様を描き出している。同図8は口縁部が強く内湾する鉢であろうか。稜線による逆U字状の単位文を描いている。同図9～11は隆沈線で文様を描くものである。同図7は縄文が施された粗製土器で，原体を口縁部直下は横，以下は縦に回転させている。同図12は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は遺存する西壁と，検出された主柱穴の配置から，一辺が4ｍ程の竪穴住居跡と推定している。炉は複式炉であるが，前庭部は認められなかった。本住居跡については，出土遺物から大木10式期の所産と考えている。（松　本）

76号住居跡（ＳＩ76）

遺　　構（図171，写真76）

セ・ソ11・12ＧのＬＶ上面において検出した竪穴住居跡である。ＳＫ418・419・420・442と重複し，本住居跡が新しい。平面形は遺存部の状態から，隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北5.2ｍ，東西4.5ｍである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は最大50㎝を測る。床面は平坦で硬く締まっている。しかし，ＳＫ420と重複する部分の床面は陥没し，周囲に比べて20㎝程低い。堆積土は4層に区分した。堆積状態は，壁際に高い堆積が見られることから，自然堆

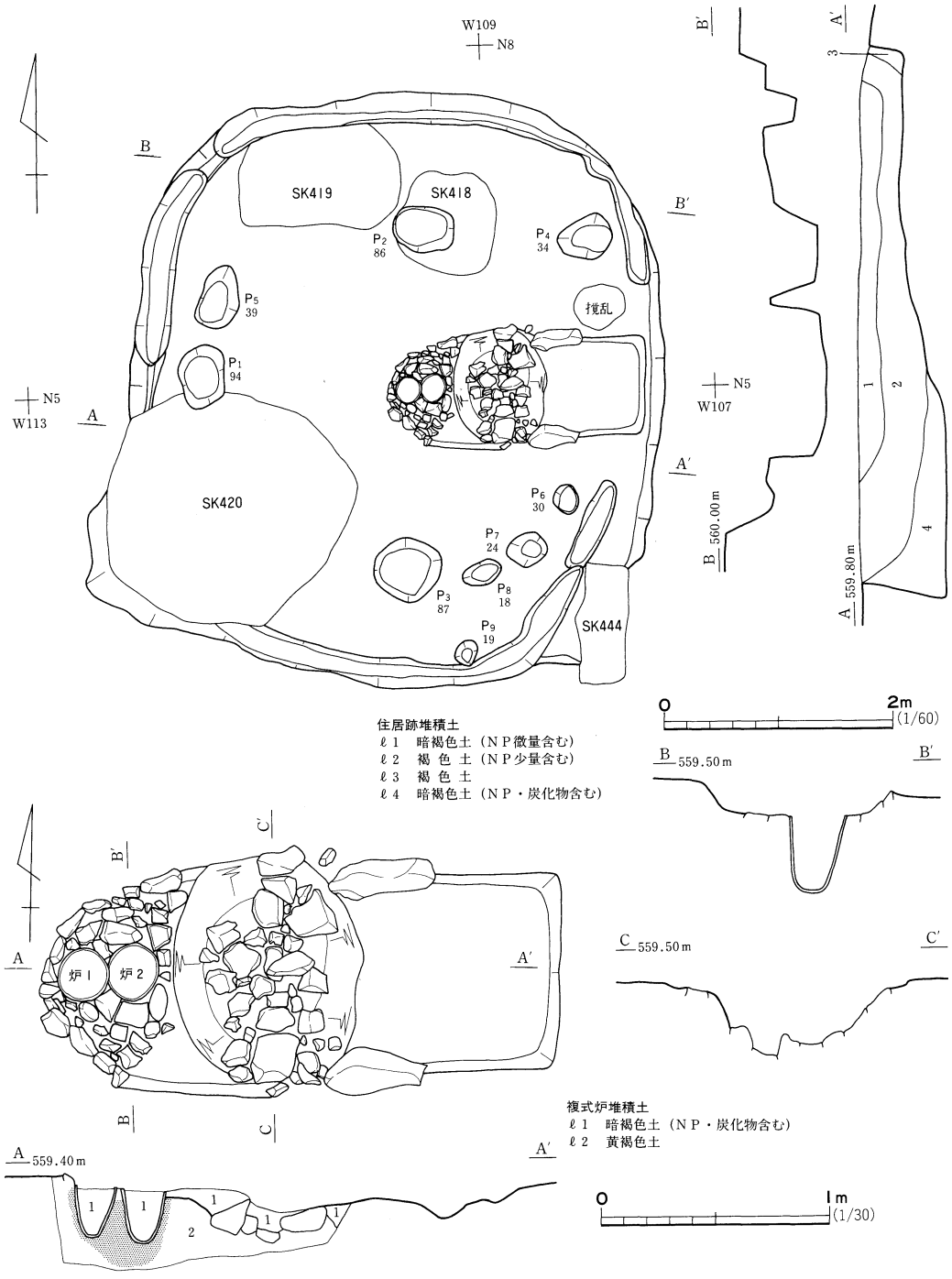


図171　76号住居跡と複式炉

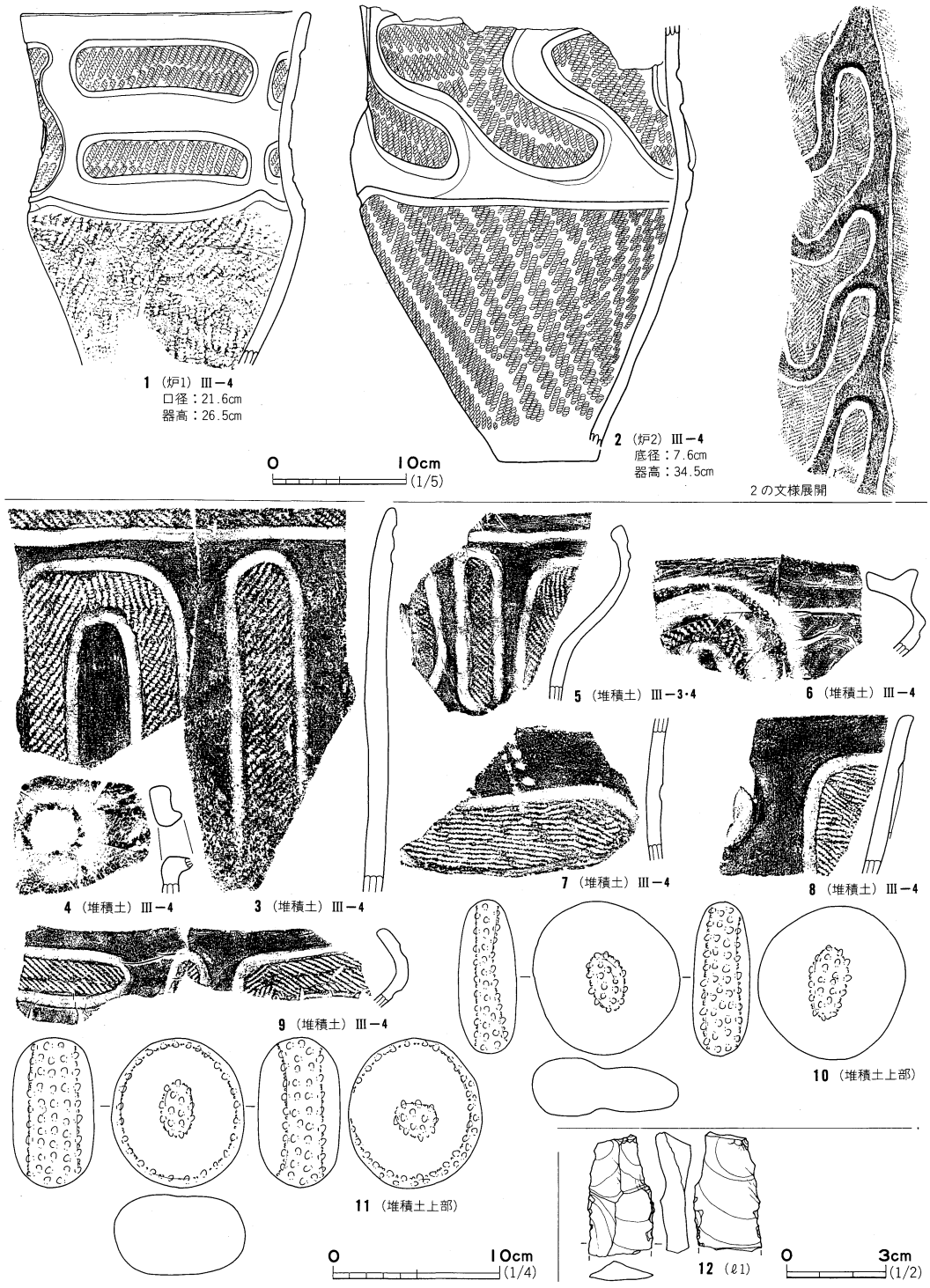


図172　76号住居跡出土遺物

積と判断した。

住居施設は，壁溝・小穴・複式炉が検出された。壁溝は幅25～30㎝，深さは6～12㎝で複式炉前庭部と，ＳＫ420と重複する部分を除いて，住居跡周壁際をほぼ全周している。小穴は総数で9個検出された。小穴の配置を見ると，Ｐ1～Ｐ3は複式炉を取り囲むように正三角形状に配置されて，床面からの深さが86～94㎝と深いことから，本住居跡の主柱穴と考えている。その他の小穴については，配置に規則性は認められず，本住居跡に伴うか不明である。

複式炉は住居跡中央部から検出され，前庭部は住居跡東壁中央に接している。長軸はほぼ東西を向き，規模は長さ225㎝，幅110㎝を測る。土器埋設部は直径90㎝程の半円形状を呈し，中軸線上に2個の土器を並べて設置している。周縁部には，楕円形状の礫を立てて設置し縁石としている。埋設土器と縁石の隙間には，拳大の礫を面を揃えて設置している。この石と縁石との間には，5㎝程のレベル差が認められる。

石組部の遺存状態は悪く，相当数の石が取り去られているものと考えられる。規模は85×100㎝，平面形は，長方形状を呈していたものと考えている。石組部の断面形は台形状を呈し，床面からの深さは最大30㎝である。前庭部の平面形は方形に近く，規模は一辺90㎝程である。石組部に取り付く側壁には，長さ45㎝程の柱状の礫を設置している。床面からの深さは，最大23㎝である。土器埋設部・石組部は，大きな一つの掘形を埋め戻して作られている。炉の焼けは強く，特に埋設土器周辺の土は焼土化が著しい。

遺　　物（図172）

本住居跡からは，縄文土器片が426点と石器が7点出土している。図172－1・2は炉の埋設土器である。1・2は，胴下半部に括れを有する深鉢で，この部分にはいずれも波状沈線文を施し，胴部文様帯を上下に区分している。上部の文様帯には，1は沈線によって区画された横楕円形の縄文帯を上下2段配している。2も沈線で区画された横Ｙ字状の単位文を連続して施している。この単位文の下端部はヒレ状に肥厚している。

同図3・5・7～9は，沈線や凹線で区画された単位文で文様を描いている。9には横楕円形状の単位文が施され，その間には縦楕円形状の単位文が見られる。同図6の縄文帯上端は庇状に突出している。同図10・11は凹部を持つ磨石で，側縁部には敲打痕状の使用痕が見られる。同図12は剥片の一部に調整剥離を加えた不定形石器である。

ま　と　め

本跡は，隅丸方形状を呈する住居跡で，住居施設には複式炉と三角形状に配置された3個の柱穴が見られた。本跡の所属時期は，出土した土器から大木10式期と考えられる。　（光　家）

77号住居跡（ＳＩ77）

遺　　構（図173）

調査区中央部西寄りの遺構密集域，ツ・テ16・17Ｇで検出した竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ及びＳＩ84の堆積土上面である。ＳＩ82・84と重複し，ＳＩ84より新しく，ＳＩ82より古い。遺存状態は比較的良好であるが，南東コーナー部については検出することはできなかった。

平面形は，南北に長い隅丸の長方形で，規模は長辺6.1ｍ，短辺4.0ｍである。周壁の立ち上がりは北壁と西壁がやや急であるが，東壁と南壁の立上がりは緩い。壁高は北西コーナー部で最大20㎝を測るが，南壁では4㎝以下である。床面は平坦ではあるが北から南に傾斜し，比高差は最大34㎝である。住居跡中央部には，南北270㎝，東西185㎝の範囲で貼床が認められた。遺構内堆積土は3層に区分される。ℓ1・2はＬⅢｂの土質に近似する暗褐色土であるが，炭化物を若干多く含んでいる。堆積状態は，壁際からの流れ込みの様相とレンズ状の堆積が観察されることから，自然堆積と判断している。

住居施設には，8個の小穴と2基の炉が検出された。小穴の規模は直径28～49㎝，深さは19～84㎝である。このうち比較的規模の大きいＰ1～Ｐ5を本住居跡の主柱穴と考えているが，北東コーナー部にあるＰ8も，上屋構造を考慮して主柱穴に加えたい。南東コーナー付近からは小穴が検出されなかった。小穴内の堆積土は，Ｐ4が黒褐色土，他の小穴はパミス粒を含む暗褐色土である。Ｐ2とＰ3は重複しており，柱を移設した可能性がある。

炉は，住居跡中央部の貼床上面と下層から検出された。いずれも地床炉である。貼床上面の炉は，住居跡の長軸と平行するように作られ，平面形は南北に長い長楕円形状を呈している。規模は80×370㎝と大きく，炉の南端は90㎝程貼床外にまで延びる。焼土化は炉上面から最大7㎝下に及び，焼土上面は住居跡床面より若干窪んでいる。貼床の下部から検出された炉は，上述の炉同様南北に長く，60×260㎝の規模で，焼土の厚さは2～5㎝である。これら2基の炉については，住居跡の窪みに作った炉を一旦廃棄し，床を貼った後，ほぼ同じ場所に新しい炉を造り変えたものと判断している。

遺　　物（図173～175）

77号住居跡からは，250点の縄文土器片と5点の石器が出土している。図173－1は床面直上から，横に倒れた状態で出土した。他の縄文土器片は，住居跡堆積土中や床面直上から小破片の状態で出土したものがほとんどである。

図173－1・3は，キャリパー状を呈する深鉢である。いずれも，口縁部は隆沈線，胴部は沈線で文様を描いている。1の口縁部には渦巻文を2単位，円形文を2単位それぞれ対面する位置に施している。頸部には無文帯が見られ，胴部には口縁部の渦巻文・円形文と対応するように平行

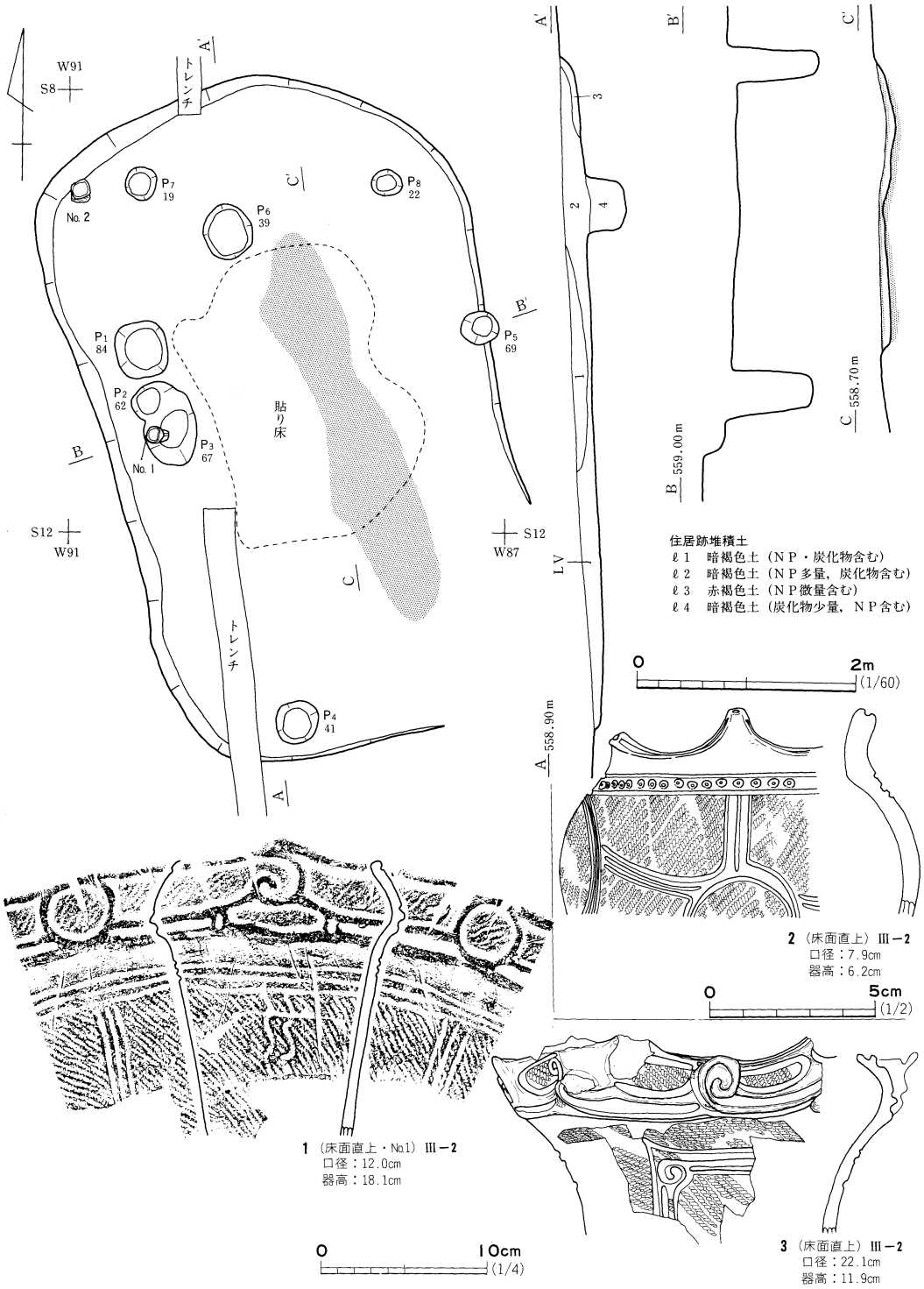


図173　77号住居跡と出土遺物（１）

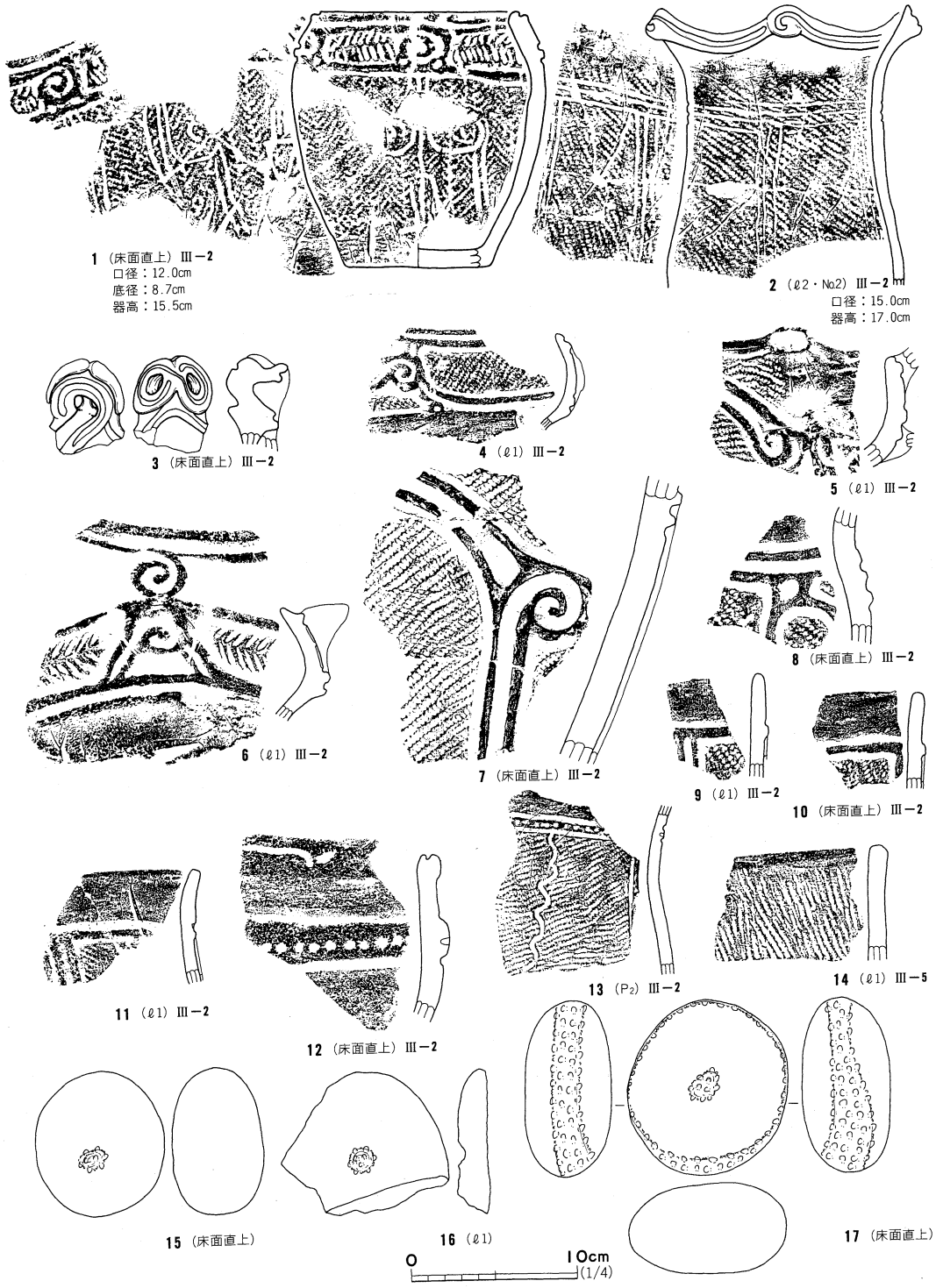


図174　77号住居跡出土遺物（2）

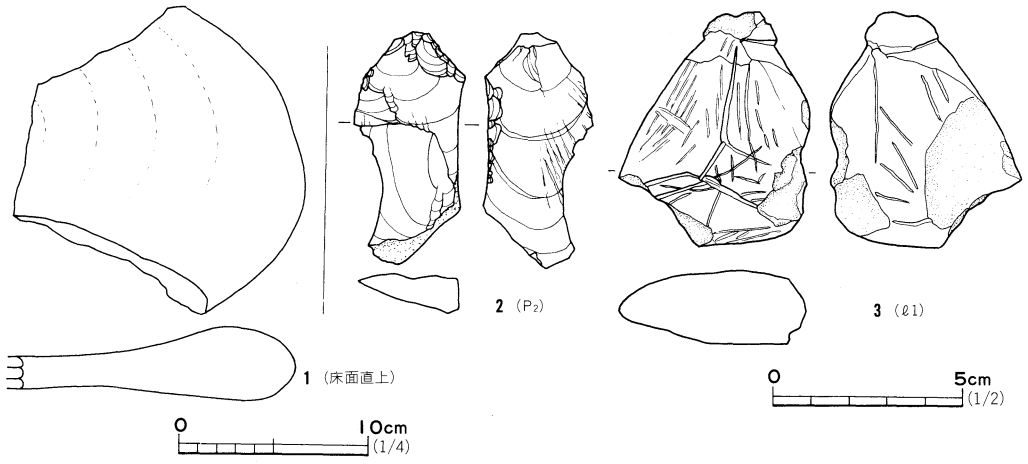


図175　77号住居跡出土遺物（3）

沈線・蛇行沈線を縦位に施し，胴部を4区画している。3の口縁部文様も1に近いが，渦巻文は突起状に器面から突出している。この渦巻文の中間には，橋状の把手と推測される突起が4個付けられていたのであろうか，2個一対をなす突起の基部が遺存している。

同図2は，胴部が球形状を呈する小型の土器である。口縁部は波状をなし，口唇部に沈線文，波頂部には円形の刺突文が施されている。口縁部直下に施された横位の平行沈線の間にも，同じ刺突文が施されている。図174－1は，樽状の器形を呈する小型の深鉢である。隆沈線により，端部が渦巻状を呈する楕円形の区画文を4単位描いている。区画文内には，矢羽状の短沈線を施している。胴部には縦位を基本に沈線を施し，その一部は渦巻文を描く。地文には結束した縄を用いて，羽状縄文が施されている。同図2は口縁部が緩く外反し，胴部が長胴状を呈する深鉢である。口縁部は肥厚し，4単位の波状口縁をなす。この肥厚する口縁部には沈線文が施され，波頂部では渦巻文を描き出している。頸部には3本の平行沈線が横走し，胴部は縦走する3本の平行沈線で6単位に区画されている。

図174－3は眼鏡状を呈する突起である。同図4～11は隆沈線によって文様を描く土器である。4～6はキャリパー状の深鉢，9～11は円筒形状を呈する深鉢である。同図12は口唇部上面に沈線，幅の広い隆帯上には円形の刺突文が加えられている。同図13も平行沈線間に刺突文が加えられている。同図14は粗製の深鉢である。同図15～17は凹部を持つ磨石で，17は側縁部に使用痕が見られる。図175－1は偏平な河原石を利用した石皿である。同図2は不定形石器で，側縁部の一部に微細な剥離痕が認められる。同図3は三脚石器で，頂点部直下には沈線が施されている。内外面ともに沈線が施されているが，外面の頂点間を繋ぐ沈線の彫りは深い。

ま と め

本住居跡は，南北に長い隅丸長方形の竪穴住居跡である。柱穴の多くは，住居跡北側で検出されたため全体の主柱穴の配置は不明であるが，基本的には住居跡の平面形と同様に長方形状に配置されたものと考えられる。炉は住居跡中軸線上に位置し，貼床下部にも旧い段階の炉が確認されている。本住居跡の所属時期は，出土遺物から大木8b式期と考えている。　　（丹　治）

78号住居跡（SI78）

遺　　構（図176，写真77）

チ・ツ12・13Gに位置する竪穴住居跡で，SI90の堆積土上面で検出した。遺存状態は悪く，南東コーナー部付近の周壁は一部検出できなかった。平面形は南北が長い長方形で，規模は南北5.4m，東西3.8mである。住居跡西壁はほぼ南北を示している。壁の立ち上がりは緩やかで，壁高は最大38cmである。床面はSI90の堆積土中に作られている。平坦ではあるが，特に強い踏み締まりは認められなかった。堆積土は5層に区分した。堆積状態についてはレンズ状の堆積が見られることから，自然堆積と判断している。

住居施設は，壁溝と小穴・炉が検出された。壁溝は住居跡西壁南半から検出された。幅18cm，床面からの深さは6cmほどである。小穴は2個検出された。P1は直径42cm深さ50cm，P2は直径20cm深さ15cmである。P1についてはその規模から本跡の主柱穴と考えられるが，これに対応すると考えられる小穴は，本跡床面やSI90の床面でも検出されなかった。

炉は複式炉で，住居跡中央に位置している。遺存状態は良く，複式炉の各施設を確認することができた。平面形は長方形状の石組部・前庭部に，二等辺三角形状の土器埋設部が取り付いた形を呈し，石組部と前庭部の境は僅かに括れている。規模は全長230cm，最大幅は95cmである。炉の中軸線はほぼ東西を示し，住居跡の長軸とほぼ直交している。

土器埋設部は二等辺三角形状を呈し，埋設土器は炉の中軸線上に2個並べて設置されている。外縁部には，楕円形状の礫を直線的に設置して縁石としている。縁石と埋設土器との隙間には，拳大の円礫が面を揃えて敷かれている。石組部の平面形は長方形状を呈し，規模は60×95cmを測る。石組部周壁や底面には，偏平で大きな石を設置している。周壁の石は斜位に設置されていることから，石組部の断面形は鍋底状を呈している。床面から石組部底面までの深さは最大17cmである。前庭部は，石組部から僅かに開きながら東壁に向かって伸びているが，末端は東壁から僅かに離れている。石組部と接する壁際には，大きな角礫を設置している。床面から前庭部底面までの深さは最大15cmである。

炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。炉内には住居跡堆積土ℓ5と同質な暗褐色土，埋設土器の下部には有機質の黒褐色土が堆積していた。炉の掘形は土器埋設部については，意図する

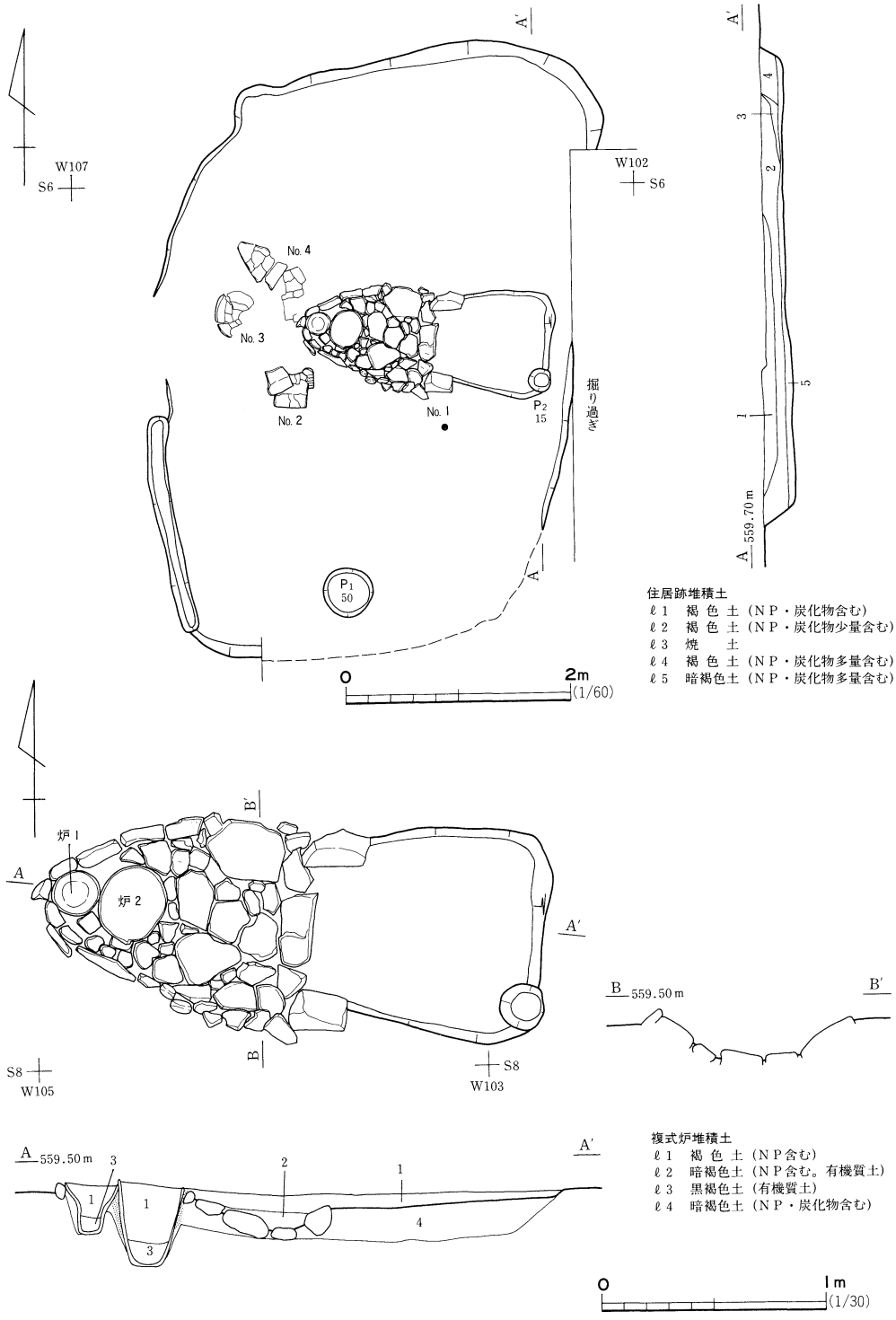


図176　78号住居跡と複式炉

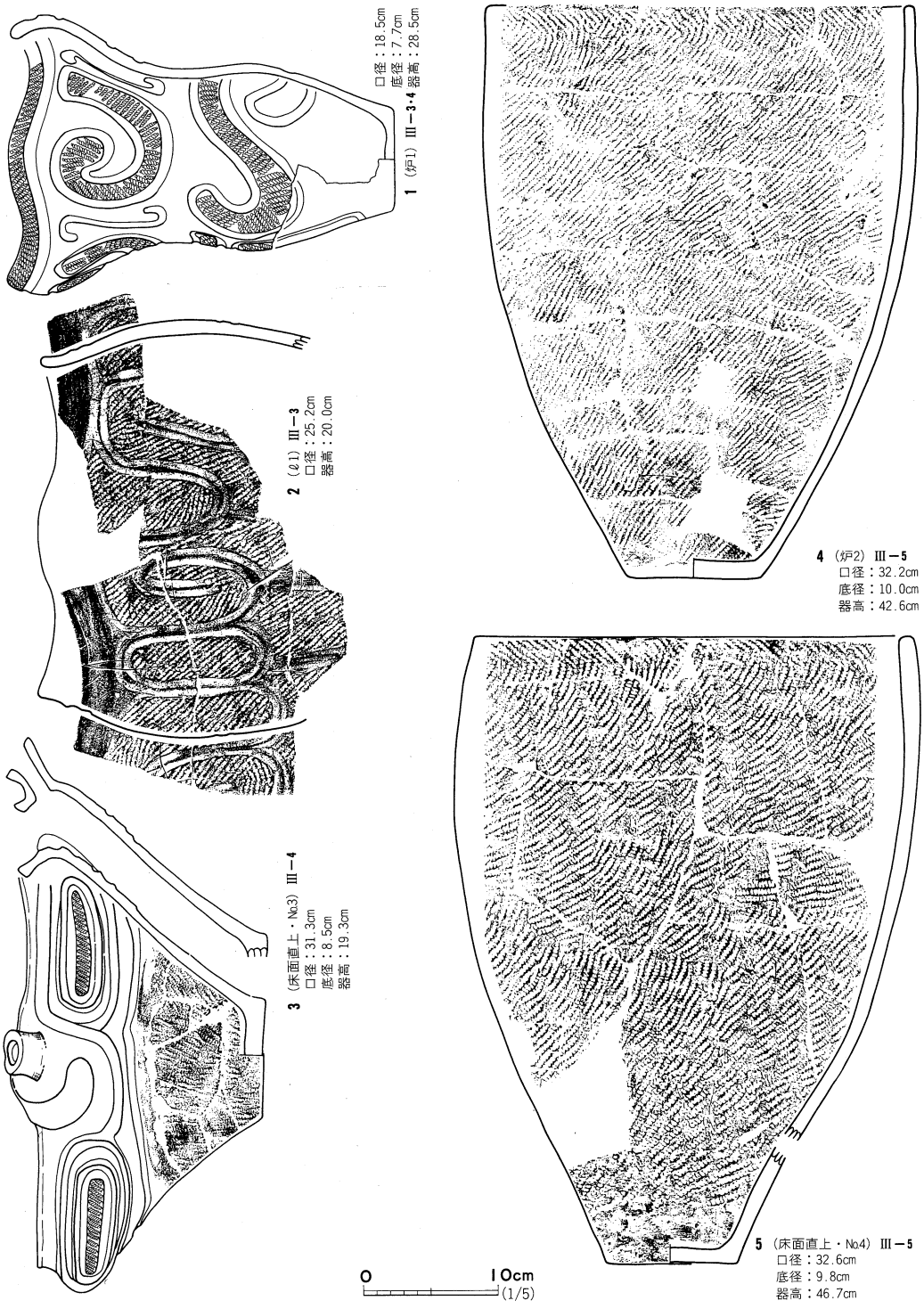


図177　78号住居跡出土遺物（1）

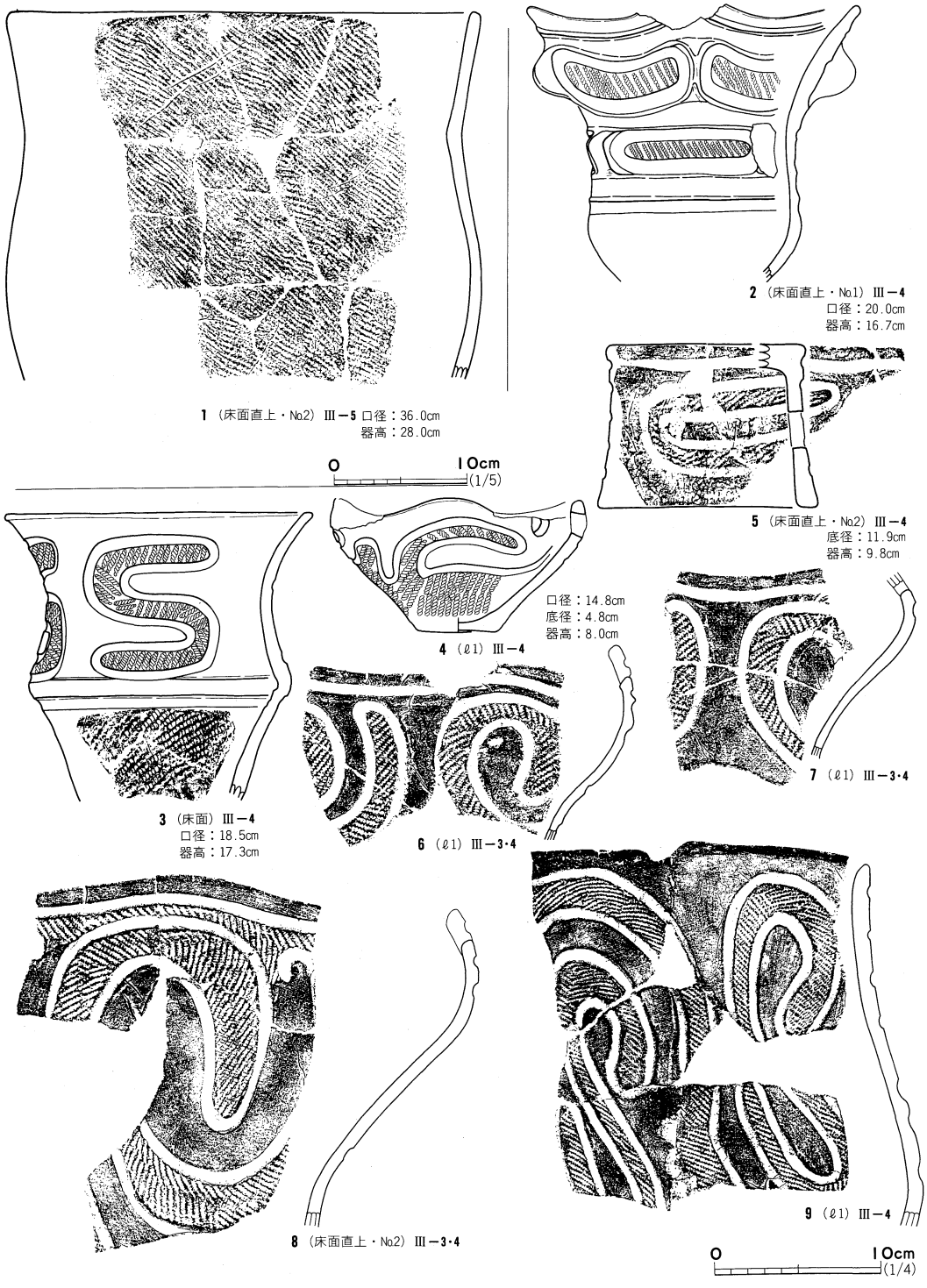


図178　78号住居跡出土遺物（2）

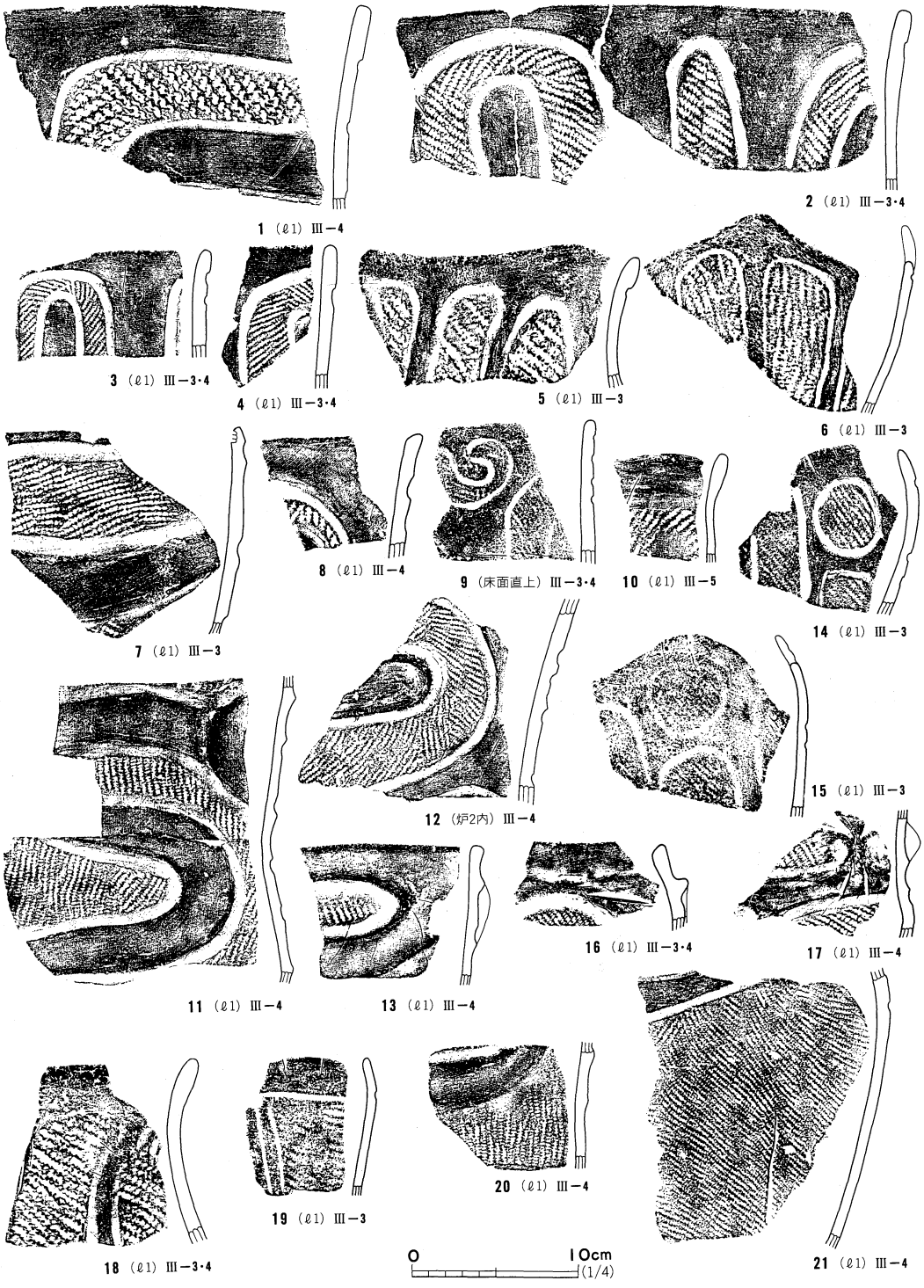


図179　78号住居跡出土遺物（3）

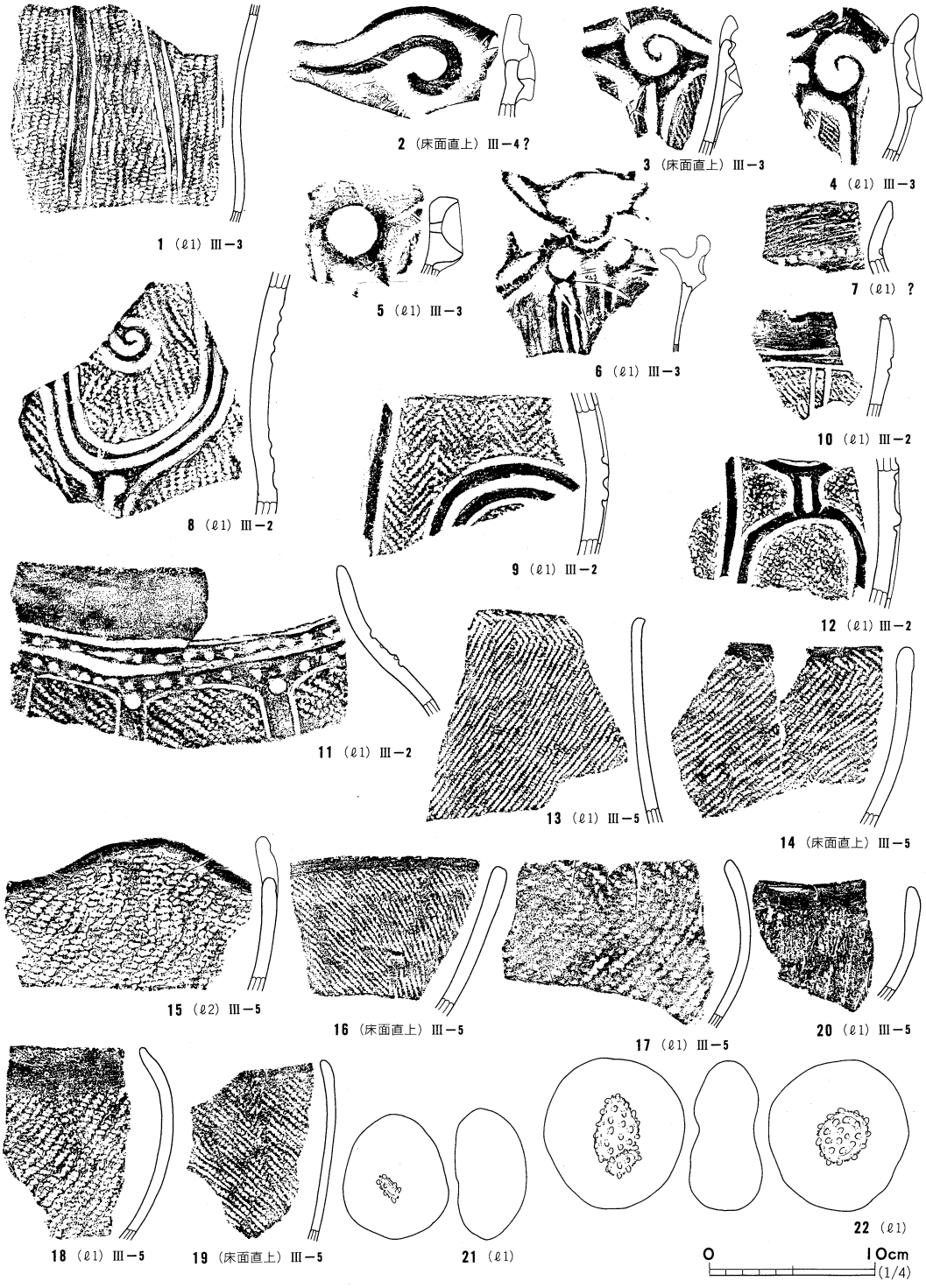


図180　78号住居跡出土遺物（4）

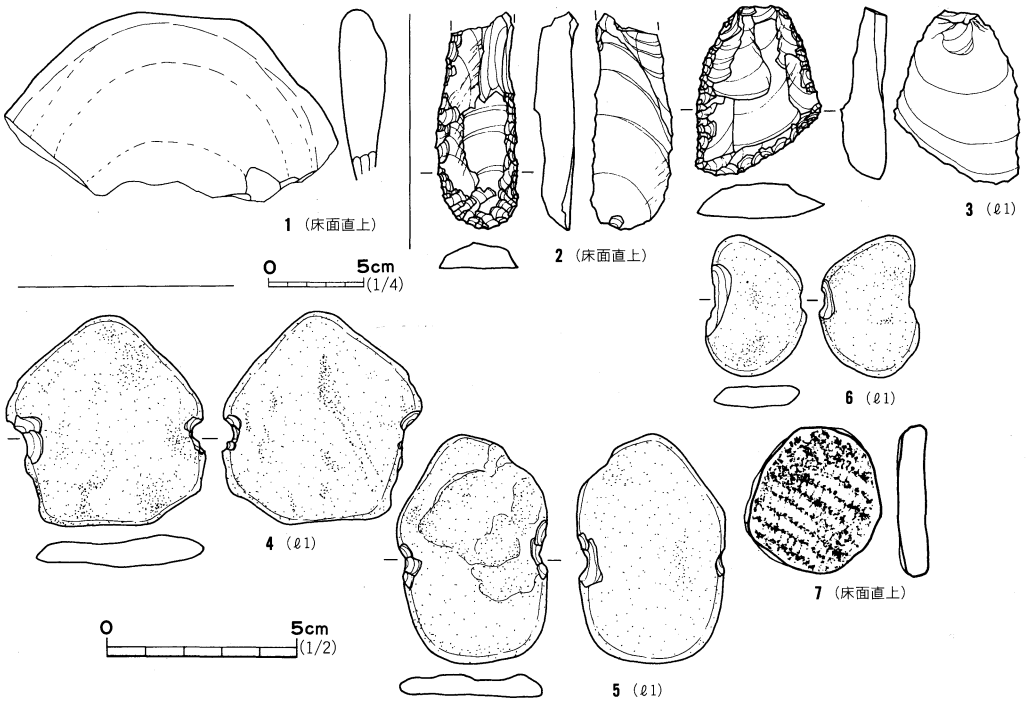


図181　78号住居跡出土遺物（5）

形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器との間に，隙間はほとんど見られない。石組部と前庭部は一連の掘形を有し，ここに褐色土を埋め込んで石組部・前庭部を作り出している。

遺　　物（図177～181）

78号住居跡からは，1,910点の縄文土器片と11点の石器が出土している。縄文土器は図177－1・4に示した炉埋設土器の他に，炉周辺の床面から5㎝ほど浮いて，図177－3・5，図178－1・2・5に示した土器が，潰れた状態で出土している。

図177－1は胴部中位が括れる深鉢で，口縁部は4単位の緩い波状を呈している。文様帯は括れ部で上下に2区分され，口縁部には沈線で区画された渦巻状，胴部には横S字状の単位文が描かれている。口唇部直下には幅の狭い縄文帯が巡り，口縁部の単位文間にはS字状の文様を施している。図178－7～9もこれに近い文様が描かれている。図177－3，図178－2は稜凹線で区画された無文帯で，楕円形状の単位文を描き出すものである。3は浅鉢状の器形を呈する注口土器，2は胴部中位が括れる波状口縁の土器である。2の楕円形区画文の接点は，突起状に突出する。図179－17もこれに近い。

図177－2は樽状の器形を呈する深鉢である。口縁部直下に無文帯を配し，以下に平行する沈線で横位に連続させて，楕円形状・渦巻状の文様を描いている。図178－3・5は，沈線で区画さ

れたS字・C字状の単位文を描くものである。5は器台である。同図9にもS字状の文様が描かれているが，単位文は波状を呈する縄文帯で囲まれている。同図4は小型の鉢で，波状の沈線で胴部を上下に区画している。上部の文様帯には円孔が見られる。

図179－1～4・9は沈線や凹線で，C字・逆U字状の単位文を描く。同図5・6・14・15は沈線で区画された楕円形状の縄文帯を，縦位に施している。同図7・8・11～13・20は，稜凹線で曲線的な文様を描く。図180－2～6は隆帯や隆線で渦巻状の文様を描き出す。3・6の隆線はヒレ状をなしている。同図8～11は沈線・隆沈線で文様を描く。図177－4・5，図178－1，図180－13～19は縄文の施された粗製深鉢である。図177－4・5，図180－13・14は，口縁部直下とそれ以下で縄の回転方向を違えている。図180－21・22は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本住居跡は，5.4×3.8cmの長方形状を呈する竪穴住居跡である。住居施設には2個の小穴と，複式炉が検出された。小穴については，他に本跡に伴うものは検出できなかった。複式炉は中軸線が，住居跡の長辺と直行するように作られていた。本住居跡については，出土遺物から大木10式期の所産と考えている。　　（松　本）

79号住居跡（SI79）

遺　　構（図182・183，写真78・79）

調査区西部北東緩斜面上，ツ～ト10・11GのLV上面で検出された住居跡である。SI68・69・91・105，SK422・423・505・625と重複し，SI68・69・91，SK422・423より古く，SI105，SK505・625より新しい。平面形は円形で，規模は直径7.5m程である。重複のため壁の遺存状態は悪く，南壁で16cmの残存高を測るのみである。床面は固く締まっており，中央部は平坦であるが，周壁際は緩やかに傾斜している。堆積土は色調から2層に区分した。堆積状態はレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断される。

住居跡内からは，小穴と壁溝・炉を検出した。小穴は総数29個検出された。このうち，周壁の内側を巡るP1～P11が主柱穴と考えられる。これらの主柱穴は長径90～120cm，深さ35～84cmと規模が大きい。その他の小穴は，直径30～40cm，深さ12～52cmで，その作られた位置から壁柱穴と考えられる。壁溝は周壁際に作られ，断続するものの住居跡内をほぼ全周している。規模は幅17～30cm，床面からの深さは3～10cmである。住居跡南西部でP5とP8を繋ぐように，幅18cm，深さ17cmの壁溝状の溝が検出された。

炉は複式炉で，前庭部は北壁中央部に接している。遺存状態は良いが，土器埋設部の先端は重複するSK422・423によって壊されている。平面形は二等辺三角形状を呈し，規模は現況で長さ260cm，幅200cmを測る。主軸はほぼ真北を示す。土器埋設部は幅90cm程で，埋設土器の周囲

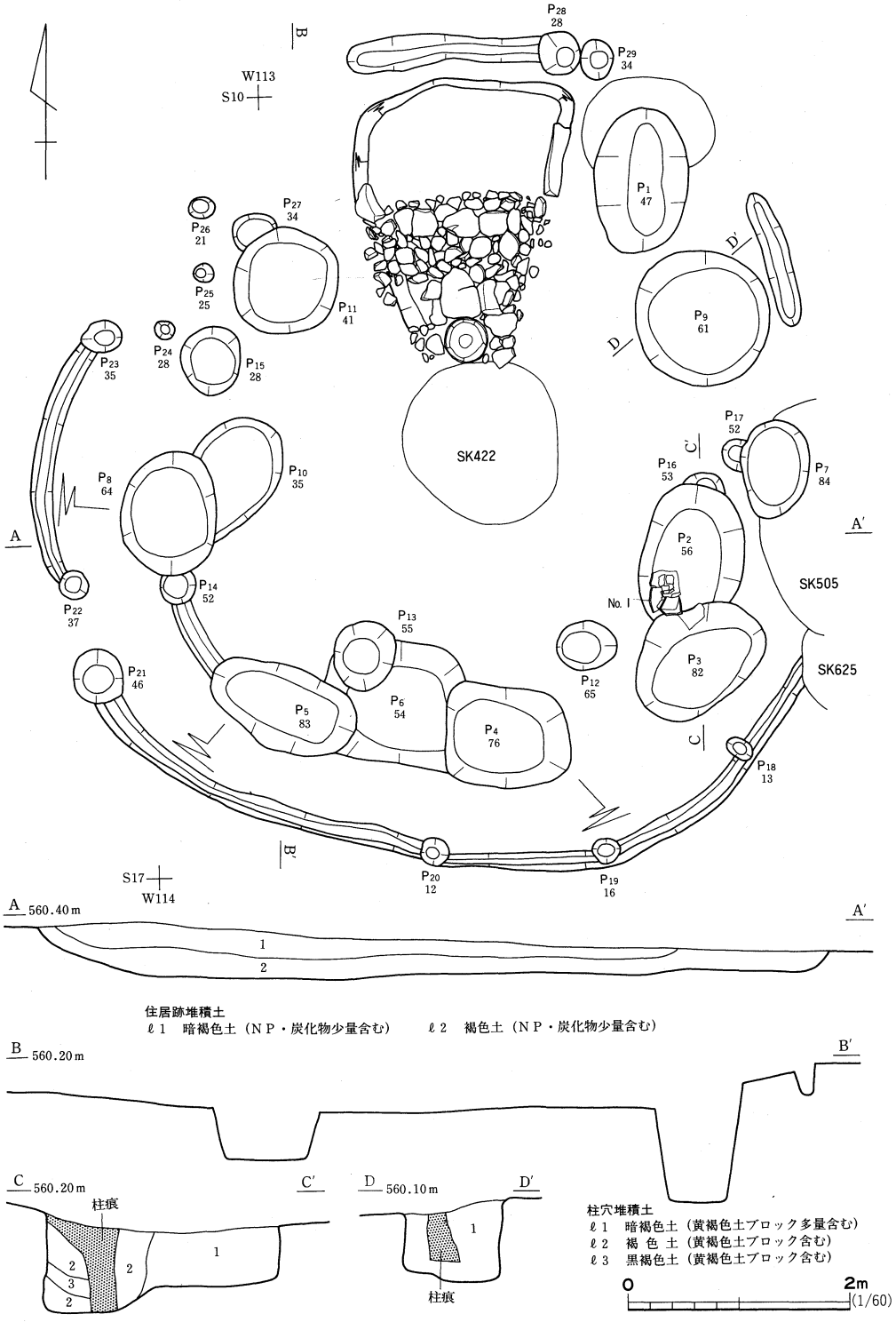

P28
28
P29
34
W113
S10
B
P1
47
P27
34
P26
21
P25
25
P11
41
D′
D
P9
61
P24
28
P15
28
P23
35
SK422
P17
52
C
C′
P16
53
P7
84
P8
64
P10
35
A
A′
P2
56
SK505
P14
52
P22
37
No. I
P13
55
P3
82
SK625
P21
46
P12
65
P5
83
P6
54
P4
76
P18
13
B′
S17
W114
P20
12
P19
16
A 560.40m
A′
1
2
住居跡堆積土
ℓ１　暗褐色土（ＮＰ・炭化物少量含む）　　ℓ２　褐色土（ＮＰ・炭化物少量含む）
B 560.20m
B′
C 560.20m
C′
柱痕
2
3
2
2
1
D 560.10m
D′
1
柱痕
柱穴堆積土
ℓ１　暗褐色土（黄褐色土ブロック多量含む）
ℓ２　褐　色　土（黄褐色土ブロック含む）
ℓ３　黒褐色土（黄褐色土ブロック含む）
0
2m
(1/60)

図182　79号住居跡

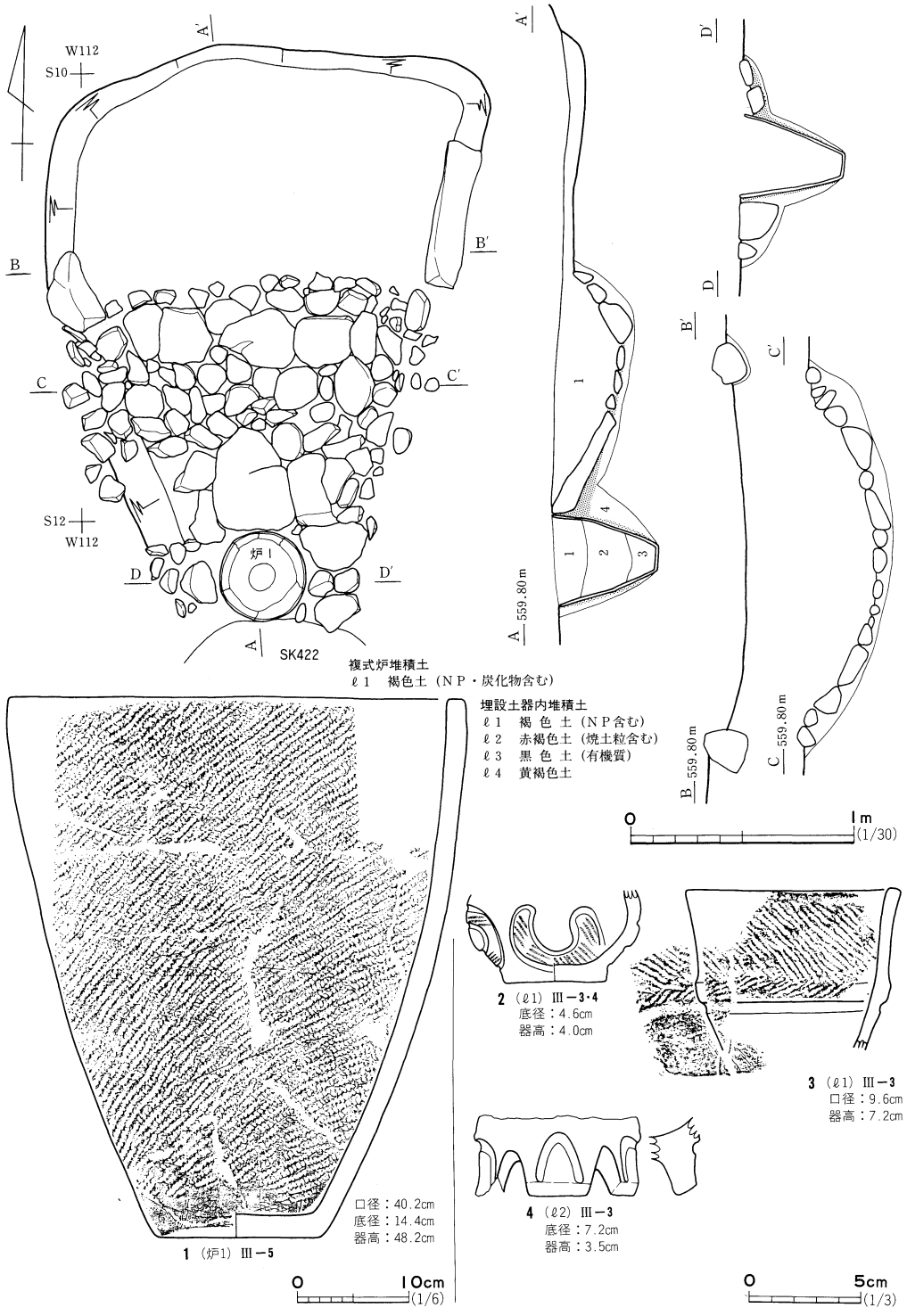


図183　79号住居跡複式炉と出土遺物（1）

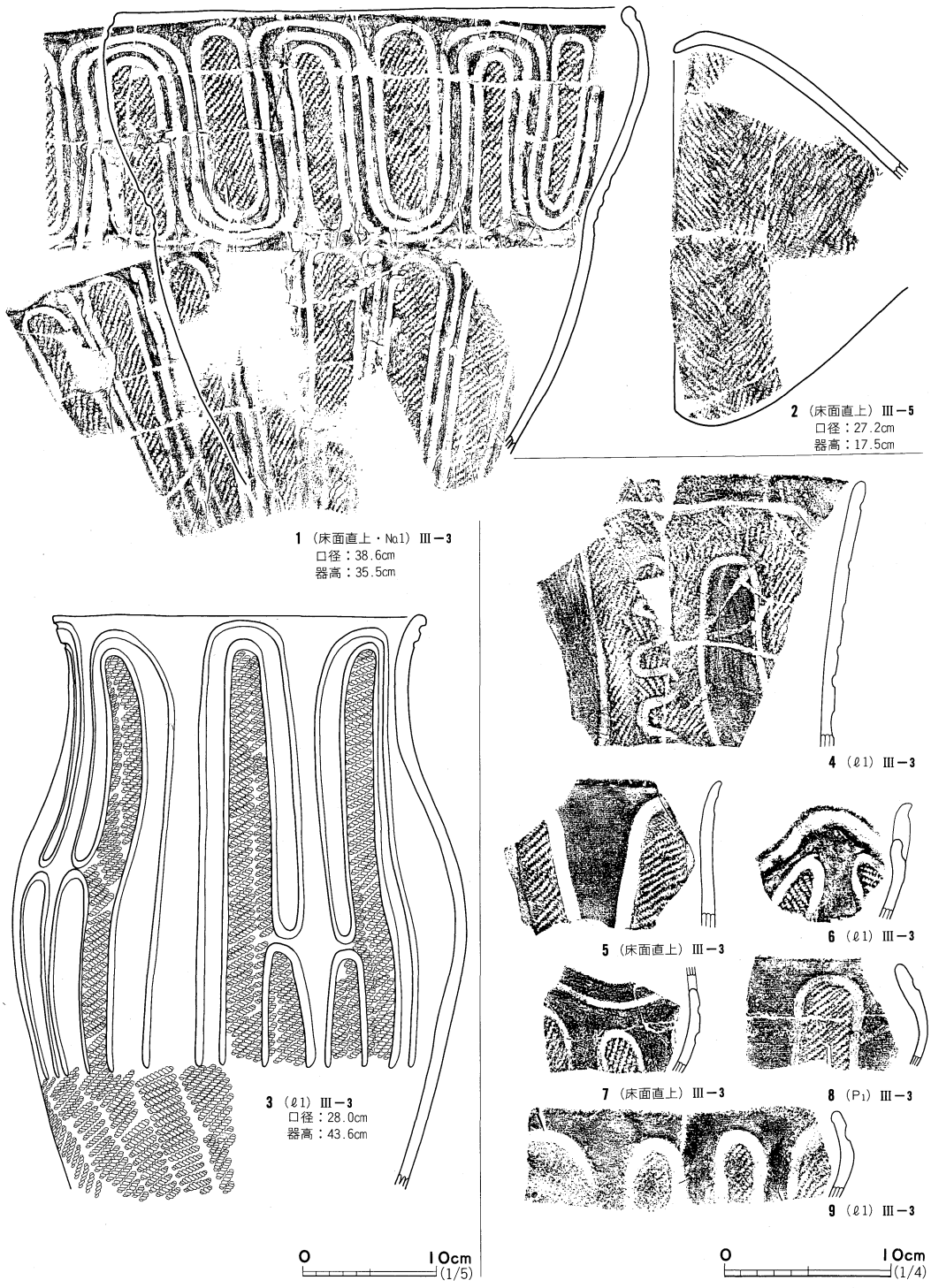


図184　79号住居跡出土遺物（2）

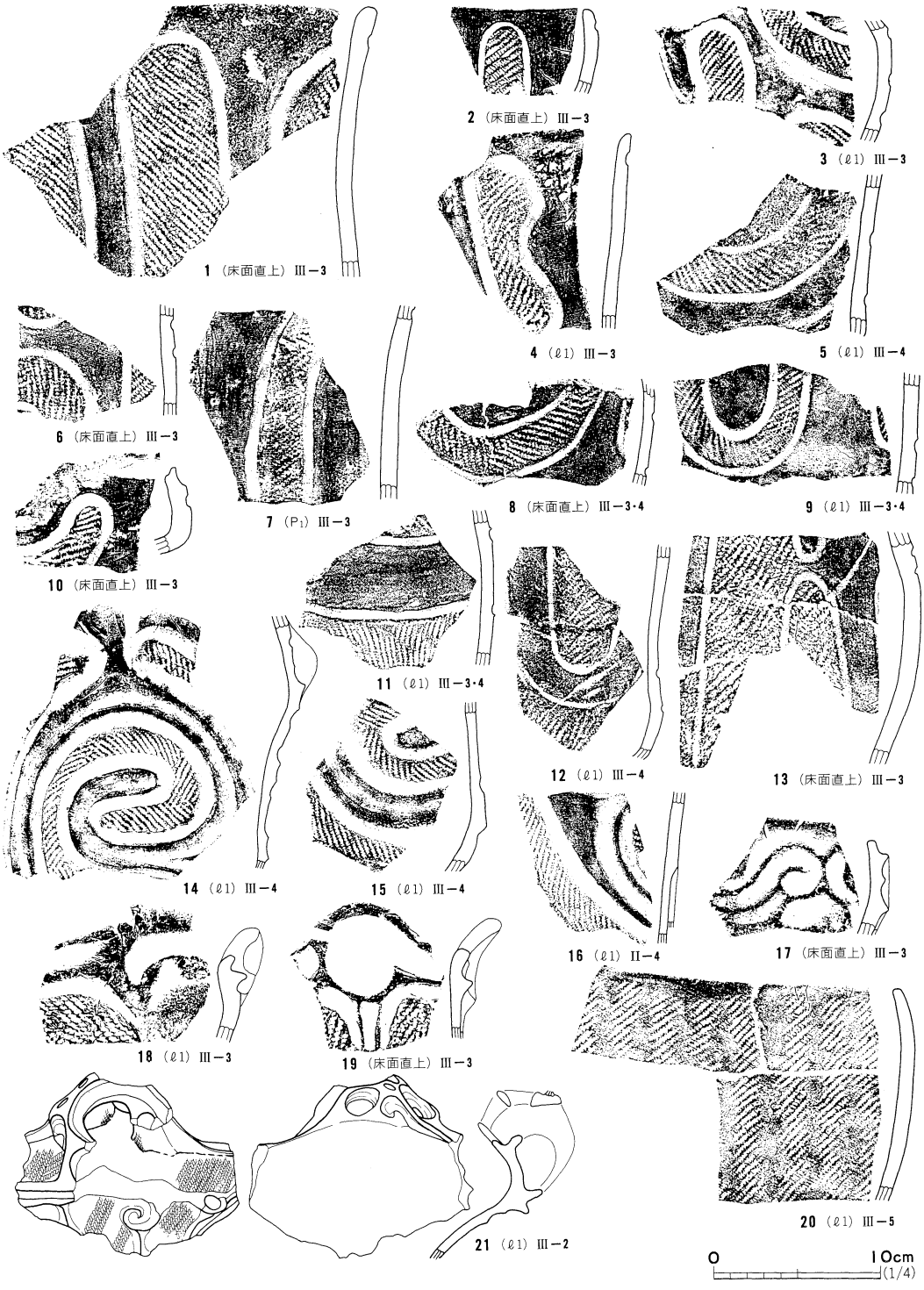


図185　79号住居跡出土遺物（3）

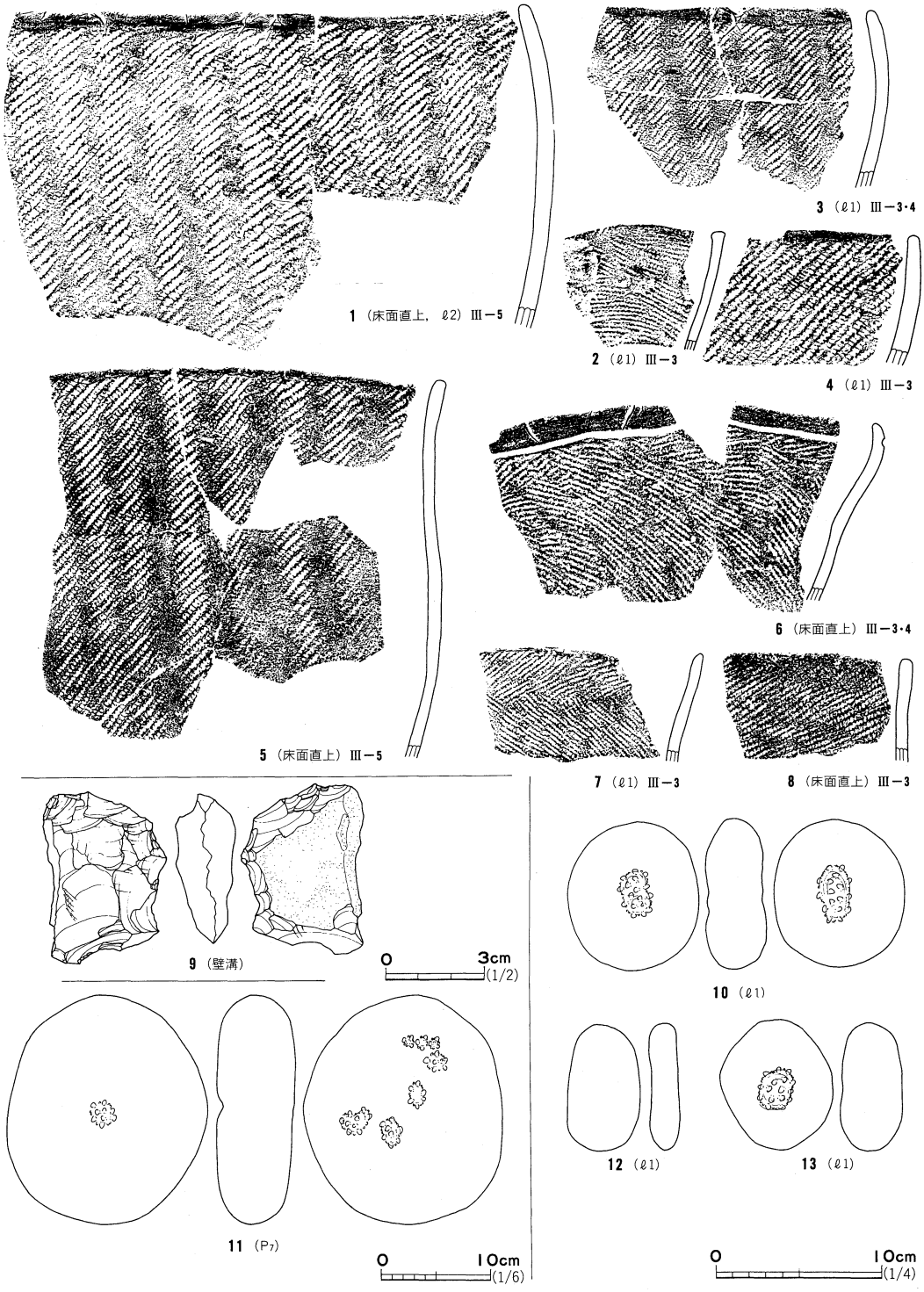


図186　79号住居跡出土遺物（4）

に拳大の石を設置している。石組部は長さ115㎝，幅170㎝程で，底面及び側面には拳大の石を，土器埋設部・前庭部と接する部分には，大型の偏平な石を設置している。主軸方向の断面形は，土器埋設部側から緩やかに下り前庭部側が比較的急に立ち上がる，逆「へ」の字状を呈している。床面からの深さは，最大29㎝を測る。前庭部は長さ100㎝，幅190㎝程で，北壁に向かってやや広がる。床面を10㎝程掘り込んだもので，石組部と接する部分の周壁には大型の石を1個設置し，縁石としている。底面は平坦で，壁の立ち上がりは緩い。

炉内堆積土は，埋設土器下部に炭粒を多く含む黒色土，埋設土器上部及び石組部・前庭部には褐色土が堆積していた。炉の焼けは強く，特に埋設土器周縁の焼土化は著しい。炉の掘形は，意図する各施設の形状・規模に合わせて掘り込まれ，断面形は階段状を呈している。

遺　　物（図183～186）

本住居跡からは，土器片1,330点と石器9点が出土した。図183－1は，炉の埋設土器である。口縁部が緩やかに内湾する大型の粗製土器で，全面に縄文が縦位施文されている。同図2・3は小型の土器である。2は沈線で区画されたC字状の単位文が4単位施される。同図4は台付土器の脚部である。図184－1は，胴部中位に括れを持つ深鉢で，長楕円形の単位文が配され，口縁部ではこの単位文を囲むように波状の沈線文を施している。同図2は体部が直線的に外傾し，口縁部が「く」の字状に内湾する鉢で，口縁部直下とそれ以下で回転方向を変えて縄文を施している。同図3は胴部上位に括れを持ち口縁部が外反する深鉢で，C字状の単位文と長楕円文とで文様を構成している。

図184－4～図185－13は，沈線でC字・U字状の単位文を描くものである。図185－14～16は台形状に肥厚する無文帯で，渦巻状の曲線的な文様を描いている。単位文内の縄文は，充填施文されている。同図17～19は，ヒレ状を呈する隆線で渦巻文を描くものである。図185－20～図186－8は縄文の施された粗製土器である。縄文を間隔をあけて縦位に施すものが見られる。同図9は不定形石器である。両面から調整を加えている。同図10・11・13は凹部を持つ磨石，同図12は偏平な軽石である。特に加工された様子や，使用痕は認められない。

ま　と　め

本遺構は，直径7.5ｍの円形を呈する住居跡である。住居施設には，複式炉と円形に配された柱穴が検出された。壁溝が2条見られること，柱穴に重複があることから住居跡の拡張があったと考えられる。所属時期は，出土土器から大木9式期と判断している。　　（福　山）

80号住居跡（ＳＩ80）

遺　　構（図187，写真80・81・101）

調査区西側東緩斜面上，タ・チ11・12Ｇに位置する竪穴住居跡である。検出面は重複する遺

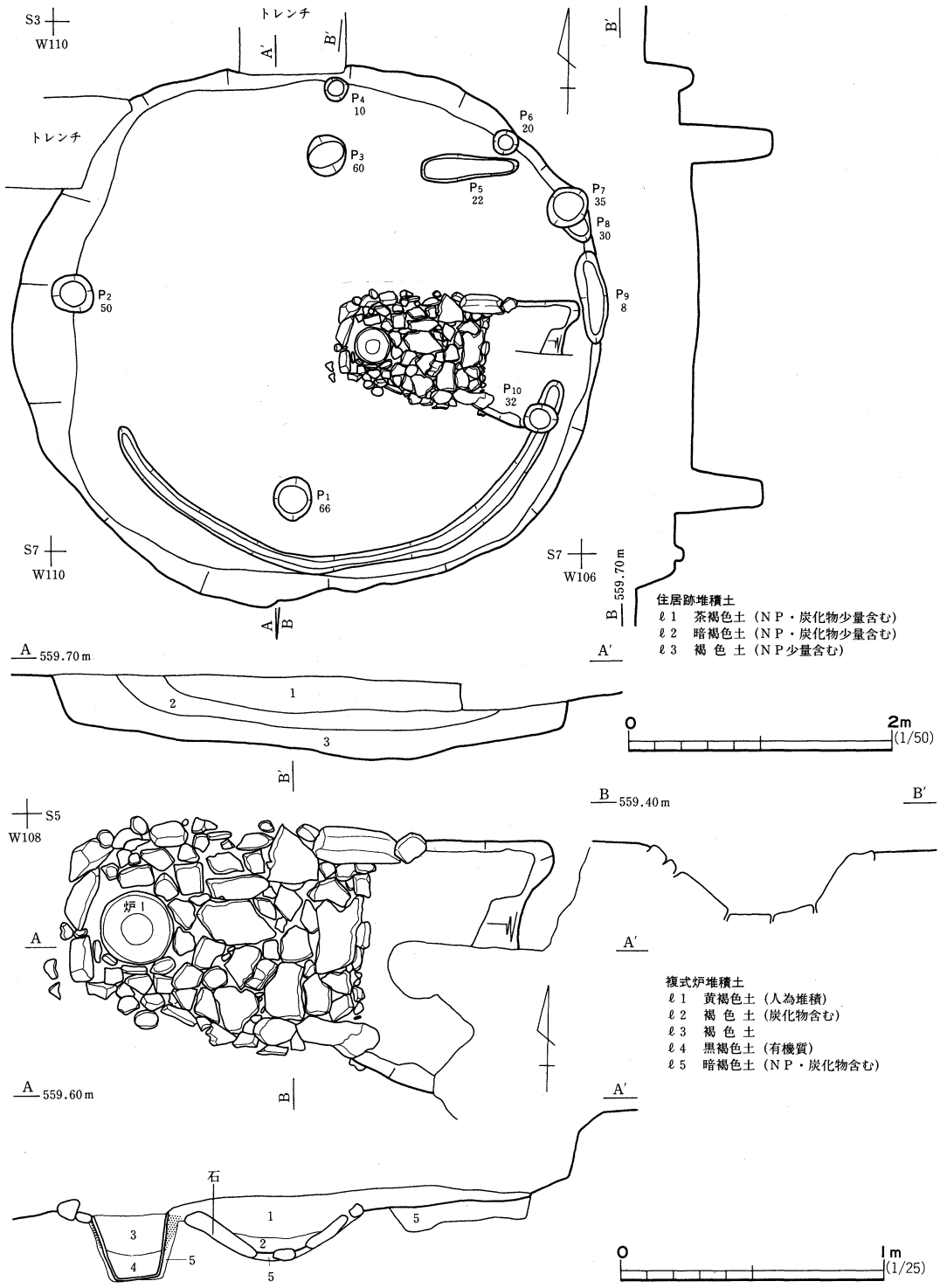


図187　80号住居跡と複式炉

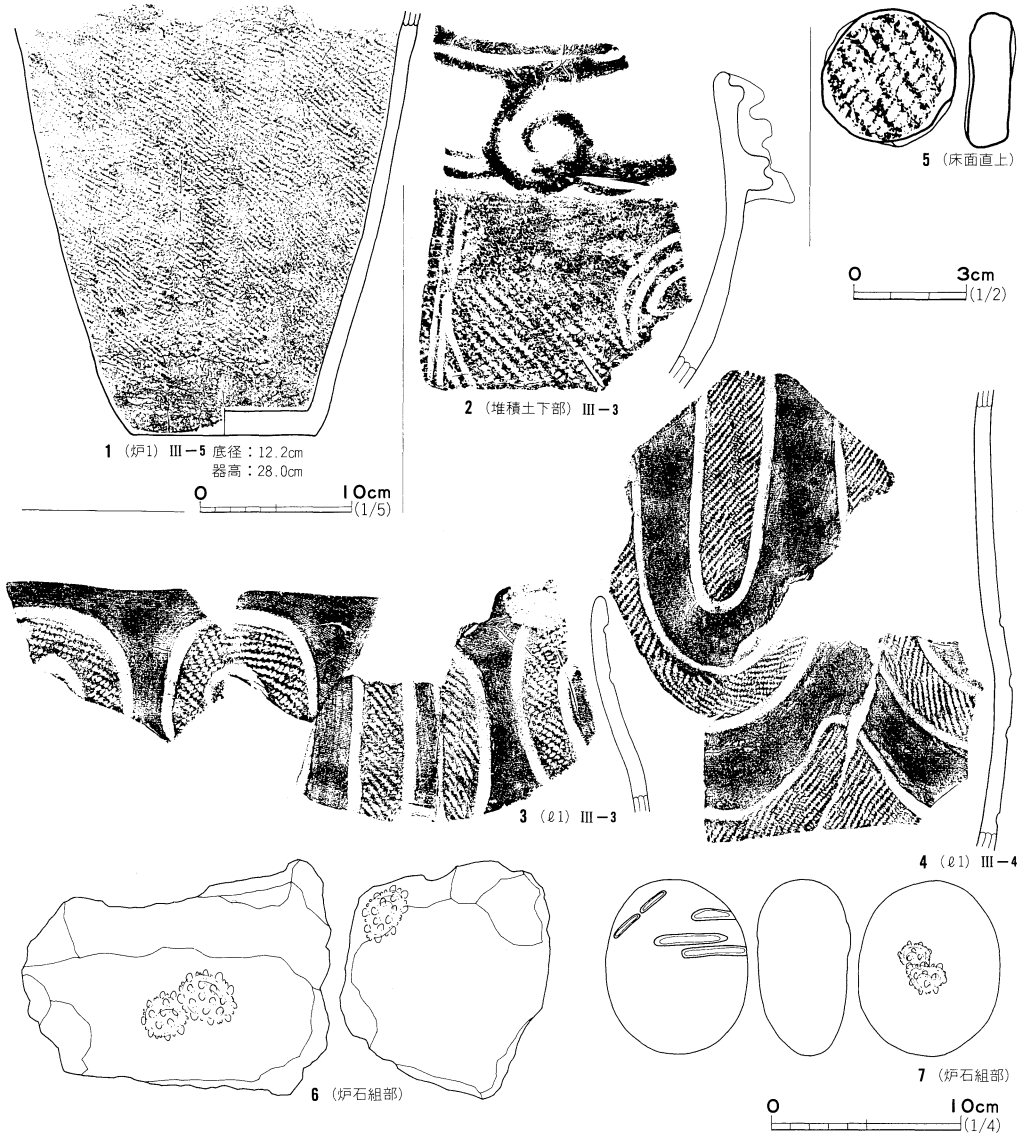


図188　80号住居跡出土遺物

構の堆積土上面である。ＳＩ105・114，ＳＫ432・435と重複し，本住居跡が新しい。平面形は隅丸方形状を呈し，規模は東西4.5ｍ，南北4.0ｍである。住居跡の北壁は，ほぼ東西を示している。周壁の立上がりは急で，検出面からの深さは最大67㎝を測る。床面は固く締まっており，住居跡中央部はいくぶん低くなっている。堆積土は色調から3層に区分され，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断される。

住居内からは，小穴と壁溝・炉を検出した。小穴は10個検出された。これらの小穴内にはす

べて褐色土が堆積していた。P1～P3は壁際に作られたもので，規模は直径26～34㎝，深さ50～66㎝である。これらについては，それぞれ相対する位置に正三角形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えられる。炉前庭部に近接して作られたP7・P10も，その位置・規模から本跡に伴う柱穴と考えているが，深さは30㎝程とP1～P3に比べ浅い。壁溝は，住居跡南半部から検出された。住居跡南壁から10～50㎝程離れた位置に作られ，住居跡平面形と異なり正円に近い弧を描いている。床面からの深さは，6～15㎝である。

炉は複式炉で，前庭部は東壁中央に取り付いている。炉の主軸は，東西方向を示す。規模は全長180㎝を測り，平面形は長方形状に近い。土器埋設部は台形状を呈し，規模は長さ40㎝，幅75㎝程である。土器埋設部の外縁には，10×20㎝程の石を設置し，これと埋設土器の隙間には，拳大の石を面を揃えて配置している。石組部は長さ70㎝，幅80㎝程で，平面形は方形に近い。人頭大の偏平な石とその隙間に小型の石を設置している。石組部の断面形は，鍋底状を呈している。床面から石組部底面までの深さは，最大25㎝を測る。前庭部は長さ70㎝，幅100㎝程で，東壁に向かってやや広がる形状を呈し，床面からの深さは10㎝程である。前庭部と石組部が接する部分には，15×30㎝程の柱状の礫を据え，縁石としている。

石組部及び前庭部の堆積土の上部には，ブロック状の黄褐色土の堆積が見られた。この土については人為的に埋め戻された土と考えている。埋設土器下部には，炭粒を多く含む黒褐色土が堆積していた。炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。石組部については熱を受けた痕跡は見られないが，石組部底面の石にはススの付着が認められる。炉の掘形は，意図する各部位の形状に合わせて作られており，断面形は階段状を呈している。

遺　　物（図188）

本住居跡からは，土器片250点と石器3点が出土している。図188－1以外は，すべて堆積土中から出土したものである。図188－1は炉の埋設土器で，縄文を縦位施文している。同図2は口縁部に隆帯で渦巻文を描いている。同図3・4は沈線によりアルファベット状の単位文を描くもので，単位文内には縄文を充填施文している。4には，胴部を上下に区画する波状文が見られる。同図5は土器破片を利用した土製円盤である。同図6・7は凹部を持つ磨石である。7の片面には沈線状の痕跡が見られる。

ま　と　め

本遺構は隅丸方形を基調とする住居跡で，住居施設には複式炉と三角形状に配置された3個の主柱穴がある。柱穴は，この他に炉前庭部に近接して2個認められた。また，住居跡南半部では，壁から若干離れた位置に壁溝がみとめられたことから，本住居跡については一部拡張されている可能性もある。所属時期は，出土土器から大木10式期と判断される。　　（福　山）

81号住居跡（ＳＩ81）

遺　　構（図189，写真82）

調査区西側の南東緩斜面上，テ～ナ13・14ＧのＬⅣ上面で検出された大型の住居跡である。西壁中央ににゆがみが認められるが，堆積土中に明確な立ち上がりが認められず，床面にも段差がないため1軒の住居跡と判断した。ＳＫ409・452・468と重複し，ＳＫ409より古く，ＳＫ452・468より新しい。平面形は隅丸長方形を基調とし，規模は東西4.6ｍ，南北11.6ｍを測る。周壁は急峻に立ち上がり，検出面からの深さは最大15㎝である。南壁は斜面下のため流失し，遺存してない。床面は平坦であるが，北から南に緩やかに傾斜している。堆積土は3層に区分した。堆積状態は，壁際から流れ込んだ様子が見られることから，自然堆積と判断した。

住居内からは，壁溝と小穴及び炉を検出した。壁溝は西壁際から3条，住居跡中央北寄りから1条，南端部から1条検出された。壁溝の規模は幅10～26㎝，深さ6～8㎝である。小穴は総数21個検出された。Ｐ3・Ｐ5・Ｐ6～Ｐ8・Ｐ13～Ｐ18・Ｐ21は，深さ40㎝以上を測る。これらの小穴は，住居跡長辺とほぼ平行して作られ，東西にそれぞれ対応するように配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。炉は床面が焼けただけの地床炉で，住居跡中軸線上に並ぶような状態で3基検出された。1炉は60×160㎝，2炉は60×150㎝，3炉は50×160㎝とほぼ同一の規模をもつ。炉の焼けは強く，炉上面から5～7㎝下まで熱変化が認められた。

遺　　物（図190・191）

本住居跡からは，土器片430点と石器7点が出土している。図190－1・2は床面から潰れた状態で出土しているが，その他のものは堆積土中から破片状態で出土したものである。図190－1は4単位の波状口縁の深鉢である。口縁部には，隆沈線により連弧状の文様を描いている。この連弧状文は波頂部直下で一部渦巻文を描く。胴部には平行沈線や蛇行沈線を垂下させている。同図2はキャリパー状の深鉢である。口縁部には4単位の把手を配し，把手と把手の間にも突起が付けられている。文様はこの把手と突起を隆帯で弧状に繋ぎ，その隙間に沈線文を密接して施している。胴部にも沈線を縦位に密接させて施している。

同図3～13，図191－1・2・7は隆沈線で文様が描かれるもので，図190－13は頸部に無文帯が認められる。図191－3～5は沈線によって渦巻文を描いている。同図10・11は沈線による長楕円形状の単位文内に，刺突文や縄文を施している。同図12～14は口縁部に付けられた把手で，いずれも渦巻文が施されている。図191－15は石皿，同図16・17は凹部を持つ磨石である。16は周縁部にも敲打痕状の使用痕が見られる。

ま　と　め

本遺構は，隅丸長方形を基調とし，長軸が11.6ｍを測る大型の住居跡である。南北方向に拡

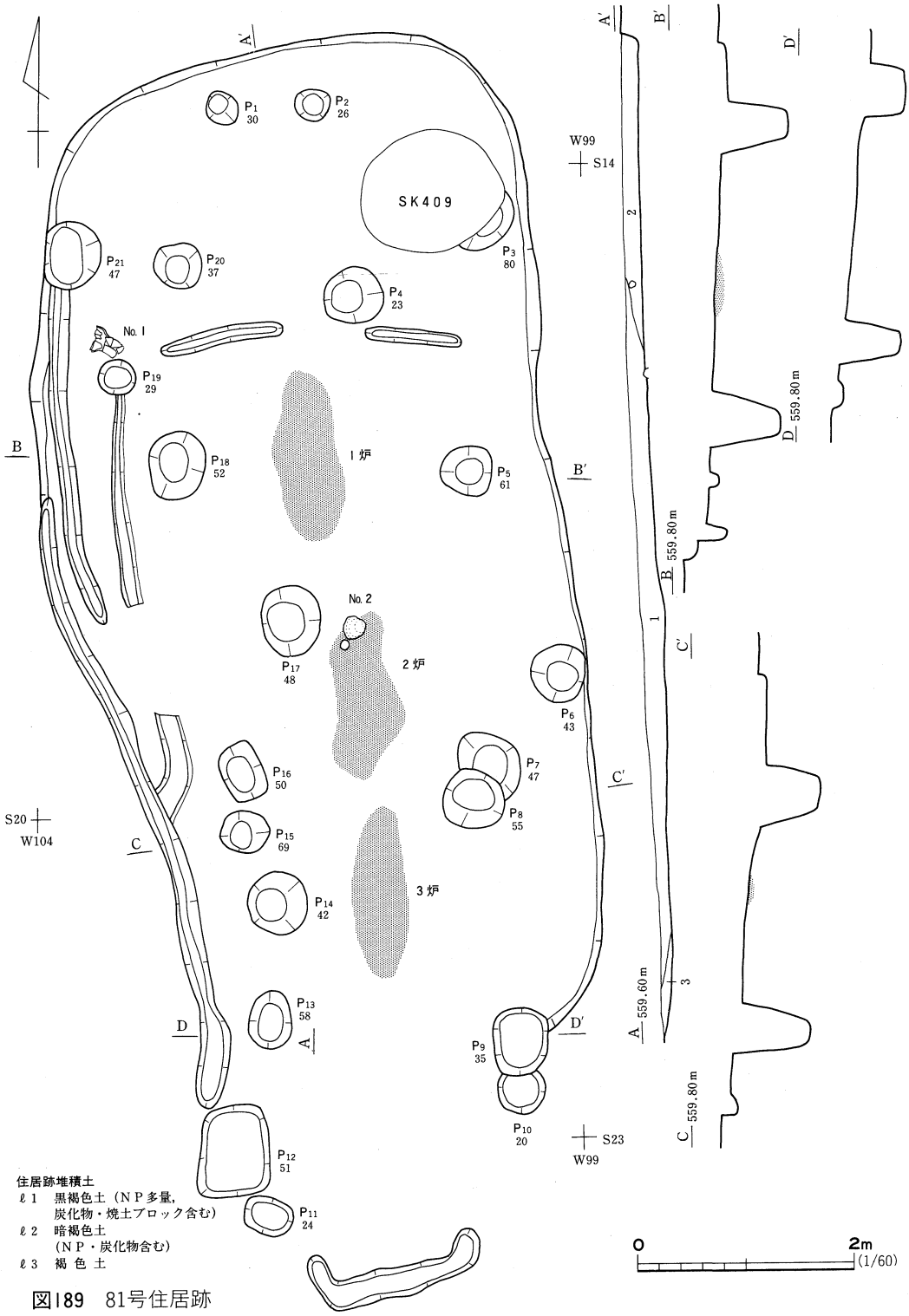

P1 30
P2 26
SK409
P3 80
P21 47
P20 37
P4 23
No. 1
P19 29
P18 52
1炉
P5 61
No. 2
P17 48
2炉
P6 43
P16 50
P7 47
P15 69
P8 55
S20
W104
3炉
P14 42
P13 58
D
A
D'
P9 35
P10 20
S23
W99
P12 51
P11 24
W99
S14
A'
B'
C'
D'
A 559.60m
B 559.80m
C 559.80m
D 559.80m
1
2
3
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（NP多量，炭化物・焼土ブロック含む）
ℓ2　暗褐色土（NP・炭化物含む）
ℓ3　褐色土
0
2m
(1/60)

図189　81号住居跡

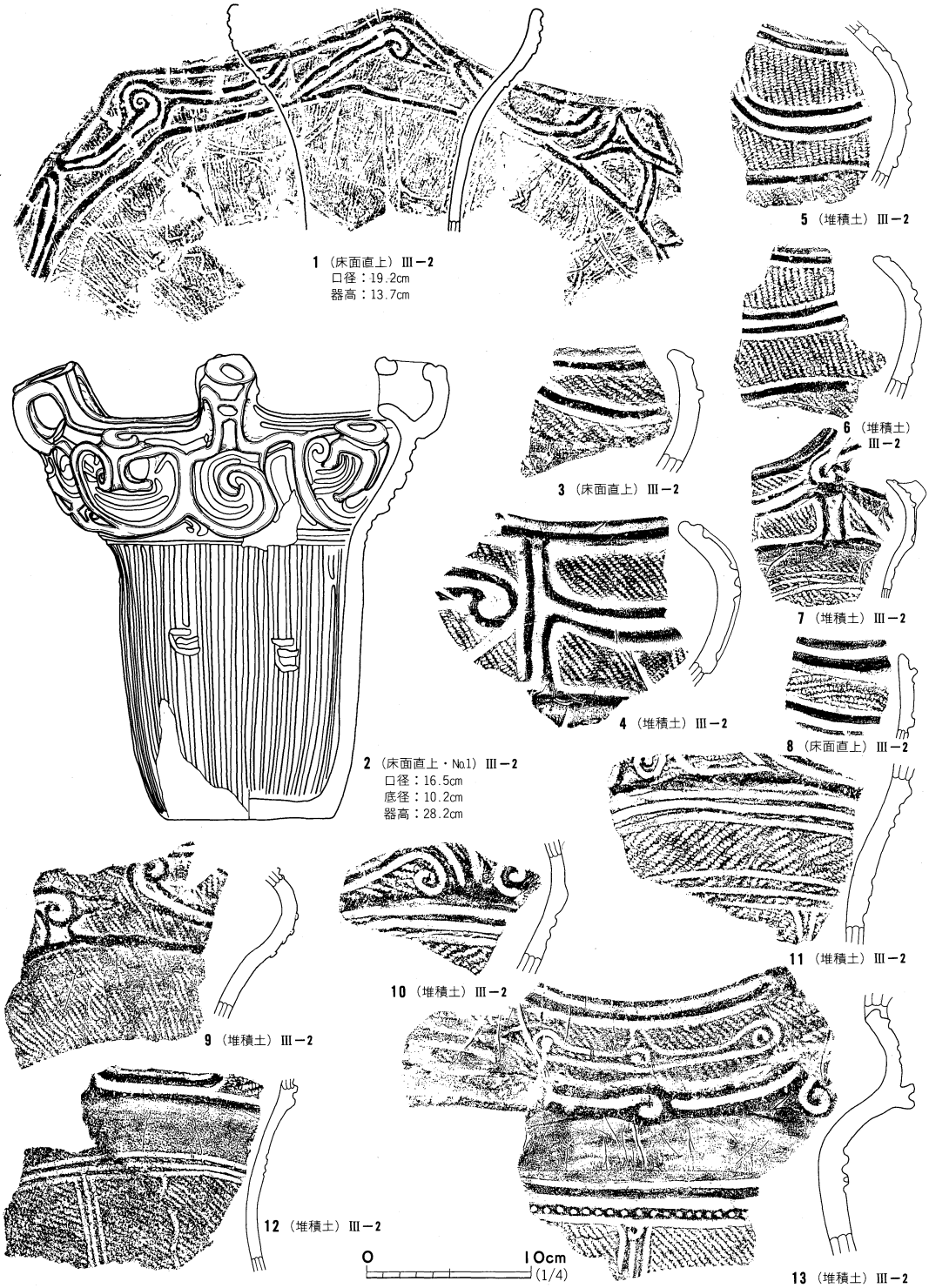


図190　81号住居跡出土遺物（1）

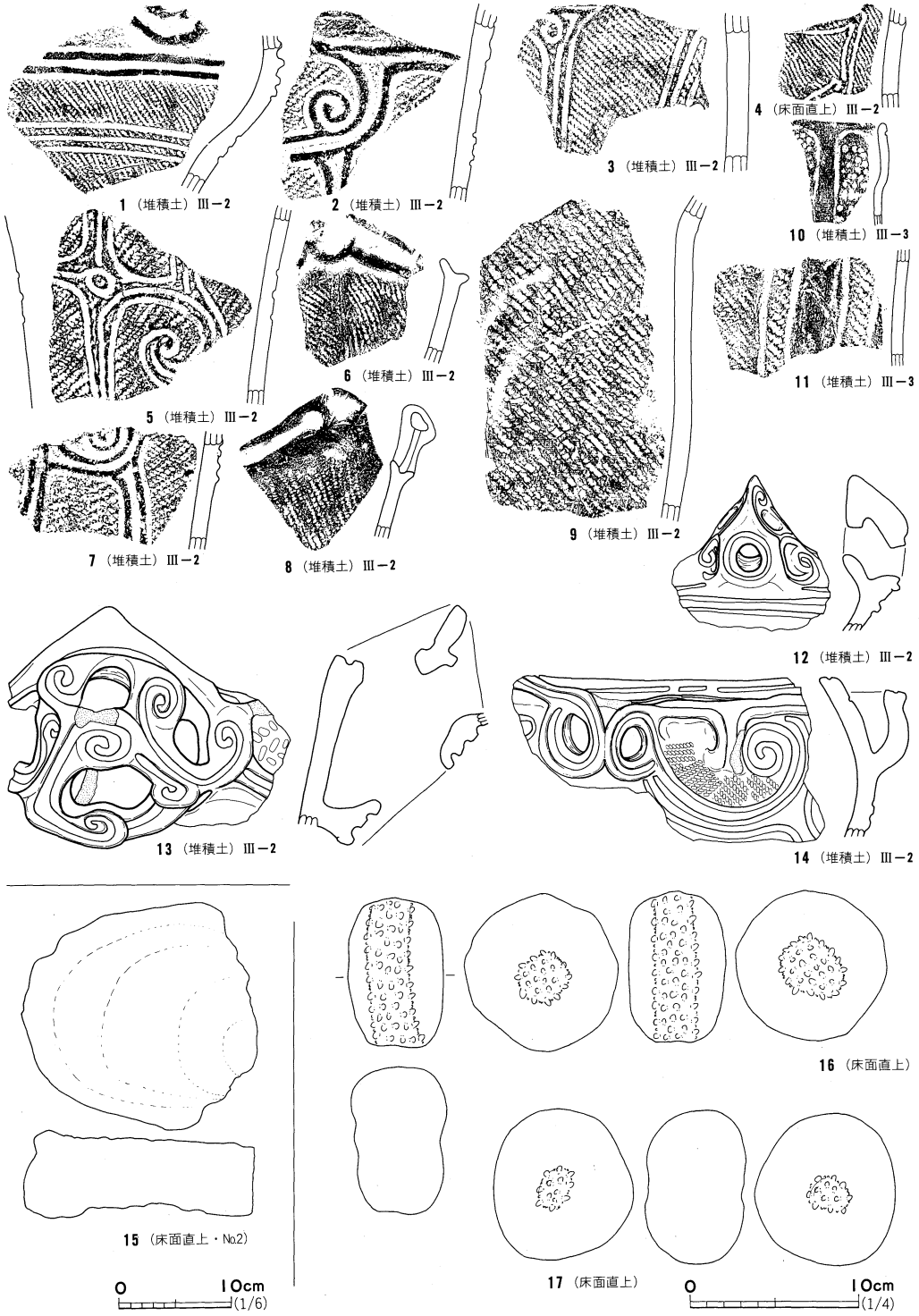


図191　81号住居跡出土遺物（2）

張あるいは改築が行われている。住居跡の中軸線に地床炉を３基有し，柱穴は住居跡長辺と平行するように配置されている。所属時期は，出土土器から大木8b式期と判断している。（福　山）

82 号 住 居 跡（ＳＩ82）

遺　　構（図192，写真83）

調査区中央部西寄りの遺構密集域，チ16・17Ｇで検出した竪穴住居跡である。検出面はＬⅢｂ下部である。ＳＩ77，ＳＫ410・413・414・585・586と重複し，いずれの遺構よりも本住居跡が新しい。遺存状態は良好とは言えず，住居跡東部は明瞭な壁の立ち上がりを捉えられなかった。また，当初平面形が確認できず，本住居跡の南側に重複するＳＩ77を先に調査したため，結果的に住居跡南側の壁は検出できなかった。

平面形は，遺存する周壁の状態と柱穴と思われる小穴の配列から，隅丸方形を基調とするものと考えている。遺存する北西壁は，緩く弧を描いている。規模は現況で東西6.6m，南北5.0mである。壁の立ち上がりはやや急であるが，壁高は最大16㎝と低い。床面は平坦であるが，北西から南東に緩やかに傾斜し，最大比高差は24㎝である。遺構内堆積土は２層に大別され，ＬⅢｂに土質が近似する暗褐色土が主として堆積していた。

住居内からは，11個の小穴と１基の炉を検出した。11個の小穴の内，Ｐ1～Ｐ7は直径が40～56㎝，深さは41～64㎝でＰ8～Ｐ11より一回り大きい。配列に明瞭な規則性は見受けられないが，炉を囲むように配置されていることから，主柱穴である可能性が高い。小穴内には主に暗褐色土が堆積している。炉は石囲炉で，住居跡中央に位置している。規模は83×129㎝，平面形は東西が長い長方形である。炉の縁石には小児拳大から頭大の亜角礫が19個見られるが，縁石の一部は失われ一巡しない。縁石は個々に一回り大きい掘形内に据えられている。炉の焼けは強いが，縁石周辺はほとんど焼けていない。焼土化は，焼土上面から７㎝下まで及んでいた。

遺　　物（図192）

82号住居跡からは，僅かに90点の縄文土器片と１点の石器が出土しただけである。縄文土器は，住居跡堆積土ℓ１や小穴内から小破片の状態で出土している。図192－１は，口縁部が内傾する深鉢である。口唇部と口縁部下端には，沈線を施した太い隆帯を貼り付けている。同図2～5は沈線によって文様が描かれるもので，５には蛇行沈線が施されている。同図６は凹部を持つ磨石で，石囲炉の縁石として使用されていた。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪く，正確な平面形・規模は不明である。遺存する周壁・柱穴の配列から判断すれば，平面形は隅丸長方形と推定され，規模はおよそ６×7.5ｍ程度と考えられる。炉は長方形の石囲炉で，住居跡の長軸上に位置している。所属時期は，炉の形態と遺構の重複状況

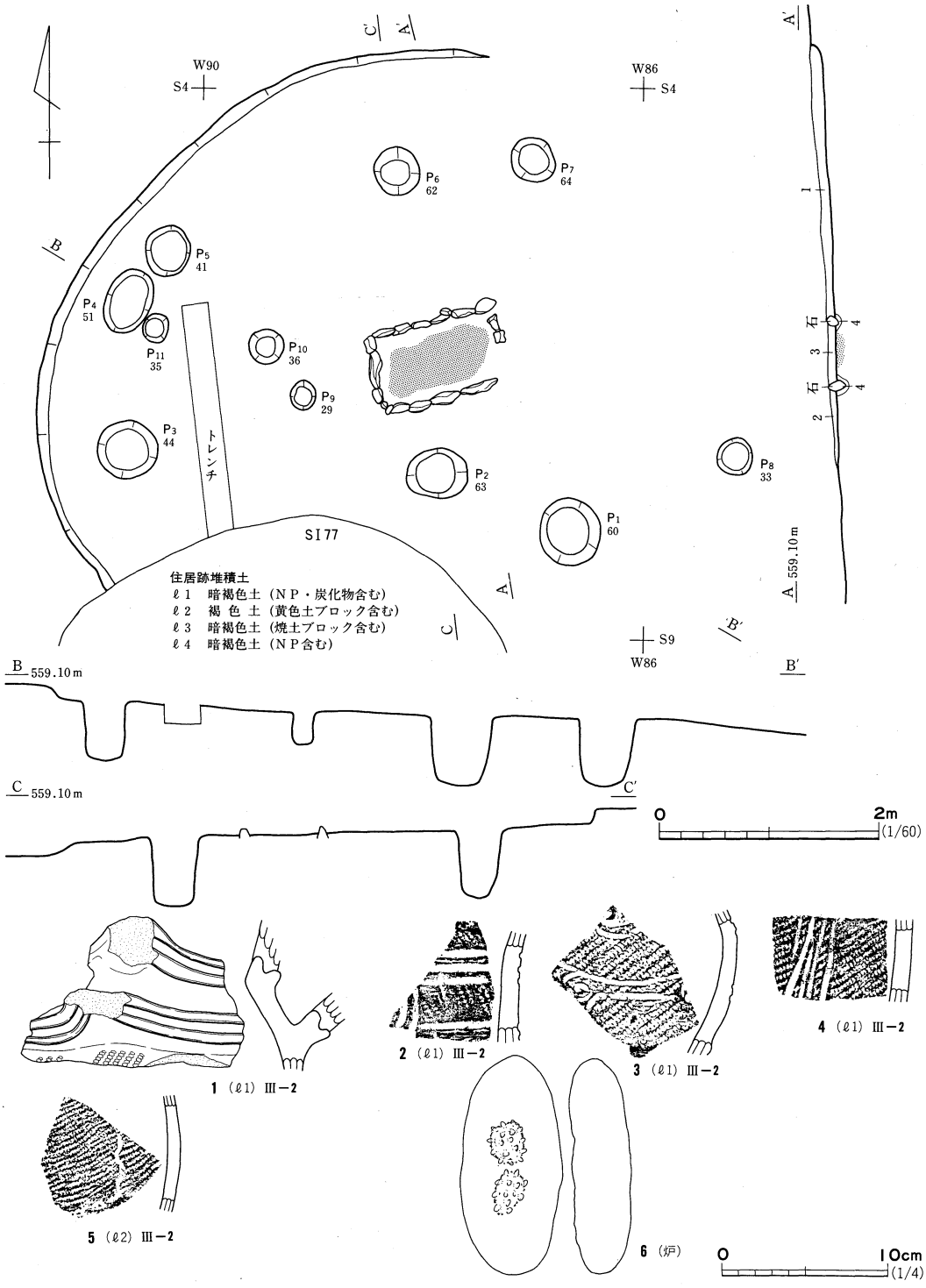


図192　82号住居跡と出土遺物

及び出土遺物から，大木8b式期の所産と考えている。　（丹　治）

83号住居跡（ＳＩ83）

遺　　構（図193，写真84）

調査区北西部，ト76ＧのＬＩ直下に堆積するＬＶ上面で検出された竪穴住居跡である。他の遺構との重複はない。遺存状態は悪く，炉と柱穴が検出されただけである。床面の標高は560.90ｍで，これは調査区北西部の遺構密集地区における住居跡としては，ＳＩ70・73と同じく最も標高が高い位置に作られている。

平面形・規模については，周壁が遺存していないため不明である。床面は平坦であるが，地山の傾斜と同様，南西から北東に緩やかに傾いている。堆積土については，床面上には黒色土を主体とする土が薄く堆積していたことを確認している。

小穴は6個検出した。小穴内にはすべて，黒色のシルト質土が堆積していた。Ｐ1～Ｐ3は直径が30～50㎝，深さは45～59㎝である。他の小穴は，直径が24～36㎝，深さは17～34㎝とＰ1～Ｐ3に比べてやや小さい。Ｐ1・Ｐ2・Ｐ3は二等辺三角形状に配置され，他の柱穴に比べて深さもあることから，本住居跡の主柱穴と判断した。Ｐ4・Ｐ5・Ｐ6については，主柱穴の補助的なものと考えられる。これらの柱穴は，全体として円形状に配置されている。

炉は，Ｐ2とＰ3を結んだ線の中央に位置している。遺存状態は悪く，長方形の石組部と，これに接して1個の埋設土器が検出されただけである。炉の中軸線は真北から45°西に傾いている。炉の規模は長さ105㎝，幅91㎝を測る。石組部の規模は，中軸線上で長さ59㎝，幅91㎝である。石組部の縁石は全周しているが，内部に石敷きは認められなかった。縁石には8～15㎝の礫が用いられている。石組部底面の深さは，床面から20㎝を測り，断面形は台形状を呈している。炉の焼けは，埋設土器の周囲のみに認められた。埋設土器内には黒色の微粒な炭質物を含むシルト質土が堆積していた。

遺　　物（図193）

出土した遺物は，埋設土器1点，土器片103点である。図193－1は炉の埋設土器である。他はすべて床面上に薄く堆積する黒色土から出土した。図193－1は，縄文が施された粗製土器で，胴部上半と底部を欠損する。同図2は口縁部がやや内傾するもので，凹線直下とそれ以下で縄文が回転方向を変えて施文されている。同図3は粗製土器であろう。同図4は横に隆沈線が施されている。同図5は稜線で区画文を描くものであろうか，縄文は充填施文される。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪いため，正確な平面形や規模は不明である。柱穴の配列から判断すれば，長径4ｍ程の楕円形を基調とした竪穴式住居跡と考えられる。主柱穴は，三角形状に配列さ

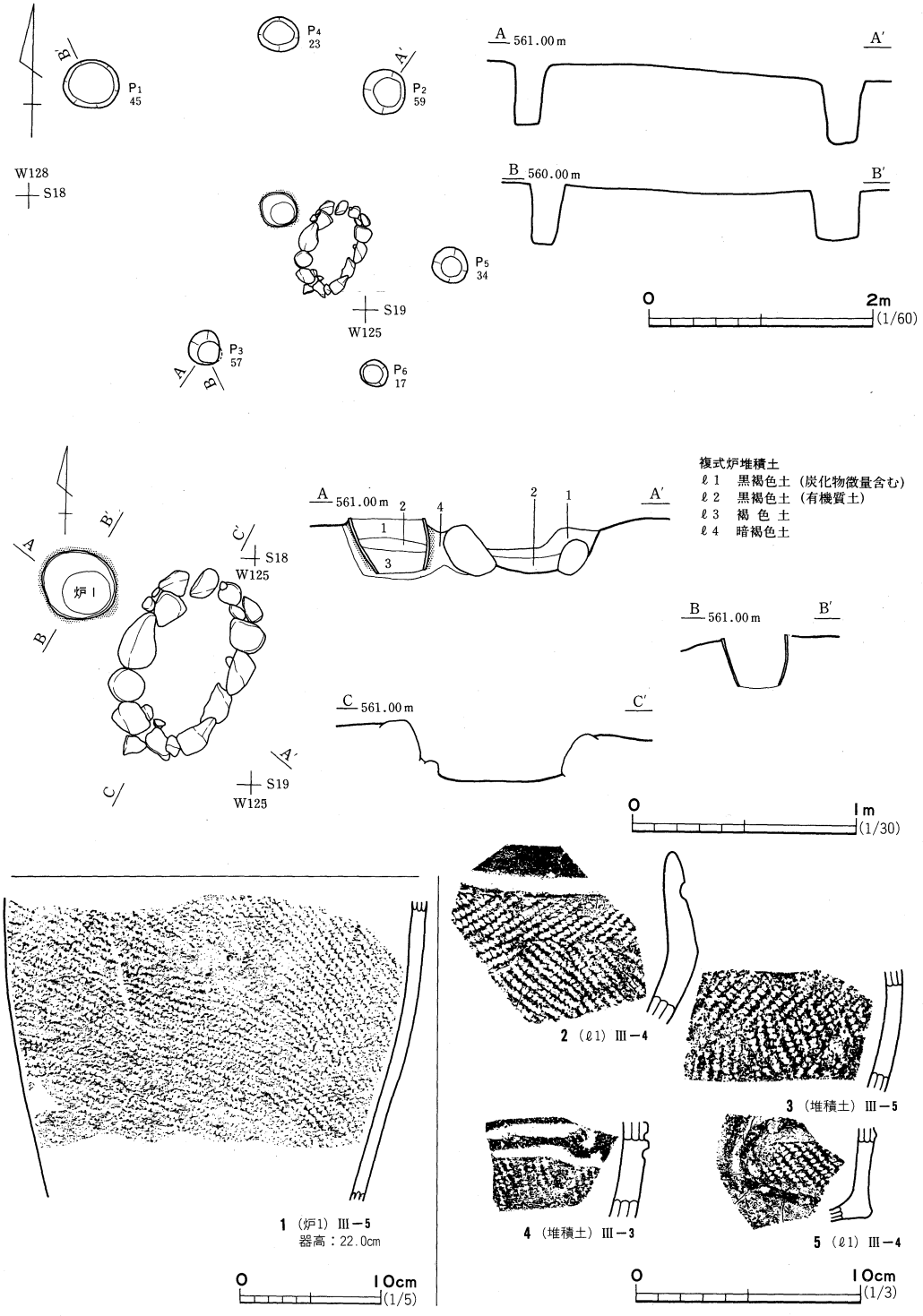


図193　83号住居跡と複式炉・出土遺物

れ，炉は前庭部を持たない小型の複式炉であった。本住居跡の所属時期は，出土遺物から大木10式期と考えている。（香　内）

84 号 住 居 跡（ＳＩ84）

遺　　構（図194，写真85）

調査区中央部西寄りの遺構密集域，ツ・テ16・17Ｇで検出した竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ及びＳＩ77の床面である。ＳＩ77とＳＫ433・434・453と重複し，ＳＩ77より古く，他の遺構よりも本遺構が新しい。遺存状態は良好で，周壁はすべて確認することができた。

平面形は隅丸の長方形を基調とするが，北壁は弧状をなし，西壁は北壁と接する部分で強く括れている。規模は南北7.2ｍ，東西は西壁の括れ部分で3.9ｍ，最大は南壁付近で5.0ｍを測る。周壁の立ち上がりは西壁が最も急で，他の壁はやや緩い。壁の残存高は北壁で５～22㎝，東壁で11～26㎝，南壁で６～19㎝，西壁で19～30㎝を測る。床面は北から南に傾斜し，比高差は最大45㎝である。住居跡北端部に規模96×115㎝，深さ31㎝の楕円形の窪みがあるが，全体的に床面は平坦である。住居跡中央のやや北西寄りの床面には，踏み締まりが顕著に認められた。遺構内堆積土は３層に区分した。主体となるℓ２は暗褐色土で，ＬⅢｂの土質に近似する。堆積状態については壁際からの流れ込みが観察されることから，自然堆積と判断している。

住居内からは，小穴・壁溝・炉が検出された。柱穴と考えられる小穴は27個検出された。小穴内の堆積土は，その多くがパミス粒を含む暗褐色土であるが，Ｐ1・Ｐ6・Ｐ16にはパミス粒がほとんど含まれていない。小穴は直径13～61㎝，深さ10～84㎝の規模を有する。そのうちＰ1～Ｐ12・Ｐ15の13個は直径27～61㎝，深さ41㎝以上で主柱穴として十分の規模を持つ。Ｐ13・Ｐ14　・Ｐ16～Ｐ27は，直径が40㎝を超えるものもあるが，多くは直径20～25㎝，深さは10～37㎝と上述の小穴群と比較して小さい。位置的には周壁・周溝付近にあることから，壁柱穴と考えている。

壁溝は住居跡の東部と北部の，周壁から50～130㎝ほど離れた位置から検出された。幅は11～20㎝，床面からの深さは最大16㎝，平均10㎝である。壁溝とＰ6・Ｐ7・Ｐ17は重複するが，明確な切り合い関係は認められなかった。壁溝内には，小穴内堆積土と同じ暗褐色土が堆積している。炉は何等施設を持たない地床炉である。住居跡のほぼ中央にあり，炉の長軸は住居跡の長軸と平行している。規模は72×215㎝で，平面形は長楕円形状を呈している。炉の焼けは強く，焼土上面から最大７㎝下まで焼土化が及んでいる。

本住居跡については，壁溝が周壁から離れた位置にあり，西壁には強い括れが見られる事から，東と北に拡張を伴う建て替えをしたものと判断している。拡張前の住居跡は，西壁の南⅔と南壁・壁溝によって範囲が捉えられる。平面形は隅丸の長方形を呈し，規模は南北5.9ｍ，東西4.2ｍを測る。拡張後の住居跡は，遺存する周壁すべてによって捉えられ，南北7.2ｍ，東西5.0ｍ

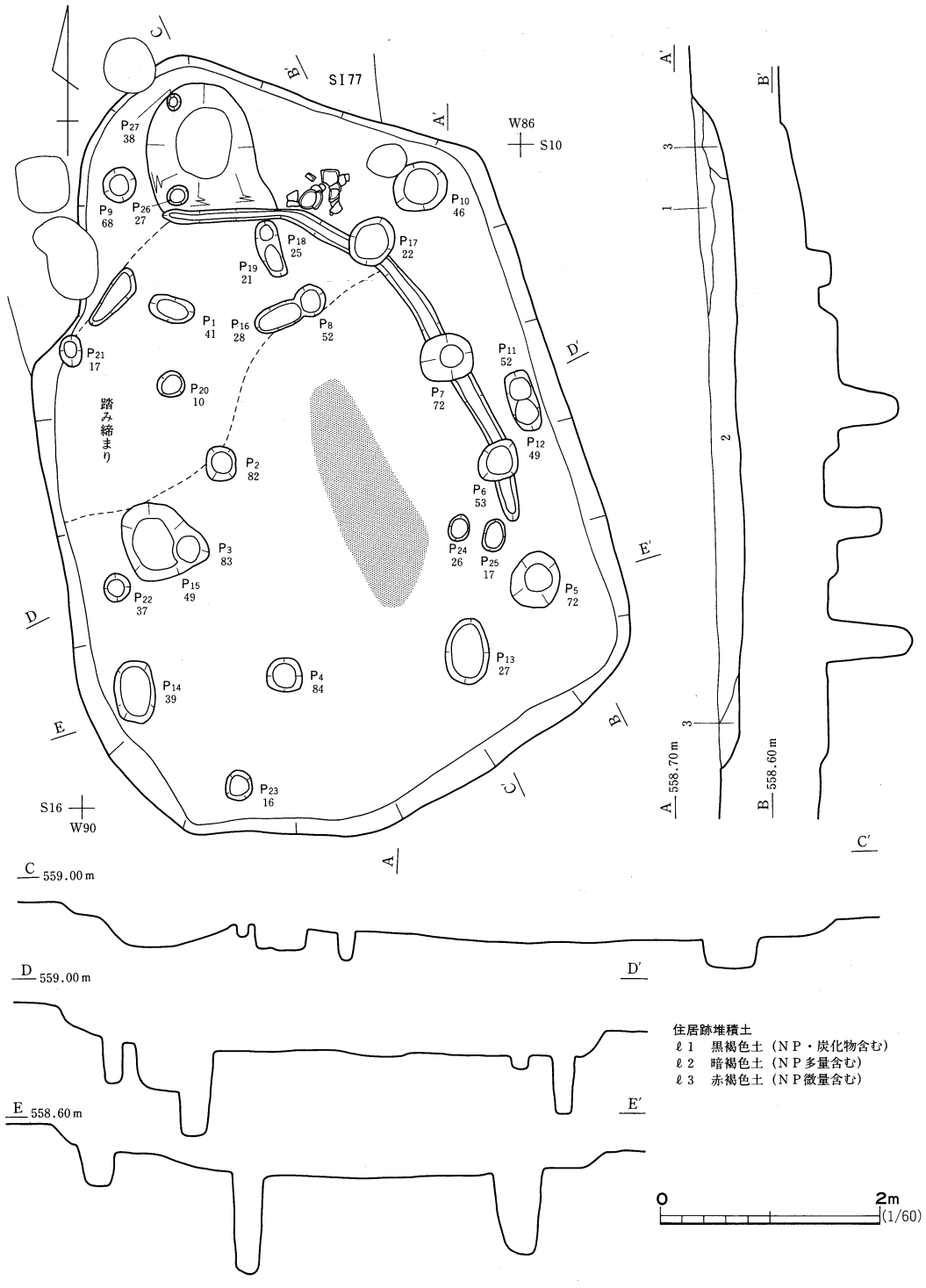

SI77
W86
S10
S16
W90
踏み締まり
P1 41
P2 82
P3 83
P4 84
P5 72
P6 53
P7 72
P8 52
P9 68
P10 46
P11 52
P12 49
P13 27
P14 39
P15 49
P16 28
P17 22
P18 25
P19 21
P20 10
P21 17
P22 37
P23 16
P24 26
P25 17
P26 27
P27 38
A 558.70m
B 558.60m
C 559.00m
D 559.00m
E 558.60m
住居跡堆積土
ℓ1　黒褐色土（NP・炭化物含む）
ℓ2　暗褐色土（NP多量含む）
ℓ3　赤褐色土（NP微量含む）
0
2m
(1/60)

図194　84号住居跡

図195　84号住居跡出土遺物（1）

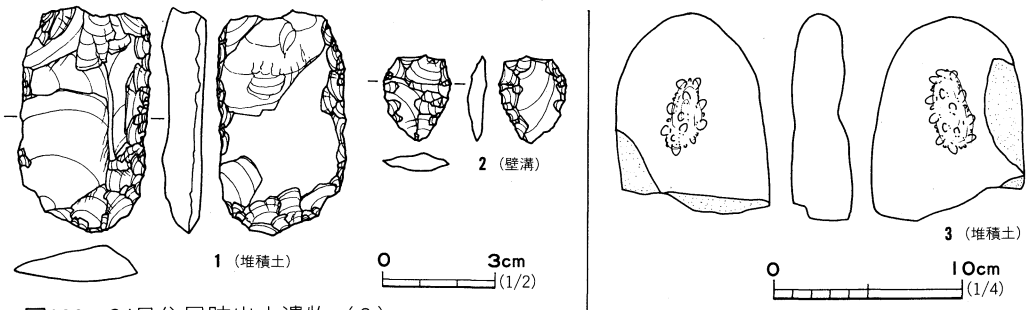


図196　84号住居跡出土遺物（2）

の規模を持ち，不整の長方形状を呈している。小穴は主柱穴であると判断した13個のうち，拡張部分に位置するP9～P12が，拡張後の住居跡の主柱穴として加えられたと考えている。

拡張前の住居範囲内に位置する，主柱穴P1～P8・P15と壁柱穴については，個々に時期を決定できるだけの材料が得られなかった。このため，拡張前・拡張後にどの小穴が伴うものか不明である。あるいは，継続して柱穴として利用された小穴もあると考えている。炉は住居跡内に1基確認されただけであることから，建て替え後も同じ炉を使用していたものと判断している。

遺　　物（図195・196）

84号住居跡からは，370点の縄文土器片と4点の石器が出土している。縄文土器片は，住居跡堆積土中や床面直上から，散在して出土したものがほとんどである。図195－1は深鉢の底部で，アヤクリ文が横位に施されている。同図2は口縁部が緩く内湾する深鉢で，口唇部と口縁部下端に沈線を施した隆帯を施している。この隆帯間を繋ぐように中空の把手が付く。口縁部には，縄圧痕文が施文されている。

同図3～5は，キャリパー状の深鉢である。隆沈線で口縁部文様を描き，頸部には平行沈線が横走する。3・4の渦巻文は突起状に器外面に突出している。3・5は頸部に無文帯を有している。同図6・7は胴部に沈線で渦巻文を描いている。同図8は胴部から口縁部にかけて緩く内湾する，樽状の深鉢である。隆帯によって口縁部文様帯の下端を区画し，区画内には隆帯に沿って刺突文を施し，その中に縦位の短沈線を充填している。口縁部文様帯下端の隆帯と胴部上端の隆帯の間にも刺突文を施している。胴部は，沈線によって曲線的な文様が描かれている。同図9～11は太い沈線によって曲線的な文様を描く。9・11は口縁部が内湾し，把手が付く。同図12は口唇部直下にスリットを施し，以下に半截竹管の凹面による連続刺突文を横位に施している。同図13は，単節縄文を施した粗製土器である。図196－1は，側縁部に調整剝離を加えた不定形石器，同図2は石鏃の未製品であろうか。同図3は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は，検出された周壁と周溝の位置から，北と東に拡張を伴う建て替えが行われたもの

と考えている。柱穴の配列は，小穴を建て替え以前と以後に分離できなかったため，明確には捉えられなかった。しかし，本遺跡の長方形を呈する竪穴住居跡の多くが，住居跡の平面形同様長方形状に柱穴を配置していることから，本住居跡もそれと共通するものと推測している。本住居跡の所属時期は，出土遺物から大木8b式期と考えている。（丹　治）

85号住居跡（ＳＩ85）

遺　　構（図197，写真86）

ツ4・5ＧのＬＶ上面で検出した竪穴住居跡である。遺存状態は悪く，住居跡西半部の壁が検出されただけである。ＳＩ66・70と重複し，本住居跡が最も古い。平面形は東半部が不明であるが，遺存部の形状から，北東－南西方向が長い楕円形状を呈するものと推定される。規模は現況で西壁が3.4ｍ，北壁は2.5ｍを測る。壁の立ち上がりは比較的急で，検出面から床面までの深さは西壁で9㎝である。床面は若干西に向かって傾いているが，平坦で硬く締まっている。住居跡内には褐色土が堆積し，混入物等から2層に分層した。堆積状況は周壁際からの流れ込みの様相を呈していることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は18個の小穴と，炉・立石がそれぞれ1基検出された。小穴は，直径20㎝程度のものが最も多い。床面からの深さは，最も深いＰ16が57㎝，最も浅いＰ18は17㎝である。小穴の堆積土はいずれも褐色土である。これらの小穴は住居跡南西部から多く検出され，周壁から50㎝程離れて作られているものが多い。主柱穴については，小穴の配列に規則性が見られないため特定できないが，規模・小穴底面の標高がほぼ同じで，直角をなすように配置されているＰ1・Ｐ5・Ｐ16が，本住居跡の主柱穴である可能性が高いと考えている。住居跡北東部からは，Ｐ1と対応すると考えられる小穴は検出されなかった。

炉は住居跡中央，やや北東寄りから検出された。炉の外縁を土器の破片を立てて区画した土器片囲炉であるが，一部円礫も用いられている。外縁部の土器片は欠失している部分が多く遺存状態は悪いが，平面形は長方形状をなすものと推定される。遺存値は長軸160㎝，短軸80㎝程である。炉内の焼けは強く，焼土上面から5㎝下まで熱変化が見られた。立石は住居跡の南東部，Ｐ1とＰ3を結んだ線のやや外側から検出された。設置されていた石は直径17㎝，長さ42㎝の石英安山岩質の石で，床面から10㎝程顔を出していた。石自体に加工痕は見られなかった。

遺　　物（図197）

本住居跡からは，縄文土器片106点と石器2点が出土した。図197－1は，炉を区画していた土器の破片である。図197－1・4は，隆沈線で文様を描いている。1は，口縁部文様帯に端部が渦巻状を呈する横位の区画文を配している。同図2は，稜の発達した隆線で大柄な渦巻文を施文したもので，渦巻部は口縁から突出し，突起状を呈している。同図5は，短軸の両端および長軸の

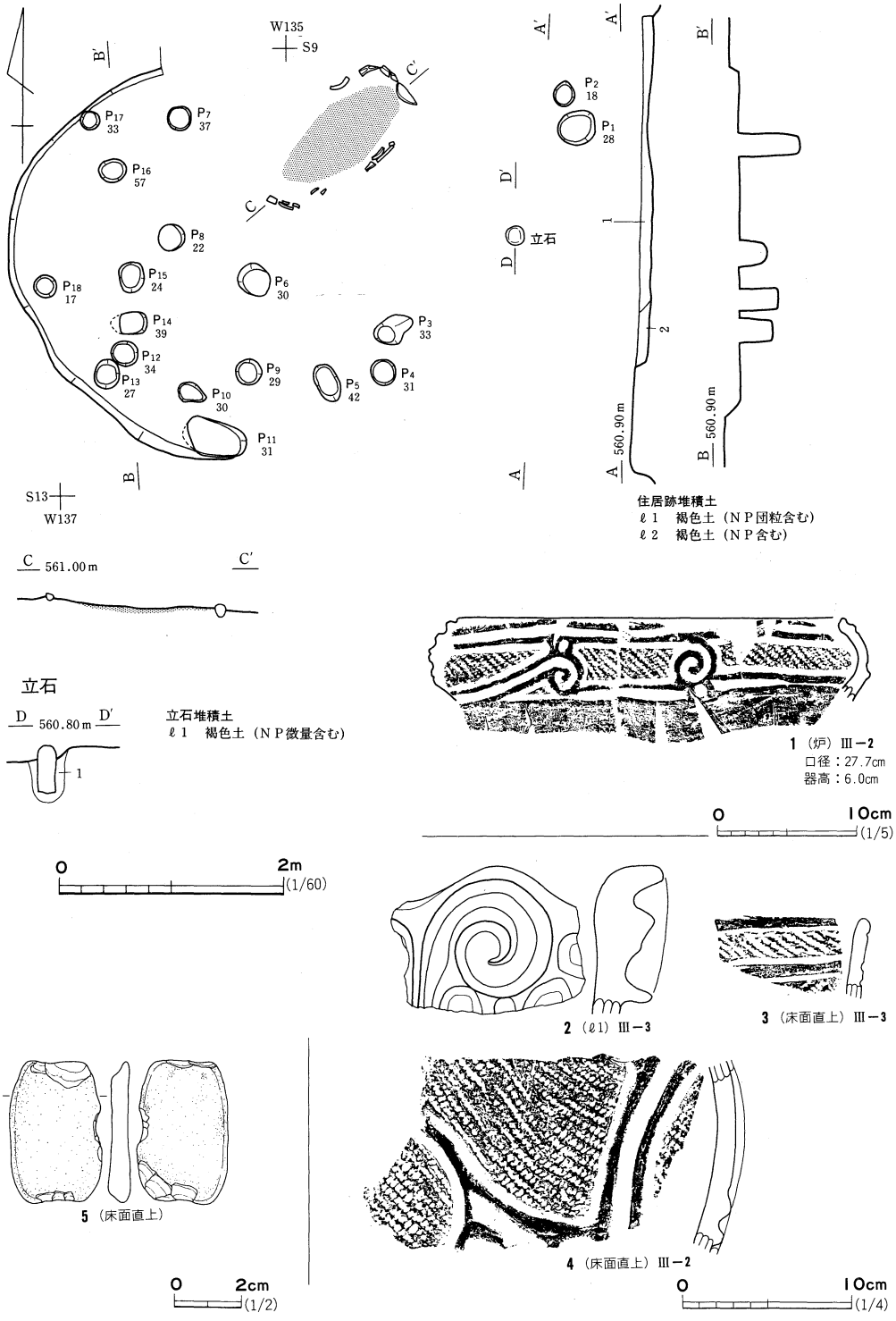


図197　85号住居跡と立石・出土遺物

片端に打ち欠きの見られる石錘である。

ま と め

本住居跡は，楕円形を呈すると想定され，その規模は遺存部と小穴の配置状態から，3.7×5.4m程と考えている。主柱穴は，長方形状に配置された4個で構成されるものと考えている。しかし，現状では住居跡北西部からは柱穴は検出されなかった。炉は土器片囲炉で，住居跡北東部には立石も認められた。所属時期は，出土遺物と遺構の重複関係から判断して，大木8b式期に比定されよう。（松　崎）

86号住居跡（SI86）

遺　　構（図198，写真87）

チ・ツ4GのLⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。SI94と重複し，SI94より本住居跡が新しい。遺存状態は悪く，住居跡北東部の壁は検出できなかった。平面形は，遺存部の形状から北東－南西方向が長い楕円形状を呈するものと考えられる。規模は南北4.3m，東西は現況で4.5mである。検出面からの深さは最大15cmで，壁の立ち上がりは比較的急である。床面は若干北から南に傾斜しているが，比較的平坦で堅く締まっている。住居内には暗褐色土が堆積していた。堆積状態については，堆積層が基本的に1層のみである事から明言できない。しかし，特に人為的な堆積状態を示すような事象は観察出来なかった。

住居施設は10個の小穴と，複式炉・埋甕がそれぞれ1基検出された。小穴は，住居跡の周壁から50cm程離れた位置に作られているものが多い。小穴の直径は，最も大きいP6が40cmであるが，他のものは20～30cmである。小穴の深さは，P1～P3・P5が53～65cm，他のものは7～38cmである。これらの小穴の中でP1～P5が，その規模・配置状態から本住居跡の主柱穴を構成するものと考えている。P4については，床面からの深さが30cmと他の主柱穴に比べて浅いが，P2・P5と対応する位置に作られていることから，本住居跡の主柱穴を構成するものと判断した。

複式炉は，住居跡中央からやや北東に寄った位置から検出された。遺存状態は悪く，埋設土器と石組部の縁石の一部が遺存していただけである。前庭部については，構築当初から作られていなかったものらしく，石組部の周辺には，前庭部と認識し得るような床面の窪みは認められなかった。炉の規模は現況で75×120cmと小さい。

炉の中軸線は住居跡の長軸と同様に，ほぼ北東－南西方向を示している。土器埋設部には2個体の土器が，炉の中軸線上に並ぶように，正立の状態で埋設されていた。炉1内には土器埋設部の縁石であろうか，円礫が3個入り込んでいた。炉2の底面には，埋設された土器の胴部破片が敷き詰められていた。石組部は遺存する縁石の状況と，掘形の形状から，方形を基調としていたものと考えられる。規模は，一辺70cm程と推定している。縁石には比較的大きい円礫が用いら

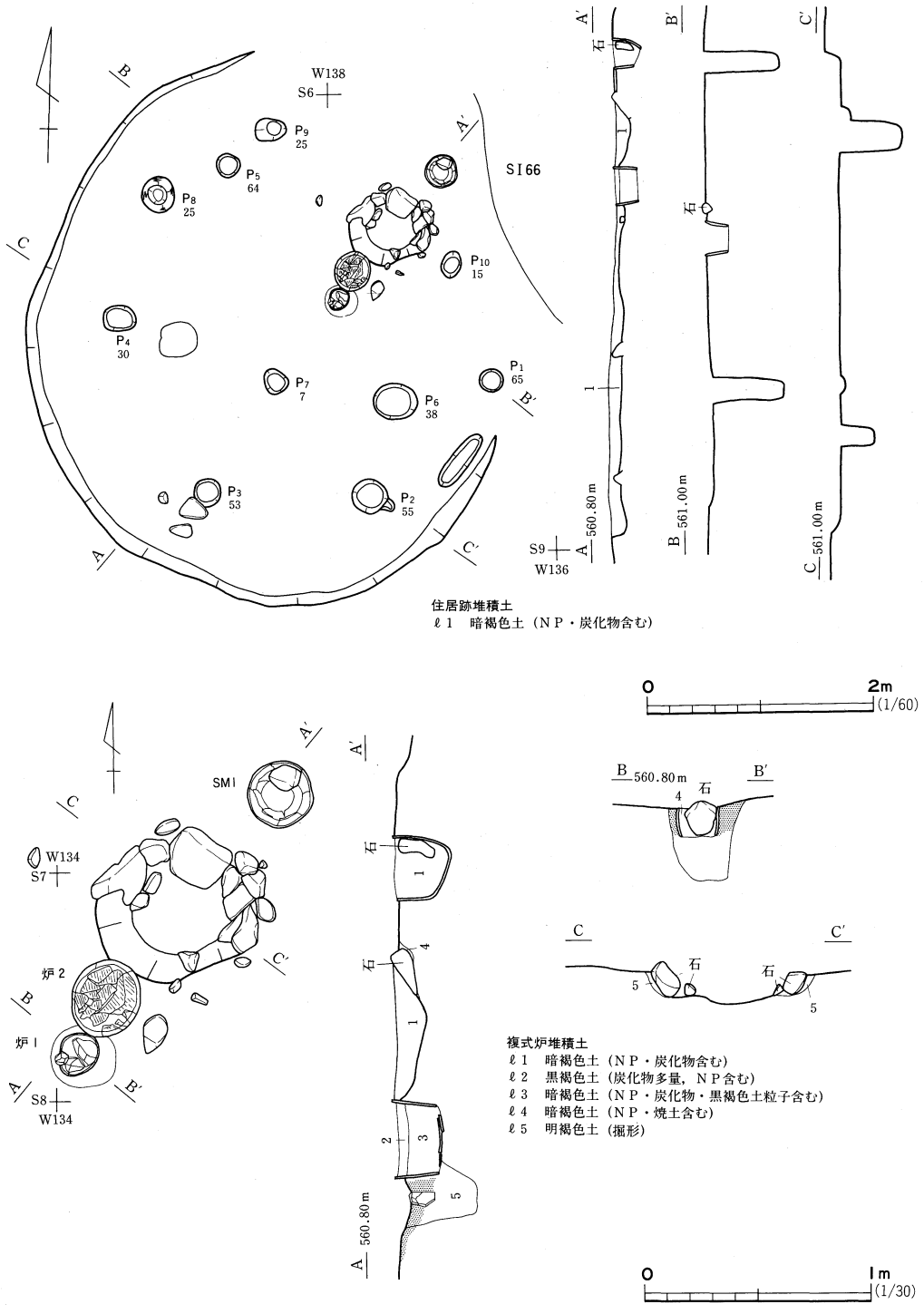
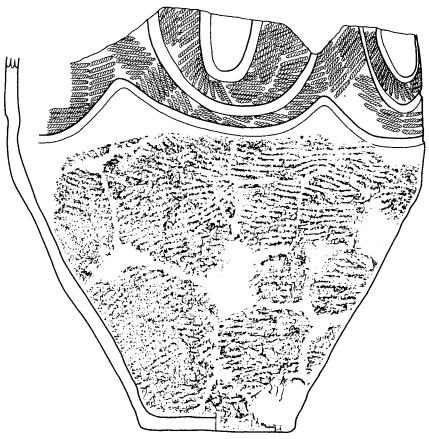
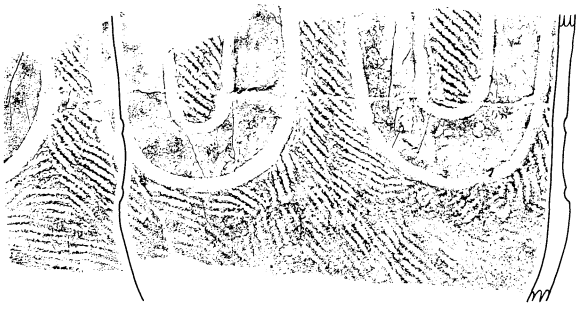


図198　86号住居跡と複式炉

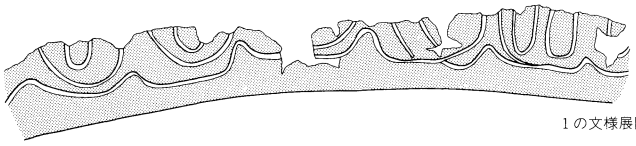


1（SM1）Ⅲ－4
底径：10.3cm
器高：28.0cm

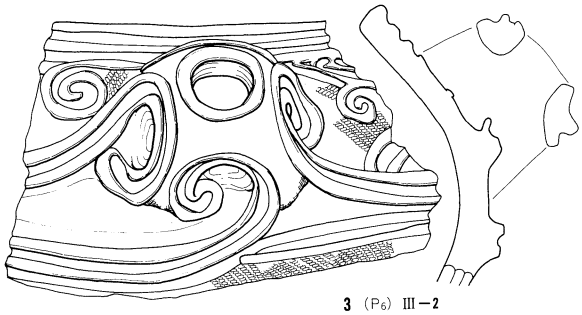


2（炉2）Ⅲ－4 器高：19.0cm

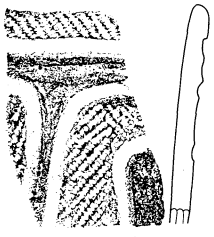
0　10cm (1/5)



1の文様展開



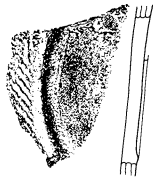
3（P6）Ⅲ－2



4（ℓ1）Ⅲ－4

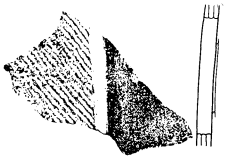
5（炉2）Ⅲ－4

10（ℓ1）Ⅰ－1

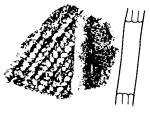


9（炉）Ⅲ－4

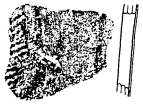
0　10cm (1/4)



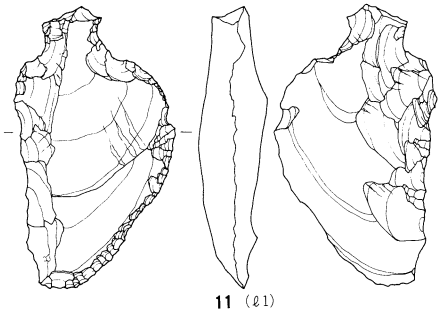
6（炉）Ⅲ－4



7（炉）Ⅲ－4

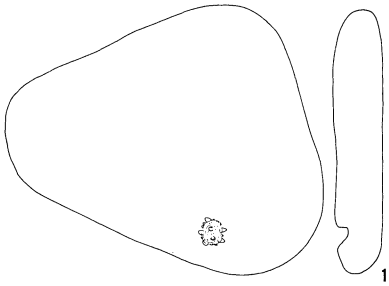


8（炉）Ⅲ－4



11（ℓ1）

0　5cm (1/2)



12（床面直上）

0　15cm (1/6)

図199　86号住居跡出土遺物

れ，これを斜めに設置していた。炉の焼けは強く，埋設土器の周辺は床面から10㎝下まで焼土化が認められた。しかし，石組部底面については，焼けたような痕跡は認められなかった。炉内堆積土は，住居跡内堆積土と同質な暗褐色土をベースとし，埋設土器内には炭化物粒子を多く含む黒褐色土が堆積していた。

埋甕は，住居跡北東部から検出された。炉の中軸線上に位置し，炉埋設土器とは石組部を挟んで対置するように配置されている。この埋甕は，深鉢を正立の状態で埋設したもので，埋甕内には住居跡内堆積土に近い暗褐色土が堆積していた。掘形は，設置する土器の大きさに合わせて作られている。

遺　　物（図199）

本住居跡からは，縄文土器片400点と石器が2点出土した。炉埋設土器・埋甕以外の土器片は，住居跡堆積土中から散在して出土している。なお，炉1については復元出来なかったため図示していない。この土器は，縄文が施された深鉢の底部付近の破片であった。図199－1・2は炉埋設土器（炉2）と埋甕である。いずれも凹線や稜凹線でU字状の単位文を描くものである。単位文内の縄文はいずれも充填施文されている。同図4～8もこれに近い。同図3は中空の把手を持つもので，隆沈線により端部が渦巻状を呈する文様を描いている。同図10は，平行沈線文を横位に施した薄手の土器である。同図11は縦型の石匙，同図12は偏平な礫の一部に貫通しない穴の認められる礫器である。

ま　と　め

本住居跡は，遺存状態が悪いが遺存部の形状・住居施設のあり方から，4.4×4.8ｍ程の規模を有する，楕円形の住居跡と推定している。住居施設には，五角形状に配置された柱穴と，小型の複式炉・埋甕が認められた。本住居跡の時期は，出土遺物・遺構の重複関係から大木10式期と考えられる。（松　崎）

87号住居跡（ＳＩ87）

遺　　構（図200，写真88）

ソ・タ2・3Ｇに位置し，ＬⅢｂ上面において暗褐色土の落ち込みとして検出した竪穴住居跡である。ＳＩ95・96と重複し，本住居跡がもっとも新しい。遺存状態は良好で，すべての壁を検出することができた。平面形は，一辺4ｍ程の整った隅丸方形である。壁は，検出面からの高さがいずれも20～30㎝程で，垂直に近い角度で立ち上がっている。床面は地山であるＬＶまで掘り込まれ，平坦で堅くしまっている。堆積土は，暗褐色土を主体として3層に区分される。堆積状態は，自然堆積と考えられる。

住居施設は，炉・小穴・壁溝を検出した。小穴は15個検出され，いずれも直径20～30㎝であ

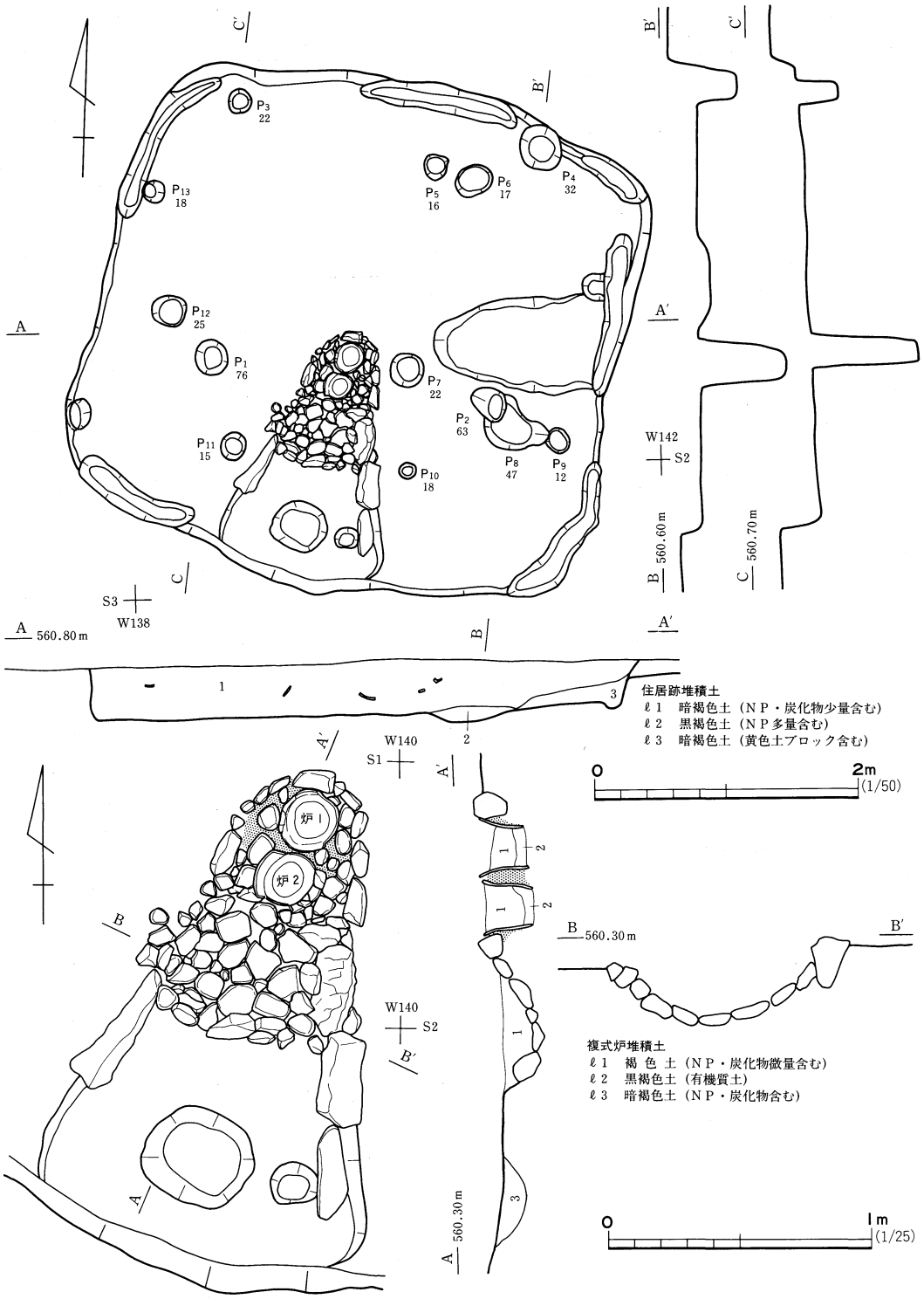


図200　87号住居跡と複式炉

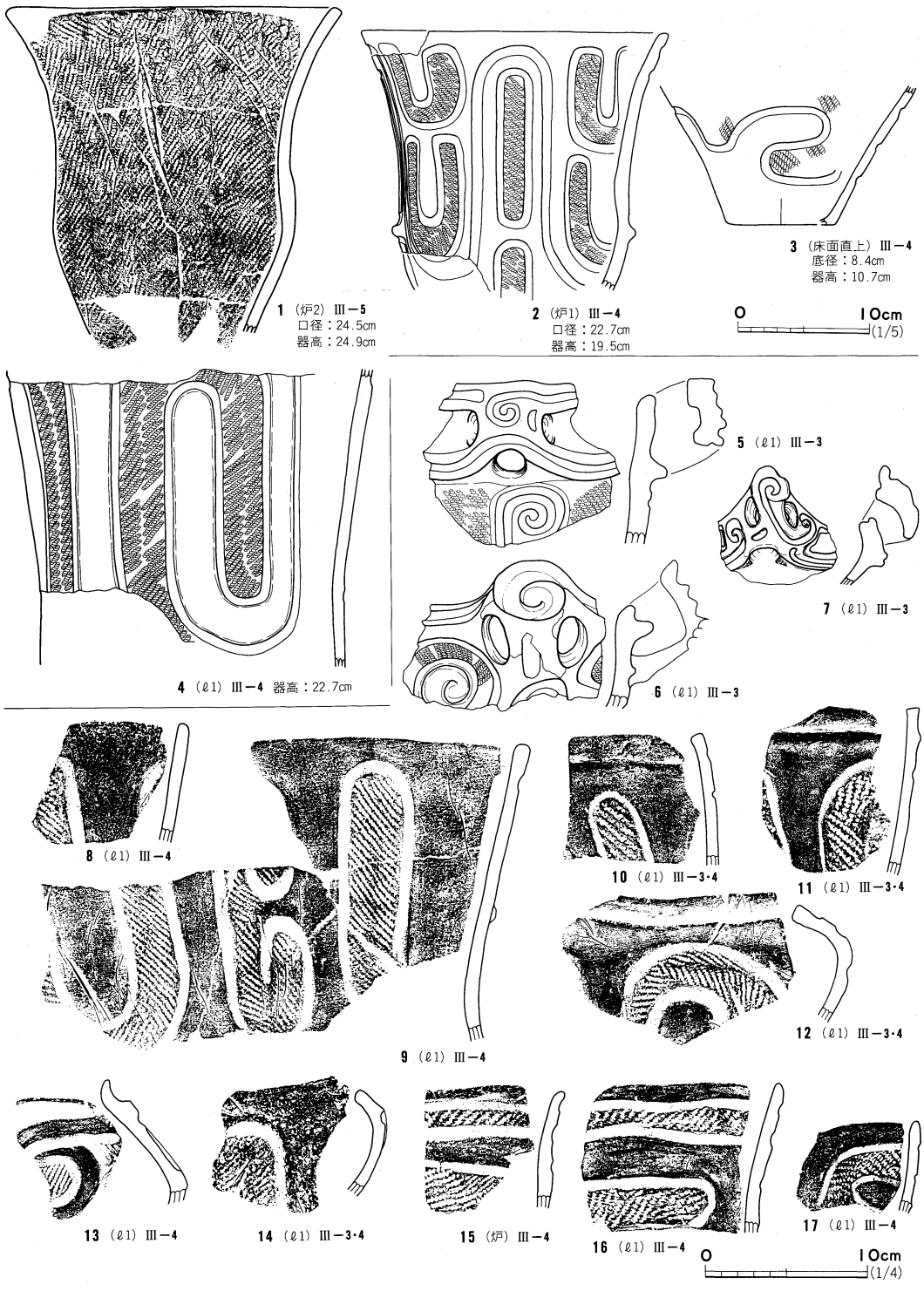


図201　87号住居跡出土遺物（1）

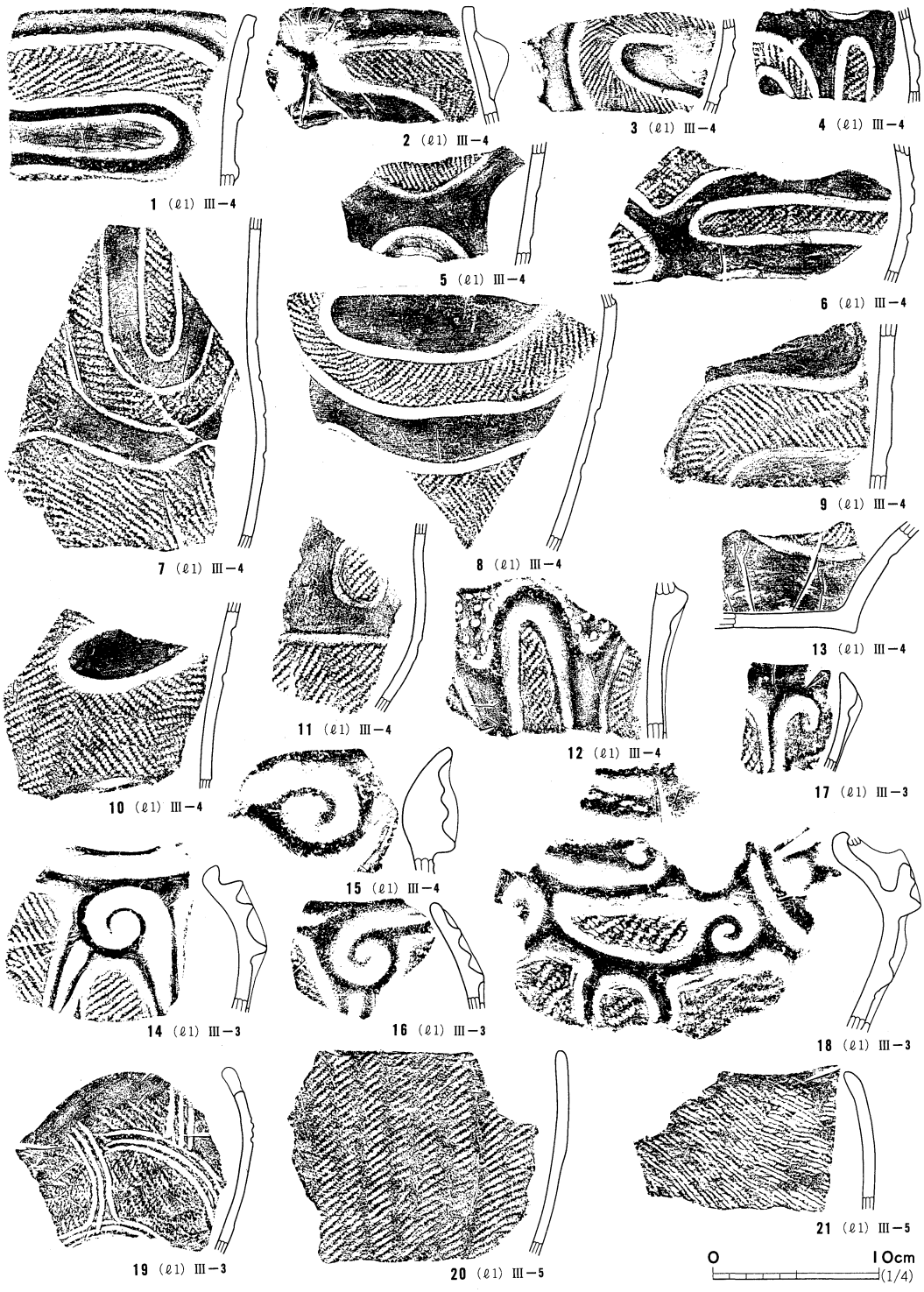


図202　87号住居跡出土遺物（2）

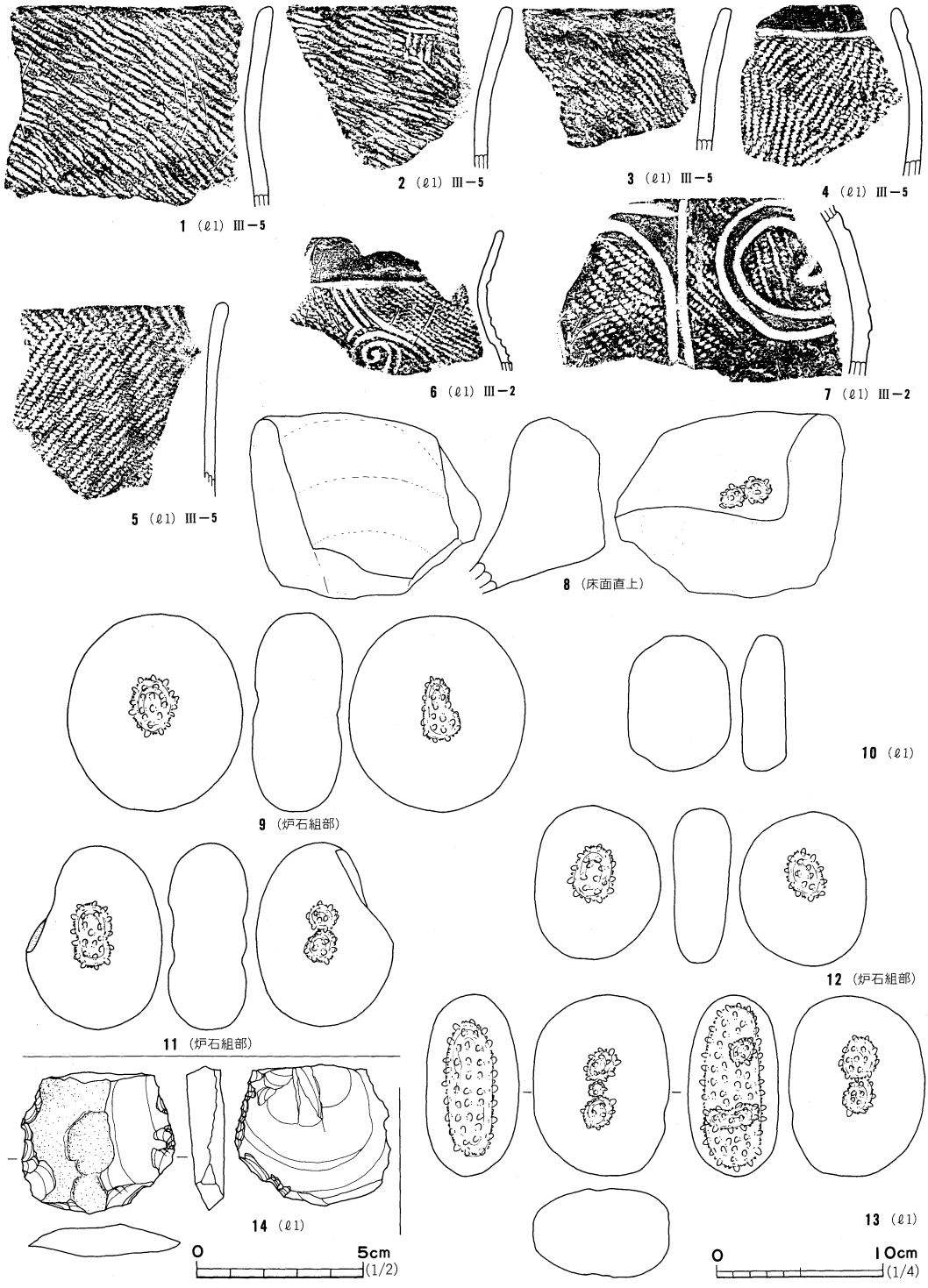


図203　87号住居跡出土遺物（3）

る。検出面からの深さは，P3～P15が15～47㎝であるのに対して，複式炉を挟んで東西にほぼ対応する位置に作られたP1・P2は50㎝を越えている。P1とP2は，その規模と位置から主柱穴と考えられる。また，北壁際のP3・P4はP1・P2と対応する位置に作られていることから，これらも本住居跡の主柱穴と考えている。壁溝は，各壁のコーナー部分を中心として断続的に検出された。幅20～30㎝，深さは10㎝程である。

炉は複式炉で，前庭部末端は住居跡南壁中央に取り付いている。平面形は二等辺三角形状をなし，規模は全長180㎝，最大幅は120㎝である。炉の主軸は，住居跡東壁とほぼ平行している。土器埋設部は直径55㎝程の円形で，主軸上に2個の土器を並べて埋設している。埋設土器部外縁は楕円形の礫を横位に立て縁石とし，縁石と埋設土器との隙間には，円礫が面を揃えて置かれている。石組部は台形状で，規模は主軸上で長さ55㎝，幅90㎝である。床面からの深さは最大20㎝を測る。石組部は偏平な石を斜めに設置し，隙間に小さな石を充填している。このため，石組部の断面形は，鍋底状を呈している。前庭部も台形状をなし，規模は主軸上で75㎝，幅は最大120㎝，床面からの深さは8㎝を測る。石組部と接する壁際には，大型の石が設置されている。

炉の焼けは，埋設土器部周辺が特に強い。複式炉内には褐色土が主として堆積しているが，埋設土器の下部には有機質の黒褐色土が堆積していた。炉の掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれ，埋設土器は1つの掘形内に設置されている。

この他に，住居跡西壁中央に取り付くように，70×140㎝程の楕円形の浅い窪みが認められた。これについては，その位置と形態から複式炉の掘形の可能性を考えたが，焼けた痕跡が認められないことから複式炉の掘形と判断することはできなかった。

遺　　物（図201～203）

出土遺物は，縄文土器片1,350点，石器8点である。縄文土器は図201－1・2の炉埋設土器と同図3を除き，いずれも堆積土中から散在して出土している。

図201－2～4・8～17，図202－1～13は，沈線や凹線・稜線により，U字状やS字状の単位文を描いている。図201－2・9，図202－2・12には，区画の要所に瘤状やヒレ状の貼付文が付けられている。これらの単位文をもつ土器には，図201－2のように口縁部が緩やかに外反するものと，同図12～14のように強く内湾するものが見られる。単位文内の縄文は，すべて充填施文され，図202－12の単位文内には，列点文が加えられている。

図201－5～7は，口縁部に渦巻状の沈線を施した装飾突起を付けている。図202－14～18は，隆帯・隆線による渦巻状の文様を施し，いずれも口縁部は内湾ぎみに立ち上がっている。図202－19，図203－6・7は，複数本の沈線によって弧線や渦巻状の文様を施している。図201－1，図202－20・21，図203－1～5は，縄文のみが施された粗製土器である。図201－1，図203－5は，口縁部とそれ以下で原体の回転方向を変えて縄文を施している。

図203－8～13は凹部を持つ磨石で，13は両側縁部にも使用痕が見られる。同図14は厚手の剝片の側縁部に簡単な刃部を作り出した掻器である。

ま と め

本住居跡は，一辺4ｍ程の隅丸方形の竪穴住居跡である。住居施設には複式炉と4個の主柱穴，壁溝がある。本住居跡の所属時期は，住居施設の特徴と出土土器から，大木10式期と考えられる。（山　岸）

90号住居跡（ＳＩ90）

遺　　構（図204・205，写真90）

チ・ツ12・13ＧのＬⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ78，ＳＫ547・548・552・561と重複し，ＳＩ78よりは古く，他の遺構より新しい。遺存状態は良く，周壁はすべて検出することができた。調査当初において，床面に比高差15㎝ほどの段差が認められること，この段差部分でℓ3の土質に微妙な違いが見られたことから，2軒の住居跡の重複と判断し，それぞれＳＩ90・ＳＩ92として調査を実施した。しかし，調査の結果，柱穴や炉などの住居施設が1軒分しか認められず，ℓ3も基本的には同質な土であることから，1軒の住居跡と判断しＳＩ90として報告することとした。このため，ＳＩ92については欠番とする。

平面形は南北が長い楕円形状で，規模は外壁で長軸7.7ｍ×短軸6.4ｍ，内壁で長軸6.0ｍ×短軸4.8ｍである。壁の立ち上がりは急で，外壁の壁高は最大35㎝，内壁の壁高は最大18㎝である。床面は堅く締まっているが，土坑と重複する部分の床面は周辺の床面に比べて低い。住居跡の堆積土は，3層に区分した。ℓ3は褐色土で，黄色土ブロックを多量に含んでいる。この土については，周辺の遺構構築時の排土を，本跡の窪みに捨てたものと判断している。堆積状態は整ったレンズ状の堆積が認められることから，自然堆積と判断した。

住居施設は，壁溝と小穴・炉が検出された。壁溝は外壁際を巡るものと，内壁の50㎝内側を巡るものの2条検出された。いずれも部分的に途切れているが，ほぼ住居跡を全周している。規模はいずれも幅10～30㎝，床面からの深さは4～20㎝程である。

小穴は37個検出された。Ｐ1～Ｐ4・Ｐ6～Ｐ9は内壁際に位置し，規模は直径18～35㎝，床面からの深さは36～55㎝である。これらは，東西にほぼ対応する位置に作られていることから本住居跡の主柱穴と判断した。Ｐ1・Ｐ2は後述する炉の前庭部に接して作られている。Ｐ10・Ｐ13も炉を挟んで，東西にほぼ対応する位置に作られた小穴である。住居跡外壁際に作られたＰ19～Ｐ36は，その位置から壁柱穴と考えている。Ｐ18の上面には，貼床が認められた。

炉は複式炉（？）と地床炉が各1基検出された。1炉は住居跡中央北寄りから検出され，炉前庭部の末端は住居跡北壁中央に取り付いている。平面形は楕円形を基調とし，規模は南北320㎝

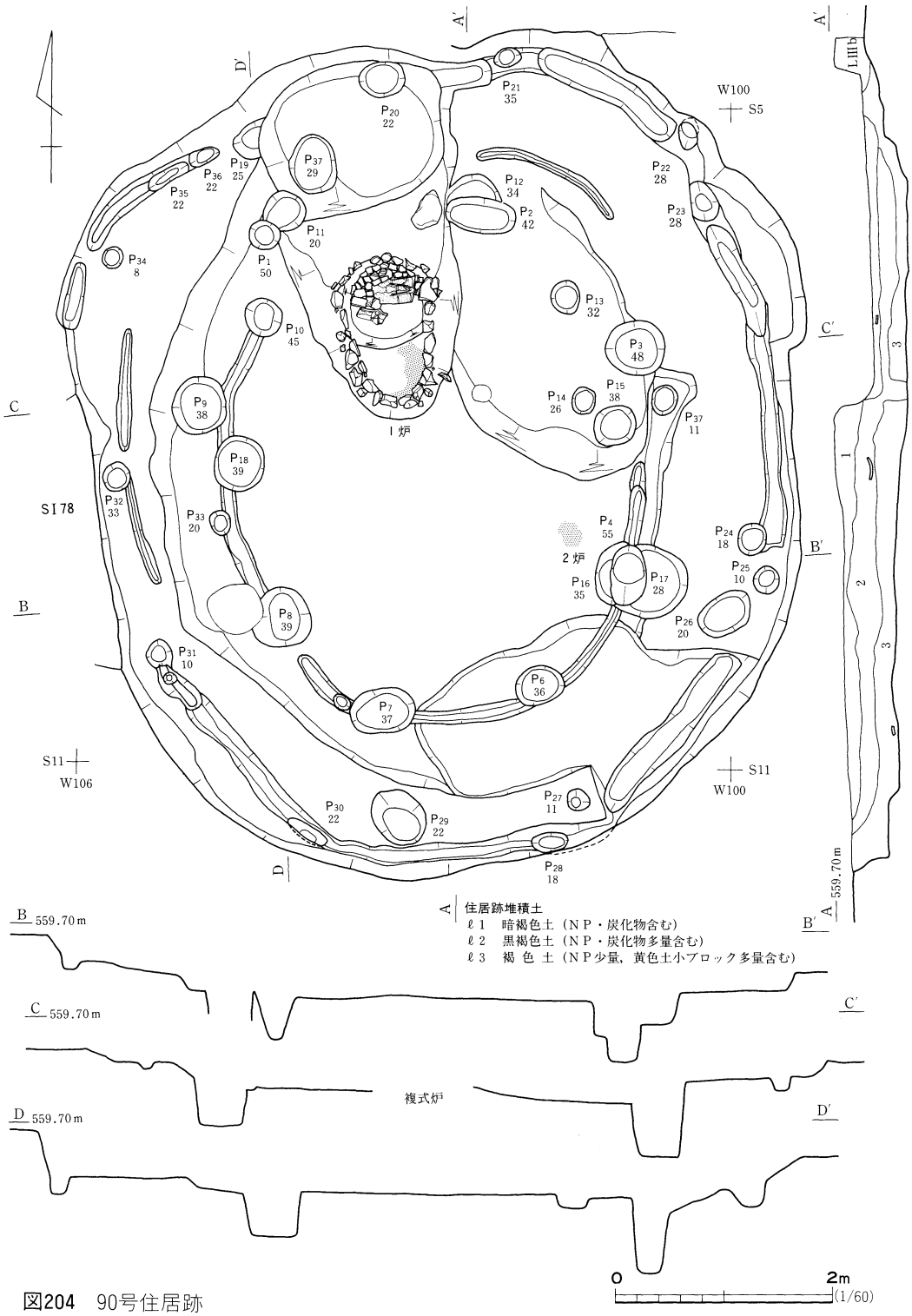

A
住居跡堆積土
ℓ1　暗褐色土（NP・炭化物含む）
ℓ2　黒褐色土（NP・炭化物多量含む）
ℓ3　褐色土（NP少量，黄色土小ブロック多量含む）
1炉
2炉
SI78
W100
S5
S11
W106
W100
LIIIb
B 559.70m
C 559.70m
D 559.70m
A 559.70m
複式炉
0
2m
(1/60)

図204　90号住居跡

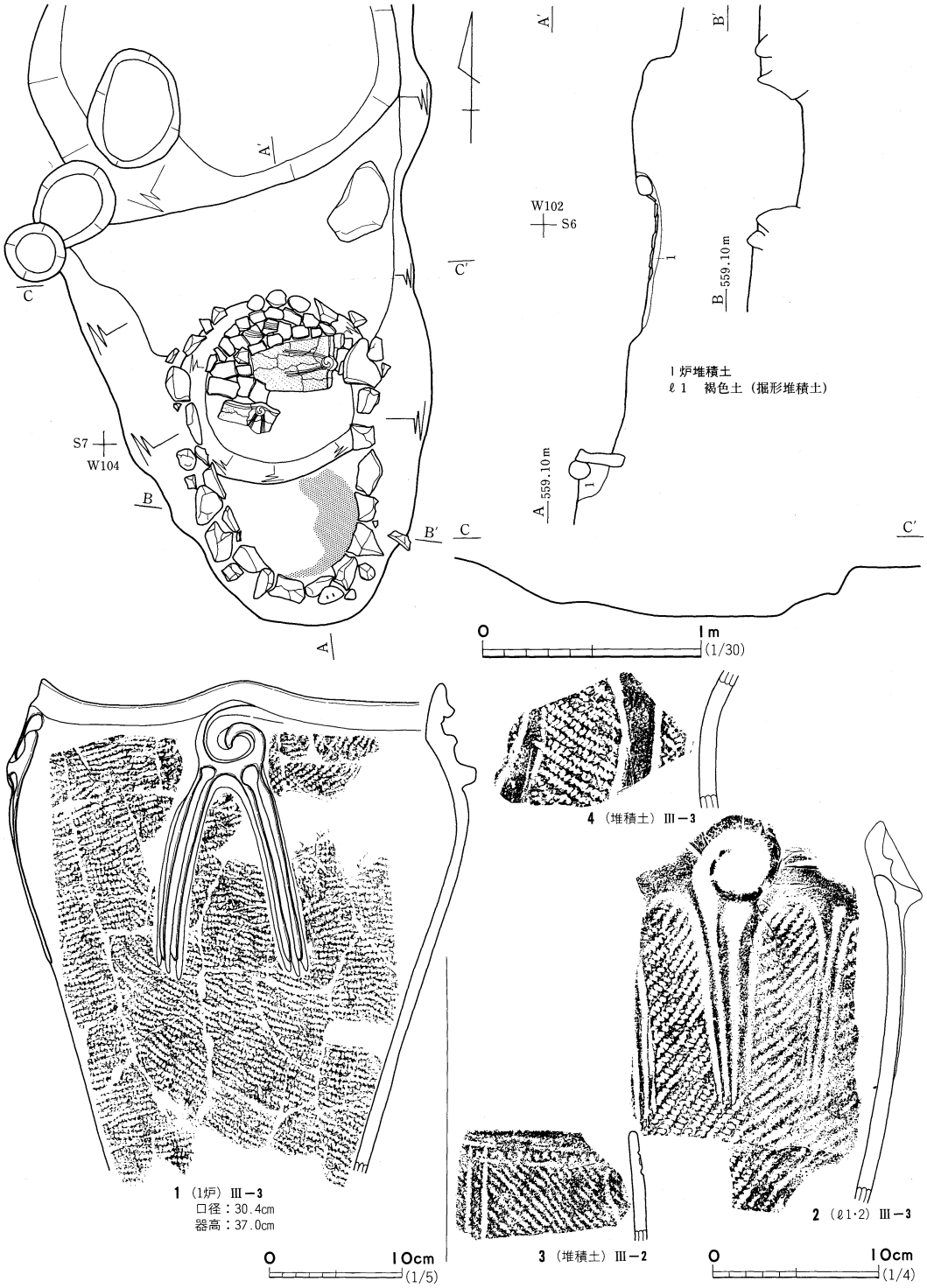


図205　90号住居跡1炉と出土遺物（1）

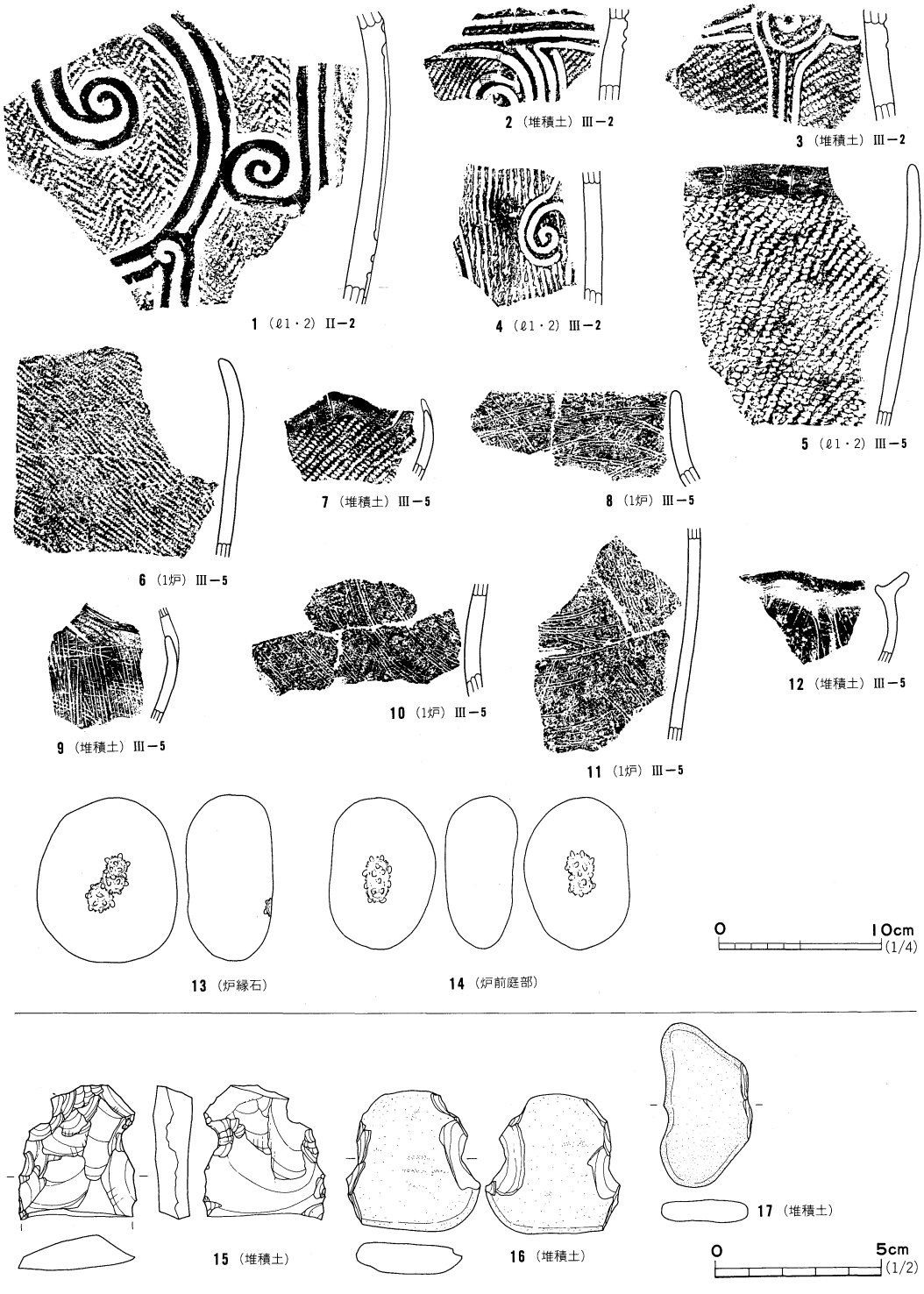


図206　90号住居跡出土遺物（2）

東西は最大180㎝である。

炉の施設は楕円形状を呈する石囲部と，そこから若干開きながら北壁まで伸びる前庭部に2分される。石囲部は長軸140㎝，短軸100㎝を測り，拳大～小児頭大の石を基本的には1列巡らせ縁石としている。前庭部との境には拳大の円礫を設置している。石囲部内部は，底面に見られる10㎝程の段差で，さらに2つに区画されている。石囲部北側は直径90㎝ほどの円形状に掘り込まれ，この掘り込み底面から3㎝上には，土器破片が隙間無く敷き詰められていた。床面から敷かれた土器までの深さは，最大35㎝である。石囲部南側には何の施設も認められず，底面が焼けている状態が観察されただけである。床面からの深さは最大20㎝である。

前庭部北半には古い土坑が重複し，この部分の前庭部底面は周辺に比べ20㎝程陥没している。しかし，この部分にも踏み締まりが認められたことから，前庭部は住居跡北壁まで伸びるものと判断した。周壁の立ち上がりは緩やかで，床面からの深さは陥没が認められない部分で最大27㎝である。石囲部北側の土器が敷かれている部分の堆積土は，3層に区分した。ℓ1は住居跡堆積土ℓ3と同じ褐色土，ℓ2は有機質の黒褐色土，ℓ3は焼土粒子を多量に含む褐色土である。2炉はP16に近接して作られた地床炉である。規模は20×26㎝と小さく，焼けも弱い事から，恒常的な炉とは考えられない。

遺　　物（図205・206）

90号住居跡からは，820点の縄文土器片と9点の石器が出土している。縄文土器は住居跡堆積土中から小破片の状態で，散在して出土したものがほとんどである。図205－1，図206－8・10・11は1炉に敷かれていた土器である。図205－1は胴部上半に最大径を有する深鉢で，口縁部は緩い波状を呈している。波頂部下には隆沈線で渦巻文を描き，これを起点にさらに隆沈線を「ハ」の字状に胴部中位まで降ろしている。同図2は，ヒレ状の隆線で描き出された渦巻文が口縁部から突出するもので，胴部には沈線で区画された縦位の縄文帯が見られる。図206－1～4は，隆沈線や沈線で文様を描くもので，一部に渦巻文が認められる。同図5～7は縄文，同図8～12は条線文が施された粗製土器である。同図15は石匙の未製品であろうか。剝片の上部に抉りを入れ，摘み部を作り出している。同図16・17は偏平な小礫の側縁部に抉りを入れた石錘，同図13・14は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は6.4×7.7ｍ程の楕円形状の竪穴住居跡である。床面には段差が認められ，壁溝も2条検出されたことから，本住居跡は同心円状に拡張されたものと考えられる。しかし，堆積土の観察から，床面に見られる段差は住居跡廃絶時まで存在していたものと考えられる。この時点での本跡は，壁際にベッド状の高まりを有する竪穴住居跡であつたものと判断している。

1炉とした炉は従来から複式炉と認識されているものと，若干施設のあり方に違いが認められ

る。しかし，炉空間の利用の仕方は従来言われている複式炉と共通し，複式炉の発生・発達を考える上で貴重な資料を提供するものと考えている。本住居跡については，出土遺物から大木9式期の所産と考えている。　（松　本）

91号住居跡（SI91）

遺　　構（図207，写真91）

ツ11・12Gに位置する竪穴住居跡で，重複する古い時期の遺構であるSI105の堆積土上面で検出した。この他に位置的にはSI78・79と重複しているが，重複部がごく僅かであるため，重複関係を知ることはできなかった。遺存状態は悪く，西壁と南壁の一部が検出されただけである。平面形は，遺存部の形状から方形を基調とするものと考えられ，規模は現況で東西3.8m，南北2.6mである。住居跡西壁はほぼ真北を指している。壁の立ち上がりは急で，壁高は最大20cmを測る。床面は平坦で堅く締まっている。住居内堆積土は，2層に区分した。堆積状態については，壁際に高い堆積状態が認められることから，自然堆積と判断している。

住居施設は，小穴と炉が検出された。小穴は3個検出された。いずれの小穴も直径25～40cm，床面からの深さ16～24cmと小さく浅い。配置にも特に規則性が認められないことから，本住居跡に伴うものか判断できなかった。

炉は複式炉で，住居跡中央に位置するものと考えられる。炉中軸線はほぼ東西を示し，土器埋設部は西側に作られている。遺存状態は良いが，前庭部東端は確認できなかった。平面形は長方形状を呈する石組部・前庭部に半円形状の土器埋設部が取り付く形態を示している。規模は長さが現況で180cm，幅は最大80cmである。

埋設土器部の平面形は，直径70cm程の半円形状である。埋設土器から若干離して縁石を配し，隙間には小さな石を面を揃えて置いている。石組部は一辺70cm程の方形状で，縁石は斜位に設置されている。このため，石組部の断面形は鍋底状を呈している。土器埋設部と接する部分には，偏平で大きい石が据えられていたが，底面には拳大の円礫が敷かれていた。床面から石組部底面までの深さは，最大15cmである。前庭部は，石組部から直線的に東壁に向かって伸びている。石組部と接する周壁部分には大きな石を設置し，縁石としている。床面から前庭部底面までの深さは最大5cmである。

炉の焼けは強く，埋設土器周辺は焼土化が著しい。炉内には住居跡堆積土と同質な褐色土，埋設土器下部には，有機質の黒褐色土が堆積していた。炉掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器・配石との間に，隙間はほとんど見られない。

遺　　物（図208）

91号住居跡からは，320点の縄文土器片と3点の石器が出土している。土器片は住居跡堆積土

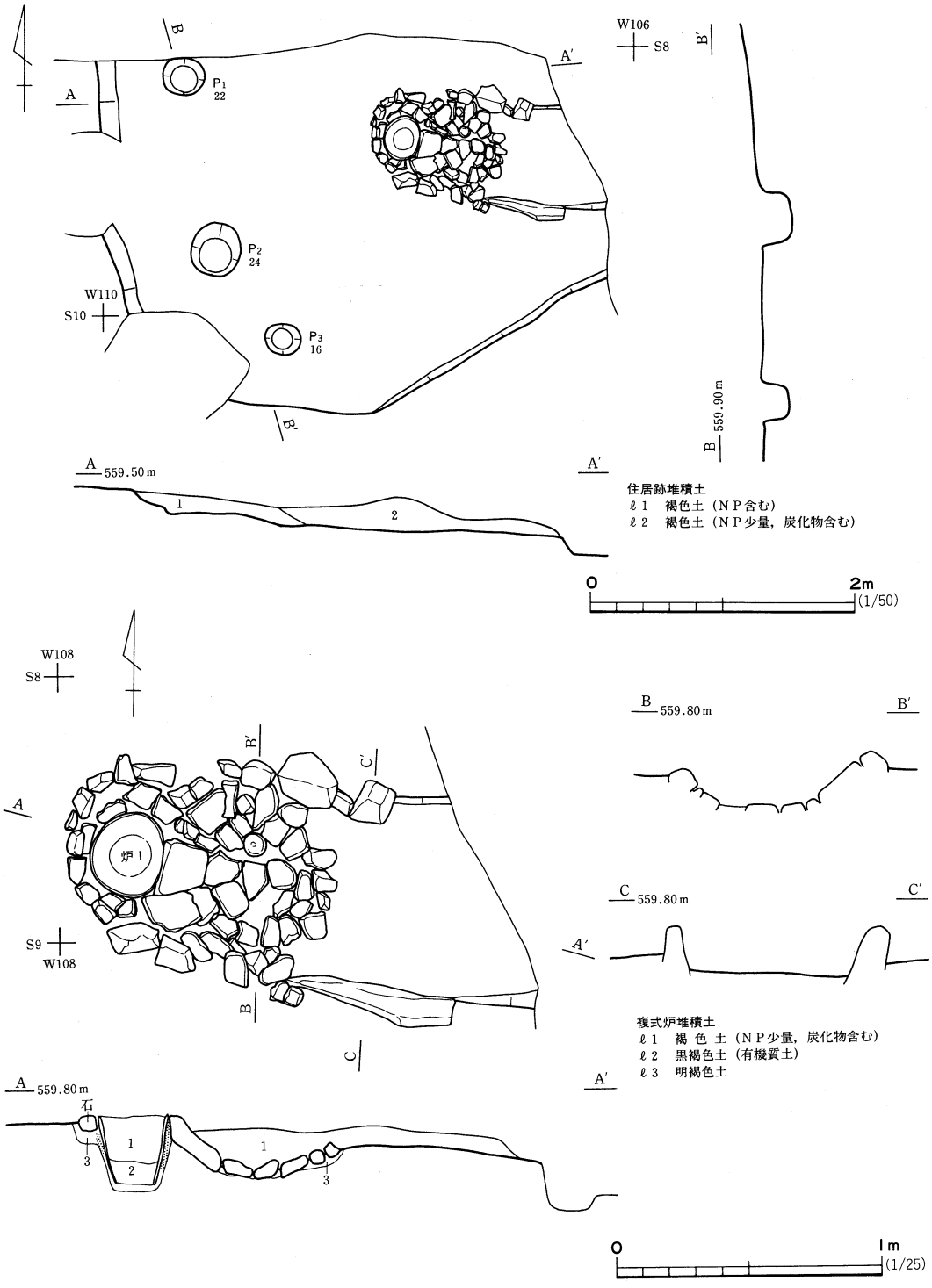


図207　91号住居跡と複式炉

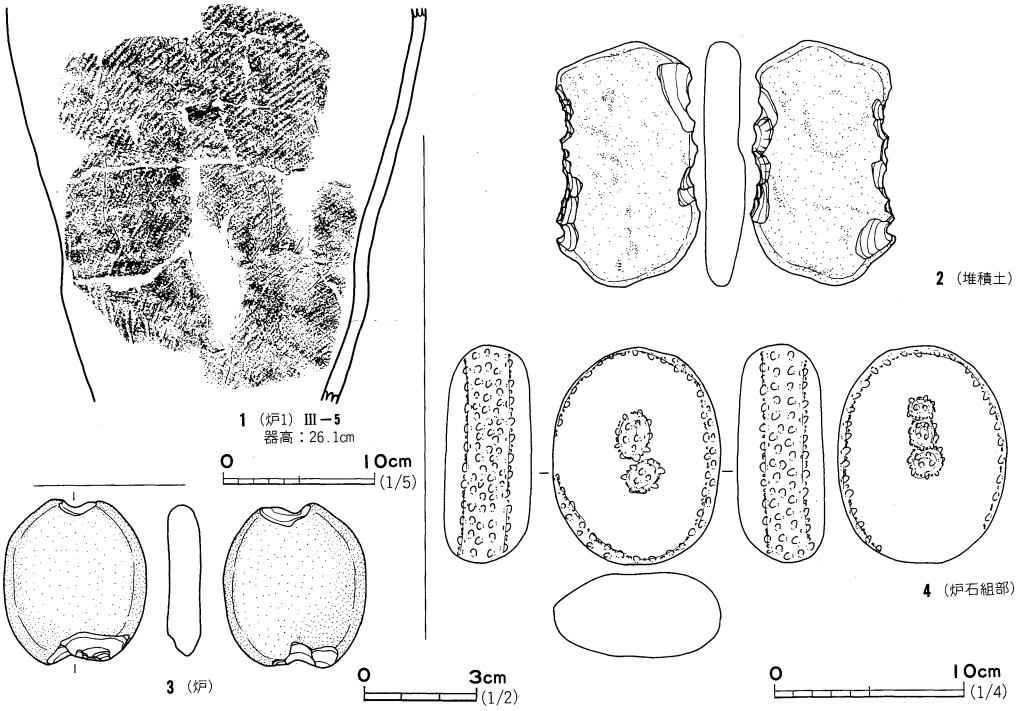


図208　91号住居跡出土遺物

中から散在して出土したものがほとんどで，複式炉の埋設土器以外は復元できなかった。図208－1は複式炉の埋設土器で，胴部下半に括れの認められる深鉢である。器面全面に縄文が施されている。同図2は偏平な礫の両側縁に，表裏面から粗い調整剝離を加えた不定形石器である。同図3は偏平な礫に抉りを加えた石錘，同図4は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪く平面形・規模・柱穴は不明であるが，炉は複式炉であることが確認できた。本住居跡については遺構の重複関係，炉の形態的な特徴から大木10式期の所産と考えている。（松　本）

93号住居跡（ＳＩ93）

遺　　構（図209，写真89）

調査区中央部西寄りの遺構密集地，タ・チ14・15Ｇで検出した竪穴住居跡である。重複遺構との新旧関係は，本遺構がＳＩ98・ＳＫ365・429・647より新しく，ＳＫ446より古い。調査当初平面形を正確に把握することができず，旧遺構を先に調査したことから，周壁は全体の約¼が残存しているに過ぎない。

平面形は，遺存部から円形を基調とするものと推測され，規模は現況で南北3.3ｍ，東西3.3ｍである。壁の立ち上がりは若干緩やかで，壁の残存高は最大13㎝，平均８㎝を測る。床面は平坦であるが，北から南に緩やかに傾斜し，最大比高差は14㎝である。本住居跡の堆積土は３層に区分される。ℓ１・ℓ２はＬⅢｂに土質が近似する暗褐色土で，ℓ３は褐色土である。レンズ状の堆積が認められていることから，自然堆積と判断している。

住居内からは，小穴・炉・埋甕を検出した。小穴は４個検出された。Ｐ１～Ｐ４の直径は25～30㎝，深さは18～49㎝である。Ｐ１は，複式炉の前庭部ほぼ中央に位置している。本住居跡の主柱穴については，二等辺三角形状に配置されているＰ２～Ｐ４を考えている。Ｐ１についてはその位置から，これらの主柱穴を補助する機能を持っていたものと判断している。

炉は，住居中央から複式炉が検出された。この複式炉は土器埋設部・石組部・前庭部から構成されている。遺存状態は悪く，土器埋設部の縁石や石組部の縁石は遺存していない。前庭部もその末端付近は，重複する土坑によって壊されている。平面形は二等辺三角形状をなし，石組部と前庭部の間には括れを持つ。主軸は真北からやや西に傾き，Ｐ１とＰ３を結ぶ直線と一致する。規模は全長265㎝，最大幅150㎝である。

土器埋設部は長さ70㎝，幅60㎝で，２個の土器が主軸上に設置されている。炉１の内部には，黒色の炭化物の堆積が観察された。炉１の南側には，長さ10㎝強の３個の亜角礫が，平らな面を土器に接して立位で埋設されている。石は土器最上部とほぼ同レベルか，若干低く設置されている。石組部は長さ90㎝，幅100㎝で台形状をなす。周縁部には拳大の亜円礫を配置し，中央部は長さ25～45㎝の板状の平石を斜めに設置している。このため，石組部の断面形は鍋底状を呈している。床面から石組部底面までの深さは，最大15㎝と浅い。前庭部は石組部から「ハ」の字状に開く。前庭部末端が南壁に取り付くかどうかは，重複する土坑によって確認できなかったが，遺存部の状態から前庭部末端は住居跡南壁に取り付く可能性が高い。平面形は台形で，規模は長さ130㎝，幅は現況で150㎝を測る。底面は平坦で堅く，床面からの深さは最大５㎝と浅い。周壁の立ち上がりは緩やかである。石組部と接続する西側側壁には，52×23×9㎝の平石が付設されている。炉の焼土化は土器埋設部で特に顕著で，炉２の周辺は焼けが強い。炉の掘形は，前庭部から土器埋設部にかけて階段状に掘り込まれている。石組部では，掘形底面に接するようにして石を据えていた。土器埋設部の掘形は，２個の土器を一度に埋置するために大きめに掘られている。掘形内には，焼土粒を若干含む暗褐色土が堆積している。

前庭部底面の中央西寄りから，本住居跡に伴う埋甕が１基検出されている。埋甕は底部を欠失した深鉢形土器が，倒立の状態で埋置されていた。掘形は土器より僅かに大きく掘られ，掘形底面に土器は接している。掘形の深さは，最大22㎝ある。埋甕内には，炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

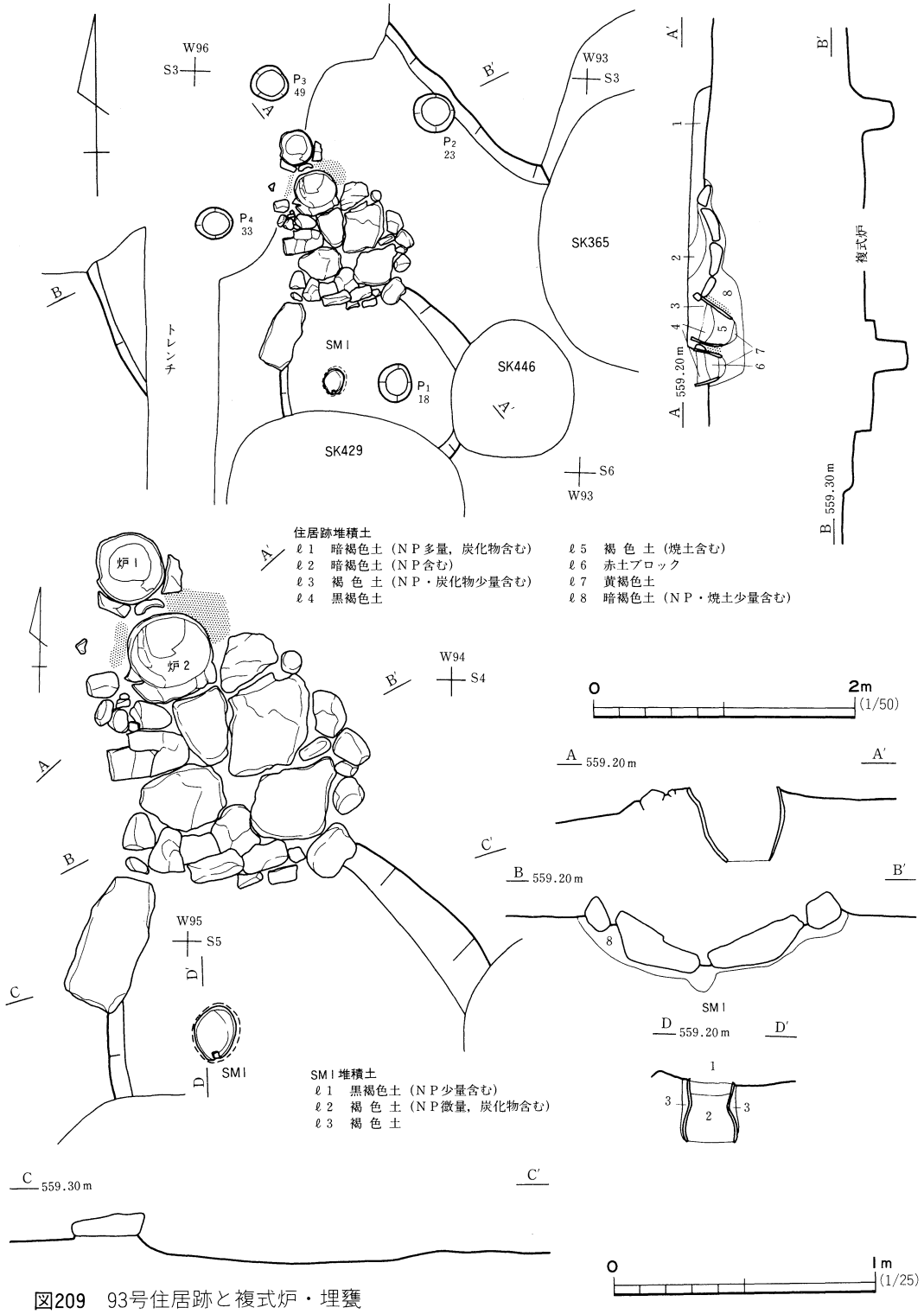


図209　93号住居跡と複式炉・埋甕

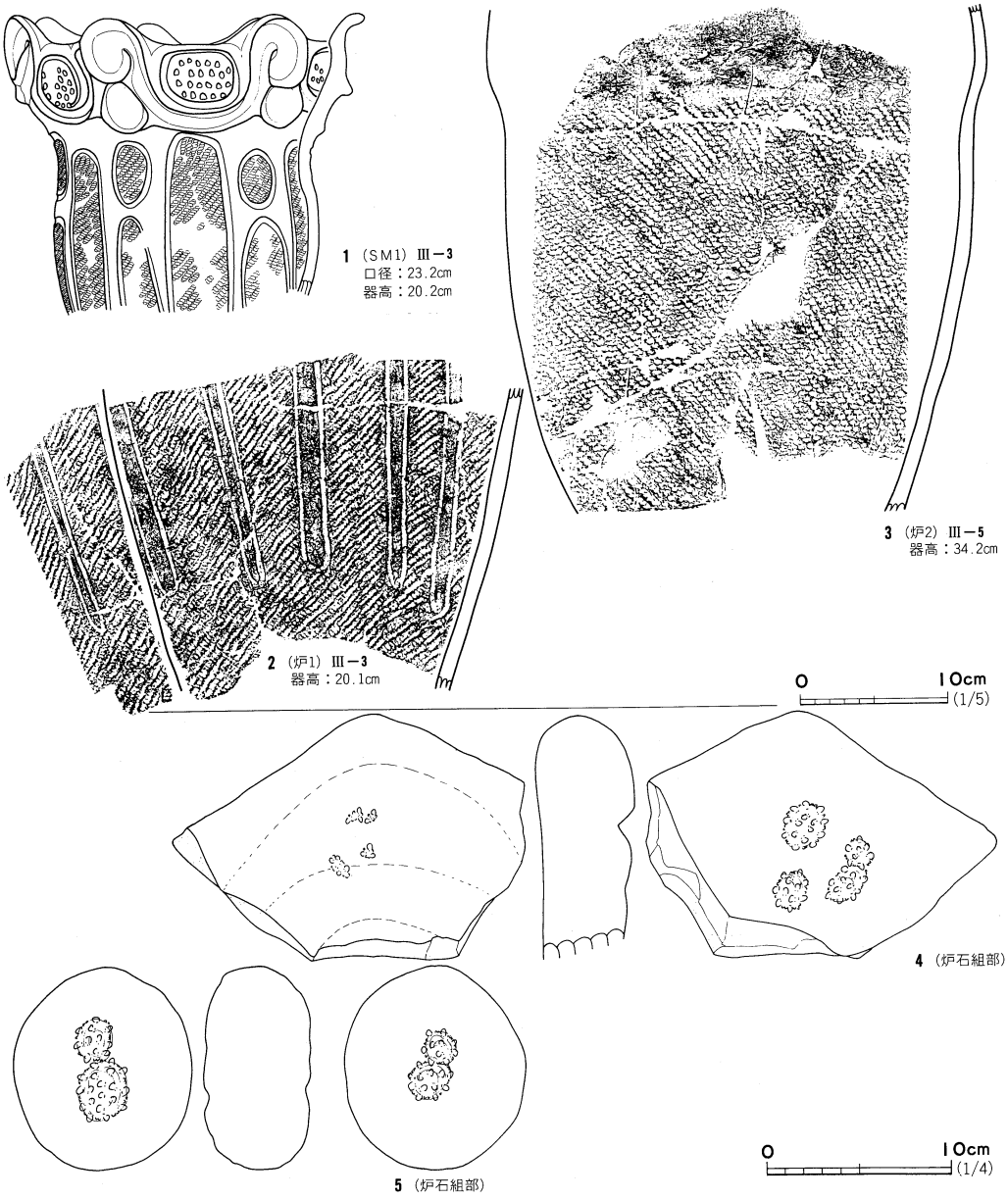


図210　93号住居跡出土遺物

遺　　物（図210）

93号住居跡からは，埋甕1点，炉埋設土器2点，縄文土器片320点，石器2点が出土している。土器片の多くは住居跡堆積土中から出土している。図210－1は，埋甕である。器形は胴部上半が緩く括れ，口縁部が外反気味に開く深鉢である。口縁部文様帯には，ヒレ状に発達した断面三角形の隆帯による渦巻文が7単位付けられている。渦巻文の上半は突起状に口縁部から突出する。

渦巻文の間には，同じ隆帯で楕円形区画文を施し，その中には刺突文が充填されている。胴部には，沈線により区画された楕円形状・帯状の縄文帯を交互に配し，H字状の無文帯を描き出している。同図2・3は，複式炉の埋設土器である。2は胴部に幅の狭い無文帯が垂下している。3は頸部が括れる粗製の深鉢である。同図4は石皿で，裏面に窪みがある。同図5は凹部を持つ磨石で，複式炉の石組に用いられていた。

ま と め

本住居跡は，他遺構との重複が多く遺存状態は悪い。正確な平面形・規模は不明であるが，遺存する周壁や柱穴の状況から判断して，直径3.5m程の円形の住居跡と考えている。柱穴は三角形状に配置された3本で構成され，炉は複式炉である。本住居跡の所属時期は，出土した埋設土器・埋甕から大木9式期と考えられる。（丹　治）

94号住居跡（SI94）

遺　　構（図211，写真92）

チ・ツ3・4GのLV上面で検出した竪穴住居跡である。遺存状態は比較的良く，西壁のごく一部を除いて，住居跡の周壁を確認することができた。SI86と重複し，SI86が本跡より新しいと考えられる。平面形は楕円形を基調とするが，住居跡西半部の形状は隅丸方形状を呈している。長軸は，真北から70°程東に傾いている。規模は東西6.4m，南北5.5m程である。検出面から床面までの深さは6～18cmで，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は比較的平坦で，硬く締まっている。住居内堆積土は色調・土質から2層に分層される。ℓ2は基盤のLVに相当する暗黄褐色土で，人為的な堆積によるものと考えている。

住居施設は，小穴と炉・壁溝が検出された。小穴は総数16個検出された。その多くは住居跡の周壁から50cm程離れた位置に作られている。床面からの深さは，P1・P7・P8が50cm前後と深く，壁溝内の小穴の多くは10～20cmと浅い。他の小穴は深さ22～31cm程である。小穴の堆積土は暗褐色土と，暗黄褐色土に二分される。暗褐色土を堆積土とするものは，P1・P2・P5～P8，暗黄褐色土を堆積土とするものはP3・P4である。これらの小穴の中で，P1～P8は規模と配置，さらに近接してほぼ同じ規模の小穴が2個ずつ認められることから，本住居跡に伴う柱穴と考えている。壁溝内の小穴は壁柱穴とも考えられるが，規則性もなく浅いものが多いため疑問が残る。炉は，住居跡中央から検出された。楕円形状を呈する地床炉で，炉西側には土器が1個埋設されていた。規模は長軸120cm，短軸65cmである。埋設土器は小型の深鉢形土器の胴下半部で，その内部には炭化物を含む黒色土が堆積していた。炉の焼けは強く，焼土上面から4cm下まで熱変化が及んでいる。壁溝は東壁部を除く周壁際に認められた。規模は幅20～30cm，床面からの深さは10cmである。

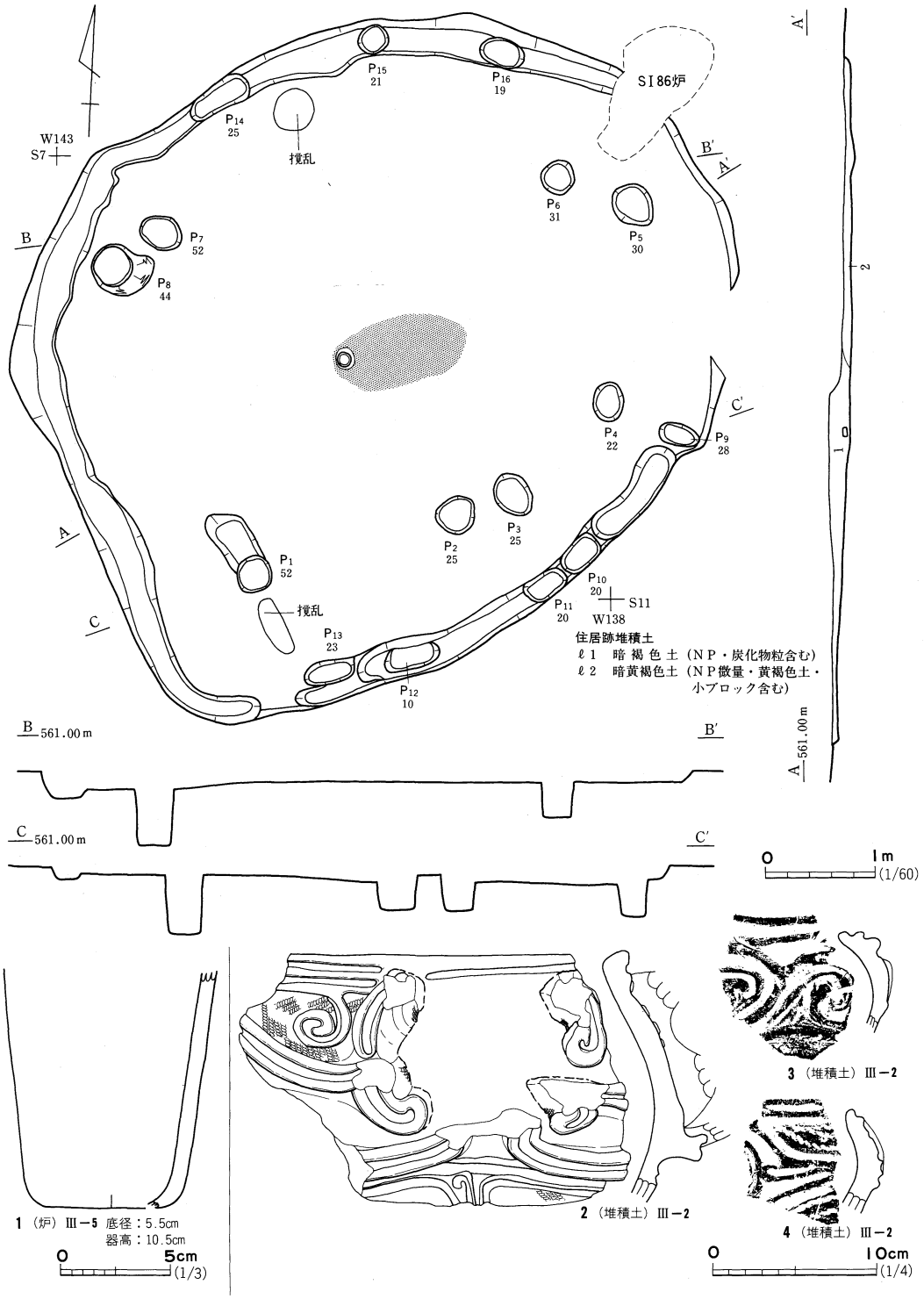


図211　94号住居跡と出土遺物（1）

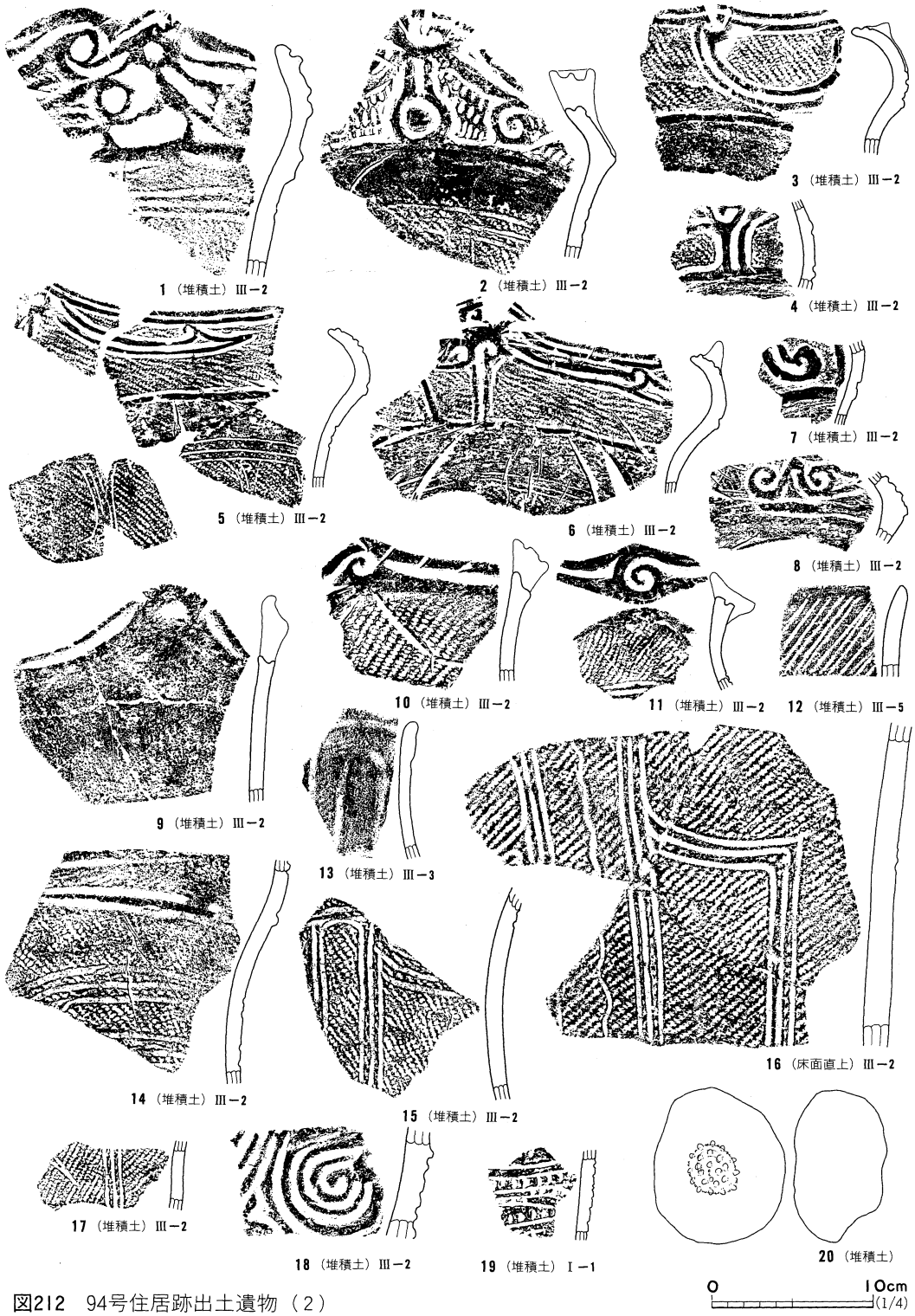


図212　94号住居跡出土遺物（2）

遺　　物（図211・212）

出土した遺物は，縄文土器片270点，石器5点である。図211－1は炉の埋設土器で，小さな無文の深鉢である。同図2～図212－8はキャリパー状を呈する深鉢で，隆沈線で一端が渦巻状を呈する文様を描く。図211－2は，把手が付けられていたものであろう。図212－5・6は，渦巻部分にいわゆる剣先状の突起が付けられている。同図1～3は頸部に無文様帯が見られる。同図9～11は緩い波状口縁を呈する深鉢で，口縁部上端には沈線文を施している。この沈線文は波頂部で，渦巻文を描く。同図12は，斜位に平行沈線文を密接して施文するものである。同図14～17は胴部破片でいずれも3本1組の平行沈線を施している。16には縦位の波状沈線もみられる。同図19には横位の沈線文と刻目文が施文されている。同図20は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本跡は，楕円形を基調とする竪穴住居跡で，東壁部を除いて壁溝が認められた。炉は埋設土器を持つ地床炉である。主柱穴には，多角形状の配置が認められた。またこれらの主柱穴は，それぞれ2本づつが同じ場所に作られていることから，住居跡の建て替えが行われている可能性が強い。所属時期は出土遺物から判断して，大木8b式期に比定されよう。　　（松　崎）

95号住居跡（SI95）

遺　　構（図213，写真93）

調査区西側の小丘北西端，タ1・2Gに位置する竪穴住居跡で，LⅣ上面で検出した。他の遺構との重複が多く，住居跡東壁と南西コーナー部は遺存していない。SI87・100・111，SK500と重複し，SI87・100より古く，SI111，SK500より新しい。平面形は，西側が東側に比べ若干長い台形状を基調とするものと想定される。遺存値は現況で東西5.1m，南北5.4mである。検出面から床面までの深さは40～50cmで，壁の立ち上がりは急である。床面は北東から南西方向に若干傾斜しているが，比較的平坦である。住居内堆積土は色調・混入物から3層に区分され，整ったレンズ状の堆積を示すことから，自然堆積と考えられる。

住居施設は，小穴と焼土が検出された。小穴は6個検出され，直径はP3・P6で約60cmを測り，P1・P2・P4は35～50cm程である。床面からの深さは，P3～P5が50～60cm，P1・P2は25～39cmである。小穴の堆積土はP5が黒色土の他は，いずれも黒褐色土が堆積していた。P1～P4は方形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えられる。なお，P5はその作られた位置や堆積土の違いから，本住居跡に伴なう小穴ではないものと考えている。炉は地床炉で，床面中央やや南寄りから検出された。平面形は楕円形状を呈し，規模は東西270cm，南北60cmである。炉の焼けは強く，焼土上面から5cm下にまで焼土化が及んでいた。

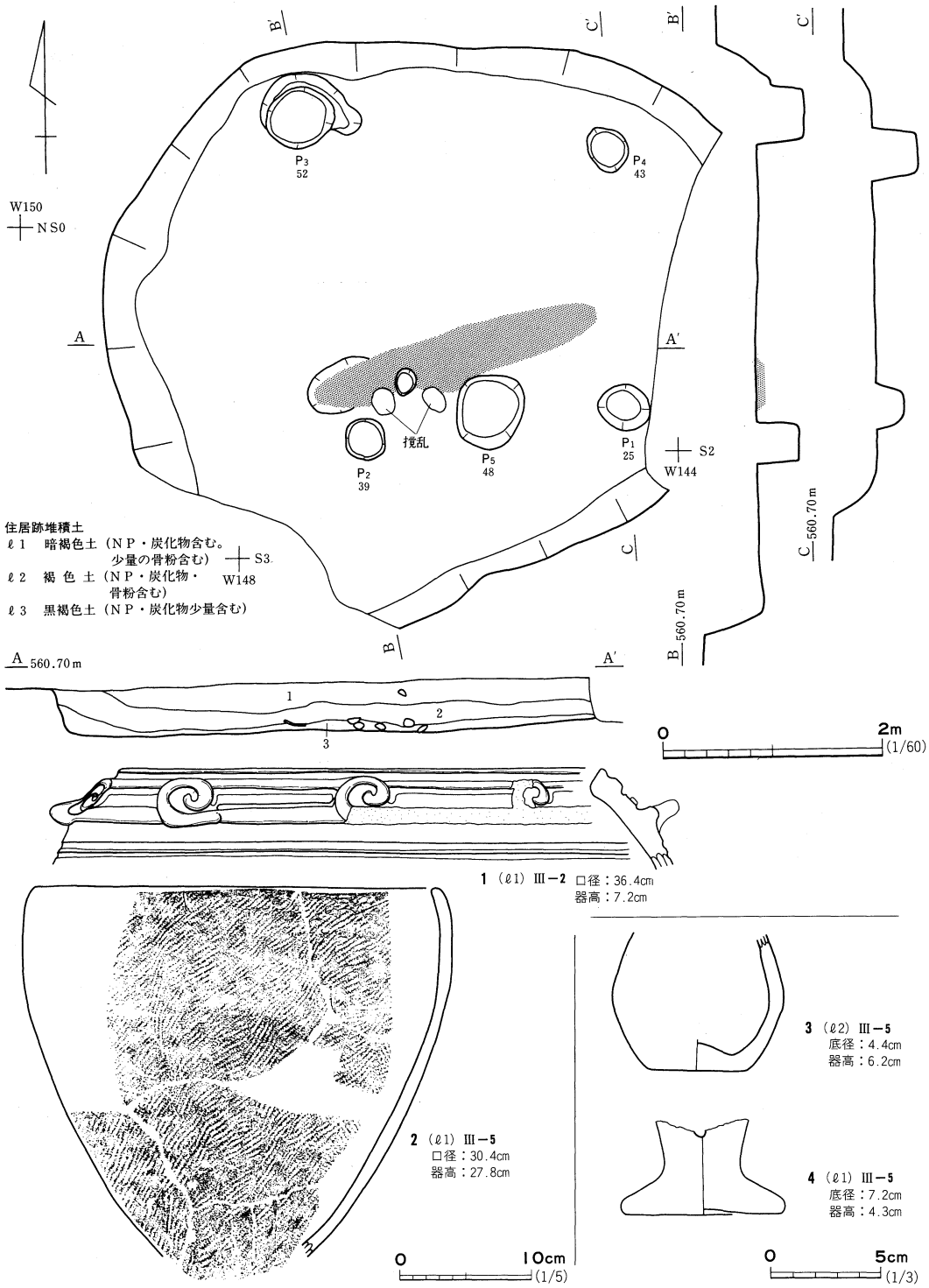


図213　95号住居跡と出土遺物（1）

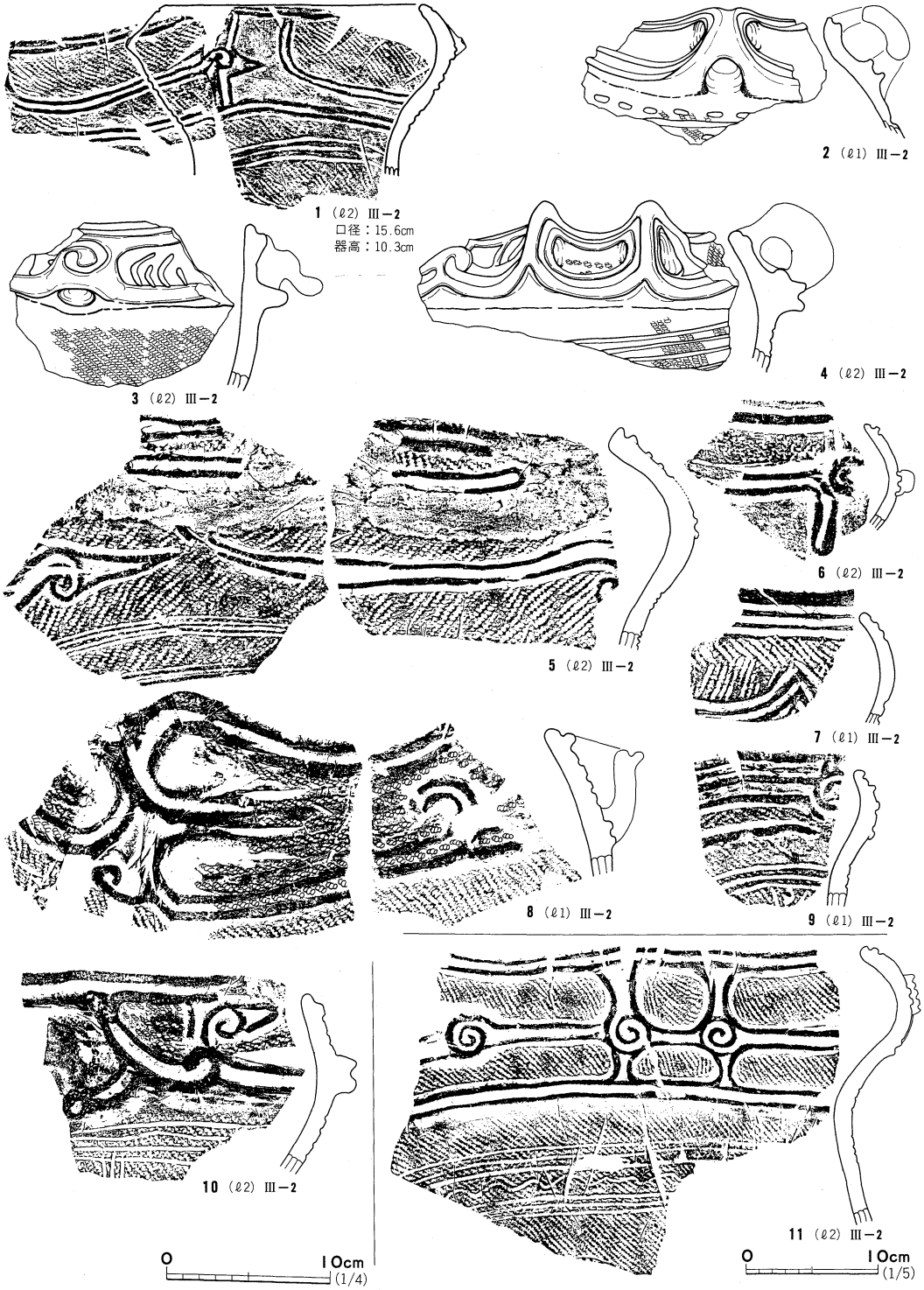


図214　95号住居跡出土遺物（2）

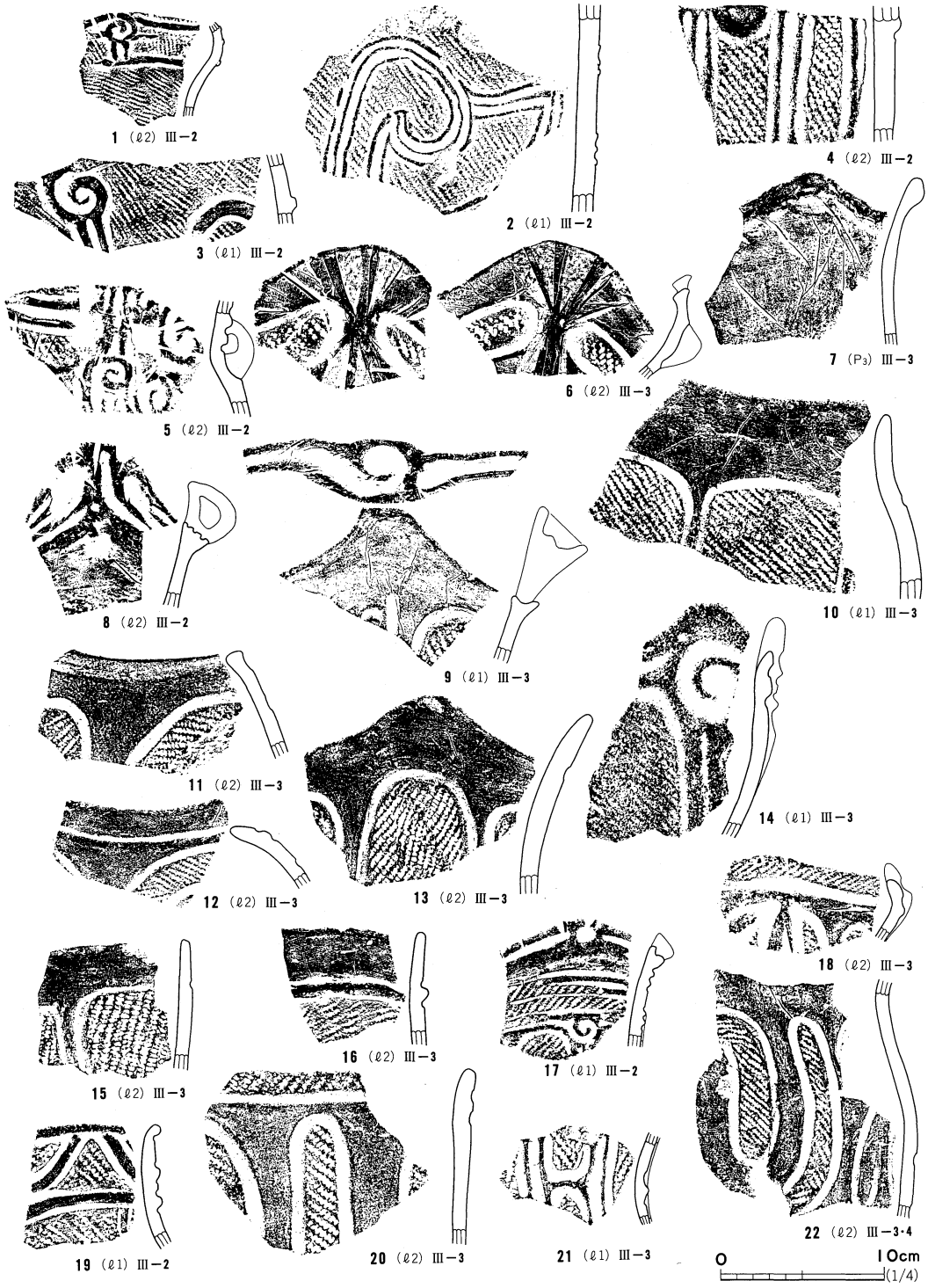


図215　95号住居跡出土遺物（3）

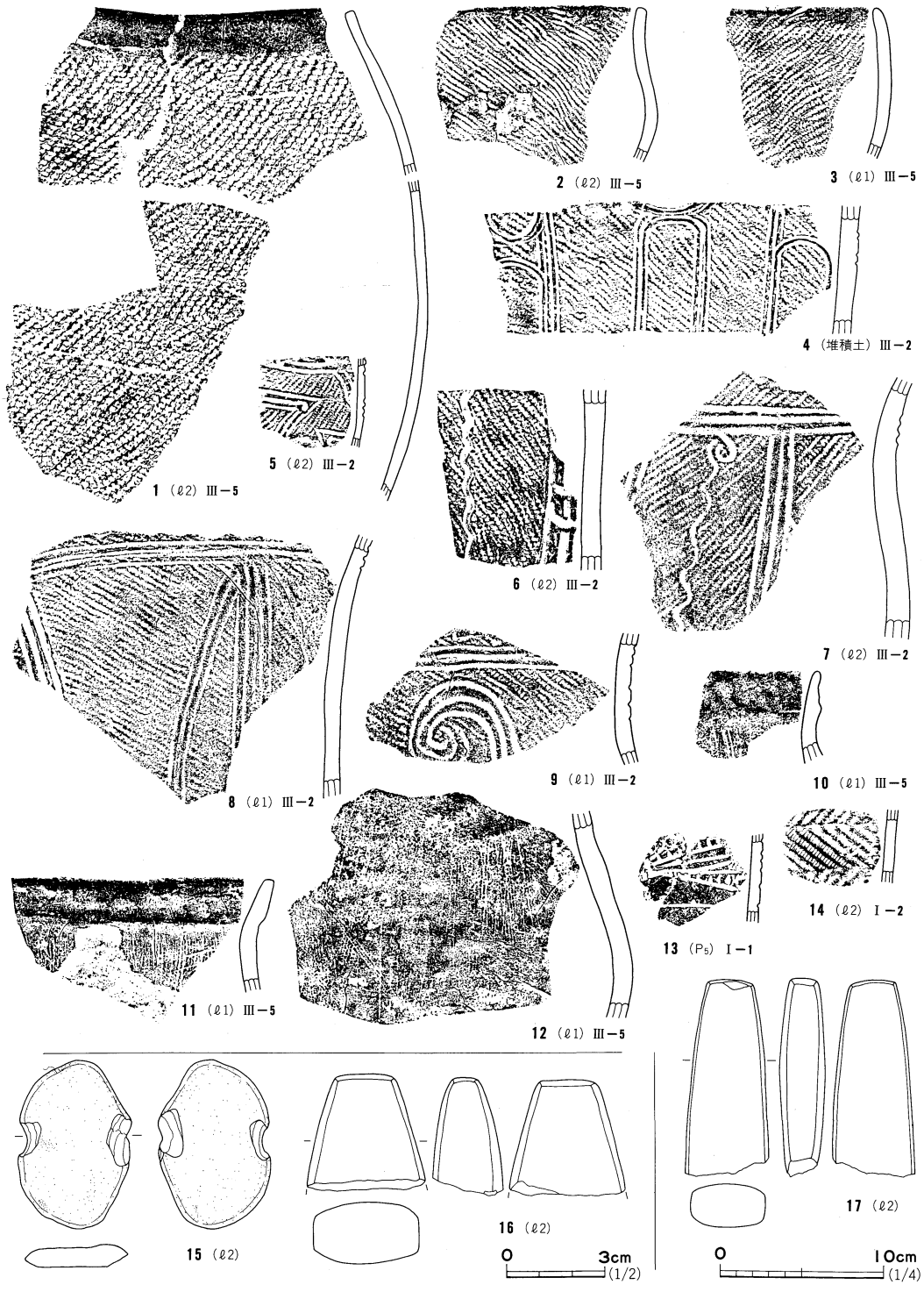


図216　95号住居跡出土遺物（4）

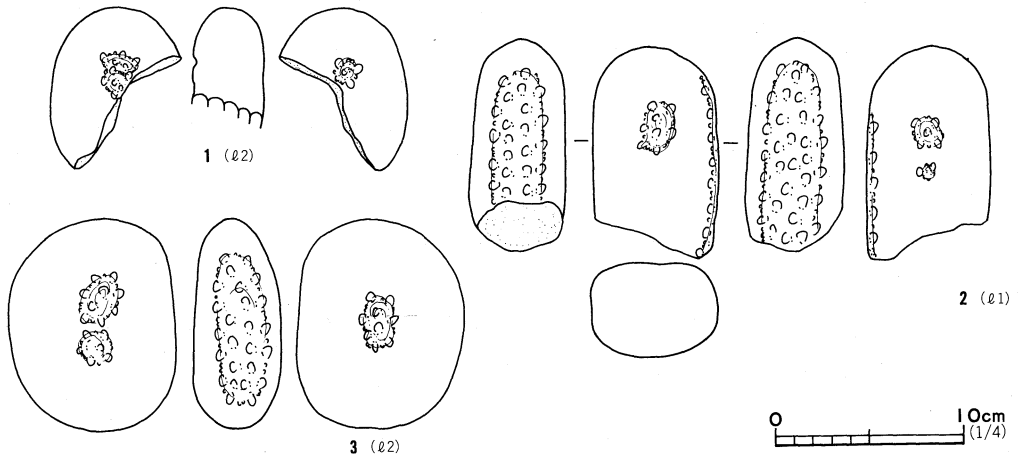


図217　95号住居跡出土遺物（5）

遺　　物（図213～217）

出土した遺物は，縄文土器片1,600点，石器8点で，縄文土器は破片が散在した状態で出土している。図213－1は，樽状の器形を呈する深鉢であろう。口縁部には，隆帯と沈線により8個の渦巻文を配している。渦巻文の下端はヒレ状に突出している。同図2は縄文が施文された深鉢，同図3は小型の土器，同図4は台付土器の台部である。図214－1・5・7・9・11，図215－1はキャリパー状の深鉢である。隆沈線をクランク状・連弧状・横位に施す。隆沈線の一部は渦巻文を描く。図215 －17・19も隆沈線によって文様が描かれている。図214－2～4・8は，口縁部に突起や把手をもつものである。同図4・8・10には縄圧痕文，同図3には「く」の字状の沈線文が施されている。図216－4～9は，これらの土器の胴部破片であろう。沈線を横位・縦位を基本に配している。沈線の一部は渦巻文を描いている。4・8の沈線は，半截竹管で施されている。

図215－6・9・15・18・20・22は，沈線や凹線によって区画された曲線的な単位文が施されたものである。単位文内への縄文施文は充填手法によるものが多いが，10は磨消手法によっている。図216－1～3は縄文，同図10～12は条線文の施された粗製土器である。11の口縁部は複合口縁状をなす。同図13は沈線間に刺突文が，同図14は羽状縄文が施され，胎土中に繊維を含んでいる。同図15は偏平な礫の側縁部に抉りを有する石錘，同図16・17は磨製石斧，図217－1～3は凹部を持つ磨石である。2・3の側縁部には，敲打痕状の使用痕跡が見られる。

ま と め

本跡は，平面形が台形状をなす竪穴住居跡と推定される。住居施設には，矩形に配置された4個の主柱穴と東西に長い地床炉が認められた。所属時期は，出土遺物から，大木8b式期と考えられる。

（松　崎）

96号住居跡（ＳＩ96）

遺　　構（図218，写真95）

タ・チ3・4GのＬⅣ上面で検出した住居跡である。他遺構との重複のため，遺存状態は悪い。このため，確認できたのは住居跡南壁の一部のみである。ＳＩ87・111と重複し，本住居跡が古いと考えられる。平面形は，遺存部の形状から方形を基調とするものと想定される。遺存値は東西4.5m，南北4.8m程である。検出面から床面までの深さは10cmと浅く，壁の立ち上がりは南壁の一部を除いて比較的緩い。床面は北西に向かって若干傾いているが，比較的平坦で硬く締まっている。住居内には，暗褐色土が1層堆積しているだけである。

住居施設は小穴，焼土が検出された。小穴は8個検出された。直径は，P1・P2・P6・P7が40～50cm，P3・P4・P8は20cm程である。床面からの深さは，P2・P3が52・53cm，その他の小穴は27～45cmである。P1又はP3とP2・P6・P7は，方形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と判断した。小穴内にはすべて，暗褐色土が堆積していた。炉は地床炉で，住居跡中央からやや南西に寄った所に位置している。本跡より新しいＳＩ87の床面にも，炉の痕跡が一部観察された。平面形は不整形で，規模は85×130cmである。炉の焼けは強く，焼土面上面から8cm下まで熱変化が及んでいる。

遺　　物（図218・219）

出土遺物は，縄文土器片160点と石器1点である。図218－1は，口縁部が緩い波状をなす，筒状の深鉢である。文様は，口縁部を無文とし，口縁部下端には円形の刺突文を施した隆帯を貼り付けている。胴部には沈線文を施す。同図2・6はキャリパー形の深鉢である。口縁部文様は，隆沈線により描かれている。2・6ともに頸部には無文帯が見られる。6は地文に羽状縄文を施している。同図3～5の文様も隆沈線によって描かれている。図219－1は口縁部に稜線で描かれた渦巻文が施文されている。同図2・3は沈線文が施文された，深鉢の胴部破片である。同図4・5は沈線による帯状の単位文，同図6は稜線による曲線的な単位文が，施されている。5は，単位文間に刺突文が加えられている。同図7は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は，平面形が方形を基調とする住居跡である。主柱構造は，規模・配置等から4本柱構造と考えられる。炉は地床炉である。所属時期は，出土遺物から考えて大木8b式期に比定されよう。

（松　崎）

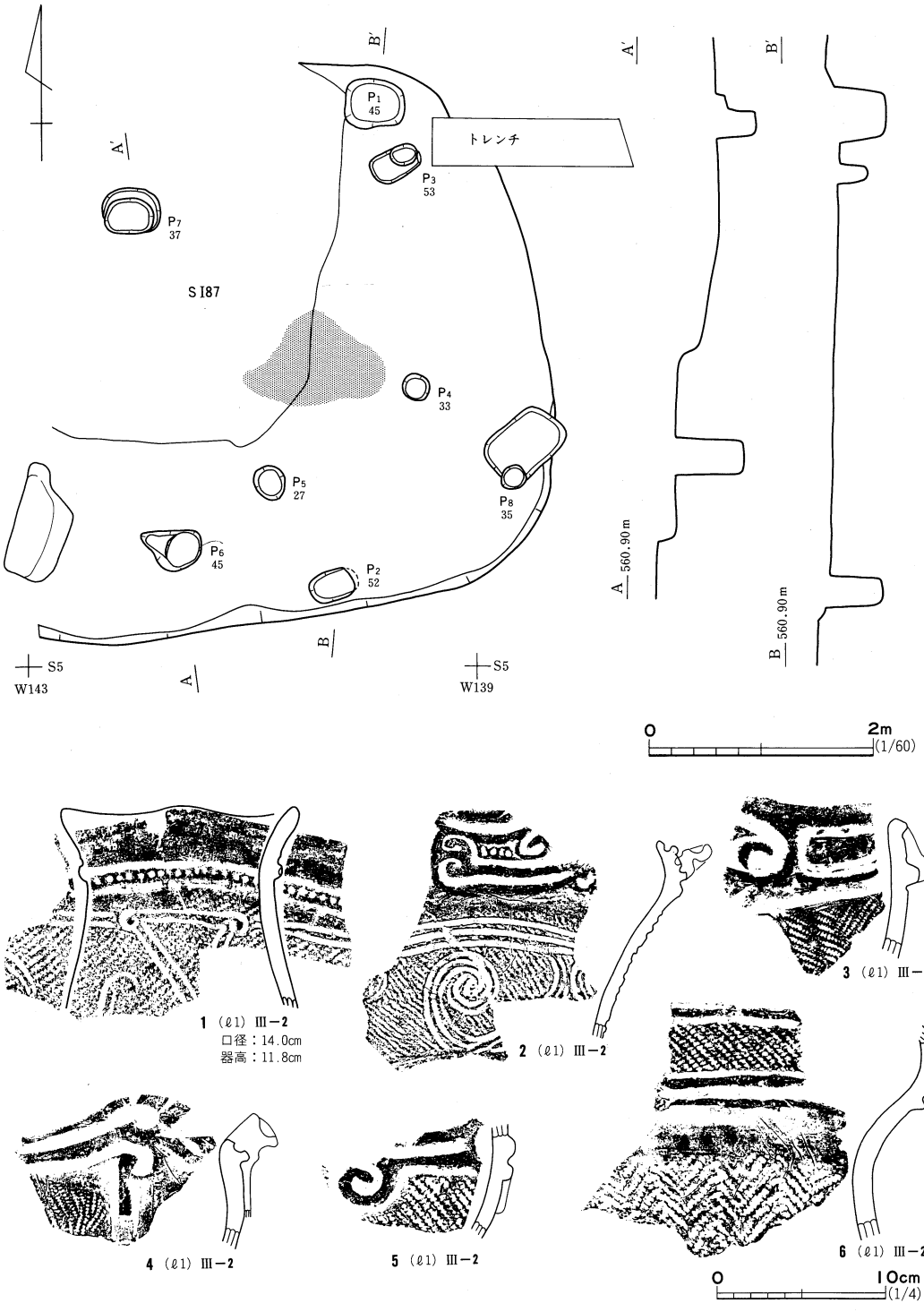


図218　96号住居跡と出土遺物（1）

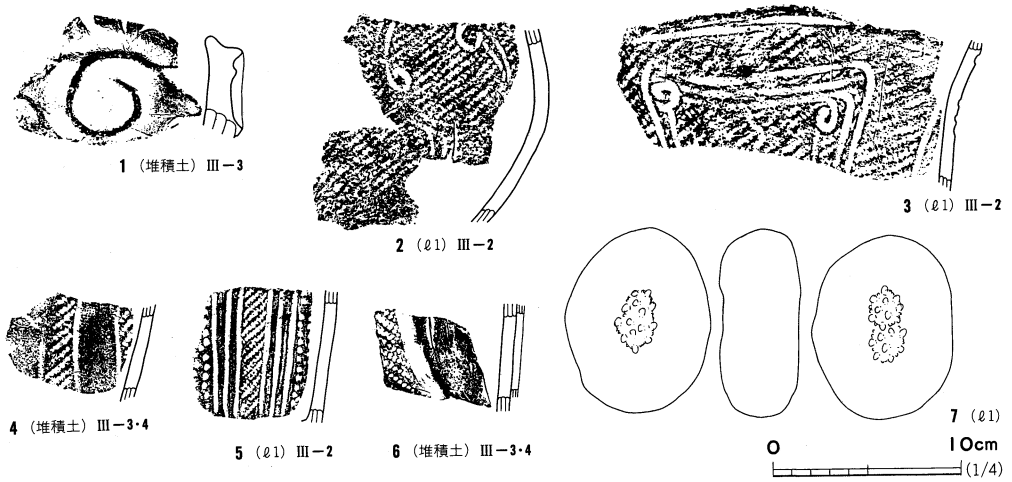


図219　96号住居跡出土遺物（2）

97号住居跡（SI97）

遺　　構（図220・221，写真94）

セ～タ15・16GのLⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。SI106・108，SK632・633・635と重複し，土坑よりは本住居跡が新しいが，SI106・108との新旧については，調査時に確認することはできなかった。遺存状態は比較的良く，住居跡の周壁はほぼ全周している。本住居跡は検出された住居施設のあり方から，2回程度の拡張を伴う建て替えが行われているものと考えられる。しかし，住居施設の全てについて時期ごとに細分することはできなかった。本項では97号住居跡から検出された各施設ついて総括して記述し，最後に各時期ごとの住居跡のあり方について概観することとする。

平面形は南北が長い楕円形状を呈し，規模は南北7.8m，東西は6.8mである。壁高は最も遺存状態の良い北壁で最大31cm，床面は平坦である。堆積土は2区分した。壁際から流れ込んだ堆積状況が認められることから，自然堆積と判断している。

住居施設は，壁溝・柱穴・炉・埋甕が検出された。壁溝は9条検出された。いずれも幅15cm，床面からの深さ10cm程である。長さは溝1が最も長く4.6m，溝7がそれにつぎ長さ3.6m，他の溝は1～2m程である。この様な状況から97号住居跡の壁溝は，各時期とも住居内を全周するものではなく，部分的に途切れながら巡っていたものと判断している。これら壁溝については，その作られた位置から溝1～3，溝5・6，溝7～9が相互に関連するものと考えている。溝4については，これと関連するような壁溝は検出できなかった。

小穴は，総数50個検出され，溝7～9に近接・重複する位置に作られたものが多い。これら

の小穴の中で上面に床面が作られ，古い時期の所産と考えられるものはP1・P4・P6・P36・P40・P42～P48の15個である。P2は本住居跡堆積土上面から掘り込まれ，本跡には伴わない柱穴である。小穴の深さ・配置から互いに関連すると考えられる小穴は，以下の通りである。P7～P12はいずれも床面からの深さが50㎝以上の小穴で，ほぼ同じ間隔で円形状に配置されている。P1・P6・P13・P15・P18・P39は，床面からの深さが40～48㎝ほどの小穴で，P7～P12を結んだ円の僅かに内側に円形状に配置されている。この中には，P6とP14のように重複するものも見られることから，すべてが同時期のものとは考えられないが，大半の小穴には関連性があるものと考えている。P36～P38は深さ51～54㎝の小穴である。ほぼ等間隔に配置されていることから，これについても互いに関連する小穴と考えているが，住居跡北西側で対応すると考えられる小穴を特定できない。これらの小穴については本住居跡の主柱穴と考えられ，どの時期においても基本的には主柱穴を円形状に配置していたものと判断している。

炉は4基検出された。1～3炉は石囲部と前庭部からなる複式炉（？），4炉は地床炉である。2・3号炉は，炉内堆積土上部に貼床が認められることから，古い時期の炉と判断している。

1炉は住居跡南東壁際に作られている。平面形は紡錘形状を呈する石囲部に，前庭部が取り付いた形の複式炉で，中軸線は真北から45°程西に傾き，石囲部は北西端に作られている。規模は長さ200㎝，石囲部と前庭部が接する部分の幅は90㎝である。石囲部の規模は90×120㎝で，掘形周壁際に礫を設置し縁石としている。石囲部先端には焼土面が認められ，これに接して小穴が認められるが，この小穴周壁には焼けたような状態は観察されなかった。

2炉は北西壁際に作られている。平面形は三角形状を呈するものと考えられ，規模は現況で190×250㎝である。中軸線は真北から45°程西に傾き，南東端に石囲部が作られている。炉の形態は1炉と同じと考えられるが，現況では，前庭部と石囲部を区画する縁石が遺存しているだけである。石囲部は，直径120㎝程の円形状をなしているものと考えている。石囲部中央には強い焼土面が認められたが，その他の施設は検出されなかった。

3炉は住居跡北東側に作られ，先端部は1炉とほぼ接している。平面形は不整な楕円形状で，規模は長さ120×250㎝である。遺存状態が悪く，炉の掘形が検出されただけであるが，その特徴は1・2号炉と共通している。炉の先端部には焼土面が認められるが，その他の施設は何等検出されなかった。4炉は床面が焼けただけの地床炉である。1炉の先端部から南に向かって伸び，規模は80×160㎝を測る。炉の焼けは弱く，焼土化は炉上面から3㎝下まで認められた。埋甕は住居跡南側から検出された。深鉢の胴下半部を正立の状態で設置したものである。埋甕堆積土上部には，貼床が認められた。

検出された住居施設の中で，壁溝と炉の遺存状況から検討すると，本住居跡は西・北・南に2回程，拡張を伴う建て替えをしたものと考えられる。構築当初の住居施設と考えられるものは，

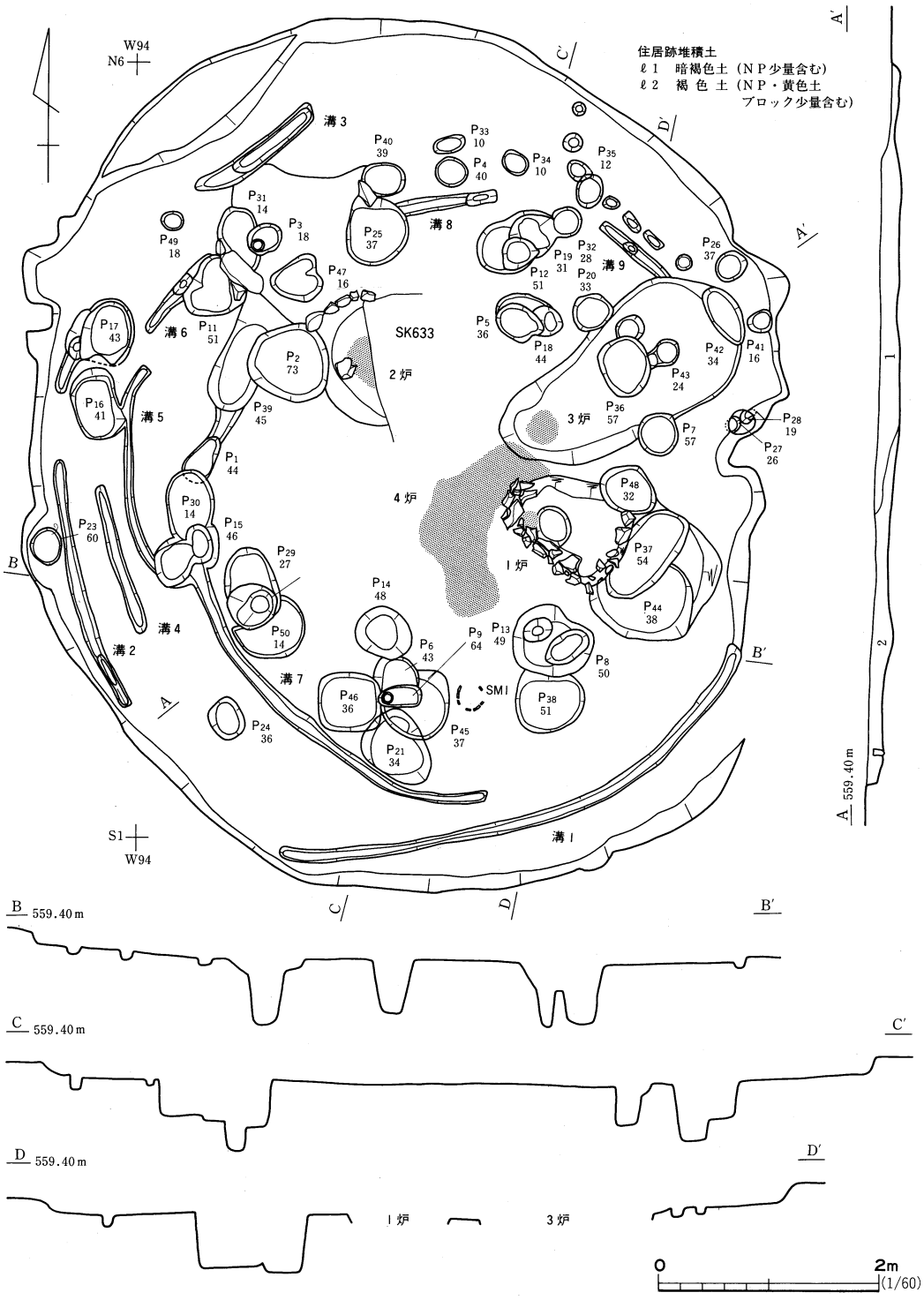

W94
N6
S1
W94
住居跡堆積土
ℓ1　暗褐色土（NP少量含む）
ℓ2　褐色土（NP・黄色土ブロック少量含む）
溝1
溝2
溝3
溝4
溝5
溝6
溝7
溝8
溝9
SK633
1炉
2炉
3炉
4炉
SM1
A 559.40m
B 559.40m
C 559.40m
D 559.40m
0
2m
(1/60)

図220　97号住居跡

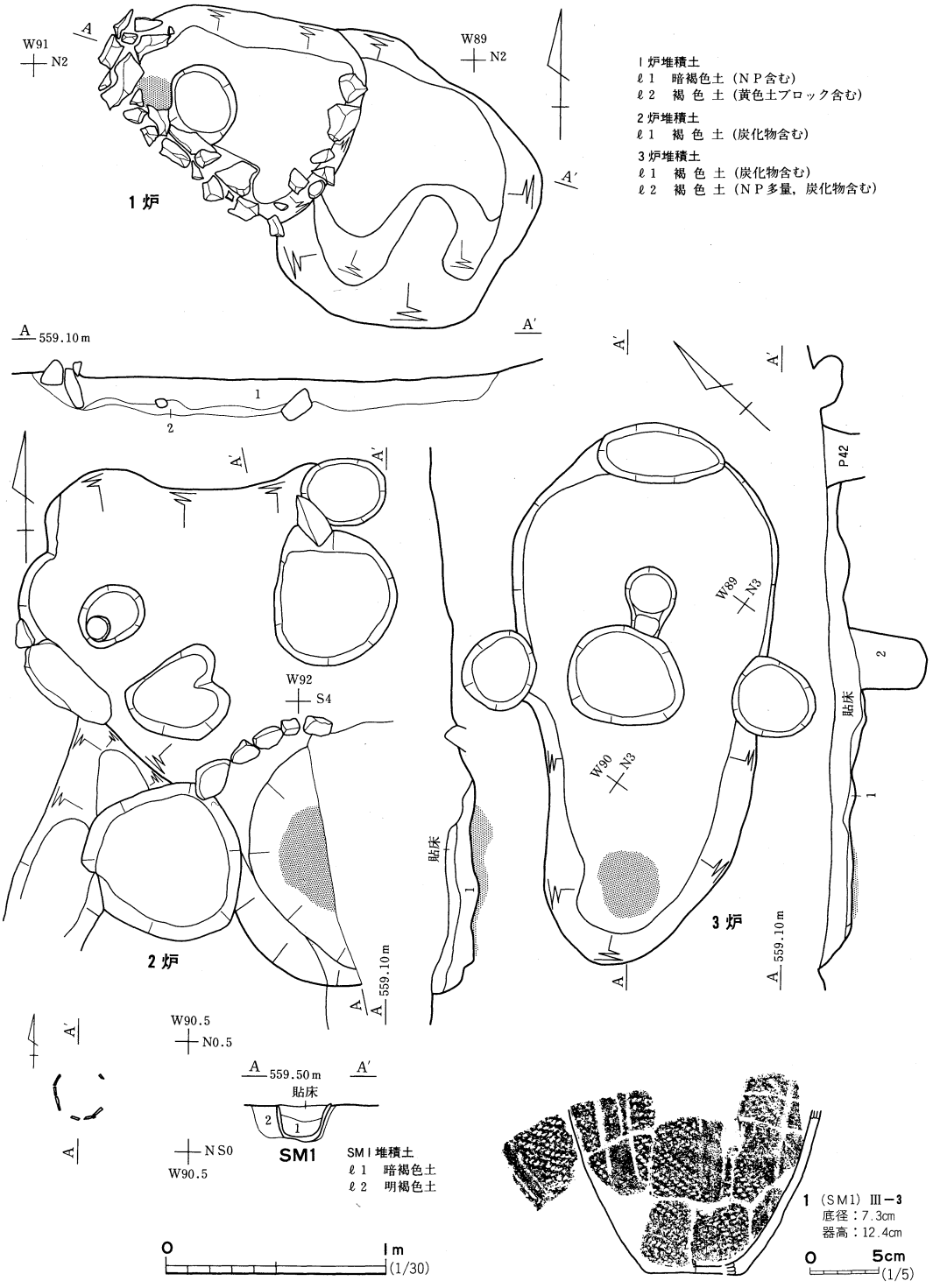


図221　97号住居跡1炉・2炉・3炉と埋甕・出土遺物（1）

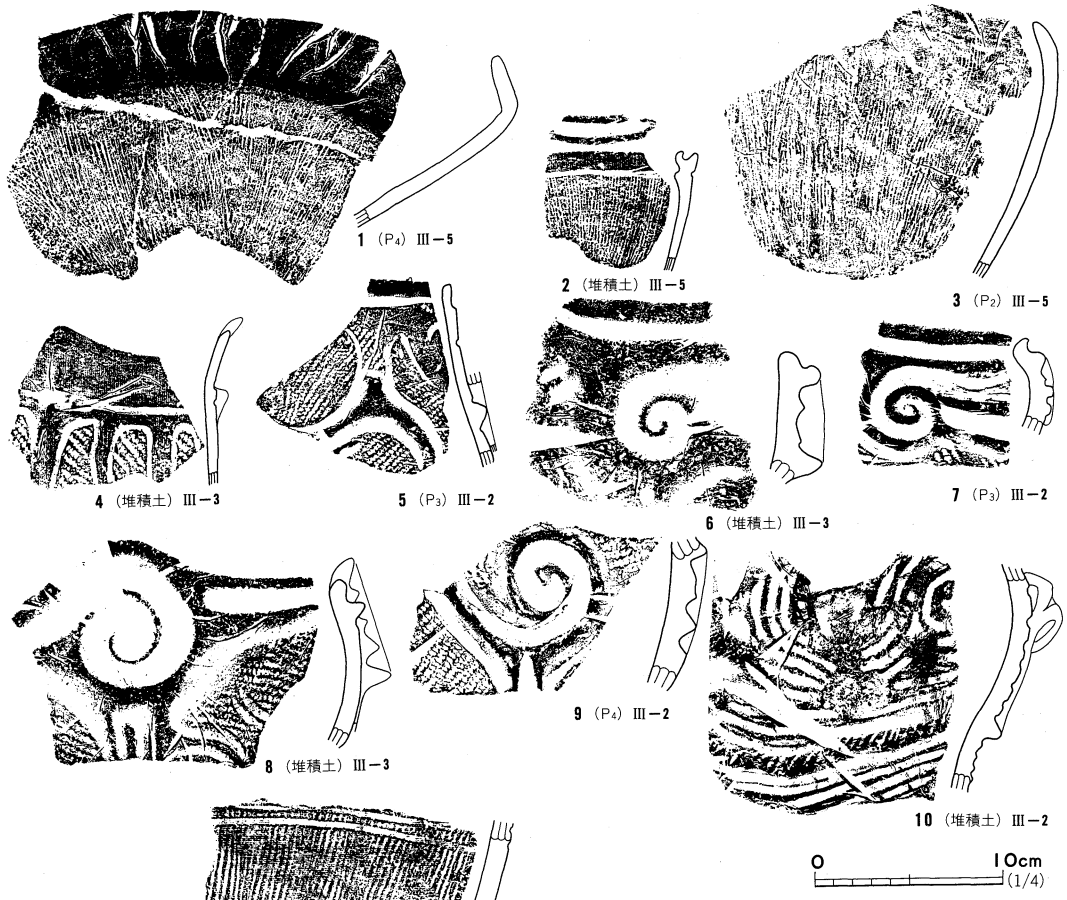


図222　97号住居跡出土遺物（2）

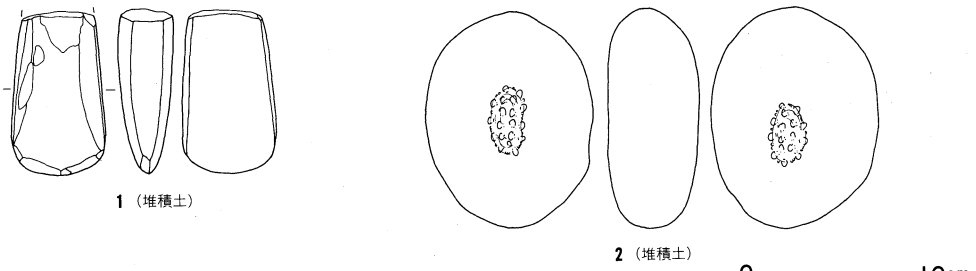


図223　97号住居跡出土遺物（3）

溝7・8と3炉であろう。推定される規模は南北5.4m，東西5.0mである。1回目の建て替えに伴うと考えられる住居施設は，溝5・6と2炉である。推定される住居規模は，南北6.0m，東西5.8mである。最も新しい時期の住居施設については，1炉と現存する周壁および溝1～3を考えている。規模は南北が7.8m，東西が約6.8mである。小穴については各時期ごとに特定することは不可能であるが，先に述べた小穴の組み合わせのうち，P7～P12については最も新しい時期の主柱穴と考えている。

遺　　物（図221～223）

97号住居跡からは，縄文土器片が330点，石器が8点出土している。土器片は堆積土中や小穴内から散在した状態で出土したものがほとんどである。図221－1は埋甕である。胴部に短冊状の縄文帯・無文帯を縦位・交互に施している。図222－4もこれに近い。図222－1～3は，条線文の施された粗製土器である。1は浅鉢であろう。同図5～9は隆沈線で文様を描いている。6～9には渦巻文がみられ，6の隆線は太い。同図10は沈線を多用して文様を描き，同図11は地文に撚糸文が施されている。同図12は偏平な礫の側縁部に抉りを加えた石錘，同図13・14は不定形石器である。図223－1は磨製石斧，同図2は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は長径約7.8m，短径6.8mを測る楕円形状の竪穴住居跡である。壁溝・炉のあり方から拡張を伴う建て替えを2度行ったものと考えている。住居跡施設では炉に特徴が認められる。一応複式炉の範疇で考えているが，炉施設には石囲部と前庭部が認められるだけである。石囲部内にはいずれも焼土面が認められた。この炉の特徴は，法正尻遺跡では90号住居跡の炉のあり方と共通している。（松　本）

98号住居跡（SI98）

遺　　構（図224，写真96）

調査区中央部西寄りの遺構密集域，ソ・タ14Gで検出された竪穴住居跡である。検出面はLⅢb上面及び重複するSI93・108の床面である。他遺構との重複が激しく，南東部でSI93，

北東部でＳＩ108と重複し，どちらも本住居跡より新しい。また本住居跡の床面からは，ＳＫ573・592・596・597・600・601・602・605・606が検出されている。ＳＫ600～602との新旧は不明であるが，他の土坑はすべて本住居跡より古い。多数の土坑と重複する住居跡南側では周壁の明瞭な立ち上がりが得られず，遺存状態は悪い。

平面形は南北を長軸とする楕円形と推測され，規模は現況で南北5.8ｍ，東西4.2ｍである。遺存する周壁の立ち上がりは急で，壁の遺存高は，西壁で最大31㎝を測る。床面は全体的に緩い窪みが見られるが，これは重複する古い土坑の堆積土上に作られた本住居跡の床面が，踏まれる事によって陥没したためと理解している。遺構内堆積土は3層に区分される。主体となるのはＬⅢｂに土質が近似する暗褐色土で，ℓ2には焼土粒，ℓ3には炭化物が含まれている。堆積状態については，壁際からの流れ込みの様相が認められることから，自然堆積と判断している。

住居内からは，小穴が8個と炉が3基検出された。壁際に六角形状に配置されたＰ1～Ｐ6は，直径が30～45㎝，深さが28～49㎝と規模がほぼ揃っている。またＰ3とＰ4の間が1.8ｍの他は各小穴の間隔が2.2～2.5ｍとほぼ等しいことから，本住居跡の主柱穴と考えている。中央部にあるＰ8は直径58㎝，深さ54㎝と主柱穴として十分の規模を持つため，Ｐ1～Ｐ6と共に上屋を支える役目を担っていたとも推測できる。

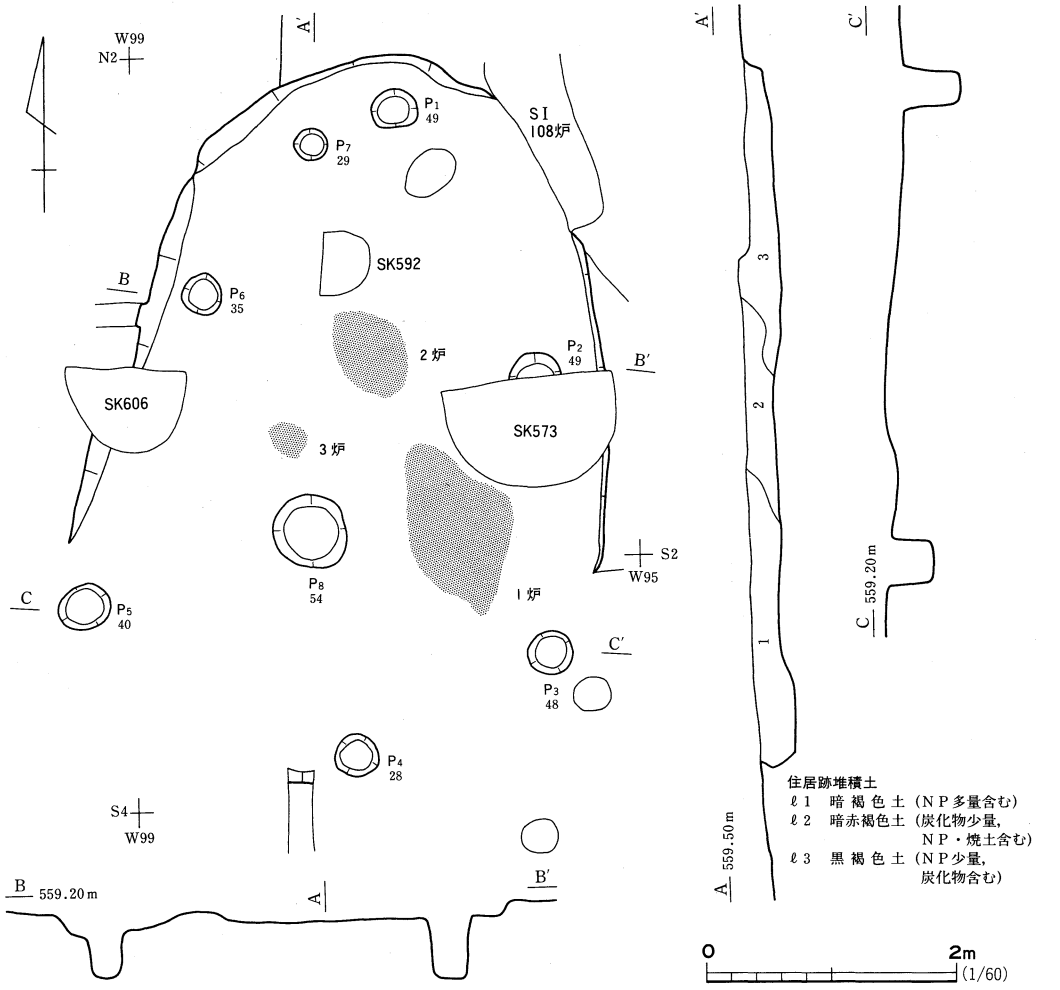
3基の炉は，住居中央部に隣接して位置する。1炉は90×145㎝の楕円形で，焼土の厚さは5㎝である。2炉は56×80㎝の楕円形で，焼土の厚さは8㎝と焼土化は強い。3炉は25×36㎝の楕円形で，焼土の厚さは1㎝で焼けが弱い。いずれの炉も，周囲の床面より若干窪んでいる。

遺　　物（図224・225）

98号住居跡からは，220点の縄文土器片と2点の石器が出土している。縄文土器片は，住居跡堆積土中や床面直上から散在した状態で出土している。図224－1・2は，キャリパー状を呈する深鉢の口縁部である。口縁部には，隆沈線によって端部が渦巻状を呈する文様を描く。同図3・4は，口縁部を無文とするものである。3の胴部には，沈線で区画された帯状の縄文帯を縦位に配している。同図5は，断面台形状の低い隆帯で渦巻文を描くものである。同図6は，胴部文様帯が稜沈線によって上下に区画されている。図224－7～図225－2には，縦位の沈線が施されている。図225－3は底部資料で，胴部下端に沈線によるＵ字状の区画文が描かれ，区画内には縄文が施されている。同図4は，剝片の下縁部に粗い調整を加えた不定形石器である。

ま　と　め

本住居跡は，他遺構との重複が特に多く遺存状態はやや悪い。遺存部の形状・住居施設から東西4.3ｍ，南北は5.9ｍ程の楕円形の住居跡と考えられる。主柱穴は基本的に6個で構成され，6角形状に配置されている。炉は3基の地床炉が検出された。本住居跡の所属時期は，出土土器が大木8b式から10式にまで渡っているものの，炉の形態と重複する遺構との切り合いから，大



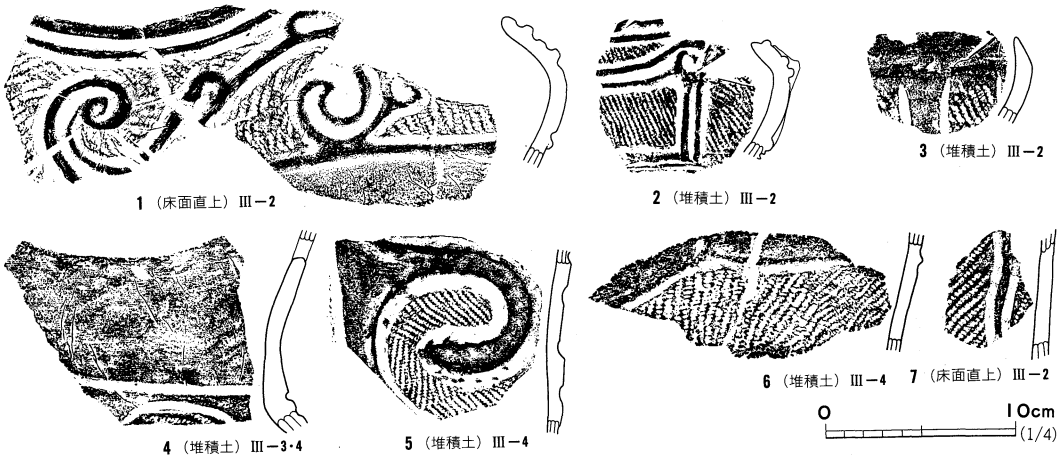


図224　98号住居跡と出土遺物（1）

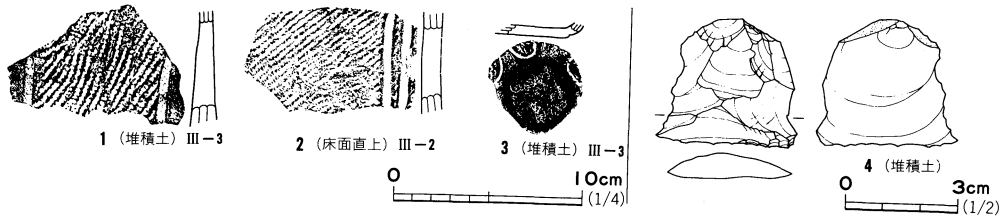


図225　98号住居跡出土遺物（2）

木8b式期と考えている。　（丹　治）

99号住居跡（SI99）

遺　　構（図226，写真97）

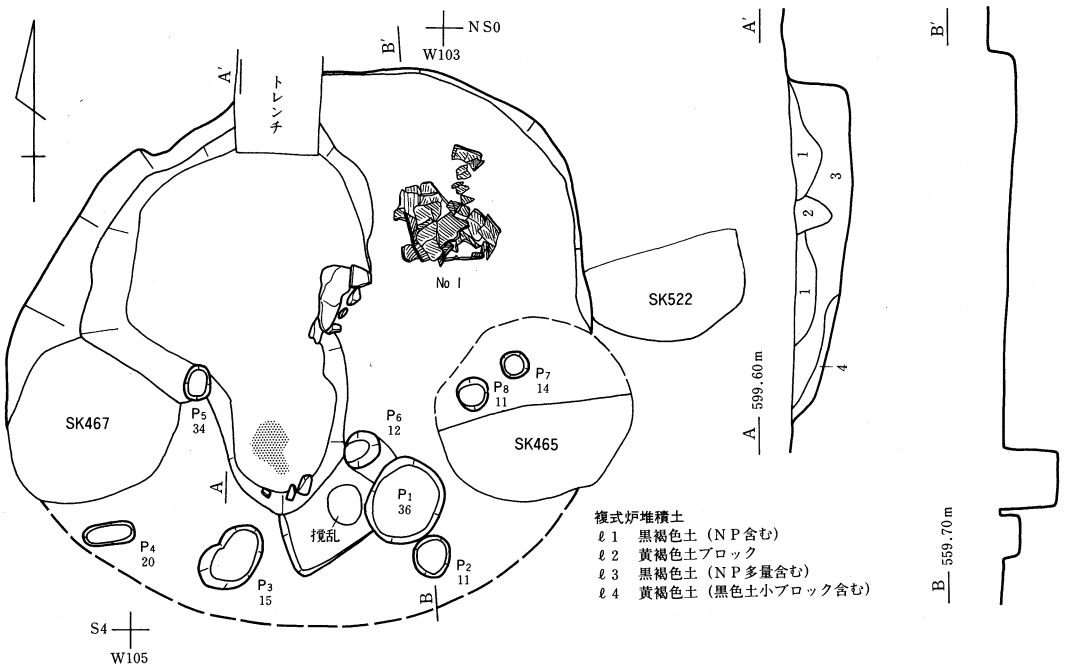
調査区タ12・13GのLⅣ上面において検出した竪穴住居跡である。SK465・467と重複し，本住居跡が新しい。遺存状態は悪く，住居跡南半部については周壁を確認することはできなかった。平面形は遺存部の形状から円形を基調とするものと考えられる。規模は現況で東西3.9m，南北は2.0mを測る。壁高は最大12cmを測り，周壁はほぼ垂直に立ち上がっている。住居内堆積土は2層に分層したが，ベースとなる土は，いずれも暗茶褐色土である。

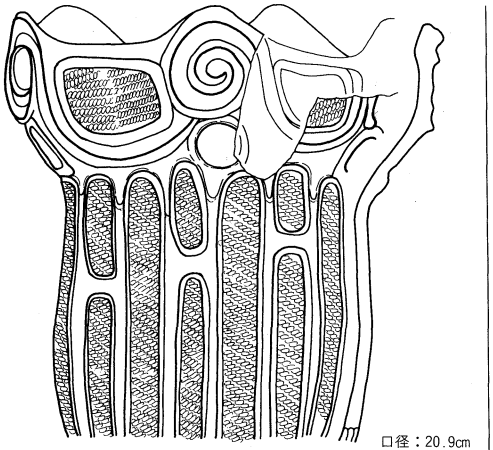
住居施設は，8個の小穴と炉が検出された。小穴は，床面からの深さが11～36cmと浅く，作られる場所にも共通性が認められないことから，本住居跡に伴うものか判断できなかった。炉は住居跡中央に位置している。平面形はダルマ状を呈し，規模は長軸250cm，短軸は南側80cm，北側190cmを測る。炉南端と，西側の括れ部には部分的に石が設置されていた。炉の焼けは弱く，南端部に僅か焼け面が認められるだけである。焼け面の周囲には土器が埋設されていたような痕跡は，認められなかった。

遺　　物（図226・227）

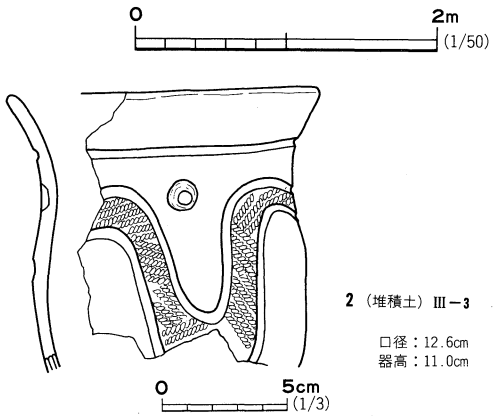
本住居跡からは，縄文土器片610点と土製品が1点出土している。住居跡北西部の床面直上からは図226－4の土器が，潰れた状態で出土している。同図1はキャリパー状の深鉢である。口縁部には，断面が三角形状をなす隆線で楕円形状の区画文を描いている。この区画文の一部は渦巻文を描き，口縁部から突出して5個の突起を構成している。同図2・3は小型の深鉢で，2には沈線で区画された波状の縄文帯が認められる。3には条線文が施されている。同図4は縄文が施されただけの粗製土器である。

図227－1・12は隆沈線で文様を描いている。同図4・5はヒレ状の隆線で渦巻文が，同図6・9～11は沈線で区画された縄文帯を縦位に配置している。同図13は，逆U字状の縄文帯が，同図3は稜線で文様を描いている。同図16は土器破片を利用した土製円盤である。

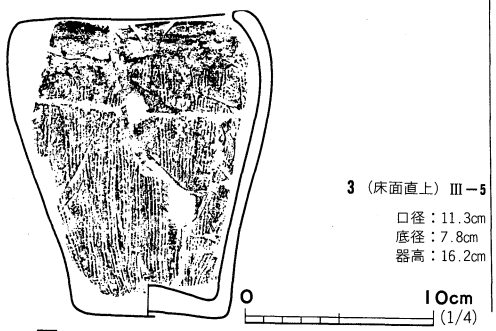




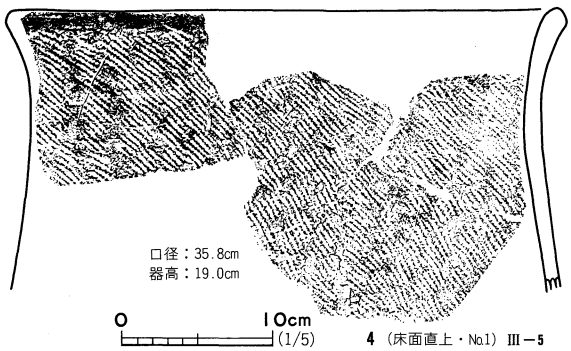
1（床面直上）Ⅲ－3　口径：20.9cm　器高：23.0cm



2（堆積土）Ⅲ－3　口径：12.6cm　器高：11.0cm



3（床面直上）Ⅲ－5　口径：11.3cm　底径：7.8cm　器高：16.2cm



4（床面直上・No.1）Ⅲ－5　口径：35.8cm　器高：19.0cm

図226　99号住居跡と出土遺物（1）

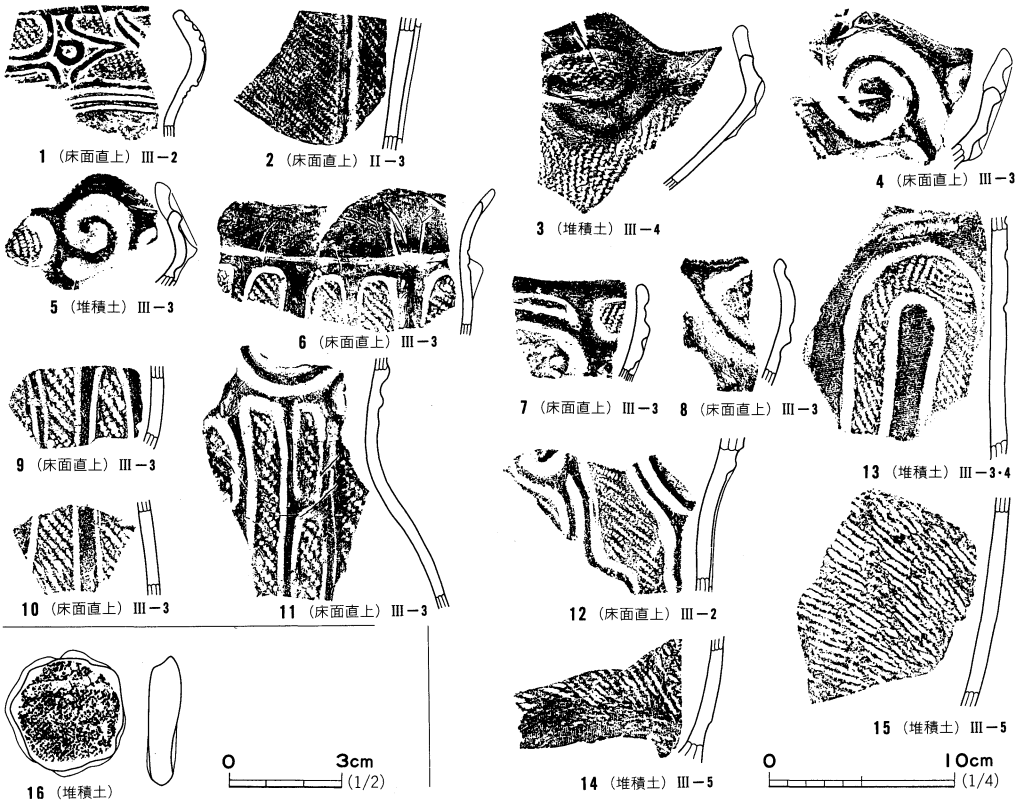


図227　99号住居跡出土遺物（2）

ま と め

本住居跡は遺存部より推測して，平面形が円形をなす住居跡と考えられる。炉は平面形がダルマ状を呈するもので，括れ部には石も設置されていた。調査当初は完全に壊されてしまった複式炉かとも考えたが，埋設土器や石組部の痕跡が認められないことから，燃焼部と前庭部からなる複式炉と判断した。本住居跡の所属する時期は，床面直上から出土した土器から，大木9式期と考えられる。（光　家）

100号住居跡（SI100）

遺　　構（図228，写真98）

タ・チ1GのLⅣ上面で検出した住居跡である。住居跡南端部は倒木痕によって壊されている。本跡はSI95と重複しており，SI95より新しいと考えられる。平面形は円形を基調とし，遺存値は東西5.9m，南北は現況で3.6m程である。検出面から床面までの深さは，東壁で約70cm，西壁で約45cmを測り，壁の立ち上がりは急である。床面は西に向かって若干傾斜しているが，

平坦で硬く締まっている。住居内堆積土は色調と混入物から4層に区分した。整ったレンズ状の堆積状況が認められることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は，壁溝と小穴が検出された。壁溝は東壁および北東壁直下にそれぞれ2.1m，1.5mにわたって巡っている。幅は10～20cm程，深さは5cm程である。小穴は10個検出された。P9は直径15cmと小さいが，他のものは直径25～35cm程である。床面からの深さは，P1・P4が55cm程と深く，P2・P3・P6・P7は30～40cmである。規模および位置から主柱穴と考えられるものは，P1・P4であるが，配置状況については明確にすることができなかった。P1・P4に対応する小穴が倒木痕内にもあった可能性も考えられる。

この他に，住居跡中央やや南西に寄った位置から直径90cm，床面からの深さが13cm程の窪みが確認された。平面形は隅丸三角形状，断面形は緩い摺鉢状をなしている。頂点部ではP11と接している。この窪地については住居跡内に占める位置，P11から図229－4に示した土器が出土している事から，ＳＩ100の複式炉石組部の掘形と考えている。しかし，この窪地内およびその周辺に焼土の存在は認められなかった。

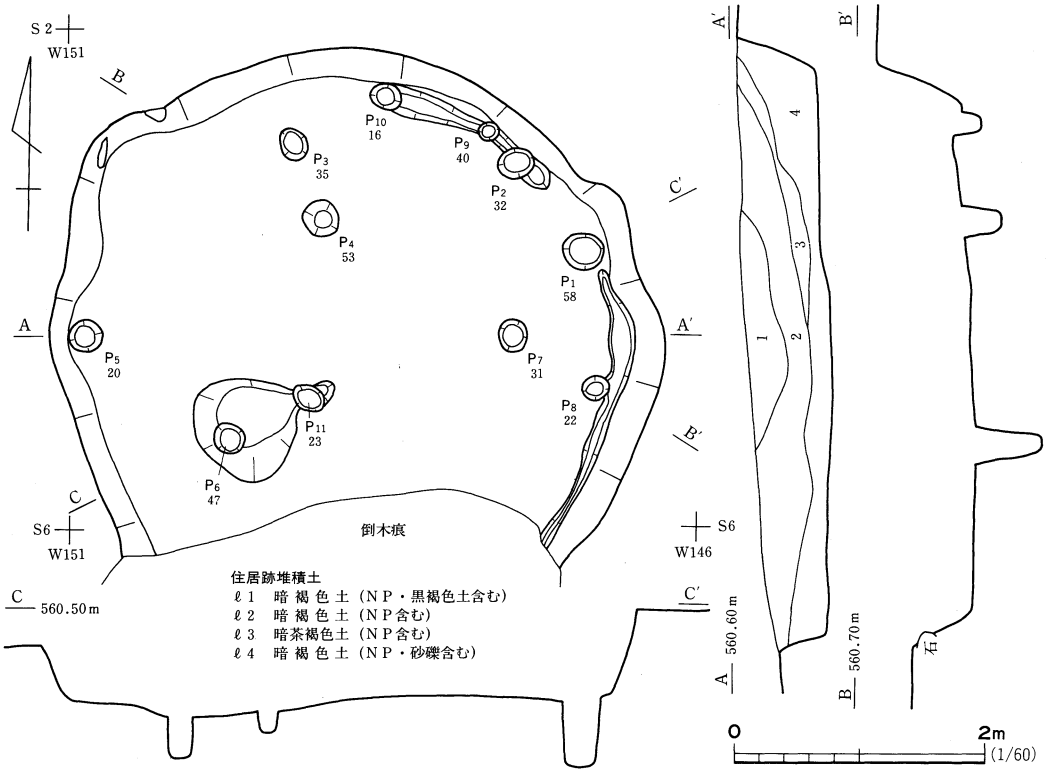
遺　　物（図228～232）

出土した遺物は，縄文土器片2,590点と石器10点である。遺物の出土量は多いが，その大半は住居堆積土ℓ1・ℓ2より出土している。図228－1，図229－4～7は凹線で区画された，S字・C字状の単位文が施されたものである。図228－1，図229－4・7は胴下部に波状の凹線を施している。図230－8～13，図231－3・5・6・11もこれに近い。図228－4，図229－11～図230－4は，口縁部が「く」の字状に屈曲する浅鉢や，これに注口部の付いた注口土器である。口縁部には，稜線や凹線で縁取られた無文帯で文様を描く。図229－2・8，図231－4・12，図232－1は，稜線に縁取られた無文帯で文様を描くものである。図229－2の無文帯は一部渦を巻く。同図8は底部直上に無文帯が認められる。図230－5・6は，沈線で区画された逆U字状の単位文を施したもので，単位文上部は庇状に突出している。図231－1・7・10は，楕円形状の単位文を描くものである。これらの土器の縄文施文は，充填手法によっている。

図229－1，図232－4・5は，口縁部に無文帯が認められる。図228－2・3，図232－6～17は縄文の施された粗製土器である。図229－3，図232－2は条線文が施されている。図232－2はヒレ状の隆線で渦巻文を描いている。図229－9は，台付土器の台部と考えられる。同図10は，口縁部に隆沈線による，横楕円形状の単位文が見られる。単位文の末端には渦巻状の突起を施し，単位文内には刺突文を充填している。図232－19・20は両側縁部中央に打ち欠きをもつ石錘，同図18は全面に凹部が観察される磨石である。

ま　と　め

本跡は，円形を基調とする竪穴住居跡である。壁際には一部壁溝が認められた。炉は複式炉と



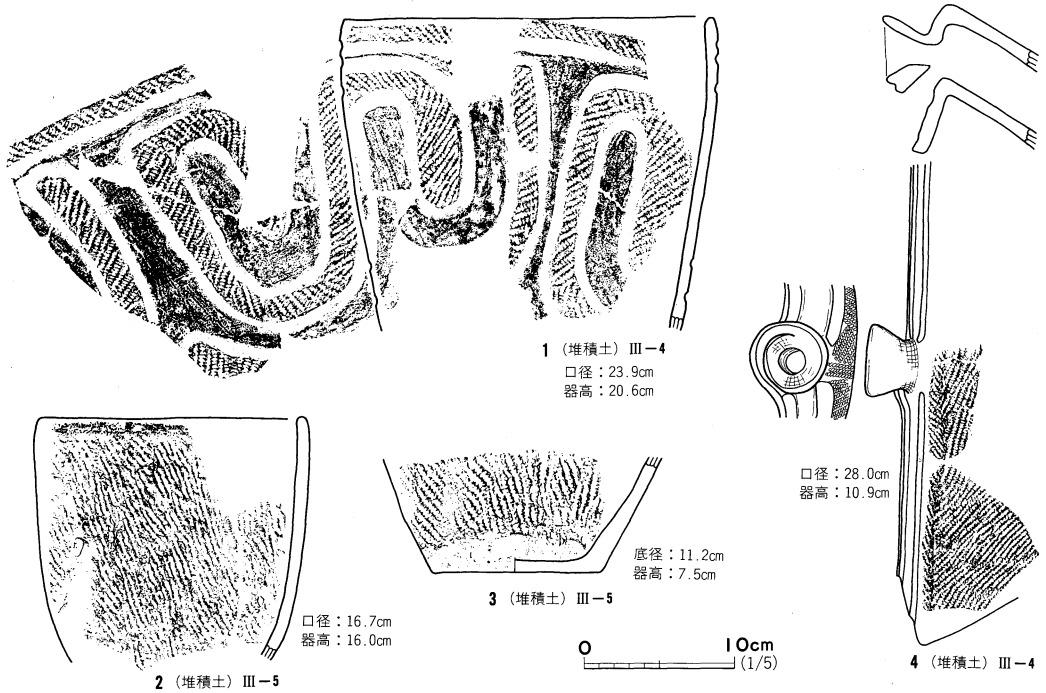


図228　100号住居跡と出土遺物（1）

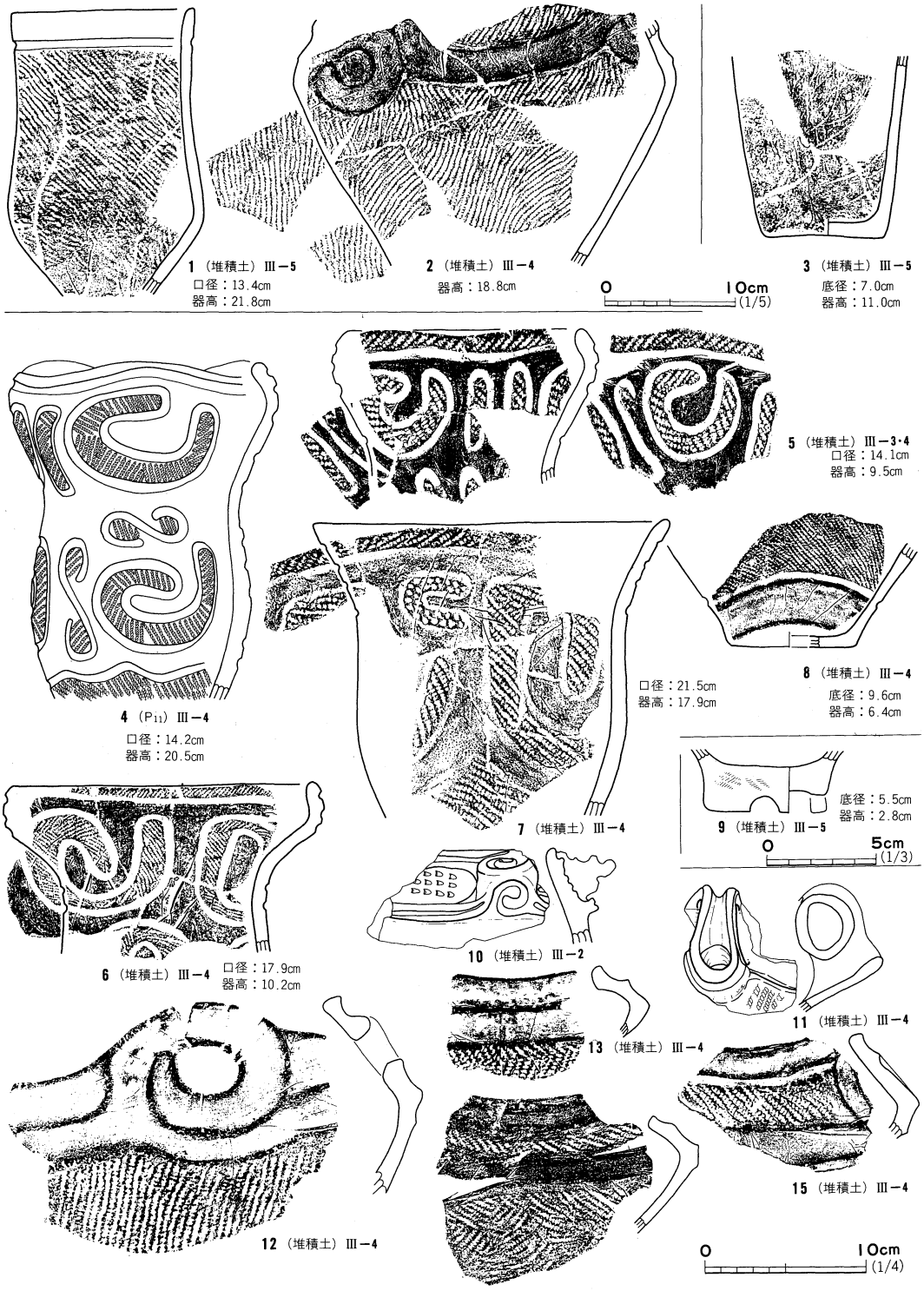


図229　100号住居跡出土遺物（2）

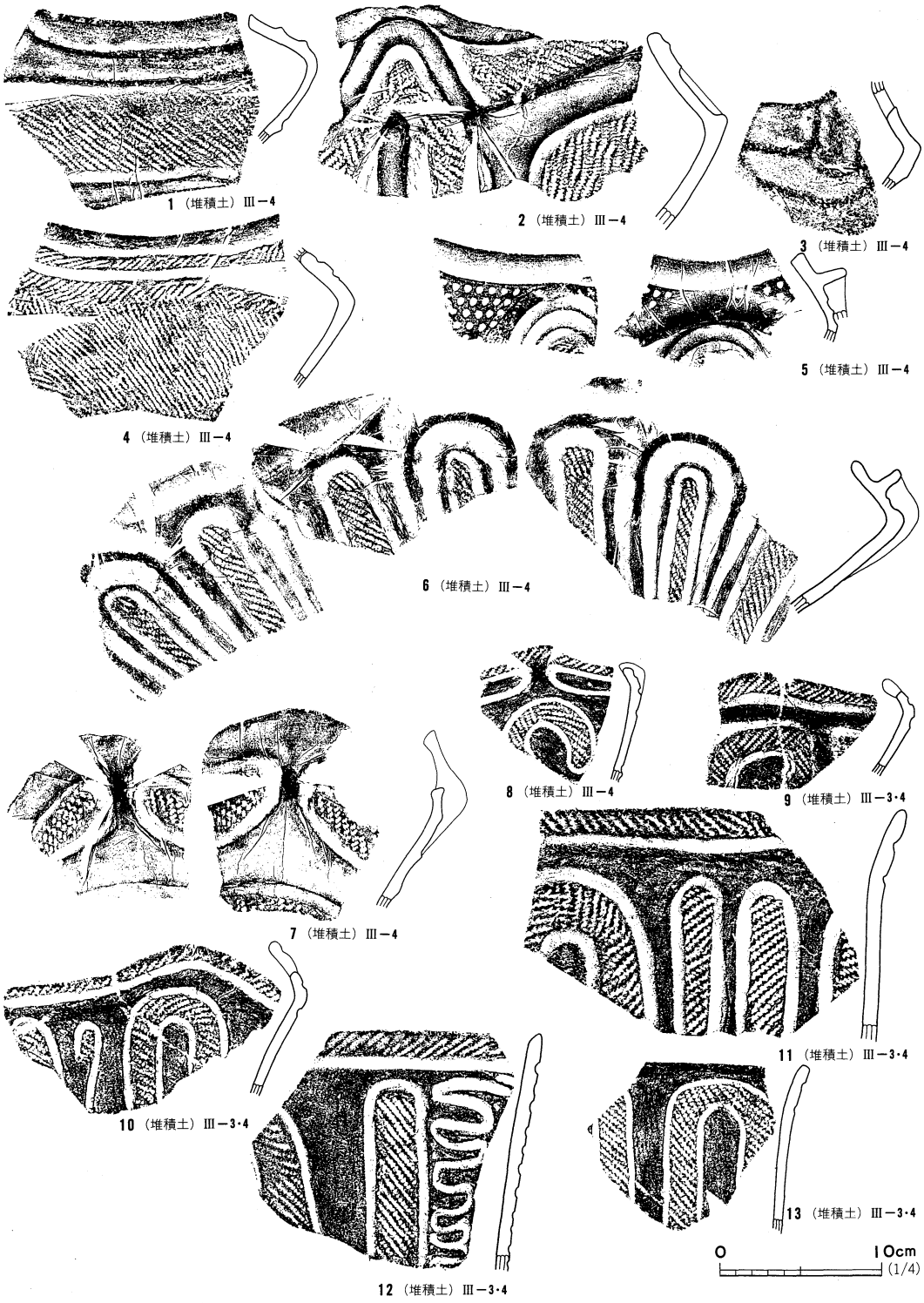


図230　100号住居跡出土遺物（3）

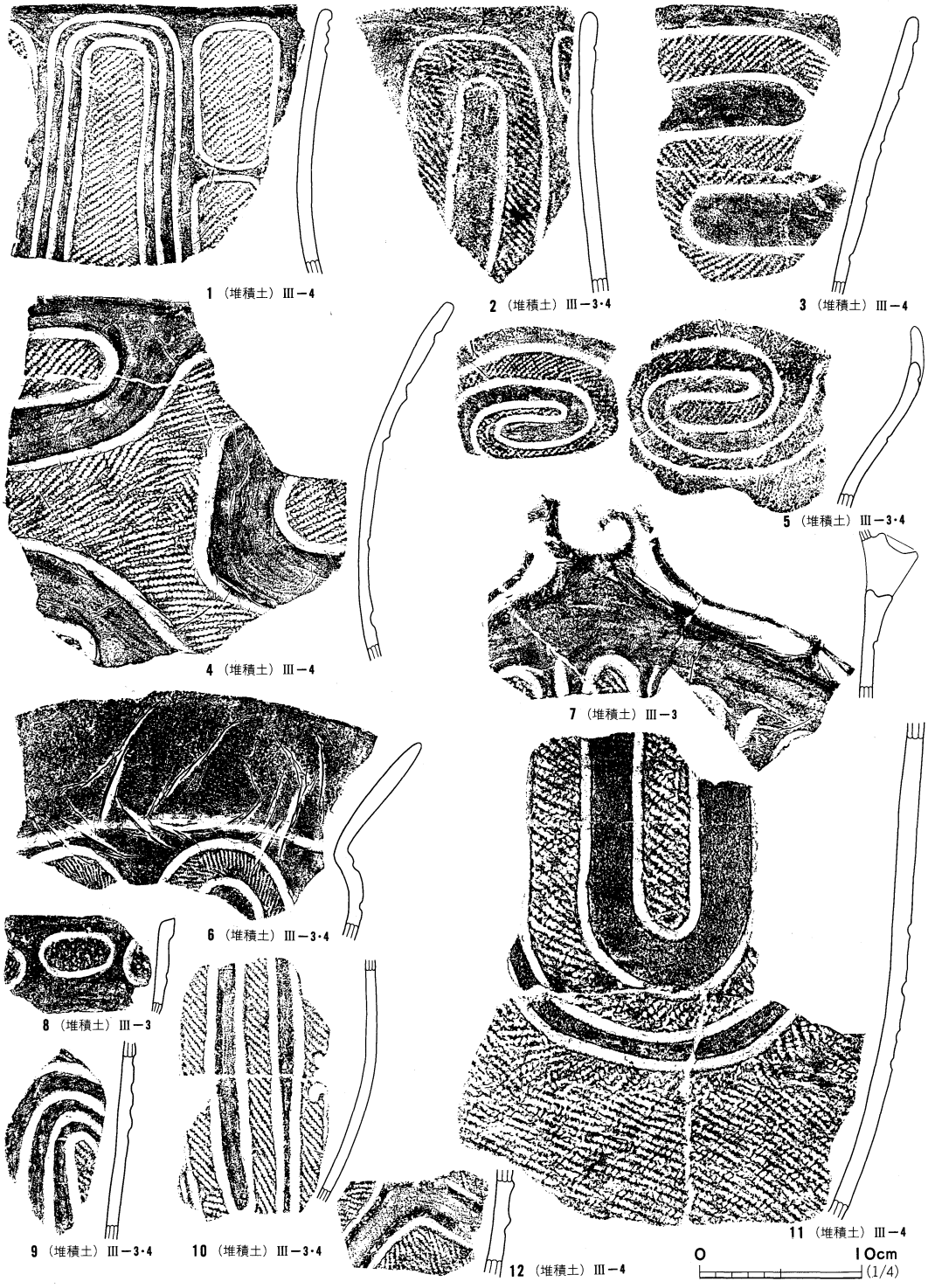


図231　100号住居跡出土遺物（4）

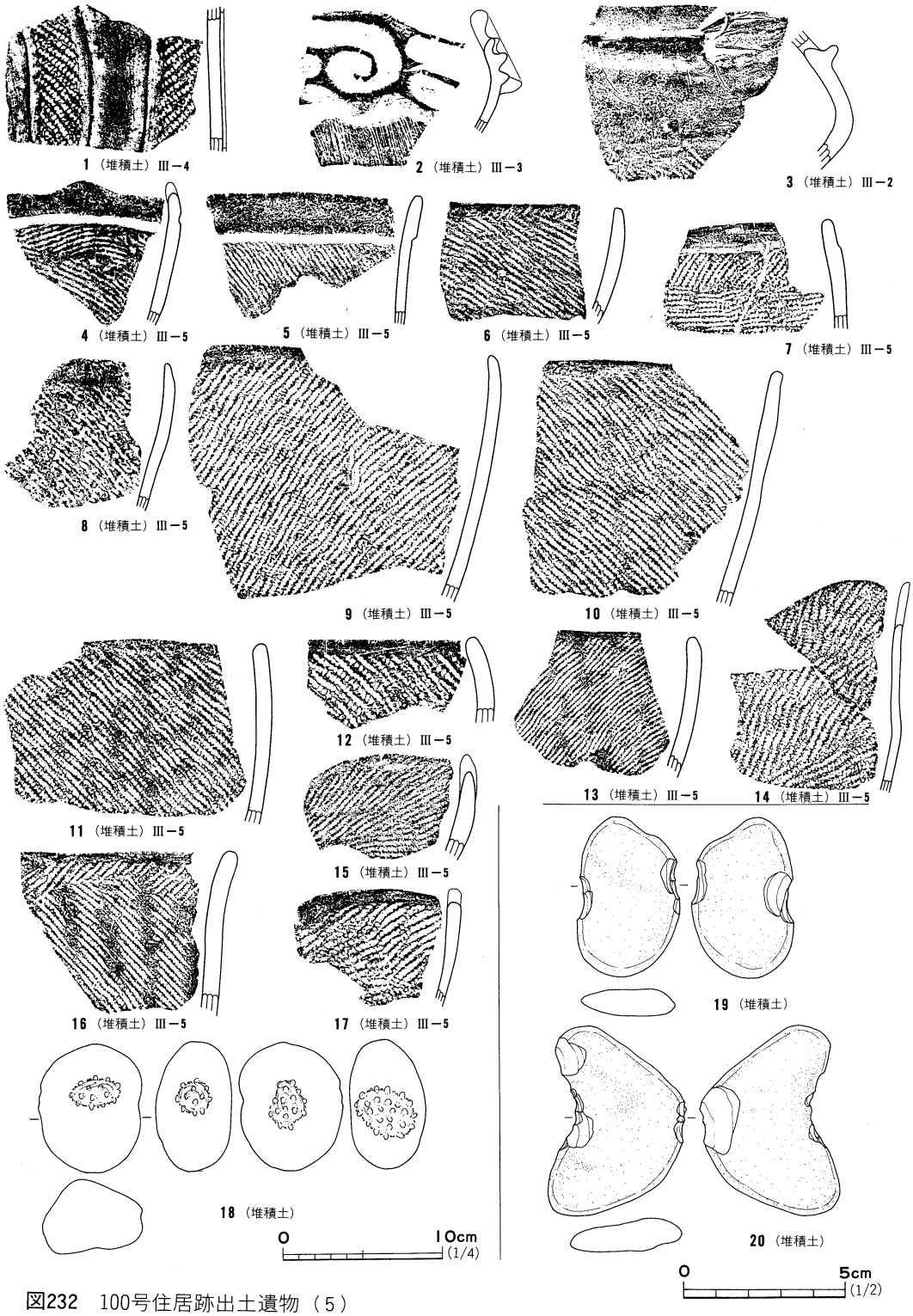


図232　100号住居跡出土遺物（5）

考えられるが，現状では石組部の掘形と考えられる浅い窪みと，埋設土器の掘形と判断した小穴が認められただけである。所属時期は出土遺物から，大木10式期に比定されよう。　（松　崎）

101号住居跡（ＳＩ101）

遺　　構（図233，写真99）

調査区中央部の南東緩斜面，タ～ツ19・20ＧのＬⅢｂ下部で検出された住居跡である。ＳＫ332・333・415と重複し，本住居跡が古い。平面形は隅丸方形を呈し，規模は1辺6.8ｍを測る。周壁は急峻に立ち上がり，検出面からの深さは最大35㎝を測る。北壁際には幅18～24㎝，深さ3～13㎝，長さ180㎝の壁溝が作られている。床面は平坦であるが，南に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は4層に区分した。ℓ2はＬＶ下に堆積する赤褐色土をベースとする土で，ＬＶをブロック状に含んでいる。この土は，ＳＫ415を掘り込んだ際の排土と考えられる。

住居内からは，12個の小穴を検出した。小穴内堆積土は，P1・P12が暗褐色土，他は褐色土である。P1・P3・P5・P7・P8・P10・P11は，直径26～50㎝，深さ45～82㎝の小穴である。周壁から1ｍ程離れた所に作られ，住居跡平面形と同じく方形状に配置されていることから，本跡の主柱穴と考えた。P1～P3とP8～P10は，それぞれほぼ同じ場所で重複している。炉は検出されなかったが，ＳＫ415の南側床面に薄い焼土粒の分布が認められたことから，同土坑によって壊された可能性が高い。

遺　　物

本住居跡からは，12点の土器が出土したが，いずれも小片で図示していない。

ま　と　め

本遺構は，隅丸方形を呈する住居跡である。住居施設には，方形状に配置された柱穴が認められた。小穴にはほぼ同じ場所で3個ずつ重複するものが認められることから，改築のあったことが推測される。炉は見られないが，重複する土坑によって破壊された可能性が高い。所属時期については出土遺物が少ないため時期を特定できないが，重複関係から大木7ｂ式期かそれ以前と考えている。　（福　山）

102号住居跡（ＳＩ102）

遺　　構（図234，写真100）

セ・ソ4～6ＧのＬⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ103・104と重複しているが，各遺構との新旧については不明である。遺存状態は極めて悪く，検出することができたのは東壁と壁溝の一部，複式炉と9個の小穴だけである。壁と壁溝は，東壁部分において長さ2ｍ程の範囲で検出した。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は最大10㎝である。壁溝は最大幅10cm，深さ3

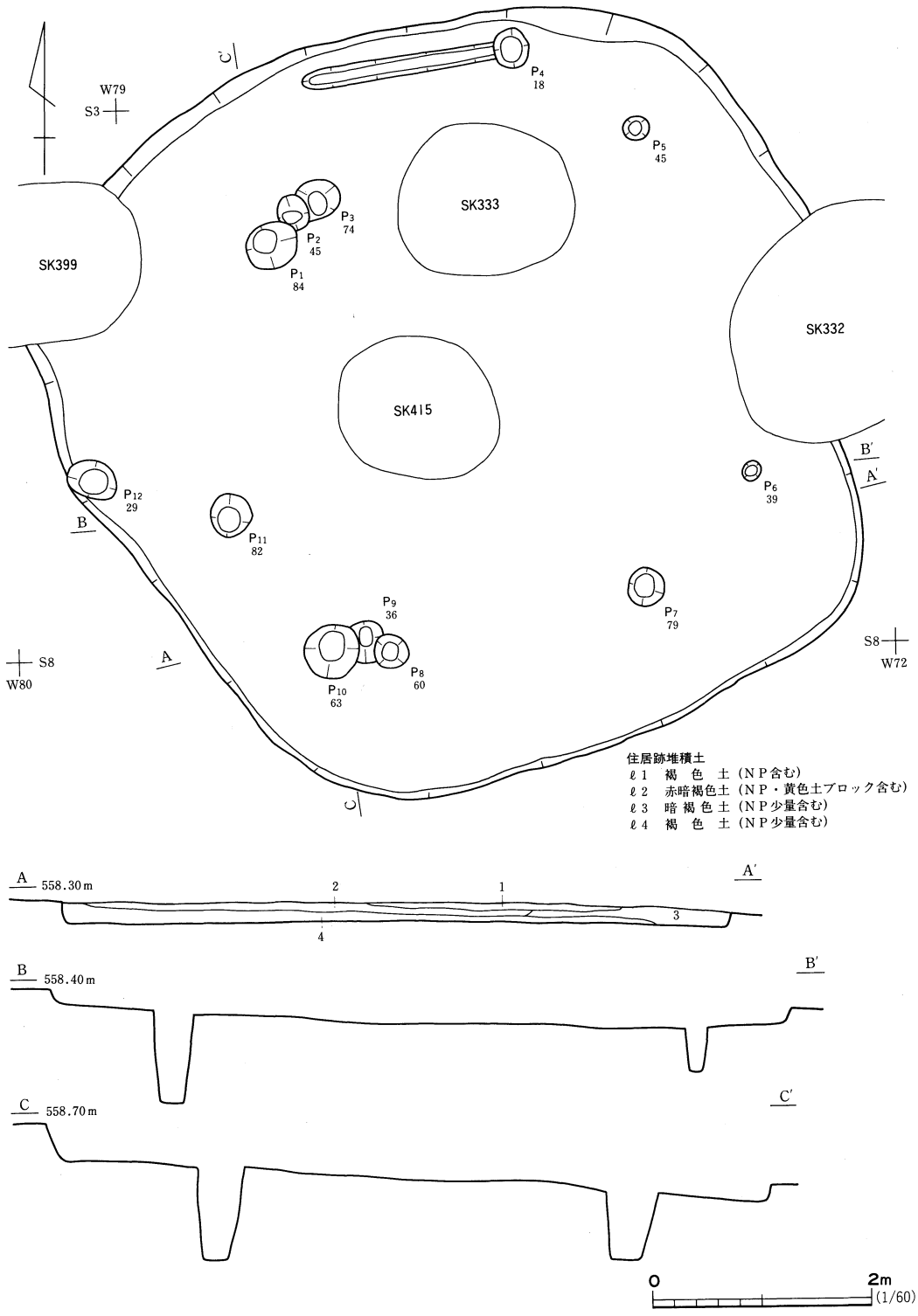
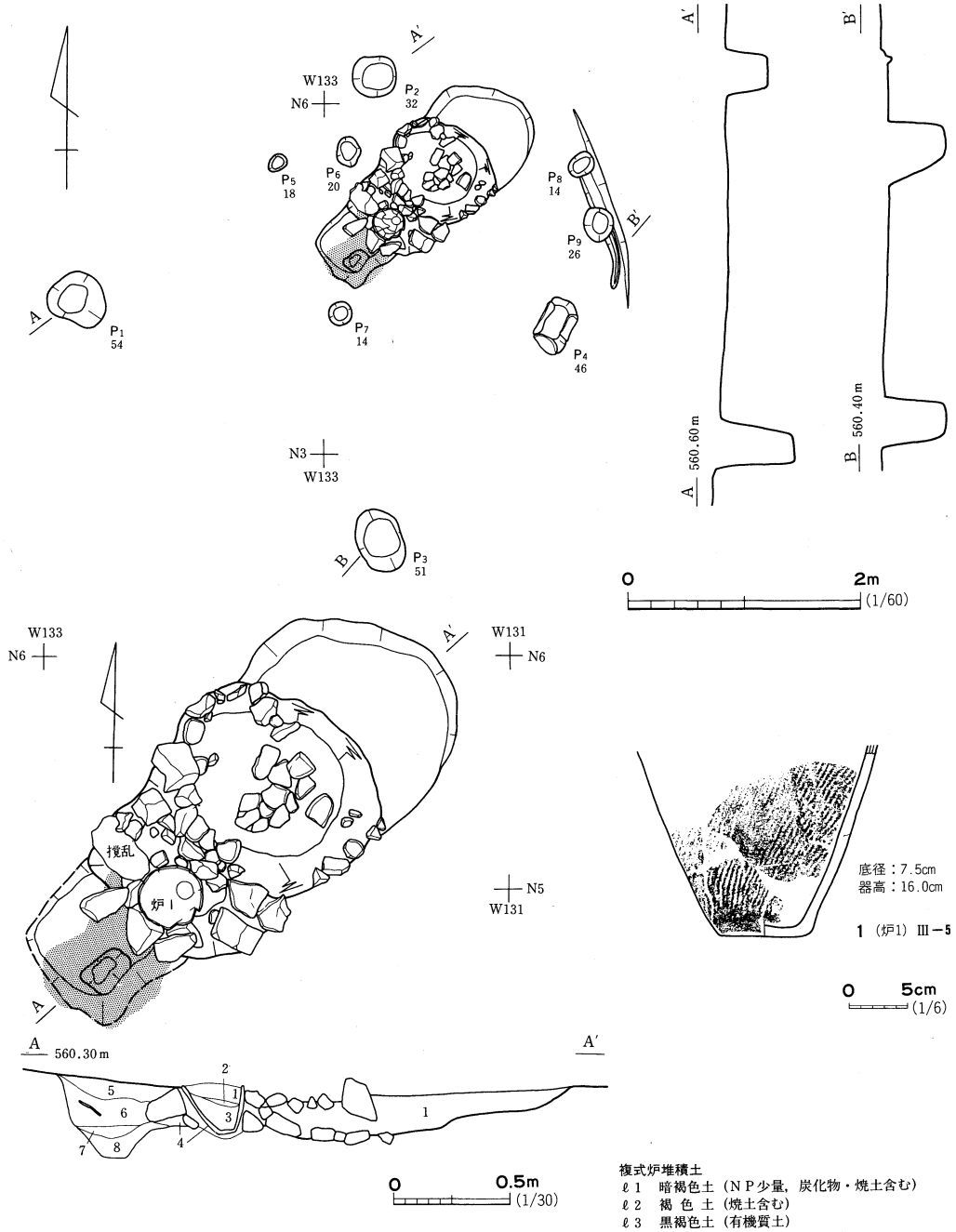


図233　101号住居跡



複式炉堆積土
ℓ1　暗褐色土（ＮＰ少量，炭化物・焼土含む）
ℓ2　褐　色　土（焼土含む）
ℓ3　黒褐色土（有機質土）
ℓ4　褐　色　土（黄褐色土多量含む）
ℓ5　赤褐色土（焼土多量含む）
ℓ6　暗褐色土（炭化物少量含む。締まりなし）
ℓ7　赤褐色土（焼土ブロック含む）
ℓ8　暗褐色土（黒褐色土ブロック含む）

図234　102号住居跡と複式炉

～9㎝と浅い。検出された9個の小穴の中で，P1～P4はいずれも直径40～50㎝，検出面からの深さ32～54㎝である。これらの小穴は，複式炉の土器埋設部取り囲むように四角形状に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えられる。

複式炉は，P2・P4を結ぶ線のほぼ中央に位置している。規模は全長210㎝，最大幅100㎝で，主軸は真北から45°程東へ傾いている。遺存状態は悪く，土器埋設部と石組部の接点と石組部の底面の礫がいくつか元位置をとどめている程度である。土器埋設部は，掘形内に礫を円形に配置し土器を固定している。石組部の平面形は直径100㎝の円形で，断面形は浅い鍋底状をなしている。前庭部は平面形は幅100㎝，長さ50㎝程の半円形状である。

この他に，土器埋設部の南西には，これと接する一辺50㎝程の方形の掘形が認められた。これについても複式炉石組部の掘形と考えている。本住居跡の複式炉石組部については，構築当初埋設の南西側に作られていた土器埋設部を，後に主軸に沿って北東側に造り替えたものと判断している。

遺　　物（図234）

本住居跡に直接伴うと考えられる遺物は，図234－1に示した複式炉の埋設土器だけである。この土器は，縄文の施された深鉢の胴部下半である。

ま と め

本住居跡は遺存状態が悪く，平面形は不明であるが，検出された小穴・複式炉のあり方から，4m程度の規模をもつものと考えられる。また，小穴の規模と位置から主柱穴は4個で，四角形の配置をとるものと考えられる。本住居跡の所属時期は，複式炉を特徴としている点と出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。（山　岸）

103号住居跡（SI103）

遺　　構（図235，写真100）

セ・ソ4・5GのLV上面で検出した。SI102・104と重複しているが，各遺構との新旧については不明である。遺存状態は極めて悪く，検出することができたのは複式炉と小穴だけである。小穴は3個検出した。その位置からP1・P2が，本住居跡に伴うものと考えられる。いずれも直径20㎝，検出面からの深さはP1が19㎝，P2が38㎝である。

炉は，土器埋設部と石組部からなる複式炉である。規模は全長90㎝，最大幅60㎝で，炉の主軸は60°程西に傾いている。土器埋設部は，北西端に位置している。遺存状態は悪く，土器埋設部は撹乱によって大きく壊されている。土器埋設部の縁辺には礫を配置していたらしく，北と南側に礫が一部遺存している。埋設土器は，掘形にそって深鉢を直立状態で据えているもので，器内・外面ともに強く火熱を受けて変色しており，土器と接する周囲の土も焼土化している。石

組部は楕円形を呈し，その長軸は炉の主軸と直交する。規模は東西60㎝，南北40㎝で，鍋底状の掘形に沿って偏平な大型の礫を組み合わせ，その隙間に小礫を充填している。

遺　　物（図236）

本住居跡に伴うと考えられる遺物は，図236－1に示した炉埋設土器だけである。この土器は，胴部下位に括れを有する深鉢で，波状の沈線によって胴部の文様帯を上下に区画している。胴上部には沈線で区画されたU字状の単位文が認められる。同図6は土器破片を用いた土製円板，同図7は凹部を持つ磨石である。

ま と め

本住居跡は遺存状態が悪く，全体の平面形・規模については不明であるが，複式炉を特徴としている点と炉埋設土器から，大木10式期の所産と考えられる。（山　岸）

104号住居跡（ＳＩ104）

遺　　構（図235，写真100）

セ5ＧのＬＶ上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ102・103と重複しているが，各遺構との新旧については不明である。遺存状態は極めて悪く，検出することができたのは，複式炉だけである。

炉は，土器埋設部と石組部からなる複式炉で，遺存状態は悪く埋設土器と石組部底面の石が僅かに遺存しているだけである。規模は全長90㎝で，炉の主軸は真北から45°程東に傾いている。土器埋設部は，炉の南西端に位置している。埋設土器は，底部を欠損した深鉢が正立の状態で据えられていた。土器埋設部周辺は強く火熱を受け，土器と接する周囲の土は焼土化している。石組部は明確な掘形をもたないもので，炉の主軸に沿って礫が遺存しているのみである。

遺　　物（図236）

炉埋設土器の他には，炉内から縄文土器片が僅かに出土しただけである。図236－2は炉の埋設土器で，稜凹線で区画された無文帯でU字状の単位文を描いている。同図3～5は沈線によって曲線的な単位文を施している。同図8は両面に多数の凹部をもつ。

ま と め

本住居跡は遺存状態が悪く，全体の平面形・規模については不明であるが，炉が複式炉であることと炉の埋設土器から，大木10式期の所産と考えられる。（山　岸）

105号住居跡（ＳＩ105）

遺　　構（図237・238，写真101）

テ・ツ10・11Ｇに位置する竪穴住居跡で，新しい時期の遺構であるＳＩ79の床面で検出した。

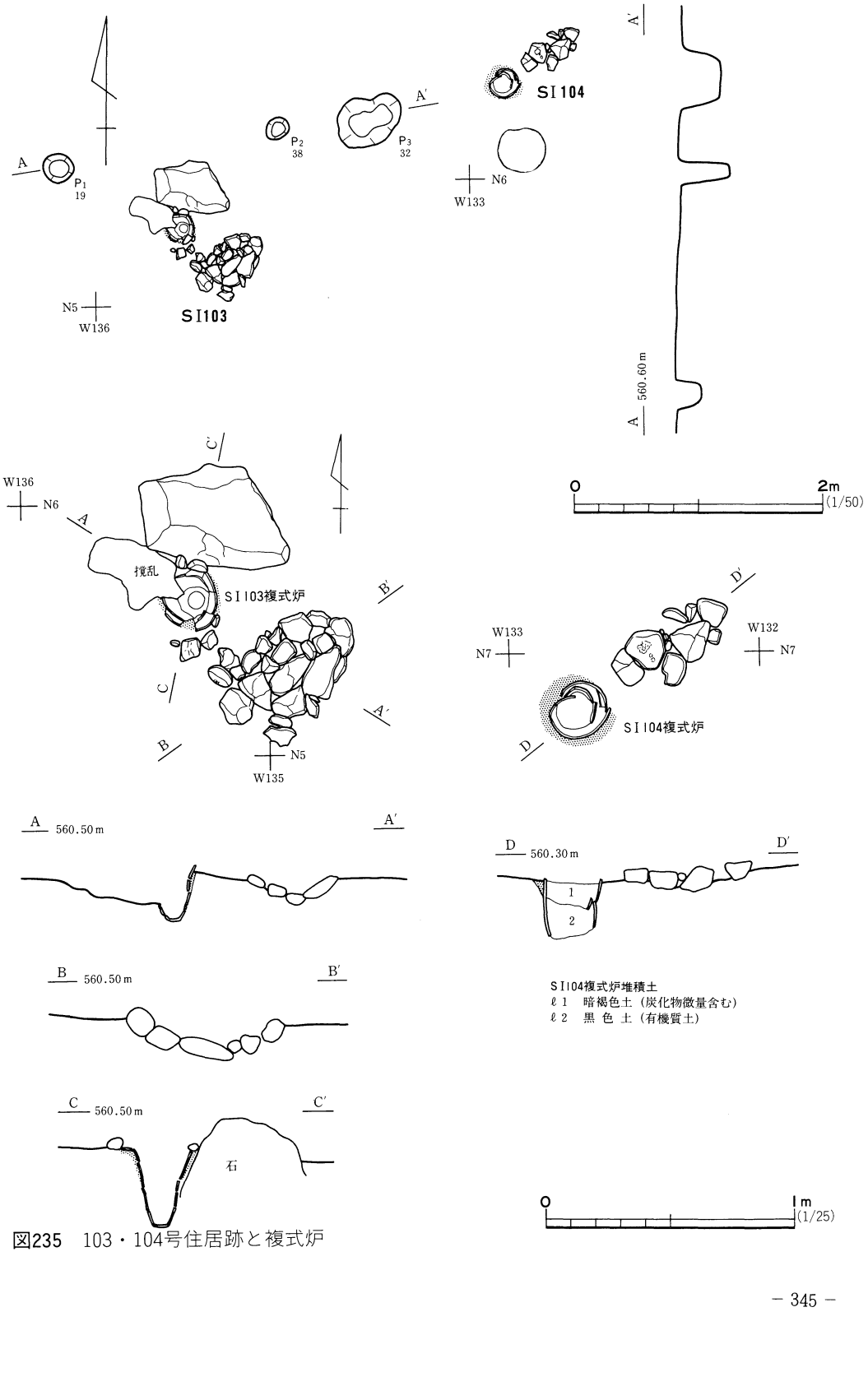
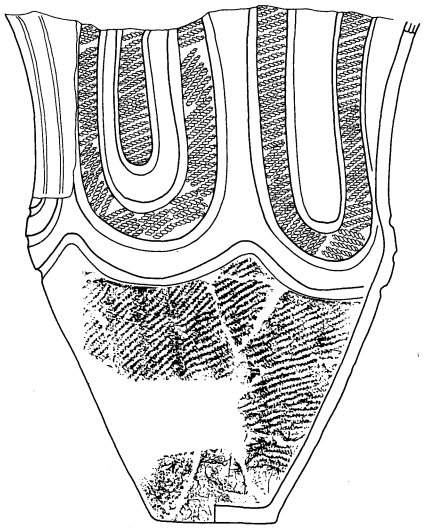
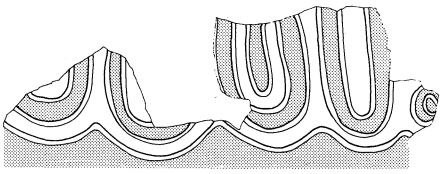


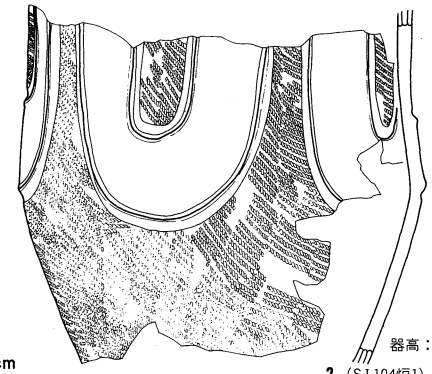
図235　103・104号住居跡と複式炉



1（SI103炉1）Ⅲ－4
底径：8.0cm
器高：33.4cm



1の文様展開



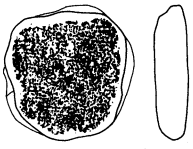
2（SI104炉1）Ⅲ－4
器高：24.0cm

0　10cm (1/5)

3（SI104炉1）Ⅲ－4

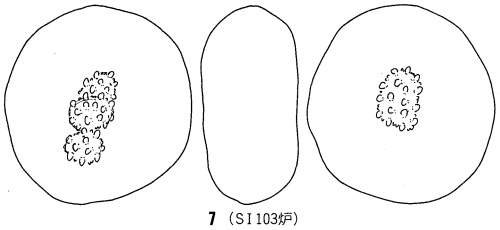
4（SI104炉1）Ⅲ－4

5（SI104炉1）Ⅲ－4



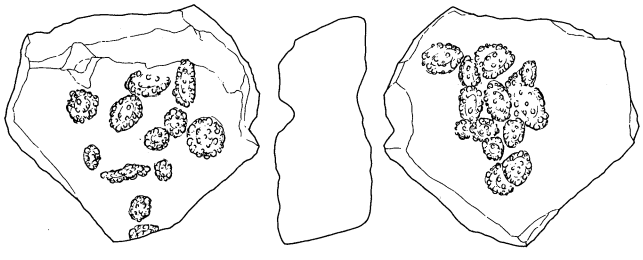
6（SI103炉）

0　3cm (1/2)



7（SI103炉）

0　10cm (1/4)



8（SI104炉）

0　10cm (1/5)

図236　103・104 号住居跡出土遺物

ＳＩ78・79・80，ＳＫ432・752・595・610と重複し，竪穴住居跡はすべて本跡より新しく，土坑はすべて古い。遺存状態は悪く，住居跡西壁が部分的に検出されただけである。平面形は，遺存部の形状から隅丸方形を基調とするものと考えられ，規模は現況で東西6.4ｍ，南北6.9ｍである。住居跡西壁は真北から30°程東へ傾いている。壁の立ち上がりは急で，壁高は最大12㎝である。床面は平坦で堅く締まっている。住居跡の堆積土は，４層に区分した。堆積状態は壁際に高い堆積が認められることから，基本的には自然堆積と判断している。ℓ２は黄色土で，これについては人為的に堆積したものと考えている。

住居施設は，20個の小穴と炉が検出された。Ｐ1～Ｐ9は，一辺80㎝以上の大きな掘形を持つもので，床面からの深さも45～93㎝と深い。これらの小穴は，住居跡の壁際にほぼ同じ間隔で配置されていることから，本住居跡の主柱穴と判断している。Ｐ3とＰ4，Ｐ8とＰ11は，それぞれ重複している小穴である。

炉は複式炉で住居跡中央に位置し，前庭部は住居跡北壁に取り付いている。ＳＩ80によってその大部分を壊され，遺存しているのは複式炉各施設の西端部のみである。平面形は，二等辺三角形状を呈するものと考えられ，規模は現況で長さ270㎝，幅は最大100㎝である。主軸は住居跡西壁とほぼ平行し，土器埋設部は南西端に作られている。

石組部の縁石は斜位に設置され，断面形は鍋底状を呈している。床面から石組部底面までの深さは40㎝である。石組部と前庭部が接する周壁には，大型の礫を設置している。炉の焼けは埋設土器の周辺が強い。炉掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器・配石との間に，隙間はほとんど見られない。

遺　　物（図238）

105号住居跡からは，120点の縄文土器片と２点の石器が出土している。土器片は住居跡堆積土中から散在して出土した。図238－1は複式炉の埋設土器である。図238－2・3は，沈線で区画された縄文帯で文様を描くものである。２の口縁部直下には，横楕円形の単位文を配している。同図４・５はヒレ状に発達した隆線で渦巻文を描き出すものである。同図６には細い平行沈線文が施されている。同図７は石錘，同図８は凹部を持つ磨石である。

ま　と　め

本住居跡は，遺存状態が悪いが遺存部の形状・住居施設のあり方から，一辺7.4ｍ程の隅丸方形状を呈する竪穴住居跡と考えている。主柱穴は，大きな掘形を持っている。本跡については出土遺物と複式炉の形態的な特徴から大木９式期の所産と考えている。　　（松　本）

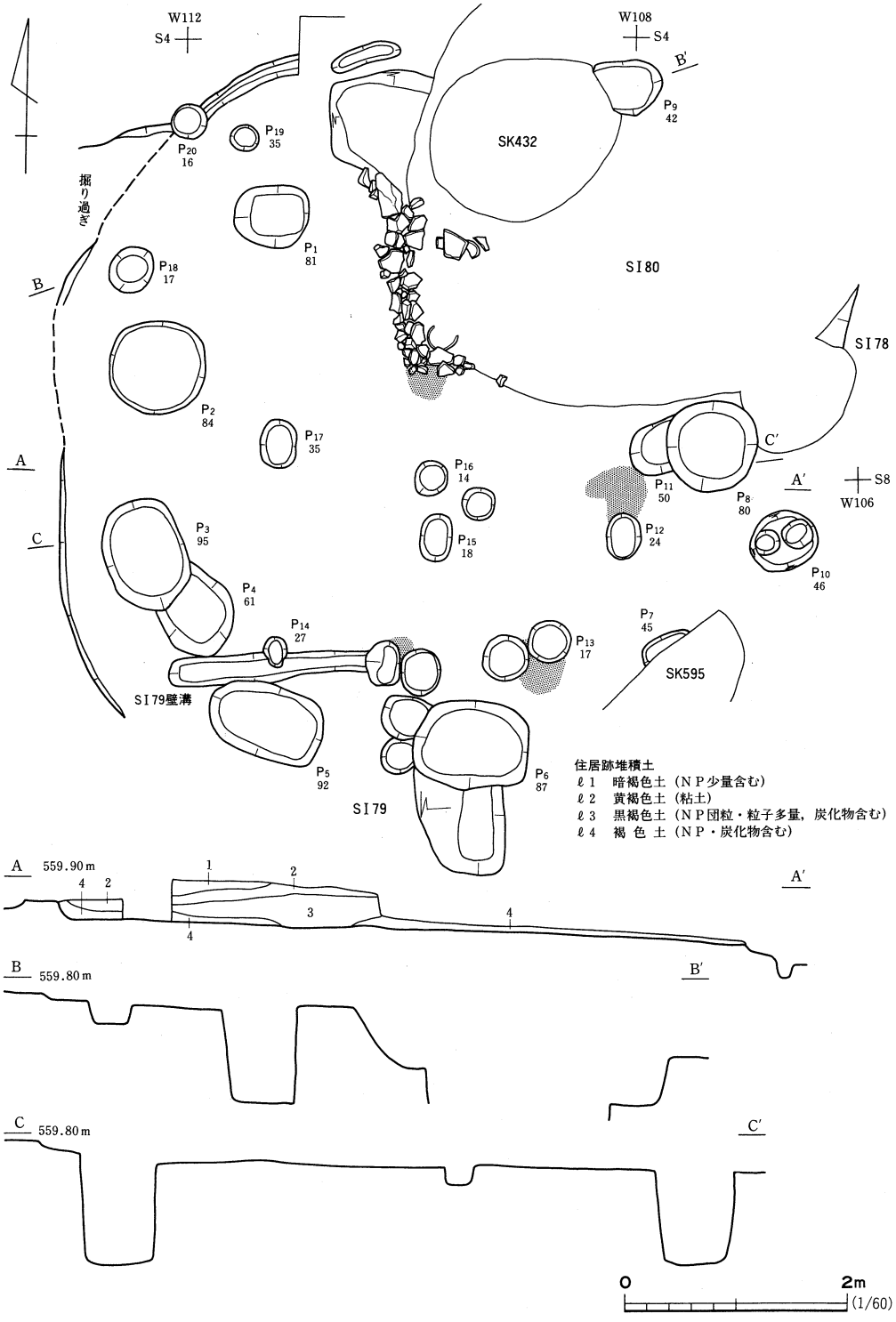


図237　105号住居跡

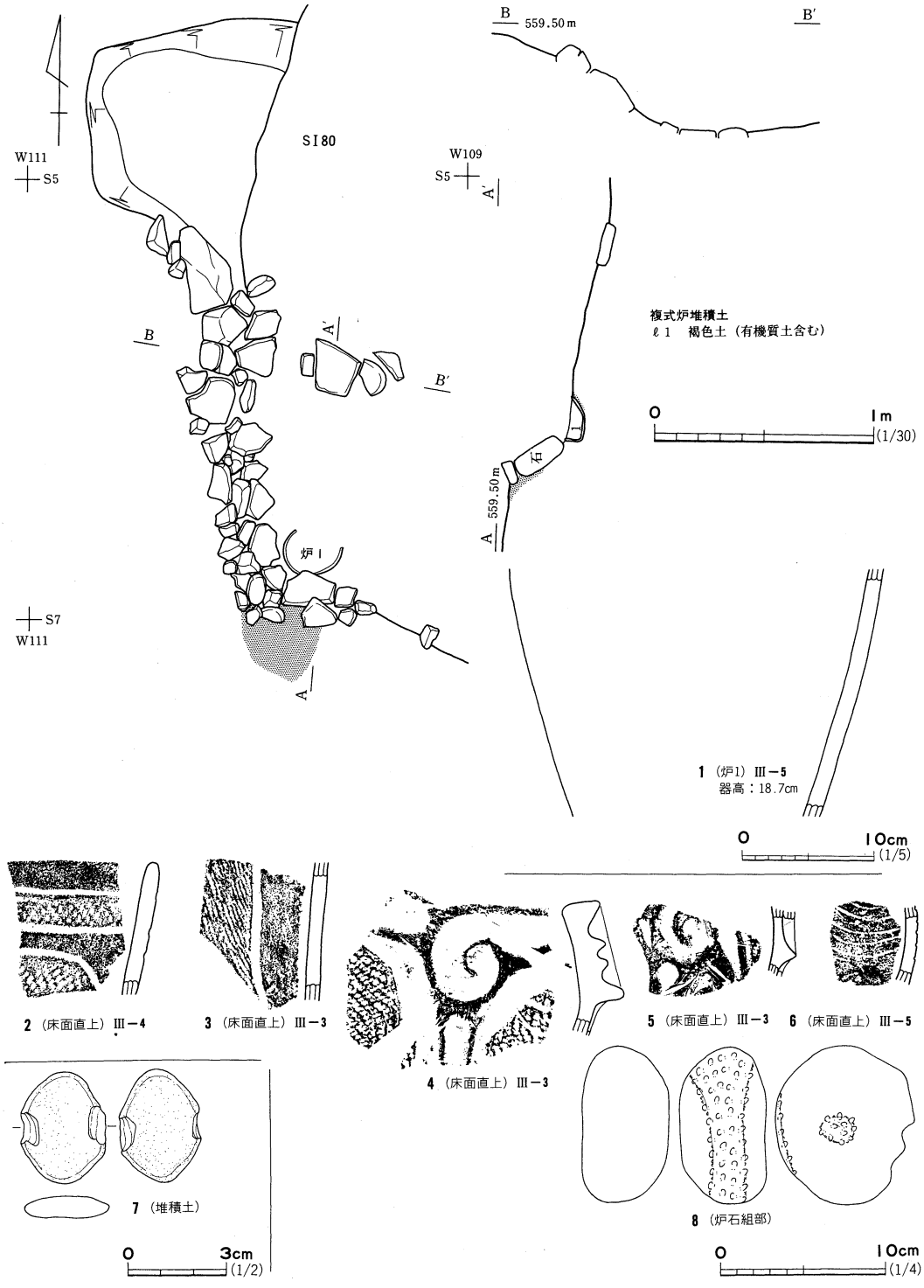


図238　105号住居跡複式炉と出土遺物

106号住居跡（ＳＩ106）

遺　　構（図239，写真102）

セ・ソ16・17Ｇに位置する竪穴住居跡である。ＬⅣ上面で検出したが，複式炉埋設土器はＬⅢｂを掘り込んで設置されている。位置的にはＳＩ42・97・102，ＳＫ63と重複しているが，各遺構との新旧については不明である。遺存状態は極めて悪く，検出できたのは住居跡の複式炉と5個の小穴だけである。

検出された5個の小穴は直径15～30㎝，検出面からの深さは22～50㎝である。この内Ｐ1・Ｐ2については，複式炉を挟んでほぼ対応する位置に作られていることから，本住居跡の主柱穴と判断した。Ｐ3についても，Ｐ1・Ｐ2を結んだ線と直交する位置にある事から，主柱穴と考えている。Ｐ4・Ｐ5は，複式炉の埋設土器に近接して作られた小穴である。炉周辺には他に小穴が認められないことから，これについても本跡に伴うものと考えておく。

複式炉は，Ｐ1とＰ2を結んだ線の中央に位置している。主軸は真北から30°程東に傾いている。埋設土器は，炉の南西端に設置されている。遺存状態は悪いが，ほぼその姿を知ることができた。規模は長さ180㎝，幅は最大80㎝で，平面形はコケシ状をなしている。土器埋設部の縁辺には小礫が設置されていたらしく，現況では埋設土器から10㎝程離れた位置に2個の礫が遺存している。石組部の縁石や底面の敷石には，大きな礫が用いられている。石組部の形態は，遺存する縁石・掘形の形状から一辺が60㎝程の方形状と考えられる。検出面から石組部底面までの深さは，現況で15㎝である。前庭部は長さ80㎝程を測り，検出面からの深さは2㎝である。

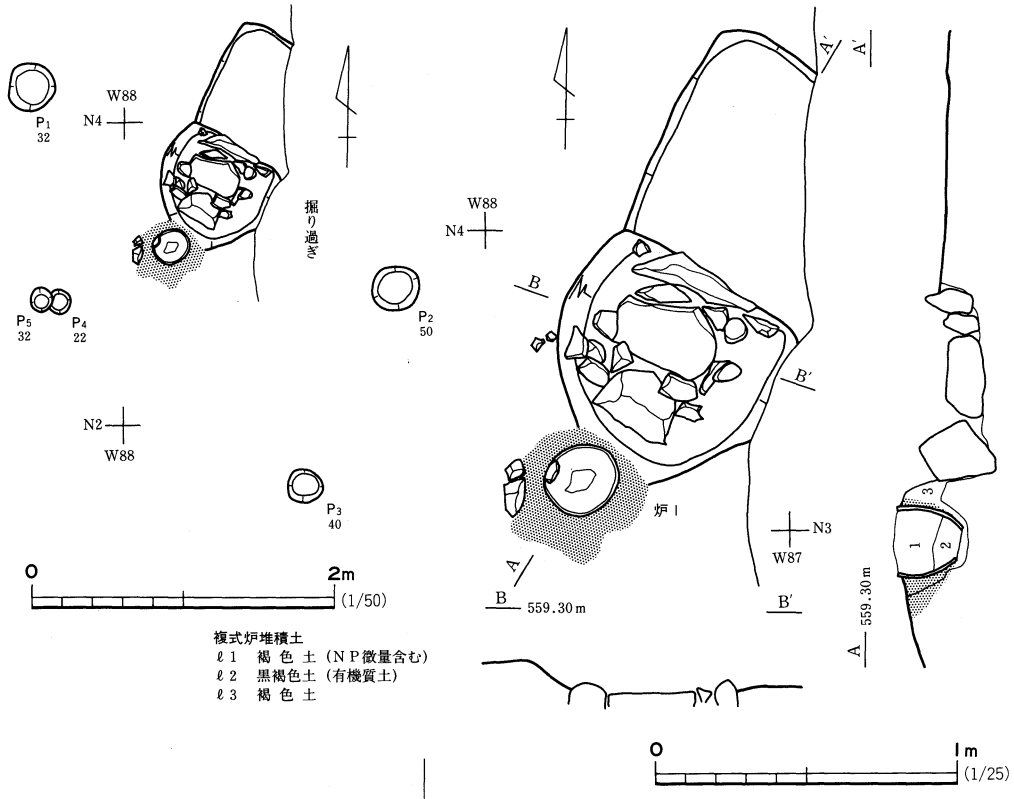
埋設土器下部には，有機質の黒褐色土が堆積していた。炉の焼けは埋設土器周辺が強い。炉掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器・配石との間に，隙間はほとんど見られない。

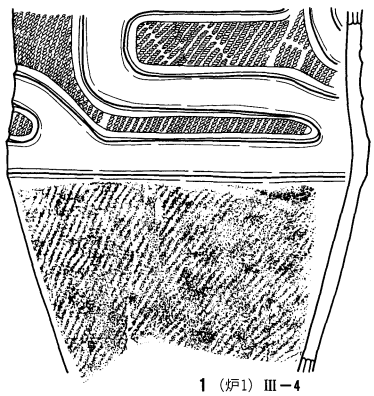
遺　　物（図239）

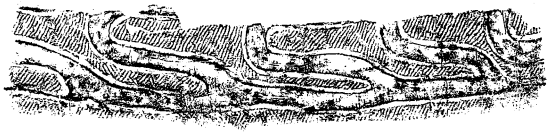
本住居跡からは，95点の縄文土器片が出土している。図239－1は複式炉の埋設土器である。稜線で区画された無文帯で，横に連続する曲線的な単位文を描いている。同図3・4もこれに近い。同図8も稜線で口縁部下に楕円形状の文様を描き出すもので，文様の接点部は高く肥厚している。同図2・5・6は，沈線や隆沈線で文様を描いている。

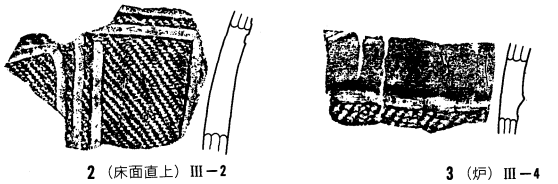
ま　と　め

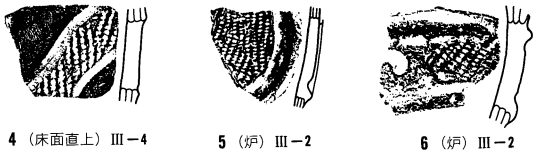
本住居跡は遺存状態が悪いが，検出された小穴・複式炉のあり方から，4ｍ程の規模の竪穴住居跡と考えている。本跡については，出土遺物と複式炉の形態的な特徴から大木10式期の所産と考えている。　　（松　本）

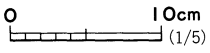












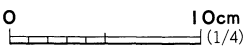


図239　106号住居跡と複式炉・出土遺物

107号住居跡（SI107）

遺　　構（図240，写真103）

調査区中央西寄りの遺構密集地，ス16Gから検出された小型の竪穴住居跡である。検出面はLⅢb上面である。土坑として調査を開始したが，床面に踏み締りが認められ，小穴も検出されたことから，竪穴住居跡と判断した。SK450・499と重複し，本遺構が新しい。調査の段階でSK450を先に掘り込んだために，南東部の範囲は不明である。

平面形は，遺存している周壁から楕円形と推測され，規模は南北が現況で1.7m，東西は2.2mである。周壁の立上がりは緩やかで，断面形は鍋底状を呈している。壁の残存高は，最大22cmを測る。床面は平坦で，踏み締まりがあり堅い。遺構内堆積土は3層に区分され，壁際からの流れ込みの様相が認められることから自然堆積と判断した。

住居内からは，小穴が2個検出された。P1は北西コーナーから検出され，直径30cm，深さ51cmと主柱穴として十分の規模を持つ。P2はSK450の壁面より検出され，直径25cm，深さ34cmである。どちらの小穴にも暗褐色土が堆積していた。上屋構造を考慮すると，SK450と重複する部分に柱穴の存在が考えられる。住居内から炉は検出されなかった。

遺　　物（図240）

107号住居跡からは，僅かに70点の縄文土器片が出土している。縄文土器は，住居跡堆積土中

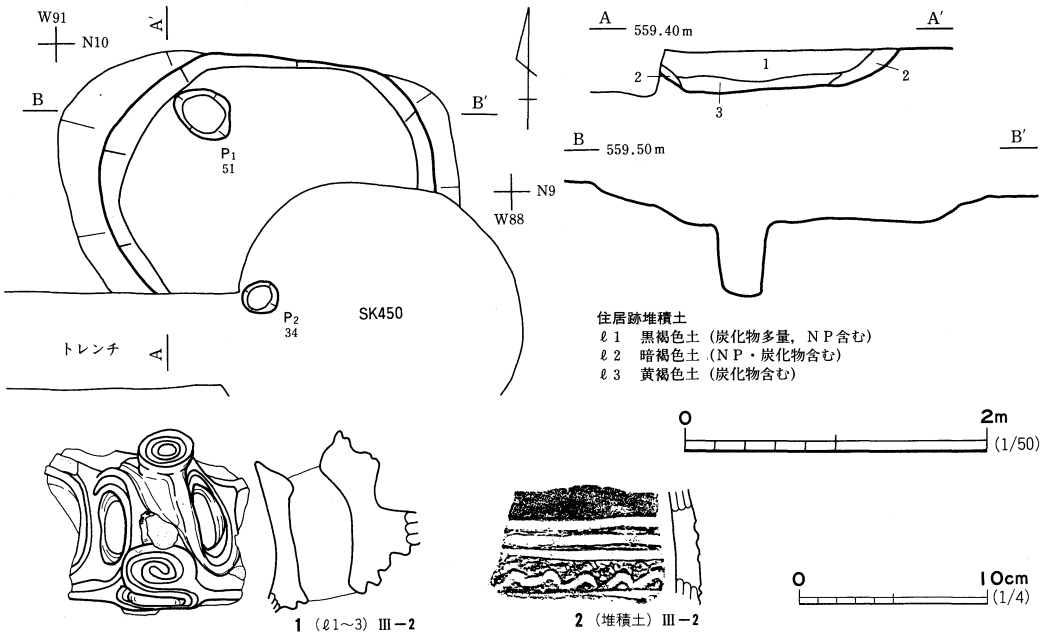


図240　107号住居跡と出土遺物

から小破片の状態で出土している。図240－1は，中空の把手である。同図2は，横位に沈線を施したもので，一部は波状文を描いている。沈線上部には無文帯を配している。

ま と め

本住居跡は本遺跡から検出された住居跡の中で，最も小さい住居跡の一つである。規模・平面形は，残存部から東西2.2m，南北1.8m程度の楕円形を呈すると推測している。柱穴は2個検出され，炉は認められない。本住居跡の所属時期は，出土遺物と重複する遺構から大木8b式期と考えている。（丹　治）

108号住居跡（SI108）

遺　　構（図241，写真104）

調査区中央部西寄りの遺構密集域，ソ14・15Gで検出された竪穴住居跡である。検出面はLⅣ上面である。SI97・98，SK466と重複し，床面からはSK572を検出した。SI98，SK466・572より本住居跡が新しい。SI97との新旧関係は，直接の切り合いが観察できなかったため不明である。SI97・98の調査時に東壁・南壁を壊したため，遺存状態は悪い。

平面形は，遺存する周壁の状態から，南北が長い長方形と推測している。規模は現況で南北4.3m，東西3.0mである。周壁の立ち上がりは急である。壁の残存高は北壁で8cm，西壁で6～13cmを測る。床面は平坦である。遺構内堆積土は2層に区分され，いずれもパミス粒を微量含む褐色土である。レンズ状の堆積状況が見られることから，自然堆積と判断している。

住居内からは，小穴4個，炉1基と壁溝を検出した。4個の小穴のうち，住居中央北寄りに位置するP2と，炉を挟んで相対するP1・P3が，本住居跡の主柱穴を構成するものと考えている。いずれも直径が35cm前後，深さはP2が21cmとやや浅いがP1・P3はそれぞれ30cm，44cmである。P4はその位置から壁柱穴と考えられる。小穴内堆積土は，P1が黄色土ブロックを含む褐色土，P2～P4は暗褐色土である。壁溝は北西コーナー付近で検出された。長さ120cm，幅は最大30cm，深さは最大13cmで，壁溝内堆積土は暗褐色土である。

炉は住居跡中央南寄りから，複式炉が検出された。遺存状態は極めて悪く，土器埋設部がかろうじてその形をとどめているだけである。石組部はほとんどの石が取り去られており，炉の掘形と，石組部と前庭部を区画していたと思われる石が1個遺存しているだけである。平面形については明言できないが，遺存する土器埋設部と，石組部・前庭部の掘形の状態から，土器埋設部と石組部の接点に括れを有するコケシ状の形態の複式炉と推定される。規模は長さ180cm，最大幅98cmで，炉の中軸線は住居跡と同じくほぼ真北を示す。

土器埋設部の縁石は，埋設土器を囲むように立てて設置されている。埋設土器と縁石の隙間には偏平な石が面を揃えて置かれている。石組部・前庭部の規模は，掘形中央に残った石から石組

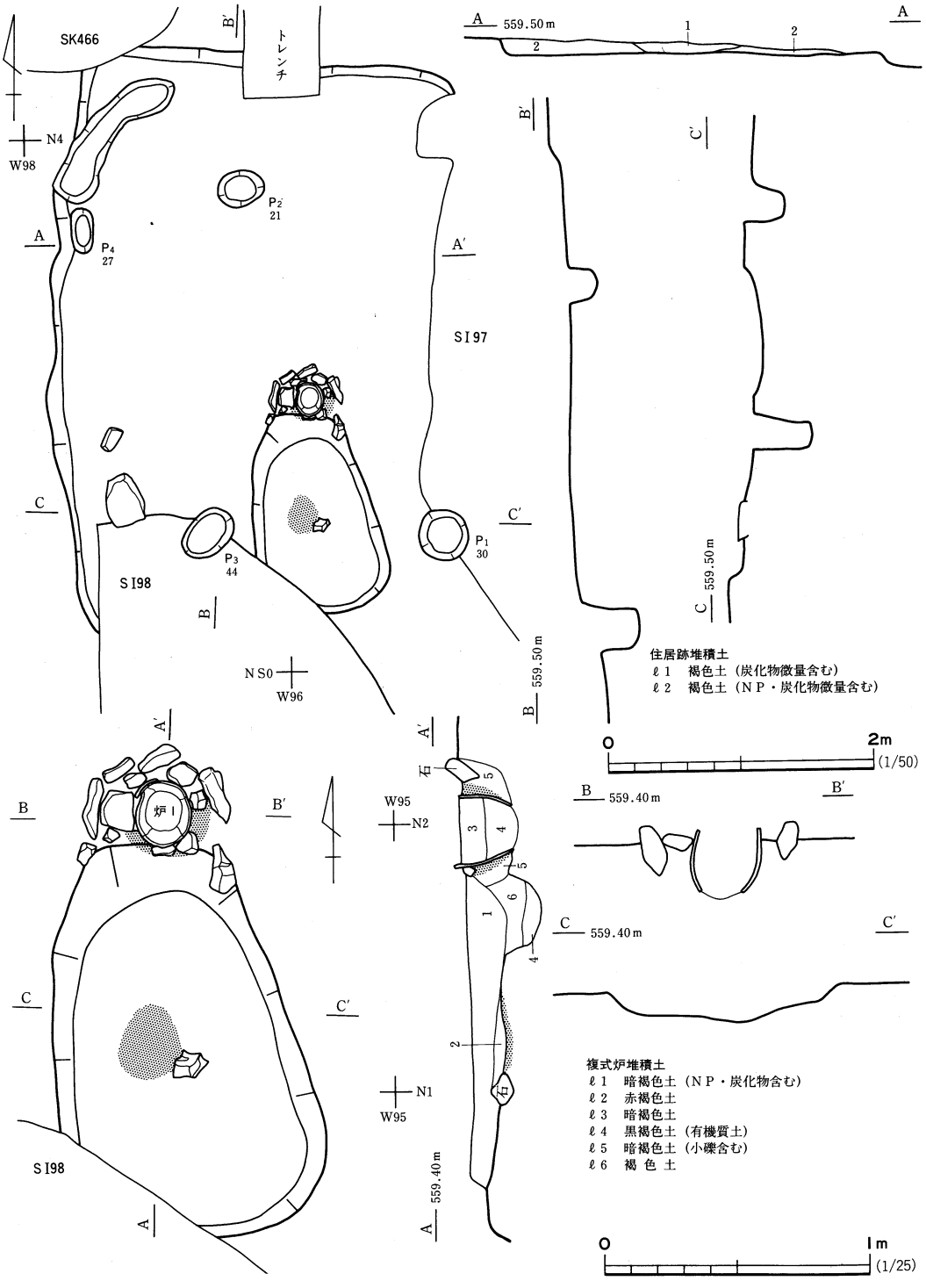


図241　108号住居跡と複式炉

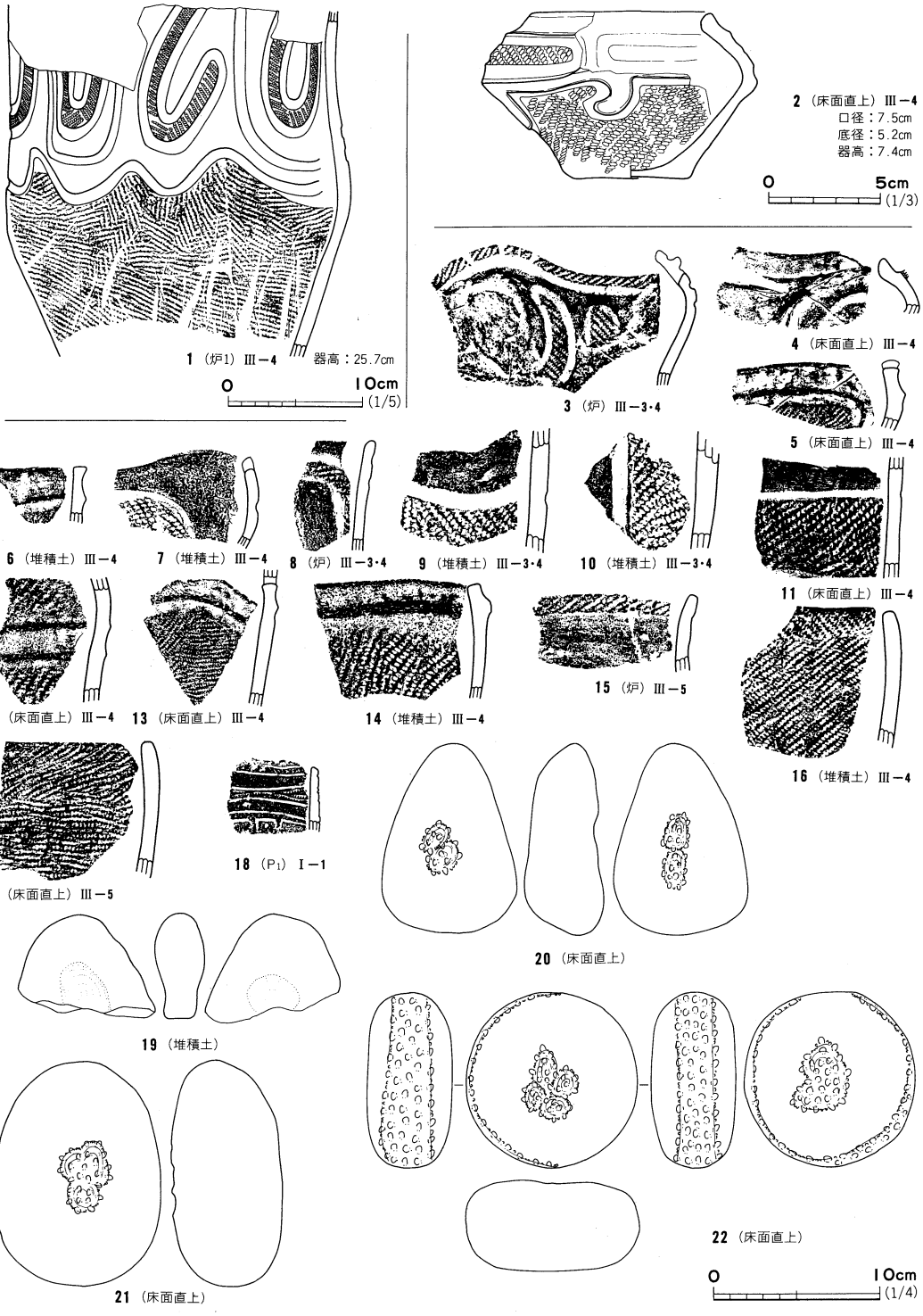


図242　108号住居跡出土遺物

部が南北90㎝，前庭部は南北65㎝程と推定している。土器埋設部は，焼土化が顕著である。石組部南端には29×23㎝の楕円形の焼土があり，3㎝下にまで焼土化が及んでいる。土器埋設部の掘形は，土器と土器を囲む石が入る程度の大きさに掘り，埋設土器は掘形底面に接している。土器埋設部の掘形と接して，直径30㎝，床面からの深さ33㎝を測る，鍋底状の窪みが検出された。この窪み内には，有機質の黒褐色土が堆積している。ここにも土器が埋設されていた可能性が高い。この窪みは，土器埋設部の掘形によって切られている。

遺　　物（図242）

108号住居跡からは，埋設土器1点，復元個体1点，縄文土器片220点，石器6点が出土している。縄文土器の多くは，堆積土中から散在して出土している。図242－1は，複式炉の埋設土器で，口縁部と底部を欠く深鉢である。胴部上半には，凹線による逆S字状の単位文が8単位施されている。単位文内の縄文は，充填施文されている。胴部文様帯は，波状の凹線によって上下に区画されている。同図2は，口縁部が「く」の字状に屈曲する小型の鉢である。文様は，稜線によって縁取られた無文帯で描かれている。

同図3・7～11は凹線で文様を描くもので，3は波頂部直下に逆C状の単位文を描いている。これらの土器の縄文は，すべて充填施文されている。同図5・6・12・13は，稜線で文様を描くものである。同図14は口唇部直下に隆帯を施し，同図15は口唇部直下に縄文を施している。同図16・17は粗製の深鉢である。同図18は，沈線文と貝殻腹縁文・刺突文が施されている。図19～22は凹部を持つ磨石で，22の側縁部には使用痕跡が見られる。

ま　と　め

本住居跡は，重複する遺構によって壊され遺存状態は悪い。現況から推測すれば，平面形は長方形を基調とし，南北4.6m，東西3.3m程の規模を有するものと推測している。主柱穴は二等辺三角形状に配置された3個で構成されている。炉は複式炉であるが，遺存状態が悪く詳細は不明である。本住居跡の所属時期は，出土遺物から大木10式期と考えている。　　（丹　治）

109号住居跡（SI109）

遺　　構（図243，写真105）

ス・セ14Gに位置する竪穴住居跡で，LⅣ上面で検出した。遺存状態は極めて悪く，住居跡の複式炉と，その周辺に位置する3個の小穴が検出できただけである。

複式炉の遺存状態は悪く，埋設土器と石組部の一部が遺存するだけである。炉の主軸は，真北から40°程西に傾き，埋設土器は南東端に設置されている。規模は現況で長さ80㎝，幅50㎝である。土器埋設部からは，埋設土器のみが検出され縁石は遺存していなかった。石組部は，遺存部の形状から幅50㎝程の規模と推定され，底面には拳大の礫が敷かれている。検出面から石組

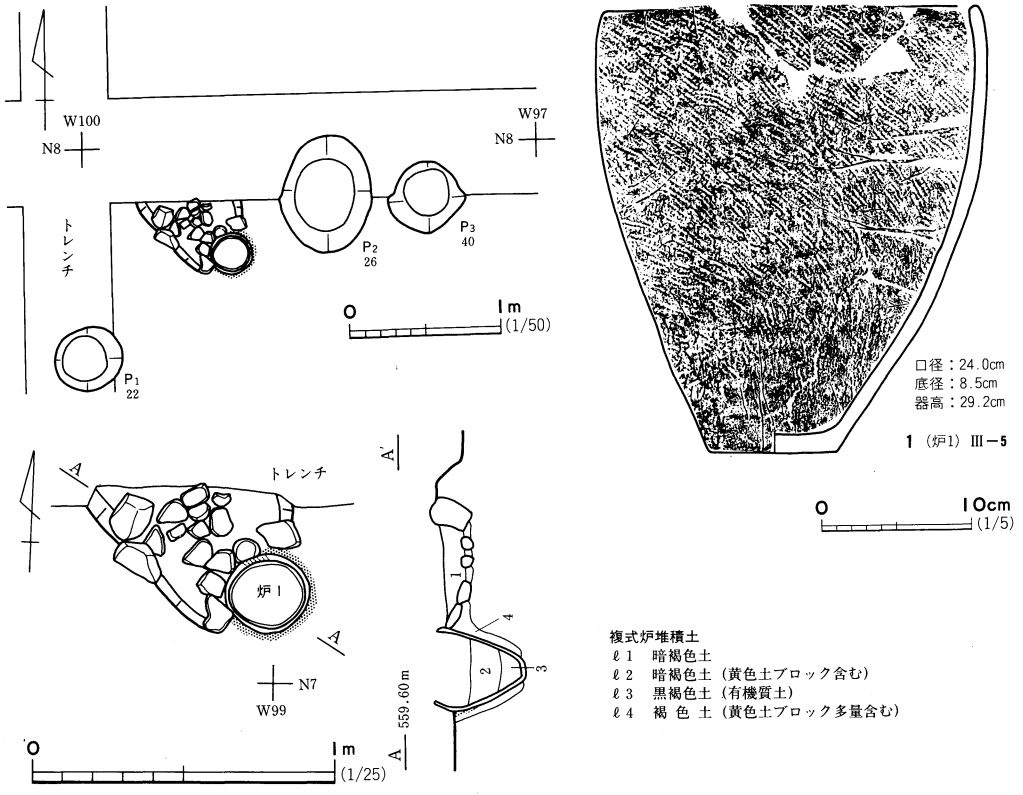


図243　109号住居跡と複式炉・出土遺物

部底面までの深さは，現況で10㎝である。前庭部は検出することができなかった。

複式炉の堆積土は，暗褐色土を主体としているが，埋設土器下部には有機質の黒褐色土が堆積していた。炉の焼けは弱く，埋設土器の周辺が僅かに焼土化しているだけであった。炉掘形は意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため掘形と埋設土器・配石との間に，隙間はほとんど見られない。

複式炉周辺からは，3個の小穴が検出された。直径40～60㎝，検出面からの深さは22～40㎝である。この内P1とP3は，複式炉を挟んで対応する位置に作られていることから，本住居跡に伴う可能性が高いものと考えている。

遺　　物（図243）

本住居跡からは，図243－1に示した複式炉埋設土器が出土しただけである。1は器面全面に縄文が施された粗製土器である。

ま と め

本住居跡は遺存状態が悪く，住居跡の規模・平面形については不明である。複式炉は石組部の規模から，長さ100㎝程の小さなものと考えられる。本住居跡については，複式炉の形態から大

木10式期の所産と考えている。　（松　本）

110号住居跡（SI110）

遺　　構（図244・245，写真106・107）

サ～ス18・19GのLⅢb上面において，暗褐色土の落ち込みとして検出した。遺存状態は，比較的良好である。SK479・593・594・638と重複するが，本住居跡が新しい。平面形は不整の長方形を呈し，規模は南北6.5m，東西5.0mを測る。壁は，北・西壁が高く40～50cm，南・東壁は低く10～20cmである。いずれの壁も垂直に近い角度で立ち上がっている。床面は，地山であるLVまで掘り込まれほぼ平坦であるが，土坑と重複している部分の床面は，窪地状に陥没している。堆積土は暗褐色土を主体とし，色調と混入物から3層に区分した。堆積状況はレンズ状の堆積が見られることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は，炉・小穴・壁溝を検出した。小穴は，複式炉を取り囲むように7個検出された。いずれも直径40～50cm，検出面からの深さ50cm～70cmとほぼ同じ規模である。これら7個の小穴を本住居跡の主柱穴と考えている。壁溝はほぼ全周していたものと考えられるが，北壁部分は掘り過ぎのため不明である。幅20～30cm，深さは10～30cmと部分的に深い。

炉は複式炉で，前庭部の末端は住居跡西壁中央とほぼ接している。平面形は二等辺三角形状をなし，規模は長さ270cm，最大幅は160cmを測る。主軸は，真北から70°程西に傾いている。土器埋設部は，炉の東端に位置している。土器埋設部はほぼ円形で，2個の深鉢を主軸線上に並べて設置している。埋設土器の周囲には，礫の平坦面を上にして隙間なく配置している。石組部は南北160cm，東西80cmの台形状を呈し，断面形はV字状をなしている。床面から石組部底面までの深さは，最大45cmである。石組部には比較的大型で偏平な石が敷かれている。前庭部は南北150cm，東西90cmの長方形状で，床面からの深さは，最大10cmを測る。前庭部の末端には，「コ」の字状の張り出しが見られ，この両脇からは直径15cm，深さ50cm程の小穴（P8・P9）が検出された。

堆積土は，埋設土器と石組部の下部に有機質の黒褐色土が堆積していた。炉の焼けは，埋設土器の周辺が特に強い。また，この複式炉とは別に，土器埋設部から1m程南側の床面から30×50cmの地床炉が検出された。

遺　　物（図245～248）

出土遺物は，縄文土器片1,410点・石器7点である。図245－1・2の炉埋設土器以外は，いずれも堆積土中より散在して出土している。図245－1は，口縁部が球状に膨らむ深鉢である。口縁部には沈線による渦巻状の単位文を，胴部にはC字状の単位文を施している。図246－7～12

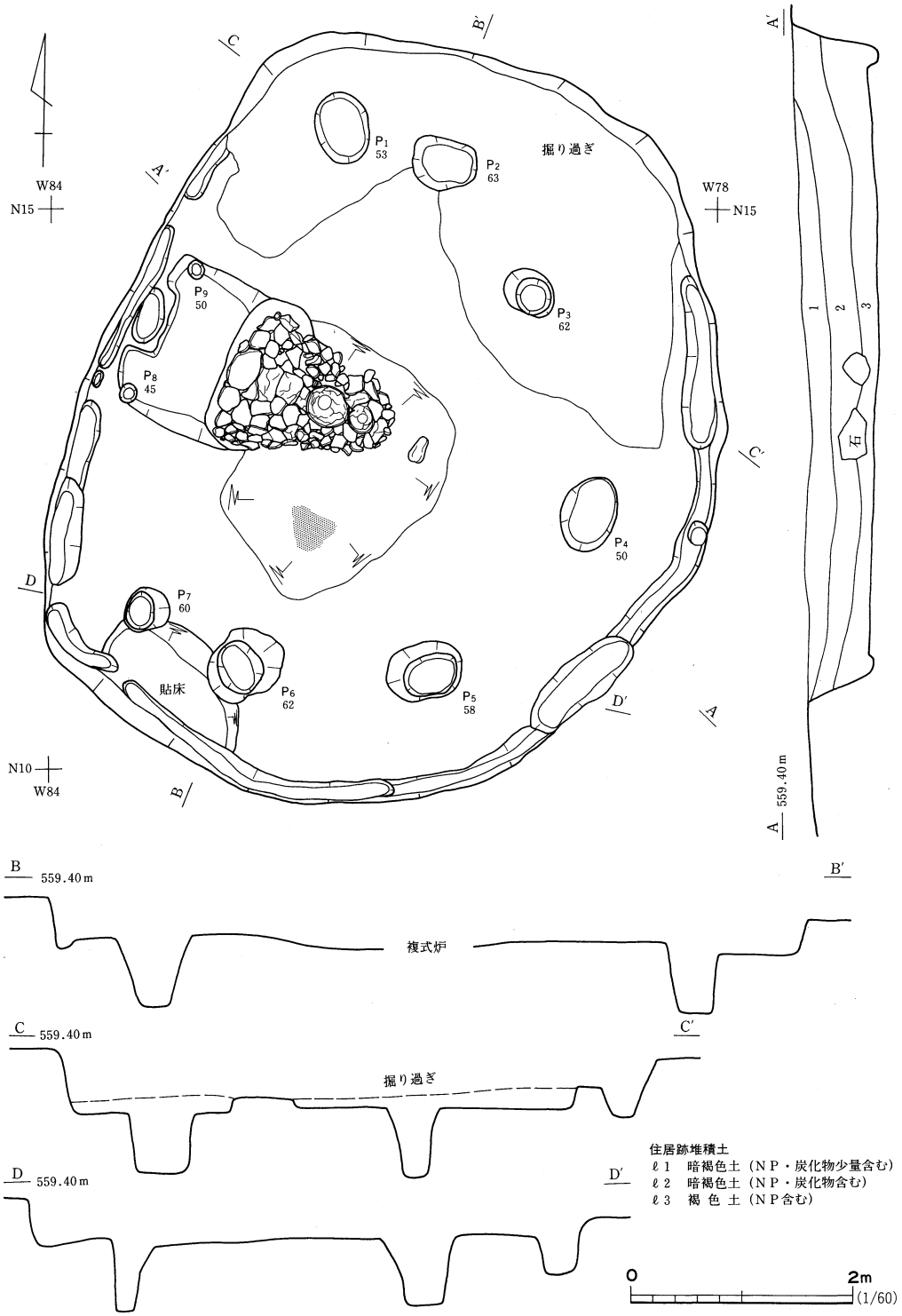


図244　110号住居跡

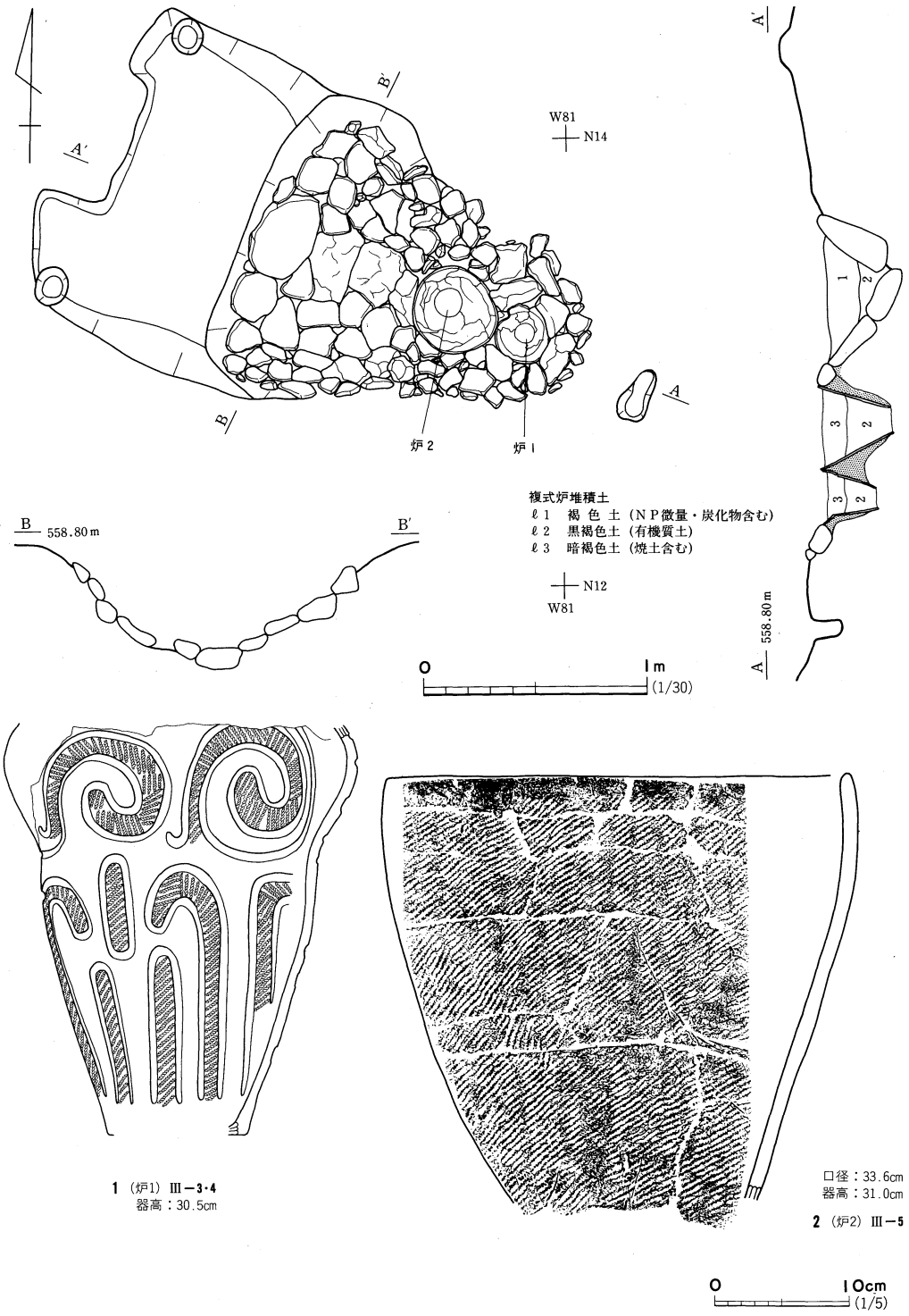


図245　110号住居跡複式炉と出土遺物（１）

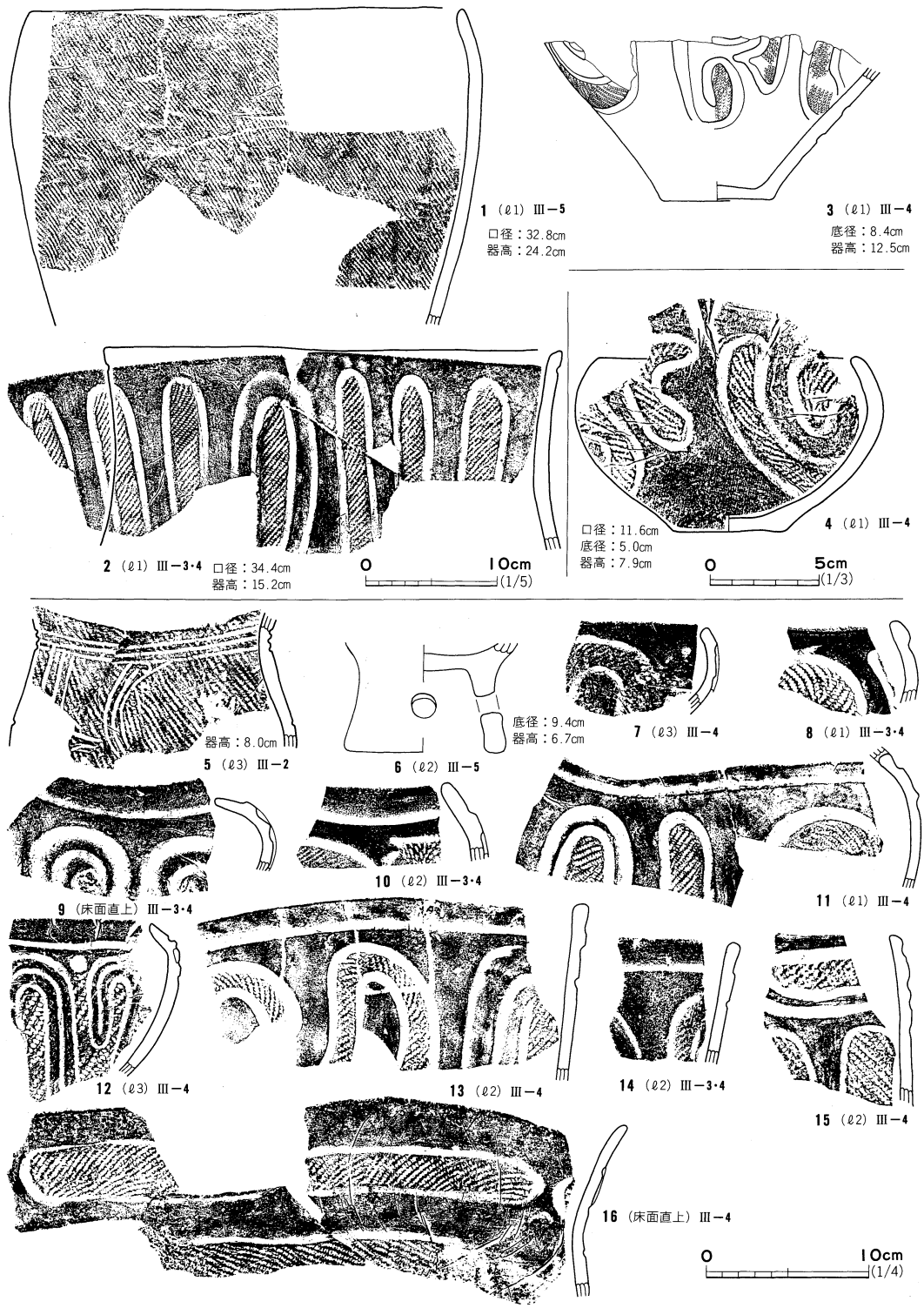


図246　110号住居跡出土遺物（2）

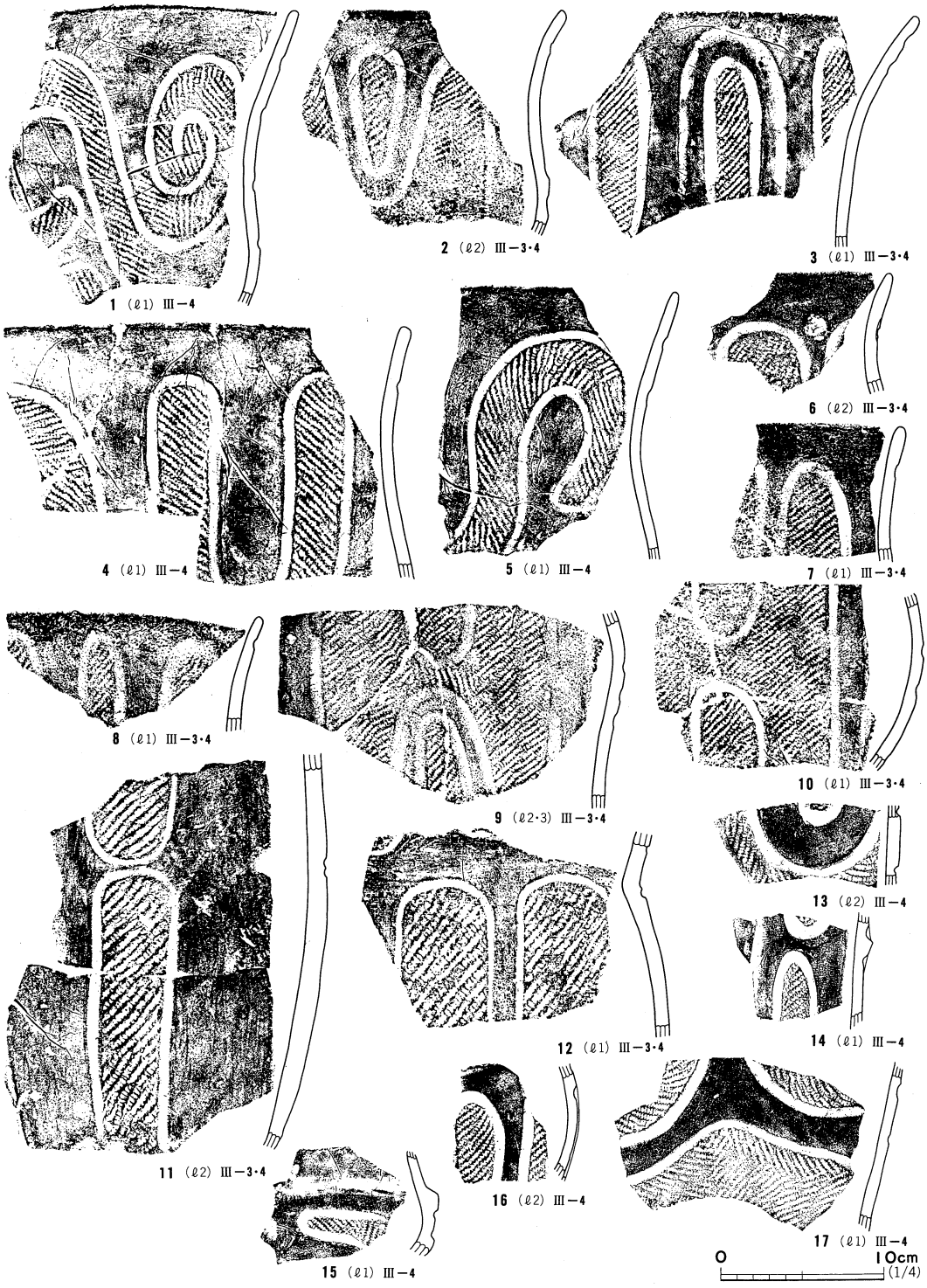


図247　110号住居跡出土遺物（３）

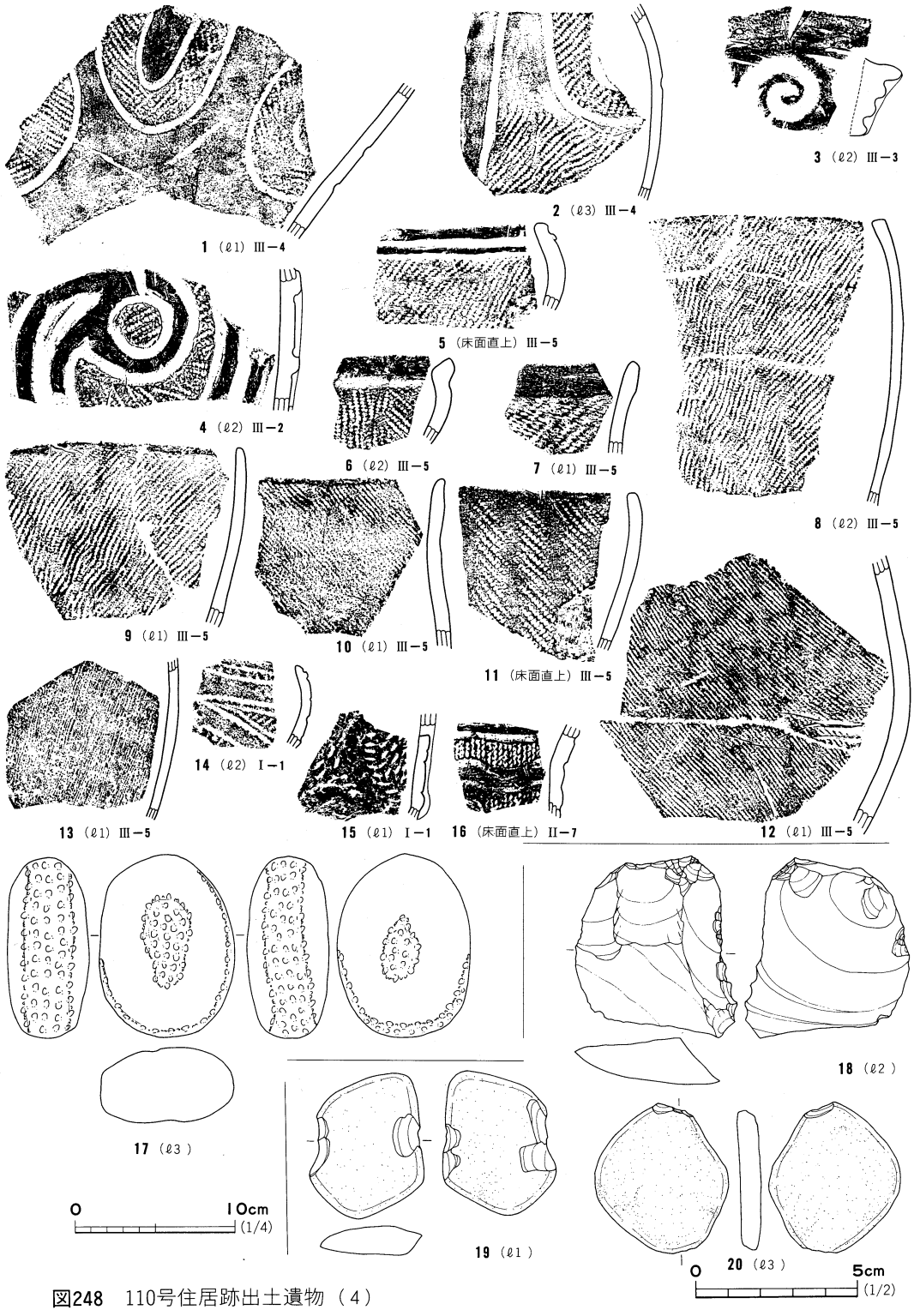


図248　110号住居跡出土遺物（4）

も口縁部が膨らむ深鉢である。同図13～16，図247，図248－1・2は，沈線によって区画されたC字・S字・U字状などの単位文様を施している。これらの土器は，緩やかに口縁部が外反する深鉢が多いようである。図248－3・4は，隆線によって渦巻文を施している。図245－2，図246－1，図248－8～12は，縄文を施した粗製の深鉢で，口縁部は僅かに内湾している。図246－6は台付土器の脚部である。同図4は球状の胴部を呈する浅鉢で，器面全体にわたって沈線で区画されたC字状の単位文様を施している。

図248－17は両面と側縁に使用痕をもつ磨石，同図18は縁辺部に簡単な剥離を加えただけの掻器である。同図19・20は，短軸ないし長軸の両端部に打ち欠きをもつ石錘である。

ま と め

本住居跡は南北6.5m，東西5.0mの不整の長方形を呈し，複式炉とこれを取り巻くように配置された，7個の主柱穴が検出された。複式炉前庭部末端からも2個の小穴が検出され，これについては，複式炉周辺の上屋を支える機能を有していたものと考えている。本住居跡の所属時期は，出土土器から大木10式期と考えている。（山　岸）

111号住居跡（SI111）

遺　　構（図249）

タ・チ2・3G，LⅣ上面で検出された住居跡である。他の遺構との重複が多いため遺存状態は悪く，住居跡南西コーナー部が僅かに遺存しているだけである。SI87・95・96と重複し，SI87・95より古く，SI96より新しい。

検出面から床面までの深さは30cm程で，壁の立ち上がりは比較的緩やかである。床面は，平坦であるが，一部に地山に含まれている巨礫が頭を出している。重複が多く平面形は不明と言わざるをえないが，住居跡南西コーナー部の形状から，方形を基調とするものと考えられる。住居跡南壁はほぼ東西方向を示している。遺存値は現況で東西が4.0m，南北は2.8mである。住居内には暗茶褐色土・暗褐色土が堆積し，自然堆積の様相を呈している。

住居施設は，小穴と炉が検出された。小穴は1個検出された。直径62cmを測り，床面からの深さは52cmである。小穴内には黒褐色土が堆積していた。P1はその規模から主柱穴と判断され，位置・堆積土からみてSI95のP5と対応すると考えられるが，小穴の全体的な配置状況は明らかにすることができなかった。炉は楕円形状の石囲炉であるが，SI87によって北東部は壊されている。規模は現況で80×140cmを測り，長軸はほぼ東西を示している。炉の縁石には，拳大の石が使われ北側に3個，南側に7個遺存している。炉の焼けは強く，焼土上面から7cm下まで熱変化が及んでいた。これらの縁石は，深さ15cm程の溝状の掘形内に設置されていた。

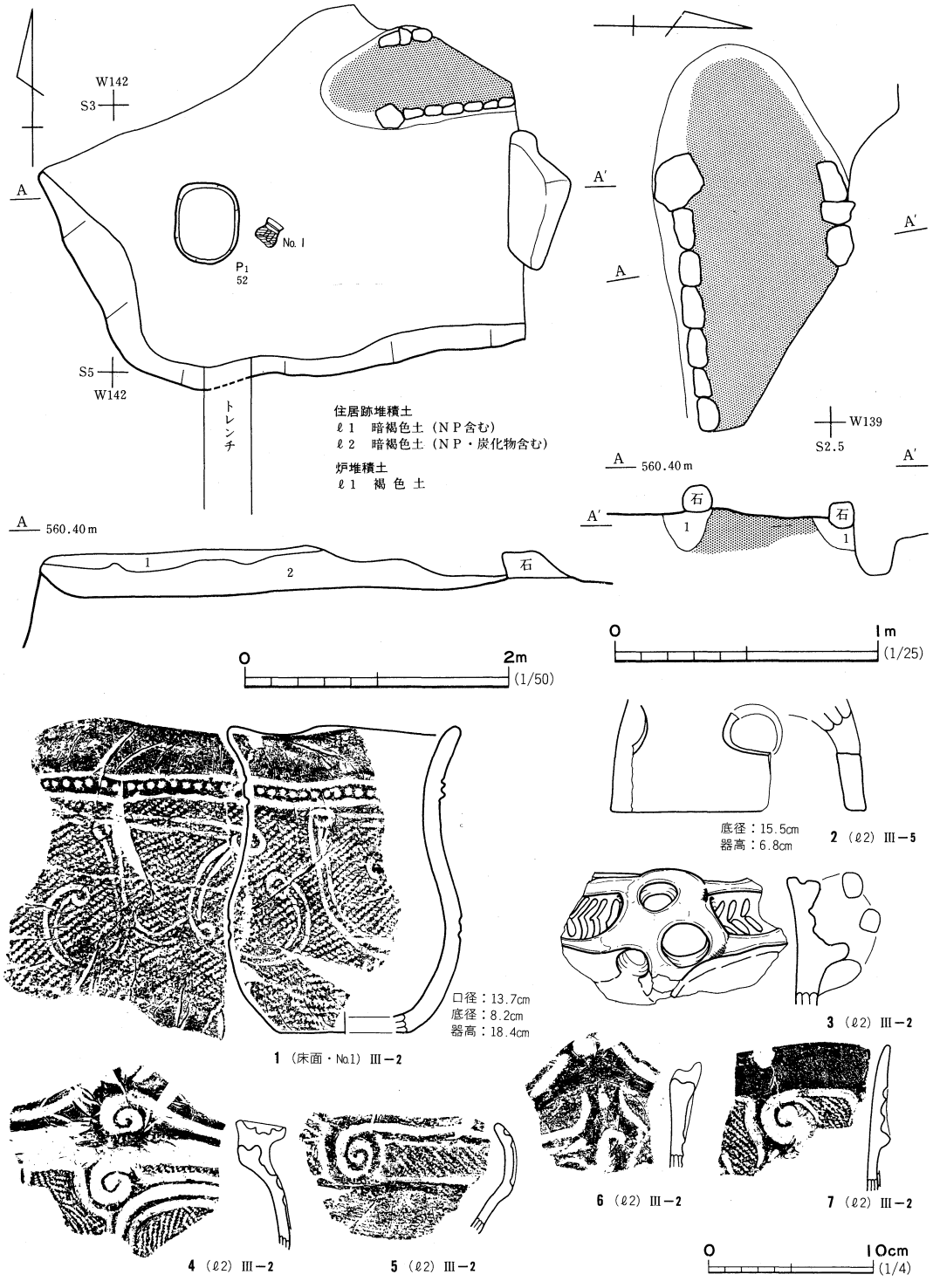


図249　111号住居跡と炉・出土遺物（1）

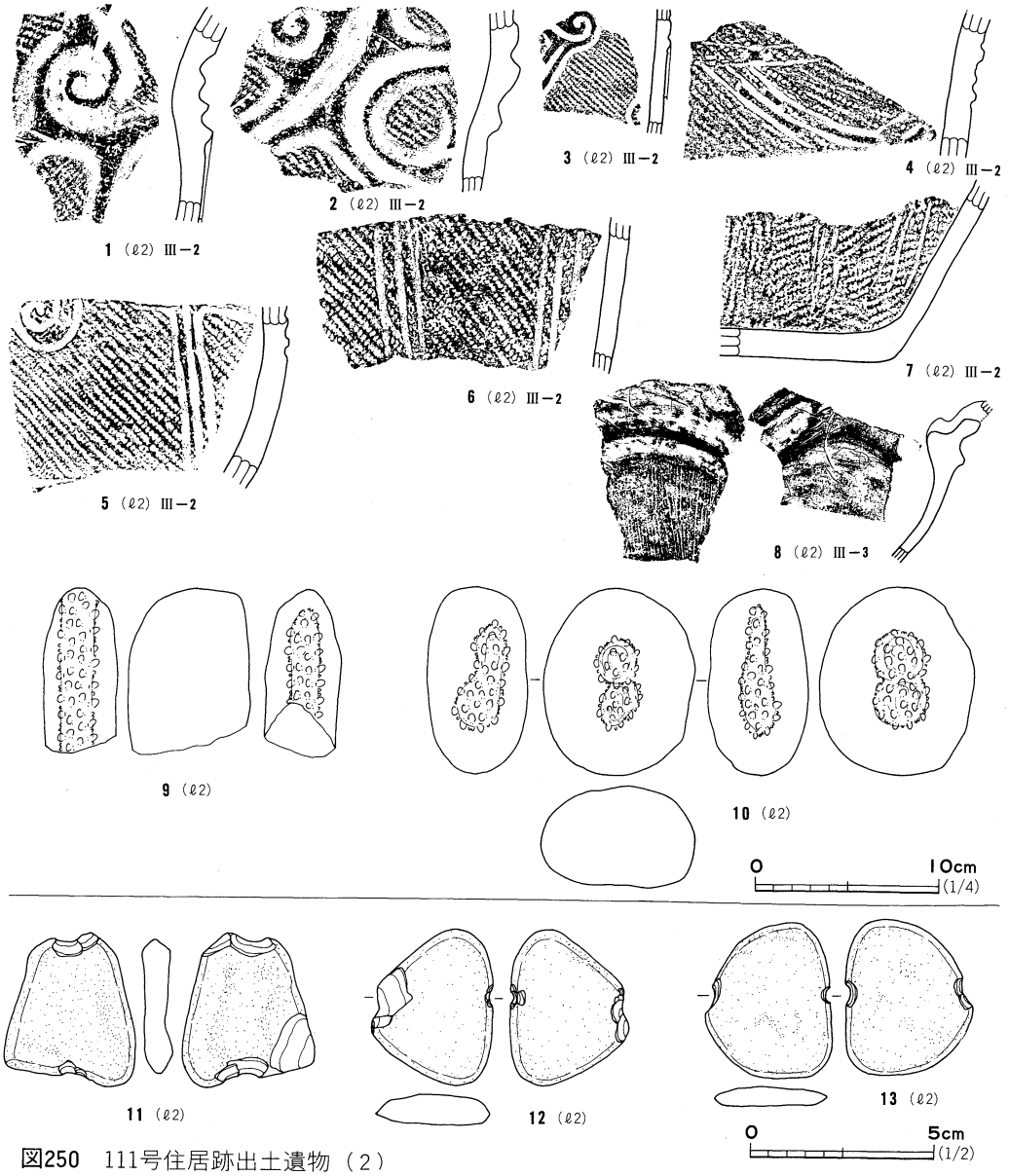


図250　111号住居跡出土遺物（2）

遺　　物（図249・250）

出土した遺物は，縄文土器片190点，石器5点である。図249－1は，図218－1に示したＳＩ96出土土器と同じ個体である。同図2は，6つの円形の透かしを有する器台である。同図3は中空状の小さな把手が付けられたもので，隆帯で区画された中には，矢羽根状の短沈線文が施文されている。同図4・5・7には，隆沈線による渦巻文が見られる。図250－1～4は，隆沈線によって胴部に文様が描かれるもので，1～3には一部に渦巻文が認められる。同図5～7には3条の

平行沈線が施文され，5には渦巻文も見られる。8は波状口縁を呈する鉢であろうか。条線文が施文されている。同図9・10は磨石で，すべての側縁部に敲打痕状の使用痕跡が認められる。同図11～13は偏平な小礫の一部に抉りを作り出した石錘である。

ま と め

本住居跡は，遺存状態が悪く平面形を明らかにすることはできなかった。柱穴は1個確認され，これはＳＩ95のＰ5と対応すると考えられるが，主柱構造の全体は明らかにすることができなかった。炉は楕円形状を呈する石囲炉である。所属時期は遺物から判断して，大木8b式期に比定されよう。（松　崎）

112号住居跡（ＳＩ112）

遺　　構（図251，写真108）

調査区北西部，シ14・15Ｇに位置する竪穴住居跡である。住居跡北半部が調査区外に及んでいるため，住居跡南半部を調査しただけである。ＳＫ498・576・786と重複し，本住居跡が新しい。検出面はＬⅤ上面であるが，土層の断面観察からＬⅢｂ上面から掘り込まれているのが確認された。正確な平面形・規模は不明であるが，調査区内における壁の形状から，平面形は円形ないしは楕円形をなすものと推測される。調査区内での最大径は4.7ｍである。周壁は急峻に立ち上がり，西壁及び南壁での残存高は11㎝を測る。床面は固く締まっているが，幾分凹凸が見られる。堆積土は色調から3層に区分され，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断される。住居内からは4個の小穴を検出した。各小穴には褐色土が堆積していた。このうちＰ2は直径28㎝・深さ52㎝の規模を持ち，本住居跡の主柱穴と考えられる。

遺　　物（図251）

本住居跡からは，土器片90点と石器8点が出土した。土器片の大部分はℓ2から散在した状態で出土している。図251－1～6は，稜線や沈線によって曲線的な単位文様を描くものであろう。単位文様内の縄文は，すべて充填施文されている。同図7・8は隆線で文様を描くもので，7は三角形の彫刻文が施されている。同図9は，横位・縦位に沈線文を施したものである。同図11・12は不定形石器である。11は剝片の側縁部に，12は下縁部に調整剝離を加え，刃部を作り出している。同図10は表裏面に窪みを持つ磨石である。

ま と め

本住居跡は，その大半が調査区外に及んでいるため，規模・住居施設について不明な点が多い。遺存部の形状から，円形を基調とする竪穴住居跡と考えられる。所属時期は，出土土器から大木10式期と判断している。（福　山）

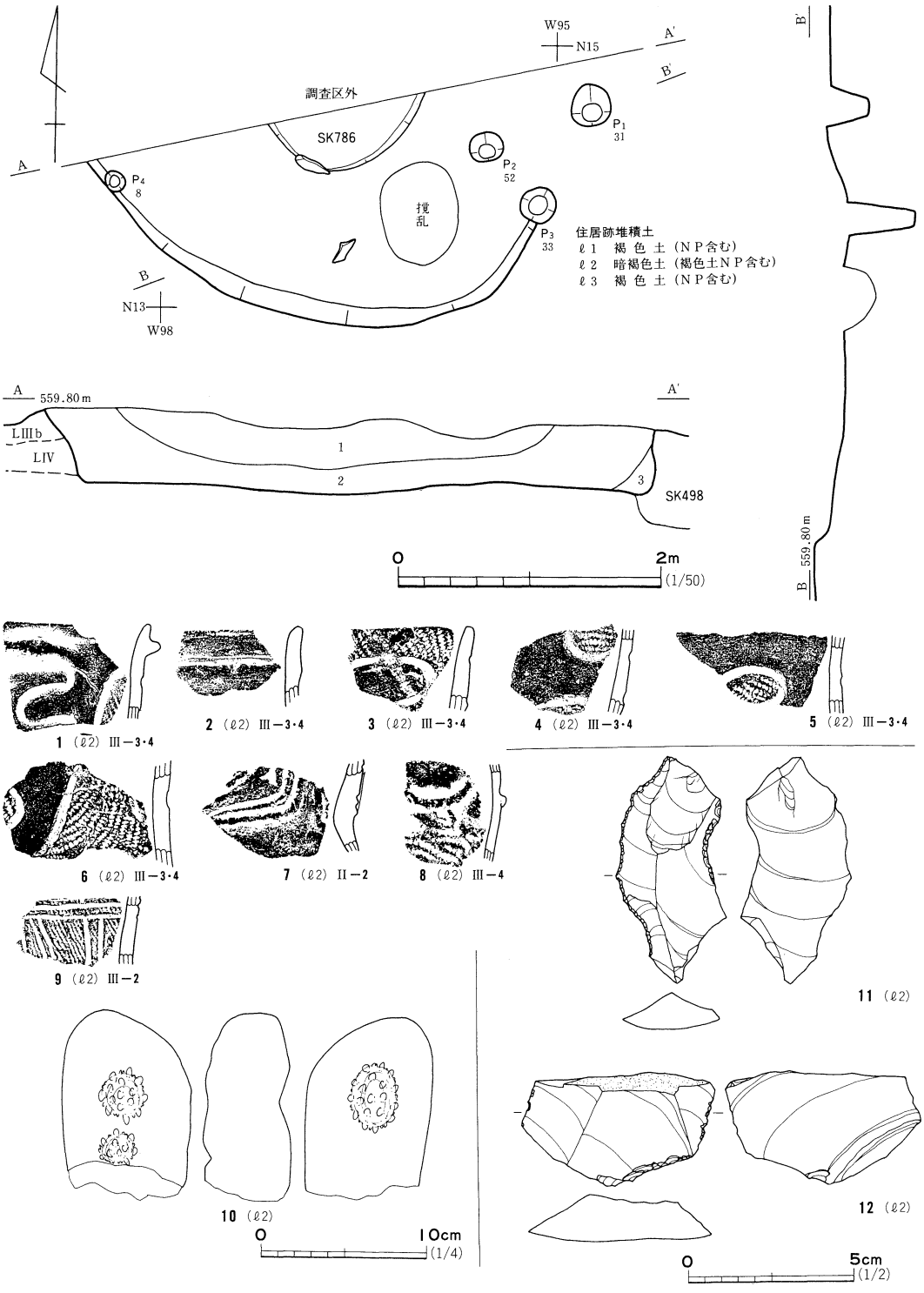


図251　112号住居跡と出土遺物

113号住居跡（ＳＩ113）

遺　　構（図252，写真109）

タ・チ10・11ＧのＬⅣ上面で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ105，ＳＫ393・485・504・533・559・562・587，ＳＧ98と重複し，ＳＫ504・533・559・562・587より新しいが，その他の遺構よりは古い。遺存状態は悪く，検出できたのは住居跡の西壁と，南・北壁の一部だけである。遺存部の平面形は長方形を基調とし，規模は南北5.2ｍ，北壁と南壁は現況でそれぞれ1.1ｍ，2.6ｍ遺存していた。検出面から床面までの深さは最大10㎝で，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，古い時期の土坑堆積土の上に作られた床面は，周辺に比べ僅かではあるが陥没していた。

主柱穴は，台形状に配置されたＰ1～Ｐ4を考えている。これらの柱穴は直径30～40㎝，床面からの深さはＰ1が28㎝，他の3個は31～43㎝である。Ｐ5・Ｐ6についてはその位置から，本住居跡に伴わない可能性がある。炉は床面が焼けただけの地床炉で，住居跡のほぼ中央から南側に2基並んで検出された。規模は中央の炉で30×46㎝，南側の炉は直径60㎝である。

遺　　物（図252・253）

住居跡からは，散在した状態で縄文土器破片が120点，石器が1点出土した。図252－1は，小型の鉢で，隆線によって文様を描いている。同図2は中空の突起が付く，樽状の深鉢であろう。胴部には，隆沈線で描かれた枠状の区画文が表されている。この隆沈線の一部は，渦巻文を描く。図253－1～3は沈線で区画された，曲線的な単位文が施されるもので，縄文は，充填施文されている。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪く，規模・施設については不明な点も多い。遺存部の形状・主柱穴の配置状況から，本住居跡は南北5ｍ，東西4ｍ程の大きさの竪穴住居跡と推定している。本住居跡については出土土器から，大木8b式期に比定されるものと考えている。　（松　本）

114号住居跡（ＳＩ114）

遺　　構（図254，写真110・111）

調査区北西部の，ソ・タ11・12ＧのＬⅣ上面で検出された。本跡と重複する遺構とその新旧関係はＳＩ80，ＳＫ478・479・486より本跡が古く，ＳＫ467・506・623・627・628より本跡が新しい。遺構の重複が著しいため遺存状態は悪く，住居跡の北壁と北東コーナー部，西壁と南東コーナーの一部を確認できただけである。

平面形は，その遺存部の状態から方形を基調とするものと考えられ，北壁はほぼ東西方向を示

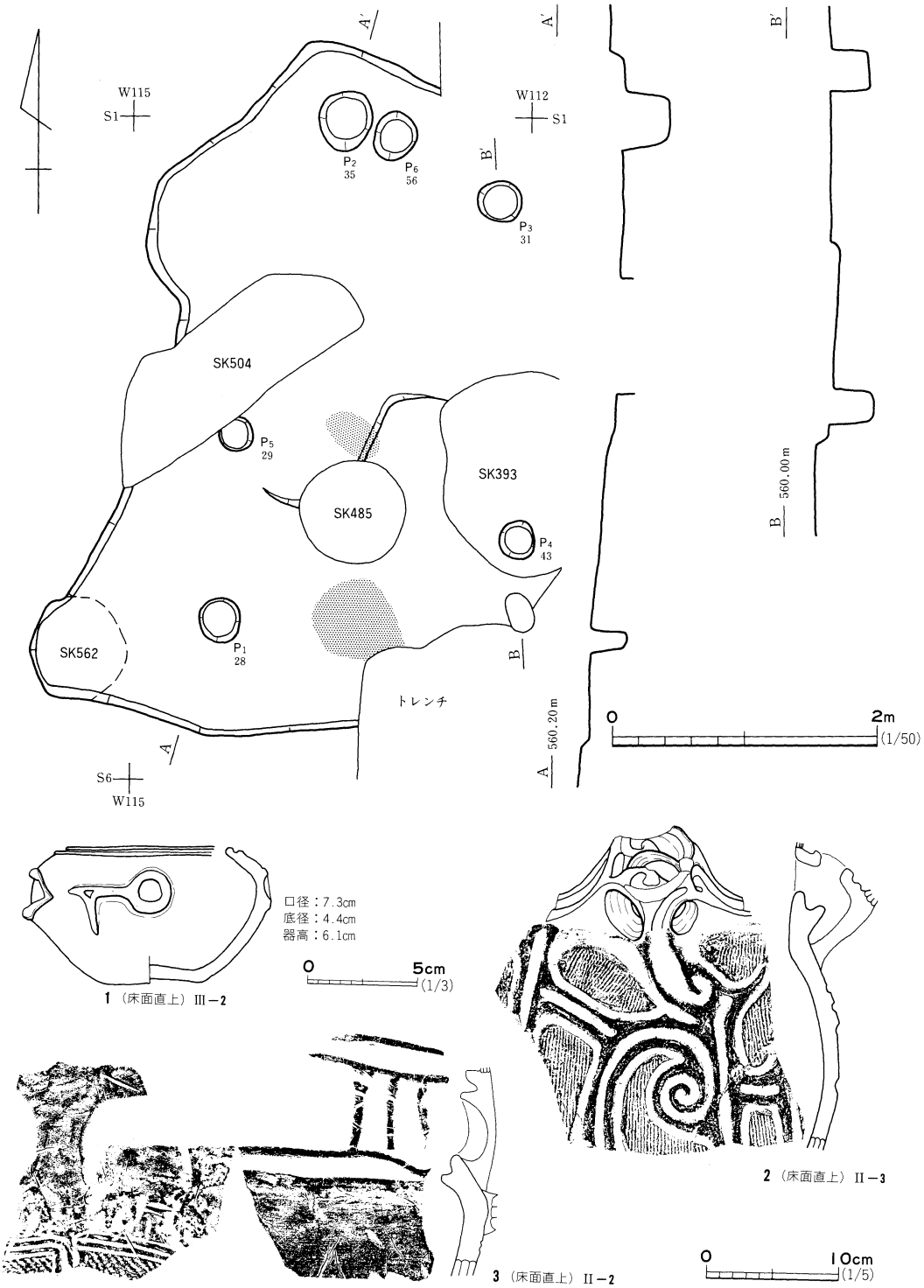


図252　113号住居跡と出土遺物（1）

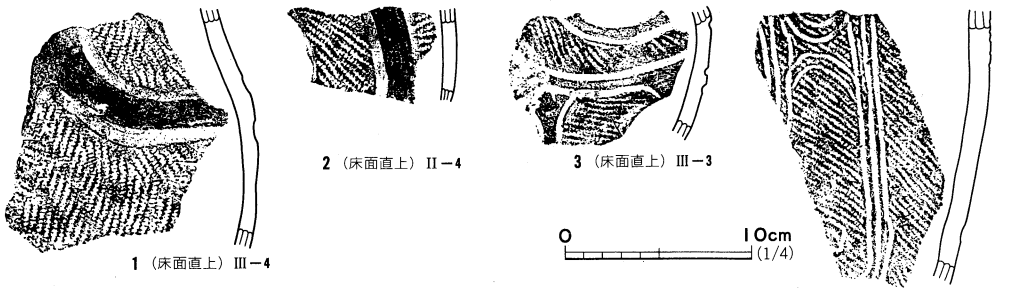


図253　113号住居跡出土遺物（2）

している。規模は東西5.3m，南北は現況で5.1mである。検出面からの深さは，最も遺存状態の良い北壁で最大10cm，周壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は平坦であるが，西壁際は南北3.8m，東西1m程の範囲で，床面から最大30cm程で窪んでいる。この凹地は，古い時期のSK628堆積土上面に作られた本跡の床面が，土圧等の要因で陥没したものと判断している。遺構内堆積土は3層に区分した。ℓ2・ℓ3は，地山からの流れ込みと考えられる粒子を含んだ，粘質のシルト質土である。堆積状態は自然堆積と考えられる。

小穴は，6個検出した。P1・P3・P6は深さが65cm以上，P4・P5は25cm程と浅い。P1・P3・P6は，炉を挟んで正三角形状に配置されていることから，本跡の主柱穴と考えられる。P2は炉に近接して作られた小穴で，その規模からP1・P3・P6とともに本住居跡の主柱穴を構成するものと判断した。小穴内には主に暗褐色シルト質土が堆積していた。

炉は複式炉で，住居中央やや北寄りから検出された。遺存状態は良いが，土器埋設部周縁の石の一部は，遺存していないものと考える。前庭部の末端は，住居跡北壁から50cm離れている。炉の中軸線はほぼ南を示し，規模は長さ205cm，幅は80cmである。平面形は土器埋設部が円形状をなし，石組部から前庭部にかけては全体として長方形状をなしている。土器埋設部と石組部の境界は，若干括れている。

土器埋設部は，炉の中軸線上で長さ70cm，現況で幅75cmを測る。炉の中軸線上には，2個の土器が埋設されていた。土器埋設部を囲むように縁石が2列認められる。縁石と埋設土器との隙間には石が面を揃えて置かれ，縁石との間には，5cm程のレベル差が認められる。石組部は長さ70cm，幅70cmの方形をなし，20～40cm程の偏平な礫を設置している。周壁部の礫は急斜度に設置されている。このため，石組部の断面形は台形状をなしている。床面から石組部底面までの深さは，最大16cmである。前庭部も平面形がほぼ方形状をなし，周壁は緩やかに立ち上がっている。前庭部末端の幅は90cmである。

炉の焼けは強く，特に埋設土器の周囲の焼土化が著しい。複式炉内堆積土は4層に区分した。2個の埋設土器内最下部には，ほとんど木炭粒からなる黒色土が堆積し，その上位には，人為堆

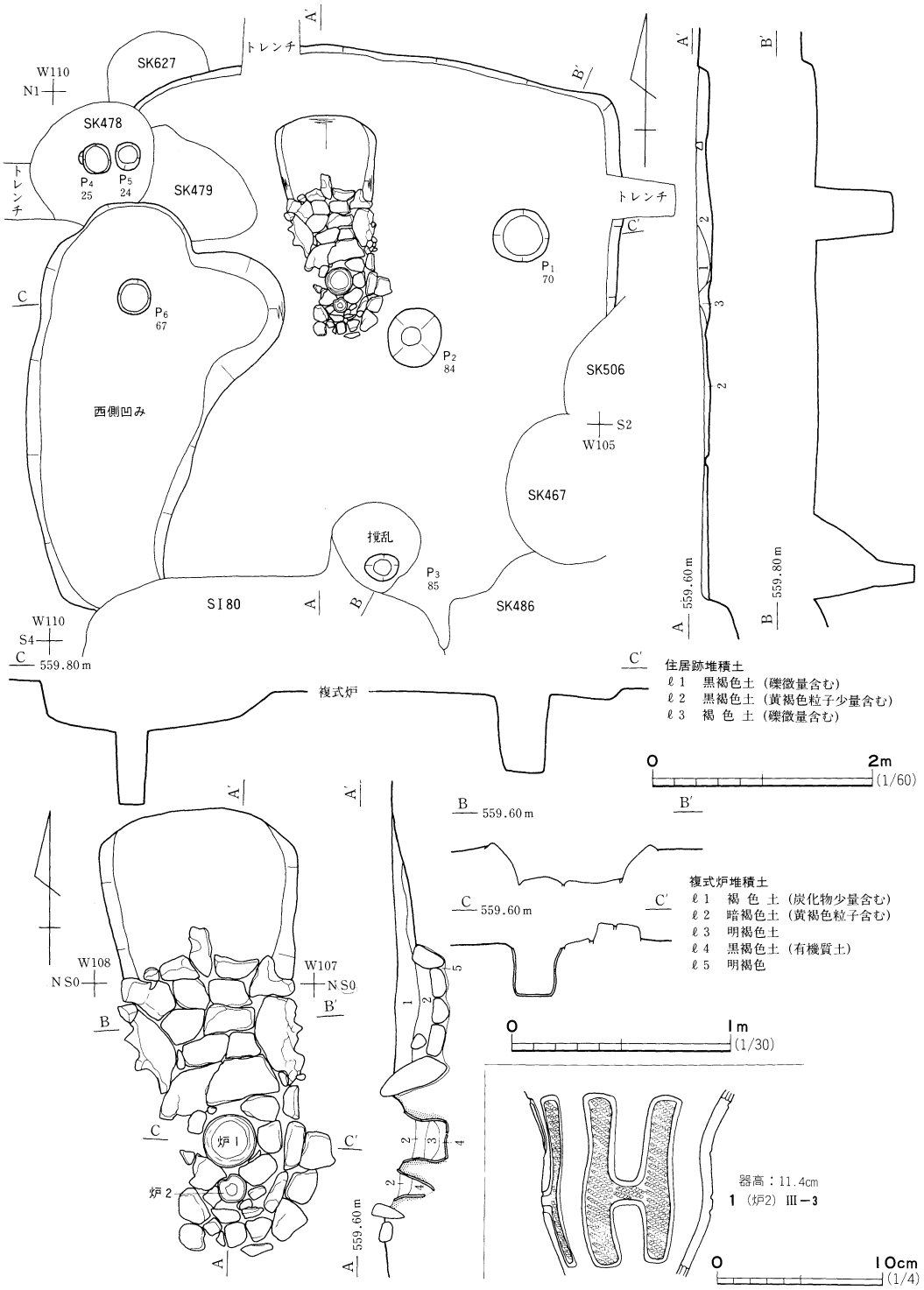


図254　114号住居跡と複式炉・出土遺物（1）

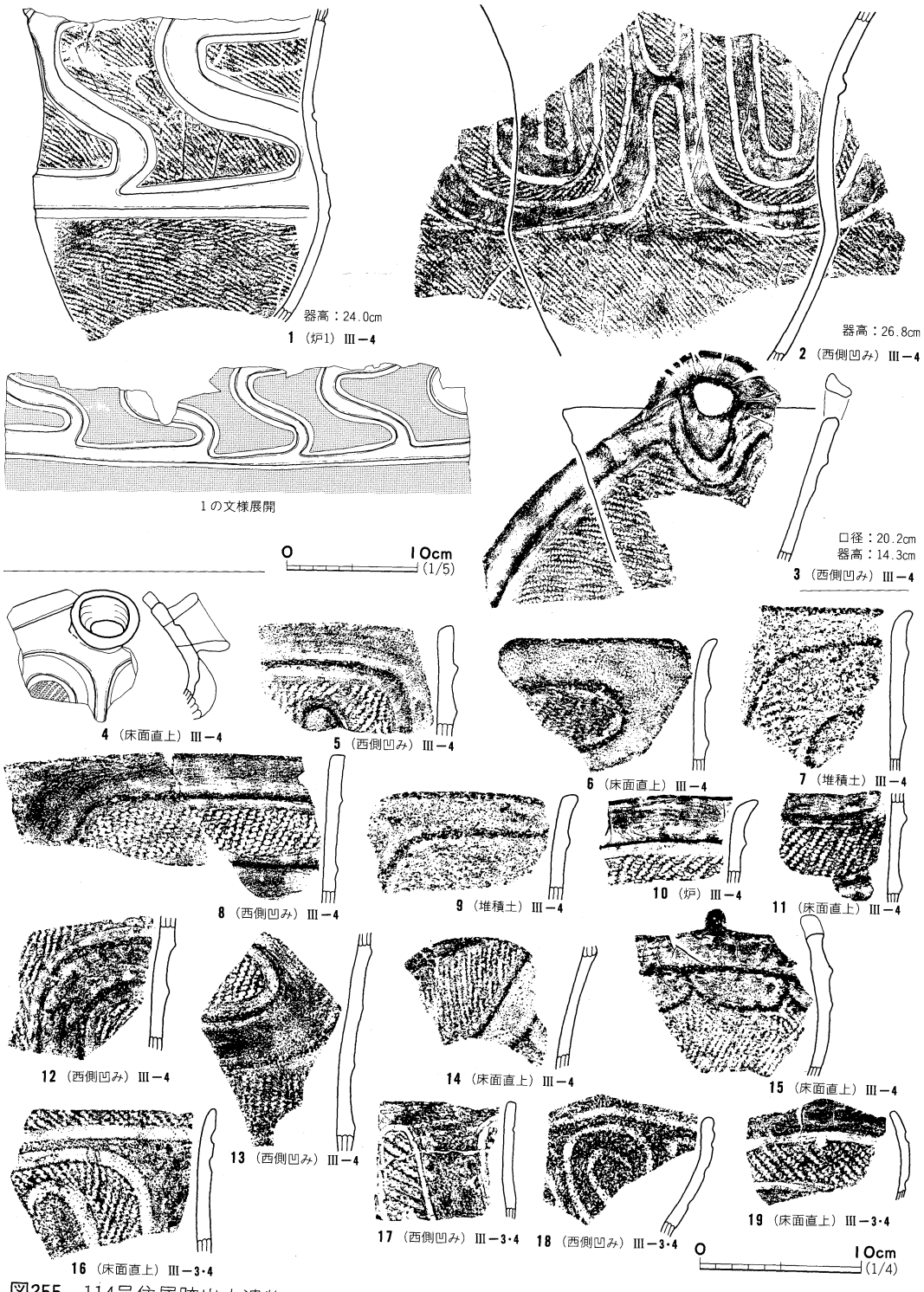


図255　114号住居跡出土遺物（2）

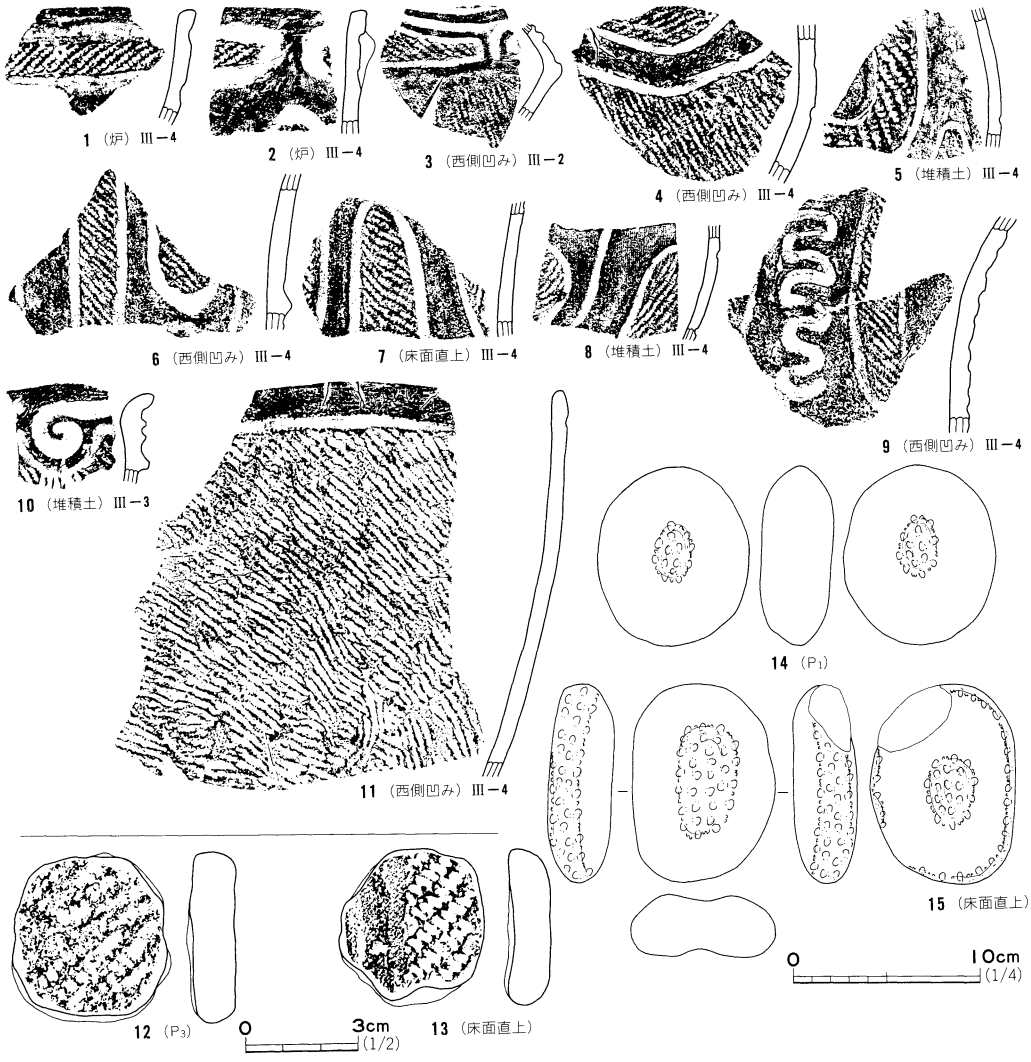


図256　114号住居跡出土遺物

積によると考えられる明褐色土が一部堆積している。最上部には，自然堆積と考えられる住居跡内堆積土と同じ土が堆積していた。土器埋設部の掘形は，埋設土器ごとに掘形が作られており，掘形と土器との間隔は狭い。石組部は掘形の周壁・底面に接して，石が設置されている。

遺　　物（図254～256）

本住居跡からは，縄文土器片970点，土製品2点，石器8点が出土した。図254－1，図255－1は，複式炉の埋設土器である。他の縄文土器片は，堆積土や床面直上から出土した。特に，西側の凹地内堆積土からの出土量が多い。

図254－1は胴部上半部が括れる深鉢で，口縁部と底部を欠損する。胴部に沈線を用いたH字

状の単位文が施されている。単位文内には，縄文が充填施文される。図255－1は胴部上半が括れる深鉢で，口縁部と底部を欠損する。胴部に稜沈線を用いた逆Z字状の単位文が描かれている。単位文内には，縄文が充填施文されている。同図2は胴部上半が括れる深鉢で，口縁部と底部を欠損する。凹線で区画された渦巻状の単位文様が施されている。同図3は，胴部が直線的に立ち上がる鉢形土器であろう。口縁部に稜線で区画された無文帯が見られる。口縁上には，有孔の突起が付けられている。同図4は，浅鉢状をなす注口土器であろう。同図5～15は，稜線で曲線的な単位文が描かれ，15には連孤状の小単位文が連続して施されている。

同図16～19，図256－1・2・4～9は，凹線で曲線的な単位文が施されたものである。9の無文部には，縦位の波状沈線文が加えられている。いずれも単位文内には，縄文が充填施文されている。同図3・10は，隆沈線で文様が描かれている。3は楕円形状の区画文，10は渦巻文が施されている。同図11は口縁部直下に無文帯を有する，縄文の施された粗製土器である。同図12・13は，土器破片を用いた円盤状の土製品である。同図14・15は磨石で，15は側縁部に敲打痕状の痕跡が見られる。

ま と め

本住居跡は遺存部と住居施設から判断して，一辺が5.5m程の方形の竪穴式住居跡と判断される。住居施設には複式炉と，4個の主柱穴がある。本住居跡の所属時期は，重複関係・出土土器から，大木10式期の所産と考えている。（香　内）

115号住居跡（SI115）

遺　　構（図257，写真112）

ス・セ6・7GのLⅣ上面で検出した住居跡である。調査当初，本遺構についてはSK520の一部として取り扱ったが，精査の過程で炉の一部が検出されたため竪穴住居跡と判断したものである。遺存状態は悪く，住居跡北半は調査区外に延びているため，平面形は不明と言わざるをえない。遺存値は現況で，東西3.3m，南北2.0mである。SK520と重複し，SK520より新しいと考えられる。

検出面はLⅣ上面で，検出面から床面までの深さは20～30cmである。壁は南東部しか遺存していないが，立ち上がりは比較的急である。床面には緩やかな凹凸が認められる。住居内には暗褐色土が堆積し，自然堆積と考えられるが断定はできない。住居施設としては，小穴および炉のごく一部が検出されている。小穴は2個検出され，直径はP1・P2とも50cmを測り，床面からの深さはP1が80cm，P2は82cmである。小穴内堆積土はいずれも暗褐色土である。P1・P2は規模等から，主柱穴と考えられるが，配置は不明である。炉は複式炉であるが，SK520の掘り込みに際して，石組部の一部を壊してしまっている。このため，現況で確認できたのものは，土層断

面に残った土器埋設部と石組部の一部のみである。本体は調査区外に延びているため，不明部分が極めて多い。土層断面から確認される複式炉の長軸長は1.3m程度である。

遺　　物（図257）

出土した遺物は，縄文土器片110点と石器1点である。図257－2は，石組部西端から検出された粗製の深鉢である。同図1は2の内部から検出された深鉢で，沈線で区画された縄文帯で曲線的な単位文を描いている。単位文内の縄文は充填施文されている。同図3は凹部を持つ磨石で，周縁に敲打痕状の使用痕が観察される。

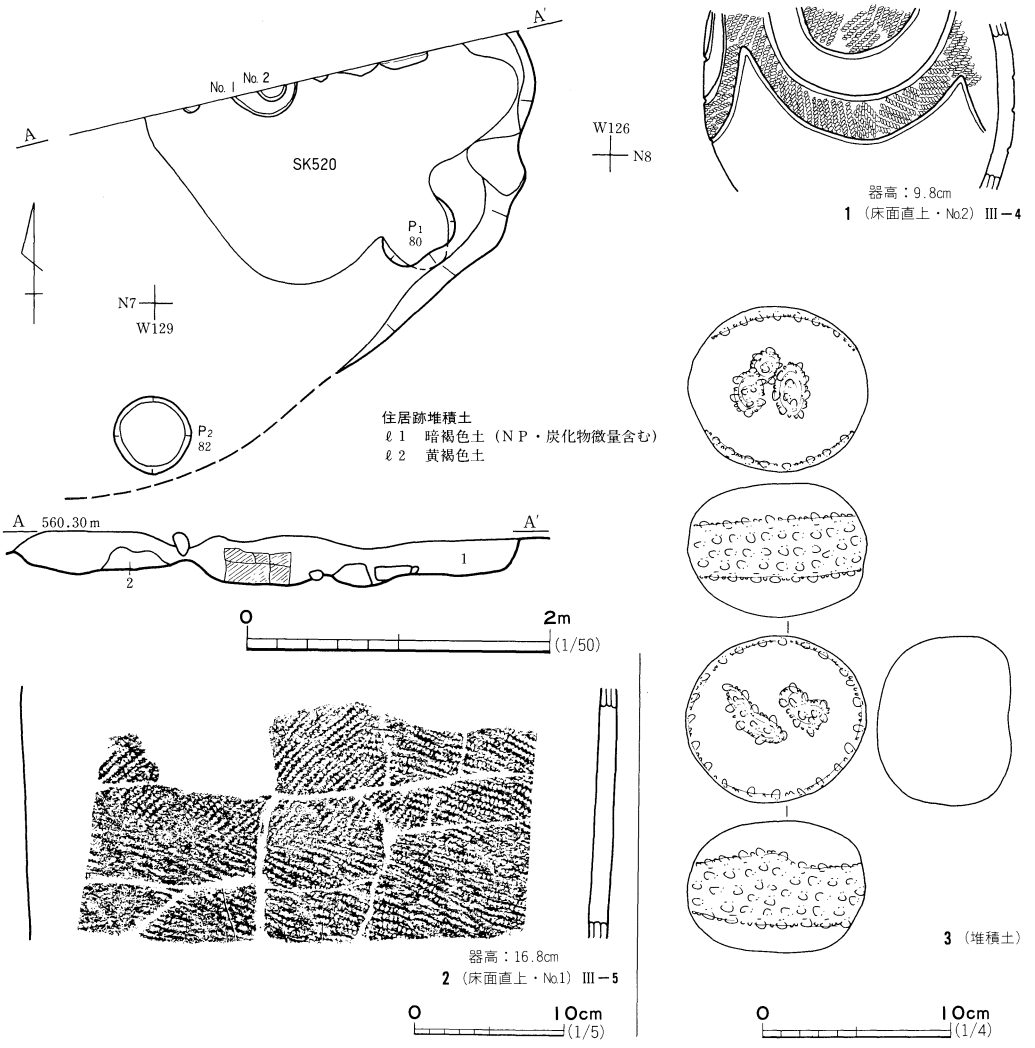


図257　115号住居跡と出土遺物

ま と め

本住居跡は北半部が調査区外に延び，南西壁も遺存していないため，平面形は不明である。柱穴は2個確認されているが，配置等は不明である。炉は断面の観察から，複式炉と判断される。所属時期は出土遺物から判断して，大木10式期に比定されよう。　（松　崎）

116号住居跡（SI116）

遺　　構（図258，写真113）

ソ～チ45・46Gに位置する竪穴住居跡で，LV上面において検出した。遺存状態は極めて悪く，検出することができたのは，南壁と西壁の一部だけである。SI10・12と重複し，本住居跡が古い。遺存する壁と小穴から推定すると，平面形は南北が長い長方形を基調とし，長辺は10mを越えるものと考えられる。壁は緩やかに立ち上がっており，検出面からの深さは，10cm程と浅い。床面はほぼ平坦であるが，締まりがなく軟弱である。

住居施設は，8個の小穴と3基の炉を検出した。小穴は直径が40cm程で，確認面からの深さは58～82cmである。いずれも長辺に沿った，東・西の壁際に位置し，P1～P7は長方形に配置されている。これら8個の小穴によって，主柱穴が構成されていたものと考えられる。炉はほぼ住居跡の中央に位置している。いずれも地床炉で，長軸線上に並んでいる。焼けの状態は弱く，焼土化が見られるのは，炉上面からいずれも3cm下までである。

遺　　物

遺物は出土しなかった。

ま と め

本住居跡は，遺存する壁と小穴から推定して長辺は10m以上で，南北が長い長方形をなすものと考えられる。主柱穴は，長辺に沿って作られた7個によって構成され，長方形に配置されている。本住居跡の所属時期は，検出状況などから縄文時代中期前葉と考えられる。　（山　岸）

117号住居跡（SI117）

遺　　構（図259，写真114）

セ46Gに位置し，LV上面において暗褐色土の落ち込みとして検出した。SK117と重複し本住居跡が新しい。平面形は南北3.5m，東西3.0mのほぼ円形をなす。周壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。壁高は，北壁が最も高く，検出面からの深さは35cm程，南壁は10cm程である。床面は地山であるLVまで掘り込まれ，ほぼ平坦である。堆積土は3層に区分され，ℓ3が壁際からの流入状態を示していることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は，6個の小穴と壁溝を検出した。小穴は床面の中央から北東壁際にかけて検出さ

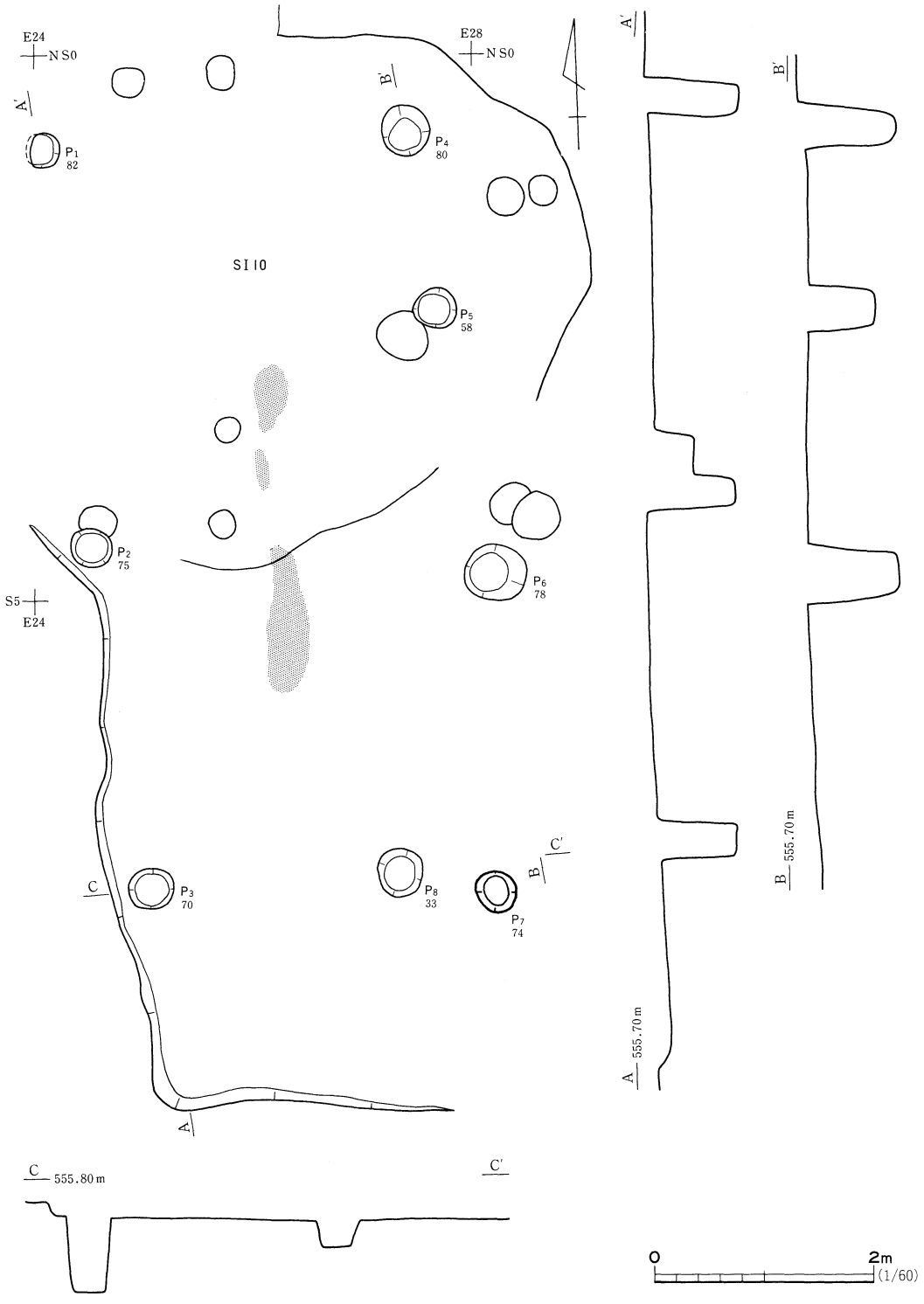


図258　116号住居跡

れたが，規則的な配置は認められない。これらの小穴は直径20～40㎝，床面からの深さは26～56㎝である。この中のいずれかが，主柱穴であったと考えられる。壁溝は住居跡北西と南側の一部でとぎれているが，住居跡の周壁際をほぼ全周するものと考えられる。

遺　　物（図259）

本住居跡からは，縄文土器片が50点出土した。いずれも堆積土中から散在して出土している。図259－1・2は刻目を施した隆帯を口縁部に巡らせ，同図3は隆線に沿って有節沈線を施している。同図4は沈線文を，同図5は有節沈線文を施した深鉢の胴部破片である。

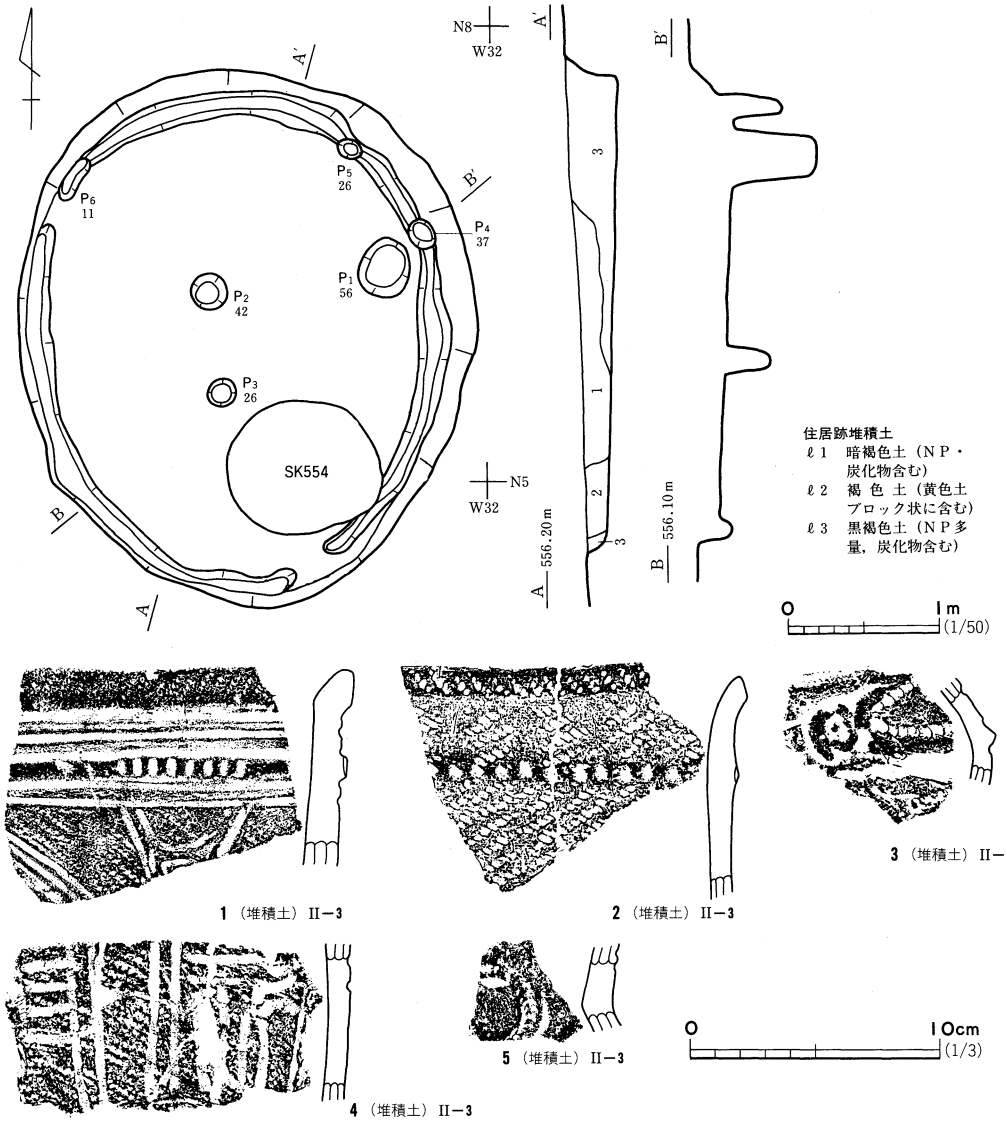


図259　117号住居跡と出土遺物

ま と め

本住居跡は，約3ｍ程の円形をなす小型の竪穴住居跡で，住居内に炉が作られていないことを特徴としている。主柱穴は明確にすることはできなかったが，P1・P2を主柱穴とする2本柱の竪穴住居跡である可能性が高い。本住居跡の所属時期は，検出状況および出土土器から大木7b式期と考えられる。（山　岸）

118号住居跡（ＳＩ118）

遺　　構（図260）

ソ・タ46・47Ｇに位置し，ＬＶ上面において褐色土の落ち込みとして検出した。重複関係ではＳＫ545・551・571より古く，ＳＫ544より新しい。遺存状態は極めて悪く，検出することができたのは北壁と西壁の一部のみである。

遺存する壁から推定すると，平面形は南北が長い楕円形，ないしは長方形をなし，長辺は6ｍを超えるものと考えられる。壁は緩やかに立ち上がっており，検出面からの深さはいずれも10㎝程浅い。床面はほぼ平坦であるが，締まりがなく軟弱である。堆積土は褐色土を主体とし，堆積状態は自然堆積と考えられる。

住居施設は，5個の小穴と炉を検出した。小穴はいずれも壁際に位置し，直径が20～45㎝，確認面からの深さは46～60㎝である。これらの小穴によって主柱穴が構成されていたものと考えられる。炉は，ほぼ住居跡の中央に位置するものと考えられ，南北100㎝，東西50㎝の地床炉である。炉の南側はＳＫ544の上面に作られており，周囲の床面より10㎝程低い。炉の焼けは弱く，焼土化は炉上面から2㎝下までしか認められなかった。

遺　　物（図260）

遺物は縄文土器片が35点，石器が1点出土した。図260－1は胴部上端に楕円形区画文，以下にＹ字状の懸垂文が隆線によって施されている。隆線に沿って縄圧痕文も施されている。同図2・4にも隆沈線によるＹ字状の懸垂文が見られる。同図3は小突起が付けられるもので，文様は有節沈線で描かれている。同図6は半截竹管による平行沈線文を施し，一部には爪形文も加えている。文様帯の上端にはボタン状の貼付文を加えている。同図8は剥片を用いた石核である。

ま と め

本住居跡は，遺存する西壁と小穴から推定して長辺6ｍを超え，南北が長い楕円形，ないしは長方形をなすものと考えられる。本住居跡の所属時期は，検出状況および出土土器から大木7b式期と判断している。（山　岸）

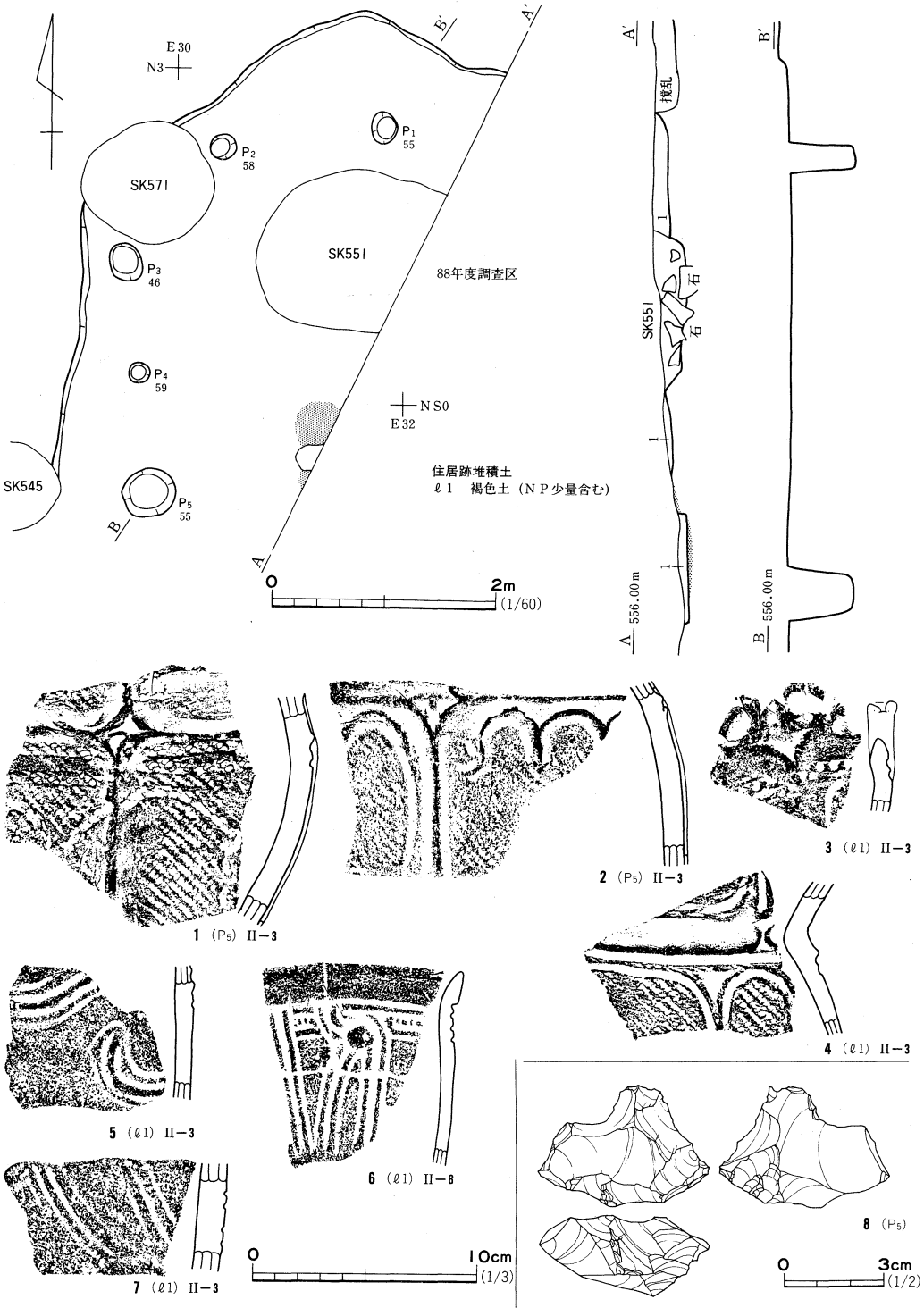


図260　118号住居跡と出土遺物

119号住居跡（SI119）

遺　　構（図261，写真115）

調査区中央南向き緩斜面上，コ・サ30・31GのLⅣ上面で検出された小型の住居跡である。重複する遺構はなく，遺存状態は良好である。堆積土は暗褐色土を主体とし，色調及び混入物から4層に区分され，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断される。

平面形は隅丸長方形をなし，主軸は真北から60°程東に傾いている。規模は長軸3.5m，短軸2.5mである。周壁は急峻に立ち上がり，検出面からの深さは，西壁で最大24cmを測る。床面は，平坦であるが締まりは弱い。住居跡内からは小穴4個を検出した。小穴内にはいずれも褐色土が堆積していた。小穴の規模は直径16～20cm，深さ12～24cmで，いずれも主柱穴と考えられる。炉は検出されなかった。

遺　　物（図261）

本住居跡からは，15点の縄文土器片が散在した状態で出土している。図261－1は，口縁部内面に刺突文を施したものである。同図2は隆線で楕円形の区画文を描き，隆線に沿って交互刺突文を加えている。3の口唇部には刻み目が見られる。

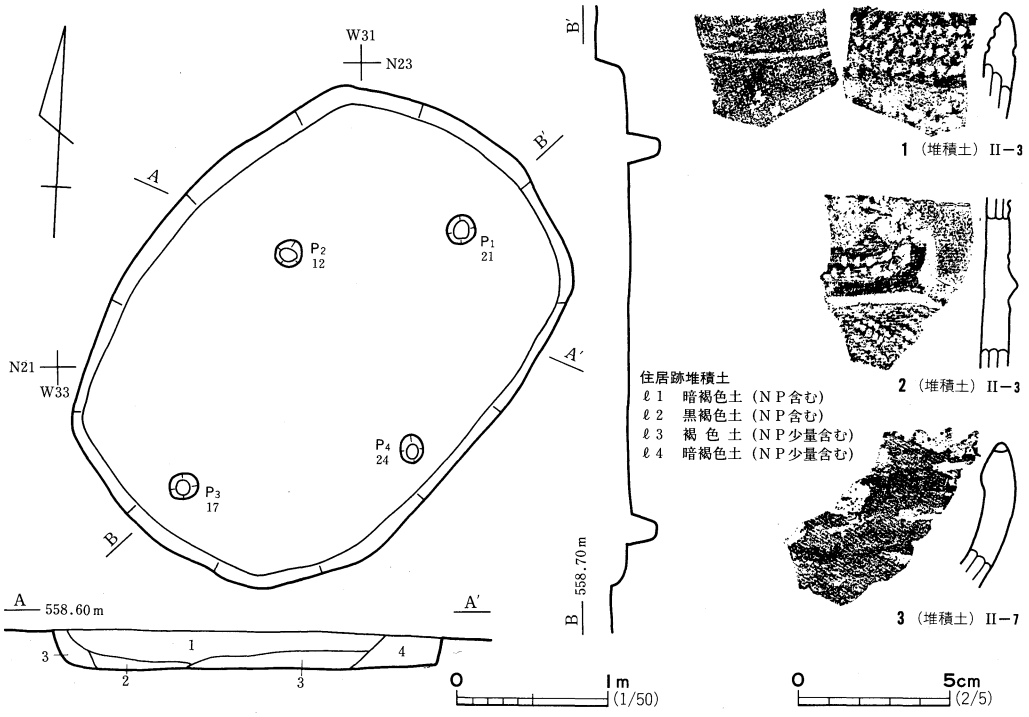


図261　119号住居跡と出土遺物

ま と め

本遺構は，2.5×3.5ｍの隅丸長方形を呈する小さな住居跡である。炉は，住居跡内には作られていなかった。所属時期は，出土土器から大木7b式期と判断している。　（福　山）

120号住居跡（ＳＩ120）

遺　　構（図262，写真116）

調査区中央部南緩斜面，キ・ク27・28ＧのＬⅣ上面で検出された小型の竪穴住居跡である。重複する遺構はなく，遺存状態は良い。平面形は楕円形を基調とするが，住居跡南西部は歪んでいる。規模は長軸4.1ｍ，短軸2.8ｍで，長軸は真北から60°程西に傾いている。周壁は急峻に立ち上がり，検出面からの深さは北壁で最大25㎝を測る。北壁際には幅12～26㎝の壁溝が作られている。床面は平坦であるが，北西寄りに10㎝程度の段差が見られる。堆積土は黒褐色土・暗褐色土を主体とし，色調及び混入物から4層に区分した。堆積状況は，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断される。

住居内からは，5個の小穴が検出された。規模はＰ1・Ｐ4が深さ29㎝で，南北にほぼ対応する位置に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えている。他の小穴は，11～23㎝と浅い。小穴内堆積土はすべて暗褐色土である。炉は検出されなかった。

遺　　物（図262）

本住居跡からは，6点の縄文土器片が出土した。これらの土器は堆積土中から散在して出土している。図262－1・2は同一個体で，口縁部には鶏頭状の小突起が付けられている。文様は沈線を多用して施され，幅の狭い口縁上部の文様帯には，隆帯で波状文が施されている。同図3は沈線を施したものである。

ま と め

本遺構は，2.8×4.1ｍの楕円形を基調とする小さな住居跡である。炉はなく，短軸方向に2本の主柱穴を配置している。床面に段差が見られることから，建て替えの可能性がある。所属時期は，出土土器から大木8a式期と判断している。　（福　山）

121号住居跡（ＳＩ121）

遺　　構（図263，写真117）

ソ・タ16・17Ｇに位置する竪穴住居跡である。ＬⅣ上面で石囲炉を検出し，精査の結果，住居跡と判明した。ＳＩ42・97と重複し，本住居跡が古い。遺存状態は悪く，検出することができたのは東壁と南壁の一部である。

遺存する周壁から，一辺3～4ｍの平面形が方形を基調とする竪穴住居跡と考えられる。周壁

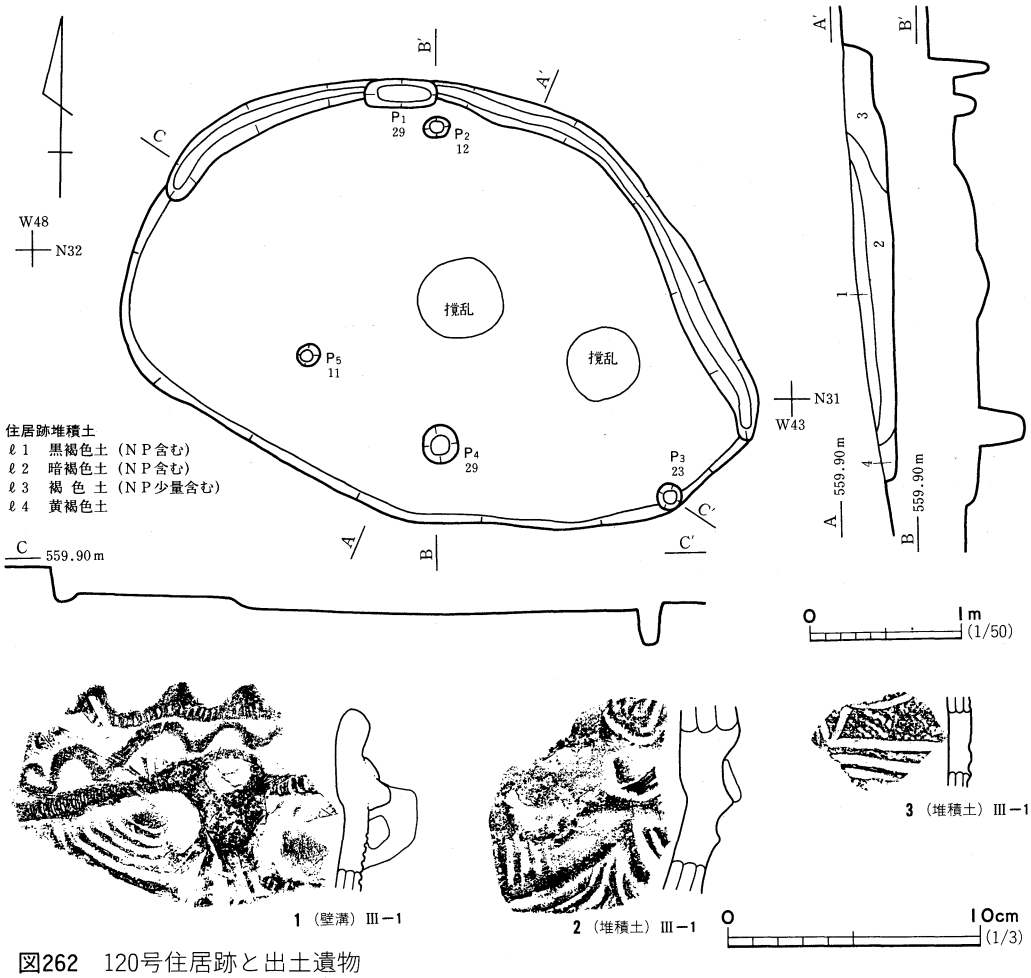


図262　120号住居跡と出土遺物

は緩やかに立ち上がり，壁高は最大で10㎝である。床面は，僅かではあるがＬⅤまで掘り込まれており，ほぼ平坦である。

住居施設は，４個の小穴と１基の石囲炉を検出した。小穴は，直径30～50㎝，床面からの深さは14～50㎝である。これら４個の小穴は，石囲炉を取り囲むように四角形に配置されていることから，本住居跡の主柱穴と考えられる。石囲炉は小穴を結んだ四角形のほぼ中央に位置し，規模は南北100㎝，東西50㎝である。炉の中軸は真北から60°程東に傾いている。楕円形の礫を横位に立てて縁石とし，石の切れる北側には土器を埋設している。炉の内側はほぼ全面に渡って火熱を受けており，最大５㎝の深さまで焼土化している。

遺　　物（図263）

出土遺物は，縄文土器片10点と石器 1点である。図263－１は炉の埋設土器で，縄文が施された胴部が球形を呈する台付きの鉢である。同図２は頸部を巡る３条の平行沈線によって，無文の

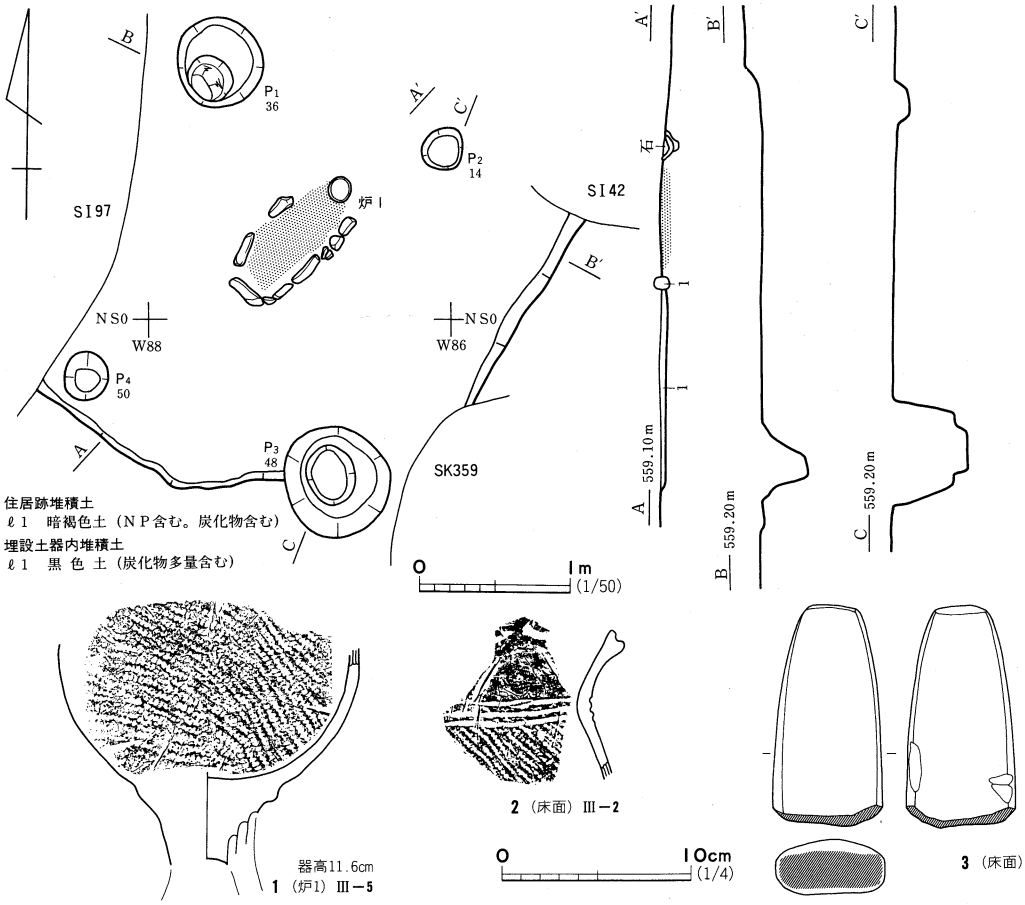


図263　121号住居跡と出土遺物

口縁部と縄文の施される胴部を区画している。口唇部には沈線文が施されている。同図3は，刃部を欠損する磨製石斧を再利用した磨石である。

ま と め

本住居跡は遺存する東・南壁からと柱穴の配置から推定して，一辺4m程の方形の竪穴住居跡と考えられる。炉は長方形の石囲炉で，北端部には小型の土器が埋設されていた。主柱穴は炉を中心に四角形に配置されている。本住居跡の所属時期は，他の遺構との重複関係と出土土器から大木8b式期と考えられる。（山　岸）

122号住居跡（SI122）

遺　　構（図264，写真118）

調査区内でも極めて遺構の密度が薄い，キ31・32GのLⅣ上面において検出された住居跡で

ある。遺存状態は良く周壁すべてを検出することができた。平面形は楕円形状を呈し，規模は南北5.5m，東西4.5mである。壁高は最も遺存状態の良い北西コーナー部で18cm，壁は緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ水平であるが，北から南に向かって緩やかに傾斜し，比高差は最大31cmを測る。堆積土は2層に区分した。堆積状態については，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と考えられる。

小穴は，総数7個検出された。P1・P2は床面からの深さが60cm以上と深く，南北に対応する位置に作られていることから，本住居跡の主柱穴と判断している。P3～P7は，床面からの深さが15～28cmと浅い。これらの小穴についても，整った長方形状の配置が認められることから，本住居跡の柱穴と考えている。P1・P2が本住居跡の主柱，P3～P7がこれを補助する柱と考え

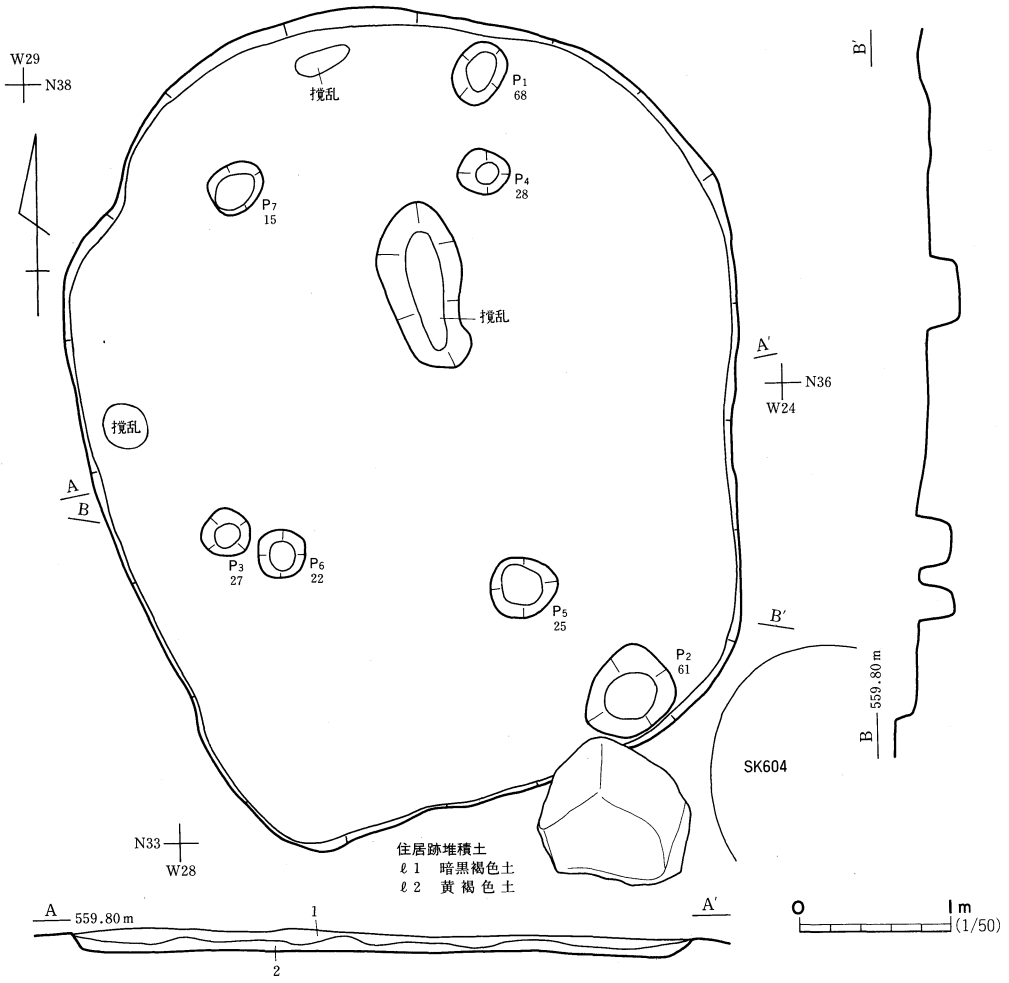


図264　122号住居跡

られ，総数6本の柱で本住居跡の上屋が支えられていたものと考えている。住居跡内から炉は検出されなかった。

遺　　物

住居跡内からは20点の縄文土器破片が出土しているが，いずれも小破片のため図示することはできなかった。

ま と め

本跡は楕円形を呈し，6本の柱を持つ竪穴住居跡と考えている。炉は，住居内には作られていなかった。本住居跡については出土遺物が少なく，遺構の重複も見られないことから，所属時期を限定することはできなかった。（光　家）

123号住居跡（SI123）

遺　　構（図265，写真118・119）

ネ・ノ11・12Gに位置し，LⅢb上面において暗褐色土の落ち込みとして検出した。遺存状態は比較的良好であるが，南東部分の壁は検出することができなかった。平面形は一辺4m程の隅丸方形をなすものと考えられ，北壁はほぼ東西を指している。壁高は，北壁が最も高く40cmで，垂直に近い角度で立ち上がっている。床面は地山であるLVまで掘り込まれ，ほぼ平坦である。堆積土は，暗褐色土を主体として3層に区分された。堆積状態は，レンズ状の堆積が見られることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は，炉・小穴・壁溝・埋甕を検出した。小穴は7個検出され，いずれも直径20～30cm，床面からの深さは14cm～37cmである。これら小穴は，炉を取り囲むように長方形に配置されていることから，いずれも本住居跡の主柱穴と考えられる。壁溝は西壁部分から検出され，幅20～30cm，深さは12cm前後と浅い。

炉は複式炉で，前庭部末端は想定される住居跡の南西コーナー部に近接するものと考えられる。炉の長軸は，住居跡北西・南東コーナー部を結んだ線と一致している。法正尻遺跡から検出された他の住居跡においては，複式炉の前庭部末端は周壁の中央に取り付き，壁と複式炉の長軸が直角をなすように配置されているのとは，異なったあり方を示している。

規模は全長180cm，最大幅80cmで，土器埋設部は炉の北西端に位置している。遺存状態は悪いが，ほぼ全体を知ることができた。土器埋設部の縁辺には礫が配置されていたらしく，石組部と接する部分に僅かではあるが礫が遺存している。石組部は，土器埋設部側と底面の石が遺存している。特に，土器埋設部と接する部分には大型の礫を設置している。前庭部は一辺70cmの方形をなし，周壁には大型の石をほぼ全周するように設置し，床面と明確に区画している。

複式炉の掘形は，意図する各部位の形状に合わせて掘り込まれている。このため，埋設土器・

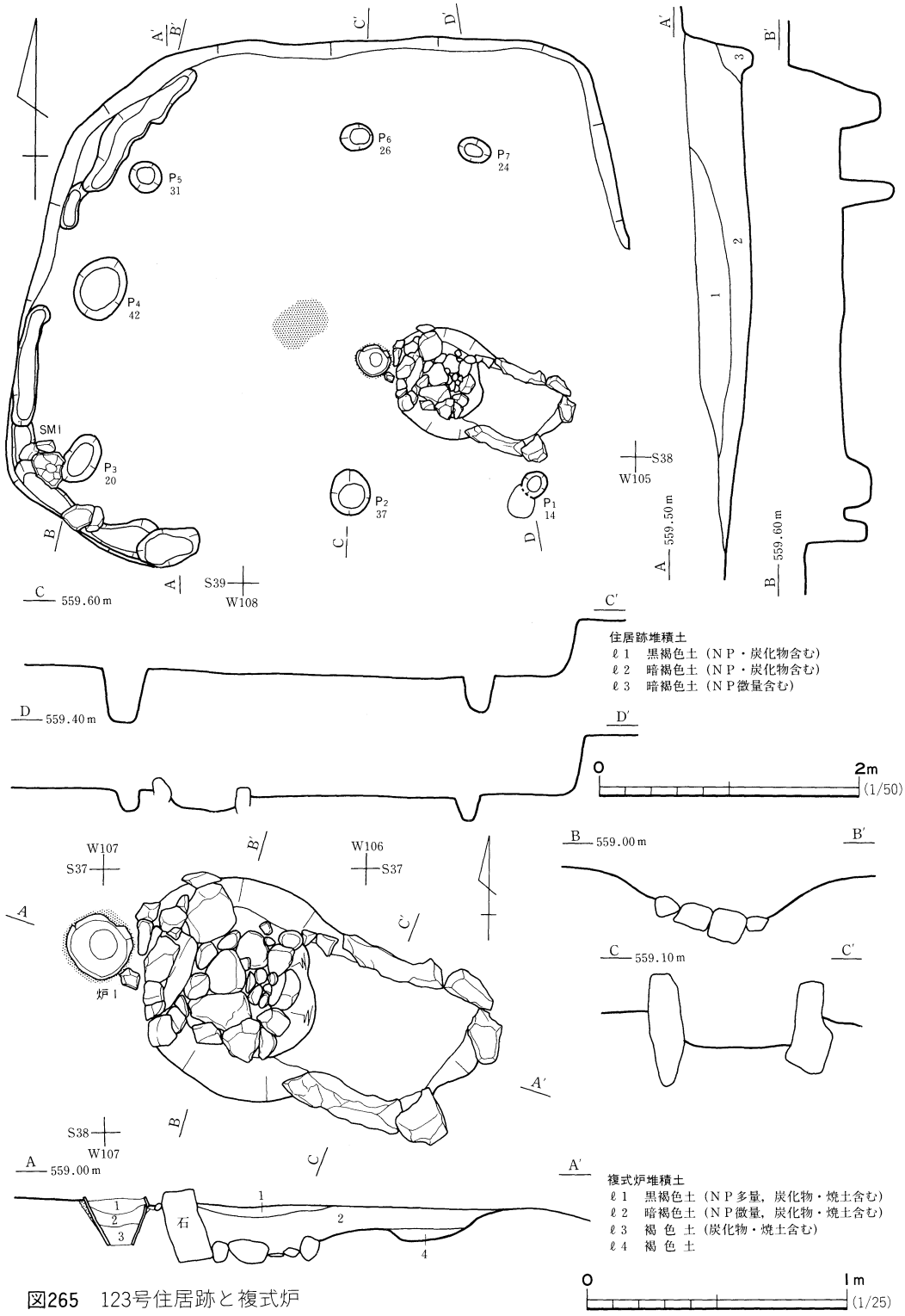


図265　123号住居跡と複式炉

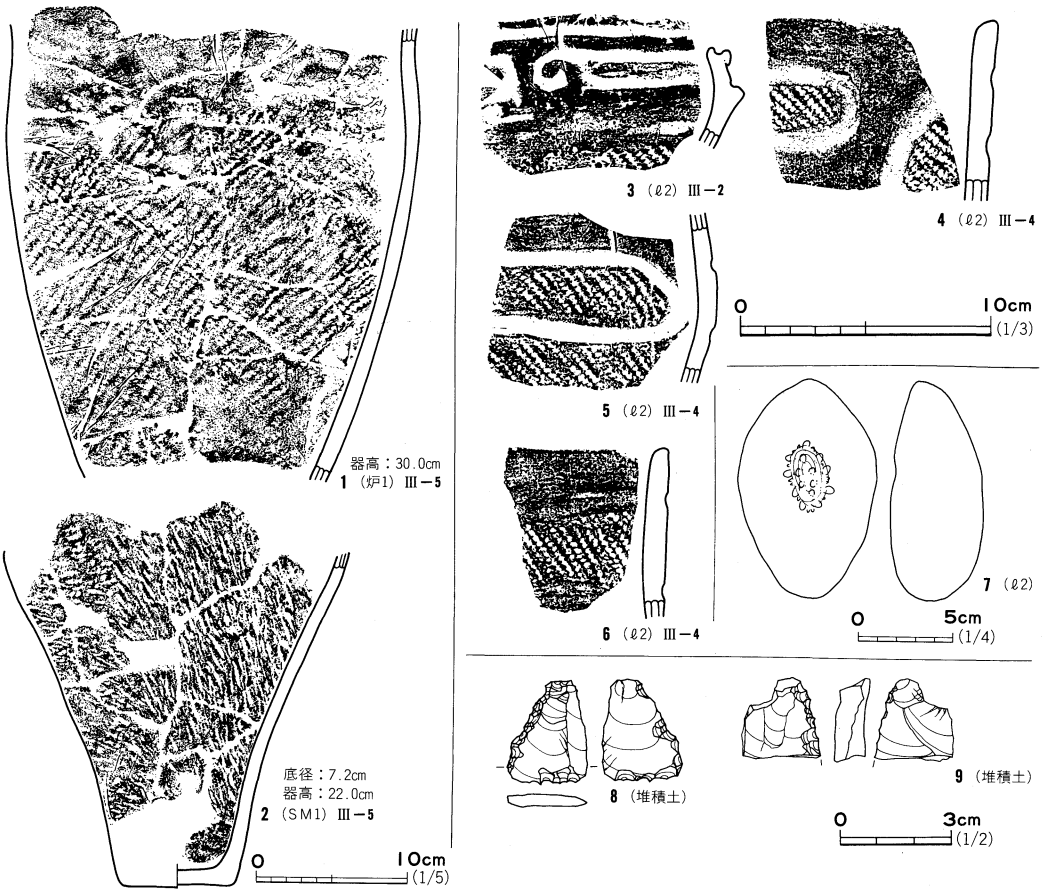


図266　123号住居跡出土遺物

配石と掘形の間に隙間はほとんど認められない。炉の焼けは強く，埋設土器の周囲は焼土化が顕著に認められた。また，この複式炉とは別に，床面のほぼ中央からは30×50㎝の地床炉が検出された。

埋甕は南西コーナー部から検出され，P3の一部を切っている。掘形は深さ10㎝と浅く，現状では深鉢の底部が正立の状態で埋められていた。埋甕内の堆積土はシミ状の褐色土を含む黄褐色土である。また，埋甕を囲むように2個の礫が置かれていた。

遺　　物（図266）

出土遺物は，縄文土器片330点と石器15点である。図266－1は複式炉の炉埋設土器で，胴部上端が僅かに括れる深鉢である。底部を欠損する。括れ部の上を無文とし，胴部には縄文を施している。同図2は埋甕である。胴部上半を欠損する深鉢で，撚糸文を施している。同図3の口縁部には隆帯よる渦巻文が，同図4～6は凹線による単位文が施されている。同図7は凹部を持つ磨石，同図8・9は縁辺部に簡単な刃部を作り出している掻器である。

ま と め

本跡は，一辺4ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。小穴は7個検出され，長方形状に配置されている。炉は複式炉であるが他の住居例とは異なり，前庭部の末端は住居跡のコーナー部に近接している。本住居跡の所属時期は炉が複式炉であることと，出土土器から大木10式期と考えられる。（山　岸）

124号住居跡（ＳＩ124）

遺　　構（図267，写真120）

調査区中央部，ス33・34ＧのＬＶ上面から検出された竪穴住居跡である。南西コーナーでＳＫ656と重複し，本住居跡が新しい。北東コーナー部は風倒木痕によって破壊されているが，遺存状態は比較的良い。

平面形は遺存する周壁の状態から，各コーナーが若干脹らむ隅丸長方形と判断している。長軸は真北から約35°西に傾く。規模は南北3.7ｍ，東西2.5ｍである。周壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが，東壁南側は風倒木痕の影響でやや不安定である。壁の遺存高は北壁で32～35㎝，西壁で33～38㎝，南壁で35～37㎝，東壁で38～41㎝である。床面は平坦であるが，北西から中央に向かって傾斜しており，最大比高差は27㎝である。遺構内堆積土は7層に区分され，主体となるのはＬⅢｂ層に近似する暗褐色土である。堆積状態は，壁際からの流れ込みの様相が見られることから，自然堆積と判断した。住居施設と考えられる小穴や炉は，検出されなかった。

遺　　物（図267・268）

124号住居跡からは，120点の縄文土器片と3点の石器が出土している。縄文土器の多くは，堆積土中から小破片の状態で出土している。図267－1は「く」の字状に屈曲する頸部と，丸みが強く，肩の張る胴部を有する深鉢である。口縁部は複合口縁状に肥厚し，口縁上には低い2個一対の突起が付けられている。文様の施文される部位は，複合口縁部・頸部・胴部上端とそれ以下に4区分される。複合口縁部には，1段撚りの縄による縄圧痕文が横位に3条施されている。頸部は口縁部に接して隆帯を貼り付け，2個一対の突起下は眼鏡状をなしている。この隆帯上には複合口縁部と同様に縄圧痕文が施されてる。さらに，この眼鏡状の隆帯間を波状の隆帯で繋いでいる。頸部下端には，文様が施されていない。頸部と胴部は，斜位の押捺を有する隆帯で区画され，その下には半載竹管による連続爪型文を横位に4条，その中間に横位の波状沈線文が1条施されている。それ以下の胴部には単節縄文が施されている。

図268－1～3も口縁部が肥厚するものである。1は，口縁部と胴部を区画する隆帯上に半截竹管によるＣ字状の刺突文を施している。図267－2～4，図268－6は交互刺突文の施されたもので，図267－4は口唇部直下に楕円形の区画文が認められる。図268－5は隆線で区画された中に，

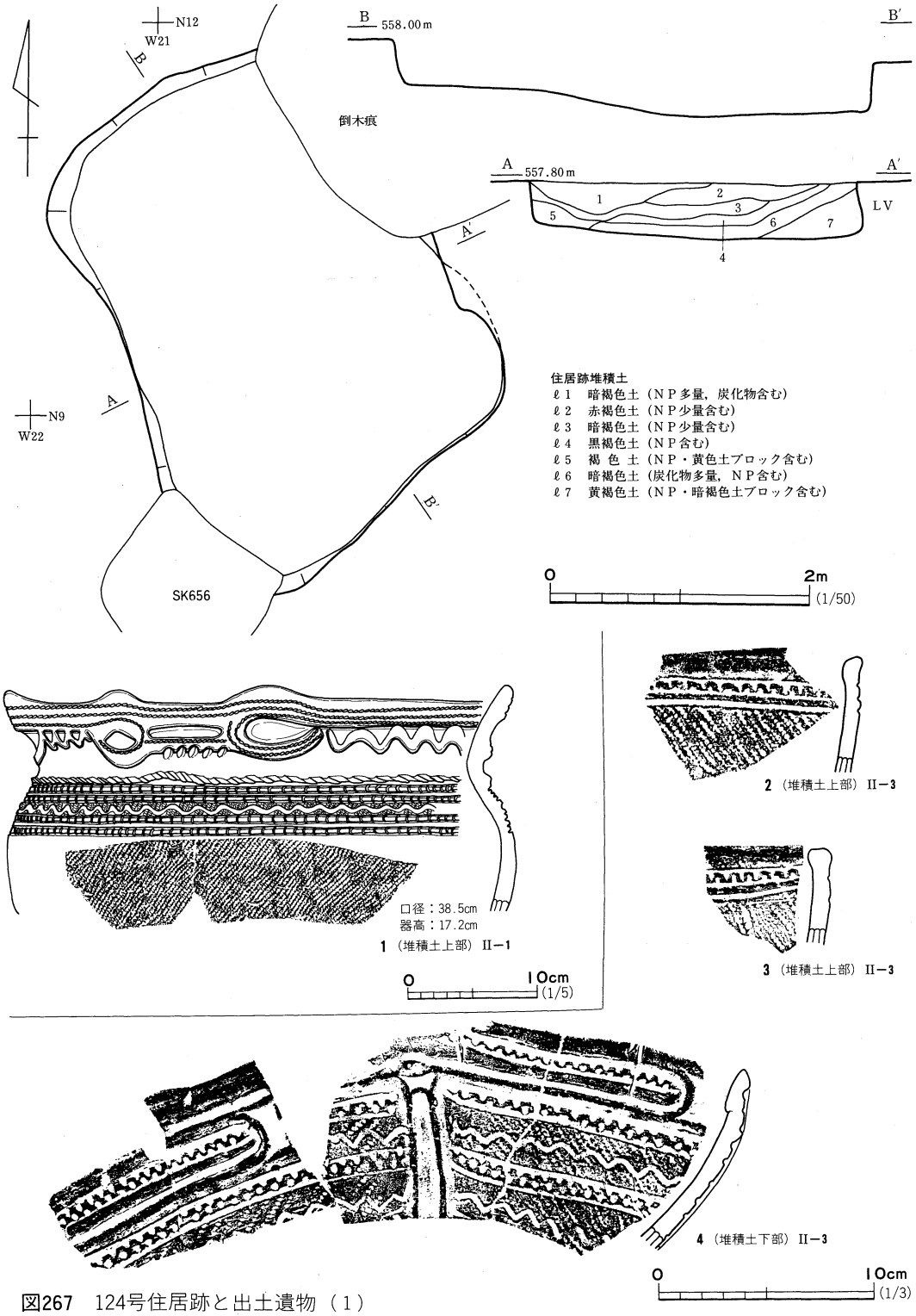


図267　124号住居跡と出土遺物（1）

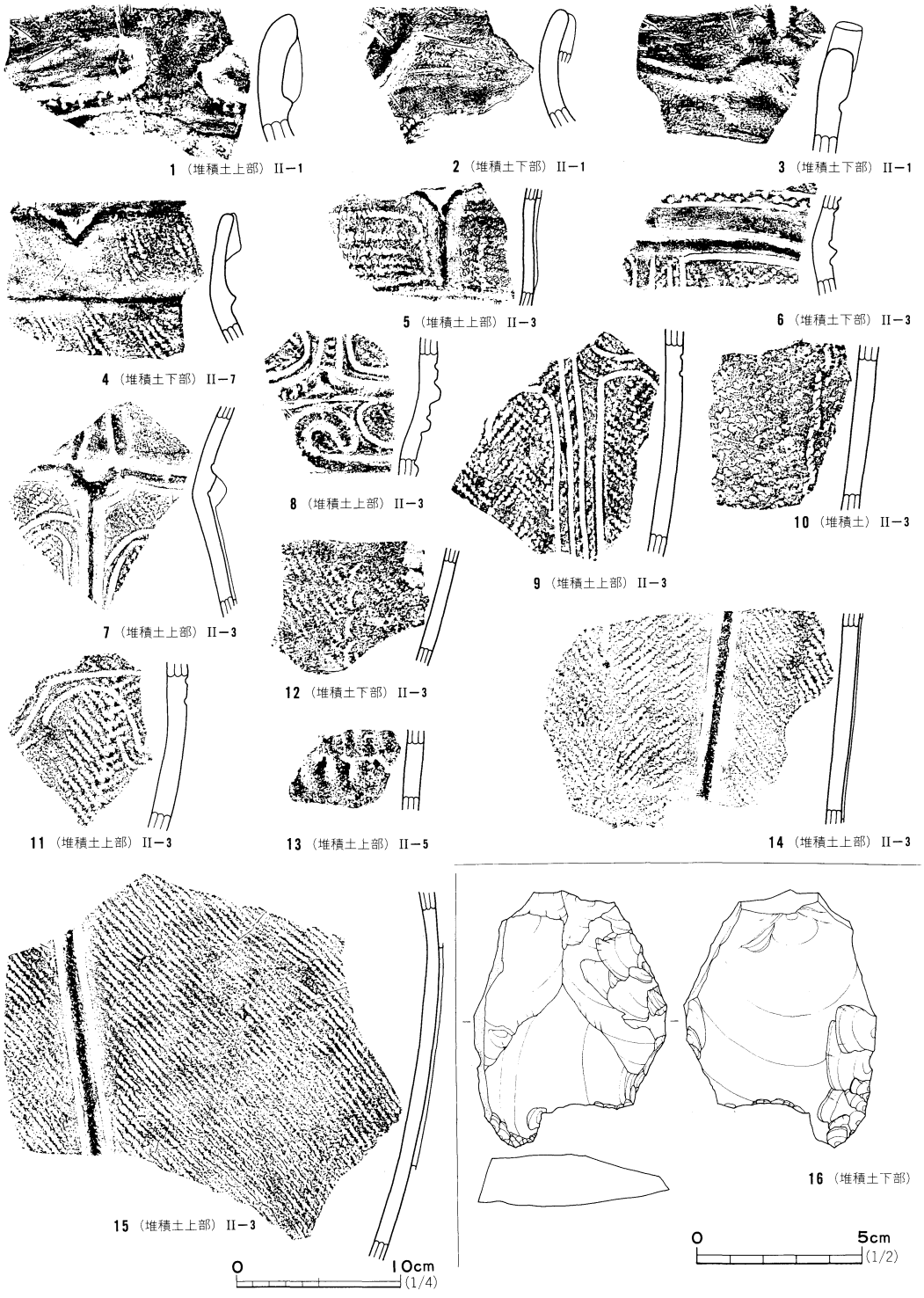


図268　124号住居跡出土遺物（2）

2段撚りの縄の圧痕文を施している。同図7～9・11は，沈線文の施された深鉢の胴部破片である。7には胴部を区画するY字状の隆線が見られる。同図13は粘土紐の積み上げ痕の上に，爪による押捺を加えている。同図16は，側縁部に調整を加えた不定形石器である。

ま と め

本住居跡は，炉や柱穴等の施設を持たない隅丸長方形の住居跡である。所属時期については，堆積土中から出土した遺物から大木7b式期と考えている。　（丹　治）

125号住居跡（SI125）

遺　　構（図269，写真121）

調査区北西部の小丘頂上より若干下がった西向きの緩斜面上，テ2・3GのLⅣ上面で検出された竪穴住居跡である。北壁の一部が撹乱により壊されているが，遺存状態は良好である。平面

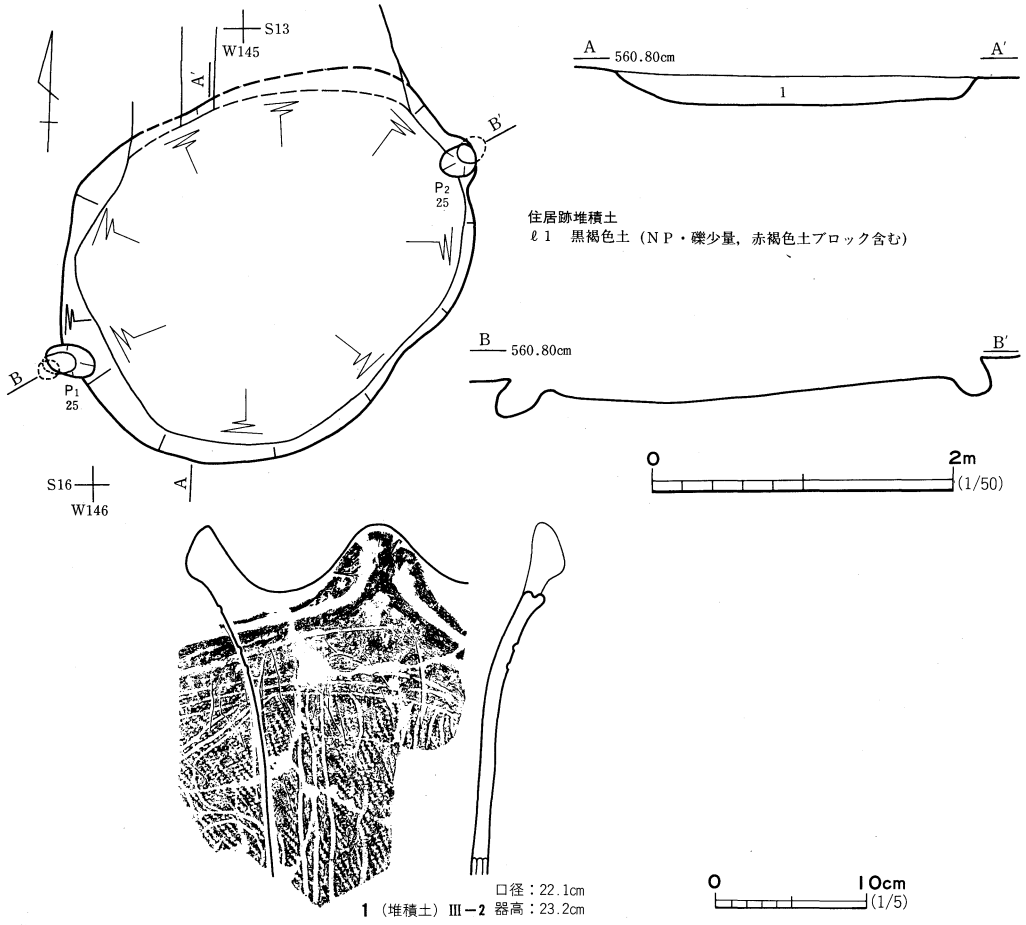


図269　125号住居跡と出土遺物

形は楕円形で，規模は長軸2.9m，短軸2.2mである。長軸は真北から70°程東に傾いている。床面は中心部に向かって緩やかに傾斜し，検出面からの深さは最大25cmで，周壁は緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は1層のみで，LⅢbに近いパミスを含んだ黒褐色シルト質土である。

小穴は2個検出した。それぞれ住居跡の長軸線上の東と西に対応する周壁に掘り込まれている。小穴内には，住居跡内堆積土と同じ土が堆積していた。P1・P2は，長径がそれぞれ32・24cm，床面からの深さは，共に25cmである。いずれの柱穴も斜めに掘り込まれ，小穴の延長は住居跡の中心部上で交差する。この小穴が主柱穴と判断される。炉はない。

遺　　物（図269）

出土した遺物は，土器片70点である。図269－1は，胴部上半が外傾する深鉢である。4単位の波状口縁を持ち，口唇部には沈線が施されている。文様は沈線によって，胴部に長方形状の区画文を4単位描き，区画内には縦位の蛇行沈線文を施している。

ま　と　め

本跡は小型の竪穴住居跡で，平面形は楕円形である。住居施設には2個の主柱穴があるが，炉はない。本住居跡の所属時期は重複関係がなく遺物も少ないが，出土土器から大木8b式期と考えている。（香　内）

126号住居跡（SI126）

遺　　構（図270，写真122）

調査区中央部，シ・ス35GのLV上面から検出された竪穴住居跡である。北東部が倒木痕によって破壊されているため，全体の½程度しか遺存していない。平面形は，遺存する西壁と南壁の状態から，円形を基調とするものと推測される。規模は現況で南北4.0m，東西3.4mである。周壁は住居跡の遺存部では，途切れることなく検出された。周壁の立ち上がりはやや急で，壁の遺存高は最大24cm，平均15cmを測る。南壁中央部付近は，半円形状に若干張り出している。床面は平坦であるが北から南に傾斜し，最大比高差は13cmである。遺構内にはパミス粒を含む褐色土が1層堆積しているだけである。このため，堆積状況は判断できなかった。

住居施設は，小穴が1個と壁溝が検出された。P1は南壁の張り出し部に取り付き，直径49cm，深さは25cmを測る。壁溝は南東コーナー部から検出された。幅は18～35cm，床面からの深さは5cmである。P1や壁溝内には，暗褐色土が堆積していた。炉は，遺存部からは検出されなかった。

遺　　物（図270）

126号住居跡からは，15点の縄文土器片が遺構堆積土中から散在した状態で出土している。図270－1は，底部破片である。同図2～4は沈線と縄文が併用されているもので，2には蛇行沈線が施されている。

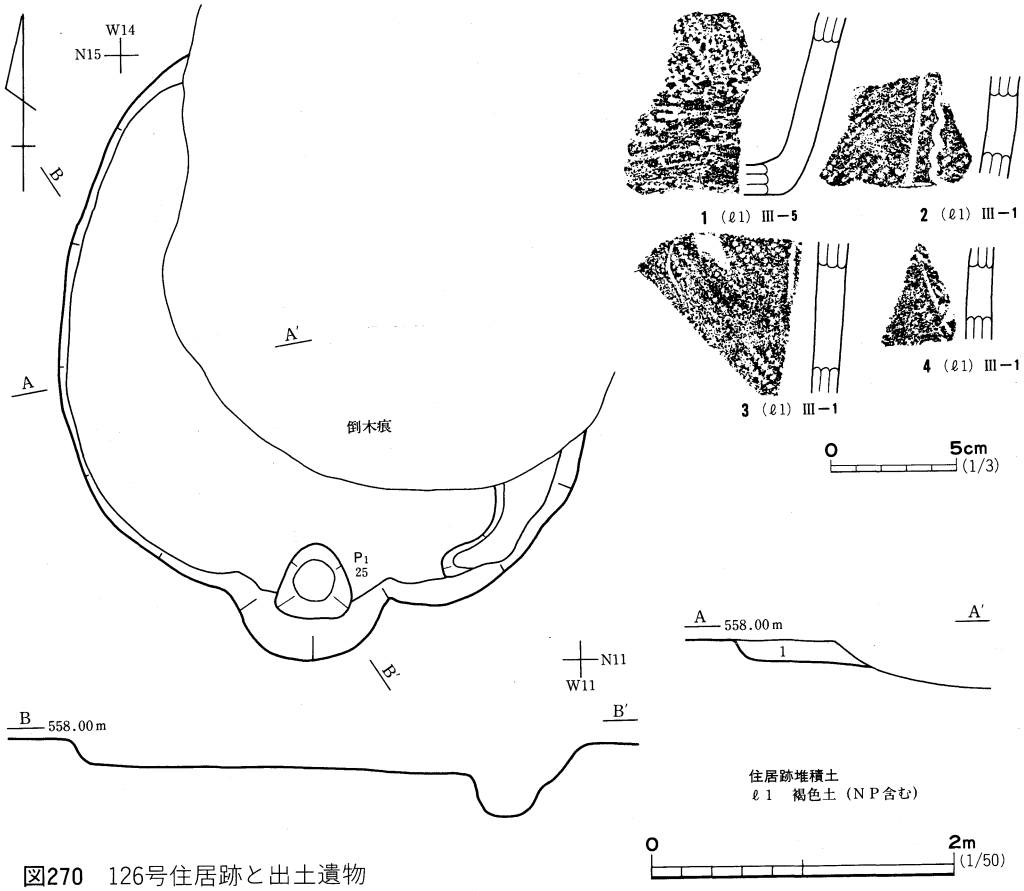


図270　126号住居跡と出土遺物

ま と め

本住居跡は，広く撹乱を受け遺存状態は悪い。現況から平面形・規模を判断すれば，直径4m程の円形をなすものと推測している。所属時期は出土遺物がごく少ないため断定し得ないが，出土土器で主体を占めるものは大木8a式土器である。　（丹　治）

127～132号住居跡（SI127～132）

遺　　構（図271・272，写真123）

ト～ニ11・12GのLI直下に堆積するLV上面からは，焼土が6基，小穴が48個，幅20～30cm程の溝が2条検出された。これらの遺構には，それぞれ次の特徴が見られる。焼土には埋設土器を伴うものや，石組みの見られるものもがあり，2条の溝については溝底に小穴状の掘込みが認められる。これらの特徴は，竪穴住居跡のそれぞれ炉・壁溝に見られる特徴と共通する。小穴もその多くは柱穴である事は確実であることから，ト～ニ11・12Gから検出された焼土・小穴・

溝については，本来的には竪穴住居跡の施設であるものと判断した。

ト～ニ11・12Gにおいては，遺構の遺存状態が悪く，周壁の確認できた竪穴住居跡は一軒もない。さらに検出された各遺構の数からは，相当多くの竪穴住居跡が重複して存在していた可能性が高い。本項では各遺構の配置状況を手掛かりにとして，可能な限り竪穴住居跡の復元を行っていく。なお竪穴住居跡の復元を行うに先立って，検出された各遺構について報告する。

炉

1炉は南北110㎝，東西30㎝の規模を持つ地床炉である。炉の焼けは強く，焼土上面から8㎝下まで熱変化が及んでいる。2炉は，土器破片を立てて設置した土器片囲炉である。遺存状態は悪いが，平面形は楕円形状を呈し，長軸は北東を示す。規模は現況で40×100㎝である。炉の焼けは弱く，熱変化は焼土上面から最大3㎝下までである。3炉は，埋設土器と円形状の石組を持つ炉である。遺存状態は悪く，北西部の縁石はない。石組部は直径40㎝の規模を有する。埋設土器は底部を欠く深鉢で，埋設土器の底面には土器破片を敷いている。石組内部と埋設土器周縁部には，ほとんど焼けの痕跡が認められなかった。4炉は，本来的には楕円形の石囲炉であろう。西側に4個の礫が遺存している。規模は40×80㎝である。炉の焼けは強く，焼土上面から5㎝下まで熱変化が認められた。5炉は，埋設土器を有する地床炉である。平面形は南北が長い楕円形状をなし，規模は30×65㎝程である。土器は焼土北端部に埋設されている。炉の焼けは強く，焼土上面から7㎝下まで熱変化が及んでいる。6炉は，40×50㎝の規模を持つ地床炉である。炉の焼けは弱く，熱変化は焼土上面から最大3㎝下まで認められた。

小穴

検出された小穴の多くは，竪穴住居跡の柱穴と考えている。これらの小穴から竪穴住居跡を復元するについては，小穴の配置状況とともに小穴の堆積土について検討する必要があるものと考えている。ここでは小穴内堆積土について報告する。精査の過程で，小穴内堆積土は，褐色土・黒褐色土・暗褐色土の3種類に区分できた。堆積土ごとの小穴の内訳は次の通りである。

褐色土を堆積土とするもの　：P2・P3・P9・P11・P12・P33・P37～P39

黒褐色土を堆積土とするもの：P4～P7・P13～P20・P22・P27・P28・P34～P36・P40～P45

暗褐色土を堆積土とするもの：P8・P10・P21・P23～P26・P29～P32

堆積土が不明なもの　　：P1・P46・P47

溝

検出された溝は2条である。いずれも等高線と平行するように作られ，ほぼ南北に走っている。溝1はト11～ニ11Gに位置し，緩やかにカーブを描いて7m程続く。規模は幅30㎝，深さは9～15㎝程である。溝2はト・ナ・ニ12Gに位置し，直線的に6m程続く。溝の規模は幅20㎝，

深さは10～23㎝である。

以上ト～ニ11・12Gから検出された焼土・小穴・溝について検討した。次にこれらの各遺構から，復元される住居跡について検討を加える事とする。なお，各遺構を組み合わせた結果については，図272に各住居跡の概念図として示した。

SI 127

P12・P37・P39・P47とP37・P38のいずれかと1炉で構成される住居跡である。小穴の深さは30～50㎝で，堆積土はいずれも黒褐色土である。小穴は長方形状に配置され，その矩形の内側中央，やや北西寄りに1炉が設置されている。P47はSI131の炉5より古い。住居跡の規模は東西4m，南北5m程と推定される。

SI 128

P7・P18・P35・P36と炉2で構成される住居跡である。小穴は深さ30～50㎝で，堆積土はすべて黒褐色土である。これらの小穴は，不整の長方形状に配置され，その矩形の内側ほぼ中央に2炉が設置されている。P35はP48を切っている。住居跡の規模は東西4m，南北3.5m程と推定される。

SI 129

3炉とその周辺に位置する褐色土を堆積土とする小穴によって，構成されるものと考えた。3炉に接するように4炉が見られることから，小穴個々についてその所属する住居跡を特定することは難しい。P21・P23～P26・P29～P32は長方形状に配置され，3炉はその矩形の内側中央，やや西に寄った位置に設置されている。小穴の規模は直径25～35㎝，西側に作られた小穴の深さは44～53㎝である。東側の小穴は若干浅く，22～38㎝である。炉3はSI130に伴うと考えられるP43と，SI132に伴うと考えられるP44を壊して作られている。住居跡の規模は3.5m程と推定される。

SI 130

4炉と，その周辺に位置する暗褐色土を堆積土とする小穴によって構成されるものと考えている。P19・P20・P28・P43は台形状の配置が認められることから，本跡に伴うものと判断した。小穴の直径は28～36㎝，深さは29～49㎝である。4炉は小穴を結んだ矩形の内側中央，やや北に寄った位置に作られている。P43はSI129の3炉によって壊されている。住居跡の規模は3m程と推定される。

SI 131

溝1と5・6炉，P1～P6・P8・P9・P13・P14・P16・P17・P22・P33・P34・P41・P44・P45・P48で構成されるものと考えている。P5・P14・P22・P41・P44は直径28～43㎝，深さが50㎝以上の小穴で他のものに比べて深い。これらが本住居跡の主柱穴を構成するものであろ

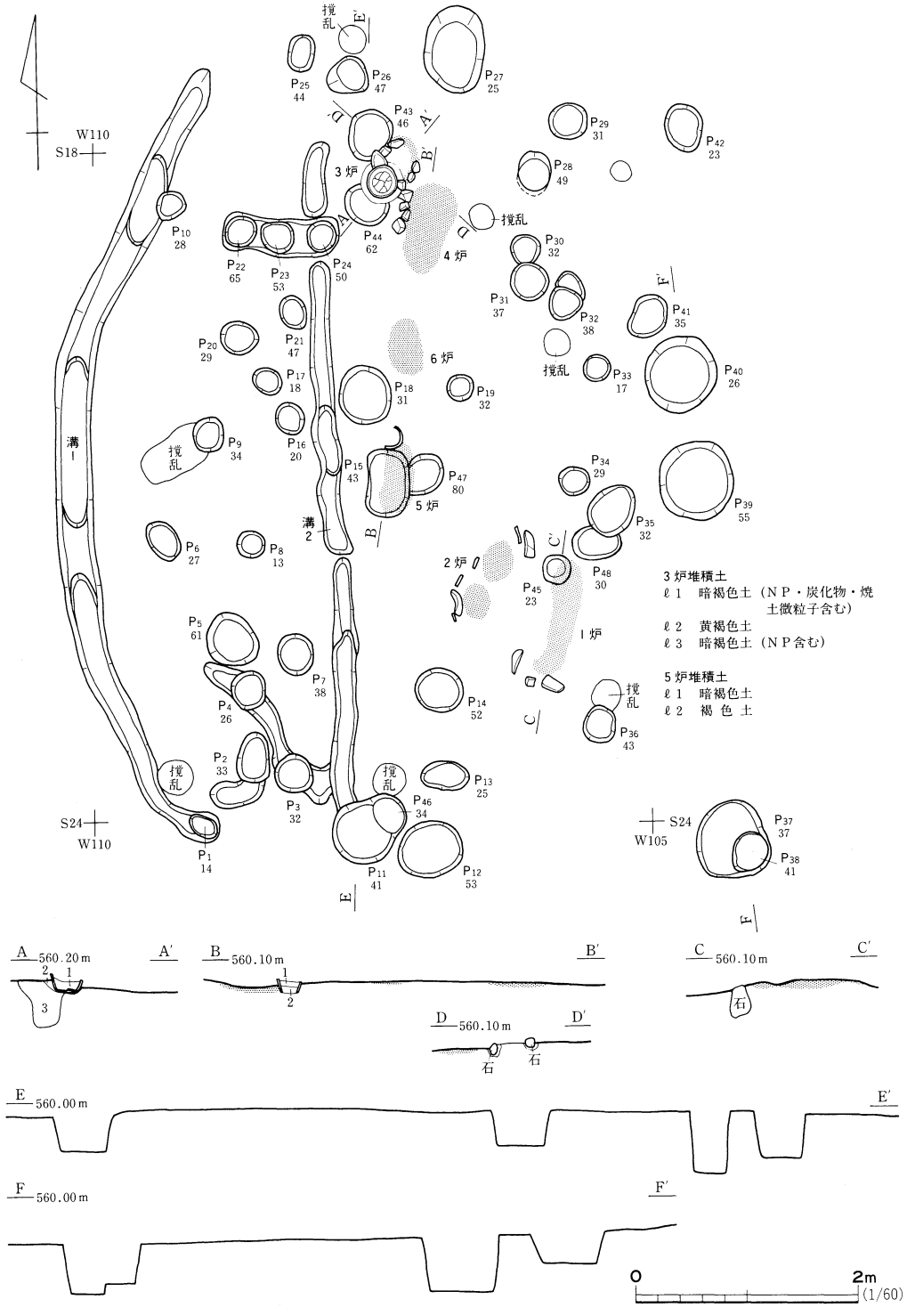


図271　127～132号住居跡

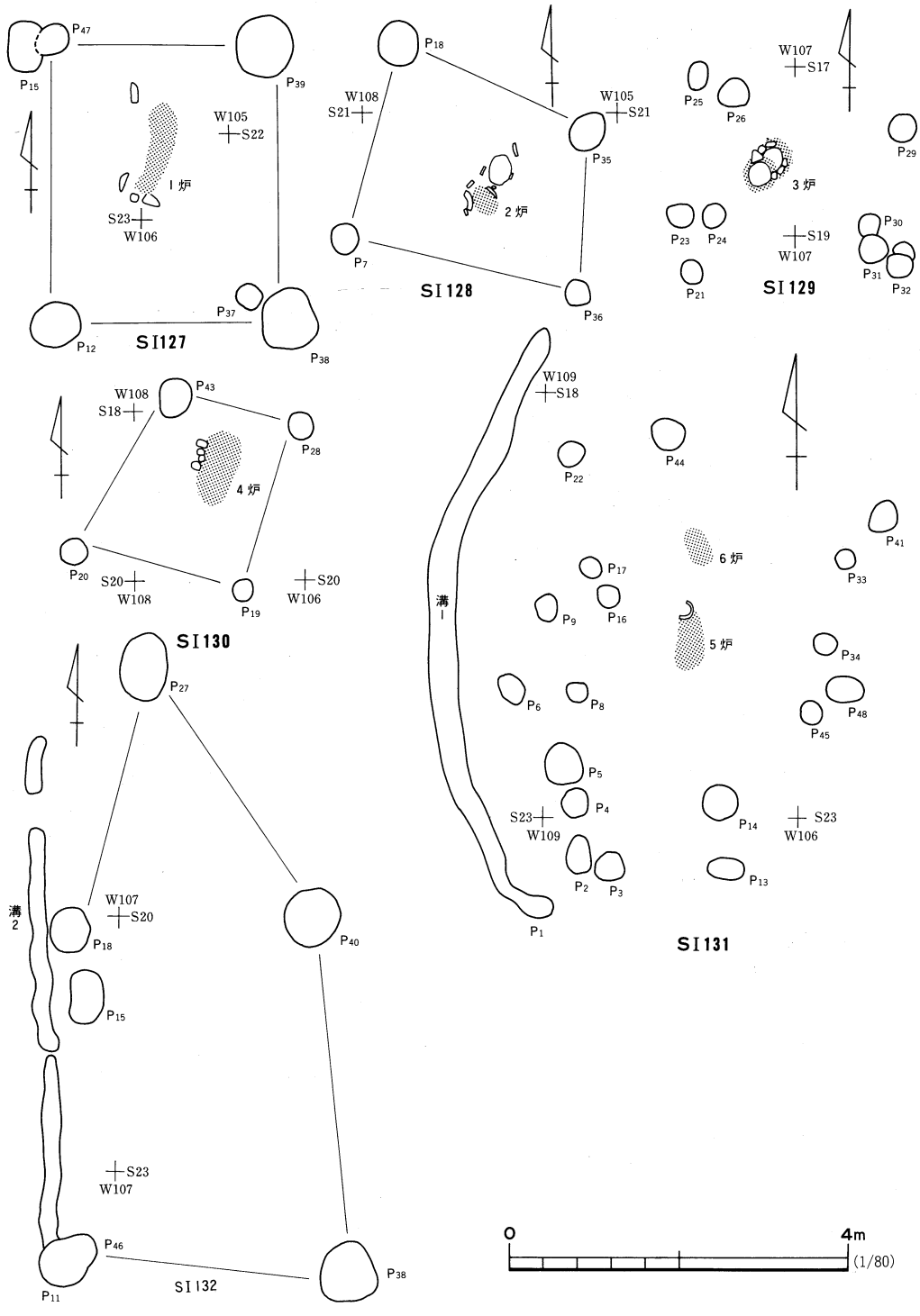


図272　127～132号住居跡概念図

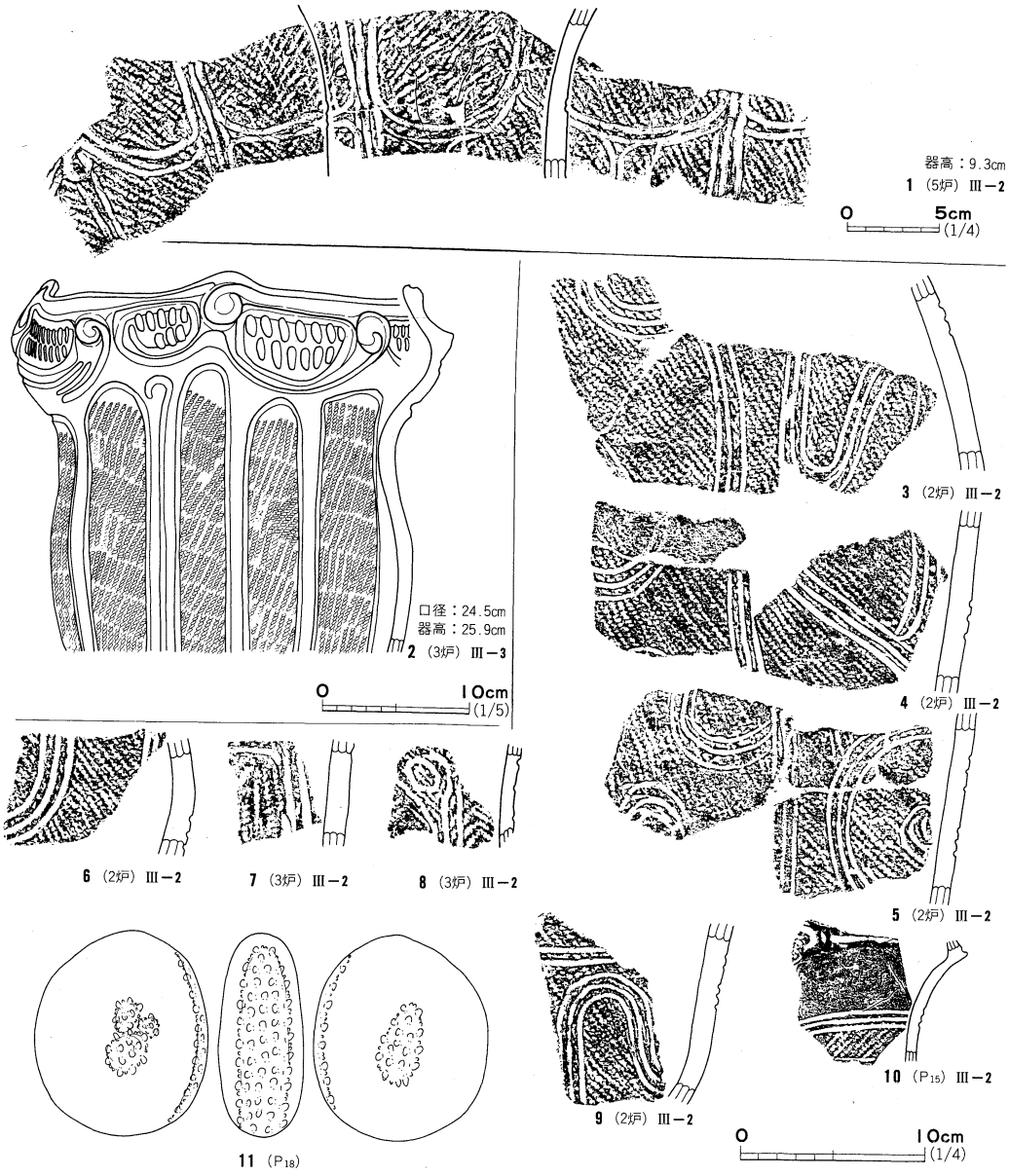


図273　127～132号住居跡出土遺物

う。P9・P34・P48は深さが30㎝程であるが，その作られた位置から住居跡の主柱を構成するものと判断している。5炉は，ＳＩ132のP15上面に作られていた。住居跡の規模は南北7ｍ，東西5ｍ程の楕円形状をなすものと考えられる。

ＳＩ132

溝2とこれと平行するように作られた，P11又はP46とP15・P18・P27・P38・P40で構成さ

れるものと考えている。P11・P37の堆積土は褐色土，その他には黒褐色土が堆積している。小穴の規模が大きい特徴があり，すべて60㎝以上の直径を有する。深さは比較的浅く，現況で25～43㎝である。ＳＩ131の5炉はP15の上面に作られていた。住居跡の規模は南北7ｍ，東西4ｍ程の長方形状をなす住居跡と考えられる。

遺　　物（図273）

ト～ナ11・12ＧのＬＶ上面や小穴内からは，140点の縄文土器片と1点の石器が出土した。図273－2は，3炉に埋設されていた土器である。口縁部に楕円形状の単位文を配し，単位文の間にはヒレ状の隆線により渦巻文を加えている。単位文内には刺突文を加えている。胴部には沈線で区画された帯状の縄文帯を縦位に配置している。同図1は，5炉に埋設されていた土器である。縄文を地文とし，沈線を縦位に施しこの沈線間を弧状の沈線で繋いでいる。この沈線の一部は渦巻文を描き出している。同図3～6・9は2炉に用いられていたものである。いずれも同じ個体の破片である。沈線によって，渦巻状の文様を描き出している。同図10はP15から出土した。キャリパー状を呈する深鉢で，頸部には無文帯を配している。同図11はP18から出土した磨石で，両面に窪みと一側縁に敲打痕状の使用痕を残している。

ま　と　め

ト～ニ11・12Ｇから検出された焼土・小穴・溝については，住居跡の施設と考えた。これらの遺構については，その配置状況から6軒の住居跡を想定復元した。これらについては，遺存状態が極めて悪いため，不明確な点も多々残している。復元した6軒の住居跡の中で炉の土器から時期を知ることができるものは3軒で，その内訳はＳＩ128・132が大木8b式期，ＳＩ129が大木9式期である。遺構の重複関係からは，ＳＩ127・131は大木8b式期以前，ＳＩ130は大木9式期以前に属するものと考えている。（松　崎）

134号住居跡（ＳＩ134）

遺　　構（図274）

調査区中央部，ソ32・33ＧのＬＶ上面から検出された竪穴住居跡である。本遺構は，第1次調査区と第2次調査区に跨がっている。しかし，第1次調査では本住居跡を検出できなかった。このため確認できたのは，第2次調査区にかかる住居跡北端部のみである。平面形は遺存部の状態から方形を基調とするものと推測され，規模は現況で東西5.3ｍ，南北2.0ｍである。周壁は住居跡の遺存部では途切れることなく検出された。周壁の立ち上がりは急で，壁高は最大33㎝である。床面は平坦であるが，北から南に傾斜し，最大比高差は13㎝である。遺構内堆積土は暗褐色土であるが，堆積状況は不明である。

住居内からは，2個の小穴が検出された。P1は北西コーナー付近から壁に接して検出され，

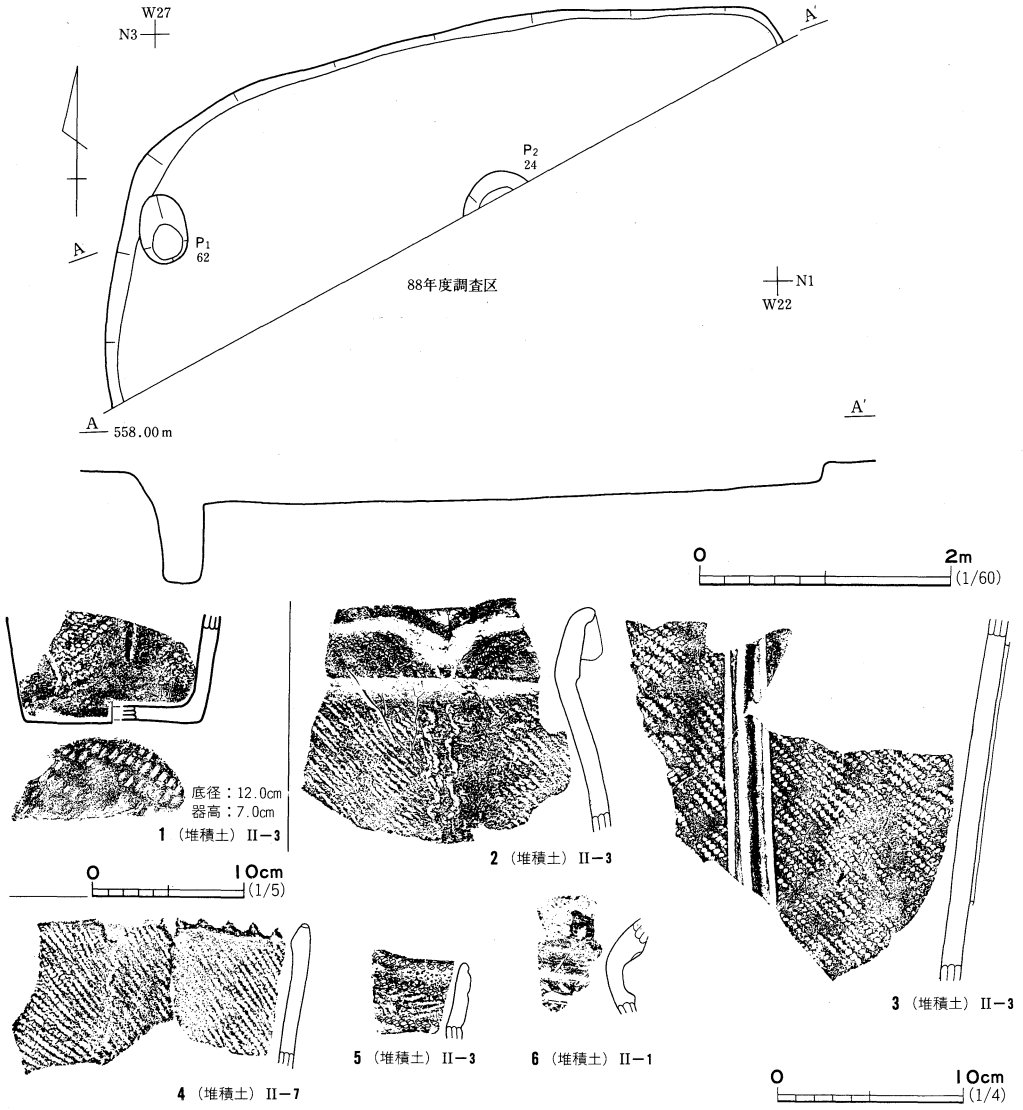


図274　134号住居跡と出土遺物

直径36㎝，深さ62㎝を測る。P2は遺存部のほぼ中央から検出され，南半分は第1次調査区域にかかるため遺存していない。規模は現況で直径58㎝，深さは24㎝を測る。小穴内には，いずれも暗褐色土が堆積していた。遺存部から炉は検出されなかった。

遺　　物（図274）

134号住居跡からは，10点の縄文土器片と1点の石器が出土している。縄文土器片は堆積土中から散在した状態で出土している。図274−1は，深鉢の底部である。胴部を縦に区画する隆線の末端が認められる。同図5は縄圧痕文，同図3は胴部を縦に区画する隆線に沿って沈線が施さ

れている。同図2は，口縁部が板状に肥厚するものである。口唇部から隆帯がV字状に垂下している。口縁の肥厚部には，縄圧痕文が斜位に施されている。同図4は，口唇部に押捺を加えた粗製土器である。2・4の胴部にはアヤクリ文が施されている。同図6は頸部が「く」の字状に屈曲し，口縁部が複合口縁状を呈する深鉢であろう。口縁部下端には刺突文が，胴部と頸部を区画する隆線上には押捺が加えられている。

ま と め

本住居跡は大部分が削平されてしまったが，遺存する北壁の状態や他の住居跡のあり方から，平面形は南北が長い長方形である可能性が高い。規模は東西が5.5m程で，南北はそれ以上の規模と推測される。所属時期は，出土遺物から大木7b式期と考えている。　　（丹　治）

135号住居跡（SI135）

遺　　構（図275，写真124）

ヌ・ネ91・92Gに位置し，LⅢb上面において暗褐色土の落ち込みとして検出した。SK753と重複し，本住居跡が新しい。遺存状態は比較的良好で，周壁のほとんどすべてを検出することができた。

平面形は，一辺4m程度の隅丸方形を基調とする。壁高は，東壁が最も高く40cm，斜面下位にあたる西壁は，低く10cm前後である。周壁は，いずれも垂直に近い角度で立ち上がっている。床面は，地山であるLVまで掘り込まれ，ほぼ平坦である。堆積土は，暗褐色土を主体として5層に区分された。斜面上位からの流入状態を示していることから，自然堆積と考えられる。

住居施設は，炉・小穴・壁溝を検出した。小穴は10個検出された。P1・P2は，複式炉を挟んで南北にほぼ対応する位置に作られている。P1・P2は直径30cm，深さ50cmを超えており，その規模と位置から主柱穴と考えられる。また，東壁際に作られたP3～P6は，P1・P2と対応する位置にあり，直径20cm，深さは30cm以上である事から，これらを含めた5本で主柱が構成されていたものと考えられる。主柱穴の配置については，P1～P6を直線で結んだ場合の四角形の配置と，P1・P2・P4を結んだ三角形の配置が考えられる。壁溝は，複式炉と接する西壁の一部と南西コーナー部分を除いて周壁際を全周している。壁溝の規模は幅15cm，深さは10cm程と一定している。

炉は複式炉で，前庭部の末端は西壁中央に取り付いている。遺存状態は悪く，埋設土器周辺の石はなく，石組部の石も一部失われている。規模は全長170cm，最大幅100cm で長軸は東西を示す。土器埋設部には，2個の深鉢を長軸と直交させて据えている。いずれの土器も内・外面ともに強く火熱を受けて変色し，土器と接する周囲の土も焼土化している。石組部は，底面に石が遺存しているが，明瞭な掘形をもっていないために全体の規模は不明である。前庭部の周壁には，

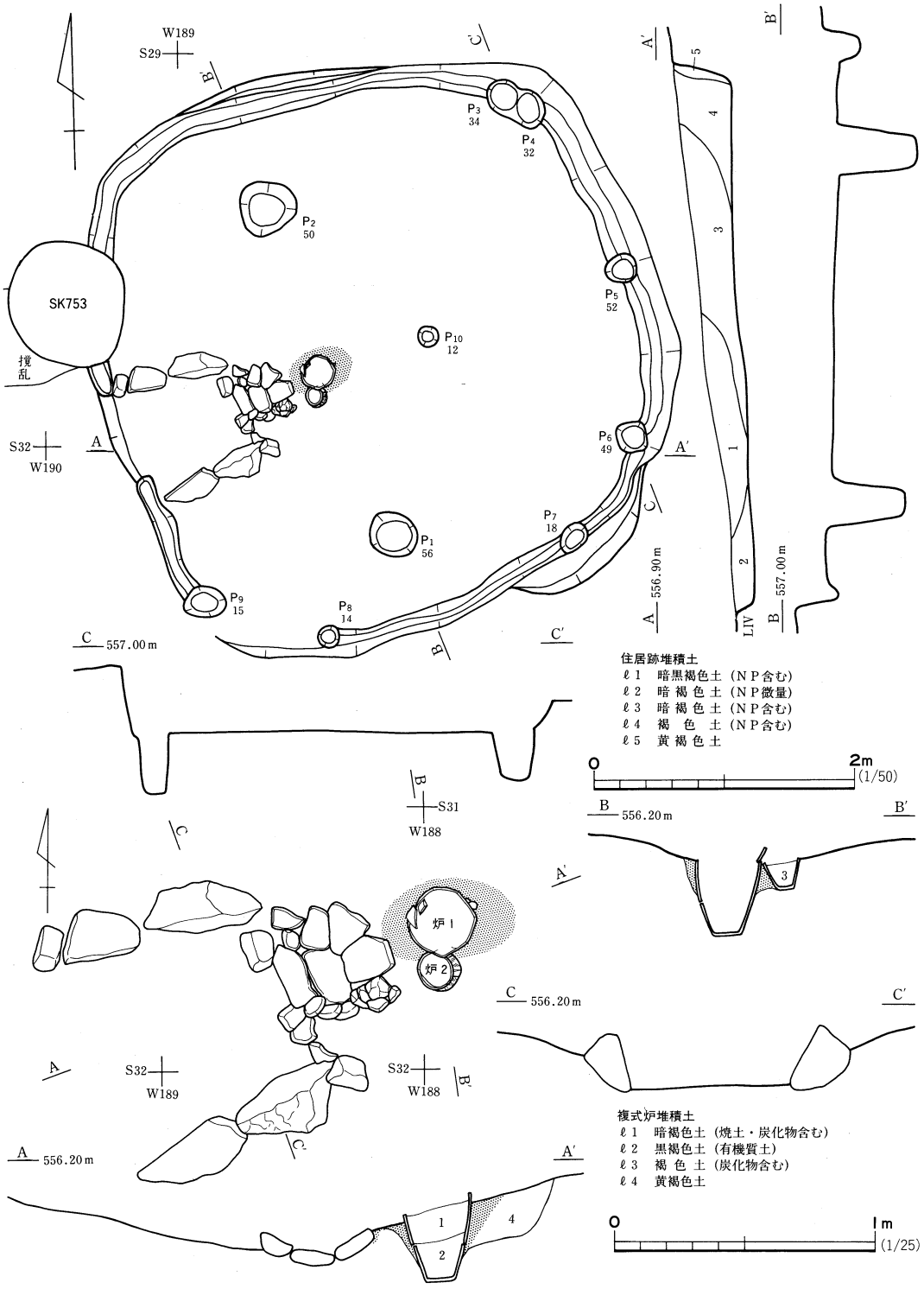
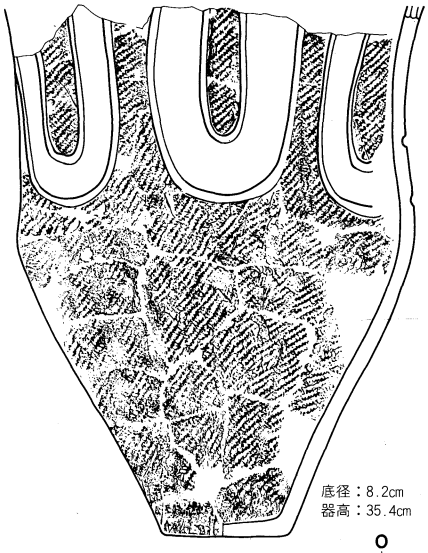
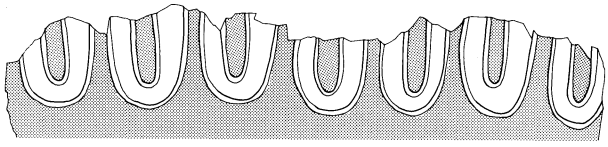


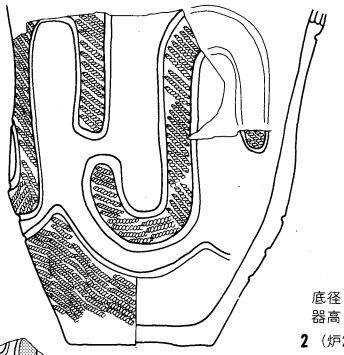
図275　135号住居跡と複式炉



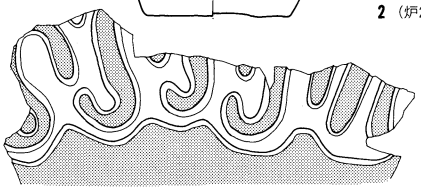
1（炉1）Ⅲ－4



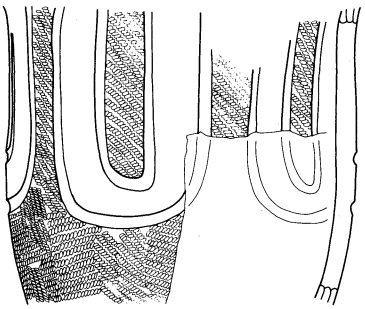
1の文様展開



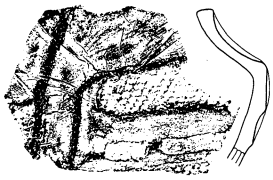
2（炉2）Ⅲ－4



2の文様展開

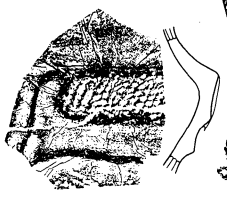


3（堆積土）Ⅲ－4



4（堆積土）Ⅲ－4

5（堆積土）Ⅲ－4



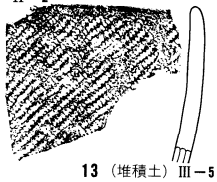
6（堆積土）Ⅲ－4

7（堆積土）Ⅱ－2　8（堆積土）Ⅱ－1

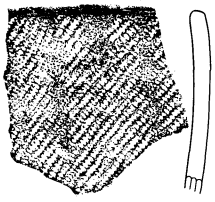
9（堆積土）Ⅱ－1　10（堆積土）Ⅱ－1・2

11（堆積土）Ⅱ－1

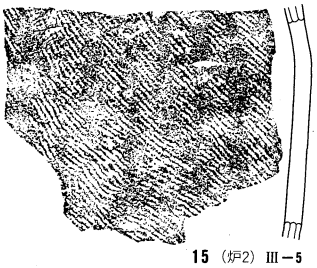
12（堆積土）Ⅱ－1



13（堆積土）Ⅲ－5

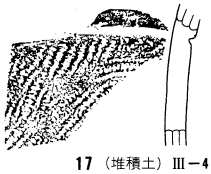


14（堆積土）Ⅲ－5



15（炉2）Ⅲ－5

16（炉2）Ⅲ－5



17（堆積土）Ⅲ－4

図276　135号住居跡出土遺物（1）

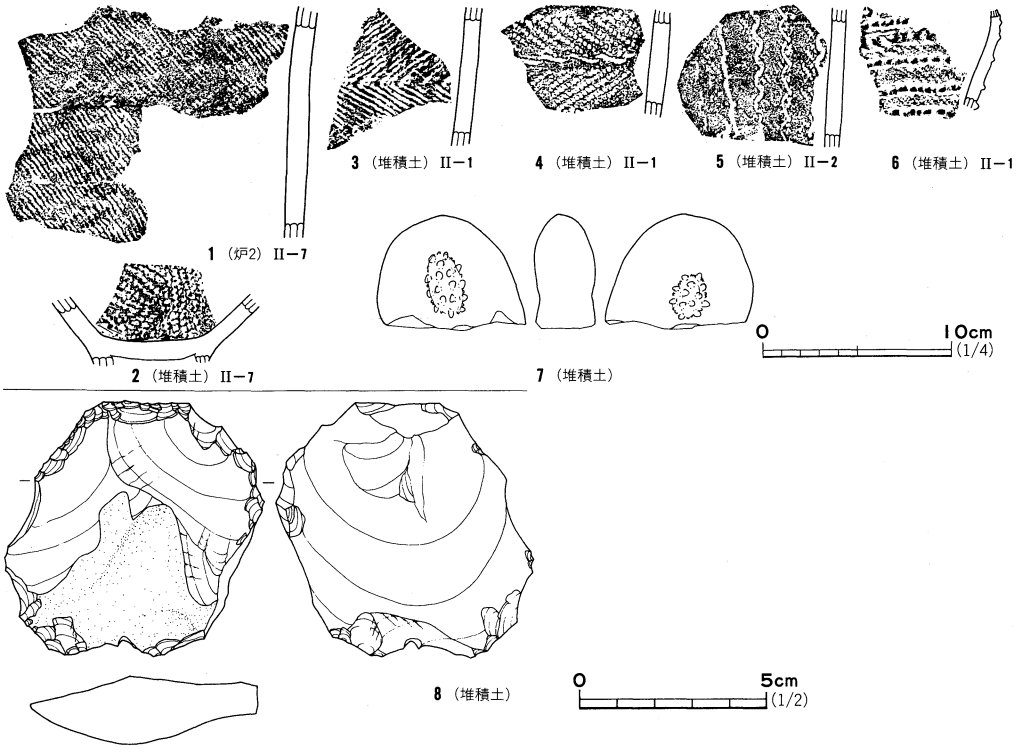


図277　135号住居跡出土遺物（2）

石組部から西壁に直線的に向かって大型の石を横位に設置している。

遺　　物（図276・277）

出土遺物は，縄文土器片320点と石器3点である。図276−1・2の炉埋設土器以外は，すべて堆積土中から散在した状態で出土している。図276−1・3は，胴部上半に文様帯が位置する深鉢で，沈線で区画されたU字状の無文帯を連続して横位に施している。同図2は，沈線で区画したS字状の縄文帯を連続して横位に展開させている。文様帯の下端は波状の沈線で区画されている。同図4〜6は稜線によって，同図10〜12は縄圧痕文や沈線によって文様が描かれている。図277−3・4は結束の羽状縄文を横位に，同図5は縦位にアヤクリ文を施している。同図6は，刻目をもつ数条の隆帯を等間隔に施している。図276−13〜17，図277−1・2は縄文のみが施されている。図277−7は両面に窪みをもつ磨石，同図8は，不定形石器である。

ま　と　め

本跡は，一辺4m程の隅丸方形をなす竪穴住居跡である。主柱穴は，複式炉を挟んで東西に対応して位置するP1・P2と，北壁際に位置するP3〜P5によって構成されている。その配置は，三角形と四角形が考えられる。本住居跡は炉が複式炉である点と，出土土器から大木10式期の

所産と考えられる。　（山　岸）

136 号住居跡（ＳＩ136）

遺　　構（図278，写真125）

調査区西部の北西斜面下端，へ～マ91・92Ｇに位置する竪穴住居跡である。検出面はＬⅣ上面で，土坑精査の過程で小穴・壁の一部・焼土が検出されたことから，住居跡と判断したものである。土坑との重複が多く，遺存状態は悪い。このため検出できたのは，傾斜面上位の住居跡南東壁の一部だけである。ＳＫ698・699・702・713・714・718・720・721・726・735・736・742・749・750・757・779と重複し，ＳＫ749・779より新しく，その他の土坑よりは古いと考えられる。

壁は住居跡南東壁の一部，約7.9ｍが確認されただけである。周壁の立ち上がりは比較的緩やかで，検出面からの深さは最大19㎝である。床面は西に向かって傾いているが，比較的平坦である。平面形は不明と言わざるをえないが，遺存部の形状から北東・南西方向に長軸をもち，長方形を基調とするものと考えている。規模は長軸８ｍ・短軸６ｍを超えるものと推定される。

住居施設としては，小穴及び炉と考えられる焼土が検出されている。小穴は14個検出された。直径はＰ1・Ｐ5で65～75㎝，Ｐ9・Ｐ10は23～25㎝である。床面からの深さは，Ｐ1～Ｐ3・Ｐ8・Ｐ11が60～80㎝と深く，最も浅いＰ5は27㎝である。小穴内堆積土は，いずれも暗褐色土である。Ｐ1～Ｐ4・Ｐ6～Ｐ10は，その作られた位置・規模等から主柱穴と考えられる。焼土はこれらの柱穴を結んだ範囲のほぼ中央から２基検出された。いずれも床面が焼けているだけの地床炉である。１炉は本来１基の炉である可能性が高いが，現況ではＳＫ721によって南北に分断されている。２炉は，ＳＫ779堆積土上面に作られている。規模は現況で１炉が130×180㎝，２炉は50×60㎝である。形状はどちらも不整形をなしている。いずれも焼けは強く，熱変化は焼土上面から５㎝下まで認められた。

遺　　物（図279）

出土した遺物は，縄文土器片70点と石器７点である。図279－１は，無文の高台の付いた土器である。同図２は複合口縁状を呈する口縁部に，沈線で文様を描くものである。同図３は交互刺突文を横位に重層して施している。同図４は縄文が施文されている。同図５～８はアヤクリ文が施されたもので，同図６・７は縄文帯と無文帯を交互に配置している。同図９・10は凹部を持つ磨石で，周縁部には敲打痕状の使用痕跡が見られる。同図11・12は剥片を用いた不定形石器で，縁辺部に剥離調整を加えている。同図13は，石核である。

ま　と　め

本住居跡は遺存状態が悪いため，平面形・規模についての詳細は不明である。しかし，遺存部

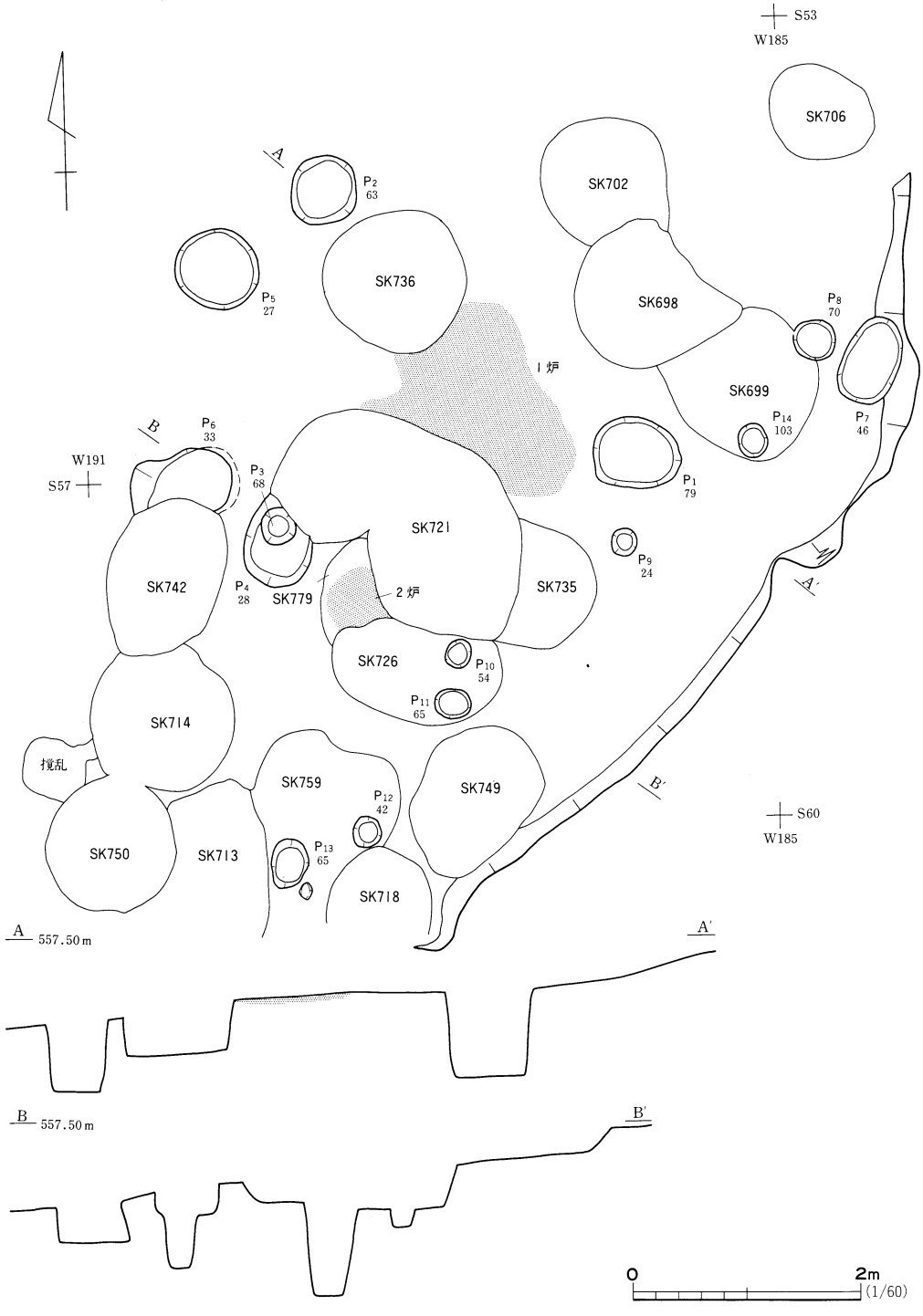


図278　136号住居跡

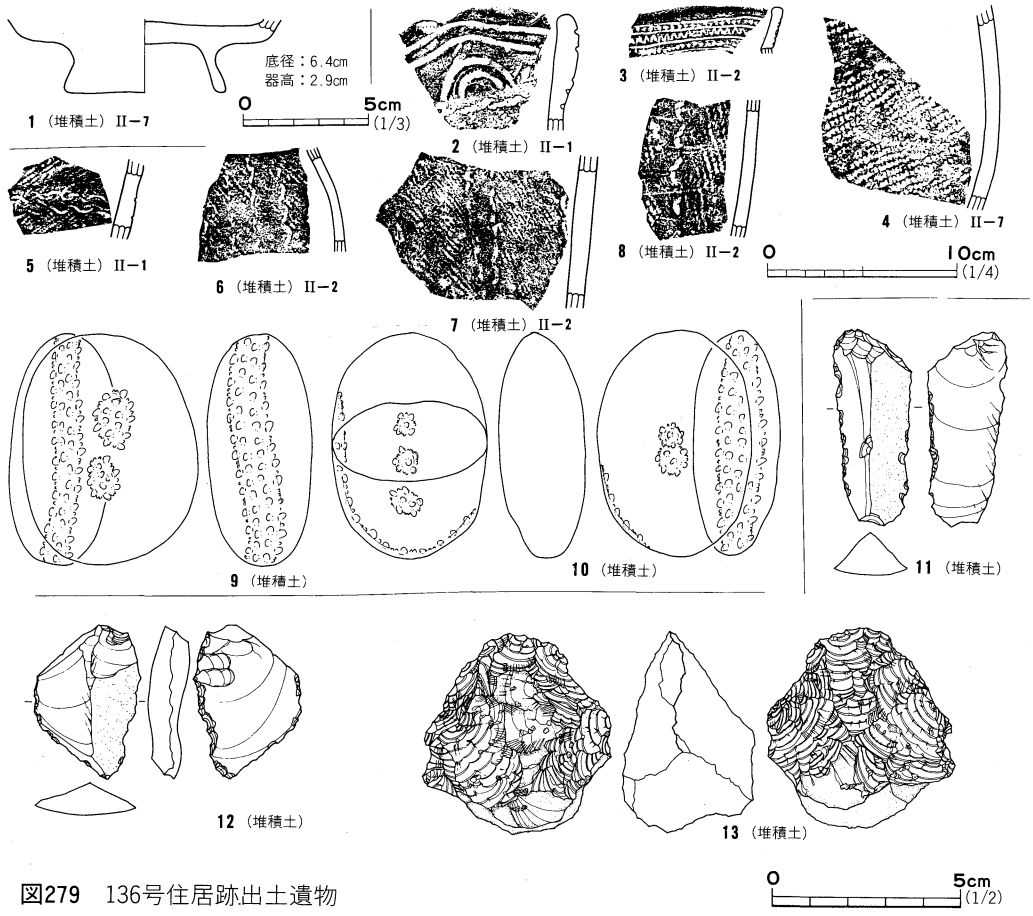


図279　136号住居跡出土遺物

の状態と柱穴の配置状況から，平面形は長方形状をなし，規模は長軸８ｍ以上，短軸は６ｍ程と判断している。主柱は壁に平行するように作られた可能性が高いと考えられる。炉は，地床炉であった。所属時期は，出土遺物から大木7b式期に比定されよう。　（松　崎）

福島県文化財調査報告書第243集

東北横断自動車道遺跡調査報告11
法正尻遺跡
上巻

平成3年3月31日　発行

編　集　財団法人 福島県文化センター(遺跡調査課)

発　行　福島県教育委員会
(〒960) 福島市杉妻町2－16

財団法人 福島県文化センター
(〒960) 福島市春日町5－54

日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所
(〒965) 会津若松市一箕町大字八角字中村東196－1

印　刷　㈲平電子印刷所　(〒970) いわき市平北白土字西ノ内13

本報告書は中性紙を使用しています。
[本　文　年史　80kg
写真版　ニューVマット　110kg]